

四国横断自動車道建設に伴う  
**埋蔵文化財発掘調査報告**

第三十冊

川津一ノ又遺跡Ⅱ

1998.10

香川県教育委員会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公団

『川津一ノ又遺跡Ⅱ』正誤表  
失う前に書き替えをお願いします。

頁	行	誤	正
10	下から7	最も低いと低いと	最も低いと
210	1	(第4章第1節)	(第4章第4節)
242	4~5	流れと直行する	流れと直交する
254	16	1341	1341
255	下から16	1363・1364	1363・1364
260	10	SD097/113	SD080/110
323	下から4	第8表	第9表
324	19	(表2参照)	第3回(表1参照)
図版42	左・上から2		写真が天地逆
図版47	左・上から3	1158	1298
図版50	左・上から1	1298	1158
図版55	下から1	387	686
図版56	下から1	686	387

四国横断自動車道建設に伴う  
**埋蔵文化財発掘調査報告**

第三十冊

川津一ノ又遺跡Ⅱ

1998.10

香川県教育委員会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公団



(1) 調査域遠景（北より、後方飯野山）



(2) 調査域近景（北より）



(1) S D010出土須惠器



(2) S D010出土土師器

## 序 文

四国横断自動車道は、高松～善通寺間が平成4年5月に開通しました。これにより、瀬戸大橋と香川県の高速道路が直結することになり、香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では、四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い、昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。3年6か月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し、平成3年9月に発掘調査を終了いたしました。また、平成3年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土文化財の整理業務を順次行っているところであり、平成4年度からは調査報告書の刊行をいたしております。

このたび、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十冊」として刊行いたしますのは、坂出市川津町一ノ又に所在する川津一ノ又遺跡Ⅱについてであります。この遺跡の調査では、弥生時代から中世にかけての多くの遺構・遺物が出土しておりますが、そのなかでも今回報告します弥生時代から中世にかけての集落の変遷は、丸亀平野における集落遺構の基準資料になるものと考えられます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成10年10月30日

香川県教育委員会

教育長 金森越哉

## 例　　言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第三十冊で、香川県坂出市川津町字一ノ又に所在する川津一ノ又遺跡（かわついちのまたいせき）IV区の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査の期間及び担当は以下の通りである。

予備調査　期間　平成2年2月、3月

　　担当 渡邊茂智、西岡達哉、大林修三、古野徳久、山下平重

本調査　　期間　平成2年5月10日～平成3年3月28日

　　担当 植松邦浩、市村拓二、藤川善規、古野徳久、山下平重、森下英治、  
高橋佳緒里、篠原由記子、阿河由紀子

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県土木部横断道対策室、同坂出土木事務所横断道対策課、坂出市瀬戸大橋・横断道対策室、坂出市教育委員会、坂出市川津公民館、四国横断自動車道建設坂出市川津連合対策協議会、同西又地区対策協議会、地元自治会

5. 本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の執筆、編集は古野徳久が担当した。

6. 本報告書の作成にあたっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

奈良国立文化財研究所 松井章、香川大学 谷山謙、別府大学 本田光子、財団法人長野県埋蔵文化財センター 藤原直人、香川医科大学 木下博之、神奈川歯科大学 山田良弘

7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT. P.を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

S H	堅穴住居跡	S B	掘立柱建物跡	S P	ピット	S K	土坑
S E	井戸	S D	溝状遺構	S A	柵列	S R	自然河川

S X 不明遺構 S Z その他の遺構

なお調査域（以下これを本報告書中で使用する場合、IV区を指す）内の遺構番号は、ピット以外は同一の番号がないようにしている。仮に存在する場合は、調査区名を遺構番号の最後に付与している（例：S B 001A）。ピットについては調査時の都合上、調査区毎に1から付与しているもの（4桁）と、竪穴住居跡・掘立柱建物跡単位で1から付与しているもの（1～2桁）と2種類が共存する。ピット単独で遺構とする場合は、調査区名を最後に付与している（例：S P 0876A）。また遺構番号は遺構種別毎に桁数を揃えている。

8. 川津一ノ又遺跡は現在の時点では、横断道建設に伴う調査と河川改修に伴う調査が行われている。本報告中では、IV区以外の成果に言及する場合、遺構番号の混乱を避けるため、前者では頭にI～III区を、後者では改修区という調査区名を付与する。

9. 石器実測図中の網目は磨滅痕を、輪郭線の回りの点線は潰れ痕、実線は磨滅痕及び研磨痕をそれぞれ示す。また、古い剥離面は白抜きで、現代の折損は剥離面を濃く黒で塗っている。

獣骨図版中の楔印は斧痕を、細矢印は刀子痕を、細線の範囲指定は犬による噛み痕をそれぞれ示す。

10. 挿図の一部に国土地理院地形図 丸亀（1/25,000）及び坂出市都市計画図（1/5,000）を使用した。

11. 弥生時代終末期の時期表記については下記の文献に拠った。

大久保徹也「讃岐」『弥生後期の瀬戸内海』1996 古代学協会四国支部

12. 土器観察表中の残存率は口縁部の全周に占める割合であり、口縁部が欠ける場合は底部をもらい、それ以外は表示を省いた。胎土の項の読み方は、石（石英）・角（角閃石）・雲（雲母）・赤（赤色粒子）・他（その他の岩石）、大（径1mm以上の粒子）・中（径0.5～1mmの粒子）・小（径0.5mm以下の粒子）、多（多量に含む）・中（中量を含む）・少（少量含む）の3項目を組み合わせて表現している（例：雲・中・少=雲母で径0.5～1mmの粒子を少量含む）。外面色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年版』を使用して表す。調整の並列は上より下に向かって現れてくる順に記載した。

# 目 次

## 序 文

## 例 言

### 第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経過 .....	1
第2節 調査の経過	
1 調査の経過 .....	5
2 発掘調査及び整理作業の体制 .....	6

第2章 立地と環境 .....	8
-----------------	---

### 第3章 調査の成果

第1節 調査の概要 .....	10
-----------------	----

第2節 地形と土層序 .....	12
------------------	----

#### 第3節 遺構・遺物

1 弥生時代中期 .....	25
----------------	----

##### 豎穴住居跡

S H30(25) S H21(25) S H31(29) S H32(29) S H34(31)
S H10(62)

##### 掘立柱建物跡

S B 001A(32)
--------------

##### 柱穴(32)

##### 土坑

S K08(33) S K14(35) S K22(36) S K23(36) S K34(37)
S K35(37) S K37(38) S K38(39) S P 0341/0343E(40)
S P 0876A(40)

##### 溝状遺構

S D 059/100(46)	S D 062(50)	S D 090(50)	S D 092(50)	S D 098(51)
川跡				
S R 01(51)				
2 弥生時代後期	.....	53		
縦穴住居跡				
S H 06(53)	S H 07(58)	S H 08・28(59)	S H 09・10(62)	S H 13(63)
S H 18(66)	S H 20(68)	S H 22(70)	S H 23(73)	S H 24(75)
S H 25(76)	S H 26(77)	S H 27(78)	S H 29(81)	S H 33(82)
S H 16・17(112)				
土坑				
S K 09(85)	S K 21(85)	S K 36(86)		
井戸				
S E 01(87)				
溝状遺構				
S D 001F(88)	S D 030(92)	S D 089(99)	S D 091(99)	S D 093(99)
S D 094(99)	S D 097/113(99)	S D 099(101)	S D 109(103)	
S D 111(103)	S D 112(103)	S D 115(103)		
3 古代（古墳時代後期～平安時代）	.....	104		
縦穴住居跡				
S H 01(107)	S H 02(107)	S H 03(108)	S H 04(111)	S H 11(111)
S H 12(112)	S H 15(112)			
掘立柱建物跡				
S B 001F(113)	S B 002(113)	S B 003(115)	S B 004(116)	S B 005(117)
S B 006(117)	S B 007(118)	S B 008(118)	S B 009(119)	S B 010(119)
S B 011(119)	S B 012(121)	S B 014(121)	S B 015(121)	S B 016(122)
S B 017(122)	S B 018(122)	S B 019(123)	S B 020(123)	S B 023(124)
S B 024(125)	S B 025(124)	S B 026(126)	S B 027(126)	S B 028(127)
S B 030(127)	S B 031(128)	S B 032(130)	S B 033(130)	S B 034(131)
S B 035(131)	S B 036(131)	S B 038(132)	S B 040(132)	S B 042(132)
S B 045(132)	S B 046(134)	S B 047(134)	S B 048(135)	S B 049(135)

S B 050(136)	S B 051(137)	S B 052(139)	S B 053(139)	S B 054(140)
S B 055(140)	S B 056(141)	S B 057(141)	S B 058(143)	S B 059(144)
S B 060(144)	S B 061(145)	S B 062(146)	S B 063(146)	S B 064(147)
S B 065(148)	S B 066(148)	S B 068(148)	S B 069(149)	S B 070(151)
S B 071(151)	S B 072(152)	S B 073(152)	S B 074(153)	S B 075(153)
S B 076(153)	S B 077(154)	S B 078(155)	S B 079(155)	S B 080(155)
S B 081(156)	S B 082(158)	S B 083(158)	S B 084(159)	S B 085(159)
S B 086(159)	S B 087(159)	S B 088(162)	S B 089(162)	S B 090(162)
S B 091(163)	S B 092(163)	S B 093(164)	S B 096(165)	S B 097(166)
S B 098(166)	S B 099(166)	S B 100(167)	S B 101(167)	S B 102(168)
S B 103(168)	S B 104(168)	S B 105(169)	S B 106(169)	S B 107(170)
S B 108(171)	S B 109(172)	S B 110(173)	S B 112(174)	S B 113(174)
S B 114(176)	S B 115(177)	S B 116(177)	S B 117(177)	S B 118(177)
S B 119(177)	S B 120(178)	S B 121(178)	S B 122(179)	S B 123(180)
S B 124(180)	S B 125(180)	S B 127(180)	S B 128(181)	S B 129(181)
S B 130(181)	S B 131(182)	S B 132(182)	S B 133(182)	S B 134(183)
S B 136(183)	S B 137(184)	S B 138(184)	S B 139(184)	S B 140(184)
S B 141(185)	S B 142(185)			

#### 栅列

S A 08(186)	S A 22(186)	S A 23(187)	S A 24(187)	S A 26(187)
S A 27(188)	S A 28(188)			

柱穴 ..... 189

#### 土坑

S K02C(192)	S K04A(193)	S K05(193)	S K06(193)	S K12(193)
S K13(194)	S K15(194)	S K24(194)	S K25(194)	S K26(195)
S K28(195)	S K29(196)	S K33(196)	S X02C(196)	S X09(196)
S X10(196)	S X13/14(196)			

#### 溝状遺構

S D 001C(197)	S D 005C(198)	S D 006C(198)	S D 007C/054(198)
S D 006A/007A(199)	S D 010(200)	S D 011(230)	S D 023(237)

S D025(237) S D026(237) S D027/028/050E(237) S D029(238)  
S D031/032/045(238) S D033/041(238) S D034(239) S D035(239)  
S D036/039(239) S D038/S X04(239) S D群トレンチ(239)  
S D040/060(248) S D042(251) S D043(251) S D044(252)  
S D046(252) S D047(252) S D050F(254) S D051(254) S D052(254)  
S D053/070(254) S D056/067/084/108(254) S D058(255)  
S D068(255) S D071(255) S D073(255) S D074(255) S D075(256)  
S D072/076(258) S D077(258) S D078(258) S D080/110(260)  
S D081(260) S D082(260) S D083(260) S D087(260) S D088(262)  
S D095/096/S X08(262) S D101(264) S D102(264) S D103(264)  
S D114(264)

#### その他の遺構

S D061・064・085・086・104～107(265) S Z01(268)  
S X01BC及び「大畦畔」(268)

4 中世以降 ..... 272

#### 掘立柱建物跡

S B022(272) S B094(272) S B095(273) S B126(273) S B135(273)

柱穴 ..... 274

#### 土坑

S K01A(275) S K16(275) S X06(276)

#### 溝状遺構

S D001A・002A(276) S D003A(276) S D004A(278) S D005A(278)

S D008(279) S D009/013(279) S D012(279) S D014(279)

S D015(280) S D016(280) S D017(280) S D018(281) S D019(281)

S D020(281) S D022(281) S D024(281) S D043(282)

#### その他の遺構

S X05(282)

5 包含層出土の遺物 ..... 282

#### 第4章 自然科学調査の成果

第1節 川津一ノ又遺跡IV区におけるプラント・オパール分析	322
第2節 川津一ノ又遺跡IV区出土の木材の樹種同定報告	329
第3節 坂出市川津一ノ又遺跡IV区出土土器に付着している赤色顔料	332
第4節 川津一ノ又遺跡出土の動物遺存体	339
第5節 III区2④⑤SK17出土人骨の鑑定について	350

#### 第5章 まとめ

第1節 川津一ノ又遺跡IV区の遺構の変遷	371
第2節 川津一ノ又遺跡と弥生時代の大東川流域の遺跡	395
第3節 弥生時代後期の赤色顔料関連土器	398
第4節 SD010出土の上師器から見た下川津・川津一ノ又遺跡	399

土器観察表

石器観察表

金属器観察表

木器観察表

掘立柱建物跡一覧

鉄製品関係遺物一覧

写真図版

報告書抄録

付図

## 挿図目次

第1図	四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地 (高松～普通寺) .....	1	第40図	S D062遺物出土状況半・断面図 (1/30) .....	46
第2図	遺跡位置図(1) .....	8	第41図	S D062断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/14) .....	47
第3図	遺跡位置図(2)(1/5000) .....	9	第42図	S D062出土遺物実測図(2)(1/4) .....	48
第4図	調査区・グリッド区割, 調査域 十層作成位置図(1/900) .....	13	第43図	S D062出土遺物実測図(3)(1/2) .....	49
第5～8図	割金城十層図(1)～(4)(1/100) .....	14～17	第44図	S D090, S D092断面図(1/40) .....	50
第9～13図	調査域土層図(5)～(10)(1/100) .....	19～23	第45図	S D098断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4) .....	51
第14図	S H30平面図(1/60) .....	25	第46図	S R01出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	52
第15図	S H21平・断面図(1/60) .....	26	第47図	S H06平・断面図(1/60) .....	54
第16図	S H21出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	27	第48～49図	S II06出土遺物実測図(1)・(2) (1/4) .....	55・56
第17図	S H31平・断面図(1/80), 出土遺物実 測図(1/4) .....	28	第50図	S H07平・断面図(1/60) .....	57
第18図	S H32平・断面図(1/60) .....	29	第51・52図	S H07出土遺物実測図(1)・(2) (1/4, 1/2, 1/3) .....	58・59
第19図	S H32出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	30	第53図	S H08, S H28平・断面図(1/60) .....	60
第20図	S H34平・断面図(1/60), 出土遺物实 測図(1/2) .....	31	第54図	S H08出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	61
第21図	S B001A平・断面図(1/100), 出土遺 物実測図(1/4, 1/2) .....	32	第55図	S H09, S H10平・断面図(1/80) .....	62
第22図	柱穴出土遺物実測図(1)(1/4, 1/2) .....	33	第56図	S H09出土遺物実測図(1/4) .....	63
第23図	S K08平・断面図(1/50), 出土遺物実 測図(1/4, 1/2) .....	34	第57図	S H13平・断面図(1/60) .....	64
第24図	S K14平・断面図(1/50), 出土遺物实 測図(1/4, 1/2) .....	35	第58図	S H13出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	65
第25図	S K22平・断面図(1/50), 出土遺物实 測図(1/4) .....	35	第59図	S H18出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	65
第26図	S K23平・断面図(1/50), 出土遺物实 測図(1/4) .....	36	第60図	S II18平・断面図(1/60) .....	66
第27図	S K34平・断面図(1/50) .....	36	第61図	S H20平・断面図(1/60), 出土遺物实 測図(1/4) .....	67
第28図	S K34出土遺物実測図(1/4) .....	36	第62図	S H20出土遺物実測図(2)(1/4) .....	68
第29図	S K35平・断面図(1/50), 出土遺物实 測図(1/4) .....	37	第63図	S H22平・断面図(1/60) .....	69
第30図	S K37平・断面図(1/50), 出土遺物实 測図(1/4) .....	37	第64図	S H22出土遺物実測図(1/4) .....	70
第31図	S K38平・断面図(1/50), 出土遺物实 測図(1/4, 1/2) .....	38	第65図	S H23平・断面図(1/60) .....	71
第32図	S P0341/0343E出土遺物実測図 (1/4) .....	39	第66・67図	S H23出土遺物実測図(1)・(2) (1/4, 1/2) .....	72・73
第33図	S P0876A平・断面図(1/10), 出土 遺物実測図(1/4) .....	39	第68図	S H24平・断面図(1/60) .....	74
第34図	S D059/100断面図(1/40) .....	40	第69図	S H24出土遺物実測図(1/4) .....	75
第35～39図	S D059/100出土遺物実測図(1)～(5) (1/4, 1/2) .....	41～45	第70図	S H25平・断面図(1/60) .....	76
			第71・72図	S H25出土遺物実測図(1)・(2) (1/4) .....	77・78
			第73図	S H26平・断面図(1/60), 出土遺物实 測図(1/4) .....	79
			第74図	S H27平・断面図(1/60), 出土遺物实 測図(1/4) .....	80
			第75図	S H29平・断面図(1/60) .....	81
			第76図	S H29出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	82

第77図	S H33平・断面図(1/60) .....	83	第109図	S B001F平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	111
第78図	S H33出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	84	第110図	S B002平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	112
第79図	S K09平・断面図(1/30), 出土遺物実測図(1/4) .....	85	第111図	S B003平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	113
第80図	S K21平・断面図(1/50), 出土遺物実測図(1/1/4) .....	86	第112図	S B004平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	114
第81図	S K21出土遺物実測図(2)(1/4) .....	87	第113図	S B005平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	114
第82図	S K36平・断面図(1/50) .....	87	第114図	S B006平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	114
第83図	S K36出土遺物実測図(1/4) .....	88	第115図	S B007平・断面図(1/100) .....	115
第84図	S E01平・断面図(1/50), 出土遺物実測図(1)(1/4) .....	89	第116図	S B008平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	115
第85図	S E01出土遺物実測図(2)(1/4) .....	90	第117図	S B009平・断面図(1/100) .....	116
第86図	S D001断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4) .....	91	第118図	S B010平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	116
第87図	S D030出土状況平面図(1/20) .....	92	第119図	S B011平・断面図(1/100) .....	117
第88図	S D030断面図(1/40) .....	93	第120図	S B012平・断面図(1/100) .....	117
第89~93図	S D030出土遺物実測図(1)~(5) (1/4, 1/2) .....	94~98	第121図	S B014平・断面図(1/100) .....	117
第94図	S D089, S D091, S D093断面図 (1/40) .....	99	第122図	S B015平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	118
第95図	S D094断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4) .....	99	第123図	S B016平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	118
第96~97図	S D097/113出土遺物実測図(1)~(2) (1/4, 1/2, 1/3) .....	100~101	第124図	S B017平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	119
第98図	S D099断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4, 1/2), S D109出土遺物実測図(1/4) .....	101	第125図	S B018平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	120
第99図	S D112断面図(1/40), 出土遺物実測図(1)(1/4) .....	102	第126図	S B019平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	120
第100図	S D112出土遺物実測図(2)(1/2) .....	103	第127図	S B020平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	121
第101図	S D115断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4) .....	104	第128図	S B024平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	122
第102図	S H01平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4) .....	104	第129図	S B023平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/2) .....	123
第103図	S H02平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4) .....	105	第130図	S B025平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	123
第104図	S H03平・断面図(1/60, 1/30), 出土遺物実測図(1/4) .....	106	第131図	S B026平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	124
第105図	S H04平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4) .....	107	第132図	S B027平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	125
第106図	S H11平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4) .....	108	第133図	S B028平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4) .....	125
第107図	S H12平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4) .....	109	第134図	S B030平・断面図(1/100), 出土遺物	
第108図	S H15, S H16, S H17平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図(1/4) .....	110			

实测图(1/4) .....	126	实测图(1/4) .....	144
第135图 S B031平·断面图(1/100) .....	126	第162图 S B053平·断面图(1/100) .....	145
第136图 S B032平·断面图(1/100), 出土遗物		第163图 S B063出土遗物实测图(1/4) .....	145
实测图(1/4, 1/2) .....	127	第164图 S B064平·断面图(1/100), 出土遗物	
第137图 S B033平·断面图(1/100) .....	128	实测图(1/4) .....	146
第138图 S B034平·断面图(1/100) .....	128	第165图 S B065平·断面图(1/100), 出土遗物	
第139图 S B035平·断面图(1/100), 出土遗物		实测图(1/4) .....	147
实测图(1/4, 1/2) .....	129	第166图 S B066平·断面图(1/100), 出土遗物	
第140图 S B036平·断面图(1/100), 出土遗物		实测图(1/4) .....	148
实测图(1/4) .....	129	第167图 S B068平·断面图(1/100), 出土遗物	
第141图 S B038平·断面图(1/100) .....	130	实测图(1/4) .....	149
第142图 S B042平·断面图(1/100) .....	130	第168图 S B069平·断面图(1/100), 出土遗物	
第143图 S B040平·断面图(1/100), 出土遗物		实测图(1/4) .....	150
实测图(1/4) .....	131	第169图 S B070平·断面图(1/100), 出土遗物	
第144图 S B045平·断面图(1/100), 出土遗物		实测图(1/4) .....	150
实测图(1/4) .....	132	第170图 S B071平·断面图(1/100), 出土遗物	
第145图 S B046平·断面图(1/100) .....	133	实测图(1/4) .....	151
第146图 S B047平·断面图(1/100), 出土遗物		第171图 S B073出土遗物实测图(1/4) .....	151
实测图(1/4) .....	133	第172图 S B073平·断面图(1/100) .....	152
第147图 S B048平·断面图(1/100), 出土遗物		第173图 S B072平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4) .....	134	实测图(1/4) .....	153
第148图 S B049平·断面图(1/100), 出土遗物		第174图 S B074平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4, 1/2) .....	135	实测图(1/4) .....	154
第149图 S B050平·断面图(1/100), 出土遗物		第175图 S B075平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4) .....	136	实测图(1/4) .....	155
第150图 S B051平·断面图(1/100), 出土遗物		第176图 S B076平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4, 1/2) .....	137	实测图(1/4, 1/2) .....	156
第151图 S B052平·断面图(1/100), 出土遗物		第177图 S B077平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4, 1/2) .....	138	实测图(1/4) .....	157
第152图 S B053平·断面图(1/100), 出土遗物		第178图 S B078平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4) .....	138	实测图(1/4) .....	157
第153图 S B054平·断面图(1/100), 出土遗物		第179图 S B079平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4) .....	139	实测图(1/4) .....	158
第154图 S B055平·断面图(1/100) .....	139	第180图 S B080平·断面图(1/100) .....	158
第155图 S B056平·断面图(1/100) .....	139	第181图 S B081平·断面图(1/100) .....	159
第156图 S B057平·断面图(1/100), 出土遗物		第182图 S B082平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4) .....	140	实测图(1/4) .....	160
第157图 S B058平·断面图(1/100), 出土遗物		第183图 S B083平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4) .....	141	实测图(1/4) .....	160
第158图 S B059平·断面图(1/100), 出土遗物		第184图 S B084平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4) .....	142	实测图(1/4) .....	161
第159图 S B060平·断面图(1/100), 出土遗物		第185图 S B085平·断面图(1/100), 出土遗物	
实测图(1/4) .....	142	实测图(1/4) .....	161
第160图 S B061平·断面图(1/100), 出土遗物		第186图 S B086平·断面图(1/100) .....	162
实测图(1/4) .....	143	第187图 S B087平·断面图(1/100) .....	162
第161图 S B062平·断面图(1/100), 出土遗物		第188图 S B088平·断面图(1/100) .....	163

第189图	S B089平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 163	第217图	S B119平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 176
第190图	S B090平·断面图(1/100) ..... 164	第218图	S B120平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/2) ..... 177
第191图	S B091平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 164	第219图	S B121平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 178
第192图	S B091出土遗物实测图(2)(1/2) ..... 164	第220图	S B122平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 178
第193图	S B092平·断面图(1/100) ..... 165	第221图	S B123平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 179
第194图	S B093平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 165	第222图	S B124平·断面图(1/100) ..... 179
第195图	S B096平·断面图(1/100) ..... 166	第223图	S B125平·断面图(1/100) ..... 179
第196图	S B097平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 166	第224图	S B127平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 180
第197图	S B098平·断面图(1/100) ..... 167	第225图	S B128平·断面图(1/100) ..... 181
第198图	S B099平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 167	第226图	S B129平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 181
第199图	S B100平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 168	第227图	S B130平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 182
第200图	S B101平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 169	第228图	S B131平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 182
第201图	S B102平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 169	第229图	S B132平·断面图(1/100) ..... 183
第202图	S B103平·断面图(1/100) ..... 170	第230图	S B133平·断面图(1/100) ..... 183
第203图	S B104平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 170	第231图	S B134平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 183
第204图	S B105平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 171	第232图	S B136平·断面图(1/100) ..... 184
第205图	S B106平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4, 1/2) ..... 171	第233图	S B137平·断面图(1/100) ..... 185
第206图	S B107平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 172	第234图	S B138平·断面图(1/100) ..... 185
第207图	S B108平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 172	第235图	S B139平·断面图(1/100) ..... 186
第208图	S B109平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 173	第236图	S B140平·断面图(1/100) ..... 186
第209图	S B110平·断面图(1/100) ..... 174	第237图	S B141平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 187
第210图	S B112平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 174	第238图	S B142平·断面图(1/100) ..... 187
第211图	S B113平·断面图(1/100) ..... 174	第239图	S A08平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 188
第212图	S B114平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4, 1/2) ..... 175	第240图	S A22平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 188
第213图	S B115平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 175	第241图	S A23平·断面图(1/100) ..... 188
第214图	S B116平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 175	第242图	S A24平·断面图(1/100) ..... 189
第215图	S B117平·断面图(1/100) ..... 176	第243图	S A26平·断面图(1/100) ..... 189
第216图	S B118平·断面图(1/100) ..... 176	第244图	S A27平·断面图(1/100), 出土遗物 实测图(1/4) ..... 189
		第245图	S A28平·断面图(1/100) ..... 189
		第246图	柱穴出土遗物实测图(2)(1/4) ..... 190
		第247图	柱穴出土遗物实测图(3)(1/4) ..... 191
		第248图	S K02C平·断面图(1/50), 出土遗物

実測図(1/4) .....	192	第298図 S D008, S D012, S D024, S D025, S D026, S D027/028/050E, S D029, S D031/032/045, S D034, S D035断 面図(1/40) .....	238
第249図 S K04平・断面図(1/50) .....	192	第299図 S D036/039断面図(1/40) .....	239
第250図 S K05平・断面図(1/50), 出土遺物実 測図(1/4) .....	192	第300図 S D038/S X04平・断面図(1/80) .....	239
第251図 S K06平・断面図(1/50), 出土遺物実 測図(1/4) .....	193	第301図 S D群トレチ配置図(1/250) .....	240
第252図 S K12平・断面図(1/50), 出土遺物実 測図(1/4) .....	193	第302図 S D群トレチ断面図(1/140) .....	241
第253図 S K13平・断面図(1/50), 出土遺物実 測図(1/4) .....	194	第303～305図 S D群トレチ断面図(2)～(4) (1/40) .....	243～245
第254図 S K15平・断面図(1/50) .....	194	第306図 S D040/060断面図(1/40) .....	246
第255図 S K24平・断面図(1/50), 出土遺物実 測図(1/4) .....	195	第307～310図 S D040/060出土遺物実測図(1) ～(4)(1/4, 1/2, 1/3) .....	247～250
第256図 S K25平・断面図(1/50), 出土遺物実 測図(1/4) .....	195	第311図 S D047断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4) .....	251
第257図 S K26平・断面図(1/50) .....	196	第312図 S D050断面図(1/40) .....	251
第258図 S K28平・断面図(1/50) .....	196	第313図 S D051断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2) .....	252
第259図 S K29平・断面図(1/50), 出土遺物実 測図(1/4) .....	197	第314図 S D052断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4) .....	252
第260図 S K33平・断面図(1/50) .....	197	第315図 S D053/070断面図(1/40), 出土遺物実 測図(1/4) .....	253
第261図 S X02C平・断面図(1/50) .....	198	第316図 S D056/067/084/108断面図(1/40) .....	255
第262図 S X09平・断面図(1/100) .....	198	第317図 S D058出土遺物実測図(1/4) .....	255
第263図 S X10平・断面図(1/100), 出土遺物 実測図(1/2) .....	198	第318図 S D071断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4) .....	255
第264図 S X13/14平・断面図(1/100) .....	198	第319図 S D074断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4) .....	256
第265図 S D001C断面図(1/40), 出土遺物実測 図(1/4) .....	199	第320図 S D073断面図(1/40) .....	256
第266図 S D005C, S D006C断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	199	第321図 S D075断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4) .....	257
第267図 S D007C/054断面図(1/40), 出土遺 物実測図(1/4) .....	200	第322図 S D072/076断面図(1/40), 出土遺物実 測図(1/4), S D077断面図(1/40) .....	258
第268図 S D007A断面図(1/40), 出土遺物实 測図(1/4) .....	200	第323図 S D078断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4) .....	258
第269図 S D006A, S D008, S D009/013断 面図(1/40) .....	200	第324図 S D081, S D082, S D083断面図 (1/40) .....	258
第270図 S D010断面図(1/40) .....	201	第325図 S D080/110断面図(1/40), 出土遺物実 測図(1/4) .....	259
第271・272図 S D010動物遺体出土位置図 (1)・(2)(1/40) .....	202・203	第326図 S D080/110出土遺物実測図(2)(1/4, 1/2) .....	261
第273～276図 S D010出土遺物実測図(1)～ (4)(1/4, 1/5, 1/6, 1/2) .....	211～214	第327図 S D087断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4) .....	262
第277～286図 S D010出土遺物実測図(5)～ (14)(1/4, 1/5, 1/6, 1/2) .....	216～225	第328図 S D095/096/S X08平面図(1/150) .....	262
第287～296図 S D010出土遺物実測図(19)～ (2)(1/4, 1/5, 1/6, 1/2) .....	227～236	第329図 S D095/096/S X08断面図(1/40), 出 土遺物実測図(1/4, 1/2) .....	263
第297図 S D011断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/2) .....	237		

第330図	S D101断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4) .....	264
第331図	S D103出土遺物実測図(1/4) .....	264
第332図	S D114断面図(1/40) .....	264
第333図	S D061・064・085・086・104~107 平(1/150)・断面図(1/40), 出土遺物 実測図(1/4) .....	265
第334図	S Z01平面図(1/150) .....	266
第335図	S Z01断面図(1/80), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2) .....	267
第336図	S X01BC及び「人咲畔」平面図 (1/400) .....	269
第337図	S X01BC平・断面図(1/50), 出土遺物 実測図(1/4) .....	270
第338図	「大咲畔」断面図(1/50) .....	271
第339図	S B022平・断面図(1/100), 出土遺物 実測図(1/4) .....	273
第340図	S B094平・断面図(1/100), 出土遺物 実測図(1/4) .....	274
第341図	S B095平・断面図(1/100), 出土遺物 実測図(1/4) .....	274
第342図	S B126平・断面図(1/100) .....	275
第343図	S B135平・断面図(1/100) .....	275
第344図	柱穴H1土遺物実測図(4)(1/4) .....	276
第345図	S K01A平・断面図(1/50) .....	276
第346図	S K16平・断面図(1/50), 出土遺物實 測図(1/4) .....	277
第347図	S X06平・断面図(1/100), 出土遺物實 測図(1/4) .....	277
第348図	S D001A・002A断面図(1/40), 川土遺 物実測図(1/4), S D002C出土遺物實 測図(1/4) .....	278
第349図	S D003A断面図(1/40), 出土遺物実測 図(1/4) .....	278
第350図	S D004A, S D005AN断面図(1/40), 出土 遺物実測図(1/4) .....	279
第351図	S D012断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2) .....	280
第352図	S D015, S D016断面図(1/40), 出土遺 物実測図(1/4) .....	281
第353図	S D017出土遺物実測図(1/4) .....	281
第354図	S D043出土遺物実測図(1/4) .....	281
第355図	S X05平面図(1/150) .....	282
第356・357図	A区包含層出土遺物実測図(1) · (2)(1/4, 1/2) .....	283・284
第358~369図	B区包含層出土遺物実測図(1) ~(12)(1/4, 1/3, 1/2) .....	285~296
第370~373図	C・D区包含層出土遺物実測図 (1)~(4)(1/4, 1/2, 1/3) .....	297~300
第374図	E区包含層出土遺物実測図(1) (1/4, 1/2) .....	301
第375~377図	E区包含層出土遺物実測図(2) ~(4)(1/4, 1/2) .....	303~305
第378~392図	F区包含層出土遺物実測図(1) ~(15)(1/4, 1/2) .....	306~320
第393図	出土地不明遺物実測図(1/4, 1/2) .....	321
第394図	9トレンチa地点土層断面図と 分析試料の採取箇所 .....	323
第395図	イネのプランツ・オバールの検出状況 .....	325
第396図	おもな植物の推定生産量と変遷 .....	325
第397図	プランツ・オバールの顕微鏡写真(1) .....	327
第398図	プランツ・オバールの顕微鏡写真(2) .....	328
第399図	木材の顕微鏡写真 .....	330
第400図	川津一ノ又遺跡動物遺存体出上位 量平面図(1/1000) .....	343・344
第401図	人骨の出土状況(1/50) .....	355
第402図	遺構変遷図(1)(弥生時代中期) (S=1/1000) .....	373
第403図	遺構変遷図(2)(弥生時代後期①・②) (S=1/1000) .....	376
第404図	遺構変遷図(3)(弥生時代後期③・④) (S=1/1000) .....	377
第405図	遺構変遷図(4)(弥生時代後期⑤) (S=1/1000) .....	378
第406図	遺構変遷図(5)(古代①)(S=1/700) .....	381
第407図	遺構変遷図(6)(古代②)(S=1/700) .....	383
第408図	遺構変遷図(7)(古代③)(S=1/700) .....	385
第409図	遺構変遷図(8)(古代④)(S=1/700) .....	387
第410図	遺構変遷図(9)(古代⑥)(S=1/700) .....	388
第411図	遺構変遷図(10)(古代⑥)(S=1/700) .....	390
第412図	遺構変遷図(11)(古代⑦)(S=1/700) .....	391
第413図	遺構変遷図(12)(古代⑧)(S=1/700) .....	393
第414図	遺構変遷図(13)(中・近世) (S=1/700) .....	394
第415図	杯法量分布図 .....	401
第416図	杯口径分布図 .....	401
第417図	甕口径分布図 .....	402

## 表目次

第1～2表	四国横断自動車道建設に伴う発掘 調査の概要(1)・(2).....	3・4	第14表	動物遺存体種名表 .....	340
第3～5表	S D010出土動物遺体一覧(1)～ (3) .....	204～206	第15表	種別竹部位一覧 .....	345
第6～8表	川津・ノ又遺跡出土動物遺体一覧 (1)・(2)(IV区 S D010を除く) .....	207～209	第16表	ウシ・ウマ各部位計測値(1) .....	346
第9表	プラント・オパール分析結果 .....	323	第17表	ウシ・ウマ各部位計測値(2) .....	347
第10・11表	赤色物の分析結果と赤色顔料の 種類(1)・(2).....	335・336	第18表	日本人齒の解剖学的計測値 .....	370
第12・13表	赤色顔料関係土器一覧 (1)・(2) .....	337・338	第19～91表	上器觀察表(1)～(9) .....	409～481
			第92～98表	石器・木器・金属器觀察表 (1)～(7) .....	482～488
			第99～101表	壇立柱建物跡・構列跡一覧 (1)～(3) .....	489～491
			第102・103表	鉄腐朽遺物一覧(1)・(2) .....	492・493

## 写真目次

写真1～6	人骨の出土状況(頭部) .....	356～359	写真13	橈骨(推定)の状態 .....	362
写真7	頸蓋骨を形成する板状骨の一部 .....	359	写真14	尺骨(推定)の状態 .....	363
写真8	下顎骨および下顎の歯牙の状態 .....	360	写真15	大脚骨(推定)の状態 .....	363
写真9	下顎骨下面の状態 .....	360	写真16	右上顎の中切歯、側切歯の状態 .....	364
写真10	I・腕骨(推定)の状態 .....	361	写真17・18	部位不明の試料 .....	364・365
写真11	橈骨(推定)の状態 .....	361	写真19	DNA分析 .....	369
写真12	尺骨(推定)の状態 .....	362			

## 巻頭図版目次

図版1(1)	調査域遠景(北より、後方飯野山)
(2)	調査域近景(北より)
図版2(1)	S D010出土須恵器
(2)	S D010出土土師器

## 付図目次

付図1	香川県川津一ノ又遺跡IV区遺構配置図 (1/200)
-----	-------------------------------

## 図版目次

- |                                     |  |
|-------------------------------------|--|
| 図版1 A区空中写真                          | 図版19 S H02完掘状況 西より                           |
| A区南部空中写真                            | S H04完掘状況 東より                                |
| 図版2 B区第1造構面空中写真                     | 図版20 S H03完掘状況 北より                           |
| 図版3 B区第2造構面空中写真                     | S H03南部土器検出状況 南より                            |
| 図版4 B・F区中央部空中写真                     | 図版21 S H11完掘状況 南東より                          |
| F区南部空中写真                            | S H12・15・16・17完掘状況 東より                       |
| 図版5 B・F区空中写真                        | 図版22 S H15・16完掘状況 西より                        |
| 図版6 S H21完掘状況 東より                   | E区調査風景 西より                                   |
| S H32完掘・土器出土状況 南東より                 | 図版23 F区調査風景(S B049付近) 北西より                   |
| 図版7 S B001A完掘状況 南より                 | S B003・011完掘状況 南東より                          |
| S P0876A土器出土状況 西より                  | 図版24 S B006・007完掘状況 南東より                     |
| 図版8 S K21上層土器出土状況 南より               | S B009完掘状況 北西より                              |
| S K38土器出土状況 北より                     | 図版25 S B017完掘状況 南東より                         |
| 図版9 S D062上器出土状況及び下部土層<br>断面        | S B034・105・116完掘状況 北東より                      |
| S R01最深部泥木検出状況 北より                  | 図版26 F区調査風景(S B050付近) 北東より                   |
| 図版10 E区完掘状況 南東より                    | S B045・050完掘状況 東より                           |
| E区調査風景(S H09・10付近,<br>後方般野山) 北東より   | 図版27 S B049・051完掘状況 北東より                     |
| 図版11 S H08・12・18, S D030完掘状況<br>東より | S B056完掘状況 北より                               |
| F区完掘状況(後方山裾が<br>川津東山田遺跡) 北より        | 図版28 S B064完掘状況 北より                          |
| 図版12 S H29・31・32・33完掘状況 南より         | S B059・060完掘状況 南より                           |
| S H08・22完掘状況 北より                    | 図版29 S B071・076完掘状況 東より                      |
| 図版13 S H09・10完掘状況 東より               | S B072・073完掘状況 北西より                          |
| S H20炭化材・焼土等検出状況 東より                | 図版30 S D010完掘状況 東より                          |
| 図版14 S H20完掘状況 東より                  | S D010 I区土器・獸骨出土状況                           |
| S H20調査風景 東より                       | 図版31 S D010Ⅱ区土器・獸骨出土状況 西より                   |
| 図版15 S H25南東主柱穴横石検出状況 北より           | S D010Ⅲ区土器・獸骨出土状況 南より                        |
| S H27完掘状況 北西より                      | 図版32 S D群トレント断面W 西より                         |
| 図版16 S H29完掘状況 東より                  | S D095/096/S X08土層断面 西より                     |
| S P043IE詰め石・土器検出状況                  | 図版33 S D056・061・064等完掘状況 東より                 |
| 図版17 S K09土器出土状況 西より                | S Z01土層断面 東より                                |
| S E01木材・石等検出状況                      | 図版34 調査域土層断面W 北西より<br>「人骨群」調査域東端部検出状況 西より    |
| 図版18 S D030上層断面③<br>礫積み上げ検出状況 北より   | 図版35 S X01BC検出状況<br>(中央奥に「大輪畔」)<br>S X01BC断面 |
| S D030上層土器出土状況(D24付近)<br>東より        | 図版36~51 出土土器                                 |
| C・D区包含層落ち込み検出土器群                    | 図版52~64 出土石器                                 |
|                                     | 図版65 出土金属器・木器                                |
|                                     | 図版66~80 S D010出土獸骨                           |

# 第1章 調査の経緯

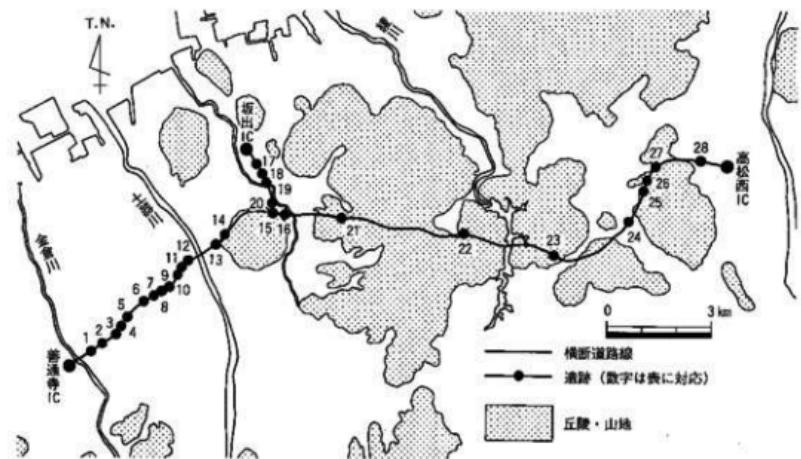
## 第1節 調査にいたる経過

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年1月8日に整備計画が決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会では、この間路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的に国庫補助事業として分布調査<sup>(1)</sup>を実施し、これを基に調査対象面積を39万m<sup>2</sup>余りと判断した。路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、日本道路公団と文化庁の協議により、基本的には記録保存で対応することが決定した。

香川県教育委員会では、これを受けて香川県の担当課である土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。

その結果、昭和63年度当初から2ヶ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した<sup>(2)</sup>。これを受けて香川県教育委員会では調査体



第1図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～善通寺）

制の充実を図ることを目的に、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置するとともに、専門職員の増員等の措置を実施した。

平成元年には、坂出市川津町に所在する埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容を把握するため、日本道路公団と協議の上、用地買収の進捗にあわせて予備調査を実施した。予備調査の着手にあたっては、地元関係者、四国横断自動車道・南進自動車道対策協議会、同中塙地区対策協議会、同西又地区対策協議会、坂出市都市開発部瀬戸大橋・四国横断道対策室、香川県坂出土木事務所横断道対策課等の多大な協力を得た。

予備調査では、川津・ノ又遺跡を始めとする集落跡を中心とした6遺跡についての内容を把握し、同地区での本調査対象面積を111,750m<sup>2</sup>に確定した。

今回2分冊で報告する川津・ノ又遺跡は、調査対象面積は36,510m<sup>2</sup>である。本調査は都合上、調査域をI区からIV区に分けて行い、平成2年4月12日に着手し、平成3年9月27日に終了した。

調査は、香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施された。

(1) 香川県教育委員会1987『四道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報』

(2) 最終的に、用地買収・家屋退去等の関係で調査期間は3年6ヶ月を要し、本調査面積は、予備調査による遺跡内容の確定を随時実施したことから、319,201m<sup>2</sup>になった。

No	遺跡名	所在地	測量面積(㎡)	調査期間	遺構	遺物
1	瀬川五条遺跡	香通寺市原田町	12,300 元. 6.26~2. 3.31 10,200 2. 4. 9~2.12. 5	弥生時代(墳墓、窓穴生石、溝), 古代神 中世建築, 近世井戸	弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器, 木製品	
2	瀬川四季遺跡	香通寺市原田町 木地町	20,200 元. 7.1~2. 3.31 1,700 2. 5.26~2.12. 5 300 3. 4. 4~3. 6.18	古代獨立柱建物, 中世建物, 溝, 土塁高, 自 然河川	縄文土器, 土師器, 須恵器, 瓦器, 磁器, 中 世鐵	
3	三条晉ノ原遺跡	九鬼市三条町中村	12,041 63. 4.18~元. 2. 10 1,300 元. 4.10~2. 3.31	弥生時代窓穴住居, 溝, 自然河川	弥生土器は少	
4	三条黒島遺跡	九鬼市三条町黒島	7,677 63. 6.15~63.11.26	ユニット, 溝, 墓物	旧石器, 弥生土器, 陶磁器	
5	郡家屋敷跡	九鬼市三条町黒島・ 郡家町原	17,099 63. 4.18~元. 3.31 2,600 元. 4.10~2. 3.31	窓穴住居, 直立柱建物, 溝	弥生土器, 土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 斧伴 14分	
6	福家一里塙遺跡	九鬼市郡家町八幡上	14,067 63. 4.18~元. 3.31 6,450 元. 4.10~2. 3.31	直立柱建物, 溝, 自然河川	弥生土器, 土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 斧伴 陶器, 有古尖頭器ほか	
7	郡家大林上遺跡	九鬼市郡家町大林上	11,175 63. 6.15~元. 3.22	直立柱建物, 溝, 自然河川	須恵器, 斧伴12分	
8	郡家田代遺跡	九鬼市郡家町田代	12,741 63. 6.15~元. 2.17	直立柱建物, 溝, 火葬墓	弥生土器, 須恵器, 近世陶磁器, ナイフ形石 器	
9	川西北・原遺跡	九鬼市川西町北・原	3,033 63.12.12~元. 3.25	直立柱建物, 溝		
10	川西北・七条1遺跡	九鬼市川西町北・七条	4,034 63.12.13~元. 3.27	溝, 自然河川	土師器, 須恵器	
11	川西北・七条2遺跡	九鬼市川西町北・七条	4,760 元. 2. 2~元. 3.31	直立柱建物, 溝	土師器	
12	川西北・金治置遺跡	九鬼市川西町北	12,208 元. 4.10~元. 8.11	中世直立柱建物, 溝, 自然河川	土師器, 須恵器, 近世陶磁器	
13	姫野・東二ノ塚遺跡	九鬼市姫野町東二ノ塚	3,366 63.12.13~元. 3.27	直立柱建物, 溝, 自然河川		
14	姫野・東山崎梅遺跡	九鬼市姫野町	300 2. 3. 1~2. 3.31			

No	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	遺物
15	川津東山田壇跡	坂出市川津町 飯山町東坂元	28,100 500	2. 8. 2~3. 3. 20 3. 9. 2~3. 9. 4	弥生時代壇穴住居、古墳時代壇穴住居、柱穴 弥生土器、土師器、須恵器
16	川津西遺跡	坂出市川津町	5,400	2. 5. 10~3. 1. 17	縄文土器、土師器、須恵器、耳環
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2. 5. 10~3. 2. 28 4~3. 9. 13	弥生時代壇穴住居、古代~中世建物、溝 井立柱建物、自然河川
18	川津下堀遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2. 5. 10~3. 1. 31 7. 1~3. 7. 16	縄文陶器、弥生土器、石器 (打制石包丁 ほか)、木製品
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2. 5. 10~3. 3. 8	弥生時代 (溝、自然河川)、中世 (建物、溝) 弥生土器、土師器、石器
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2. 4. 12~3. 3. 28 7. 18~3. 9. 27	弥生時代~古墳時代 (溝、自然河川)、弥生土器、土師器、淨土器、石器、木製品。 古墳時代~中世 (溝、水田)
21	飯山一本松遺跡	飯山町	2,200	元. 4. 17~元. 5. 16	弥生土器、土師器、須恵器
22	吉中地区	坂出市吉中町	3,000	2. 10. 30~2. 12. 26	土坑 須恵器
23	飯南與下也南遺跡	坂南町	2,900	元. 5. 23~元. 7. 24	須恵器
24	国分寺下日名代遺跡	国分寺町福家	11,350	元. 8. 19~2. 2. 28	弥生時代溝、水田、動物足跡 弥生土器、土師器、須恵器
25	國分寺楠井遺跡	國分寺町福家	4,400	2. 4. 11~2. 10. 2	古墳時代壇穴式石室、中量窓、遺物 土師器、須恵器、瓦質土器、耳環
26	國分寺六ツ目古墳	國分寺町福家	900	元. 9. 1~元. 12. 28	前方後円墳 (主体部3基) 古式土師器、鏡器
27	國分寺六ツ目遺跡	四分寺町福家	5,600	元. 10. 1~2. 2. 28	中近世建物 弥生土器、近世陶磁器、石器
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元. 8. 19~2. 3. 25 2. 5. 10~3. 3. 25 3. 4. 5~3. 7. 18	旧石器アロワカ、弥生時代~近世建物、埴輪、須恵器、埴輪、陶棺、ナ イフ形石器、船底形石器

## 第2節 調査の経過

### 1 調査の経過

川津一ノ又遺跡の発掘調査は、対象地をⅠ区からⅣ区に分けて実施した<sup>(1)</sup>。Ⅲ・Ⅳ区部分については、平成2年3月に予備調査を行い、4月にⅢ区、5月にⅣ区の本調査に着手した。Ⅰ・Ⅱ区は予備調査を平成2年4月に行い、その結果、Ⅰ区については予備調査をもって調査を終了し、本調査は実施しなかった。Ⅱ区については旧地形の復元を目的に、平成2年7月5日～17日に本調査を行った。Ⅰ・Ⅱ区あわせて調査面積は14,550m<sup>2</sup>である。調査方式は直営方式である。Ⅲ区は調査面積9,220m<sup>2</sup>で、2ヶ年に分けて直営方式により調査を行った。平成2年度は調査面積7,870m<sup>2</sup>で、調査期間は平成2年4月12日から平成3年3月8日までである。平成3年度は調査面積1,350m<sup>2</sup>で、調査期間は平成3年7月18日から平成3年9月27日までである。Ⅳ区のみ工事請負方式で行い、調査面積12,740m<sup>2</sup>である。平成2年5月10日に調査を開始し、平成3年3月18日に終了した。発掘調査の概要是平成2年度と3年度の概報及び当センター年報<sup>(2)</sup>で報告している。

整理作業はⅠ区からⅢ区については、平成7年4月1日から開始し、平成8年9月30日に終了した。報告書は平成9年3月31日に刊行された<sup>(3)</sup>。Ⅳ区については平成8年4月1日から開始し、平成10年3月31日に終了した。整理作業の概要是平成7年度から9年度の当センター年報で報告している<sup>(4)</sup>。

(1) 同じ遺跡の東端部分を別事業によって調査している。

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター1997『中小河川大東川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』

(2) 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团高松建設局1991『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团高松建設局1992『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成3年度』

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター1991『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度』  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター1992『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成3年度』

(3) 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第26巻 川津一ノ又遺跡Ⅰ』

(4) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター1996『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成7年度』  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター1997『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成8年度』  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター1998『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成9年度』

## 2 発掘調査及び整理作業の体制

文化行政課

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

### 平成 2 年度

総括	課長 太田 彰一	総括	所長 十川 泉
	課長補佐 菅原 良弘		次長 安藤 道雄
	副主幹 野網朝二郎	総務	係長(事務) 加藤 正司
総務	係長 宮内 憲生		主査(土木) 山地 修
	主任主事 横田 秀幸		主事 三宅 浩司
	主事 水本久美子		(~5.31)
	(~5.31)		主事 斎藤 政好
	主事 石川恵三子		(~6.1~)
	(6.1~)	調査	参事 見勢 譲

埋蔵文化財	係長 大山 真光	調査	係長 渡部 明夫
	主任技師 岩橋 孝		係長 藤好 史郎
	技師 北山健一郎		係長 真鍋 昌宏
			主任技師 植松 邦浩
			技師 市村 拓二
			技師 藤川 善規
			技師 古野 徳久
			技師 山下 平重
			技師 森下 英治
		調査技術員	高橋佳織里
		調査技術員	篠原由記子
		調査技術員	阿河由紀子

### 平成 8 年度

総括	課長 藤原 章大	総括	所長 大森 忠彦
	課長補佐 高木 一義		次長 小野 善範
	課長補佐 北原 和利	総務	係長(事務) 前山 和也

総務	係長	山崎 隆	主任	主事	西川 大
主査	星加 宏明	調査	主任文化財専門員	廣瀬 常雄	
主事	國方 秀子		文化財専門員	古野 徳久	
	(~5.31)				
主事	打越 和美				
	(6.1~)				
埋蔵文化財	副主幹	渡部 明夫			
	文化財専門員	木下 晴一			
	技師	塩崎 誠司			

平成9年度

総括	課長	菅原 良弘	総括	所長	大森 忠彦
	課長補佐	北原 和利		次長	小野 善範
総務	係長	山崎 隆	総務	副主幹	田中 秀文
主査	星加 宏明				(6.1~)
	(~5.31)		係長(事務)	前田 和也	
	松村 崇史				(~5.31)
	(6.1~)		主任	主事	西川 大
主事	打越 和美	調査	主任文化財専門員	廣瀬 常雄	
埋蔵文化財	副主幹	渡部 明夫	文化財専門員	古野 徳久	
	文化財専門員	木下 晴一			
	技師	塩崎 誠司			

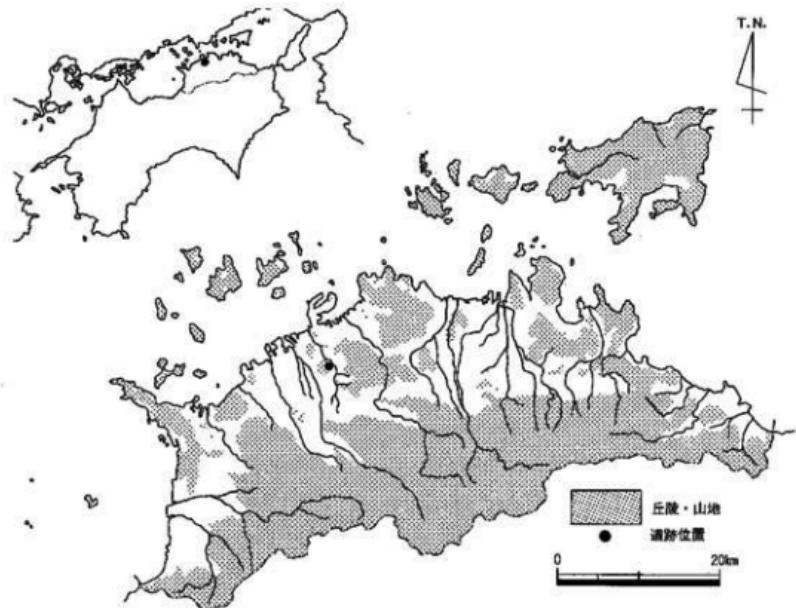
調査・整理に携わった方々は以下の通りである。

調査補助員	福本正道
現場整理作業員	山本明美
現場事務員	大井由紀子
整理補助員	青木民江, 長谷川郁子, 猪木原美恵子, 増田江里子, 高木まり子
整理作業員	谷純子, 利安沙和美, 佐巾朋美, 久保真由美, 閣本由紀子

## 第2章 立地と環境

川津一ノ又遺跡は丸龜平野東部、飯野山麓に位置する。調査前の標高は9~10mであった。一帯は主に水田に利用されており、他に菊などのハウス栽培も行われている。調査地周辺の地形については、木下晴一氏により詳しい分析が既になされている<sup>(1)</sup>ので、それを参照されたい。今回報告対象となるIV区は、東に沿う大東川より若干離れた地点にあり、ほぼ平坦な地形をなしていた。基盤層土はシルト質であり、沖積作用により形成されていいる。歴史的な環境については、本冊の前編となる『川津一ノ又遺跡I』で既に詳述しているため、重複をさけ、省略した。

(1) 木下晴一 1995 「第2章 遺跡の立地と環境」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十六番 川津二代取遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団



第2図 遺跡位置図(1)



第3図 遺跡位置図(2) (IV区のみ、1/5000)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要（図版1～5）

川津一ノ又遺跡IV区は調査面積が12,740m<sup>2</sup>であり、東西100m・南北180mの範囲に広がる。南は県道富熊宇多津線に接し、さらに標高422mの飯野山がそびえる。100mほど東には川津一ノ又遺跡や下川津遺跡を含むこの地域一帯の主要河川である大東川が北流する。東西北方向には水田が広がり、川津一ノ又遺跡IV区もまた調査前は水田やその他農産物の生産が行われていた。

調査の方法としては、まず国土座標第IV系に沿って20m四方のグリッドを第4図のように設定した。各グリッドは東西方向の英字と南北方向の2桁の数字の組み合わせによってその名称とした（例：D21）。次に全体を東西に2分、南北に3分し、大きな調査区を設定し、それそれをA区（E21～23, F21～23）、B区（E24～26, F24～26, G26）、C区（D27・28, E27・28, F27・28, G27・28）、D区（E29, F29, G29）、E区（B22・23, C22・23, D21～23）、F区（B24・25, C24～26, D24～26）とした。

調査は、道路工事計画に合わせ、まずC・D区から行い、次にA・E区、最後にB・F区という順で進めつつ、工事の予定によってある区画だけ先行して行うという形も併用した。C・D区、A・E区、B・F区という3つの調査区の組み合わせは、偶然であるが遺構や地形の分布の時期等によるずれを反映していることになった。以下この3つの組み合わせによって概要を述べていきたい。

C・D区は、調査前は北側一帯と標高は同じで平坦であったが、調査の結果、集落が営まれた時期には、低地であったことが判明した。地形は北から南に緩やかに下る。飯野山への登りがすぐ始まることからすれば、現県道の下辺りが最も低いと低いと考えられる。低地内では更に弥生時代中期中葉の川を検出したが、この川の埋没後は目立った水の流れはなかったようである。続いて弥生時代後期の溝を北東から南西にかけて検出している。またD27・E27・D28・E28にかけて基盤層上で鉄分の沈殿の顯著な痕跡を検出した。ほぼ等間隔で線状に続いていたため水田畦畔の痕跡かと考えたが、追跡結果は一隅が開いた不整長方形にしかならず、最終判断はできなかった。時期はその上の包含層から判断して弥生時代後期以降であろう。C・D区とB・F区の境には東西方向の高まりが存在する。

これはⅢ区や河川改修区で検出した「大畦畔」とつながることが遺跡全図を作成した折りに判明している。Ⅳ区部分東寄りではⅢ区同様木樁も検出している。「大畦畔」の南北に沿って「大畦畔」に伴う溝を多く検出した。

B・F区は基本的には遺構面が1枚であるが、東西の低地につながる部分は複数面になる。これらは最上層で古代以降、「下層で古墳時代後期以前に分かれる。最も古いもので弥生時代中期の竪穴住居跡や溝・土坑を少数ながら検出しておらず、この時期にこの地での定住が始まったと考えられる。弥生時代終末期には、竪穴住居跡の数が増えている。これらはB・F区でも特に北に偏る。6世紀末～8世紀前葉にかけては北西～南東方向の溝を中心に、溝が多く見られる。また低地寄りでは畑と考えられる遺構も認められるなど、生産に関係する遺構の時期といえる。このあと、A・E区に展開していた掘立柱建物跡群が南の低地との境まで拡張してくる。この中には逆「コ」字形に並ぶ特に大きな掘立柱建物跡群も含まれる。10世紀後半以降は一転してほとんど遺構が見られないようになる。

A・E区も、時期区分は同じで、弥生時代中期の遺構が最古で、複数の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、これらの方向に湾曲する溝などを検出している。この時期の集落の中心はこの区域にあったようで、北に隣接するⅢ区では、同時期の遺構は検出していない。続く弥生時代終末期の集落も、この付近からⅢ区南部にかけてより大規模に営まれており、ある時期には竪穴住居跡群を溝で囲んでもいたようである。数百年の時間を経て、6世紀末頃に再び遺構が見られるようになる。7世紀中頃には東西に抜ける大きな溝が、多量の土器・獸骨と共に埋め戻されている。土地利用の変更に伴うものと見られるが、古代を細分する際の一つの目安となる遺構である。この後、北に偏って建てられていた掘立柱建物跡群が大溝を越えて展開するようになり、前後して竪穴住居から掘立柱建物への住居形態の移行が完了する。掘立柱建物跡はⅣ区全体で130棟以上を数えることができ、大東川流域では、下川津遺跡に次ぐ規模となる。古代の遺構は10世紀前半に消え、中世には、現行の地割りにつながる条里区割りの溝が、Ⅲ区とⅣ区の境となった水路の下で検出されたりしている。

## 第2節 地形と土層序

### 調査域土層図(1) (第5図)

A区の東壁の土層である。耕作土の下に中世・古代・弥生時代の包含層が堆積する。北部では耕作土直下で基盤層が現れる。遺構面は標高9.6mで、ごく部分的に古代包含層の上・弥生包含層の上・基盤層の上の計3面に分かれ。グリッド22列と23列の境から南へ6mの地点から南へ基盤層の標高が低くなる。ここは古代になつても埋まりきっていない。S D010やS D059/100, S D095/096/S X08が集中することから、この低地に向かって溝が掘削されることが多かったことがわかる。

### 調査域土層図(2) (第6図)

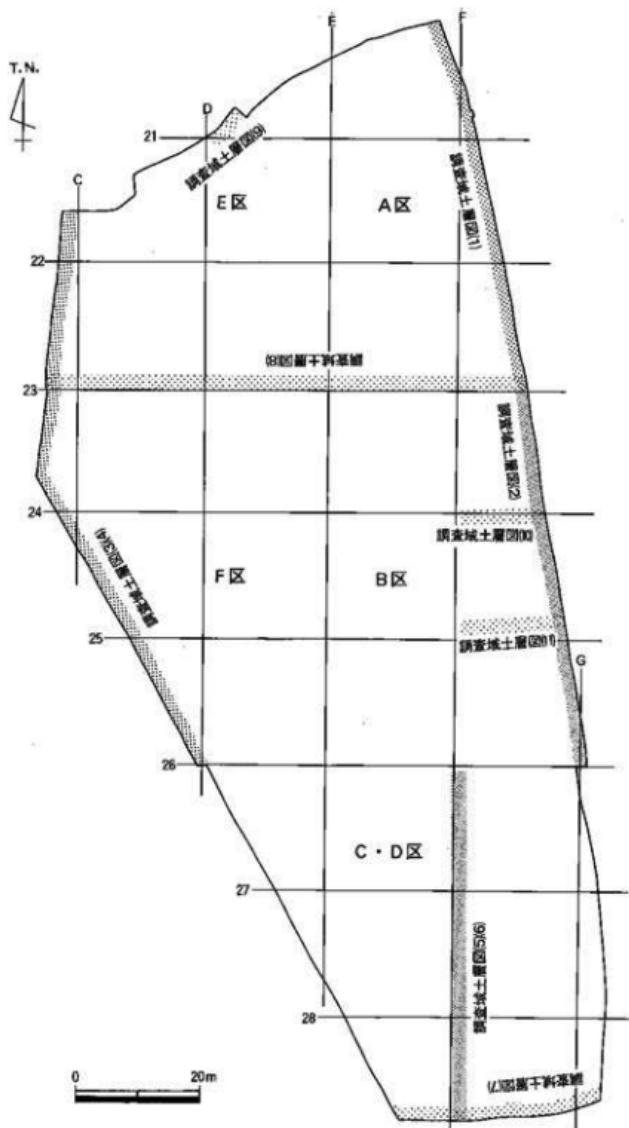
B区の東壁の土層である。土層図(1)から続く。遺構面は3面存在し、上より第1面は標高9.2mで、S B062などの掘立柱建物跡が検出された。第2面は標高9.1mで、鋤溝を検出した。第3面は標高9m前後で、遺構は存在しなかつた。微高地部分との比高差はわずかとはいえ、A区南東隅より続く低地であり、これが特に第3面の遺構の有無につながっている。第1面の時期に至つても、同時期のA区より若干低い。

南端には、「大畦畔」の断面が見える。これは後で詳しく述べる(P.268)。

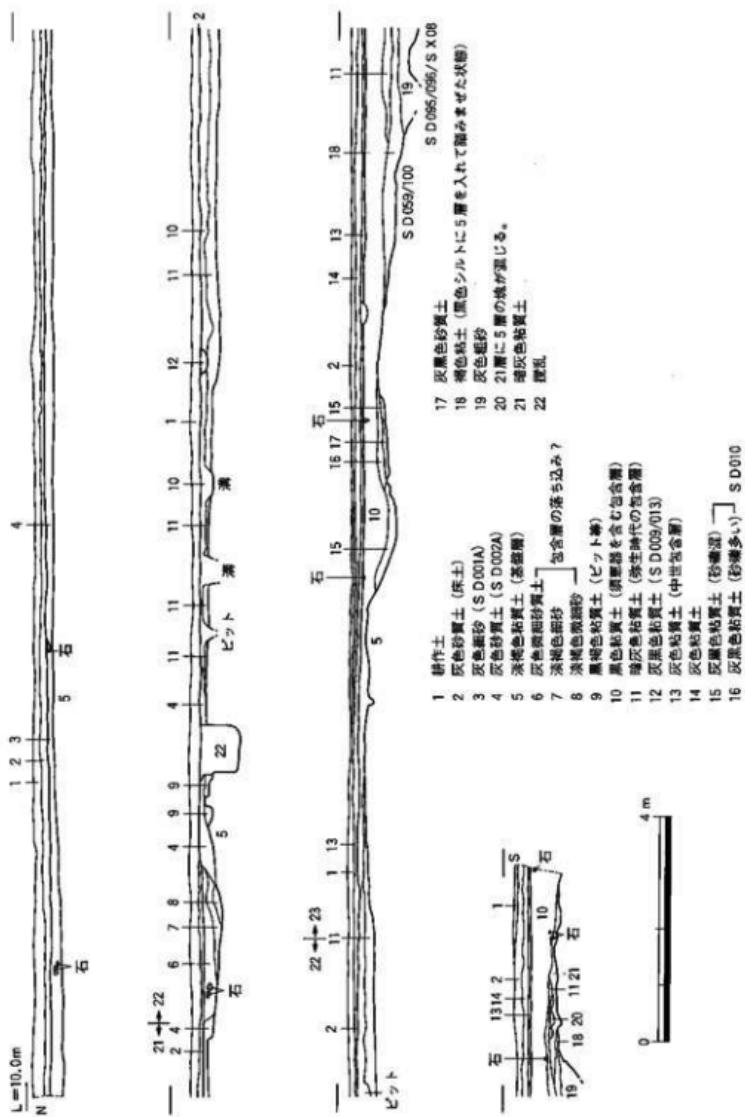
### 調査域土層図(3)・(4) (第7・8図)

E・F区を通した調査域全体の西壁である。グリッド23列以北であるE区では、遺構面は北側1面、南側で2面ある。第1面の標高は9.1mである。第2面は平面的にみてE区南西部へと地形が低くなることによって出現する。最低地点の標高は8.2mであり、急傾斜となっている。そのため、この付近では、弥生時代の遺構は、低地の方が有利な井戸以外は殆ど見られない。

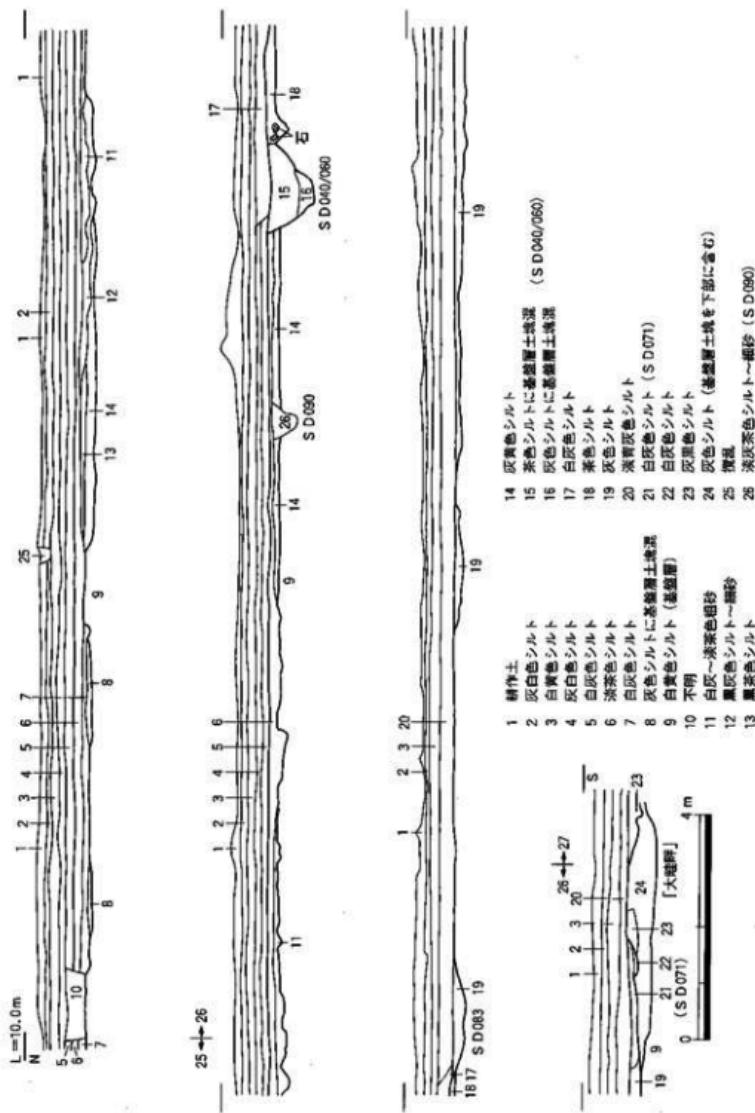
F区では遺構面は多いところで3面数えられる。第1面は古代の面である。標高は北側で8.8m、南へ行くほど高くなり、C区との境で9.2mとなる。これは、A・B区東壁とは逆の結果であるが、川津一ノ又遺跡内に微妙な地形変化が存在することを示している。後述するように、C・D区南端を南東-北西方向で流れている弥生時代中期中葉の河川があり、これがF区外を回り込みながら、グリッドB25で調査域内に姿を現し、すぐに消える。この川跡はその後も低地となって残り、古代においても埋まりきることがなかつたため、上記のような現象が生じたのである。



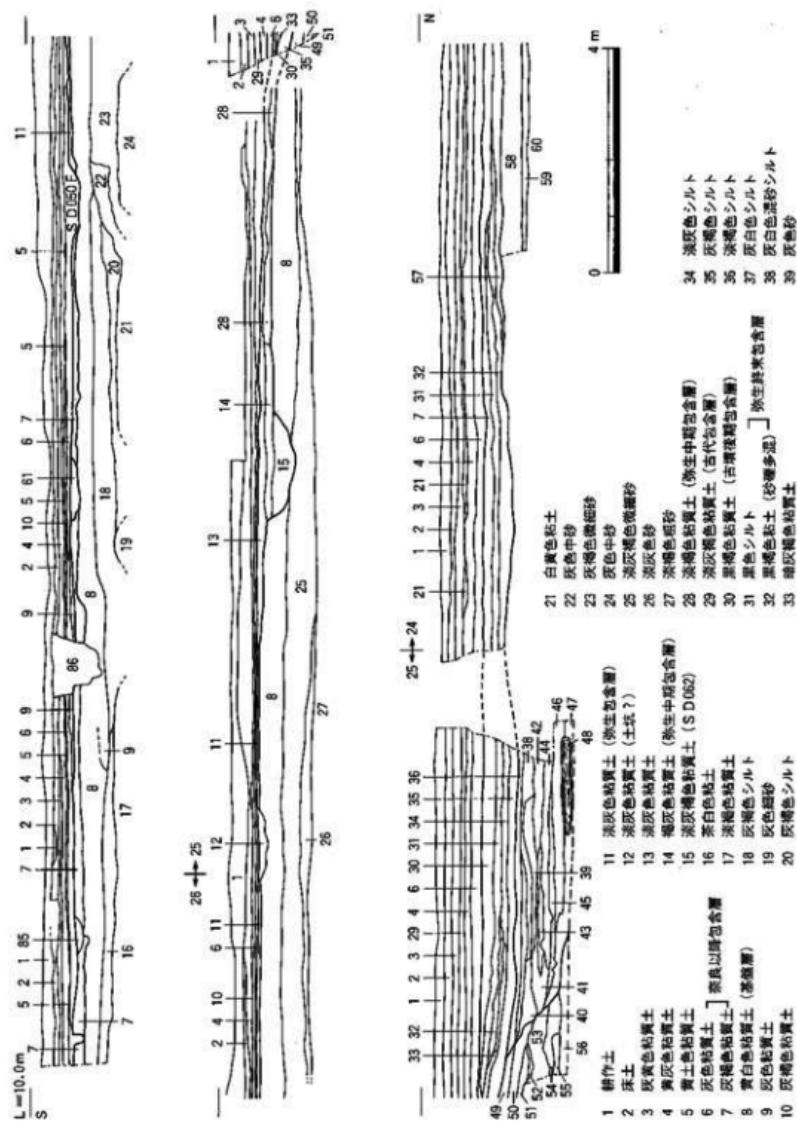
第4図 調査区・グリッド区割、調査域土層図作成位置図（1/900）



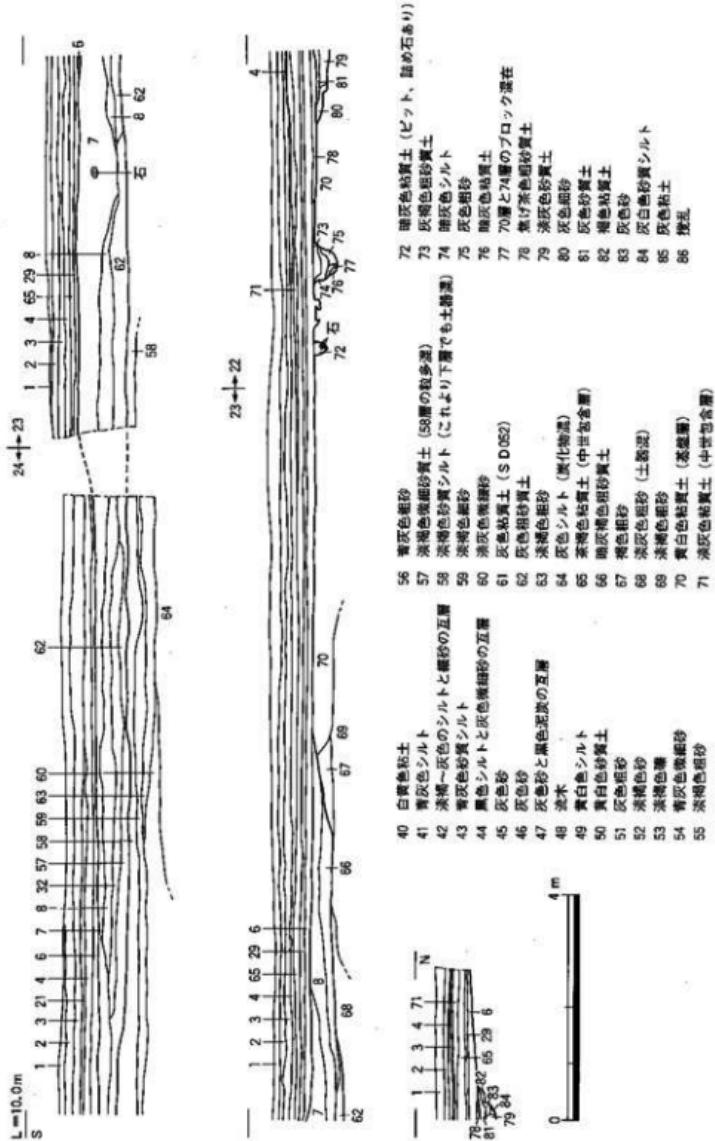
第5図 調査域土層図(1) (1/100)



第6図 調査域土層図(2) (1/100)



第7図 調査域土層図(3) (1/100)



第8図 調査域土層図(4) (1/100)

第2面は弥生時代後期の面である。川跡の部分で標高8.3m、F区南端で9.0mで、両者の比高差は更に大きくなっている。川跡にはこの時期の包含層が厚さ50cmも堆積しており、大量の土器片が出土した。完形の甕も多数含まれており、時期的にも限定される好資料である。状況から、恐らく竪穴住居の住民が集落周辺の低地に不要の土器を捨てたものと考える。これらはF区包含層出土土器として、第3節に掲載している。

第3面は弥生時代中期の面である。後述するが、SD062は、この時期の微高地と低地(川)の境に沿っており、遺構の有無から見ても、集落の境界となっていると判断される。

#### 調査域土層図(5)・(6) (第9・10図)

C・D区中央の南北土層である。C・D区は第1節で述べたように低地部であり、遺構は少ない。北から南に緩やかに傾斜し、弥生時代後期の時点では、北で標高9.2m、南で8.5mとなる。この上に土が水平堆積し、低地を埋めて行き、中世には標高9.3mの平坦な地形となる。古代には、B区との境で、自然の傾斜を利用し、溝を掘り込むことによって「大畦畔」を形成している。

グリッド27列と28列の境付近から南に向かって弥生時代中期中葉の河川が存在した。上述したような流れをとるもので、川底は湧水のため未検出である。径40cmの大木など流木を多く含む層もあり、堆積する土砂も黒色の有機物を含まない砂・シルトが主体であることから、急な流れにより短期間に土砂が堆積し埋没した河川であると考える。

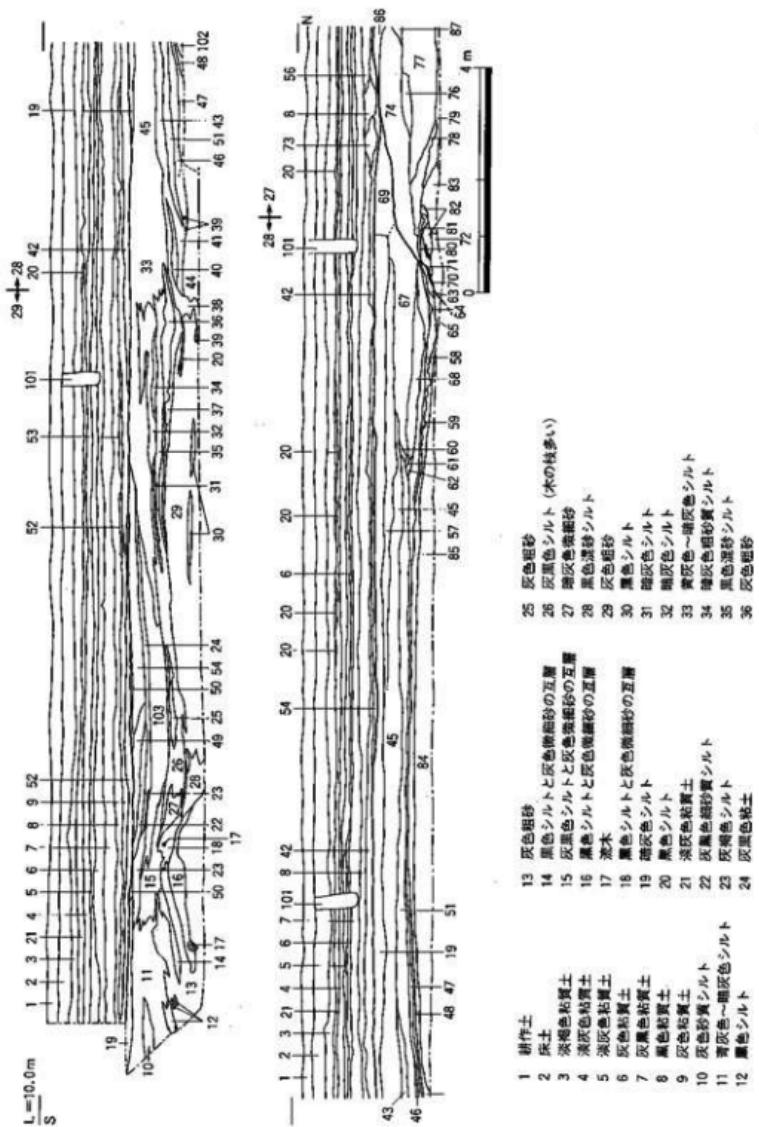
これより下の層には、土器等の遺物は含まれていない。

#### 調査域土層図(7) (第11図)

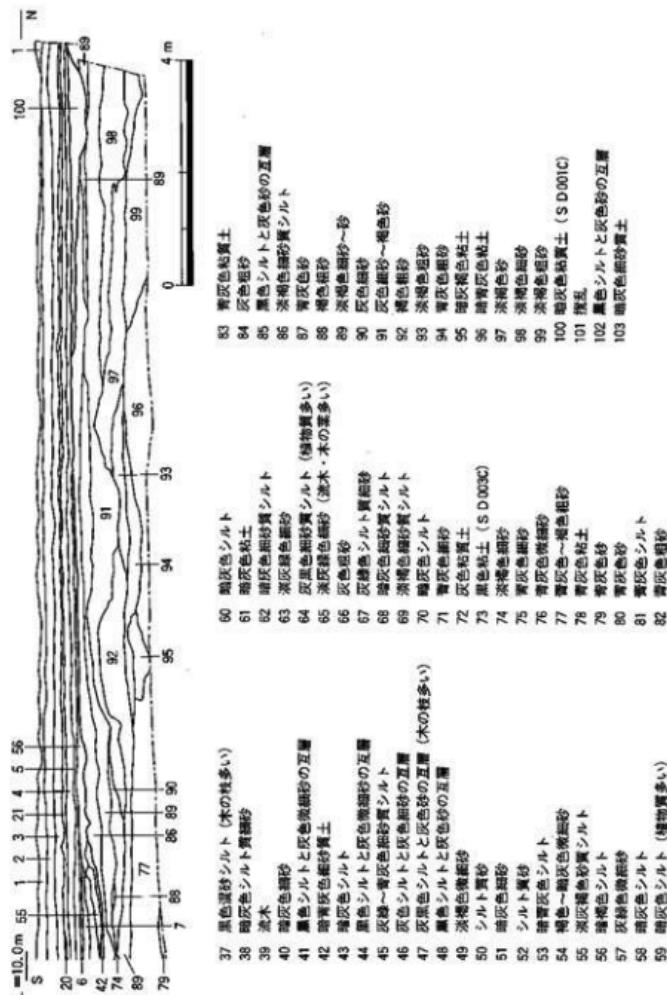
C・D区の南壁である。土層図(5)とほぼ似た状況を示す。弥生時代中期中葉の河川埋没後から包含層までは水平堆積しており、この低地は東西方向へは傾斜がなく平坦であったと判断できる。中期河川の岸は明瞭ではない。

#### 調査域土層図(8) (第12図)

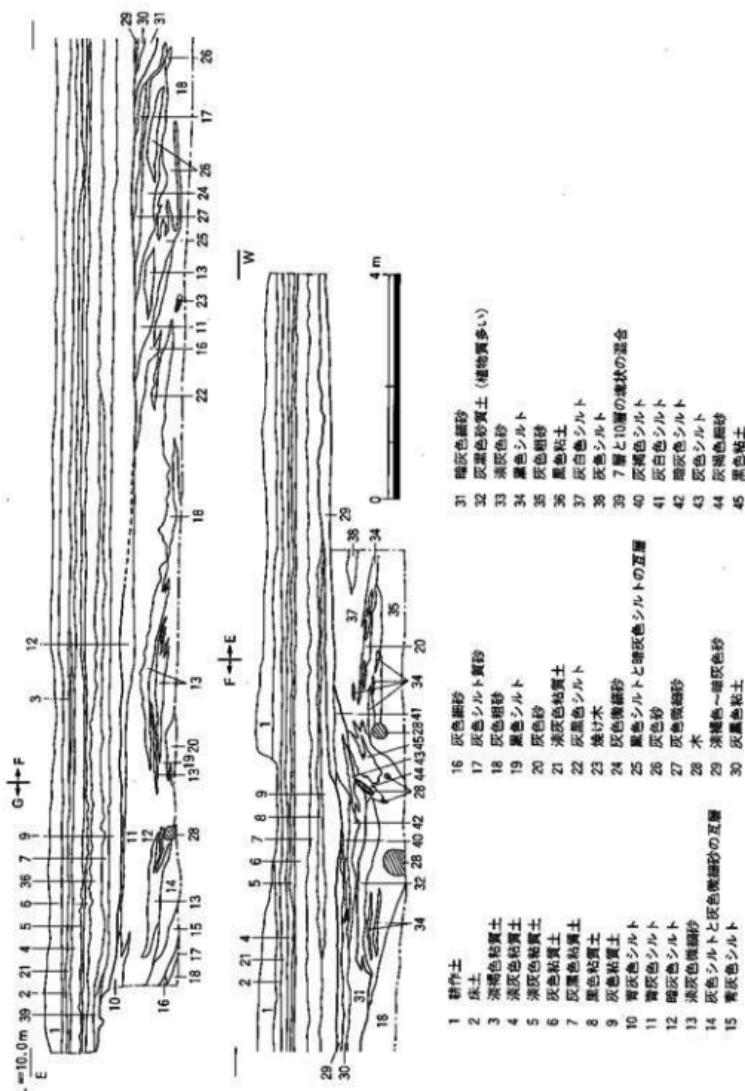
A・E区の南壁である。無遺物の基盤層による標高9.5mの平坦面が中央に広がり、両端で急激に落ち込む。東端には古代の、西端には弥生時代後期の包含層がそれぞれ厚く堆積している。中央の平坦面にも弥生時代後期の包含層が薄く堆積しており、その地形変化を時期を追って述べると、まず弥生時代中期には包含層の堆積が見られないことから、基盤層の上が遺構面で、基盤層の地形通り東西に落ち込みが存在する微高地であった。当該期の溝であるSD059/100はグリッドE列とF列の境付近及びB列とC列の境付近でこの土層位置を横切る。微高地の落ち口に位置することから、両端の落ち込みをつなぐ目的で



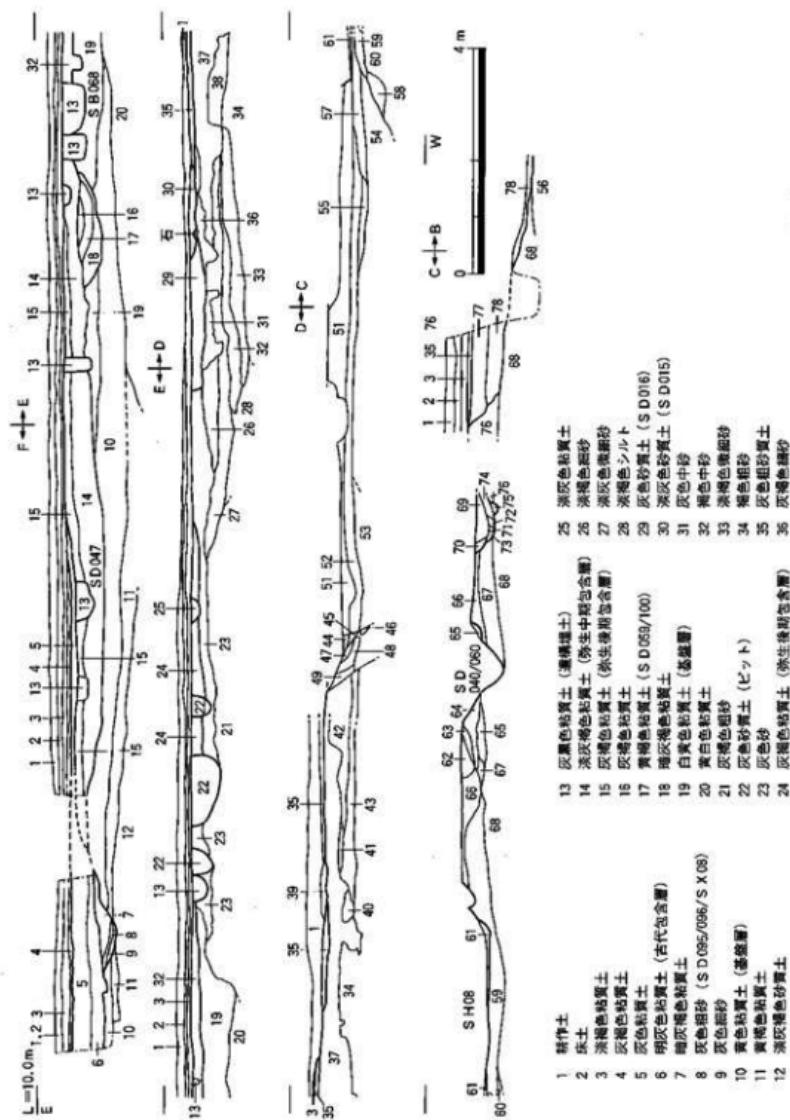
第9図 調査域土層図(5) (1/100)



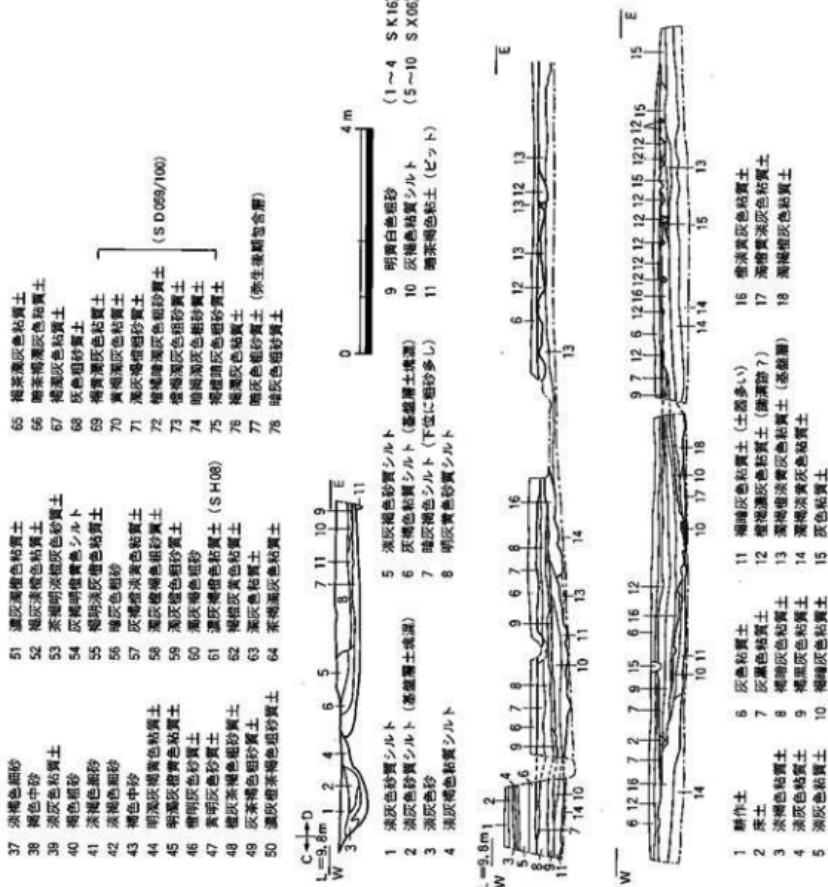
第10図 調査域土層図(6) (1/100)



第11図 調査域土層図(7) (1/100)



第12図 調査域土層図(8) (1/100)



第13図 調査域土層図(9)・(10)・(11) (1/100)

掘られたものと考える。

弥生時代後期には西側の落ち込みが埋まってしまうが、平面図を見ると、竪穴住居跡の分布がこの落ち口で終わることから、竪穴住居の時期には傾斜面が存続していたらしい。

古代にはS B001F等の存在から西側の落ち込みは平坦面となり居住域が拡大したことがわかる。一方で東側の落ち込みでは、S D047やS D095等がこの落ち込みを目指して掘削されている。後にこの落ち込みも急速に埋没し、A・B・E・F区ほぼ全域が居住域となってしまうのである。

#### 調査域土層図(9)（第13図）

A・E区北壁中央付近の土層である。遺構面は1面で、標高9.7mである。

#### 調査域土層図(10)（第13図）

B区グリッドF24の南壁である。左端を除く上面がS D060やS B062が掘り込まれた奈良から平安時代の遺構面である。そのすぐ下の標高が9.0mの面が畑状遺構の残された面である。基盤層は西半分が東半分より50cm低くなっている。この間に弥生時代中期及び後期の包含層が堆積している。弥生時代の遺構はFラインから東には存在しないことから、西半部の低地が弥生時代における集落の縁となっていたと推測できる。低地部分の基盤層には何らかの理由によって不規則な凹凸が認められる。

#### 調査域土層図(11)（第13図）

B区南から12m地点の東西土層である。基本的に上層図10と変わらない。東半分に鋤溝痕、西半分に低地と基盤層の不規則な亂れが認められる。低地は土層図10が低く、平面的には木柵より東でC・D区の低地とつながっている。ここから少し西に湾曲しながらA区とB区の境の東端に抜けていく。この部分に多くの溝が時期を異にしながら集まることはこれまで述べてきた通りである。

### 第3節 遺構・遺物

#### 1 弥生時代中期

この時期の遺構は調査域の北東部分に主に展開する。

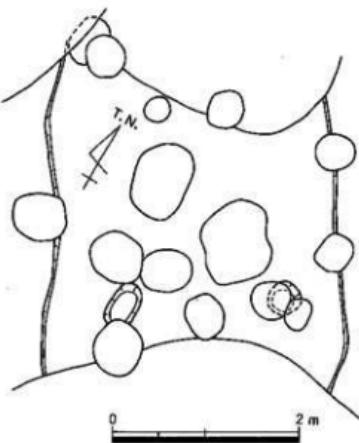
##### 竪穴住居跡

###### S H30 (第14図)

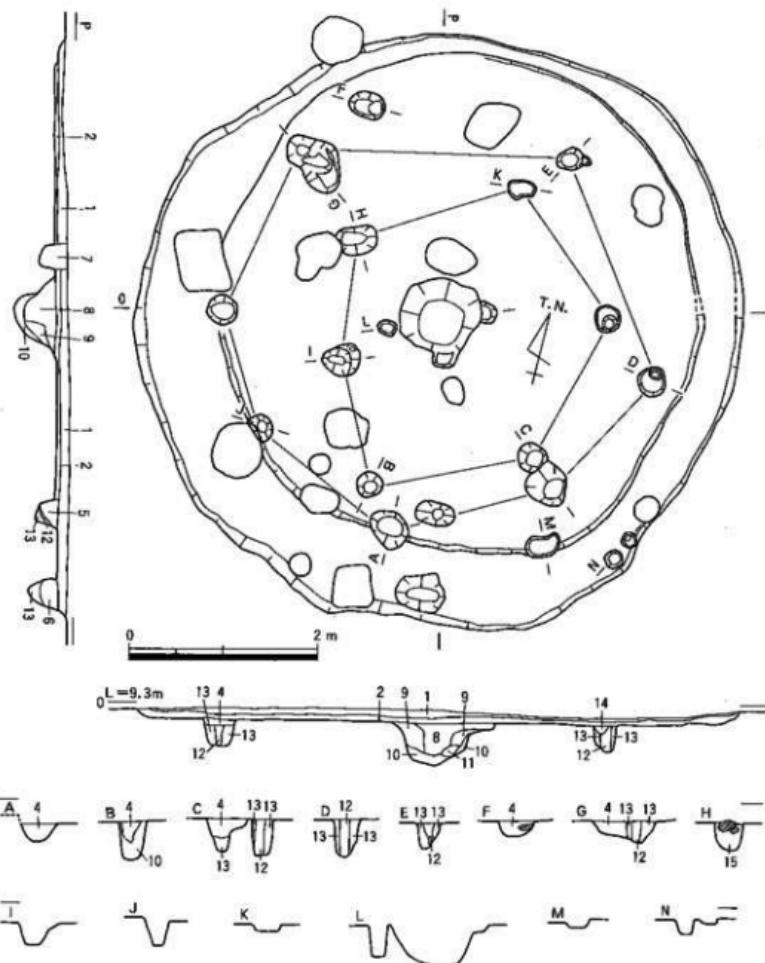
C23に位置する。平均の深さ10cmと浅く、上部を大幅に削平されている。東西約3mで、南北はS H13及びS H29・34が後に作られたため不明であるが、長楕円形の平面になるようと思われる。S H30に伴う柱穴は、後代の柱穴のため不明瞭であるが、2つある。主柱穴となるかどうかはわからない。遺物の出土はなく、時期は不明である。その後に建てられた遺構の時期や、主柱穴らしいものを持たない構造から、当該期の遺構であろうと考えた。

###### S H21 (第15・16図、図版6)

D25に位置する。円形の平面をなし、段が小さく幅の狭いベッド状遺構、その内側に2重になった柱穴群、中心には円形の深い炉とその両脇に小さなピット2つといった体裁をとる。これをそのまま2重の主柱列を持つ上屋が建てられていたものと考えると最も無理はない。しかし弥生時代中期とすればそれほど大きくもない竪穴住居で、このような柱構造をもつことはありえない。とすれば、2重の柱穴群を住居面積の拡大に伴う建て替えによるものと考える方が自然である。両柱穴群の柱穴の個数や配置が異なり、上屋を復元することがより難しいことや、同一集落である北側のⅢ区の2④

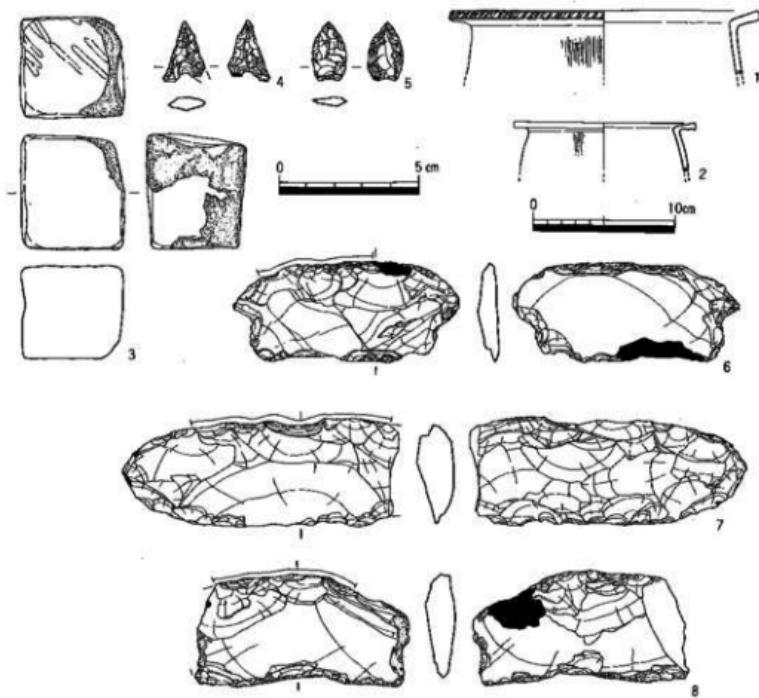


第14図 S H30平面図 (1/60)



- |                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| 1 淡灰褐色粘質土(下面に石器・土器・焼土多) | 9 黄灰色砂質シルト(焼土・炭化物混)  |
| 2 淡灰白色粘質土               | 10 淡灰色粘質土(炭化物多混)     |
| 3 淡灰茶色砂質シルト             | 11 淡灰色粗砂             |
| 4 淡灰茶色砂質シルト             | 12 暗灰黄色砂質シルト(黒灰色土塊混) |
| 5 淡灰茶色砂質シルト             | 13 暗灰黄色砂質シルト         |
| 6 淡灰茶色砂質シルト(焼土・炭化物混)    | 14 淡黄灰色砂質シルト         |
| 7 灰茶色砂質シルト              | 15 暗灰褐色砂質シルト         |
| 8 黄茶色砂質シルト(肩部近くに炭化物多)   |                      |

第15図 S H21平・断面図 (1/60)

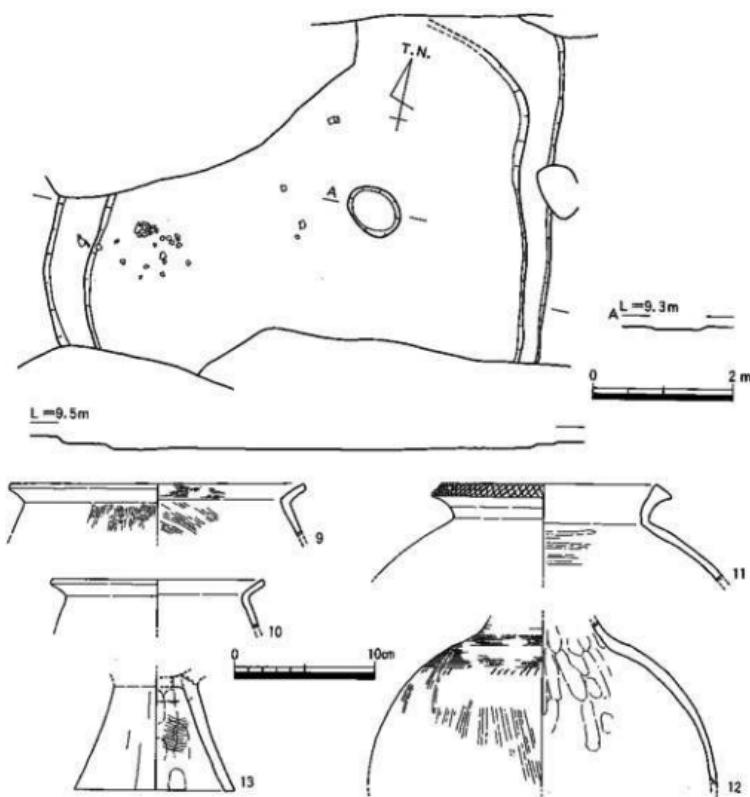


第16図 SH21出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

⑤SH05・SH08でも時期は異なるが主柱を増やすことによる住居面積の拡大が見られることも、この可能性を強める。実証的な根拠は無いながら、ここでは建て替え説を採用したい。ベッド状造構は面積の拡大時に作られたものであり、その内側が当初の居住面であろう。

炉南側の小穴は断面ではただの段に見えなくもないが、円形で主柱が5本以上あり、中央の土坑の両端に小穴があるという形状になるとすれば、石野博信氏のいわれる「北牟田型」住居に該当する<sup>11)</sup>。香川県においては、弥生時代中期の竪穴住居跡は十数遺跡で検出されている。殆どの遺跡で1・2軒程度であり、全体数も多くないが、このように中央の

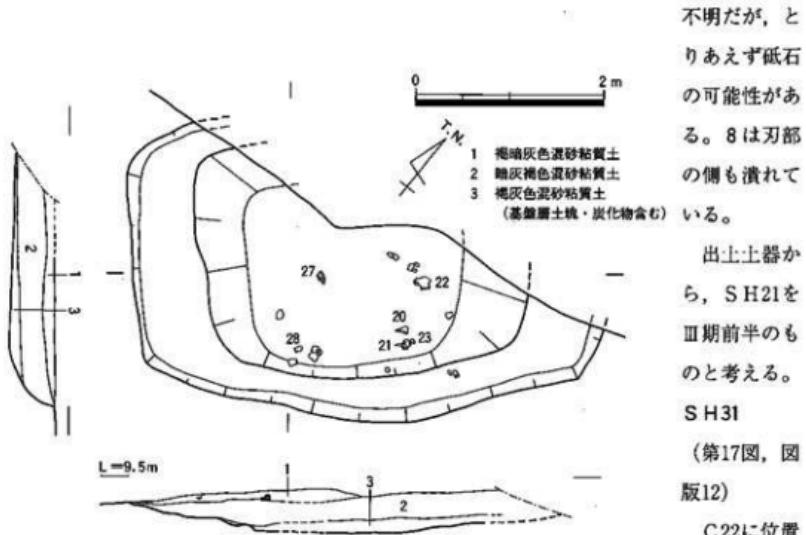
(1) 石野博信1990「西日本における弥生中期の2つの住居型」『日本原始・古代住居の研究』。同書の補記にて、その後「松菊里型」と改称された旨述べておられる。北に1kmの川津中塩遺跡でも同形態の住居跡を検出している。



第17図 S H31平・断面図 (1/80), 出土遺物実測図 (1/4)

土坑の脇に小穴を伴う例は更にわずかである。石野氏の言われるような九州からの人間の移動を反映するものなのかどうかわからないが、SH21出土の土器は、香川県において一般的な土器であり、人間の移住を伴うものとは考えられず、他の要因も考慮する必要がある。

遺物はコンテナ半箱程度出土した。1は炉より出土し、他は埋土中からの出土であった。1は口縁に刻み目を入れている。3は正六面体の石器である。すべての面が平坦であることから、石器であろうと判断した。そのうち1面には斜めの擦痕が数条残っている。用途



第18図 SH 32平・断面図 (1/60)

mの竪穴住居跡である。南北は不明だが、隅丸の方形に近い平面になると思われる。周囲にはSH 21に似たベッド状遺構が巡る。中央寄りに浅いピットがある他は柱穴も検出できなかった。

床面で壊れた土器を少量検出した。11・13はその一部である。11の口縁は斜格子を刻む。13は高杯の脚であろうと判断した。杯底は粘土板充填による。9・10・12は埋土中から出土した。12は頸から肩にかけて櫛描きの直線文と小円圧痕文を連続させている。

出土土器からSH 31は弥生時代Ⅲ期前半のものと考える。

#### S H 32 (第18・19図, 図版6・12)

C 22に位置する。長辺の脇が張る長方形の竪穴住居跡で、 $7.0 \times 4.6$ mに復元できる。深くまで掘り込まれていたためか、残存状況がよかつた。周囲にはベッド状遺構が巡り、ピット等の検出はなかった。南北土層でベッド状遺構の段が記録されていないが、これは基盤層との境が不明瞭なため、断面図作成時点では検出できなかつたことによる。

床面からまとめて土器が出土した。26・27は床上で出土した。14・16はⅡ期のものである。15・17・20はⅢ期前半のものである。21はV期後半のものである。22は近畿のⅡ～3様式期の壺によく見られる疑似流水文で飾っている。胎土も他の土器に比べて若干

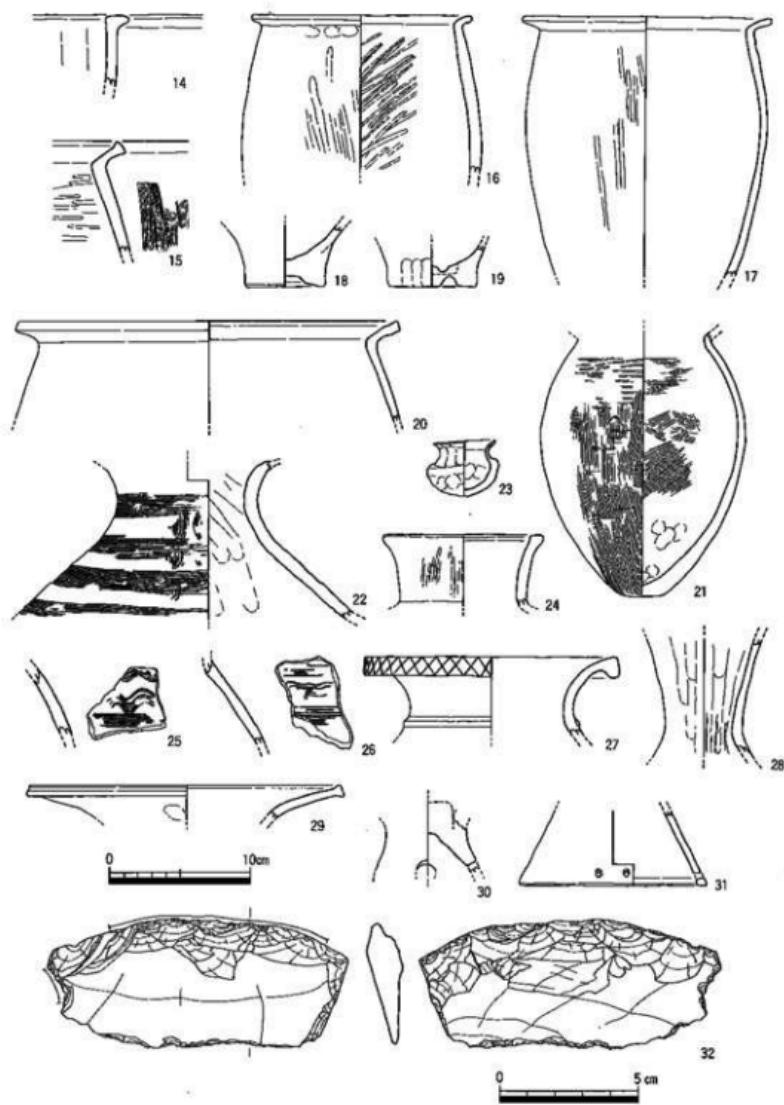
不明だが、とりあえず砥石の可能性がある。8は刃部の側も潰れている。

出土土器から、SH 21をⅢ期前半のもととする。

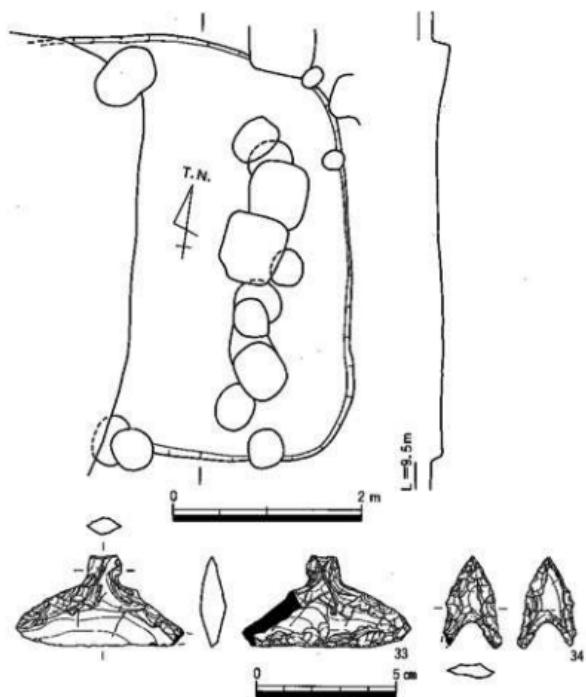
SH 31  
(第17図, 図版12)

C 22に位置

する。東西7.2



第19図 SH 32出土遺物実測図 (1/4, 1/2)



第20図 SH34平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/2)  
種の可能性もある。

出土土器には時期幅があり、21・28は上面からの混じり込みであると判断し、床上出土の土器から、Ⅲ期前半をSH32の時期と考えておく。

#### S H34 (第20図)

C23に位置する。隅丸方形で、南北の幅が4.5mあり、SH29が後に作られたため西半分の状況は不明である。上面を大きく削平されたためか深さ10cmしか残っていなかった。ピットも検出していない。埋土中からは石器が少量出土している。

その後に建てられた造構の時期や、主柱穴らしいものを持たない構造から、当該期の造構であろうと考えた。

違っている様であり、搬入品の可能性もあると考える。25・26はⅡ期後半からⅢ期前半にかけて流行した櫛描きの波状文と直線文の組み合わせで飾っている。28はV期の長頸壺に似ている。天地逆で高杯になるのであろうか。29もV期の壺の口縁である。30・31はⅡ期後半からⅢ期前半のものであろう。この時期高杯の杯底は円盤充填が一般的のため、30は他器種の可能性もある。

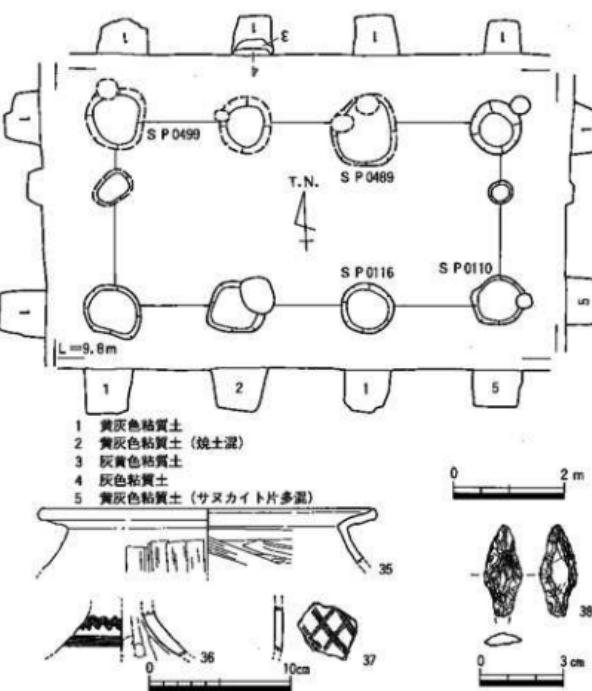
### 掘立柱建物跡

S B 001A

(第21図、図版  
7)

E 22に位置する。桁行き4間で、主軸方位はN87°Eを向いている。主柱穴は径1mと大きく、梁間には小さい柱穴が北寄りの位置に掘られている。これは恐らく棟持ち柱になると思われる。

柱穴からは弥生土器を割合多く出土した。ほかに、焼土や石器・サヌカイト屑が出土し、中でもサヌカイト屑は小さなものが4つの柱穴から20~420gとまとまって出土した。石器製作時にできた屑を、柱穴を掘ったときに、ついでに捨てたのであろうか。



第21図 S B 001A平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4, 1/2)  
S B 001Aの構造と出土遺物を示す図。図版7に示すように、E 22に位置する。柱穴の位置と大きさ、出土した土器類の詳細が示されている。

出土土器から、S B 001AはⅢ期前半の掘立柱建物跡と考える。

### 柱穴

その他のSP (第22図)

この時期の遺物を出土するピットが他にもいくつかあり、掘立柱建物跡や柵列を構成しないため、ここにまとめて掲載した。

39はSP0212E (D21) 出土である。SP0212E自体はSD029より後のものであり、古

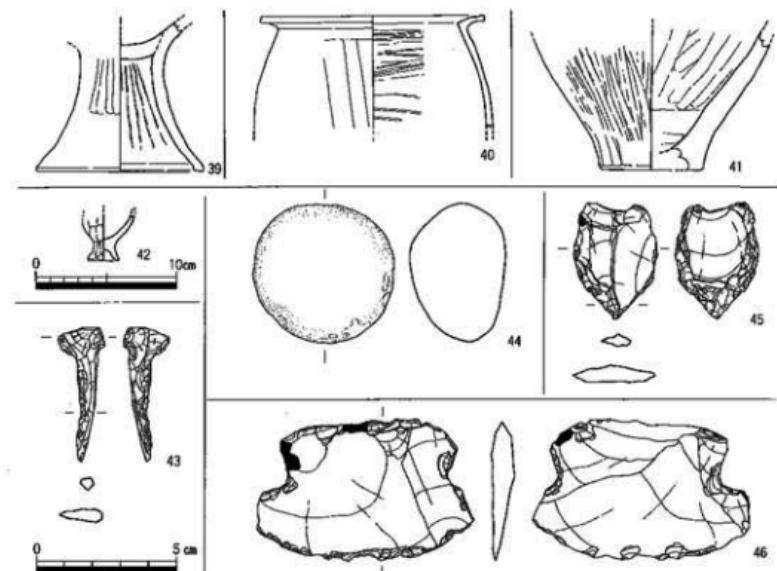
代以降である。40はS P 0303E (C 23) 出土である。Ⅲ期前半のものである。41はS P 0398E (D 23) 出土である。42はS P 0519E (D 23) とS P 0570E (D 22) 出土破片が接合した。両ピットは10m離れている。43はS P 0614E (D 23) 出土である。内側の側面は細部調整を加えていない。44はS P 0193A (E 22) 出土である。45はS P 0449Aを切るピット (E 22) から出土した。石錐とするには細部調整が少ないため、石錐とした。46はS P 0207F (C 25) 出土である。

### 土坑

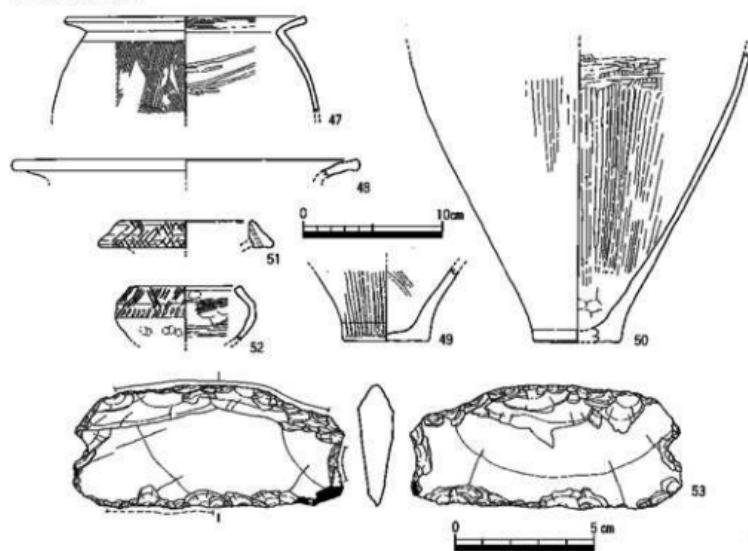
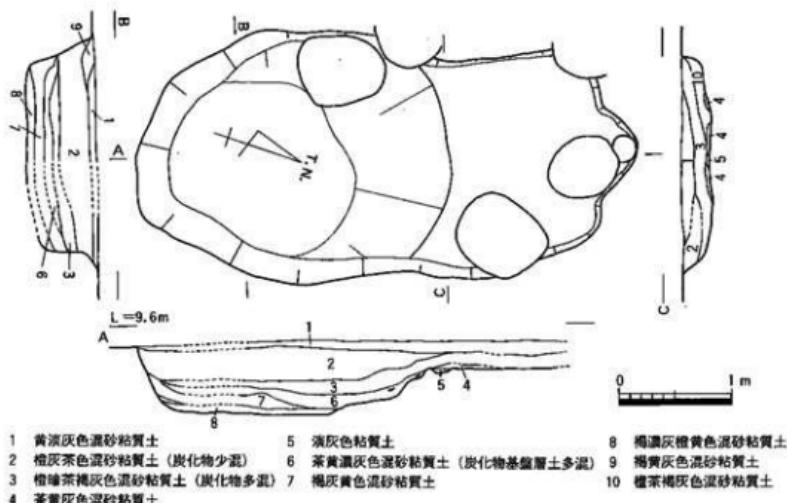
#### S K 08 (第23図)

C 23に位置する。楕円形の平面で、南半分が北半分より深い2段掘りになっている。長軸4.5mの大きな土坑である。平・断面図ではS K 08がS H 08・22より新しく記録されているが、遺物を信用すれば、これは記録間違いと考える。

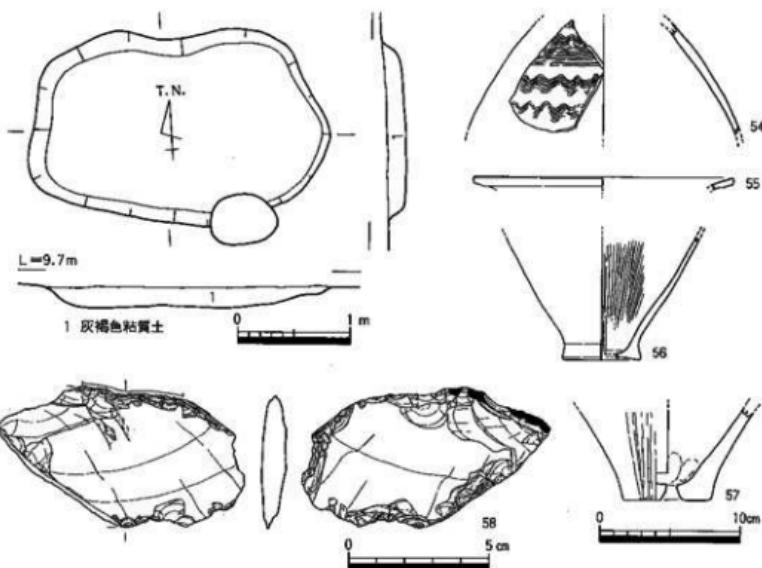
コンテナ1箱弱の遺物が出土した。51は小型の壺の口縁である。52は小型の鉢である。外面に斜格子と列点を刻んでいる。53は刀部が少し磨滅している。



第22図 柱穴出土遺物実測図(1) (1/4, 1/2)



第23圖 S K 08平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)



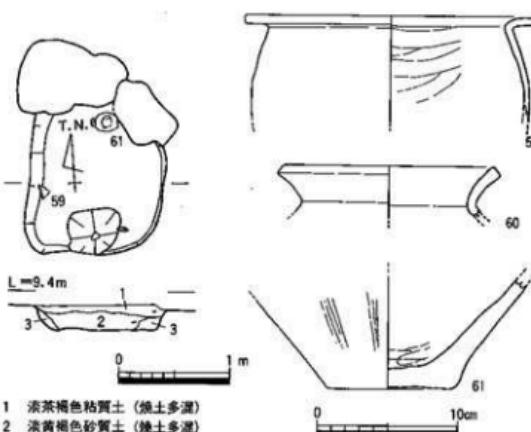
第24図 SK 14平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

出土遺物から、SK  
08はⅢ期前半の造構  
を考える。

#### SK 14 (第24図)

F 22に位置する浅い  
不定形の土坑である。

少量の遺物が出土し  
た。54は董の胸の破片  
である。傾きは確定で  
きない。57は甕焼成後  
に底部に穴を開け、甕  
としている。58は石包  
丁と考えた。抉りは片



- 1 深茶褐色粘質土 (燒土多混)
- 2 淡黃褐色砂質土 (燒土多混)
- 3 淡黃灰色砂質土 (土器片大を含む)

第25図 SK 22平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)



第26図 S K 23平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/4)

面からのみ調整を加え成形している。以上の遺物から、S K 14はⅢ期前半の遺構と判断した。

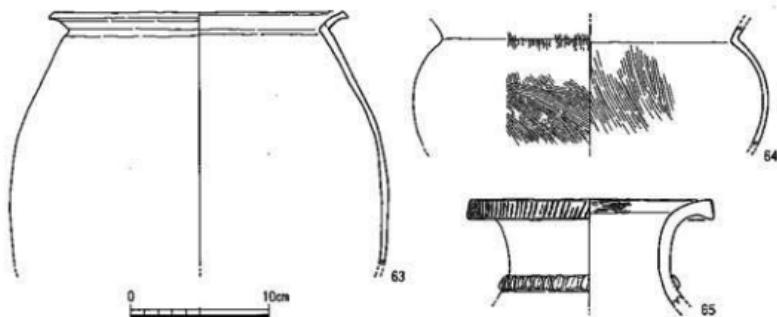
#### S K 22 (第25図)

C 25に位置する。小さく浅い土坑である。焼土や炭化物を埋土に多量に含み、図示したような大きな土器片が底周辺に残っていた。Ⅲ期前半の遺構と考えた。

#### S K 23 (第26図)

C 25に位置する。小さい隅丸長方形の土坑である。少量の土器の他、サヌカイト剝片が120g出土した。

第27図 S K 34平・断面図 (1/50) Ⅲ期前半の遺構と考える。



第28図 S K 34出土遺物実測図 (1/4)

S K 34

(第27・28図)

D 26に位置する小さい不定形の土坑である。浅い底の北寄りにはさらに小さな穴が掘られている。

底に接して、いくつかの大きな破片が出土した。またサヌカイト剥片が250g出土した。

64は壺とした。口縁部は立ち上がり、頸部から胴上半にかけての屈曲が強い。

外面のハケ目は横向に向近く、内面にもハケ目を施している。

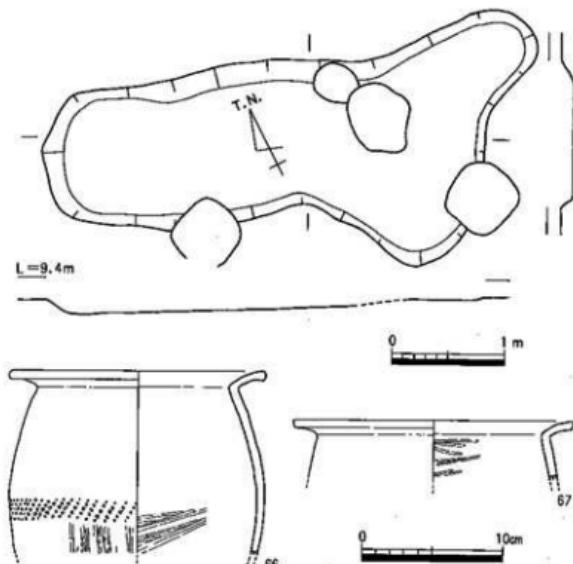
この形態はS D 059/100やS D 062を見るとき、少量ながら一定の比率で存在するものようである。

S K 34は、出土土器からⅢ期前半の遺構と考える。

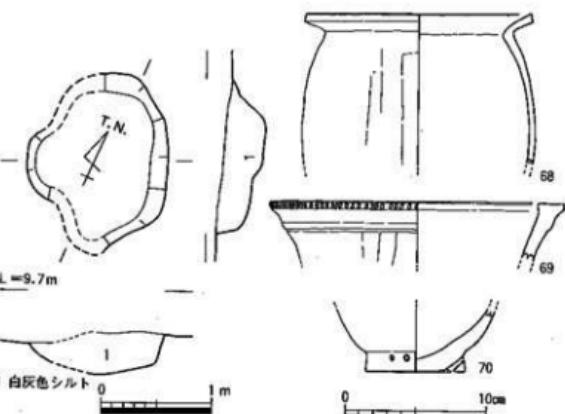
S K 35 (第29図)

D 26に位置する。

浅い不定形の落ち込



第29図 S K 35平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)

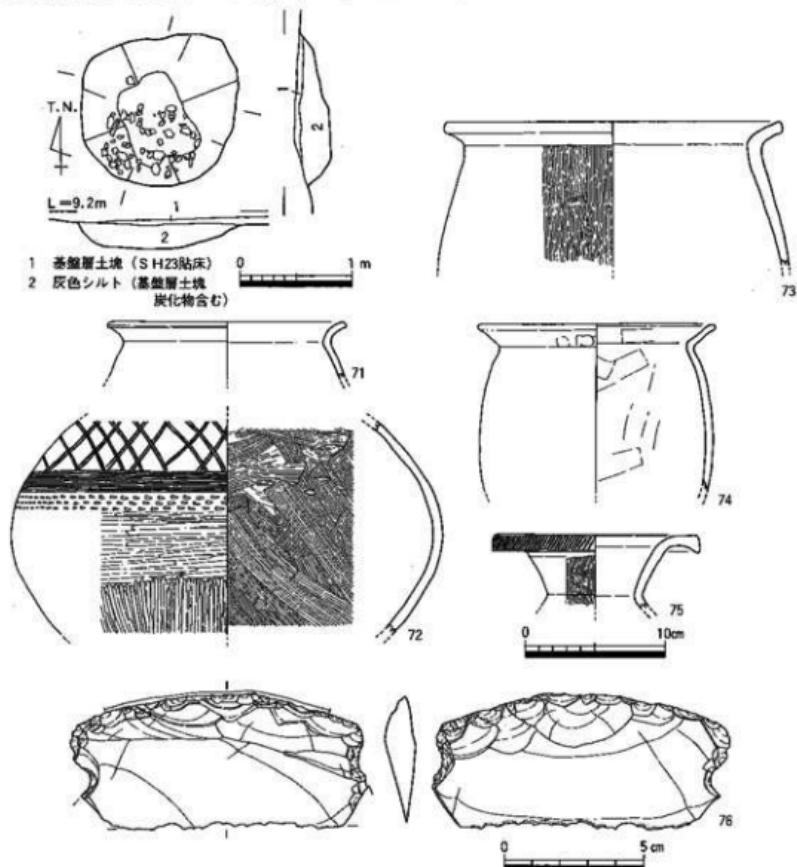


第30図 S K 37平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)

みである。土器片が少量出土した。66は5個単位の刺突列点文を胴中位に巡らす。67とともにⅢ期前半の土器であろう。

### S K 37 (第30図)

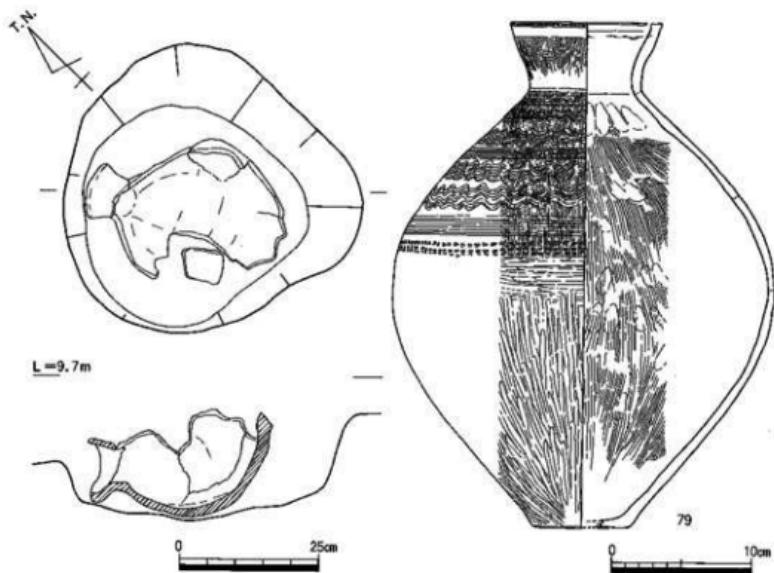
D24に位置する。S H27の下で検出した。S H27の平面形が不明であったため、トレーナーを入れたところ見つかったものである。この時点では長径1.5m、深さ0.4mであったことからすれば、S H27に削られる以前は割合大きな土坑であったことが推測される。中からは土器片が少量とサヌカイト剝片140gが出土した。69は壺の口縁である。刻み目と沈線



第31図 S K 38平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)



第32図 S P 0341/0343E出土遺物実測図 (1/4)

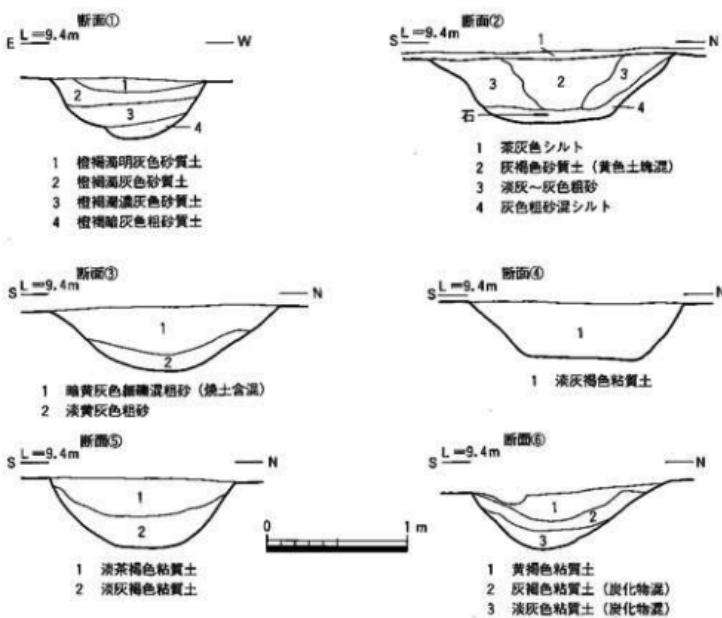


第33図 S P 0876A平・断面図 (1/10), 出土遺物実測図 (1/4)

を入れる。70は壺の底で、高台状の底部に斜めに穴を開けている。2個一対で、恐らく両端に2ヶ所開けられたものと思われる。すべてⅢ期前半の土器である。

#### S K 38 (第31図, 図版8)

D24に位置する。S H23とS D040/060が接する地点で検出した。径約1.5mの不整形であるが、上部はS H23に破壊されており明らかでない。中からは土器片や石器がまとまって出土した。出土土器から、Ⅲ期前半の遺構と考える。



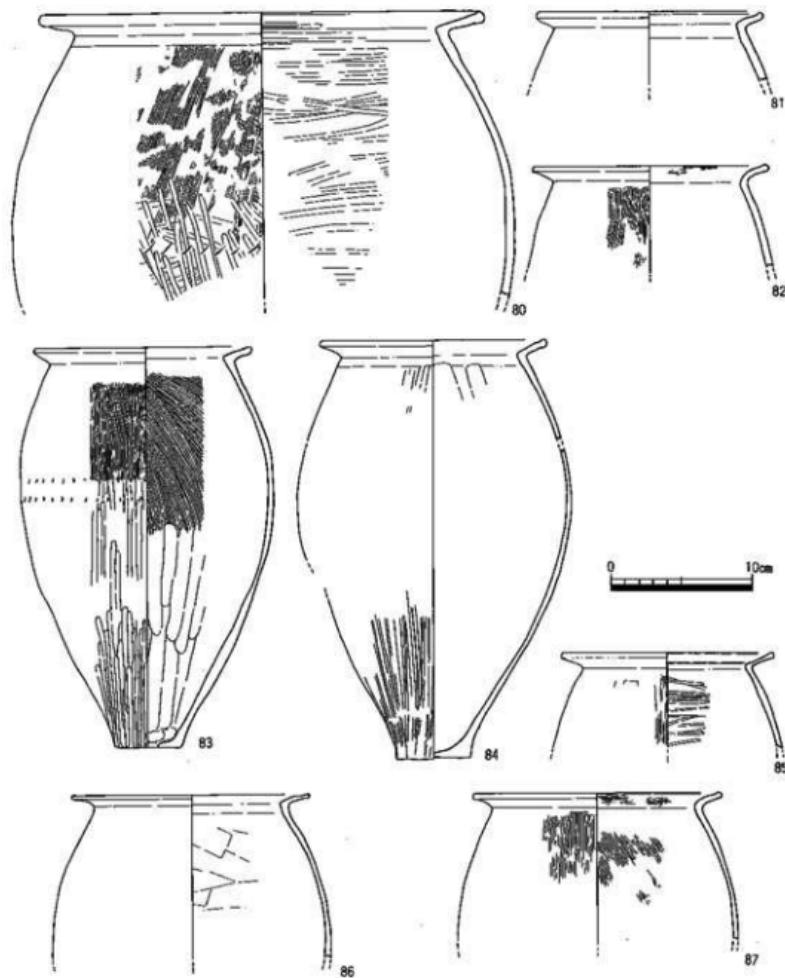
第34図 SD 059/100断面図 (1/40)

S P 0341/0343E (第32図)

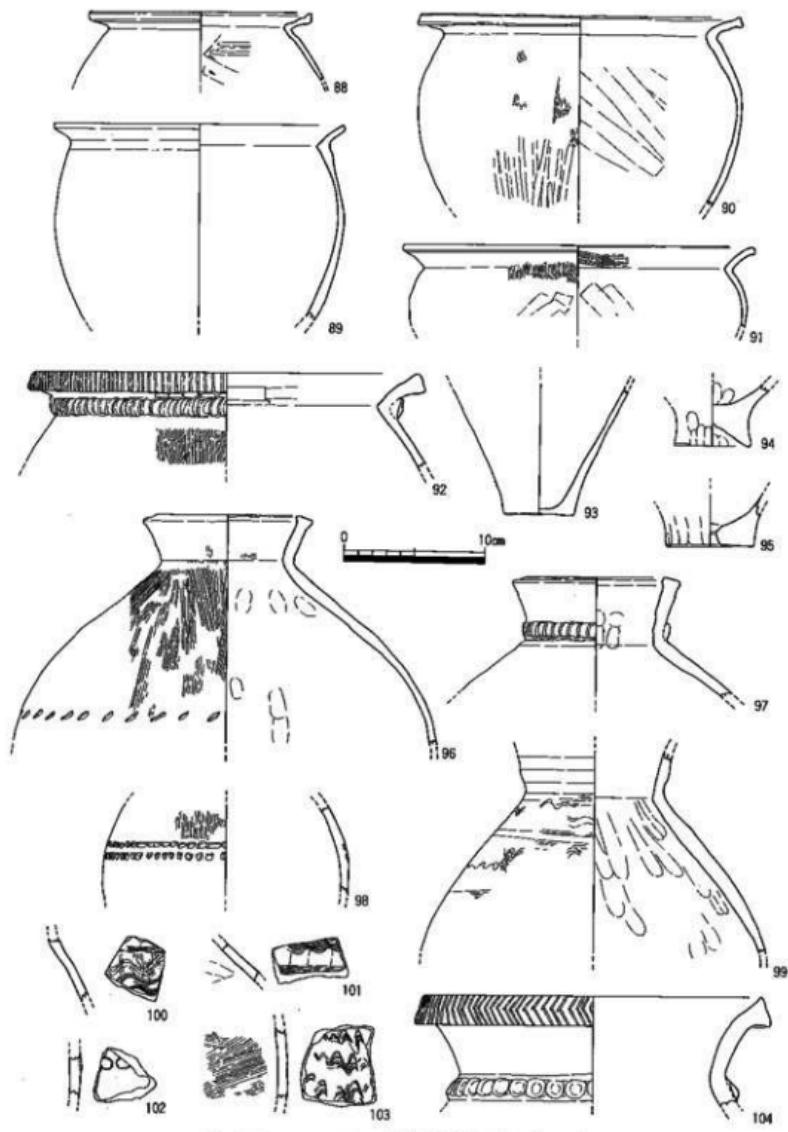
D23に位置する。当初ピットが2つ接しているものとして調査したが、結果的に1つの土坑であると判断した。土器やサヌカイト剥片が出土した。77から、Ⅲ期後半の遺構と考える。

S P 0876A (第33図、図版7)

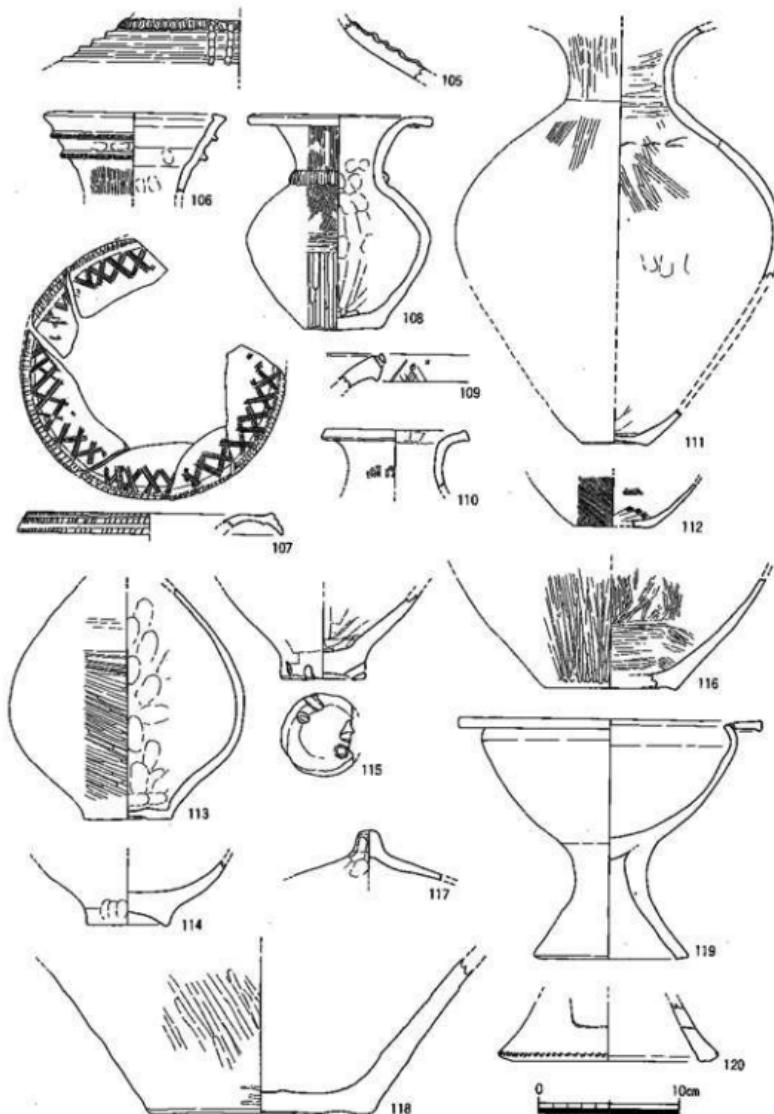
E22に位置する。ピットと考え調査したところ、中から土器1個体が横になった状態で出土したことから、土坑と判断した。器種は壺で口縁が水平よりやや下に向いている。胴の地上寄りは残っていない。割れたため廃棄されたのか、何らかの理由で完形のまま埋められたのかわからない。土器上半はハケ目の上から櫛描き文や列点文が描かれ、下半は文様がない分ヘラ磨きが施されている。出土土器はⅢ期前半のものと考える。



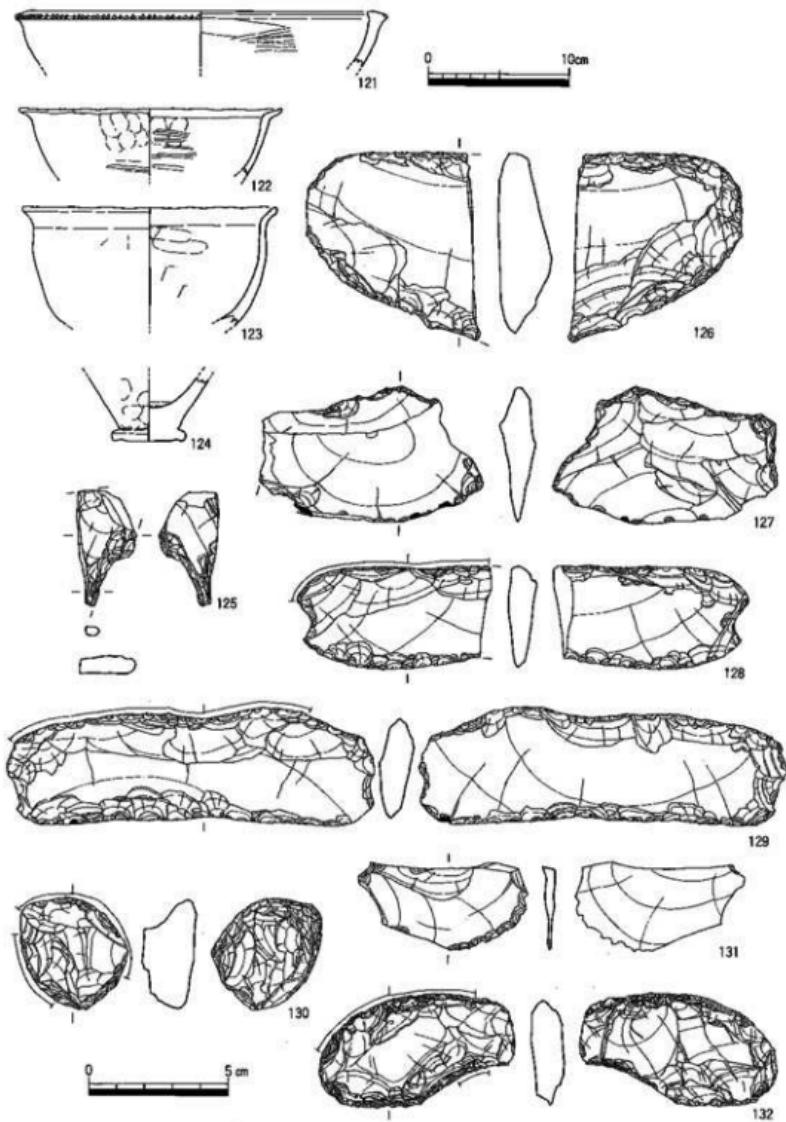
第35図 S D 059/100出土遺物実測図(1) (1 / 4)



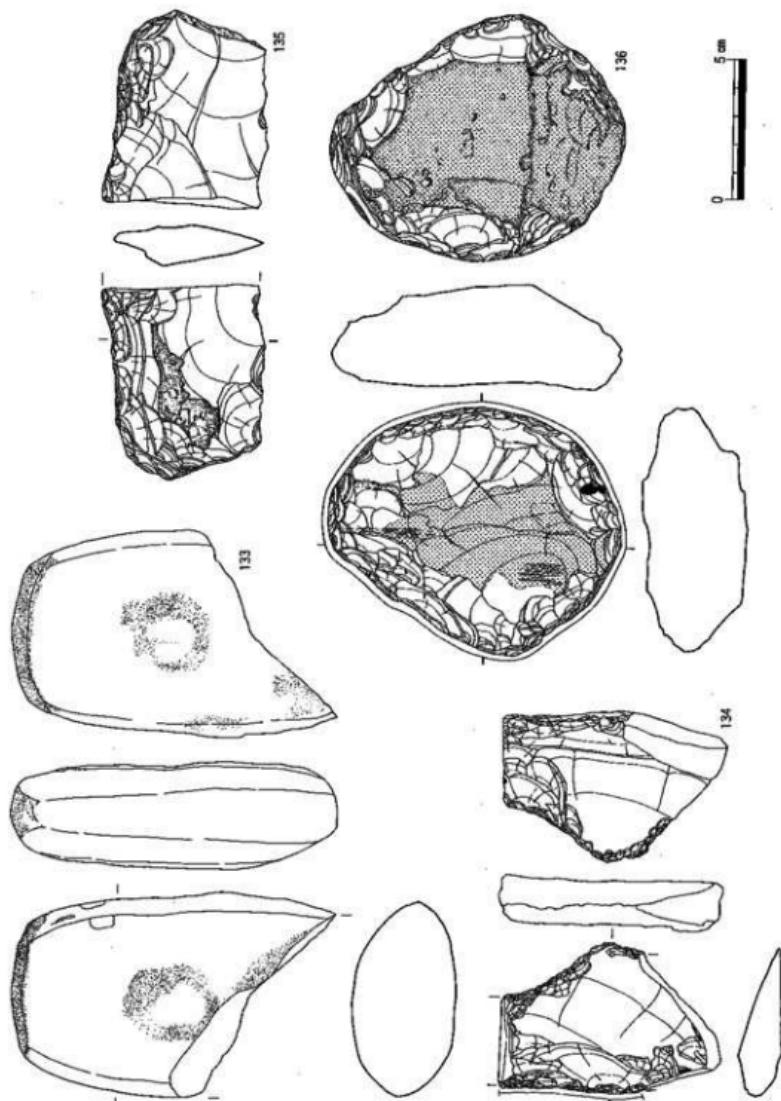
第36図 S D 059/100出土遺物実測図(2) (1 / 4)



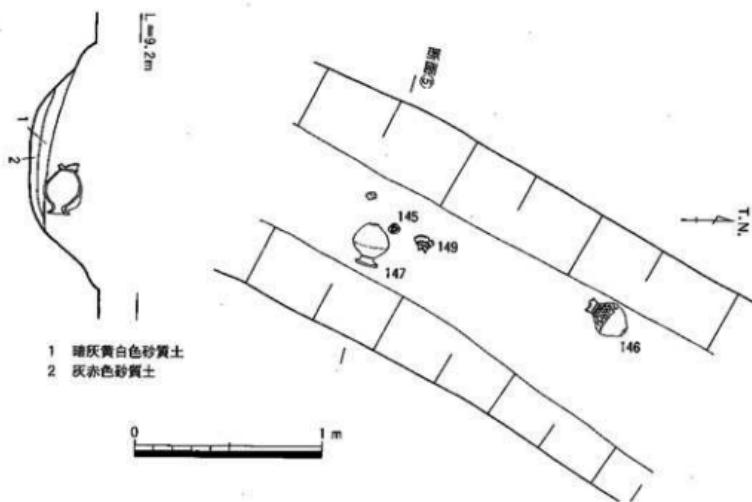
第37図 S D 059/100出土遺物実測図(3) (1 / 4)



第38図 SD 059/100出土遺物実測図(4) (1/4, 1/2)



第39図 SD 059/100出土遺物実測図(5) (1 / 2)



第40図 SD 062遺物出土状況平・断面図（1/30）

### 溝状遺構

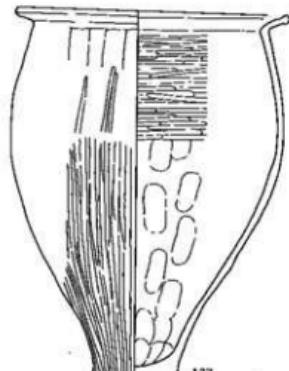
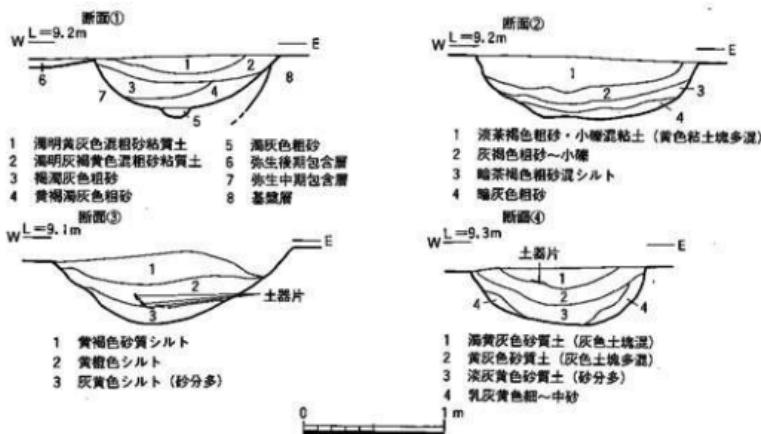
#### S D 059/100 (第34~39図)

調査域中央やや北寄りを東西に横断する溝である。南に半円形を描く。調査域土層図(1)・(3)・(8)の項で述べたように、調査域の東西両側はこの時期の微高地の落ち込みが見られる始める地点である。S D 059/100はこれを利用して、微高地の北側を南に対して区切ることを目的として掘削されたものと考えられる。ただし東側は大きさや時期が似ている改修区 S D 21につながる可能性があり、もしそうであるならより大きな視野からこの溝の目的を検討する必要があろう。

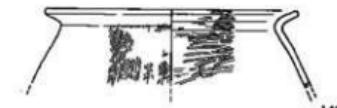
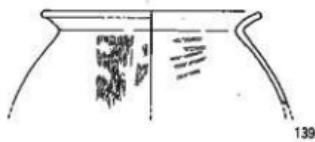
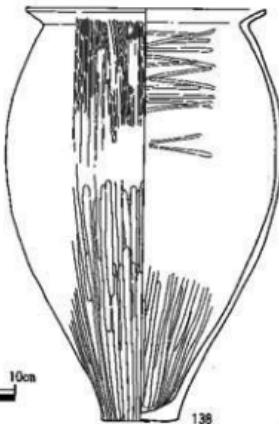
S D 059/100は平均幅1.5m、深さ0.5mで、溝底の標高はほぼ一定で8.8mである。埋土は上下あまり違ひがなく、一定の条件下で埋没していくものと考えられる。多量の土器が出土し、西半分ではサヌカイト剝片2080gが出土した。

甕口縁は径16cm前後のものを中心として、80・92のような径30cm前後の大型のものが少

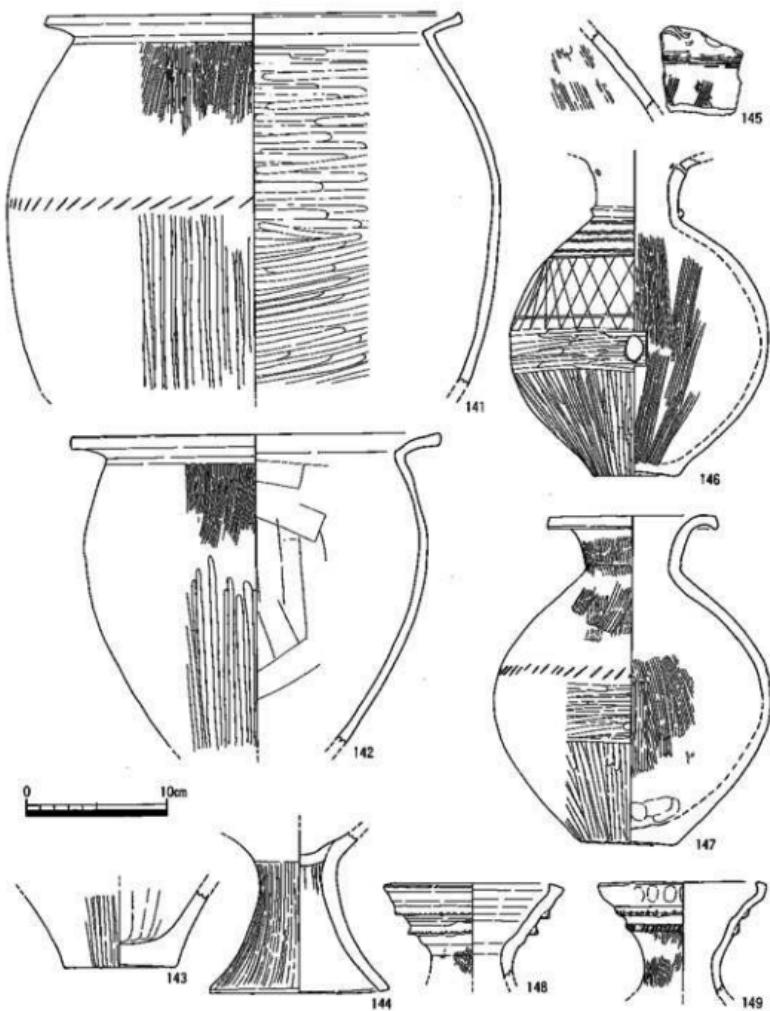
49頁(1) 川津一ノ又遺跡の当該期の土器様相については、片桐賀浩1997「第4節まとめ 2弥生時代中期中葉の上器について」『中小河川大東川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを参照されたい。



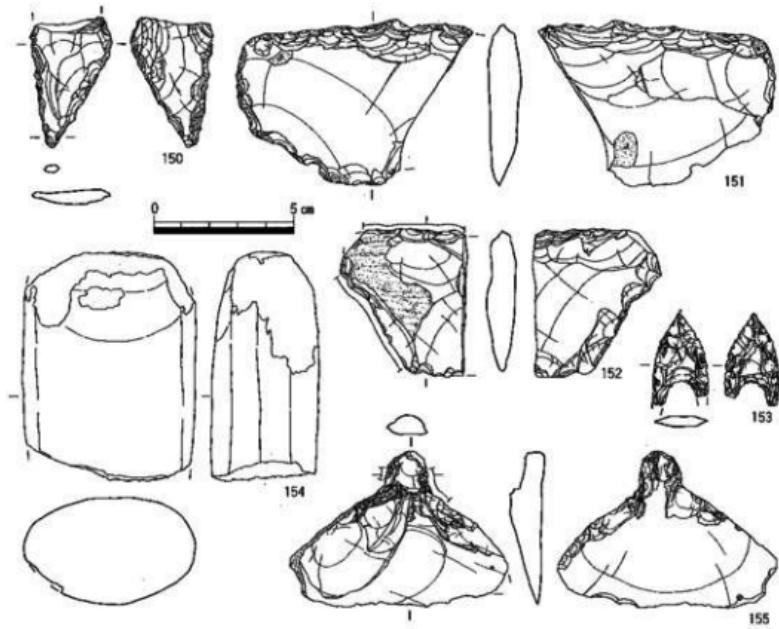
0 10cm



第41図 S D 062断面図 (1/40), 出土遺物実測図(1) (1/4)



第42図 SD 062出土遺物実測図(2) (1 / 4)



第43図 SD 062出土遺物実測図(3) (1/2)

量存在するようである<sup>111</sup>。また、90・91の胴上半が張るものは大型の壺の中でのみ認められる。96は胴中位にヘラ圧痕を巡らす。83・95は焼成後に底部穿孔し甌としている。94は上げ底で、蓋の可能性が高い。102は円形の小粘土板を貼り付けている。105は刻み目突帶のみ貼りつけで、その下の4条の突帶は器壁を崖ませることによって、帯状に浮き上がらせている。縱方向の粘土紐の貼りつけは口縁に施される例が多い。107は口縁に凹線が入る。109は三角角が連続する。111は最下層で出土した。113は胴下半も横方向にヘラ磨きしている。115は底部の穿孔の位置が向かい合わざずれている。119の杯底は恐らく円盤充填である。120は大きな方形の透かしを脚部に入れている。122・123は低い脚がつくのであろうか。127は明瞭な抉りが両端にない。130は全面調整している。用途ははっきりしないが、周縁部に敲打痕が残ることから、小型の楔形石器としてみた。136は敲打が全面に及び握り心地から叩き石ともとれるが、側面に擦痕が認められることから楔形石器としておきたい。

出土土器から、SD059/100はⅢ期前半の遺構と考えるが、一部口縁に凹線が入るⅢ期後半のものも含むことから、埋没期間がその時期まで及んだ可能性を考慮しておきたい。

#### SD062（第40~43図、図版9）

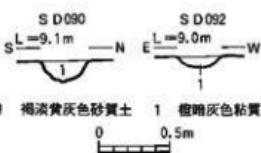
C24/25に位置する。東に弧状にふくらむ。北側はSD059/100同様微高地の落ち込みに達することによって消えている。南側は調査域外にのびるもの、10m離れたⅢ区調査域では認められなかった。溝底の標高はほぼ一定で、埋土は大きく2層に分かれ、上層内には基盤層の小土塊が混じっている。下層からは残りのよい土器が出土した。また、サヌカイト剣片が2060g出土し、その殆どが最北端部に集中している。以上から、この溝では石器製作により生じた屑や不要の土器を捨てることがあったことがわかる。また、ある程度埋没した段階で、意図的に埋めてしまったらしい。溝掘削の目的は不明といわざるを得ない。わりとしっかりした溝であるだけに、何らかの目的があったと思われるが、溝の向く西側は低地であることから区画溝とは考えにくい。断面①によると同時期の包含層が堆積する上に掘られており、調査域土層図(3)・(4)・(8)と考えあわせると、低地に多少土が堆積した段階で溝を微高地の縁に沿って走らせているということになる。北側に水田が検出されれば、それとの関係でとらえることもできようが、現時点ではここで追求を留めておく。

SD062からはコンテナ2箱分の遺物が出土した。出土土器・石器を19点掲載している。壺はヘラ磨きを内面上半と外面下半に施すといった基本形が見られる。146は頸部突帯の下に直線と波状の櫛書き文があり、その下に上下の沈線に挟まれて斜格子の櫛書き文を描いている。胴中位の穿孔は意図的なものかどうか明らかでない。150は先端が欠けている。151は両面に礫面が存在することから、薄い小さな板から成形したことがわかる。154は石斧の基部である。155は風化が著しい。

出土土器から、SD062はⅢ期前半の遺構と考える。

#### SD090（第44図）

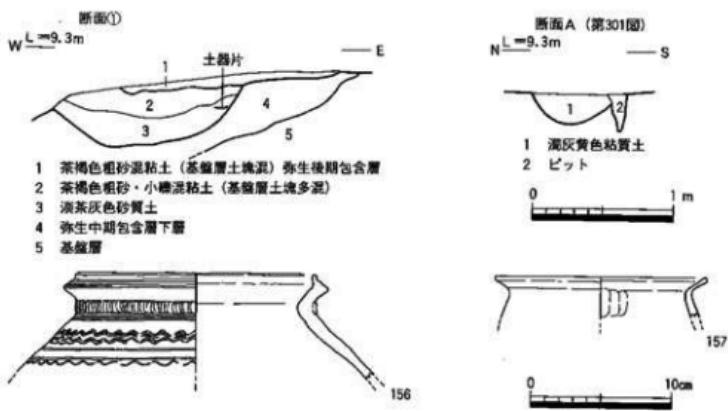
F25に位置する。小さな東西方向の溝である。磨滅した弥生時代中期の土器片が若干出土した。SD092との先後関係は明らかにできなかった。



#### SD092（第44図）

F25に位置する。浅い南北方向の溝である。磨滅し

第44図 SD090, SD092断面図(1/40) た弥生時代中期の土器片が若干出土した。



第45図 SD 098断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

#### S D 098 (第45図)

調査域中央に位置する。ほぼ直線をなして北北西—南南東方向に掘削されている。SD 080/110と交錯した地点から東数mはSD 112と重なり合い、その下層のようになっている。西端は他の溝同様微高地の落ち込みにつながる。東端は途切れているが、土層Ⅲ・Ⅳでみられる南北方向の浅い落ち込みの西端がFグリッド線より西にまで及んでいることから、これとつながっていた可能性がある。この落ち込みの東でSD 098の延長方向には、上述のSD 090があり、関連があるものと思われる。

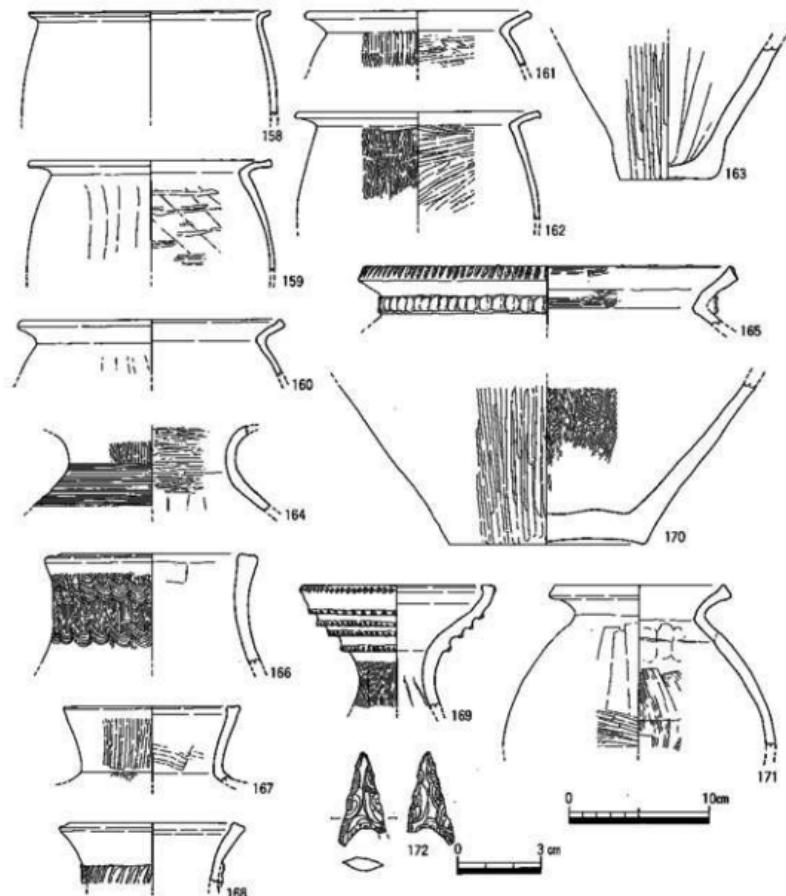
SD 098は西端で幅1.4m、溝底標高8.6m、東端で幅0.6m、溝底標高8.8mと西がやや大きく深い。西端部では埋土上半に基盤層の土塊が多く含まれ、意図的に埋めた可能性がある。またSD 062同様、近い時期の包含層が堆積した後に掘削している。

出土した遺物は、土器が少量とサヌカイト剝片が1300gであった。156は口縁端部に凹線が巡る。Ⅲ期後半のものである。

#### 川跡

##### S R 01 (第46図、図版9)

調査域南端部に位置する。調査域上層図(5)～(7)で確認したが、平面的には確認できていない。また調査域土層図(3)でも確認できていない。よって、厳密な流路を示すことはできないが、2つの土層図位置から、南東—北西方向を向くと判断できる。SR 01は調査域土層



第46図 SR01出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

図(3)の項で述べたように、F区北西部で調査域内に川岸部を覗かせる。SR01上面の標高は約8.9mで、幅は40m以上としかわからない。SR01の流れた方向は、川底を確認できなかったこともあり、判断できない。しかし、地形から見て南から北へ流れるのが自然だと思える。

土層はシルトや微細砂が中心で、粗砂も多く含むラミナ状の堆積状況を示す。図版9で

示したように、下部には径40cm以上もあるような大木が含まれている。また焼け木も多く含まれ、泥炭層も一部存在した。

土層図を取る際のトレンチから、コンテナ1箱分の遺物を採取した。158は口縁の幅が狭い。Ⅱ期後半のものであろう。159・162は外面に、161は内外面とも煤が付着している。164の肩部の文様は旗状文風に板小口で横にならハケ目を入れ、時々板を押しつけ綴の刻みを入れることをくり返して描かれている。166はハケ目後に櫛描き波状文を付けている。

これらの土器は表面の磨滅がなく、上流から流れ下ったのでなく、付近から落ち込んだものと見られる。ちなみにすぐ南で調査された川津東山田遺跡では、同時期の遺構・遺物は見つかっていない<sup>11)</sup>。出土土器はⅢ期前半のものがほとんどで、それ以外の時期のものを含まない。

以上の状況から、Ⅲ期前半のあるとき、豪雨等によって、大木を流し去るような大水が発生し、低地部が浸食され、S R01となり、短期間で埋没したことが推測される。

## 2 弥生時代後期

この時期の遺構は調査域の北西部を中心にして、全域に展開する。堅穴住居跡群はさらにⅢ区へと統いていく。

### 堅穴住居跡

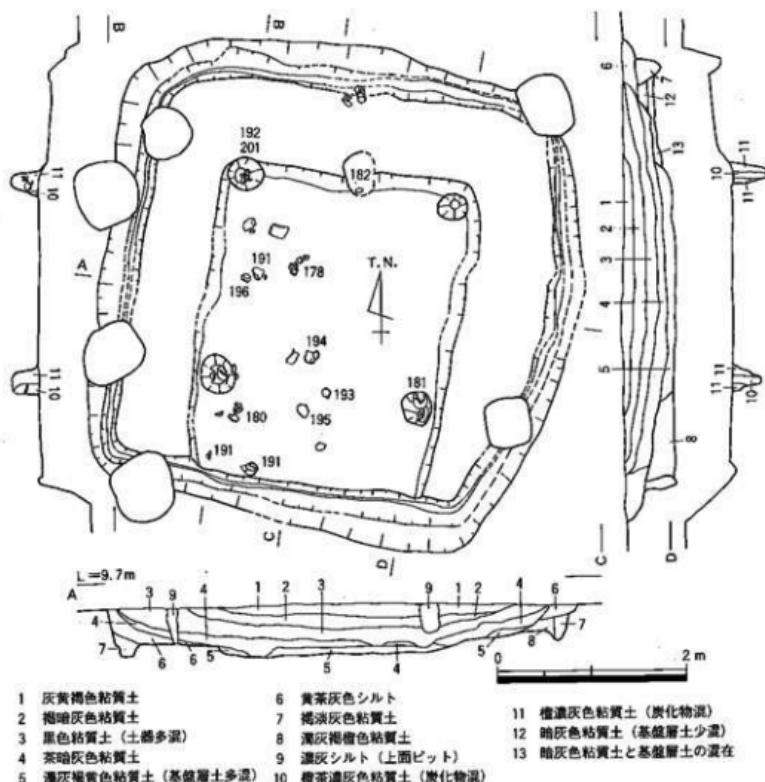
#### S H06 (第47~49図)

C/D23に位置する。一辺約5mの隅丸方形の堅穴住居跡である。S H13・S D030より新しい。南を除く3辺にベッド状遺構が巡り、さらに4辺すべてに壁溝が設けられている。ベッド状遺構は土を盛ることなく、堅穴住居中央を1段深くすることにより形成している。

[1] 香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团高松建設局1991『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』

香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团高松建設局1992『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成3年度』

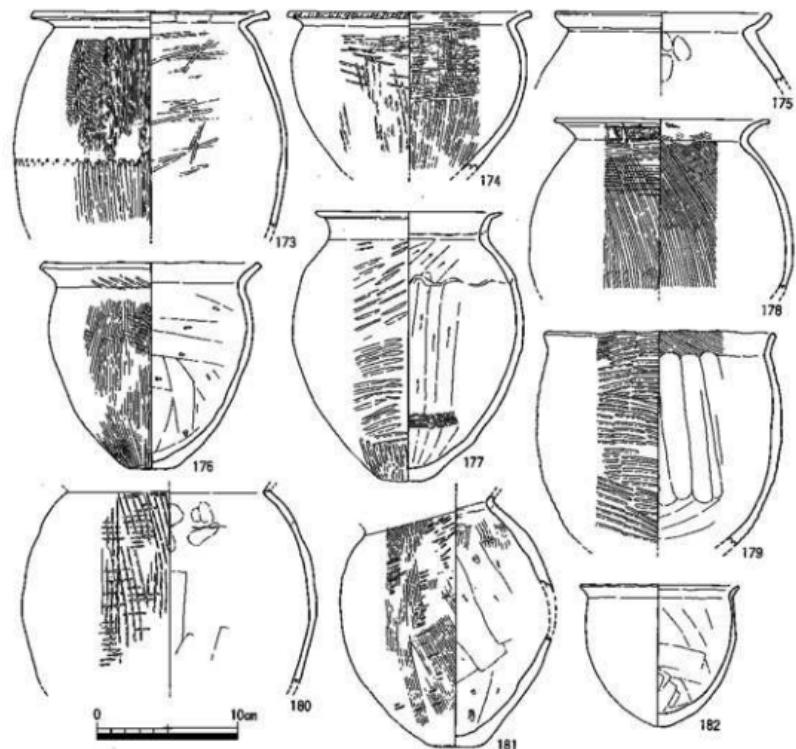
財團法人香川県埋蔵文化財調査センター1991『財團法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度』  
財團法人香川県埋蔵文化財調査センター1992『財團法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成3年度』



第47図 SH06平・断面図（1/60）

その段差はわずかである。中心部には明瞭な炉は存在しない。埋土は中位に黒色粘質土が堆積しており、土器を多く含む。埋没の過程で土器片などのゴミ捨て場に使われたのであろう。柱穴は4個で、西側の2個では柱が立っていた部分に土器片が入っていた。SH06を立ち退くに際し、主柱を抜き、その抜け跡に入れたと考えるが、単に捨てただけなのか祭祀的な行為なのか明らかでない。この他床上で多くの土器片を検出しており、これらも立ち退きに際し捨てられたと見られる。

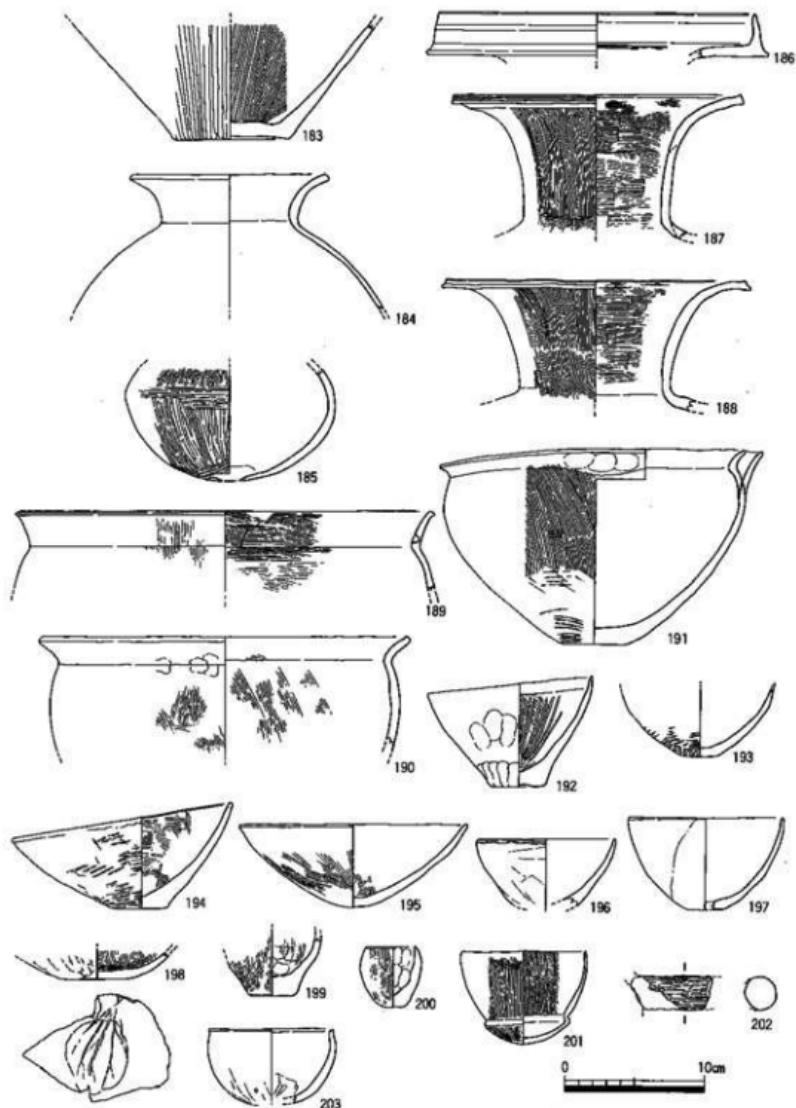
コンテナ約7箱の土器片が出土した。187・189・197・203は3層から、192・201は北西主柱穴から、175～178・180～182・184・193～196・200・202は床上で出土した。173・174はⅢ期の土器である。180外面のハケ目は他と異なり1単位に含まれる筋が少なくかつ緩



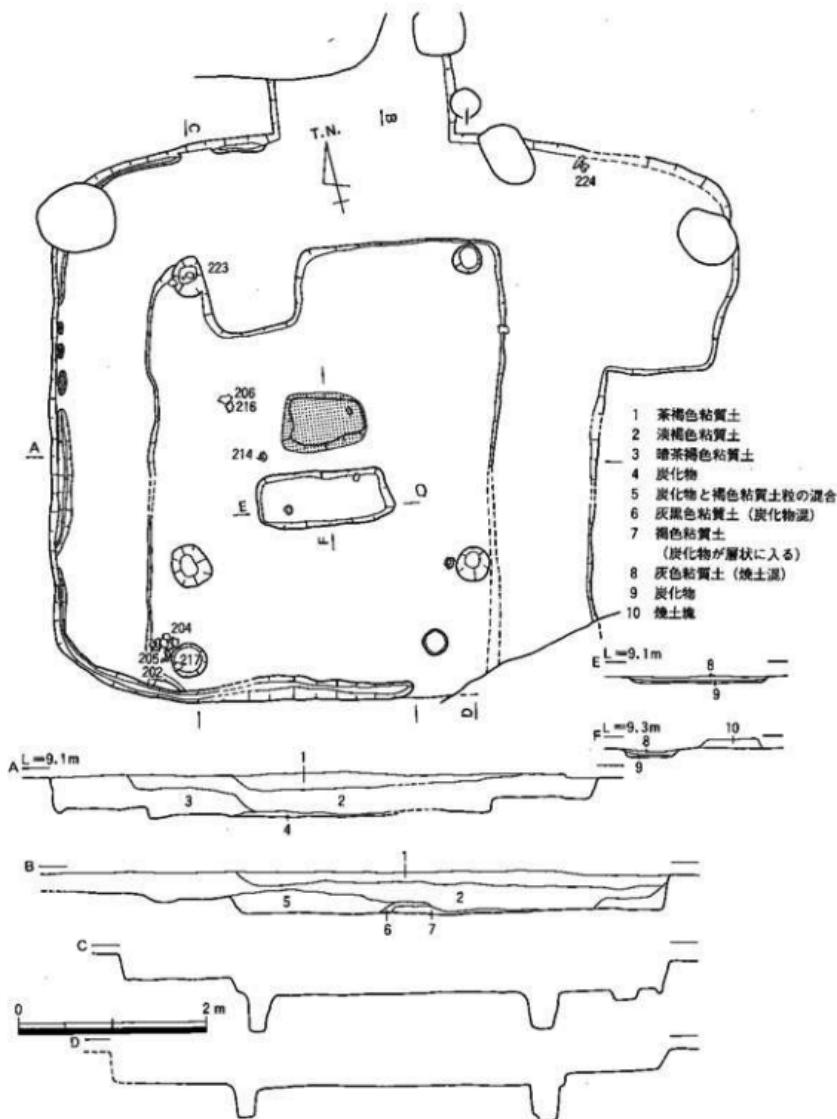
第48図 SH06出土遺物実測図(1) (1/4)

やかな凹凸をなしている。183はⅢ期の土器である。185内面底部は非常に薄く、焼成前穿孔の可能性がある。187・188は同一個体であろう。189は口縁内面に径5mmの未穿孔の穴が存在する。191は内面口縁直下まで朱が付着している。朱の付着した土器は、小片のため実測できなかったが、鉢が3点出土している。198外底部の葉痕はオオバコと思われる。202は丁寧に磨いている。図面左端の面がなでられていることから、この棒を本体となるものの穴に差しこみ、なでられている面は本体の内面の一部になったと見られる。

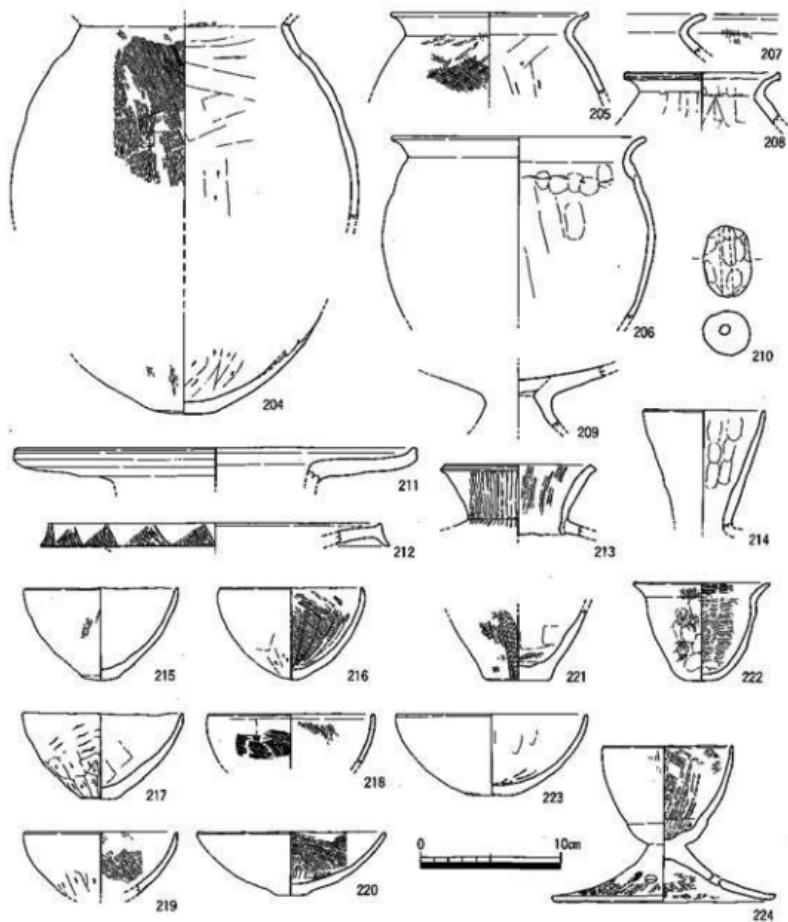
床上出土の土器から、SH06は終末期-2の時期と考えるが、184の口縁の開きはやや新しい様相を帶びているかもしれない。



第49図 SH 06出土遺物実測図(2) (1 / 4)



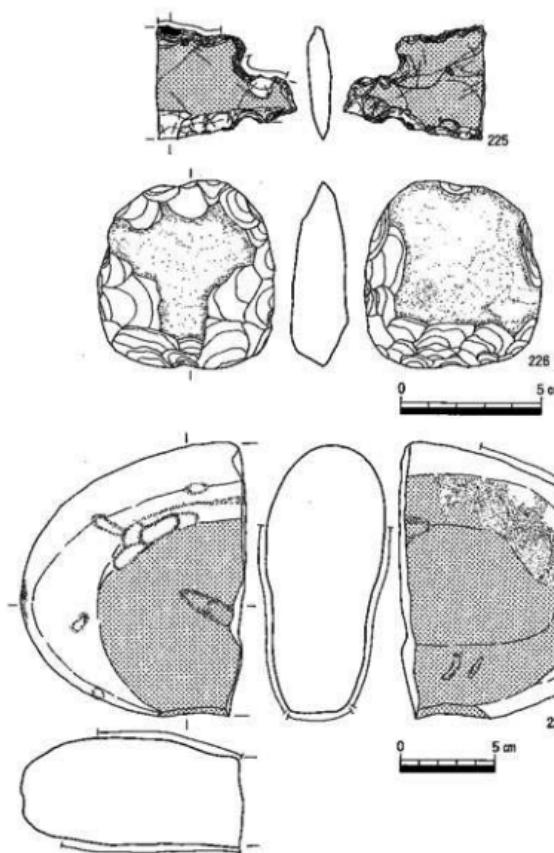
第50図 SH07平・断面図 (1/60)



第51図 SH07出土遺物実測図(1) (1/4)

**SH07 (第50~52図)**

C/D23に位置する。一边約6mの母屋に、張り出し部が東と北に付く。SD030・SH22より新しく、SH06・18より古い。ベッド状遺構・壁溝の設計はSH06と同じであるが、北側のベッド状遺構は一部中心に突き出す。埋土には上下あまり明瞭な差はない。主柱穴は4個で、南辺沿いにある2個は浅い。中心部に長方形の炉があり、その北にかき出した



第52図 SH07出土遺物実測図(2) (1/2, 1/3)

灰が10cmの厚さで堆積していた(第50図スクリントーン部分)。中心部の床上で土器片が出土し、その他計コンテナ約6箱の土器が出士した。

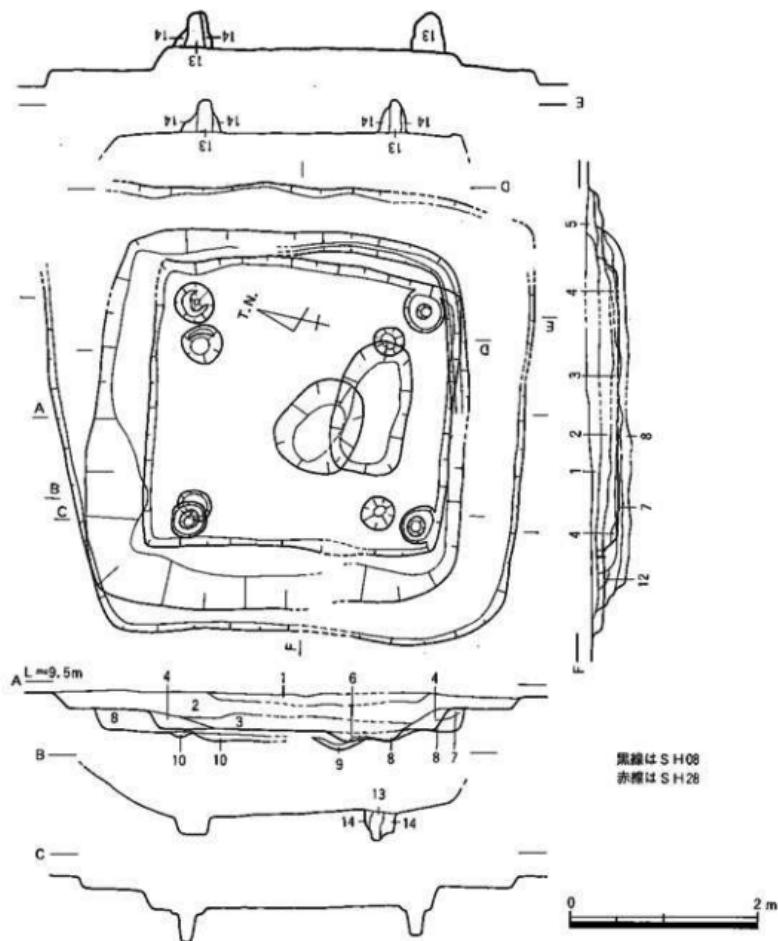
204~206・  
213・214・  
217・222~224  
が床上で出土し、207が炉内に含まれていた。223は外面に押圧痕が残されている。225は片面の磨滅が著しい。227は

両面とも使用により大きく磨滅している。また側面にも2ヶ所研ぎ面が見られる。

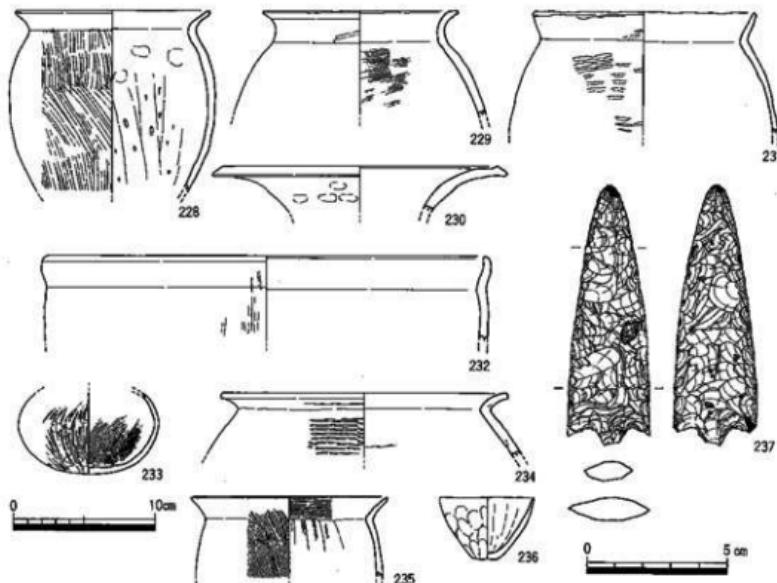
床上出土の土器から、SH07は終末期-2の時期と考えるが、213はやや新しい様相を呈しているようである。

#### SH08・28 (第53・54図、図版11・12)

C23/24に位置する。両者は完全に重なり合っており、柱穴もSH08がSH28の外にきれいに配置されることから、SH08がSH28を広げて建て替えたものと考える。SH22より新しい。SK08より古いように平面図では描かれるが、SK08の項で述べたようにSH



第53図 SH08, SH28平・断面図 (1/60)

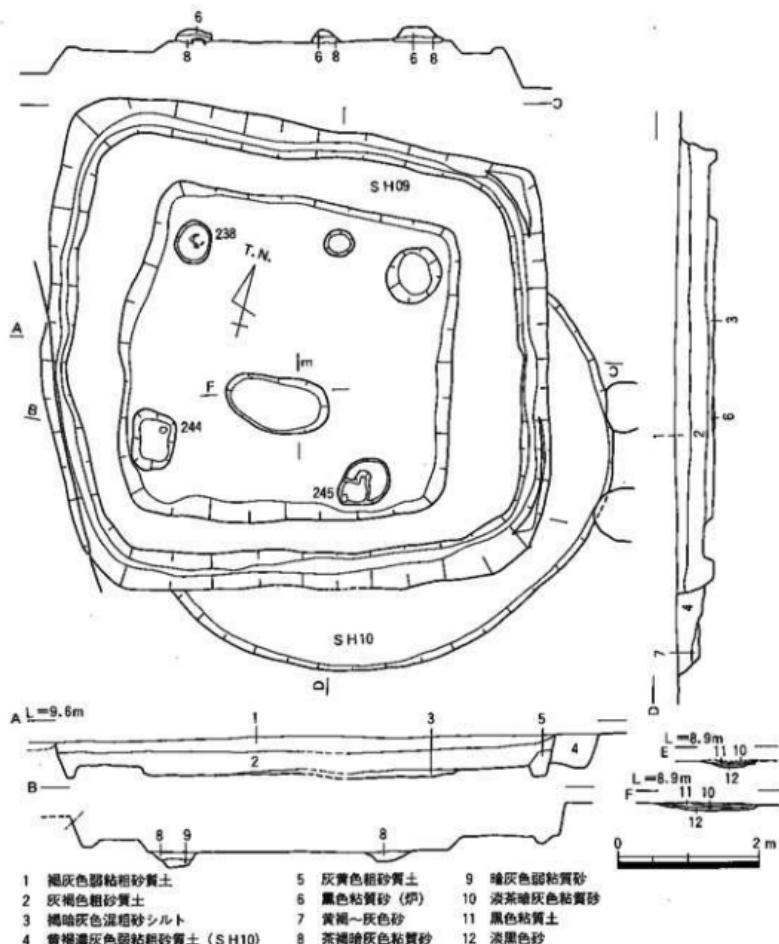


第54図 S H08出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

08が新しいと考える。S H28はベッド状遺構を持たない素掘りの形状をしており、楕円形の炉が中央に配される。土層観察から、建て替えの過程を復元すると、まず広げようとする部分を掘り下げる。この際この部分はベッド状遺構とするため、深くはしない。次にS H28であった部分に小礫混じりの粘質土を敷く。さらにその上に拡張用に掘り上げた土を敷く。この土を敷く過程で、ベッド状遺構も作り上げてしまい、下部構造が完成する。S H08は北東隅のみ広い方形になっている。炉は南寄りに作られる。S H08の埋土は3層に分かれる。その内容から見て、立ち退きに際し不要物を燃やし、その上から周囲の土で埋め立て、その後は浅い窪地として放置されたらしい。燃えたのが失火によるものでなかつた証拠に、床面からの土器の出土はなかった。

土器の出土は少なかった。234～236がS H28出土で、他はS H08のものである。232は瓶と考えた。233は小型直口壺であろう。237は丁寧な細部調整から見て縄文時代のものの紛れ込みと思われる。

S H08の時期は、これが意図的に埋め戻されたものであることからすれば、2・3層に

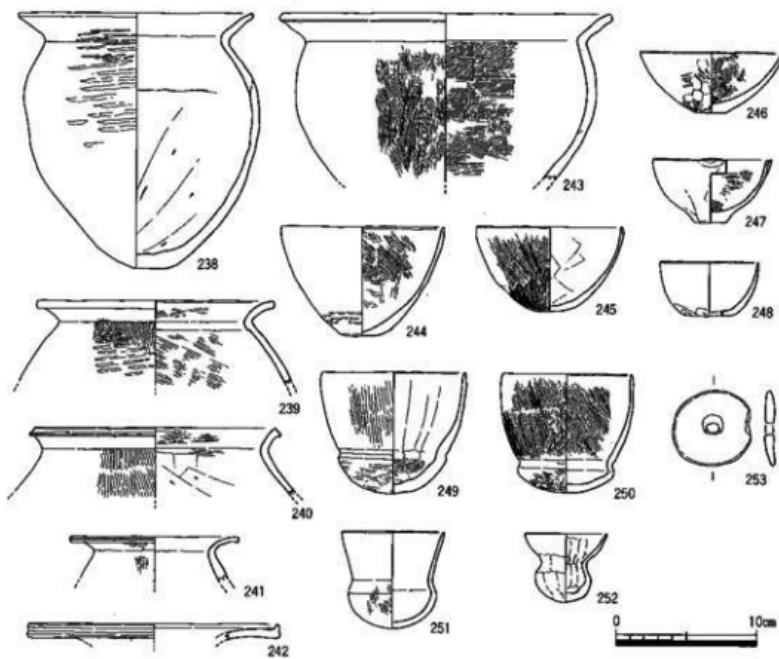


第55図 SH09, SH10平・断面図 (1/80)

含まれた上器が示していることになる。228・229・231～233からみて、終末期－2頃と考えておく。

S H09・10 (第55・56図、図版10・13)

C23に位置する。SH09がSH10より新しい。SH09は一辺約7mで、方形の竪穴住居



第56図 S H09出土遺物実測図（1/4）

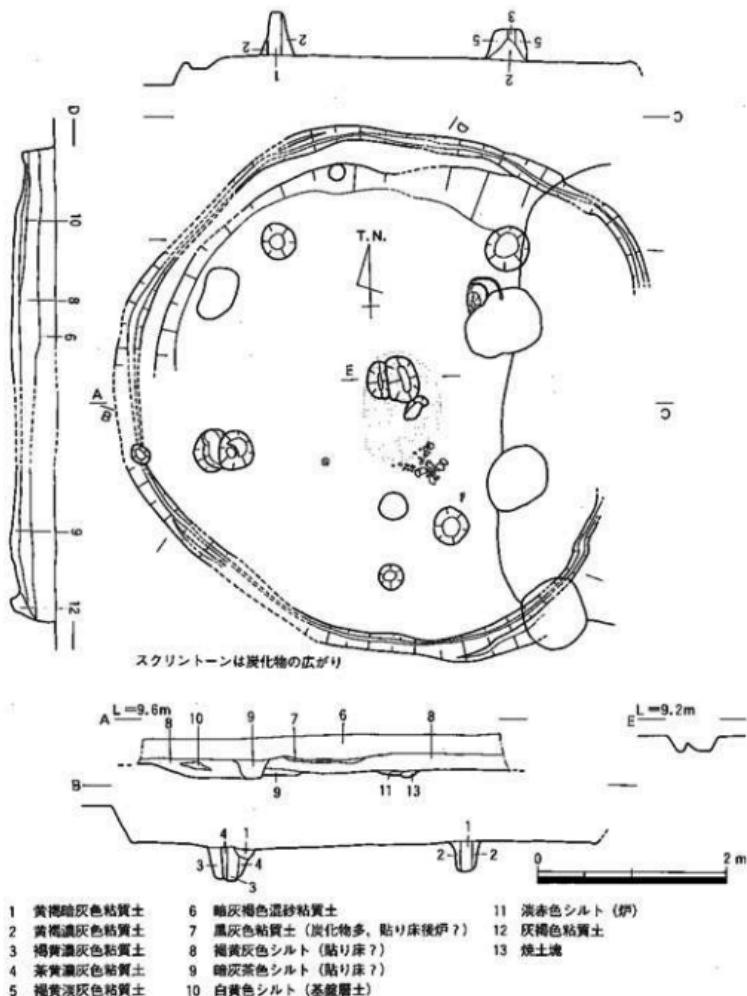
跡としては大型のものである。ベッド状遺構・柱穴・炉の設計はS H08と同じである。大型故か壁溝も大きい。ベッド状遺構の作り方も他の堅穴住居跡と共通する。埋土は上下あまり差がない。柱穴は浅く、抜き跡に土器片を入れていた。S H10も約7mの円形の堅穴住居跡であるが、その他の様相は明らかでない。ベッド状遺構は持たないようである。

S H09からコンテナ2箱の土器が出土した。251が北東部のベッド状遺構の上で、242が炉付近で、238が南東主柱穴、244が南西主柱穴、245が北西主柱穴から出土した。247は小さいながら注ぎ口が付く。248は外底部のみ削っている。

出土土器からS H09は終末期-1頃のものであると考える。

#### S H13（第57・58図）

C 23に位置する。一辺約5.5mの円形の堅穴住居跡である。S H06より古い。幅の狭い内側に傾斜するベッド状遺構が巡る。柱穴は4あるいは5個である。炉は中央部に円形の

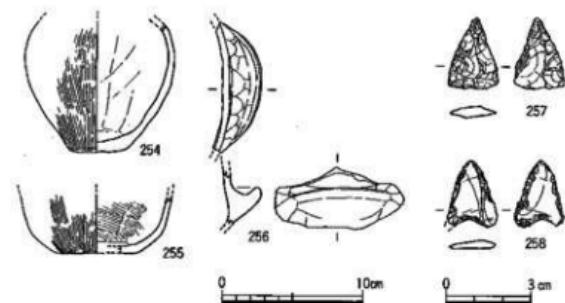


第57図 SH13平・断面図 (1/60)

ものがあり、その南に向かって炭化物が散らばる。そのさらに南側で土器片が集中して出土した。上層観察によると、8層は基盤層の小塊を含むことから、意図的に埋めたと思われる。これはSH08のような埋め戻しの可能性もあるが、炉ともとれる炭化物を多く含む

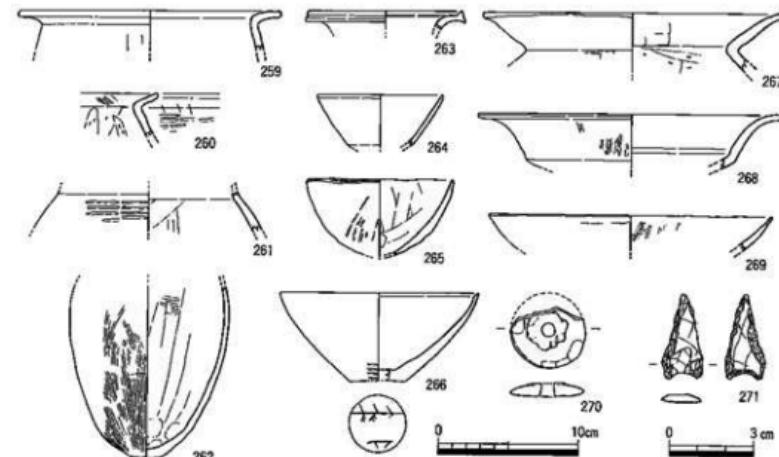
7層やピットともみれる9層もあることから8層が貼り床である可能性も残されている。ただし8層の上面精査によつては、遺構は検出し得なかつた。

S H13からはコンテナ2箱の土器が出土した。254はS P 3から出土した。256は県内では上天神遺跡などで出土している「把手付広片口皿」である。朱との関連が指摘されている<sup>11)</sup>ため分析を依頼したが、第3章第2節で述べるように部位が原因なのか表面観察および蛍光X線分析によつても顔料は検出できなかつた。



第58図 S H13出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

(1) 大久保徹也1995「上天神遺跡出土赤色顔料付着資料について」[高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 上天神遺跡] 香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局



第59図 S H18出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

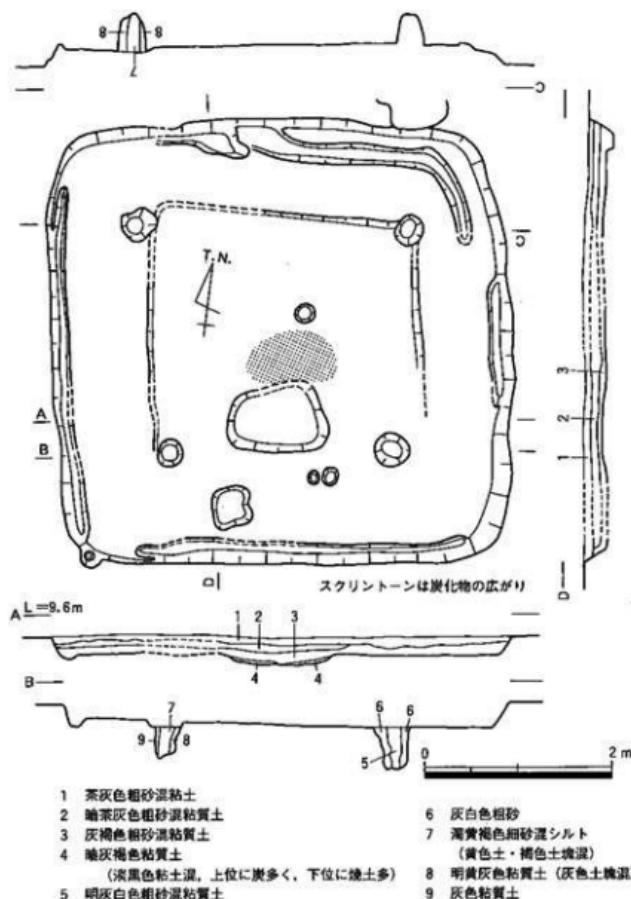
出土土器は時期を決定できるものに乏しいが、後期前半と考えておく。

### S H18

(第59・60図、図版11)

D 23/24に位置する。一辺約5mの方形の竪穴住居跡である。SH07・SD030より新しい。ベッド状遺構は3辺で検出したが、段差が5cmほどでわずかなため、南辺は検出できなかっただけなのか不明である。

南寄りに長楕円形の炉があり、その北に炭化物の散布が認めら

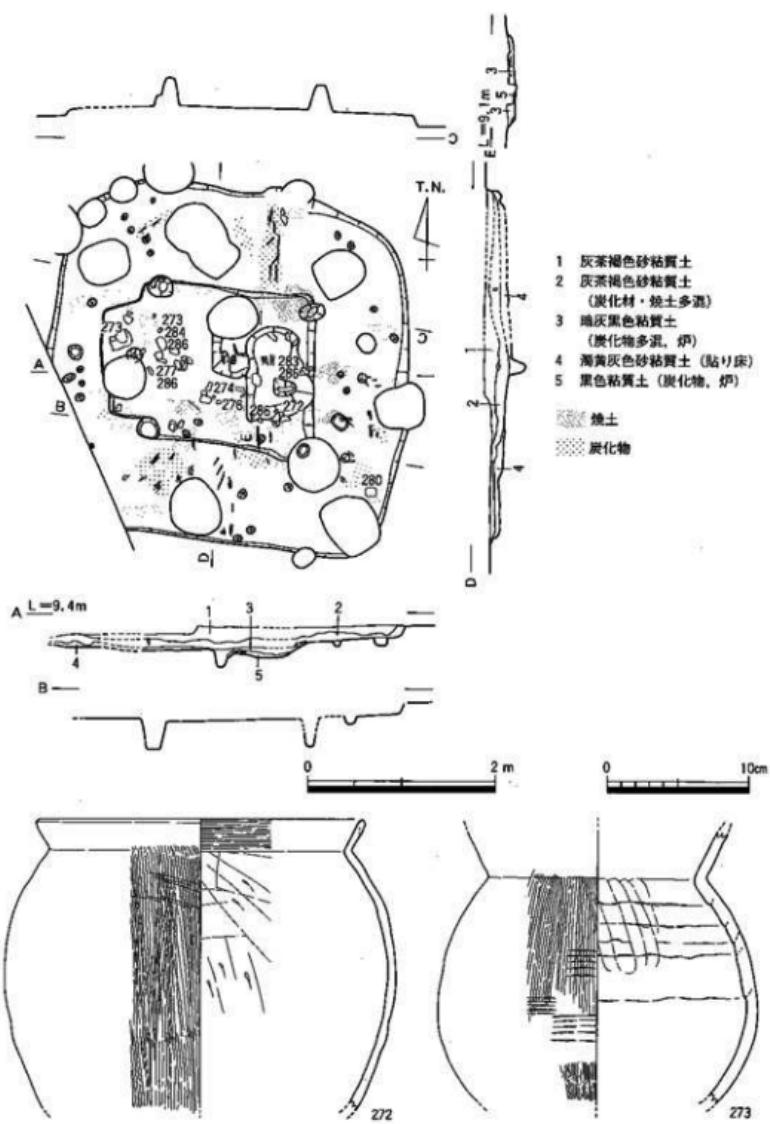


第60図 SH18平・断面図 (1/60)

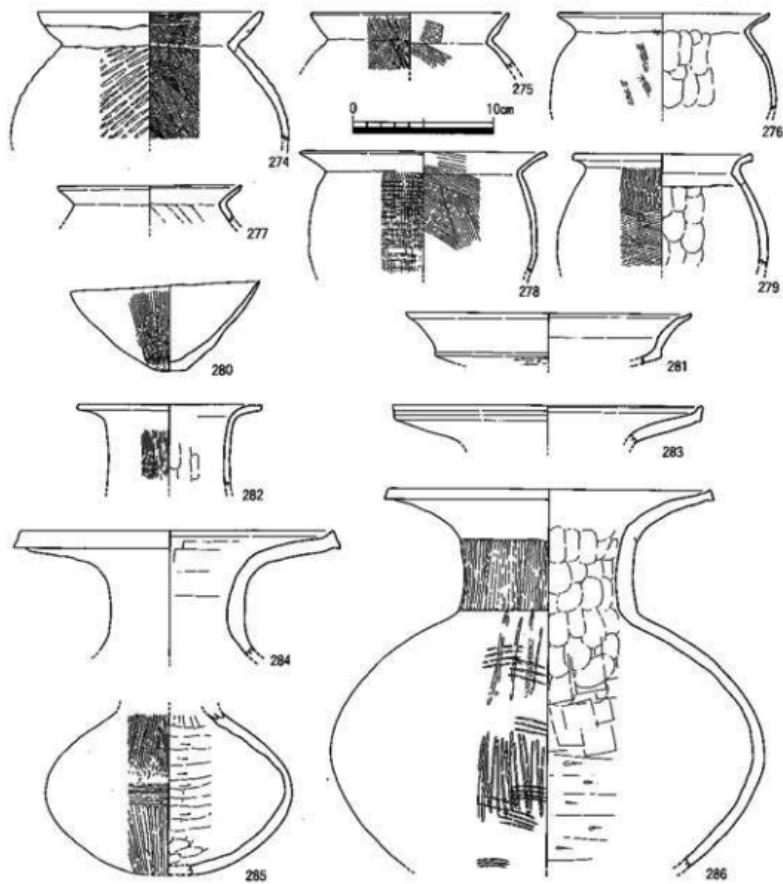
れた。土層観察によると、1～3層とも基盤層の小塊が含まれることから、この竪穴住居跡も意図的な埋め戻しが行われたと見られる。

コンテナ約3箱の土器が出土した。259・263はⅢ期の土器の粉れ込みであろう。262・264は床上で出土した。266は外底に植物の葉の圧痕が残る。

S H18の時期は、これが意図的に埋め戻されたものであることからすれば、1～3層に



第61図 SH20平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図(1) (1/4)

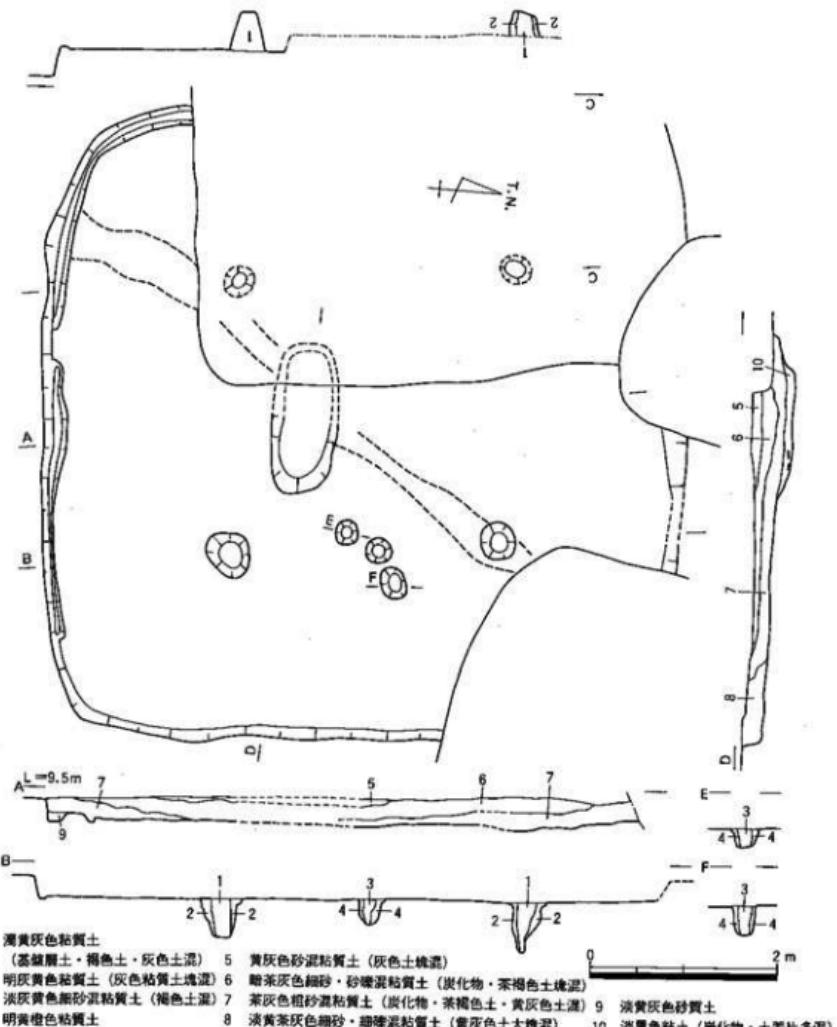


第62図 S H20出土遺物実測図(2) (1/4)

含まれた土器が示していることになる。終末期－2頃と考えておくが、267口縁は更に新しい可能性もある。

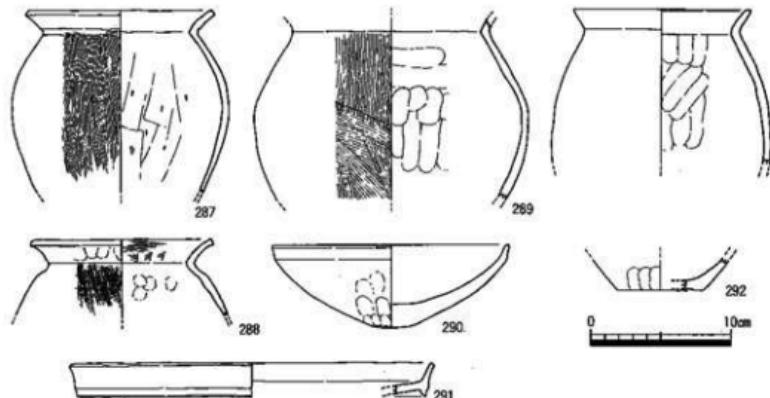
#### S H20 (第61・62図、図版13・14)

C 25に位置する。一辺約3.8mの小型の竪穴住居跡である。同時期の他の住居より1軒だけ離れている。ベッド状遺構は4辺に巡るが、西辺のみ幅が狭い。このベッド状遺構は貼り床で、当初ごく浅いすり鉢状の掘り形を作り、掘りあげた土を用いて改めて成形してい



第63図 S H22平・断面図 (1 / 60)

る。貼り床除去前と除去後の柱穴の検出状況は、除去後の方が径が大きいことから、掘り形を作った後、柱穴を掘り、柱を立てた後、隙間を埋めながら、床を貼ったことがわかる。隙溝は確認できなかった。炉は東寄りに梢円形のものが作られ、その中の東寄りにさらに



第64図 SH22出土遺物実測図 (1/4)

小さい深さ6cmのピットを掘り下げている。また炉から西に向けて深さ10cmで鉤形の付帯施設を設けている。この末端は後世のピットに壊され明らかでない。

SH20では多量の焼土・炭化材が検出され、焼失家屋であることが知れる。その中に混じって土器片も多く出土した。焼土と炭化材は同じ広がりを見せるが、両者の上下関係は明らかにできなかった。この上に堆積した埋土には基盤層土は含まれず、出火・鎮火後もそのまま放置された状態であったようである。

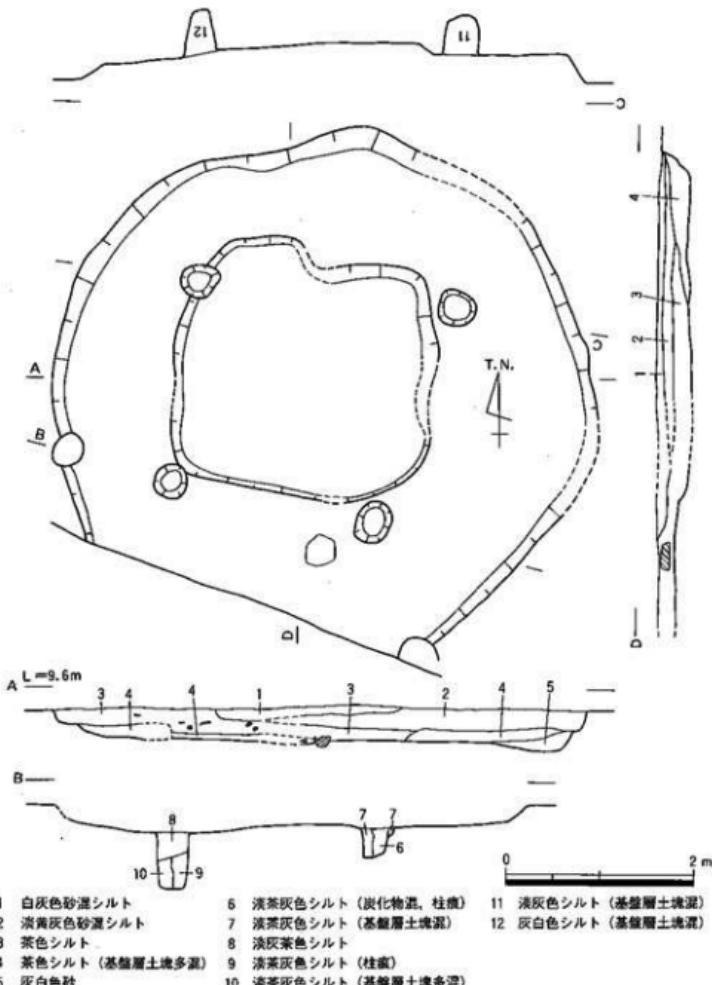
コンテナ2箱の土器が出土し、殆どが出火時に住居内に残されていたものであり、失火が原因となって持ち出せなかったものと思われる。272は大型の壺である。285は長頸壺である。

出土土器から、SH20は終末期-2の時期の住居と考える。

#### SH22 (第63・64図、図版12)

C23/24に位置する。一辺約7mの大型の竪穴住居跡である。ベッド状遺構を持たない。柱穴は4個で西2個はSH08の下に残されていた。炉は中央南寄りに付く。中から土器片が多く出土した。埋土には基盤層の小塊が多く含まれ、意図的な埋め戻しが行われたと見られる。また、6・7層には炭化物も多く含まれていた。炉内の土器片は埋め戻しに際して捨てられたものであろう。

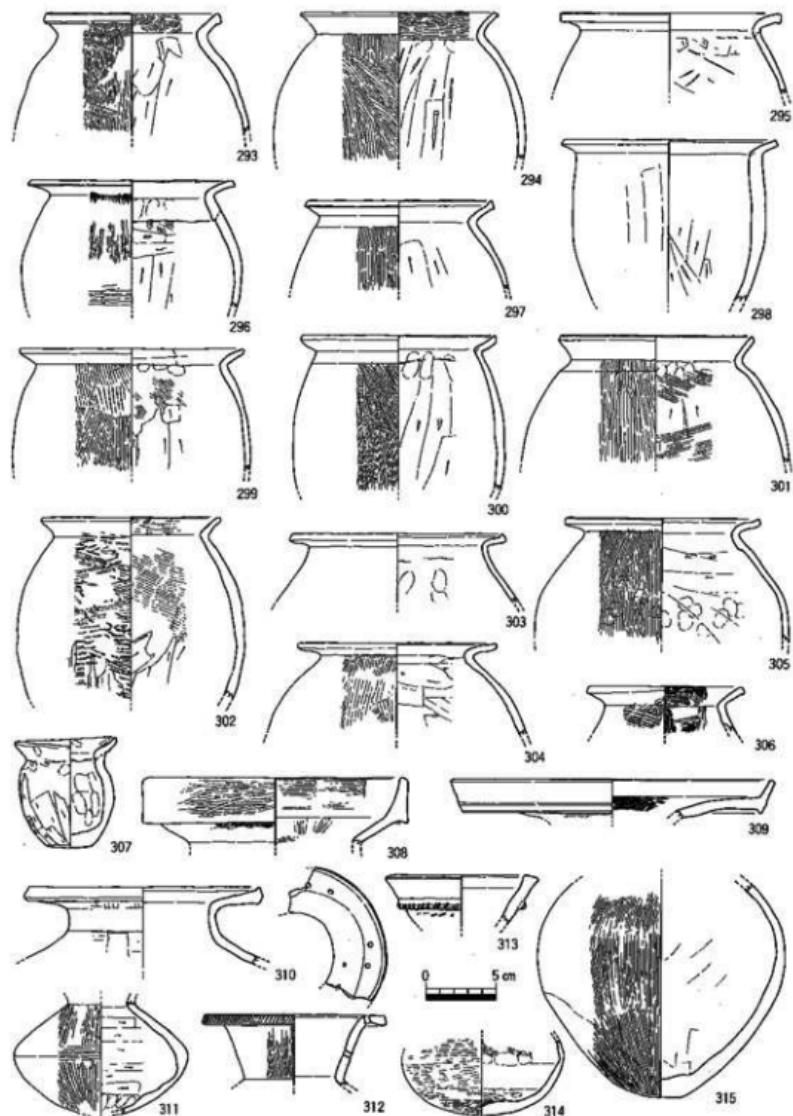
SH22からはコンテナ1箱の土器が出土した。287は胴内面に赤色顔料が残されていた。



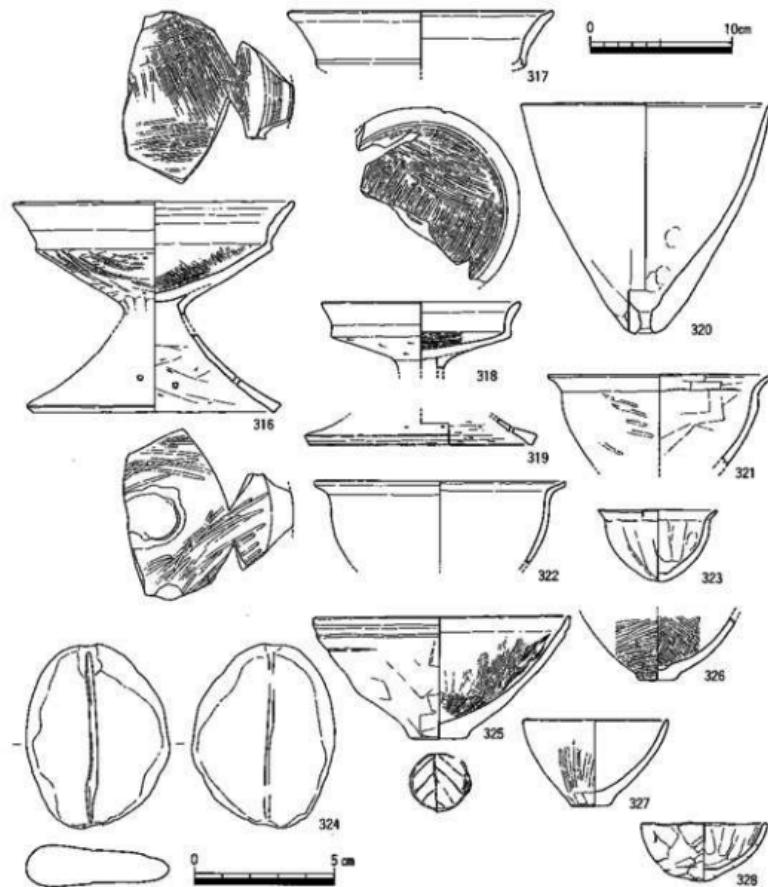
第65図 SH23平・断面図 (1 / 60)

分析の結果ベンガラと判明した。289は炉内出土である。292は恐らく同一の土器であろう。

出土遺物から、SH22は終末期-1頃の住居と考える。



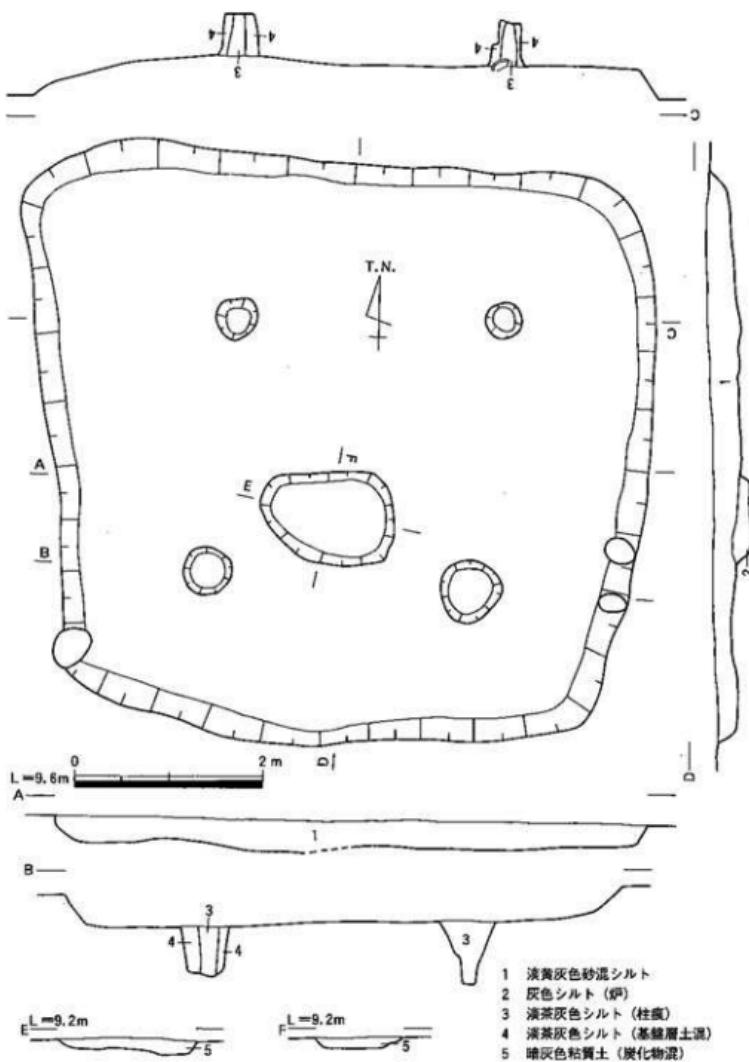
第66図 S H23出土遺物実測図(1) (1 / 4)



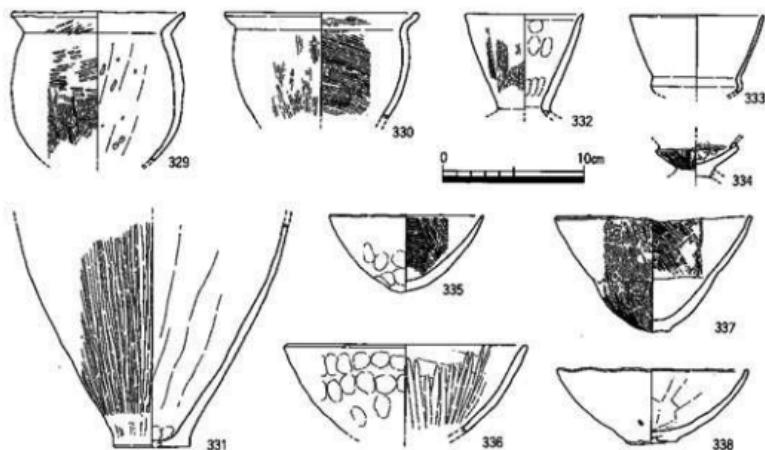
第67図 S H23出土遺物実測図(2) (1/4, 1/2)

S H23 (第65~67図)

D24に位置する。一辺約5.7mの円形あるいは六角形の竪穴住居跡である。ベッド状遺構の内側は正方形に作られている。ベッド状遺構は掘りあげた土を用いて成形し、南側は不明瞭であった。壁溝・炉は存在しない。柱穴4個はベッド状遺構に接して作られていた。埋土は上下あまり差がない。



第68図 SH24平・断面図 (1 / 60)



第69図 SH24出土遺物実測図（1/4）

コンテナ5箱の土器が出土した。完形のまま潰れたように見えず床上からの出土でもないことから、立ち退き後間もない頃に土器などの廃棄坑に使われたと思われる。295は北東主柱穴出土である。305は外面下部に煤が付着している。308は口縁外面を横に磨いている。311は長頸壺である。312は2個1組の穿孔を上下2段に行っている。313は刻み目突帯の下にも刻み目が入れられる。312・313はⅢ期のものの紛れ込みである。316は脚部の穿孔4のうち1つは未貫通。焼成後気づいて内側から開けようとしたが、途中でやめたことを思わせる。324は浅い溝を表裏に1周させている。325は外底に植物の葉の圧痕文が残る。328は1個の粘土塊から指で引き延ばして成形している。

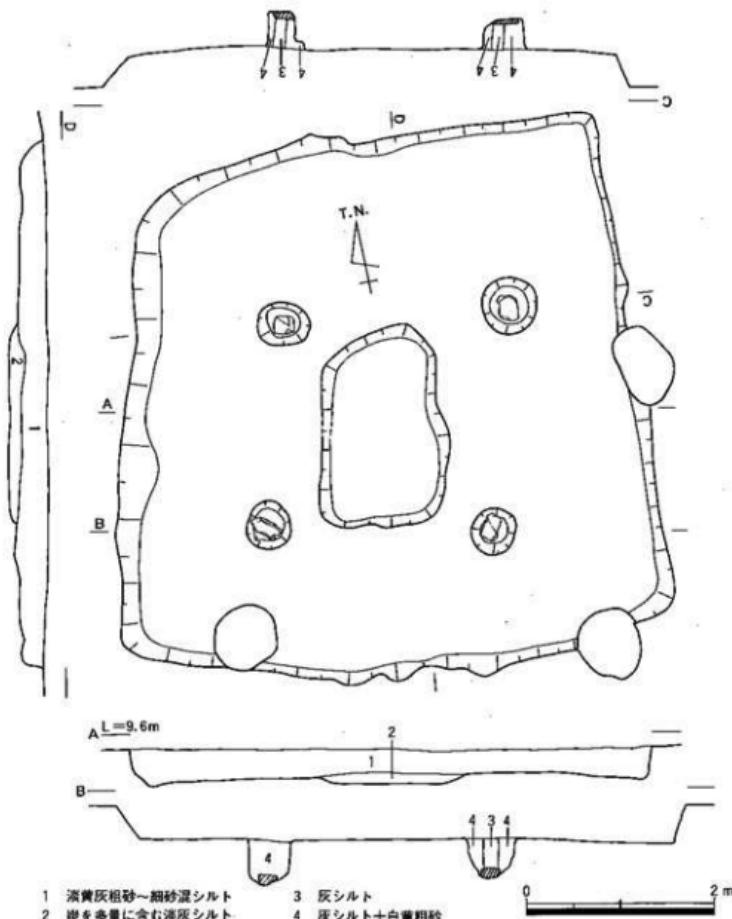
出土土器から、SH23は終末期-1頃の住居と考える。

#### S H24 (第68・69図)

D24に位置する。一辺約6.2mの方形の堅穴住居跡である。SK33より古い。ベッド状構造・壁溝は存在せず、柱穴4個と炉を持つだけの簡単な構造である。各柱穴内からは土器片が出土している。SH06・09と似た状況によるものである。

コンテナ2箱の土器が出土した。331は中期の土器の紛れ込みである。336は内面に放射状の太いヘラ磨きを施している。337・338は北西主柱穴から出土した。この他内面に朱の付着した鉢片が出土している。

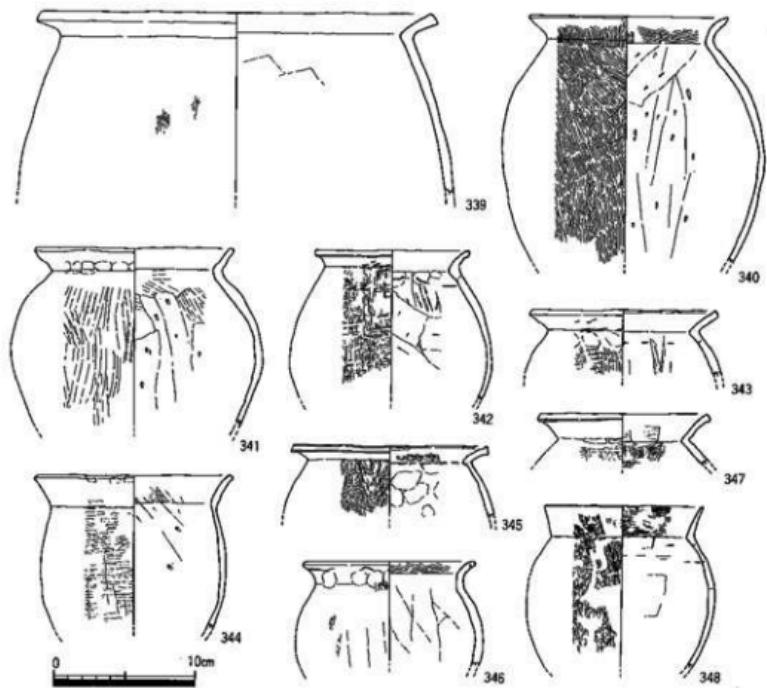
出土土器から、SH24は終末期-1頃の住居と考える。



第70図 S H 25平・断面図 (1/60)

S H 25 (第70~72図, 図版15)

D/E 24に位置する。一辺約5.8mの堅穴住居跡である。ベッド状遺構・壁溝は存在せず、柱穴4個と炉を持つだけの簡単な構造である。炉は中央に位置する。すべての柱穴の底に根石を敷く。やや歪んだ平面形や、ベッド状遺構・壁溝を持たない内部構造はS H 24に類似する。



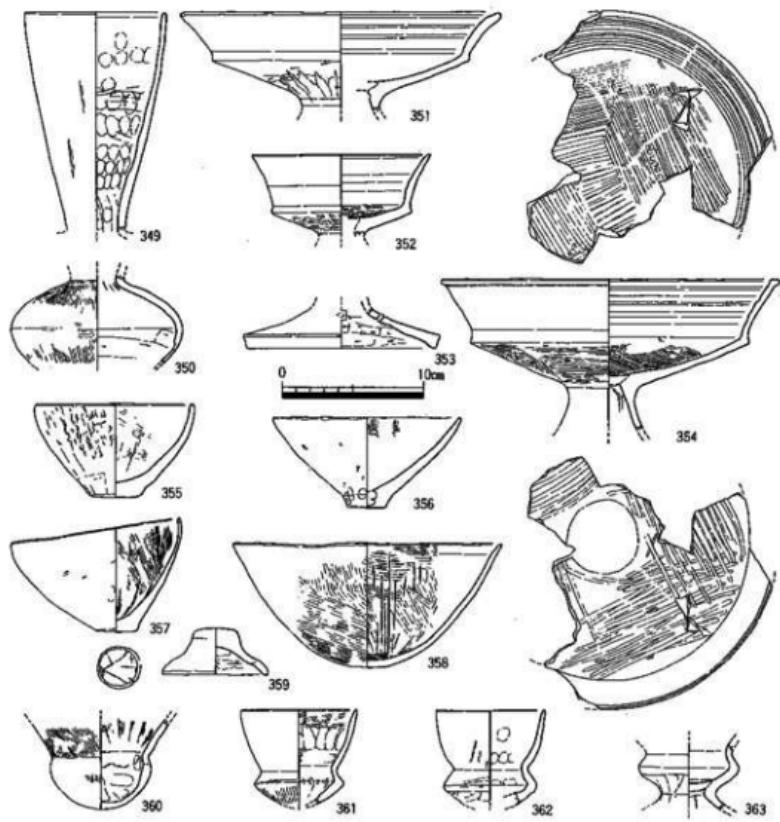
第71図 S H25出土遺物実測図(1) (1/4)

コンテナ2箱の土器が出土した。340は炉内からの出土である。339はⅢ期の土器の紛れ込みである。357は外底に植物の葉の圧痕が残る。358は内面をわずかに磨いている。359は天地逆の鉢となる可能性もある。361・362の鉢は底部外面を磨くものと削り痕が残るものがある。この他朱の付着した鉢の細片が出土している。

出土土器からS H25は終末期-1~2の時期の住居と考える。

#### S H26 (第73図)

E24に位置する。東西が南北より少し長い竪穴住居跡である。平面図では描いていないが、土層観察によると、四辺にベッド状造構を土を盛ることによって作っている。炉は、地盤を掘り下げる事なく、南辺のベッド状造構とそこから土手状に土を巡らせて（南北土層図7層）仕切った内部を利用する。貼り床の盛り土を取り外したところ、溝や浅い土坑状の落ち込みを検出した（スクリントーン部分）。



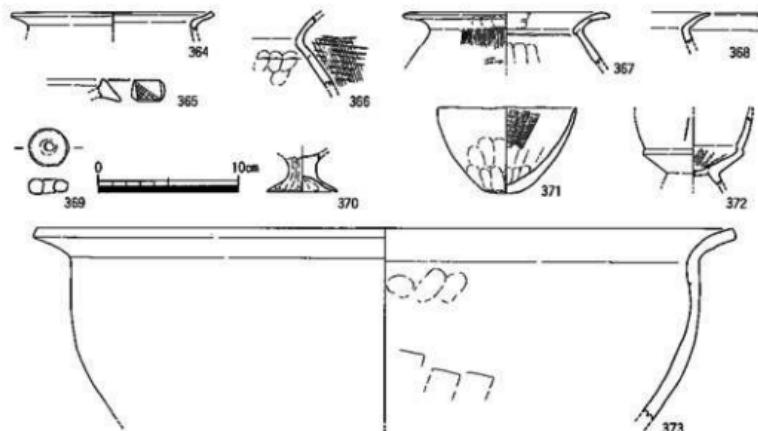
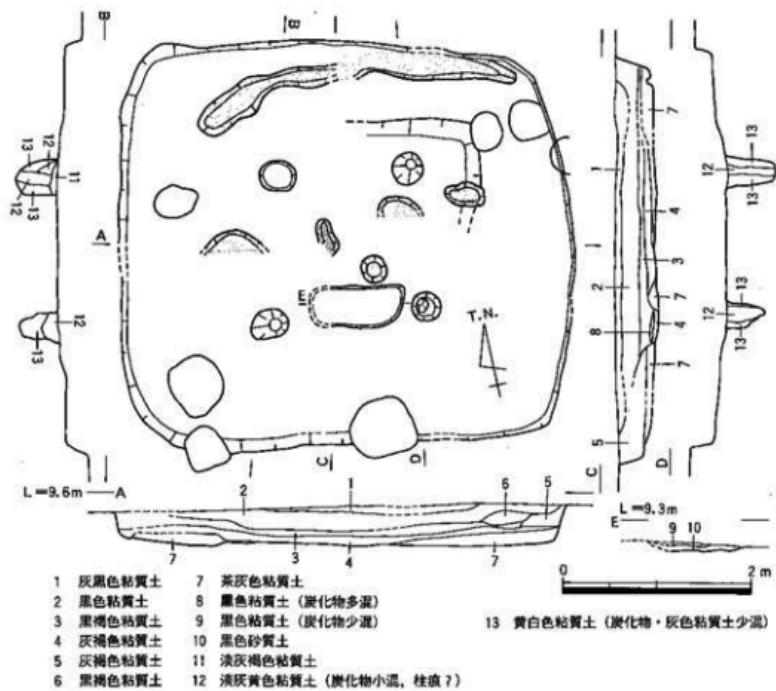
第72図 SH25出土遺物実測図(2) (1/4)

コンテナ1箱の土器が出土した。369・372は貼り床の盛り土内から出土した。365は縁の口縁で、三角文を描いている。369は耳環である。貼り床作業中に落としたのであろうか。373は径は確定しないが大型の鉢である。1608もSH26出土で、朱が付着していた。他にも数片朱付着土器がある。

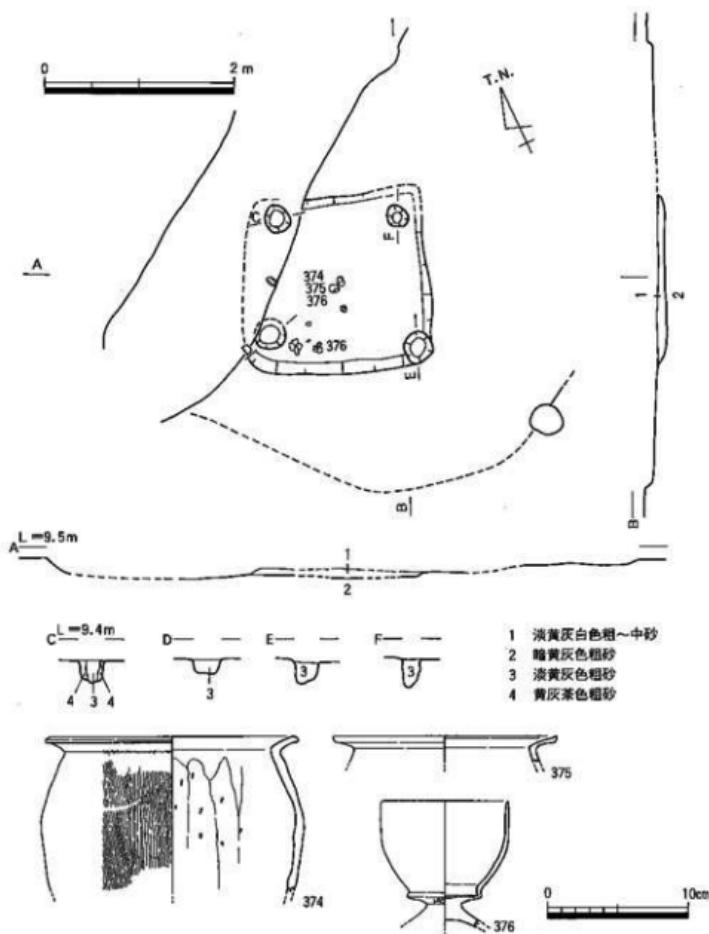
出土土器からSH26は終末期-1の時期の住居と考える。

#### SH27 (第74図、図版15)

D24に位置する。床面までが浅く、遺存状況が悪かったこともあり、平面形はつかめな



第73図 SH26平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)

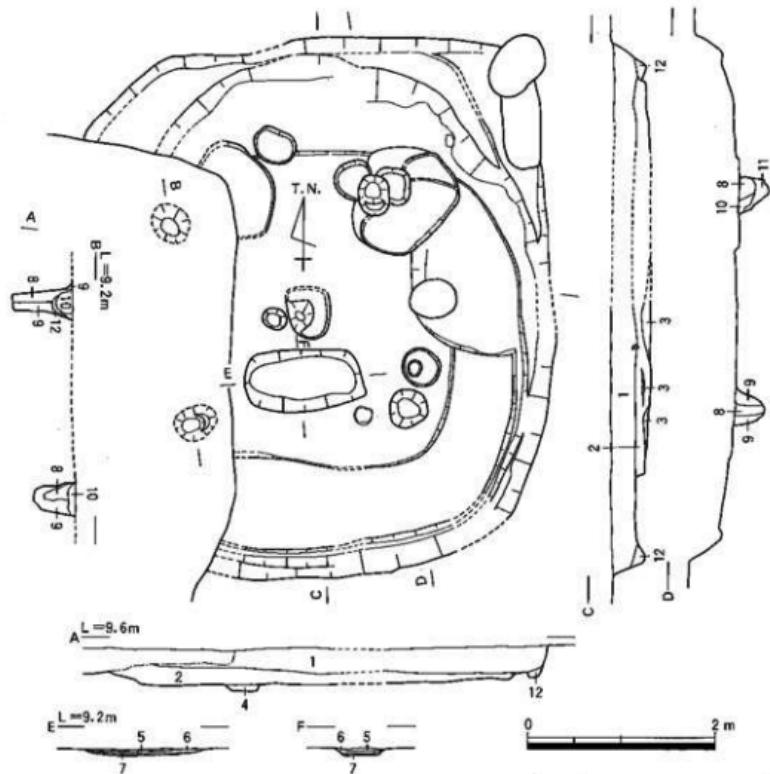


第74図 SH 27平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)

かった。わずかに理解した範囲では、南部の状況から多角形か円形になると思われる。4辺にベッド状遺構をもち壁溝はない。また炉も検出できなかった。

コンテナ1箱の土器が出土した。374~376は方形区画内の床上で出土した。

出土土器からSH 27は終末期-1の時期の住居と考える。

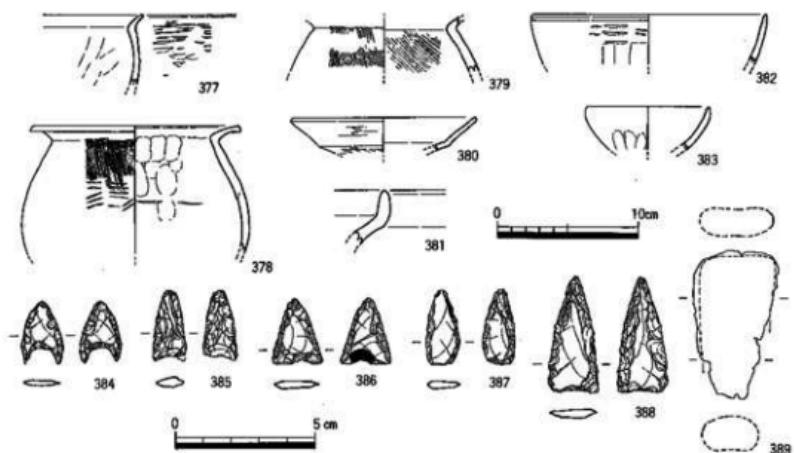


- |                      |              |               |
|----------------------|--------------|---------------|
| 1 深灰褐色混砂粘質土          | 5 黄茶暗灰色混砂粘質土 | 9 橙褐深灰色混砂粘質土  |
| 2 褐灰色混砂粘質土           | 6 炭化物        | 10 橙黄深灰色混砂粘質土 |
| 3 黄褐黑色 (炉、炭化物・焼土塊多混) | 7 黄褐暗灰色混砂粘質土 | 11 黄茶暗灰色混砂粘質土 |
| 4 棕灰色粘質土             | 8 橙褐暗灰色混砂粘質土 | 12 深灰色混砂粘質土   |

第75図 SH29平・断面図 (1/60)

S H29 (第75・76図, 図版12・16)

C23に位置する。5.3×5.8mほどの隅丸方形の竪穴住居跡である。S H33より古い。東側の一部を除いて段差の小さいベッド状遺構が巡るが、北東と北西隅は15cmの差がある2段の構造になっている。その他の部分のベッド状遺構の幅が一定であることからすれば、当初楕円形に近い平面形であったものを、北東・北西隅の面積の拡張を行った結果、最終的に検出したような平面形になったものと考えておきたい。主柱穴は4個で、炉は中央の



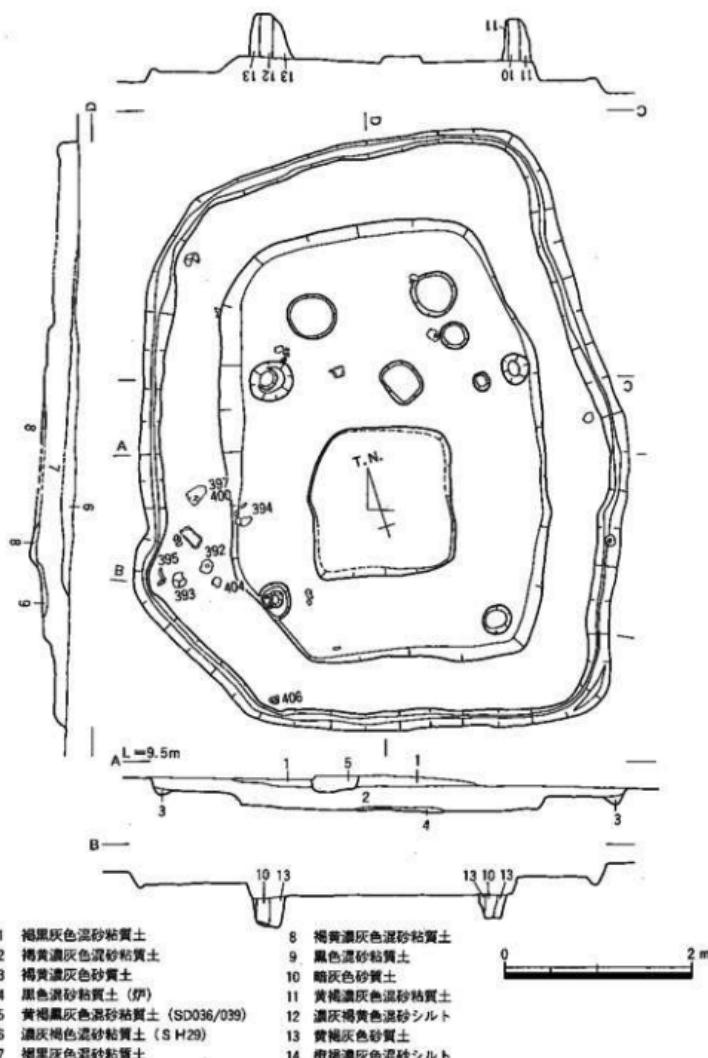
第76図 SH29出土遺物実測図（1/4, 1/2）

深さ15cmの円形ピットとその南の長楕円形の土坑の組み合わせから成る。その他ピットが5個あり、いずれも深さ15cm前後である。炉の南東で作業台に使われたと思われる石を検出した。

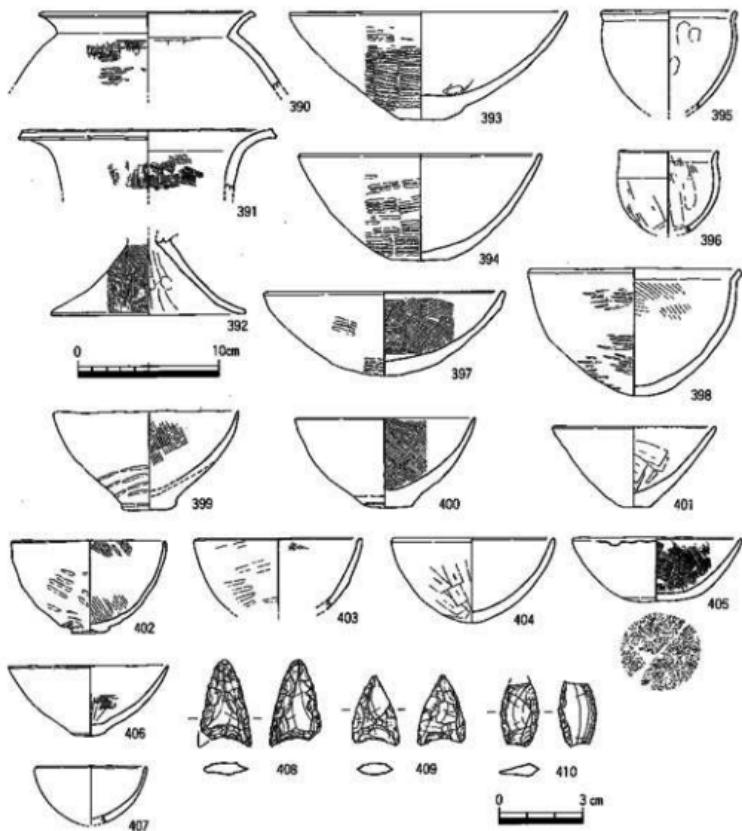
コンテナ3箱の土器が出土した。377は炉内で、380・389は床上で出土した。380は小型の高杯であろう。381は袋状口縁の壺である。やや丸みを持つ屈曲は袋状口縁としては古い形態を残すものとも見られる。386は右面に磨滅痕らしきものが認められる。389は断面楕円形で刃部になるものも見あたらず、用途不明の鉄器である。

時期を示す良好な土器の出土はないが、SH29は終末期-1頃の住居と考えておきたい。  
SH33（第77・78図、図版12）

C23に位置する。6.4×5.3mほどの不整六角形の竪穴住居跡である。SH29より新しい。ベッド状遺構が全体に巡る。主柱穴は深さ10cm未満のものを除き4個より成ると考え、断面図を作成した。ただし主柱穴全体が南に寄りすぎていることから、北側の2穴が支柱として使われていた可能性は残る。炉は大きな浅い方形のものであるが、南1/3が深めで、他の竪穴住居跡にみられる長方形の炉として使用され、北側に灰をかき出していたものと見られる。床上で土器が多く出土している。いずれも破片であるが、高杯片1を除き、すべて中小型の鉢のみであり、器種的に非常に偏った検出状況を示す。西側の2つの主柱穴内からもSH09等同様柱を抜いた後に入れたような状況で土器が検出された。他に作業台



第77図 SH33平・断面図 (1/60)

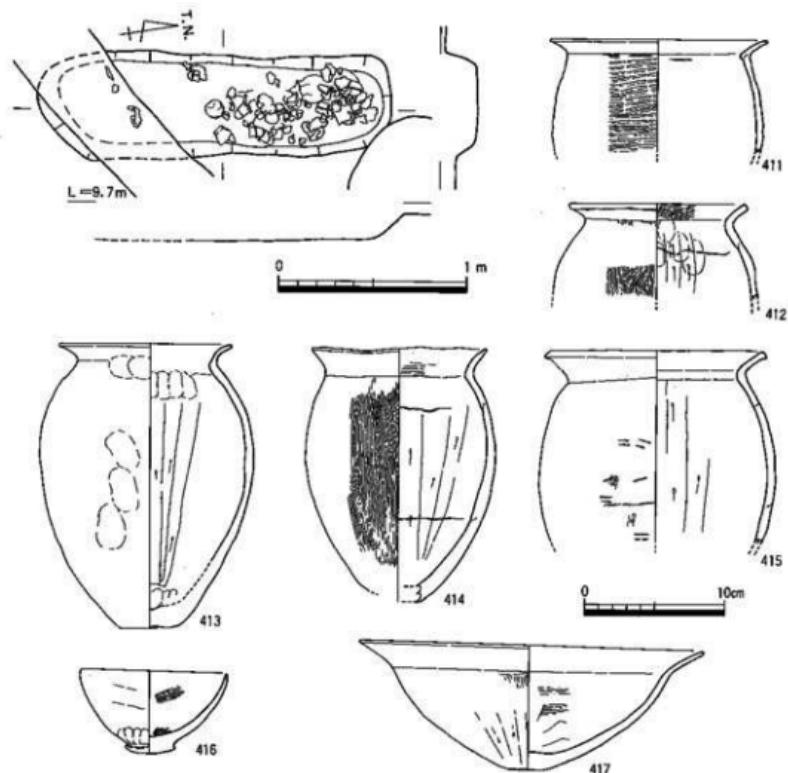


第78図 S H33出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

と見られる石が南西部のベッド状遺構の上で検出されている。

コンテナ2箱の土器が出土した。391は炉内、392~395・397・399~401・404~406は床上、403・405はS P 4、410はS P 6からそれぞれ出土した。392は脚の径や開き具合から脚付鉢のものと考える。402・403は同一個体であろう。405は外底に植物の葉の痕が残されている。

器種的に時期を限定しがたいが、392の存在から、S H33の時期を終末期-1としておく。



第79図 SK 09平・断面図 (1/30), 出土遺物実測図 (1/4)

### 土坑

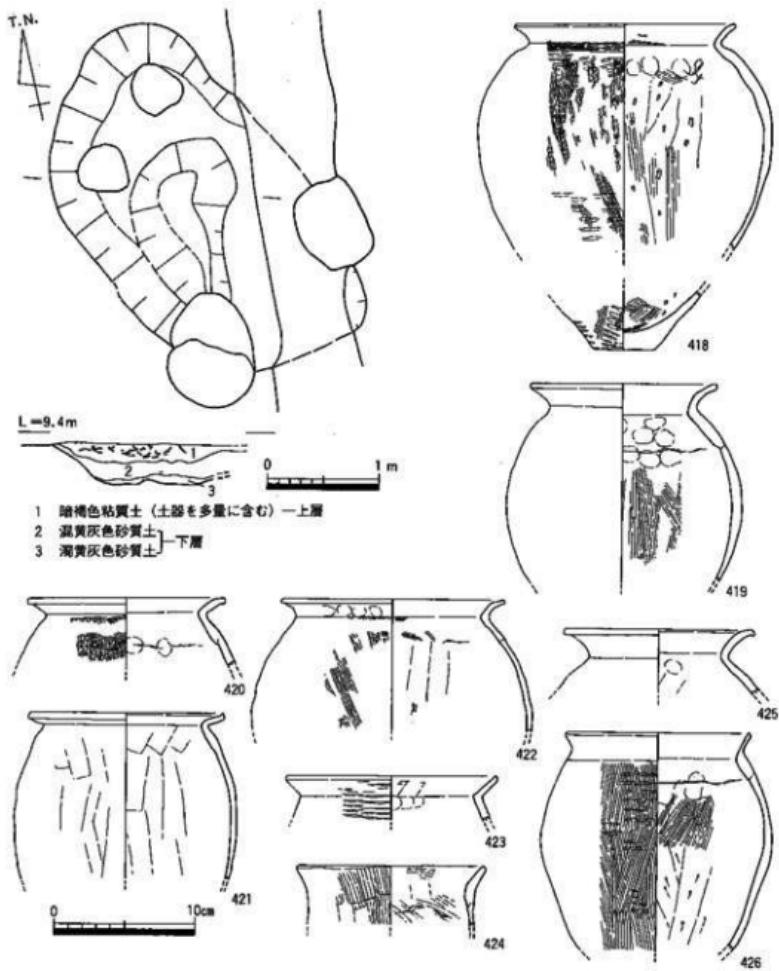
#### S K 09 (第79図, 図版17)

F 22に位置する。長楕円形の深い土坑である。中から捨てられたと思われる土器片がコンテナ1箱分出土した。

出土土器から終末期-1の時期の土坑と考える。

#### S K 21 (第80・81図, 図版8)

C 25に位置する。土層は大きく上下2つに分かれ、上層からコンテナ2箱分の土器が出土した。当初の目的はわからないが、結果的にはこれも廃棄用の土坑である。ベンガラ付

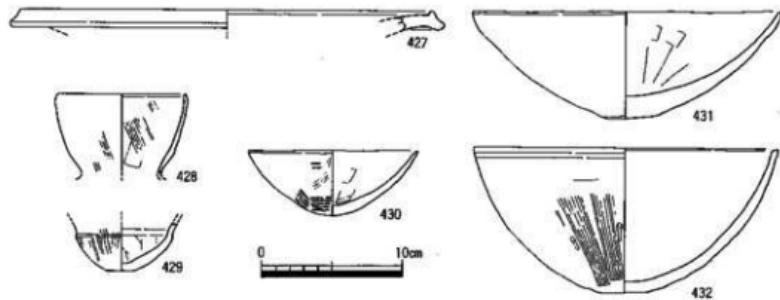


第80図 SK21平・断面図(1/50), 出土遺物実測図(1)(1/4)

着鉢片が1点出土している。出土土器から終末期-1~2の時期の土坑と考える。

#### S K 36 (第82・83図)

E 24に位置する。浅い土坑で、コンテナ半箱分の土器が出土した。433は外底に植物の葉の痕が残されている。435外面のハケ目は粗く、タタキ目の一一種の可能性もある。内面



第81図 SK 21出土遺物実測図(2) (1/4)

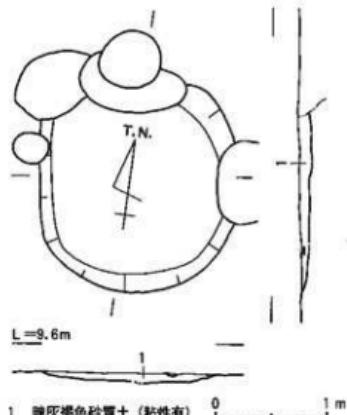
上部は横方向へのヘラ削りを施している。

### 井戸

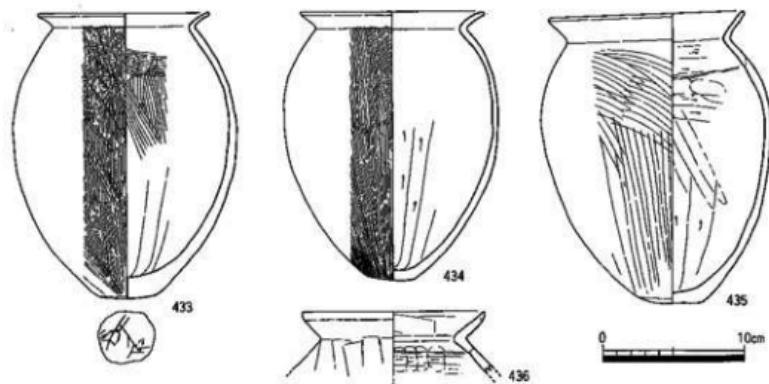
#### S E 01 (第84・85図, 図版17)

B23に位置する。当該期の竪穴住居跡群から離れており、集落のはずれに位置する。遺構面の標高は竪穴住居跡群の位置する地点の標高より1mほど低い。調査域上層図(8)西端で示される微高地より低地に入ってしまった地点である。S D062の項で述べたような中期の包含層はこの付近では認められない。

この遺構は径2.5m強の円形で、掘り形断面が2段になっている。粘質土一シルト系の基盤層から掘り込み、80cm下の砂層に達している。この層からは現在でも湧水が著しく、これによつてS E 01を井戸と判断した。井戸棒等のない素掘りの形態である。埋土は細砂とシルトが層状に堆積しており、自然埋没を示す。埋没が中位まで進んだ段階で土器が多量に投棄されており、少なくともこの時点で井戸としての役割は終えている。土器に混じって木の棒が1本出土した。表皮はなかったが、加工痕は認められなかった。また石も捨てられ



第82図 SK 36平・断面図 (1/50)



第83図 S K 36出土遺物実測図（1/4）

ていた。

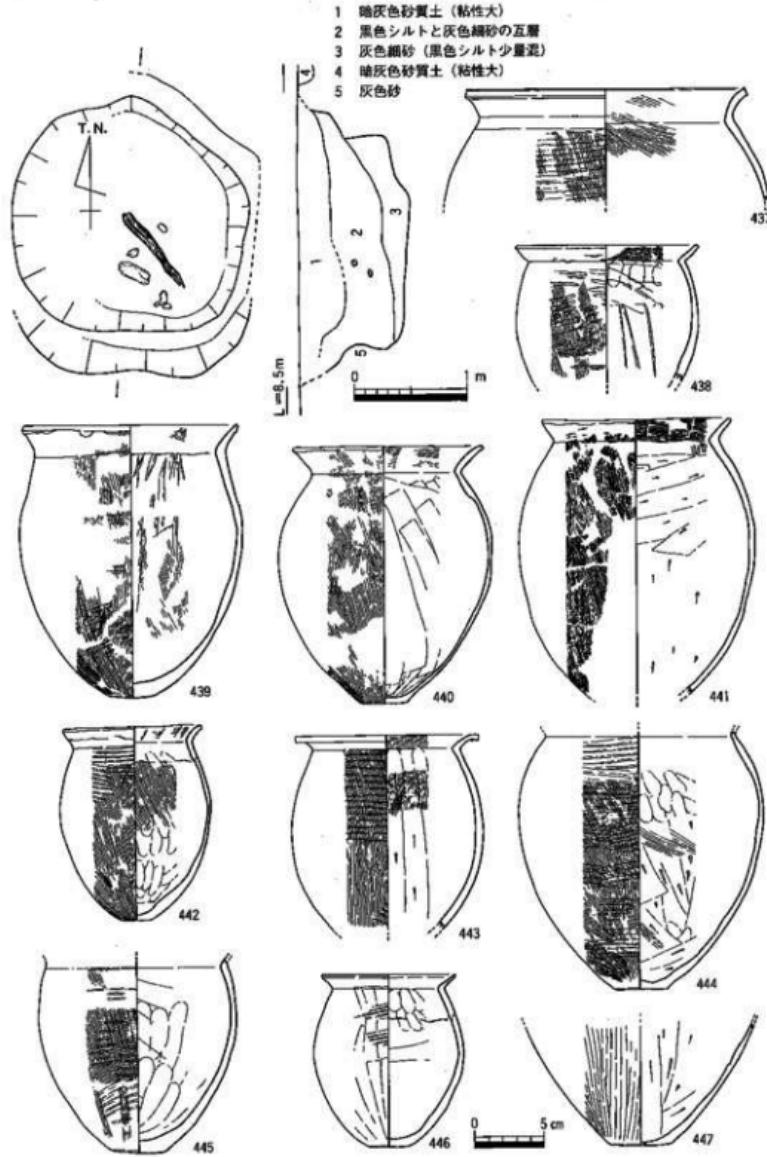
コンテナ2箱分の土器が出土した。449のみ1層で他は全部2層からの出土である。壺は外面にタタキ目が残る。438・440・441・443・444・447は外面に煤が付着していた。また447は内面に炭化物が付着していた。449肩部の刻み目は、突堤から下にかけて板小口を押しつけることで、突堤の下部分にも圧痕文を残す。また胴内面には板の角が深く残っている。453は漆状の黒光りするものが外面胴上半～頸部に付着し、又胴に朱が微量付着していた。1ヶ所穴が開いている。455は底部周囲のみタタキ目が残されている。465は脚付き鉢の脚であろう。

出土土器は終末期-1に属する。この時期の竪穴住居跡群が東側に展開することから、S E01はこの集落の共同井戸であると判断する。

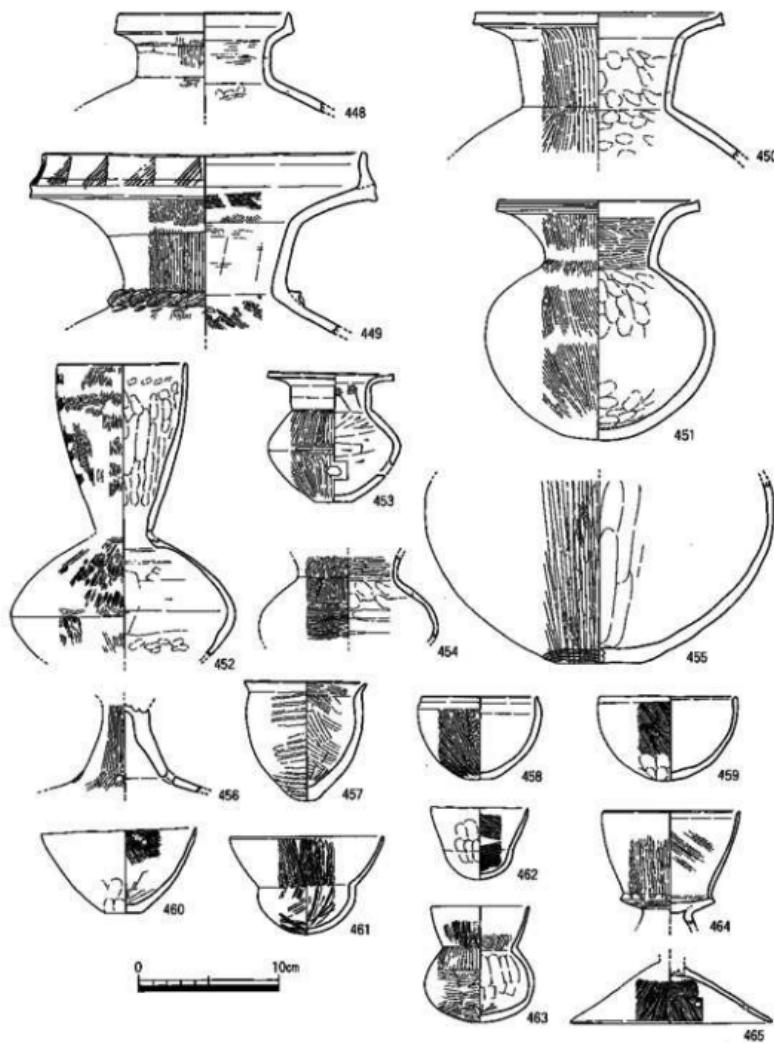
#### 溝状遺構

##### S D001F (第86図)

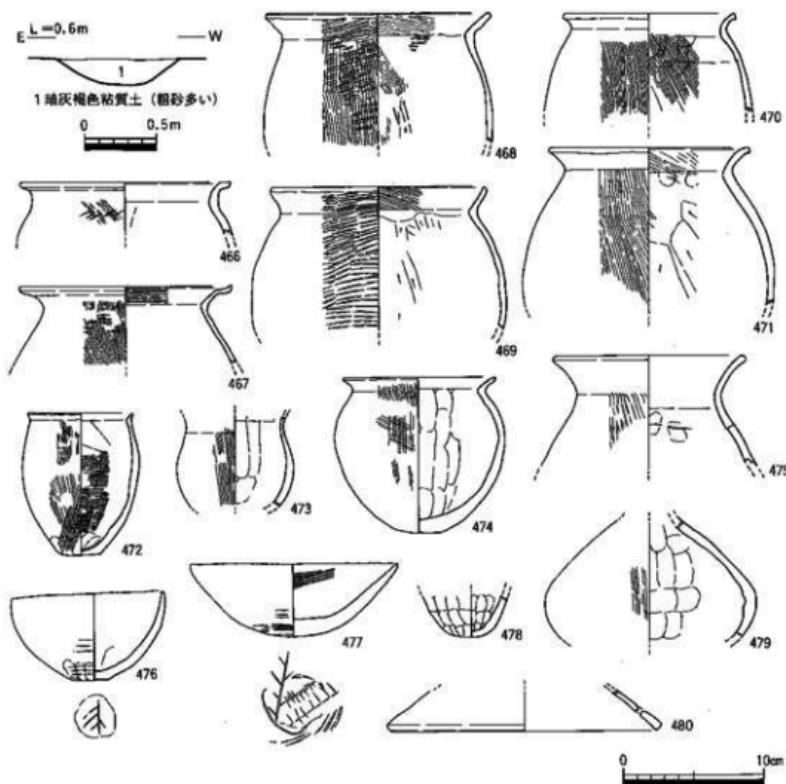
B24に位置する。S E01と同じ面で検出した。溝の北は調査域外に延びると思われるが、土層図(4)で示すように、調査区の境に設定した畦を取り払った後の土層図の追加を忘れたため、この部分にくるはずのS D001F断面を見ることができず、断定はできない。溝の南端も南北のトレンチによっては続きを確認できず、さらにその東の面でも検出できなかつた。しかし、この部分を撮影した航空測量写真を見ると、S D001Fの延長を南東に向かい



第84図 SE01平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図(1) (1/4)



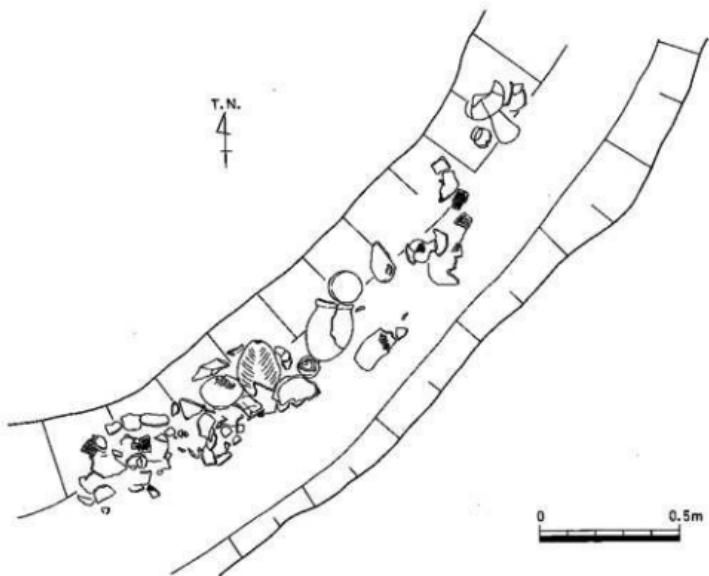
第85図 S E 01出土遺物実測図(2) (1 / 4)



第86図 SD 001F断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

S D 001F北で東に向きを変える小さな段差が存在する。さらにその東も判然としないが、延長上に S D 030の南端が現れる。この溝のない部分が、その上に堆積した包含層と区別できず、包含層として掘ってしまった結果だとすれば、後述する S D 030と土器の時期がほぼ同じで、埋土も褐色系の砂質土と共通することから、同一の溝である可能性は高いと見る。これが正しければ、S D 030南端から更に遺構面が急激に落ち込むのに従って掘り続けられていることになり、まさに排水溝的な性格を有することになる。

S D 001Fからはコンテナ半箱分の土器が出土した。472は疎密2種のハケ目が使用されている。476・477は外底に植物の葉の圧痕が残る。



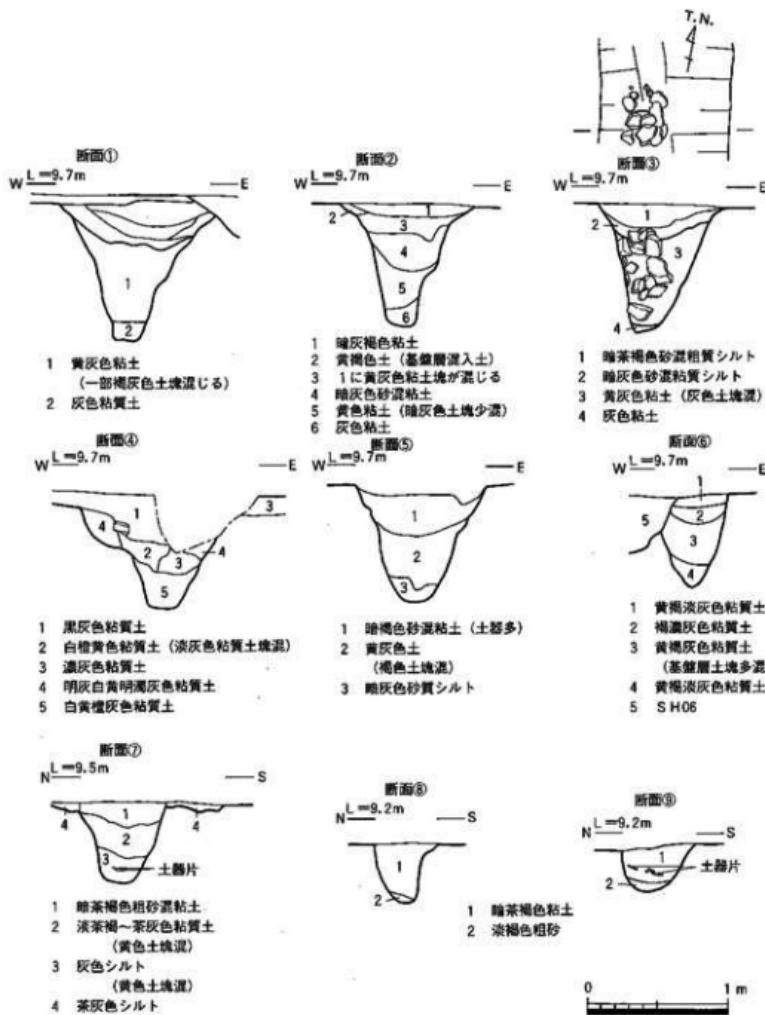
第87図 S D030遺物出土状況平面図（1/20）

出土土器は終末期－1～2の時期に属すると考えられる。

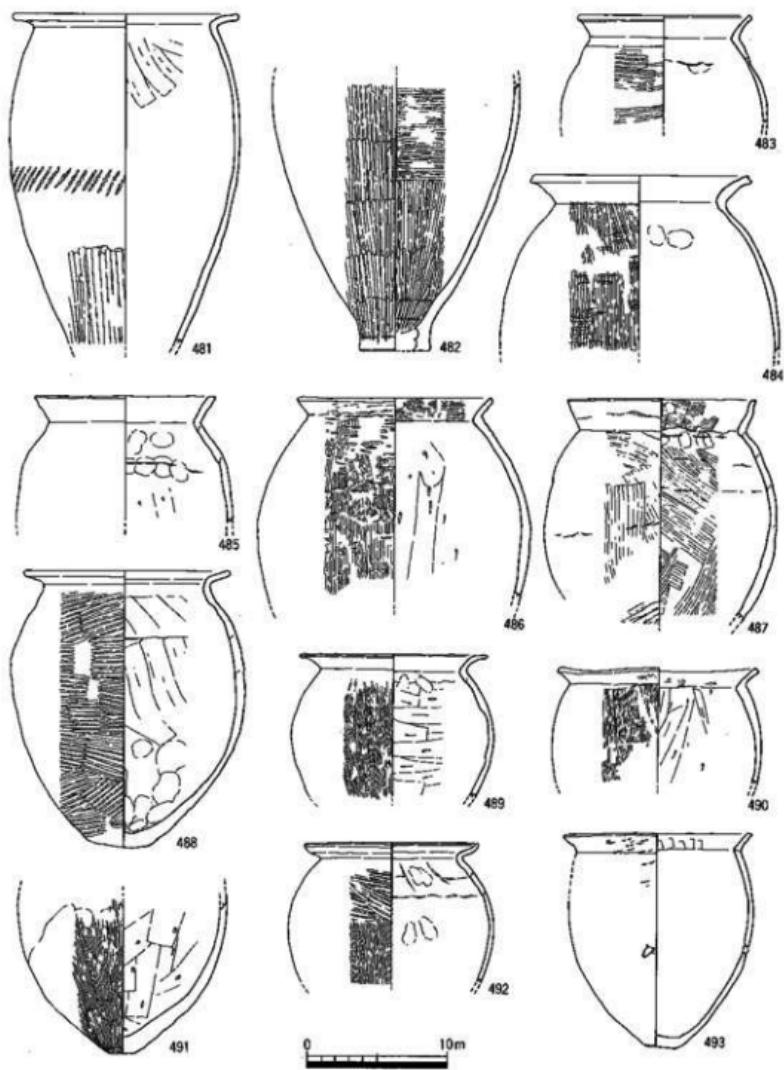
#### S D030（第87～93図、図版11・18）

調査域北西部で検出した。南北から西へと折れ曲がる形で作られている。北はⅢ区へと続き、南は深さ30cmの溝がS D080/110を挟んで突然消えることから、S D001Fの項で述べたような理由で、S D001Fへとつながるものと考える。溝は北へ行くほど深く、北端では深さ1mで断面V字を呈している。埋土は大きく3層に分かれ、上層で土器が多く出土し、SH18とS D016の間では第87図のような集中して捨てたような状況も見られた。また断面③の部分では径10cm前後の石の塊を積み上げ、堰を造っている。中・下層には基盤層の土の塊が多く入る。S D030はⅢ区部分で明らかにされたように竪穴住居跡群と関係が強い溝である。Ⅳ区でもこの時期の竪穴住居跡の分布は基本的にS D030より西に偏る。一部はS D030の埋没後に建てられており、この辺りの同時性の問題については第5章第1節で考察したい。

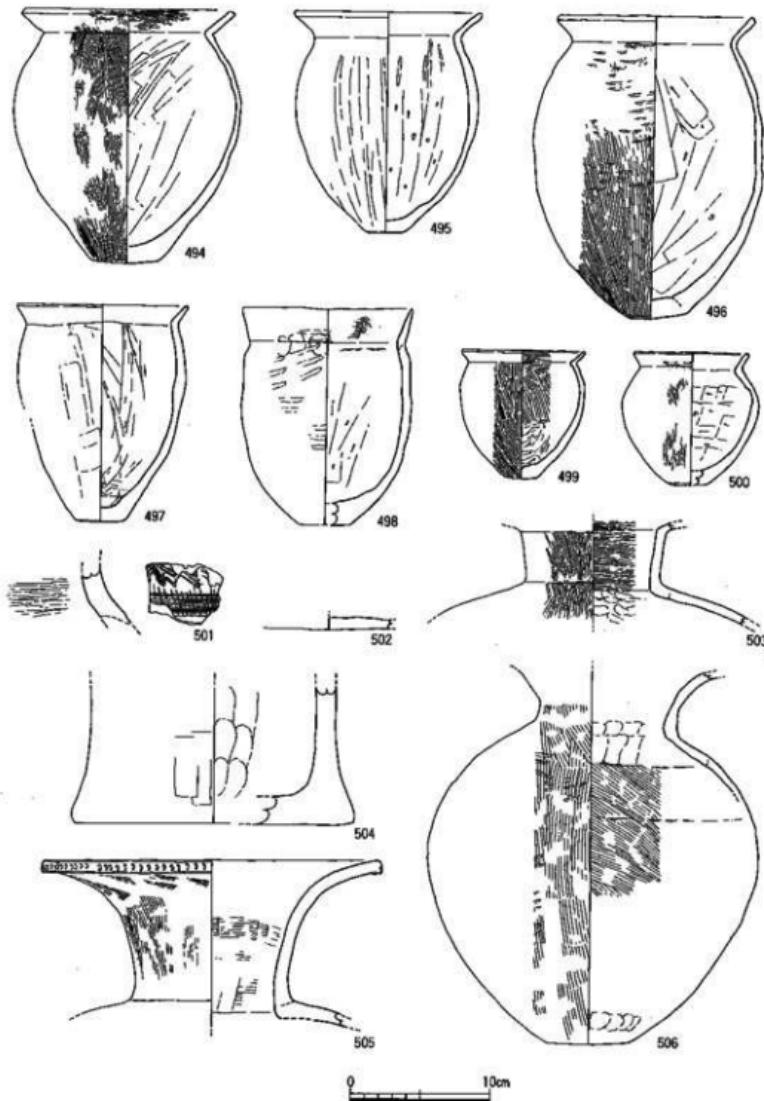
S D030からはコンテナ13箱に相当する大量の土器が出土した。483・484・487～489・



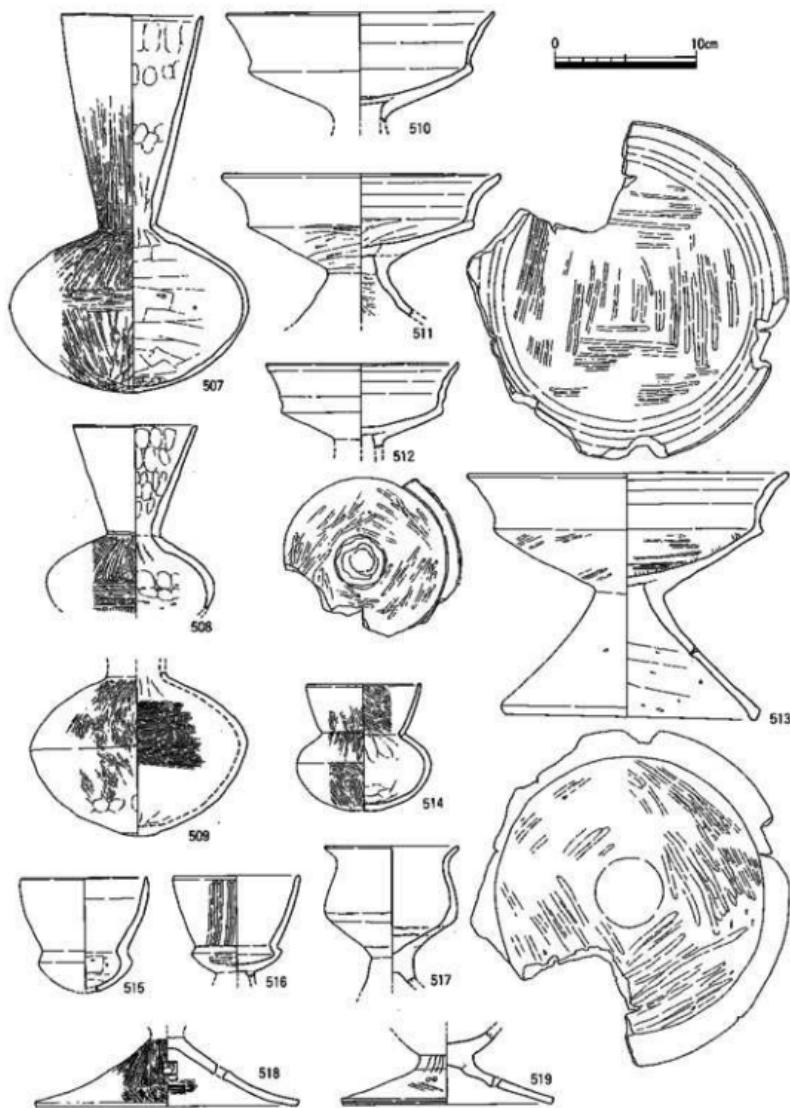
第88図 SD 030断面図 (1/40)



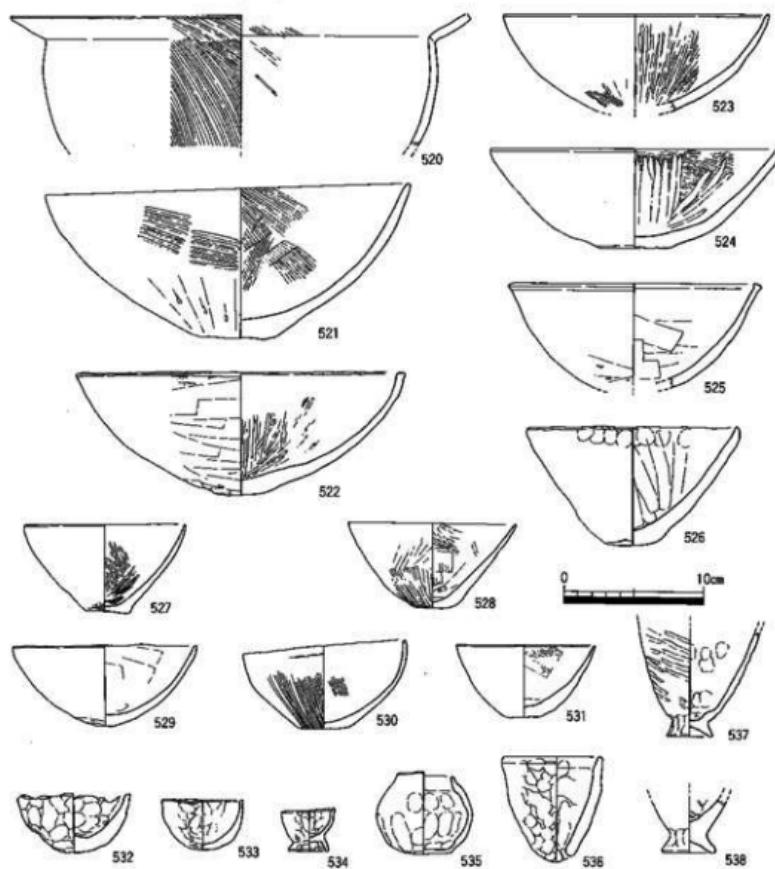
第89図 S D 030出土遺物実測図(1) (1 / 4)



第90図 SD 030出土遺物実測図(2) (1 / 4)

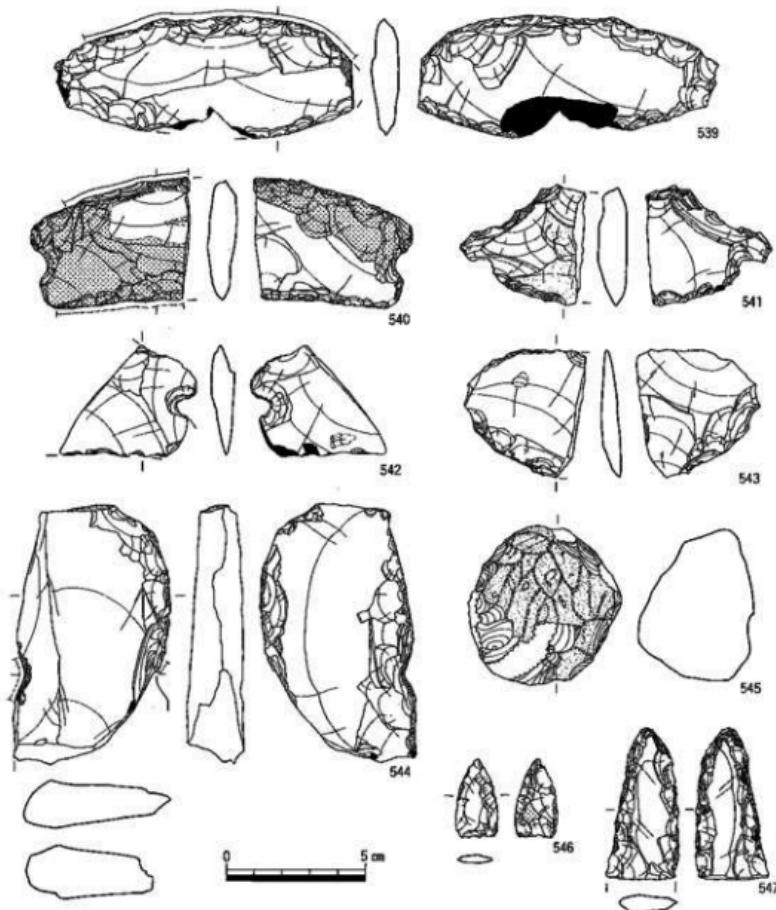


第91図 S D030出土遺物実測図(3) (1/4)



第92図 SD 030出土遺物実測図(4) (1/4)

491・492・496・498・499・501・502・504～507・509～512・514～523・525・527～529・531・532・535～539・541・543～547は上層から、485・494・495・497・500・503・533・534は下層から、508・513・526は最下部から出土した。481・482・501・502・504はⅢ期の土器の混じり込みである。489は外面に櫛圧痕が残る。498は作りの粗い土器である。501は櫛搔き直線文に縦に細線を加え庶状文風に作っている。502は壺の底が接合面で剥離したものであろう。504は器壁がきわめて厚く重い。バケツ状の口縁になる大きな壺である。



第93図 SD 030出土遺物実測図(5) (1/2)

511は内底に朱が付着する。522・530は内底に、528は内外面とも赤色顔料が付着する。いずれも朱と判明した。536は尖った底に穴が1個開く。蜻蛉と考えたいが、この時期の資料がほとんどないため、断定はできない。544は抉り部に紐ずれ様の痕跡が残る。545はサスカイトの小砾を少し加工したもので、周縁部に叩きによる潰れが著しく残る。

出土土器は最下部から上層まで殆ど時期差がない。終末期-1を中心とした時期で一部終末期-2まで下る可能性があると考える。

#### S D 089 (第94図)

F25に位置する。南北方向の溝である。弥生土器やサヌカイト製石器が出土した。出土土器から弥生時代後期の溝であろう。とすれば、この時期には調査域上層図10・11にみられる南北の浅い落ち込みはある程度埋まり、溝を掘るような平坦面が形成されていたと考えられる。

#### S D 091 (第94図)

F25に位置する。小さな南北方向の溝である。弥生土器片が少量出土した。中に角閃石を含む下川津B類土器が混じることから、弥生時代後期の溝と考えておく。

#### S D 093 (第94図)

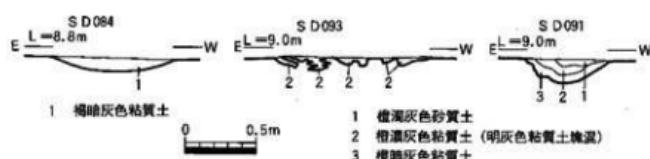
F25に位置する。ごく浅い南北方向の溝である。弥生土器片が少量出土した。中に角閃石を含む下川津B類土器が1片混じることから、弥生時代後期の溝と考えておく。

#### S D 094 (第95図)

C24に位置する。終末期-1～2の頃の土器片が少量出土した。同時期の遺構であるSH22やSD115との関係は明らかにできなかった。

#### S D 097/113 (第96・97図)

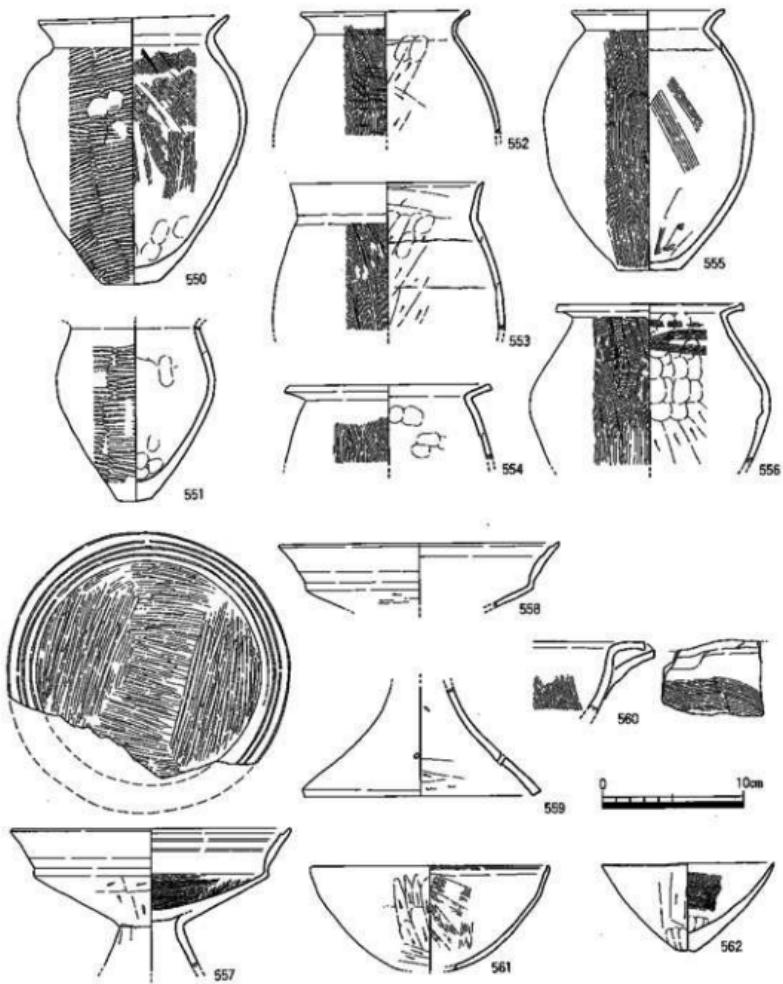
D24／25の境にあって溝が最も集中して交錯している地点のすぐ西側で、図化したよう



第94図 S D 089, S D 091, S D 093断面図 (1/40)

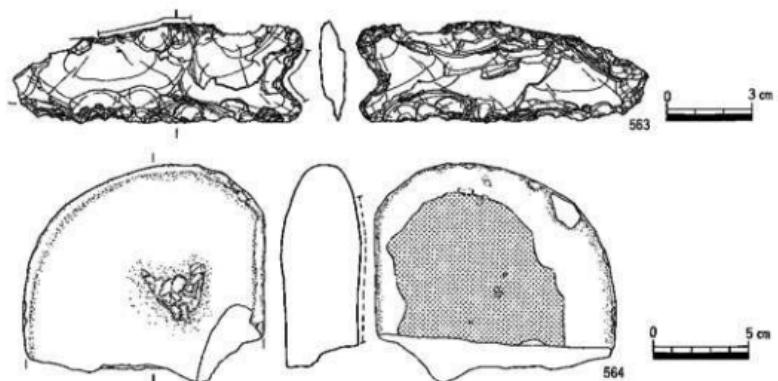


第95図 S D 094断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/4)

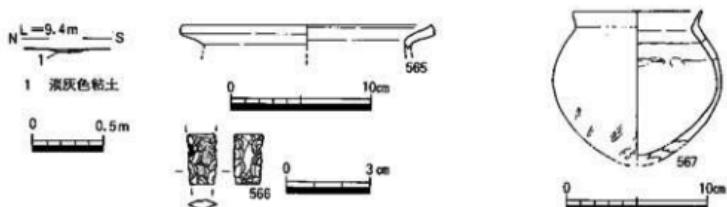


第96図 SD 097/113出土遺物実測図(1) (1/4)

な終末期-1の時期の土器がコンテナ1箱分まとまって出土した。古代SD群Vトレンチの項で後述するように、SD 097/113の流れを断面図から追うことはできなかった。平面的には、ここより西では絡み合った溝の固まりはほつれ、SD 097/113はSD 080/110と重



第97図 SD 097/113出土遺物実測図(2) (1/2, 1/3)



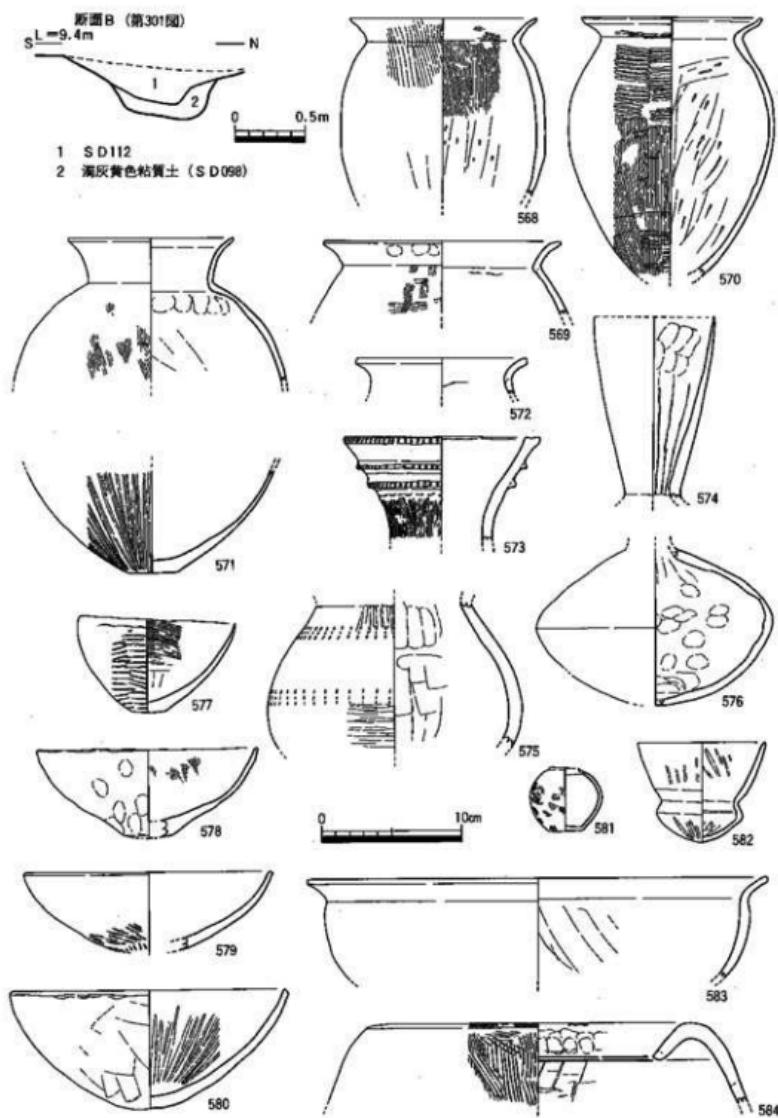
第98図 SD 099断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2), SD 109出土遺物実測図 (1/4)

なっていると見なさざるを得ない状況になる。しかし数百年隔てて同じ溝を再掘削するようなことが起こりうるのか、あり得ないとすれば、ここでSD 097/113は途切れることになる。一方、SD 040/060の東では、出土土器の時期から判断して、後述するSD 112につながる可能性が高い。なお、すぐ北にはSH 23~26という同時期の竪穴住居跡が存在しており、これとの関係が考えられる。

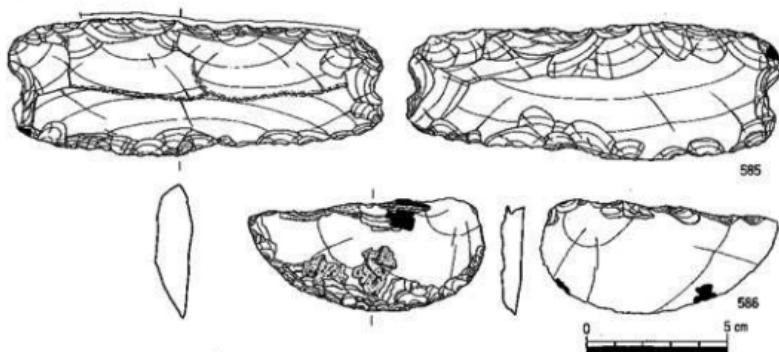
560は注ぎ口のある大型の鉢である。563は刃部が不揃いなことから未製品と考える。背部や一方の抉りの欠損により捨てられたのであろうか。564は左面は凹石に、右面は砥石に使用している。また、側面も平坦部は砥石に、縁が欠けている部分は叩石に使用されたと考えられる。

#### S D 099 (第98図)

C24に位置する。弥生土器片が少量出土した。時期の決め手に欠くが、平面的にSD 115



第99図 SD112断面図 (1/40), 出土遺物実測図(1) (1/4)



第100図 S D112出土遺物実測図(2) (1/2)

に合流するよう見えることから、この時期の溝と考えておく。

#### S D109 (第98図)

F24に位置する幅広で浅い溝である。調査域十層図(10・11)に見られる通路状の低地を挟んだ東側の微高地上に掘られている。弥生時代終末期の土器が少量出土した。

#### S D111

F24に位置する。ほぼ南北方向を向く浅い溝である。出土遺物はないが、S Z01より古いことから、弥生時代と判断しておく。

#### S D112 (第99・100図)

E25に位置する。溝が交錯しあっている部分の東にS D080/110から分岐するような平面形で検出した。S D098の項で述べたようにそれと重なり、また土器の時期からS D097/113と同一の溝である可能性も指摘した。

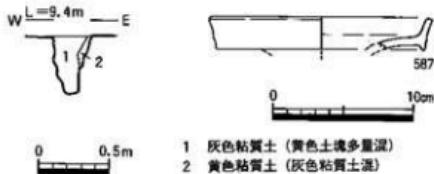
コンテナ3箱分の土器が出土した。573・575はⅢ期の土器である。581は口縁に2カ所穴を開けている。他に朱付着鉢片が出土している。584は表面赤褐色の光沢を帯びた瓦質の土器で、上に何かをのせる火鉢の類と考える。近世のものであろう。

#### SD115 (第101図)

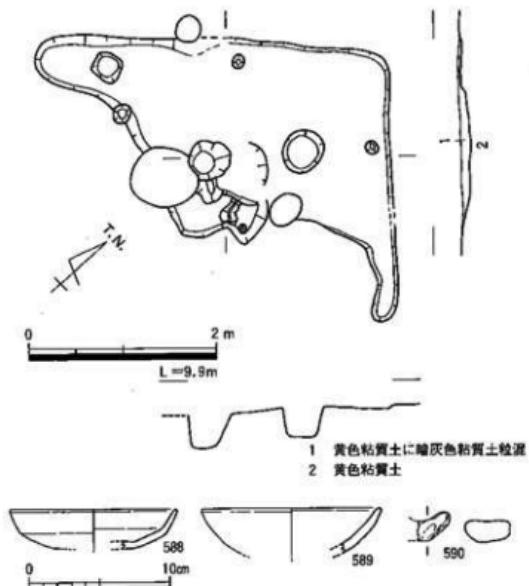
C23/24に位置する。細いが深い溝で、南端はS D030に合流する。弥生土器が少量出土した。北半分はSH22の床検出時に検出し、SH07内では検出できなかった。このことからSH07とつながるⅢ区でみられたような性格の溝の可能性がある。

### 3 古代（古墳時代後期～平安時代）

この時期は調査域が最も長期的に栄えた時期である。遺構は南端部を除きほぼ全面に展開するが、竪穴住居跡・掘立柱建物跡は北半分に主に分布し、その南に「大畦畔」を中心とした溝群が東西に走り、これより南では、この時期の遺構は見あたらない。

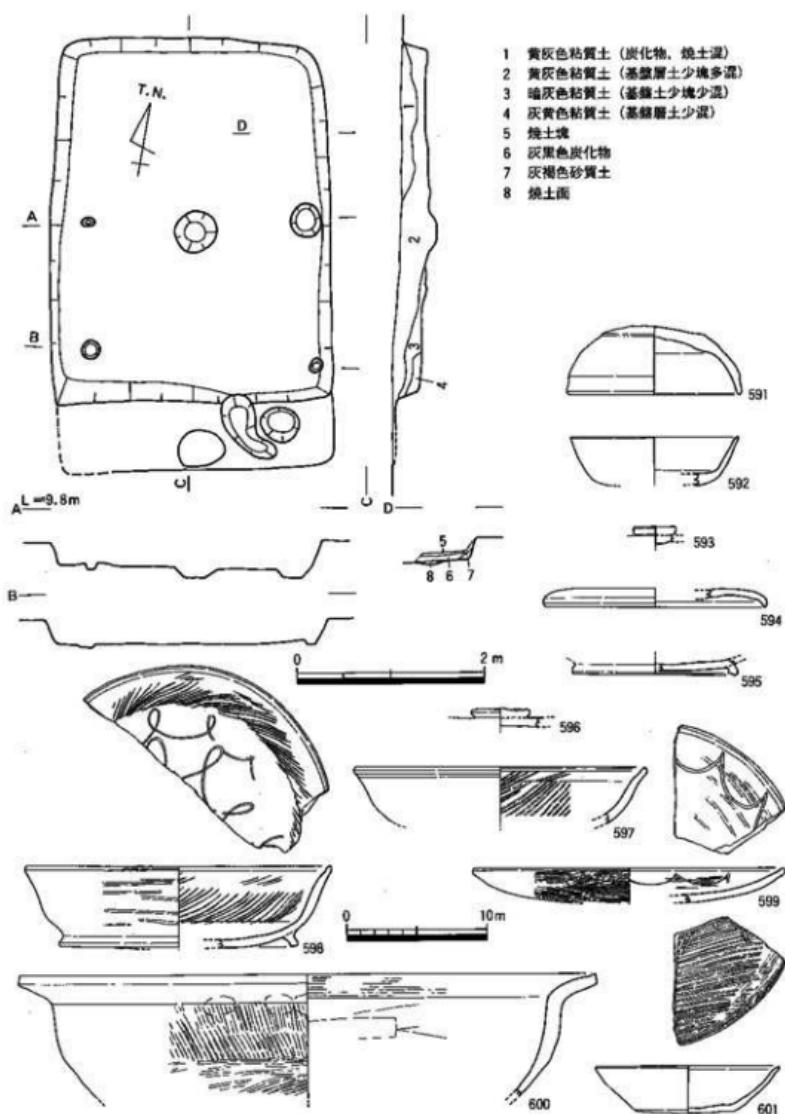


第101図 SD 115断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

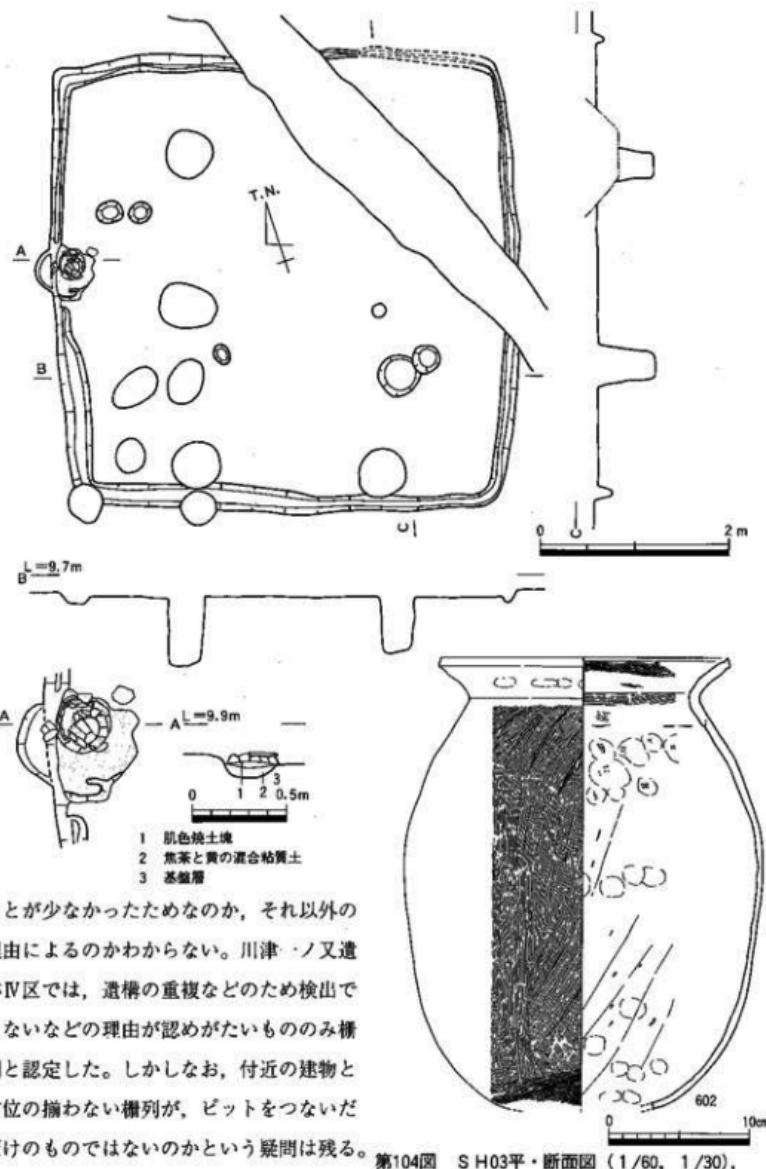


第102図 SH 01平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)

検出したピット約3000のうちほとんどが古代に属し、かつ掘立柱建物跡を構成する柱穴になると思われる。実際掘立柱建物跡を復元できなかったピットにも多数根石・詰め石を持つものが見られる。単純にピット数で計算すれば少なくとも200～300棟の掘立柱建物跡が建てられたと考えられる。必ずしもきれいな方形の平面形をなさない無理な復元を試みればさまざまな掘立柱建物跡ができるが、確実なものを探していった結果、127棟の掘立柱建物跡を復元した。柵列については、明らかにそれと指摘できるものが少なかった。これが検出できなかっただけなのか、この時期の一般の集落においては土地所有の観念が薄く、自分の住居の周囲を区切る

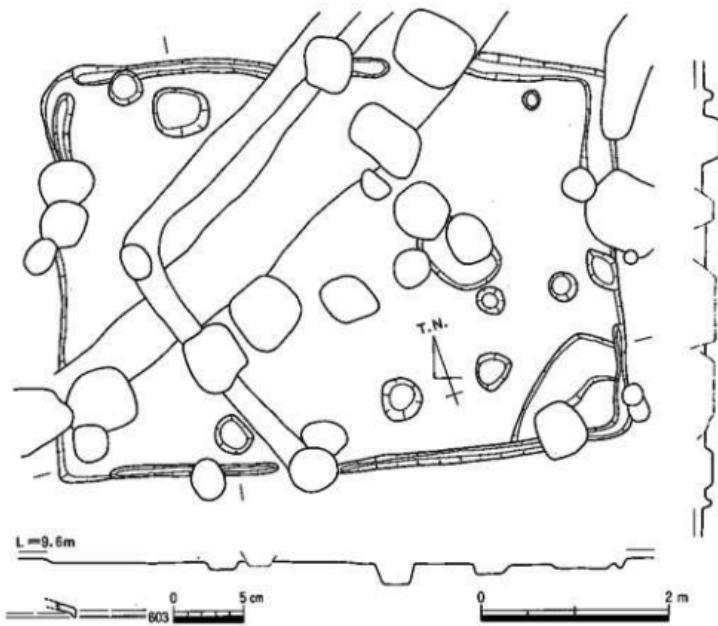


第103図 SH02平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)



ことが少なかったためなのか、それ以外の理由によるのかわからない。川津ノ又造跡Ⅳ区では、遺構の重複などのため検出できないなどの理由が認めがたいものの構列と認定した。しかしながら、付近の建物と方位の描わぬ構列が、ピットをつないだだけのものではないのかという疑問は残る。

第104図 SH03平・断面図 (1/60, 1/30),  
出土遺物実測図 (1/4)



第105図 SH04平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)

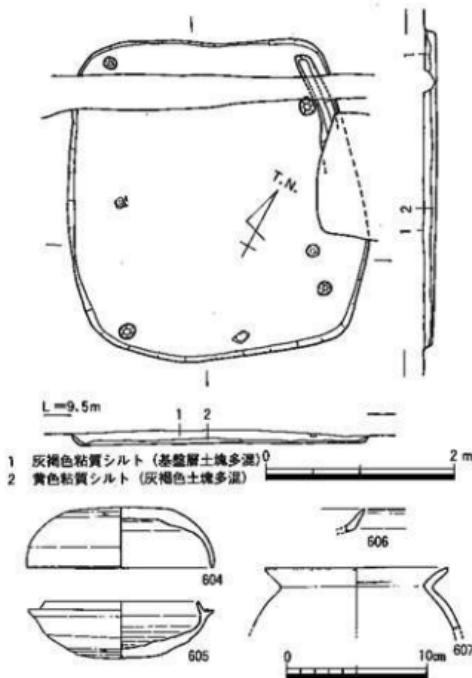
#### 竪穴住居跡

##### S H01 (第102図)

E21に位置する。上部をほとんど削平されており、その一部だけが数cmの深さで残されていた。小型の方形の竪穴住居になると思われる。主柱穴等これに伴うピットも明らかでない。主軸はN45°Wを向く。土器が少量出土した。588は須恵器、589・590は土師器である。出土土器から7世紀中葉頃の竪穴住居跡と考えておく。

##### S H02 (第103図, 図版19)

E22/23境に位置する。長方形の竪穴住居跡で、南側はベッド状造構のように1段高くなっている。主軸はN12°Wを向く。伴うピットは5個あるが、いずれも浅く、どれが主柱穴となるのか或いはそうでないのかわからない。東壁沿い北から1m付近で厚さ10cmの焼土・炭化物の堆積層を検出した。床は壁から少し離れた部分が長楕円形に焼けており、ここに移動式窯が据えられていたらしい。埋土は東西で1層、南北で3層に分かれ、いず



第106図 SH11平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)

う。

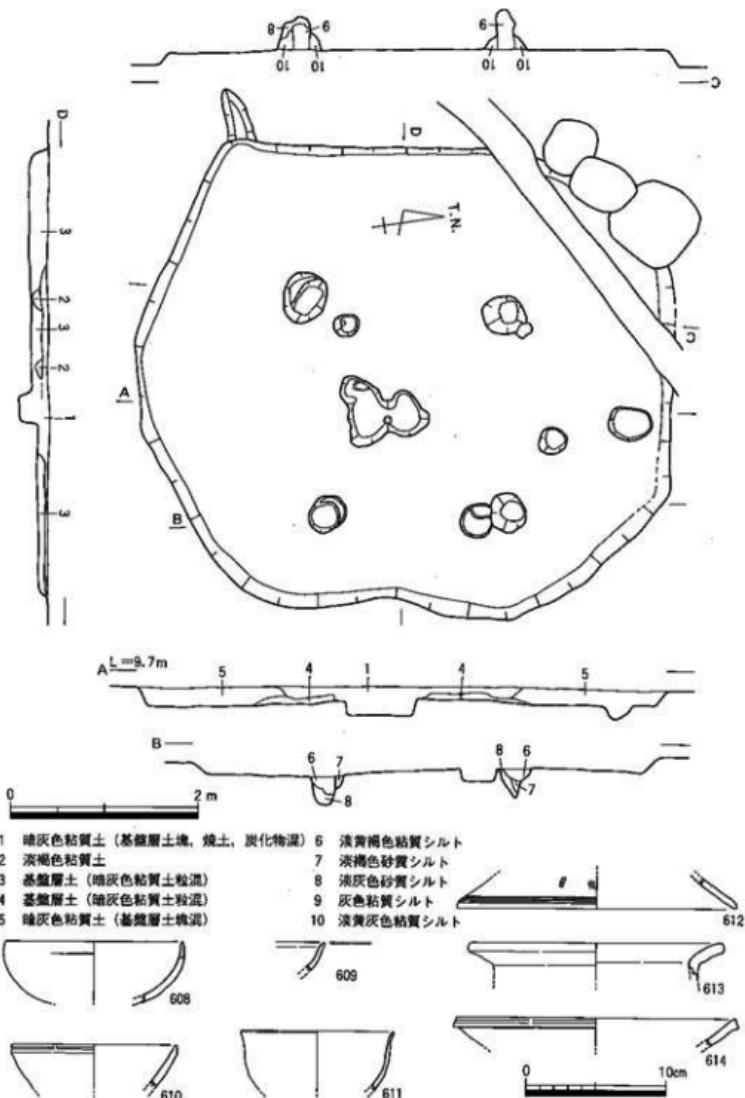
### S H03 (第104図, 図版20)

D/E 24境に位置する。一辺約5mの方形の竪穴住居跡で、壁溝を巡らす。主軸はN $18^{\circ}$ Eを向く。主柱穴は4個である。西辺沿い中央に半円形の張り出しがあり、作り付け竈の煙道の上部が削平された残りの可能性がある。この内側は10cmほど円形に掘り窪められ、その中に焼けていない土が堆積し、その上に焼土がのっていた。一方作り付け竈となるべき土手状の盛り土は見あたらなかった。窪みの更に東では、図示していないが、径5cmほどのピットを検出している。窪みの上で602の長胴壺の上部10cmがきれいに据わった状態で出土した。このため当初竈に転用した壺かとも考えたが、接合すると底付近まで復元できた。以上の状況から、立ち退きにあたって、竈を破壊し、この場で壺下半を割り、上部のみ置いたと読みとれるが、理由はわからない。また壺については偶然その位置に残

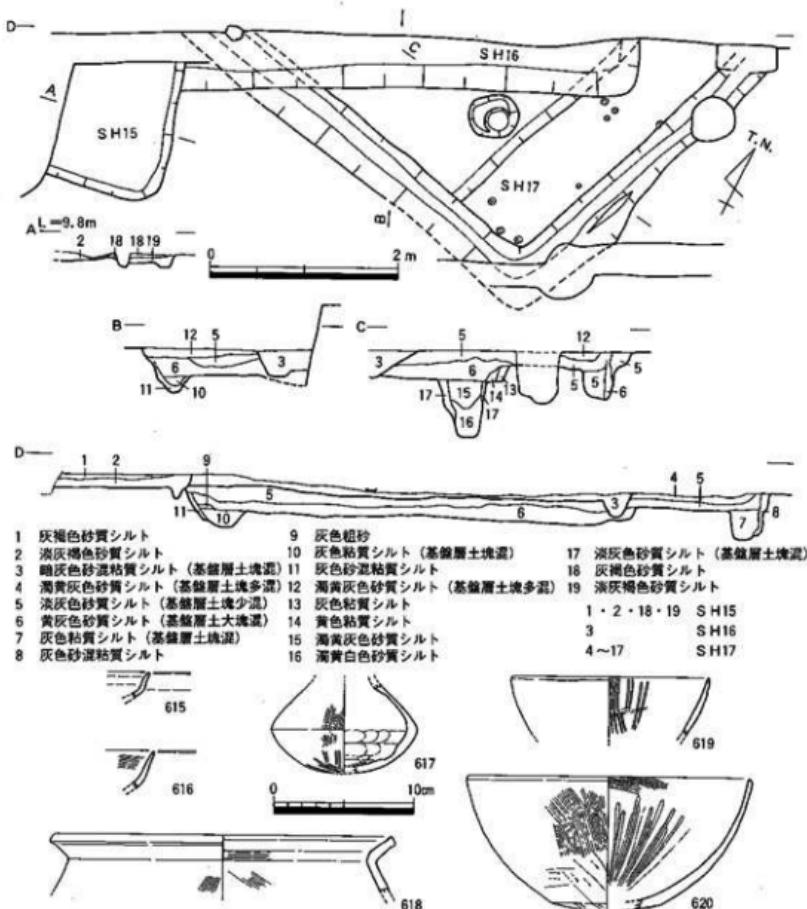
れも焼土・炭化物及び基盤層土の小塊を含むことから、意図的な埋め戻しと考えられ、かつ南側から土を入れていったと判断される。

コンテナ1箱分の土器が出土した。591~595は須恵器、596~601は土師器である。591は混入品である。597・598は放射状暗文が2段である。599は外面に赤色顔料を塗っている。601も9世紀前半頃の混入品である。この他須恵器壺、土師器皿・壺・蛸壺・甕等の破片が出土した。土師器は平城宮土器IIの時期にあたることから8世紀第2四半期頃の竪穴住居跡と考える。

東辺とS B019・020の西柱列が捕うことから、同時存在の可能性が高い。面積が小さいことから、作業小屋等の用途に充てられたものであろ



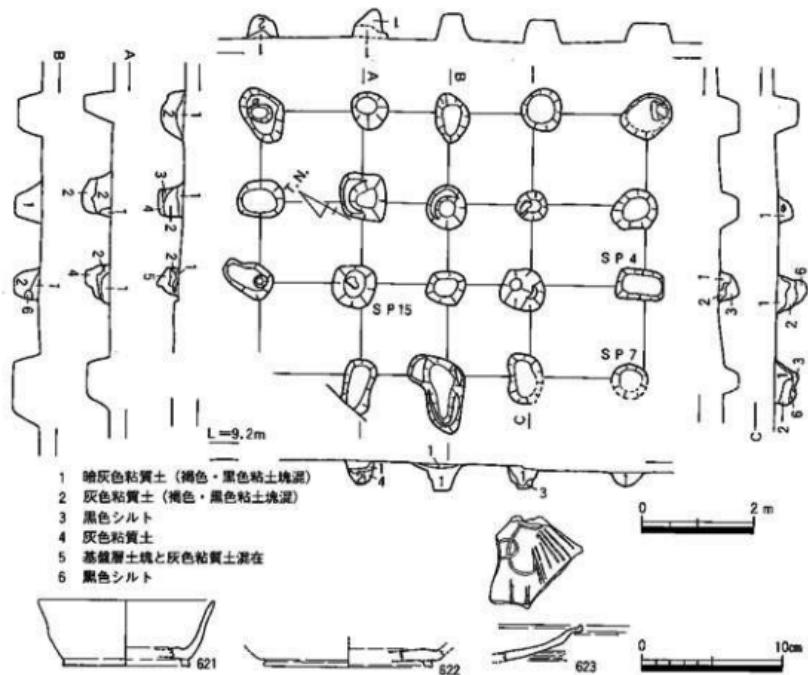
第107図 SH12平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)



第108図 SH15, SH16, SH17平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)

されていた可能性もないとはいえない。この土師器壺602は内面上半の指押さえの窪みに布痕が残されていた。指先に巻いたか掌全体にのせて指押さえ調整を行ったと見られる。破片で少量ながら他に須恵器壺、土師器皿・壺等が出土している。

S H03の時期は、決め手の土器に欠くが、長胴壺の出現後SH02以前になる。



第109図 S B 001F平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

#### S H04 (第105図, 図版19)

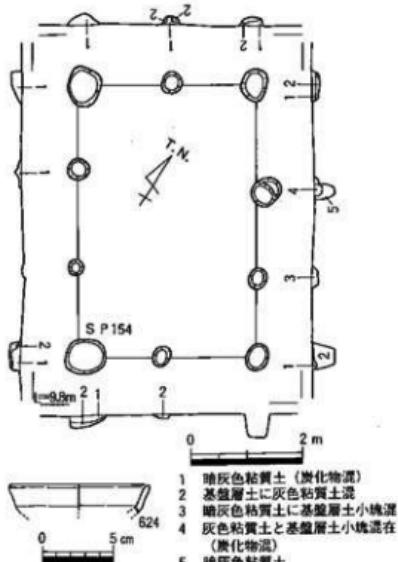
E 23に位置する。4.5×6.0mの長方形の竪穴住居跡である。壁溝を巡らす。主軸はN 19° Eを向く。上部はほとんど削平されている。伴うビットは数個あるがどれが主柱穴なのかまた主柱穴はないのか判明しなかった。

須恵器や土師器杯片など少量の土器が出土している。S H04の時期は603の須恵器蓋の示す7世紀後半以降で、S D014やS B019・083・084以前である。

#### S H11 (第106図, 図版21)

C 22に位置する。3.2×3.5mほどの隅丸の小型の竪穴住居跡である。主軸はN 32° Eを向く。深さ10~20cmの小さなビットが4個各隅に存在する。これが主柱穴となるのか明らかでない。埋土は2層とも基盤層土の塊を多く含み、意図的な埋め戻しが行われている。

土器片が少量出土した。604・605は須恵器、606・607は土師器である。604・605ともほ



第110図 S B002平・断面図 (1/100),  
出土遺物実測図 (1/4)

土器片が少量出土した。610・614は弥生土器、608・609・611～613は土師器である。出土土器から7世紀代の堅穴住居跡と考える。

SH15・16・17 (第108図、図版21・22)

C22に位置する。堅穴住居跡3軒が重なり合っている。いずれも大部分が調査域外に存在するため規模はわからない。すべて方形である。

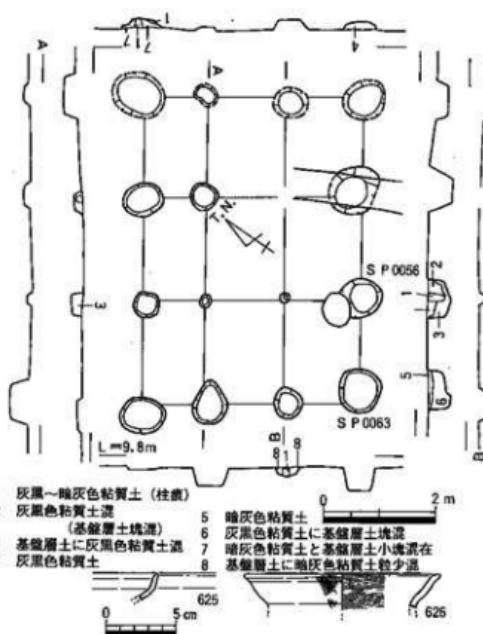
S H 15は3棟の中で西側に位置する。住居南東部が覗いている分である。ごく少量の土器が出土した。615は7世紀代の須恵器杯と思われる。

S H16は調査域の境に平行するように検出したもので、一辺5m以上あることが判明している。断面図を見ると壁溝が付属する。埋土は単層で基盤壟土を多く含んでいる。弥生土器がごく少量出土した。617は小型の長頸壺の体部に見える。

S H17はS H16の南に住居南東部が大きく覗いているものである。東辺にベッド状遺構を作り、壁溝が四辺に巡る。主柱穴を1個確認している。土器が少量出土した。619・620は内面を放射状に磨いている。620は内面に赤色顔料が付着している。

3つの堅穴住居跡は重なりの状況から、SH17→SH16→SH15の順に新しくなる。出

-112-



第111図 S B003平・断面図（1/100）、出土遺物実測図（1/4）ため、集落を営める土地が拡大したのである。しかし、その広がりうる地域は未だ限界があったらしく、隣接するⅢ区3調査区をみると住居等が建てられた形跡はない。

全ピットから計コンテナ1箱分の土器が出土している。621・622は須恵器、623は土師器である。621はS P4、622はS P7、623はS P15から出土した。他に須恵器高台付杯・皿・壺・甕、土師器皿等が認められ、土師器には赤色顔料を塗ったものも存在する。

出土土器よりS B001Fは8世紀中葉以降に建てられたものであり、南のS B048等に主軸方位が似ることから、9世紀前半の建物跡と考える。

#### S B002（第110図）

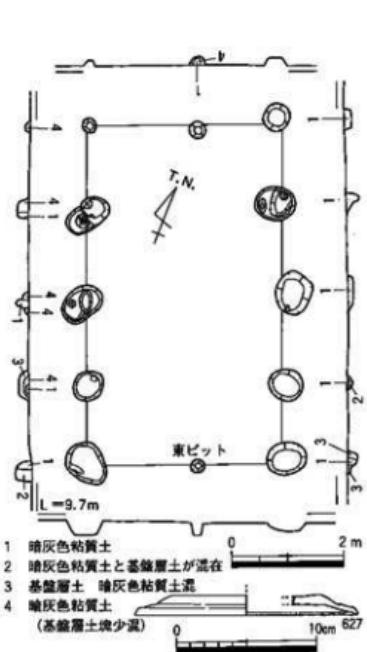
E21に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡で、主軸はN32°Wを向く。S H01より新しい。624はS P0154より出土した須恵器杯である。出土土器は7世紀中葉を示すが、S H01より新しいことから7世紀後葉の建物跡と考えておく。

土器もこれに対応する。S H15は7世紀代、S H16とS H17は弥生時代終末頃のものと考える。

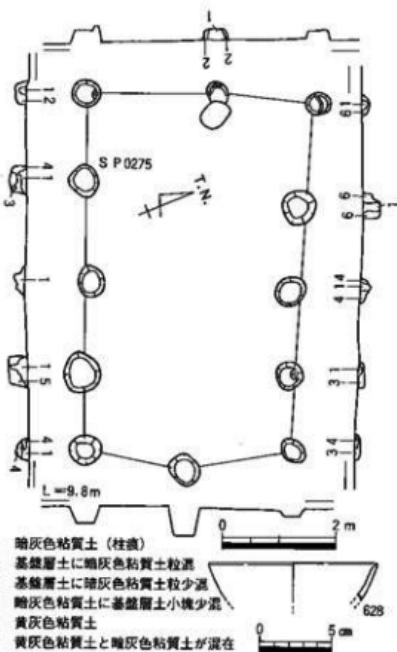
#### 掘立柱建物跡

##### S B001F（第109図）

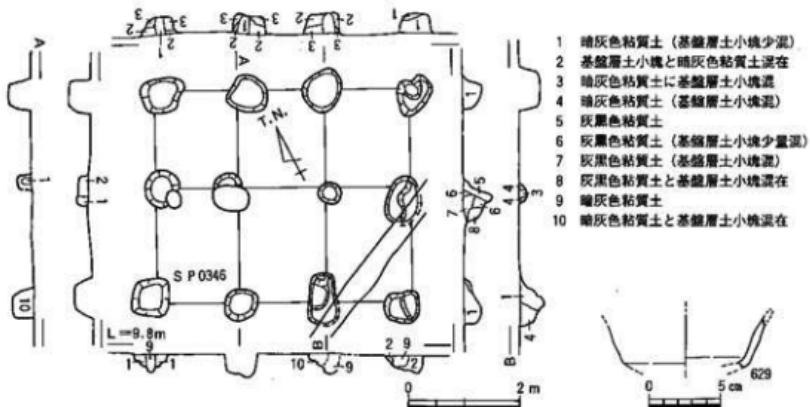
B/C24/25に位置する。3間×4間の総柱建物跡で、主軸はN28°Wを向く。S B001 Fの建てられている地点はこれまでたびたび述べてきたように、元来低地であり、弥生時代中期以来包含層の堆積が進んできた。それがこの時代にはその堆積がほぼ終了し、周囲との高低差がなくなった



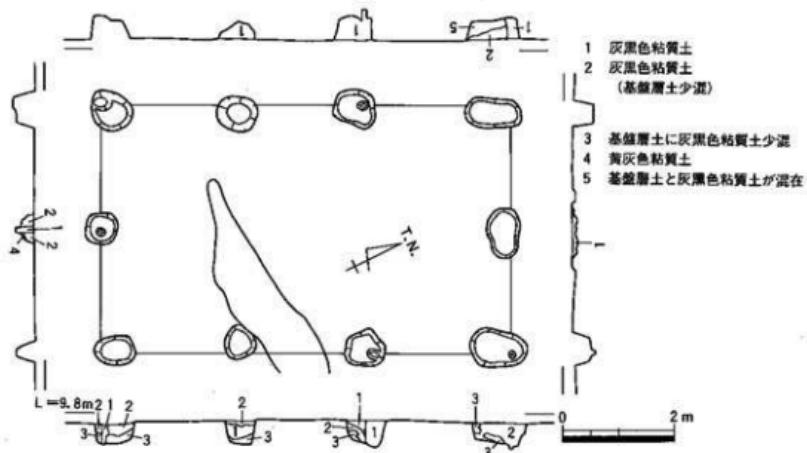
第112図 SB 004平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



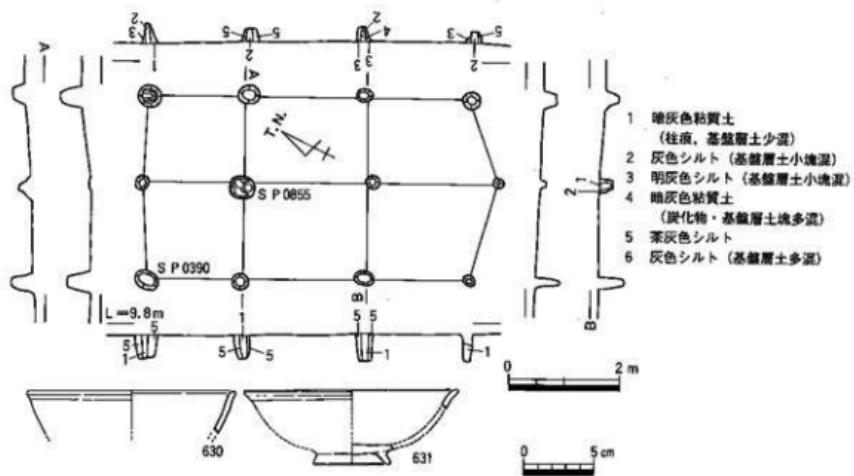
第113図 SB 005平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第114図 SB 006平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



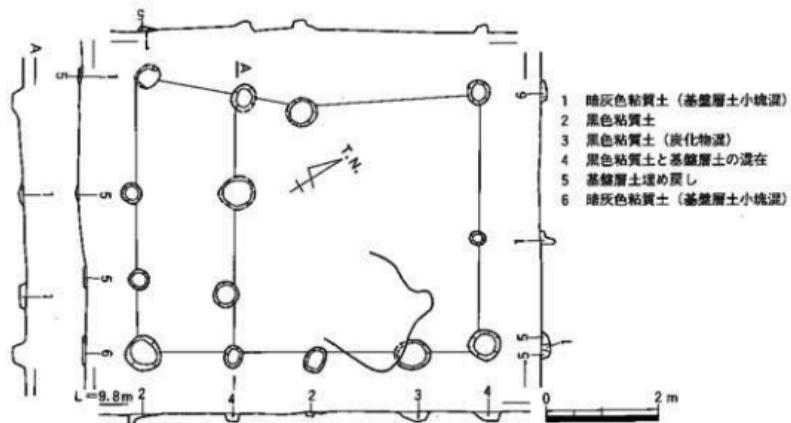
第115図 SB 007平・断面図 (1/100)



第116図 SB 008平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

SB 003 (第111図, 図版23)

E 21/22に位置する。3間×3間の掘立柱建物跡で、小型ピットを束柱と見るなら、総柱建物跡になる可能性がある。主軸はN56° Eを向く。SB 011・SD 007Aより古い。S

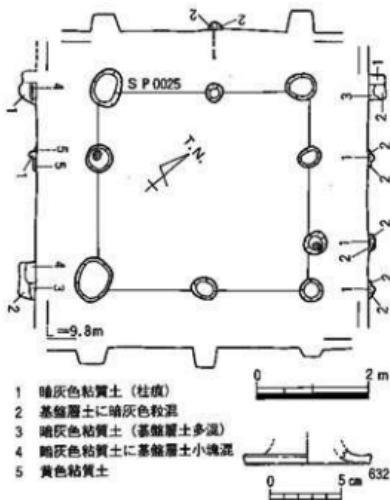


第117図 S B009平・断面図 (1/100)

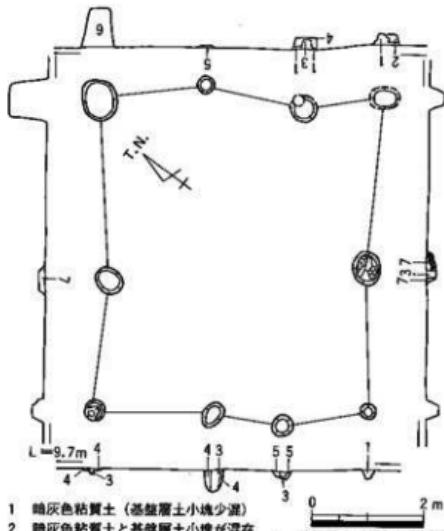
B011とは方位が似、面積が広がりながらほぼ重なることから、S B011は建て替えた建物の可能性がある。625はS P0063, 626はS P0056から出土した。625は須恵器、626は上部器である。出土土器から、S B003は7世紀中葉以降に建てられたものであり、S B010に近い7世紀後葉の建物跡と考える。

#### S B004 (第112図)

E 22に位置する。2間×4間の掘立柱建物跡で、桁方向の柱並びが悪くなるのを無理すれば、総柱建物跡になる可能性がある。主軸はN21°Wを向く。北柱列に接するよう、ピットが3個並ぶが、建て替えか別の建物か判断できない。一部柱穴には石が詰められる。627は南辺の中央柱穴から出土した須恵器蓋である。出土土器から、S



第118図 S B010平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4)



第119図 S B011平・断面図 (1/100)

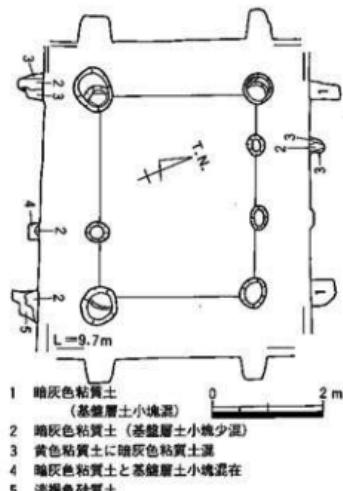
B004は9世紀前半の建物跡と考える。

#### S B005 (第113図)

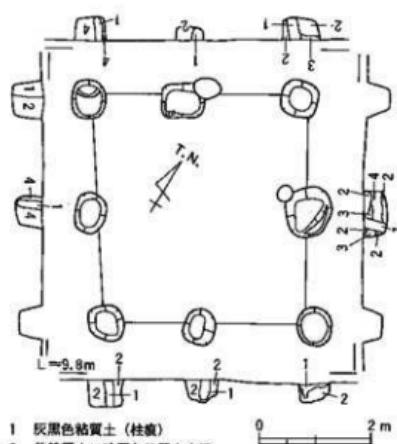
E22に位置する。2間×4間の掘立柱建物跡で、主軸はN66°Wを向く。梁間中央の柱は棟持柱状に少し外に張り出す。S B014より新しい。S B006とは南列が揃うことから、両者は同時期と判断する。628はS P0275から出土した須恵器杯である。土器の出土が少なく時期決定が難しいが、S B006との関係から、S B005を7世紀中葉頃の建物跡と考えておく。

#### S B006 (第114図、図版24)

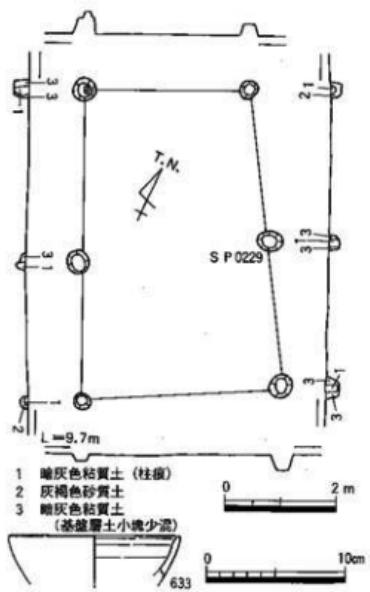
E22に位置する。2間×3間の総



第120図 S B012平・断面図 (1/100)



第121図 S B014平・断面図 (1/100)



第122図 S B015平・断面図 (1/100),  
出土遺物実測図 (1/4)

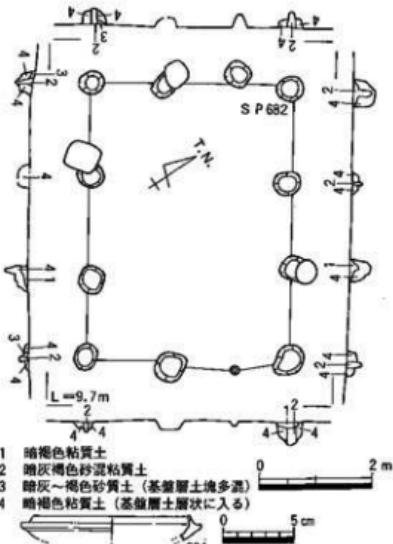
柱建物跡で、主軸は N63° W を向く。629は S P0346から出土した須恵器杯である。高杯と思われる。土器の出土が少なく、時期決定が難しいが、近くの S D010の向きと似ているということもあり、S B006を7世紀中葉頃の建物跡と考えておく。

#### S B007 (第115図、図版24)

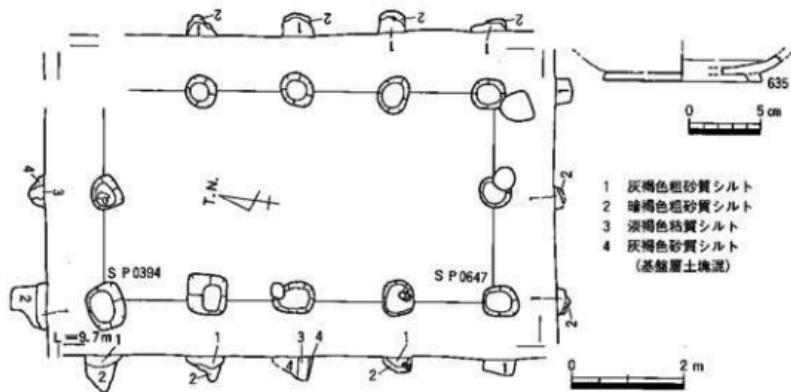
E/F23境に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡で、主軸は N27° E を向く。柱穴からは須恵器、土師器などが少量出土し、図示していないが、出土須恵器の中には高杯や立ち上がりを持つ杯身が存在する。後者は立ち上がり径13cm弱である。これらの須恵器の時期でいえば、S B007は7世紀前半の建物跡ということになる。かつ、S B006とは主軸方位・南北方向の柱列が揃う。時期的にも S B005・006と3棟が並んでいた可能性を考えておく。ただし、S B006とS B007が近すぎることには疑問が残る。

#### S B008 (第116図)

E/F23/24に位置する。2間×3間の総柱建物跡で、主軸は N26° W を向く。柱穴は總じて小さくそれと関係があるのか深い。一部柱穴には石が詰められている。630は S P0855



第123図 S B016平・断面図 (1/100), 出土  
遺物実測図 (1/4)



第124図 SB017平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

から、631はSP0390から出土した。ともに土師器椀である。

SB008は出土土器から9世紀以降の建物跡であるが、SD009等の溝群と方位が揃い、似た遺物を出土することから、10世紀代に属すると考えておく。

#### SB009 (第117図、図版24)

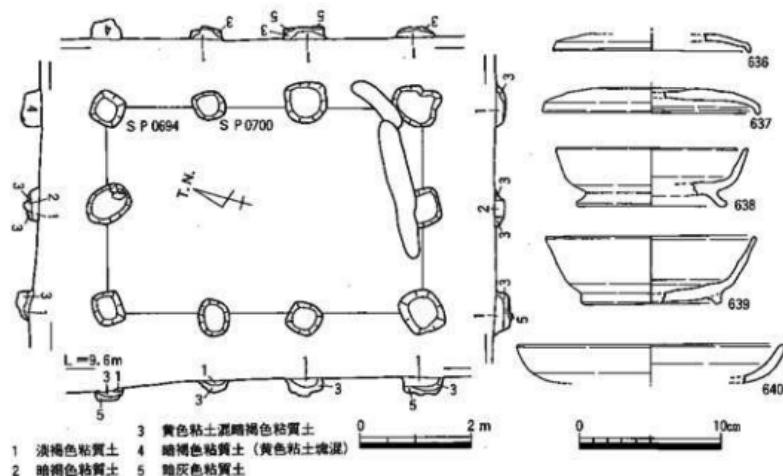
E21に位置する。南底の3間×3間の掘立柱建物跡である。西辺が歪む。主軸はN32°Eを向く。土師器や須恵器等が少量出土しているが、時期を決めることができる遺物に欠く。SB083と主軸方位が似ることから、8世紀初頭の建物跡と考えておく。

#### SB010 (第118図)

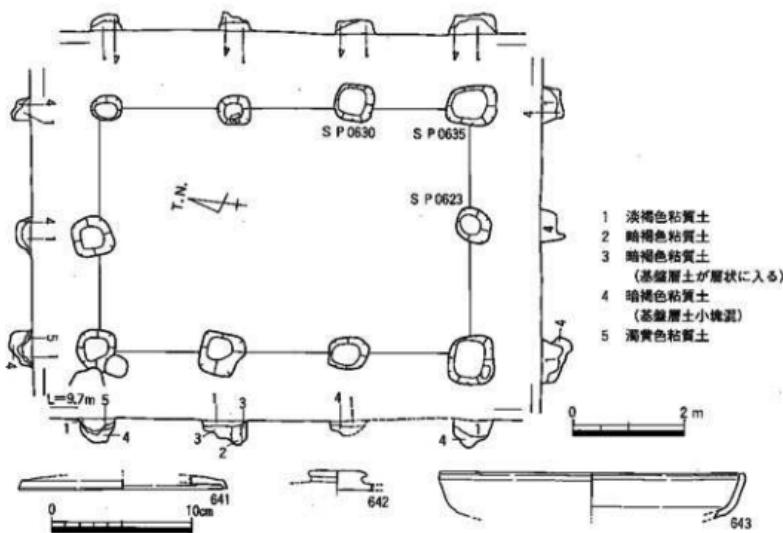
E21に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡で、主軸はN50°Wを向く。桁長が梁長より短い。SB009とは南辺が揃うように見える。一部柱穴には石が詰められる。632はSP0025から出土した須恵器高杯である。この他土師器細片が少量出土している。同じ柱穴を用いていることからSB003と近い時期のものであり、またSH01と主軸方位が似ており、SB010を7世紀中葉の掘立柱建物跡と考えておく。

#### SB011 (第119図、図版23)

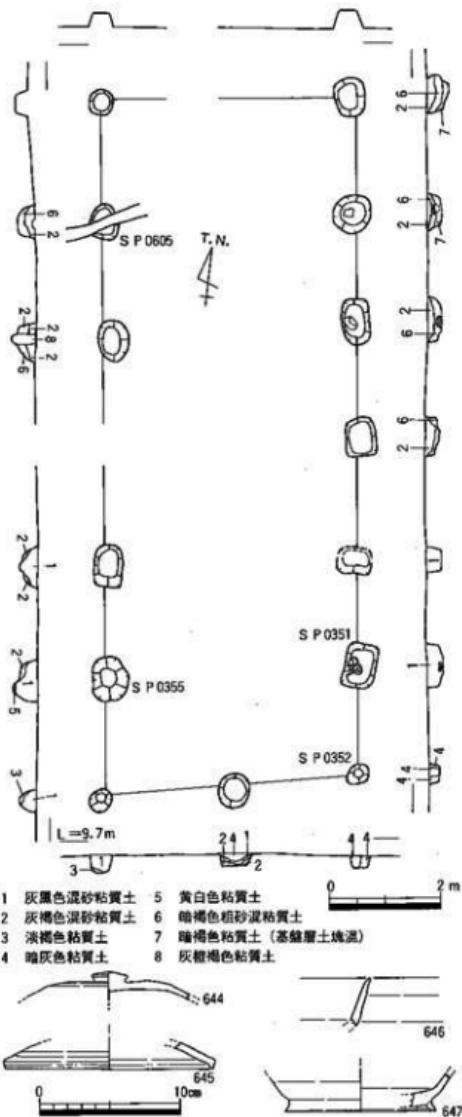
E21に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡で、主軸はN37°Wを向く。柱並びが不規則で、ピットのつなぎ方によっては総柱建物に復元することもできるが、柱間隔が長くなる。桁長が梁長より短い。一部柱穴には根石・詰め石が行われる。柱穴から土師器・須恵器などが少量出土しており、返りの消失した須恵器高台付杯の蓋を中に含んでいる。SB



第125図 S B018平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第126図 S B019平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第127図 S B020平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

003の建て替えとしても、主軸方位が似ることから、同じ7世紀後葉の建物跡と判断する。

#### S B012 (第120図)

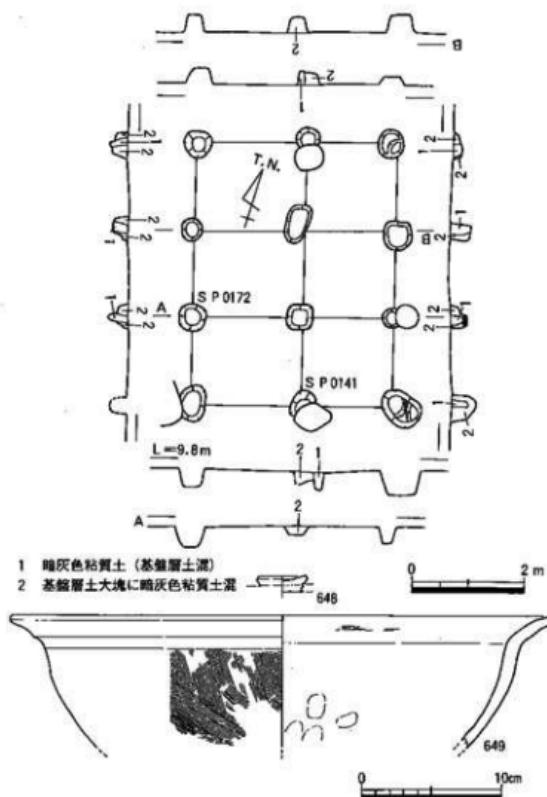
E22に位置する。1間×3間の小型の掘立柱建物跡で、主軸はN $67^{\circ}$ Wを向く。一部柱穴には石が詰められる。柱穴から土師器・須恵器などが少量出土しているが、時期決定は難しい。東柱列がS B005西柱列と揃うことから同時期の建物跡と考える。

#### S B014 (第121図)

E22に位置する。2間×2間の方形の掘立柱建物跡である。主軸はN $30^{\circ}$ Wを向く。柱穴平面は方形に近い。柱穴から土師器・須恵器などが少量出土しているが、時期決定は難しい。S B005より古い。方位が近似することから見れば、付近にあるS B119・120との関連が考えられる。

#### S B015 (第122図)

E22に位置する。1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN $24^{\circ}$ Wを向く。柱穴は小さい。633はS P0229から出土した須恵器杯である。出土土器は7世紀中葉を示す。柱穴が小さいのは傾向として時期が下り、また周辺の方針が



第128図 S B024平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4) × 4間の掘立柱建物跡である。主軸はN08° Wを向く。一部柱穴には根石・詰め石が行われる。635はS P0394から出土した須恵器高台付杯である。他に須恵器・土師器が少量出土している。S P0657では柱の根石にサスカイトの原石を打ち欠いたものが用いられていた。出土土器から8世紀代の建物跡であり、後述するS B019と同時期であることから、8世紀前葉のものと考える。

S B018 (第125図)

E/F23に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN16° Wを向く。一部柱穴には石が詰められる。636はS P0700、637～640はS P0694から出土した。636～639は須恵器、640は土師器である。他に比較的多くの土器が出土している。出土土器からS

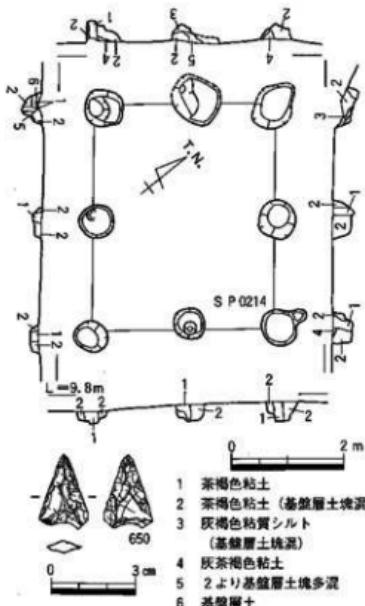
等しい建物や溝との関係から、9～10世紀と考える。

#### S B016 (第123図)

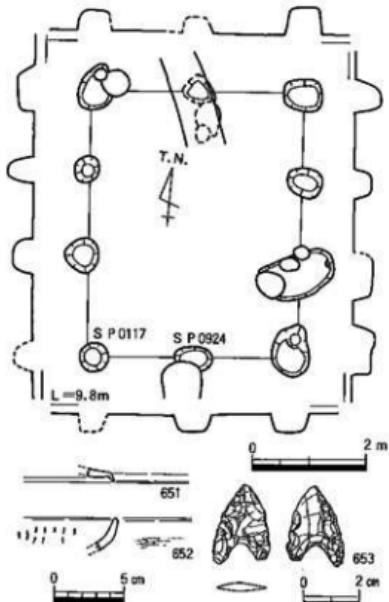
E/F23に位置する。3間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN56° Wを向く。S B018より古い。634はS P0682から出土した須恵器杯である。他に須恵器や土師器が少量出土している。S B080とは東の柱列が違う。近くのS D010の向きと似ているということとS B006等と方位が近似することから見て、7世紀中葉の建物跡と考える。

#### S B017 (第124図、図版25)

E23に位置する。2間



第129図 S B023平・断面図 (1/100), 出  
土遺物実測図 (1/2)



第130図 S B025平・断面図 (1/100), 出  
土遺物実測図 (1/4, 1/2)

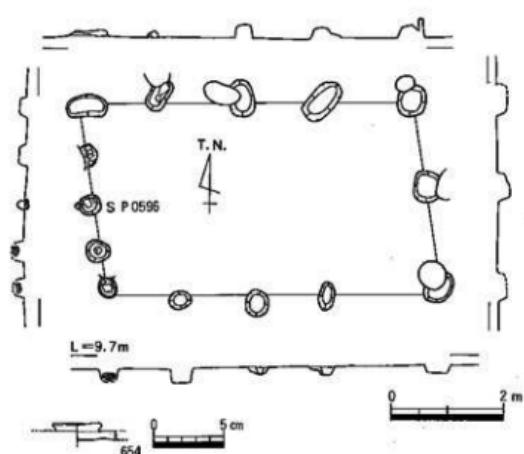
B018は7世紀後葉の建物跡と考える。またS B018とS B138は南柱列が揃うことから同時期と考える。

#### S B019 (第126図)

E23に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN07°Wを向く。一部柱穴には石が詰められる。S B081・083より新しい。S B017とは南柱列が揃い、棟間距離がS B017の梁間と一致する。またS B020とは同一梁間で桁行の異なる2棟の建物が南北に並ぶという関係にあり、3棟は同時期の建物とみなせる。出土土器から見ても同時期と判断してよい。641はS P0623, 642はS P0635, 643はS P0630からそれぞれ出土している。641は須恵器、642・643は土師器である。643は同時期の須恵器の影響を受けている。出土土器からS B019は8世紀前葉の建物跡と考える。

#### S B020 (第127図)

E23/24に位置する。2間×6間の細長い掘立柱建物跡である。主軸はN07°Wを向く。柱穴の平面形は長方形気味のものが多い。一部柱穴には根石・詰め石が行われる。IV区で



第131図 S B026平・断面図(1/100)、出土遺物実測図(1/4) 出土しており、土師器鉢臺も含まれる。

S B 023 (第129圖)

D21/22に位置する。2間×2間の方形に近い掘立柱建物跡である。主軸はN51°Wを向く。SD045より古い。須恵器や土師器が比較的多く出土しているが、図化に耐えるものがなかった。650はSP0214から出土した。隣接して主軸方位も似るSB042との関係から、7世紀前葉の建物跡と考えておく。

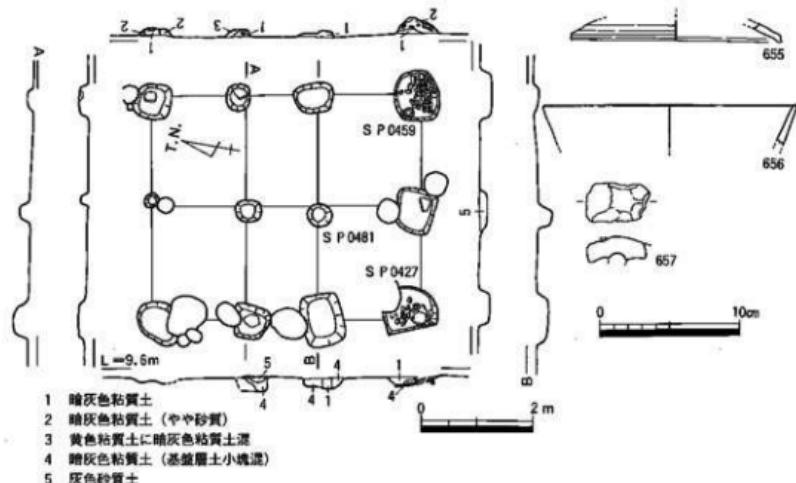
SB024 (第128図)

D22に位置する。2間×3間の総柱建物跡である。主軸はN16°Wを向く。S B093より新しい。648はS P0141から、649はS P0172から出土した。ともに土師器である。他に須恵器や土師器が少量出土しており、黒色土器A類片も1点含まれていた。このことと主軸方位の近似から、S B024は9世紀後半以降の建物跡と考える。

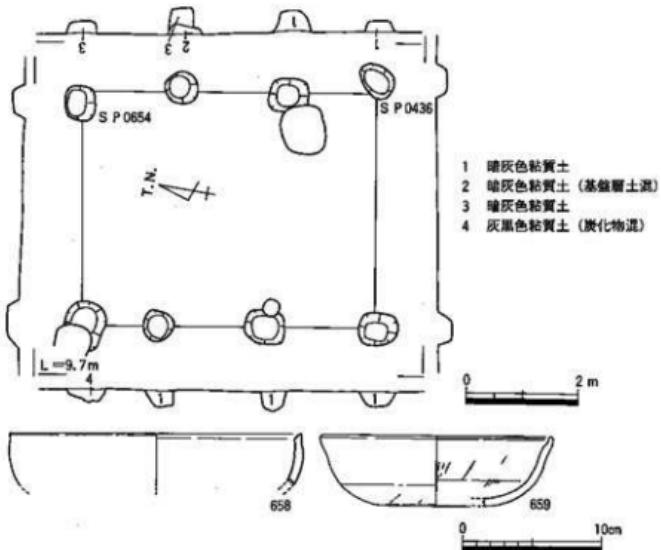
S B 025 (第130回)

D22に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN05°Wを向く。S B089・S D012より古い。651・652はS P0117から、653はS P0924から出土した。651は須恵器で、高杯の脚裾の可能性もある。652は土師器で、杯の可能性もある。他に須恵器や土師器が比較的多く出土している。出土した土器からS B025は7世紀中葉から後葉の建物跡であり、主軸方位の近似から後業と考えておく。

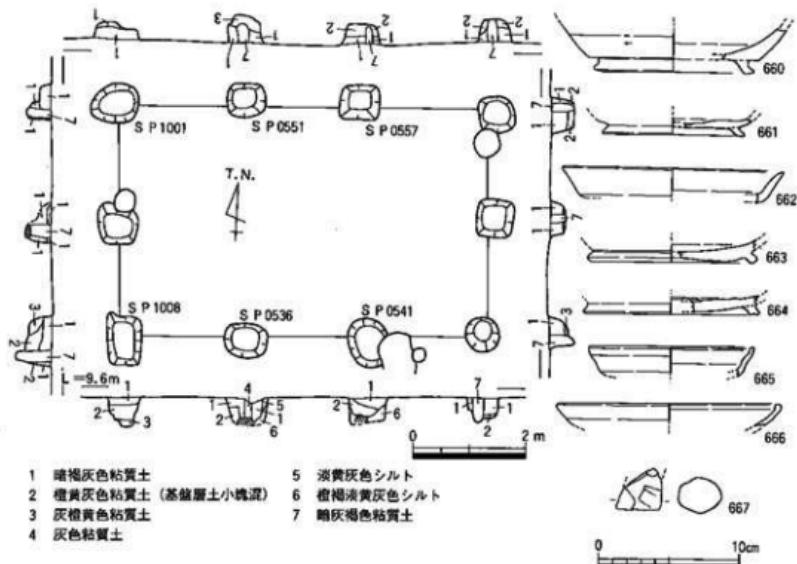
確認し得た掘立柱建物跡の中で面積が最も大きい(55.5m<sup>2</sup>)。644はS P 0605, 645はS P 0355, 646はS P 0352, 647はS P 0351からそれぞれ出土した。すべて須恵器である。646は高台が付くと思われる。圓化した土器は遺構関係から見た建物の時期よりやや古く、7世紀後葉のものである。他に比較的多くの土器片が



第132図 SB 027平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

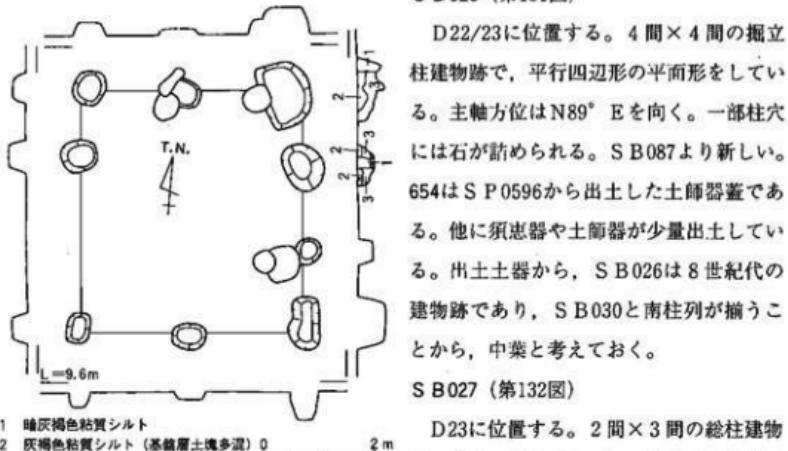


第133図 SB 028平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



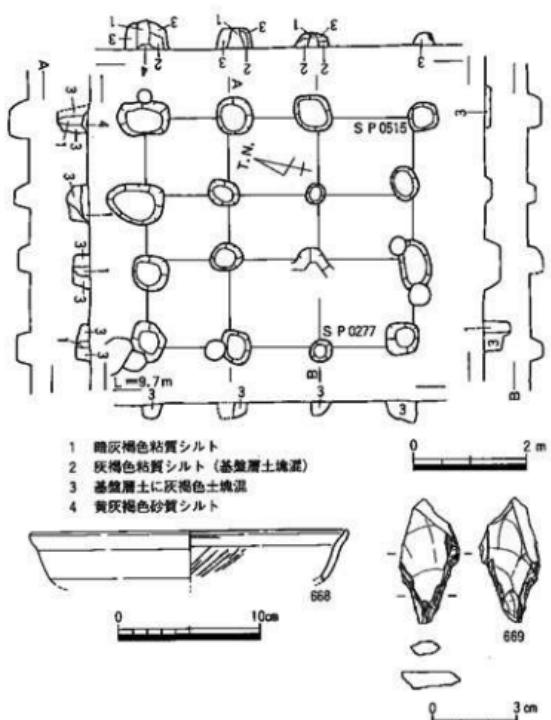
第134図 S B 030平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

#### S B 026 (第131図)



第135図 S B 031平・断面図 (1/100)

D 23に位置する。2間×3間の総柱建物跡である。主軸はN09° Wを向く。柱穴には根石を据えるものが多く、特に南東と南



第136図 S B 032平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

芯となるものに粘土紐を巻き付けて成形している。他に少量の土器片が出土している。出土土器及びS B 026と西柱列が揃うことから、8世紀中葉の建物跡と考える。

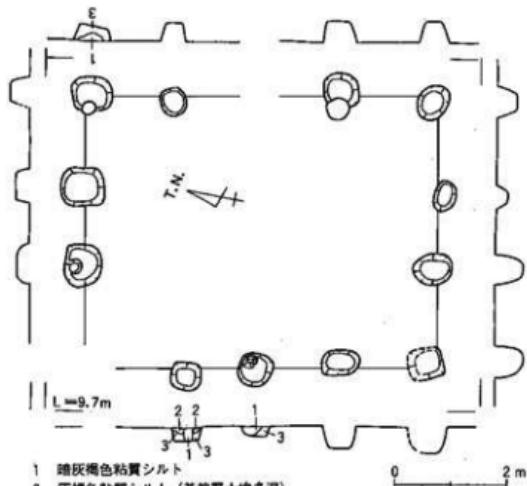
#### S B 028 (第133図)

D 23に位置する。1間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN10°Wを向く。S B 086より新しく、S B 054・055より古い。658はS P 0654から、659はS P 0436から出土した。ともに土師器である。658の径は確実ではない。S B 028は、659から7世紀末以降に建てられたものであり、S B 017・019と南柱列が揃うことから、8世紀前葉の建物跡と考える。

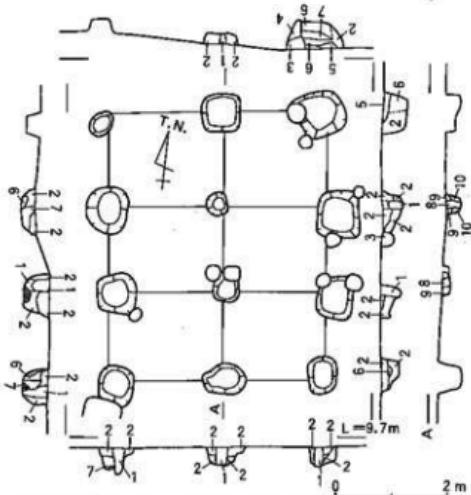
#### S B 030 (第134図)

D 22/23に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN87°Eを向く。一部

西隅の柱穴では根石の周りに小砾が多量に検出された。柱との隙間を埋め、強固に固定するために用いられたものである。東柱用のピットは小さい。S B 054・055より古い。S B 028とはピットの重複関係が矛盾するため、時期の前後が不明だが、いずれにせよこれら4棟は西柱列がほぼ揃っており、相次いで建て替えられていったものと判断される。655はS P 0427、656はS P 0481、657はS P 0459から、それぞれ出土した。655・656は須恵器、657は土師質の土器品である。657は環状になる用途不明のもので、



第137図 S B 033平・断面図（1/100）

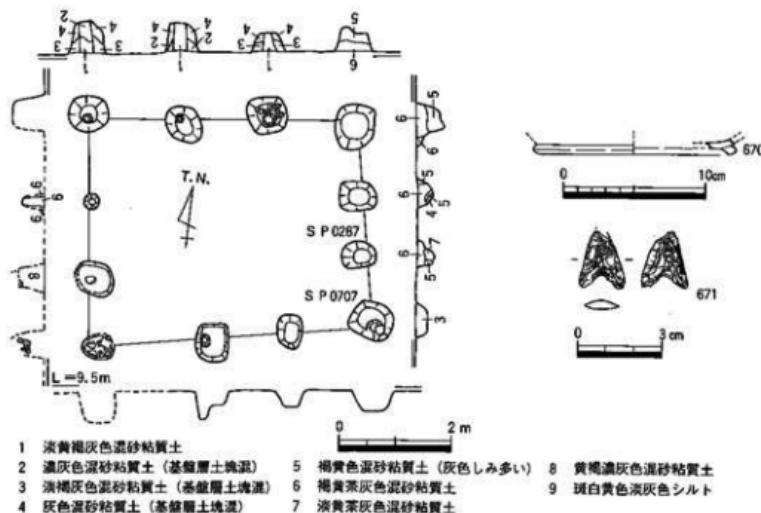


第138図 S B 034平・断面図（1/100）

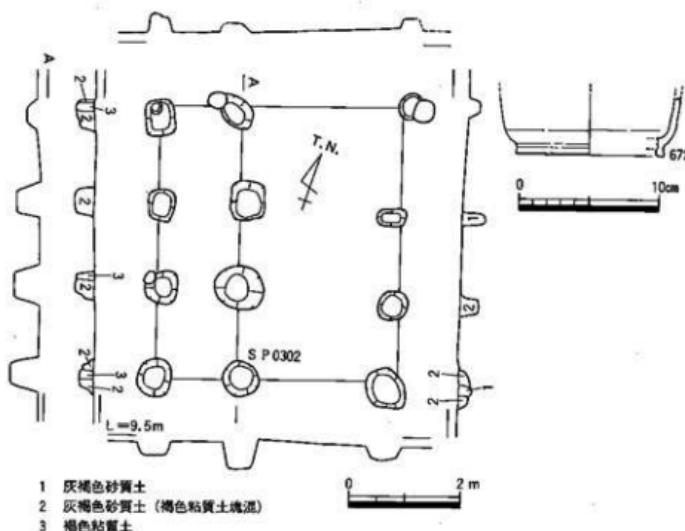
柱穴には石が詰められる。S B 026とは南柱列が揃うことから同時期の可能性がある。660・663はS P 0536, 661はS P 0551, 662はS P 0541, 664はS P 0541, 665はS P 1001, 666はS P 1008, 667はS P 0557からそれぞれ出土した。660～662・664は須恵器で、663・665～667は土師器である。665・666は径が確実でない。665は内外面に赤色顔料を塗っている。667は土馬の足先である。他に比較的多くの土器片が出土している。出土土器と、同時期の土器を出土するS B 032より古いことから、8世紀中葉の建物跡と考える。

#### S B 031（第135図）

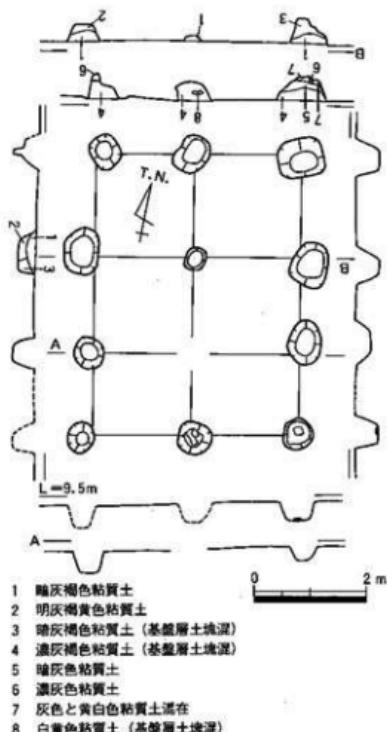
D 23に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN05°Wを向く。一部柱穴には石が詰められる。S B 033より古い。またS B 134とはピットの重複関係が矛盾するが、S B 033とも絡めて、S B 134より古いと思われる。柱穴内か



第139図 SB 035平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)



第140図 SB 036平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第141図 S B 038平・断面図 (1/100)

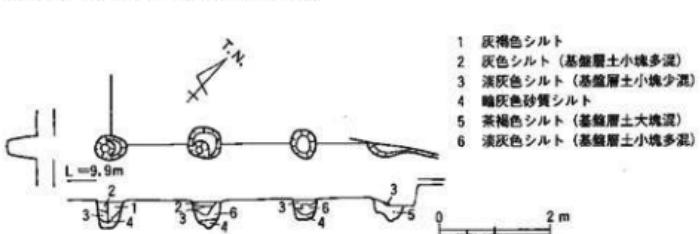
らごく少量の須恵器・土師器片が出土したが、時期決定は難しい。S B 030と東柱列が揃うことから、8世紀中葉の建物跡と考える。

#### S B 032 (第136図)

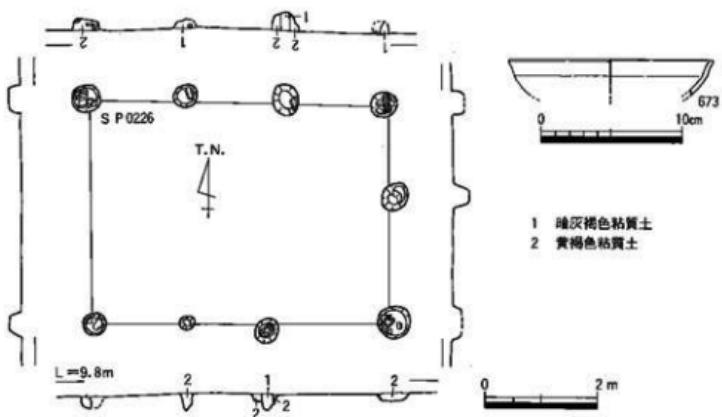
D 23に位置する。3間×3間の総柱建物跡である。主軸はN12° Wを向く。一部柱穴には石が詰められる。S B 030より新しい。S B 033と東柱列が揃う。668はS P 05 15, 669はS P 0277からそれぞれ出土した。668は土師器杯で、径が確定でない。他に比較的多くの土器片が出土し、赤色顔料を塗った土師器も存在した。出土土器と、S B 030との関係から、8世紀後葉の建物跡と考える。

#### S B 033 (第137図)

D 23に位置する。3間×4間の掘立柱建物跡である。主軸はN10° Wを向く。一部柱穴には石が詰められる。S B 031より新しく、S B 134より古い。S B 032と東柱列が揃うことから、8世紀後葉の建物跡と考える。



第142図 S B 042平・断面図 (1/100)



第143図 SB 040平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

**SB 034 (第138図, 図版25)**

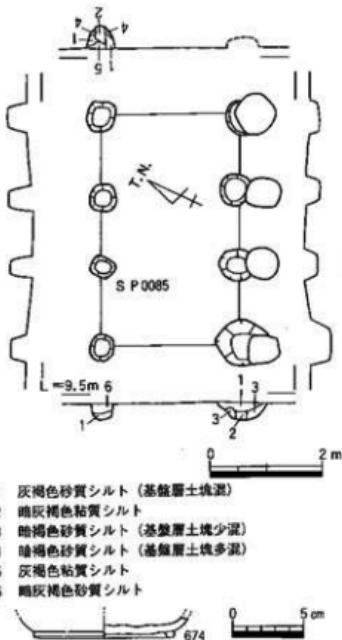
C22/23に位置する。2間×3間の総柱建物跡である。主軸はN07° Wを向く。東柱の柱穴は周囲の柱穴より小さい。また一部の柱穴には根石・詰め石が用いられている。SB 038と西柱列を揃えて南北に並んでいる。出土土器は比較的多いものの、時期判断が出来るようなものは殆どない。底部と体部の境の屈曲が強い土師器杯(皿)の小片が1点あり、それから判断すれば、8世紀中葉以降の建物跡となる。同時期と推定するSB 031と主軸方位が近似する。

**SB 035 (第139図)**

C23に位置する。3間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN07~11° Wを向く。一部の柱穴には根石・詰め石が用いられている。SB 106と南北に並ぶ。SB 038より古い。670はSP 0287, 671はSP 0707から出土した。670は須恵器である。他に比較的多くの土器片が出土しているが、時期判断できる材料には乏しい。掲載した土器は8世紀代のものであり、SB 038・106との関係から、8世紀前葉の建物跡と考える。

**SB 036 (第140図)**

C23に位置する。2間×3間の総柱建物跡か、もしくは梁間の間隔が異なることから、1間×3間で西に庇のつく建物跡である。主軸はN13° Wを向く。672はSP 0302から出土した須恵器高台付杯である。他に須恵器・土師器片が少量出土している。672から、8世紀以降の建物跡であり、SB 032と主軸方位が近似することから、後葉に属すると考える。



第144図 S B 045平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

#### S B 042 (第142図)

C 22に位置する。調査域の境で検出したため1辺が3間以上であることのみ確実である。しかし、Ⅲ区 S B 06のすぐ南で検出した2つのピットと方向・柱間距離が等しく、これとつながるとすれば、2間×3間の掘立柱建物跡となる。主軸はN48° Eを向く。S D 043・044より新しい。須恵器・土師器片が少量出土したのみである。主軸方位の似る7世紀前葉或いは中葉の建物跡と考え、Ⅲ区 S B 06と主軸方位が異なる上に距離が近いことから、7世紀前葉と判断した。

#### S B 045 (第144図, 図版26)

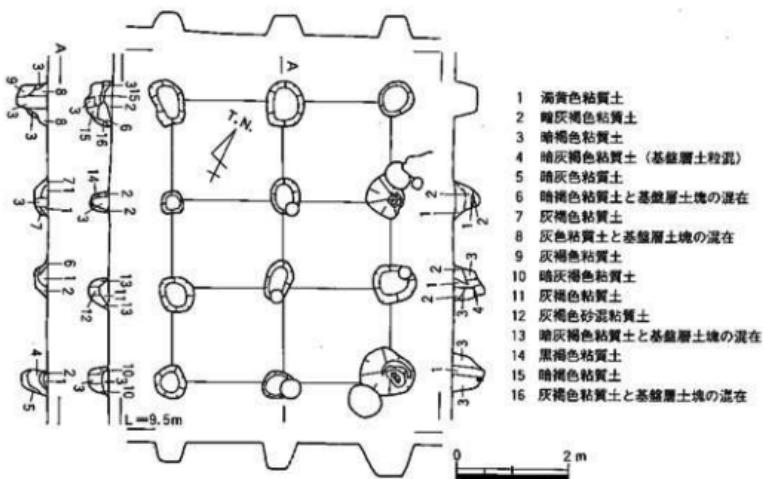
C 26に位置する。1間×3間の小さい掘立柱建物跡である。主軸はN64° Eを向く。S D 051より新しく、S B 050より古い。S B 050とは完全に重なることから、建て替えによって面積を広げたと判断できる。674はS P 0085から出土した須恵器高台付杯である。これによって8世紀以降の建物跡であることがわかる。他にごく少量の土器片が出土して

#### S B 038 (第142図)

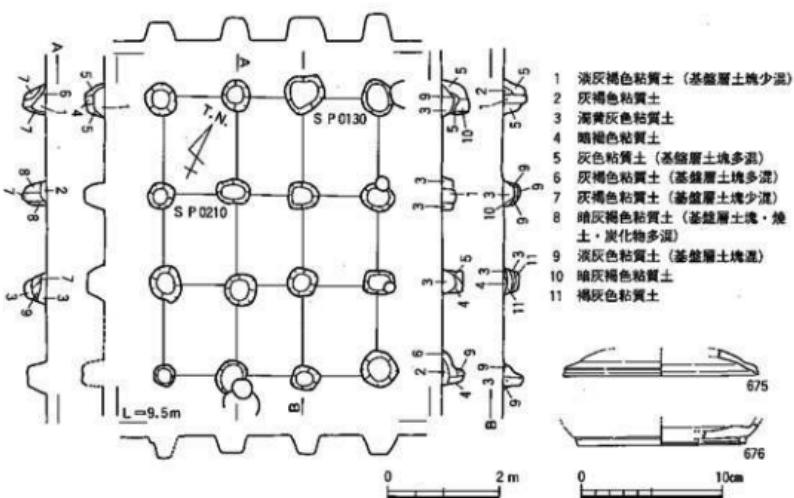
C 23に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN12° Wを向く。東柱の柱穴は周囲の柱穴より小さい。一部柱穴には根石を据える。S B 034と西柱列を捕えて南北に並んでいる。S B 035より新しい。須恵器・土師器片が少量出土しているものの、時期決定は難しい。S B 034との関係から、8世紀中葉の建物跡と考える。

#### S B 040 (第143図)

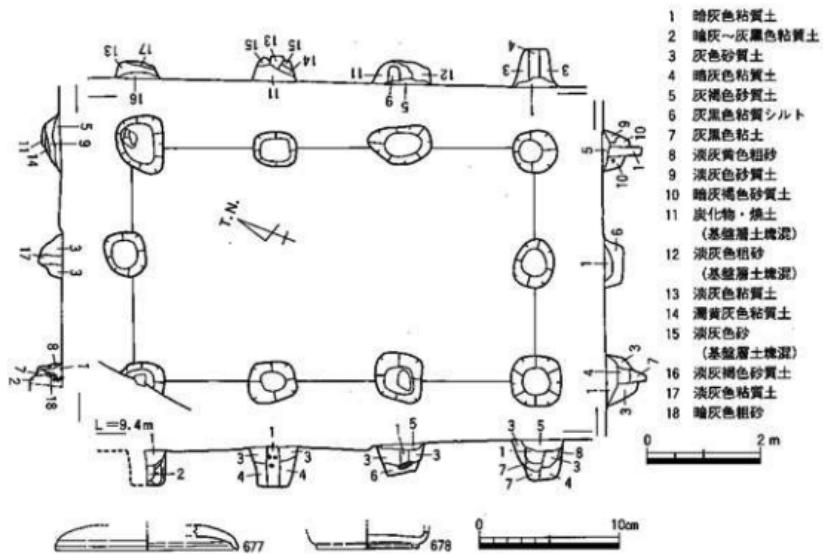
C 22に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN89° Eを向く。一部の柱穴には根石・詰め石が用いられている。673はS P 0226から出土した須恵器杯である。他に弥生土器・土師器片がごく少量出土している。出土土器は7世紀代のものであり、S B 030等と主軸方位が近似することから、8世紀中葉の建物跡と考える。



第145図 SB 046平・断面図 (1/100)



第146図 SB 047平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第147図 SB 048平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

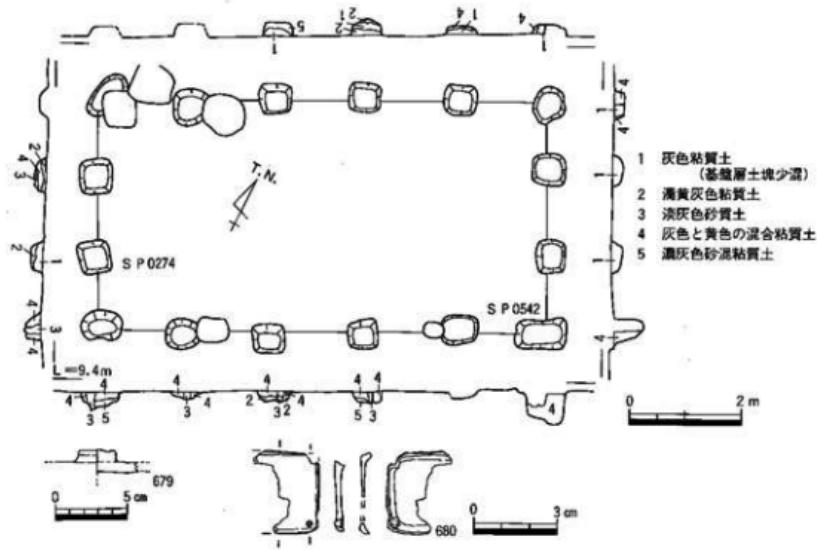
いる。同じ建物群を構成するSB 061との関係から、9世紀前半の建物跡と考えておく。

#### SB 046 (第145図)

C25に位置する。2間×3間の総柱建物跡である。主軸はN25°Wを向く。一部の柱穴には柱の周りに石を詰めている。SB 118より古い。須恵器・土器片が少量出土している。主軸方位・面積が等しいSB 047と建て替えの関係にあるとすれば、南西隅柱穴の他ピットを介した関係から、SB 047からの建て替えとなる。恐らく、これもSB 049・051, SB 045・050などの2時期建て替えに対応するものであろう。同じ建物群を構成するSB 061との関係から、9世紀前半の建物跡と考えておく。

#### SB 047 (第146図)

C25に位置する。3間×3間の総柱建物跡である。主軸はN25°Wを向く。SB 118より古い。SB 048・050等と南北に並ぶ。また、SB 046との関係は上述した。675はSP 0130, 676はSP 0210から出土した。ともに須恵器である。他に土器片が少量出土している。出土土器から8世紀以降の建物跡であり、同じ建物群を構成するSB 061との関係から、9世紀前半の建物跡と考えておく。



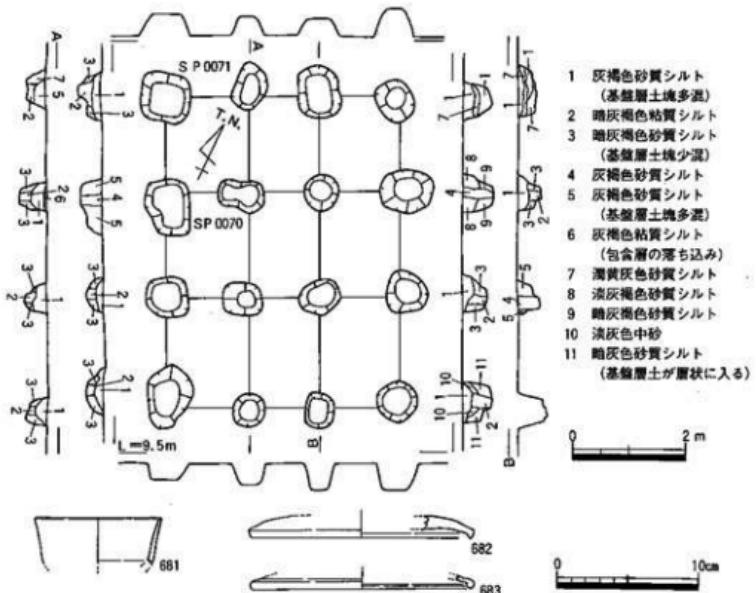
第148図 S B049平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

#### S B048 (第147図)

C25に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN25°Wを向く。一部の柱穴に根石や詰め石を行う。S B110より新しい。S B047・050と南北に並び、同時期と判断できる。S B050とは梁間も一致する。677・678ともS P0185から出土した須恵器である。他に赤色顔料を両面に塗った土師器杯などの少量の土器片が出土している。出土土器からS B048は8世紀前半以降に建てられたものであり、同じ建物群を構成するS B061との関係から、9世紀前半の建物跡と考えておく。

#### S B049 (第148図, 図版23・27)

D26に位置する。3間×5間の掘立柱建物跡である。主軸はN64°Eを向く。柱穴の平面形は方形をなす。S B051とは北東の柱穴が重複し、そこから梁間・桁行の方向が延びていることから、両者は建て替えの関係にあり、それは北東の柱穴(柱)を生かすことにより行われたことがわかる。また両者の柱穴の重複関係からS B051が新しく、面積が拡張されていることも、建て替えによく見られる現象である。S B061・140とは南北に並び、その間には西側にS B048・050等が並び、更に東にはS B057等が存在する。これらは出



第149図 S B 050平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4)

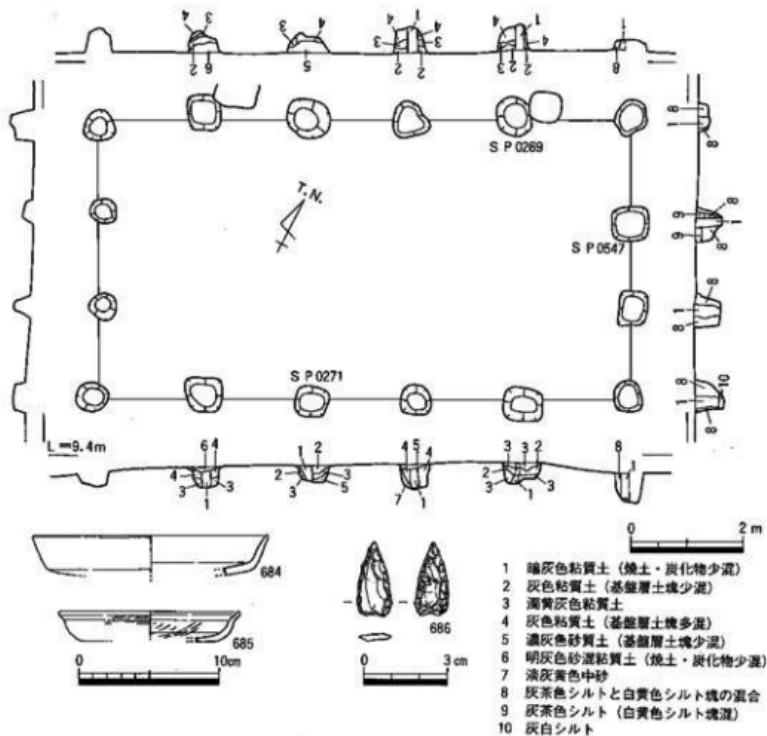
土器・柱並びの関係から見ても同一の建物群を構成すると判断できる。

S B 049柱穴からは680のような銅製の巡方の裏金具も出土しており、大型建物群が畿内中央権力の末端につながっていたことを伺わせる。

なお679はS P 0542、680はS P 0274から出土している。679は土師器である。680は表の巡方から折れた鉢がさび付いて残っている。その巡方は西に隣接するⅢ区3①(3)S D 01から出土している。他に少量の須恵器・土師器が出土した。出土土器から、8世紀以降に建てられたものであり、同じ建物群を構成するS B 061との関係から、9世紀前半の建物跡と考えておく。

#### S B 050 (第149図、図版26)

C 26に位置する。3間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN25°Wを向く。S B 045・S A 25・S D 051より新しい。またS B 049の項で述べたように大型建物群の一角を構成する。681・682はS P 0070、683はS P 0071から出土した。すべて須恵器である。他に少量の土器片が出土している。出土した土器から、8世紀後半以降に建てられたものであり、



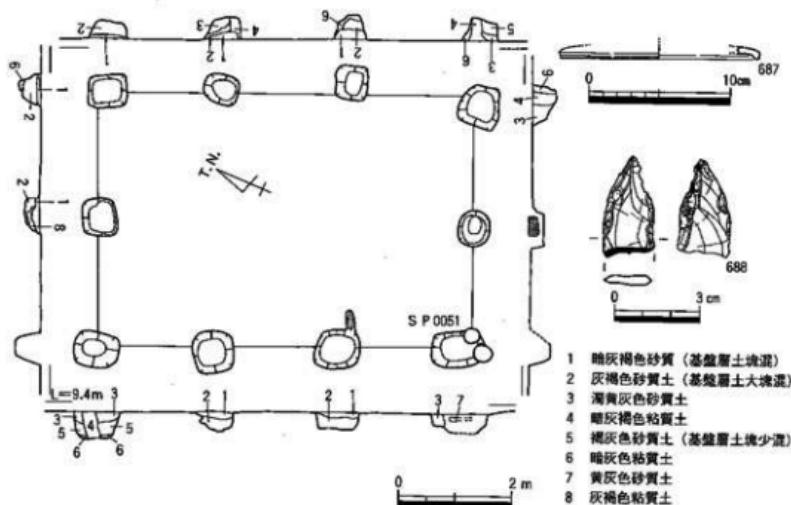
第150図 S B 051平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

同じ建物群を構成する S B 061との関係から、9世紀前半の建物跡と考えておく。

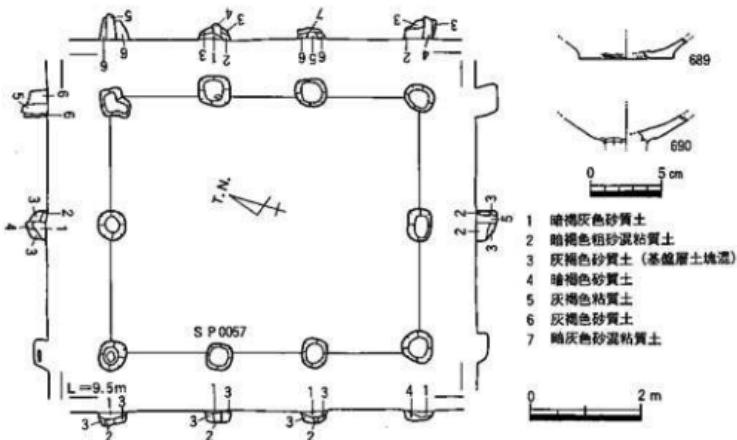
#### S B 051 (第150図, 図版27)

D26に位置する。3間×5間の掘立柱建物跡である。主軸はN66° Eを向く。S B 049との関係については既に述べた。ここでは両者の柱間距離が梁桁方向とも1.2倍という相似形での建物拡大が行われたことを追加しておく。

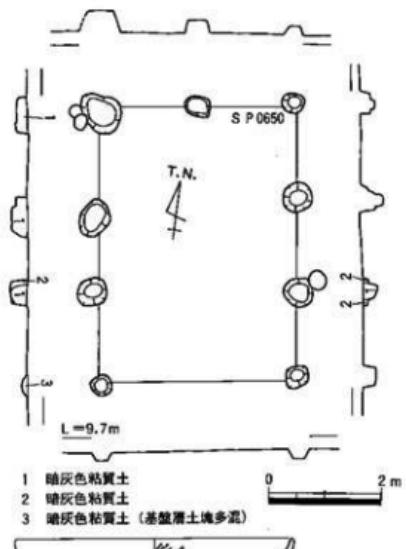
684はS P 0269, 685はS P 0271, 686はS P 0547から出土した。684は須恵器, 685は土師器である。685は内外面とも赤色顔料を塗っている。他に少量の土器片が出土しており、中には8世紀後半以降と思われる須恵器杯の底等も含まれる。このことから、S B 051は8世紀後半以降の建物跡であり、同じ建物群を構成するS B 061との関係から、9世紀後半の建物跡と考えておく。



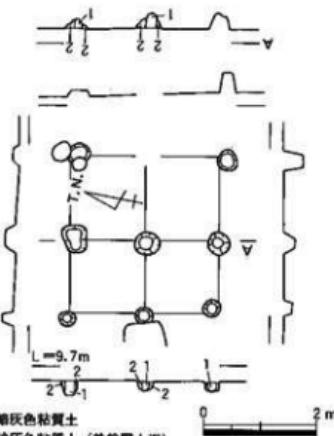
第151図 SB 052平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4, 1/2)



第152図 SB 053平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4)



第153図 S B 054平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4)



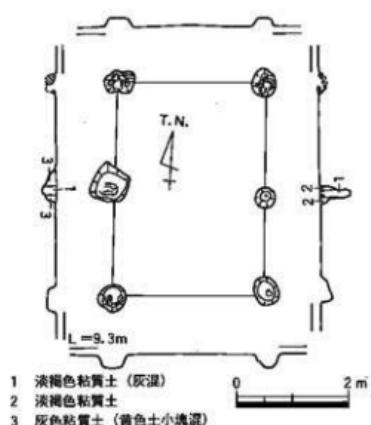
第154図 S B 055平・断面図 (1/100)

#### S B 052 (第151図)

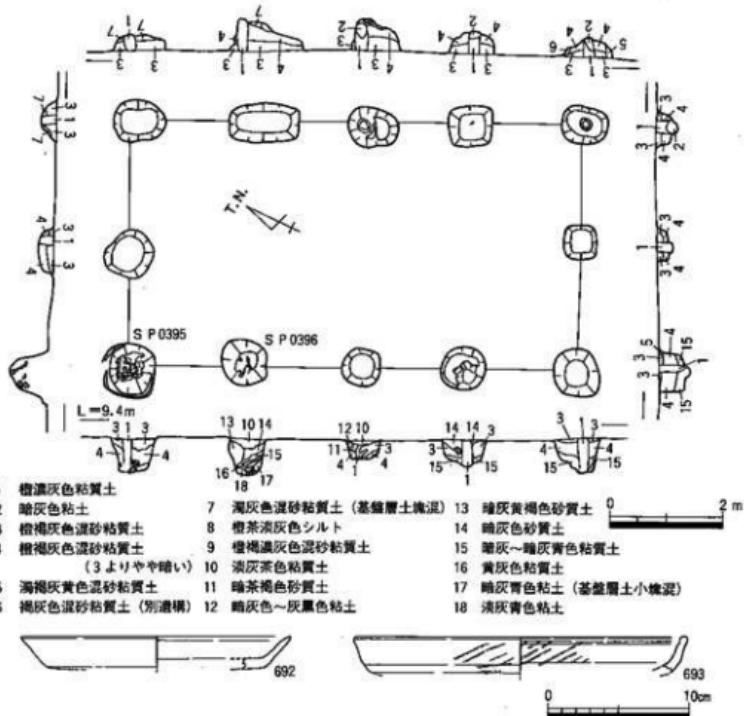
C/D25/26の境に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN23°Wを向く。柱穴平面は方形で、一部は根石を据える。S B 109と東柱列が揃うことから、同時存在の可能性を考えておく。687・688ともS P 0051から出土した。687は須恵器である。他に少量の須恵器・土師器片が出土した。出土土器から7世紀後半以降に建てられたものであり、S B 109との関係から、9世紀後半以降の建物跡と考えた。

#### S B 053 (第152図)

C/D25/26の境に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN17°Wを向く。柱穴平面は方形で、一部は根石・詰め石を用いる。S D 051より新しい。689・690はS P 0057から出土した土師器である。他に少量の



第155図 S B 056平・断面図 (1/100)



第156図 S B057平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4)

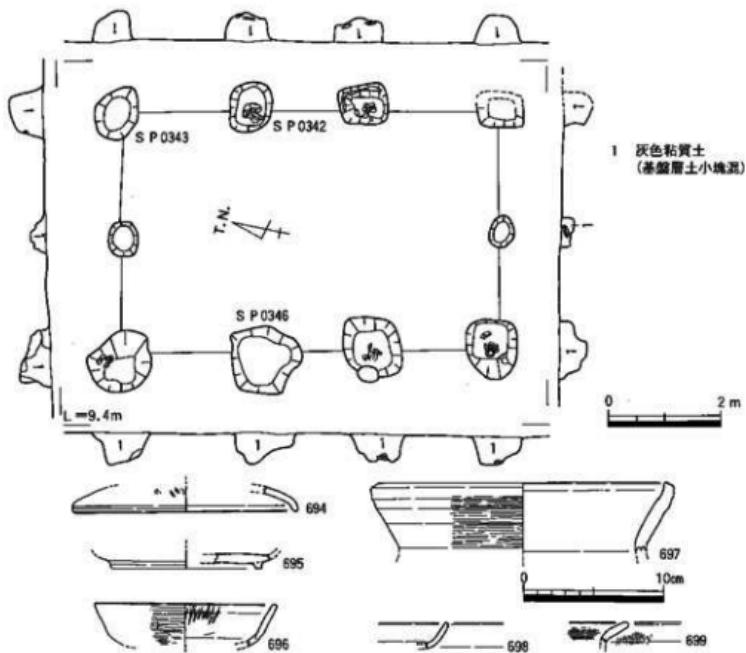
須恵器・土師器片が出土した。出土土器から9世紀後半以降の建物跡である。

#### S B054 (第153図)

D23に位置する。2間×3間の総柱建物跡である。主軸はN08° Wを向く。S B027・028より新しい。691はS P 0650から出土した土師器である。他に少量の土器片が出土した。出土土器及びS B027とはほぼ重なることから、同じ8世紀中葉頃の建物跡と考えておく。

#### S B055 (第154図)

D23に位置する。2間×2間の総柱建物跡である。主軸はN11° Wを向く。S B028より新しい。S B082・084と南柱列が揃うことから、同時存在の可能性が考えられる。柱穴は小さい。その中からごく少量の須恵器・土師器片が出土した。S B028との関係から8世紀以降の建物跡であり、S B027・054も同時期であること、主軸方位がS B032に近似



第157図 S B 058平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

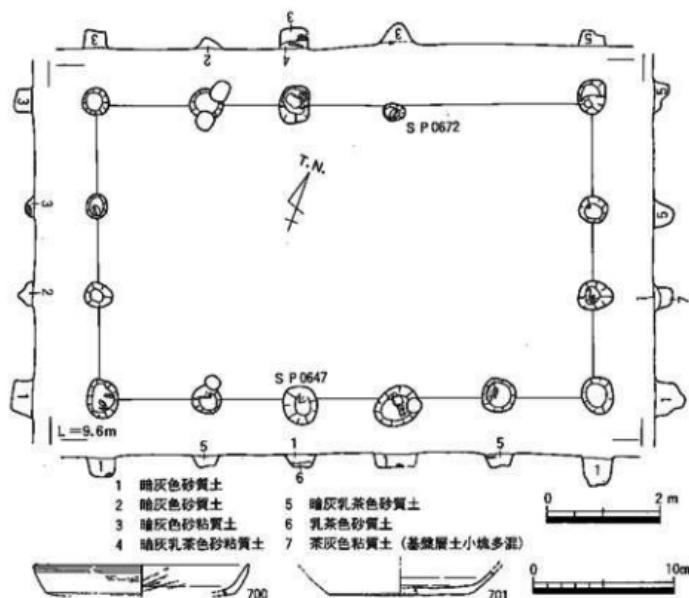
することから、8世紀後葉の建物跡と考えておく。

#### S B 056 (第155図, 図版27)

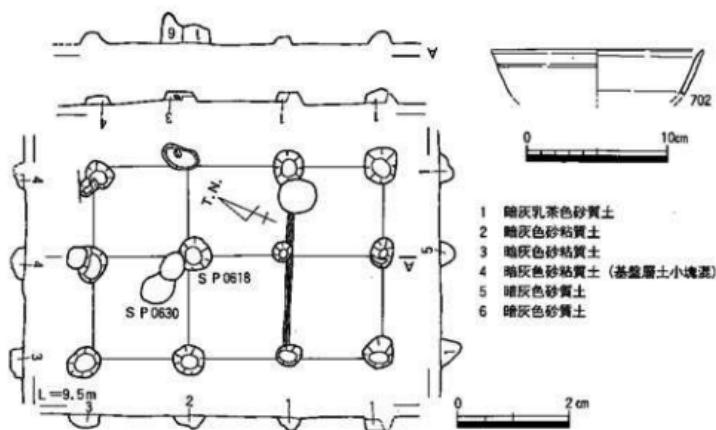
E 26に位置する。1間×2間の小型の掘立柱建物跡である。IV区のみならず、集落全体で最も南に位置し、しかも1棟のみ離れて存在する。主軸はN03° Wを向く。四隅の柱穴では詰め石により柱の根固めを行っている。S D072/076より新しい。柱穴からはごく少量の弥生土器が出土したのみで、周囲に主軸方位の近似するものもなく、時期決定は難しい。

#### S B 057 (第156図)

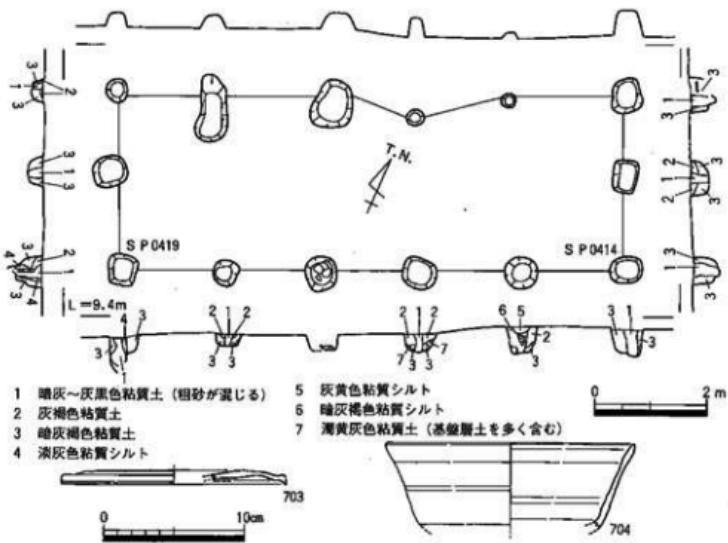
D 25に位置する。2間×4間の掘立柱建物跡である。主軸はN25° Wを向く。S B 101より新しい。柱穴は方形で比較的大きい。一部の柱穴には根石や詰め石を行う。692はS P 0396, 693はS P 0395から出土した。692は須恵器, 693は土師器である。693は内外面とも赤色顔料を塗っている。他に少量の土器片が出土した。出土土器から、8世紀以降に建



第158図 S B 059平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4)



第159図 S B 060平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4)

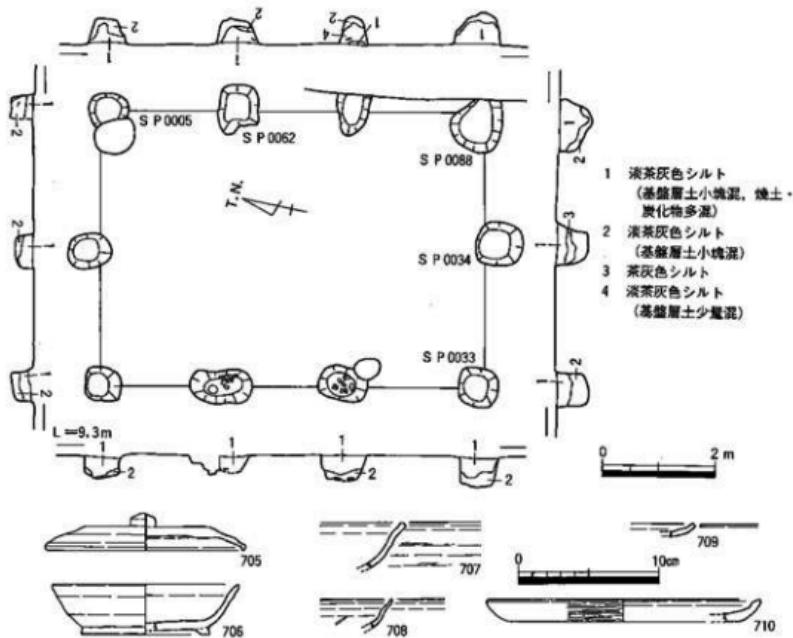


第160図 SB 061平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

てられたものであり、同じ建物群を構成するSB 061・101との関係から、9世紀後半の建物跡と考えておく。

#### S B 058 (第157図)

E 24/25に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN11°Wを向く。柱穴掘り形は一辺1m前後の方形で大きい。底には中疊を数個組み合わせて根石としている。SB 064, SD 076・080/110・087より新しい。SB 064の西柱列の柱穴2個と柱穴が重複し柱列も揃うことから、SB 064からSB 058への建て替えが考えられる。またSB 065とも西柱列が揃うことから、同時存在である可能性が高い。694～696・698はSP 0346, 697はSP 0343, 699はSP 0342からそれぞれ出土した。694・695・697は須恵器で、696・698・699は土師器である。696は内面に鋸歯状に上下に連続する暗文を施している。697は内外面に自然釉がかかっている。この他比較的多くの土器片が出土している。出土土器から、SB 058は8世紀前半以降に建てられたものであり、同一建物群を構成すると思われるSB 068との関係から、9世紀後半以降の建物跡と考えておく。



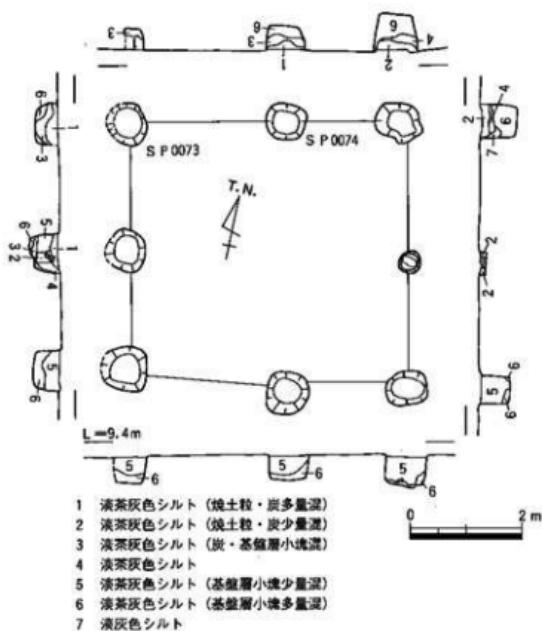
第161図 SB 062平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

S B 059 (第158図, 図版28)

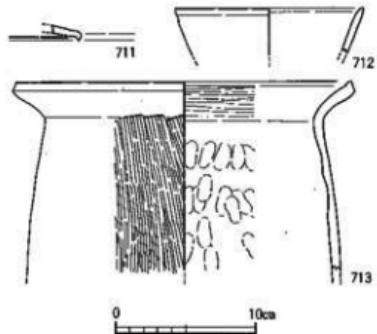
D/E 25に位置する。3間×5間の掘立柱建物跡である。主軸はN70° Eを向く。半数以上の柱穴で根石や詰め石を行う。S B 060, S D 074・075より新しい。S B 060とは方位・柱間距離が等しく、近接した時期のものであろう。700はS P 0672, 701はS P 0647から出土した。700は土師器、701は須恵器である。700は内外面に赤色顔料を塗っている。他にも比較的多くの土器片が出土している。須恵器杯から9世紀後半以降の建物跡と考えておく。

S B 060 (第159図, 図版28)

D 25に位置する。2間×3間の総柱建物跡である。主軸はN22° Wを向く。一部の柱穴には詰め石により柱の根固めを行っている。南より2つ目の梁方向に細く浅い溝が掘られている。仕切板を入れるような溝の可能性があるが、床が地面から浮いている総柱建物に不必要なようでもあり、性格ははっきりしない。造構の重複関係から、S B 059より古く、



第162図 S B 063平・断面図 (1/100)

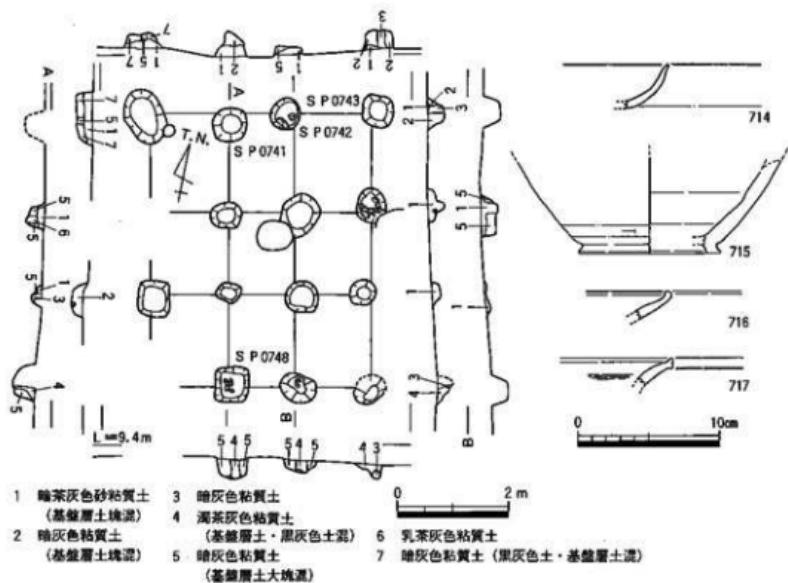


第163図 S B 063出土遺物実測図 (1/4)

S D 074・075より新しい。前述したように S B 059とは近接した時期にある。702は須恵器杯で、S P 0618かS P 0629もしくはS P 0630から出土しており、S P 0618ならS B 112とピットが重複し、S P 0629ならS B 075に属する。他にごく少量の土器片が出土しているのみで、時期決定は難しいが、S B 059より9世紀後半以降の建物跡と考えておく。

#### S B 061 (第160図)

C24に位置する。2間×5間の掘立柱建物跡である。主軸はN66°Wを向く。一部の柱穴には根石や詰め石を用いる。S D 040/060・075より新しい。S B 049の項で述べた大型建物群の北側の一角を構成する。S B 140とは方位・梁行が違うことから近接した時期の建て替えが考えられるとなれば、S B 045・050、S B 049・051で見た2時期の建て替えに対応することになる。703はS P 0414、704はS P



第164図 SB064平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

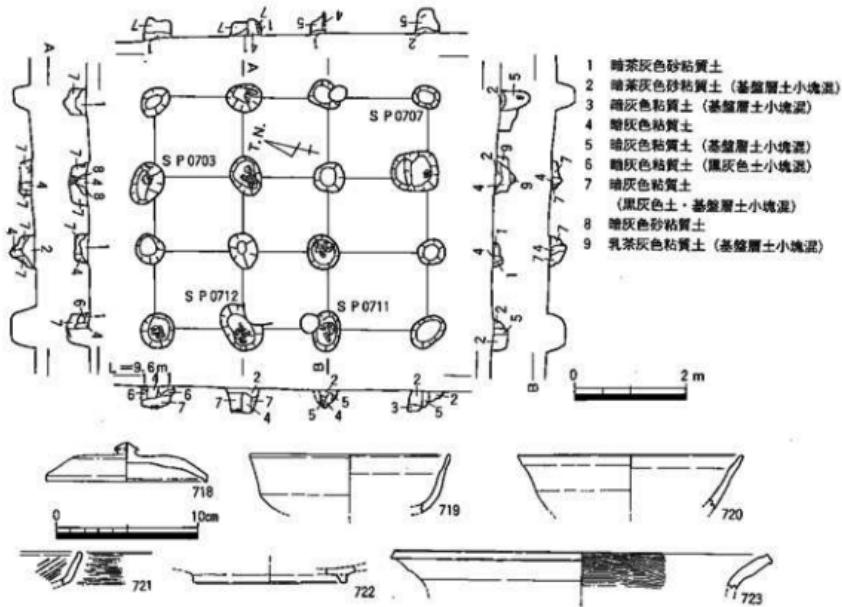
0419から出土した。ともに須恵器である。他に少量の須恵器・土師器が出土している。出土土器から9世紀前半の建物跡と考える。

#### S B062 (第161図)

F24に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN12°Wを向く。一部の柱穴には詰め石により柱の根固めを行っている。S Z01より新しい。S B128より古い。柱穴平面は方形をなす。付近のS B063・129・130とは方位が揃う。また東に同時期の掘立柱建物跡が更に展開する可能性も残されている。705はS P0034, 706はS P0005, 707はS P0088, 708はS P0062, 709・710はS P0033からそれぞれ出土している。705・706は須恵器, 707~710は土師器である。708・709は外外面に赤色顔料を塗っている。他に少量の土器片が出土している。出土土器から8世紀中・後葉の建物跡と考える。

#### S B063 (第162・163図)

F24に位置する。2間×2間の方形の掘立柱建物跡である。主軸はN78°Wを向く。一部の柱穴には根石や詰め石を用いる。S Z01より新しい。711はS P0073, 712・713はS P0074から出土した。711・712は須恵器, 713は土師器である。713は胴に張りがなく長胴

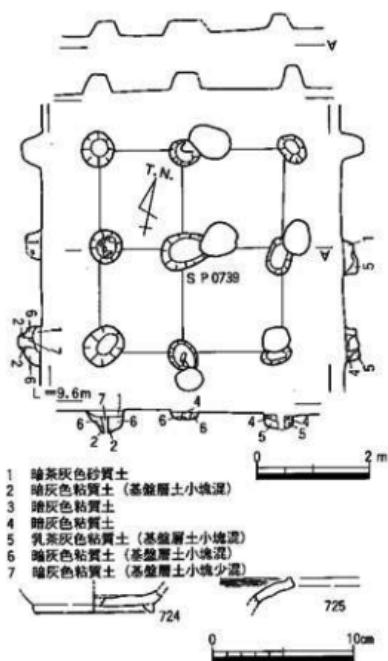


第165図 SB065平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4)

墓であろう。他に少量の土器片が出土しており、赤色顔料を塗った土器も含まれる。出土土器から8世紀以降の建物跡と考える。

#### S B064 (第164図、図版28)

E24に位置する。3間×3間の純柱建物跡である。主軸はN12°Wを向く。一部の柱穴には詰め石により柱の根固めを行っている。SB058より古く、SD076・080/110・087より新しい。SB058の西柱列の柱穴2個と柱穴が重複し柱列も揃うことから、SB064からSB058への建て替えが考えられる。またSB065の建て替え以前のSB066と同時存在である可能性が高い。さらにSB074とは北柱列が揃う。714はSP0742、715はSP0741、716はSP0743、717はSP0748からそれぞれ出土した。714・715は須恵器で、715は底部付近をヘラ切りしている。716・717は土師器である。716から8世紀中葉以降に建てられたものであり、同一建物群を構成すると思われるSB068との関係から、9世紀後半以降の建物跡と考えておく。



第166図 S B 066平・断面図 (1/100), 出土  
遺物実測図 (1/4)

柱建物跡である。主軸はN13° Wを向く。一部の柱穴には根石や詰め石を用いる。S B 065より古い。総柱建物跡には必ず掘立柱建物跡が伴うものとすれば、方位が等しく建物の中心が揃うS B 068がその可能性が高い。724・725はS P 0739から出土した。724は須恵器、725は土師器である。他に少量の土器片が出土している。出土土器及びS B 065との関係から、8世紀以降に建てられたものであり、同一建物群を構成すると思われるS B 068との関係から、9世紀後半以降の建物跡と考えておく。

#### S B 068 (第167図)

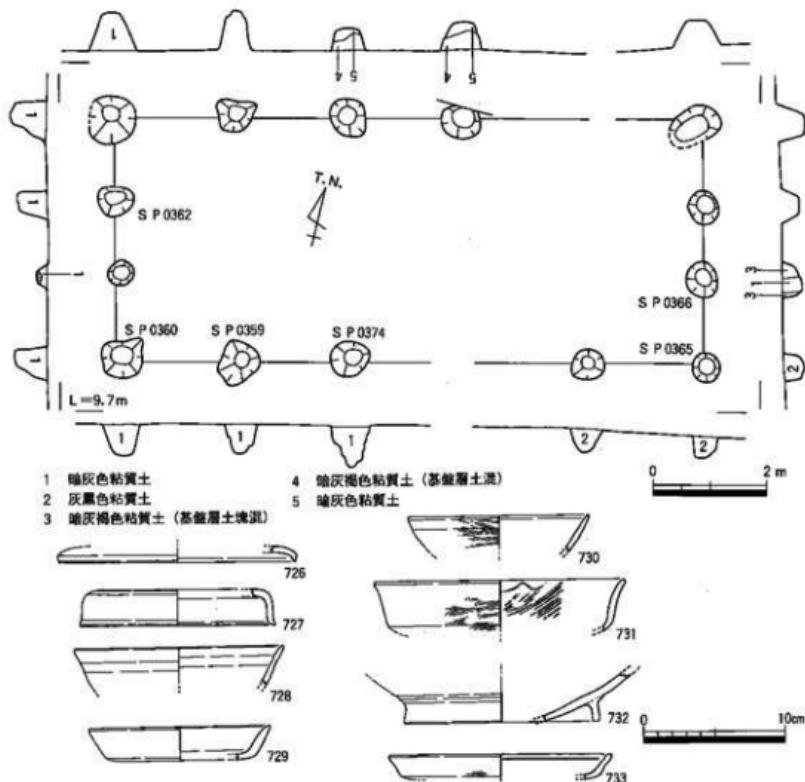
E 23/24に位置する。3間×5間の掘立柱建物跡である。主軸はN76° Eを向く。一部の柱穴に根石を据えている。S B 069より新しい。北柱列が揃うことから、S B 117と同時期である可能性があり、S B 066等とも前述したように併存していたと思われる。726・728はS P 0362、727・731はS P 0360、729はS P 0365、730はS P 0366、732はS P 0374、733

#### S B 065 (第165図)

E 24に位置する。3間×3間の総柱建物跡である。主軸はN13° Wを向く。一部の柱穴には根石や詰め石を用いる。S B 066より新しい。S B 058・064と西柱列が揃う。特にS B 064とは間取り・面積とも等しく、両者が近接する時期のものであることを示唆する。718・722はS P 0712、719・720はS P 0711、721はS P 0707、723はS P 0703からそれぞれ出土した。718～720は須恵器、721～723は土師器である。722は内外面とも赤色顔料を塗っている。他に比較的多くの土器片が出土している。出土土器から8世紀後半以降に建てられたものであり、同一建物群を構成すると思われるS B 068との関係から、9世紀後半以降の建物跡と考えておく。

#### S B 066 (第166図)

E 24に位置する。2間×2間の小型の総

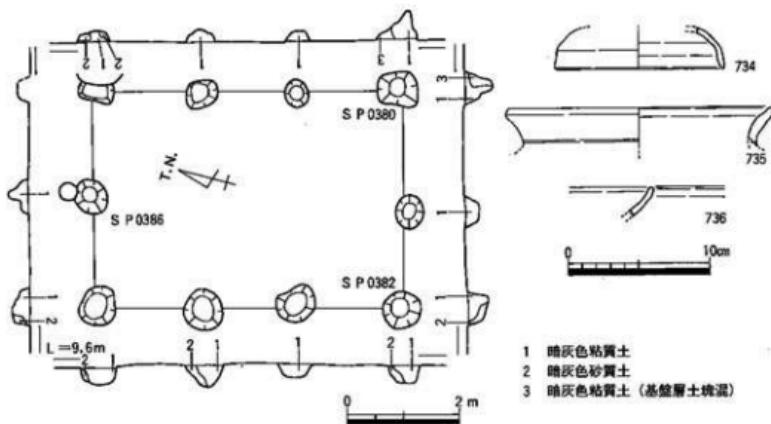


第167図 SB068平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

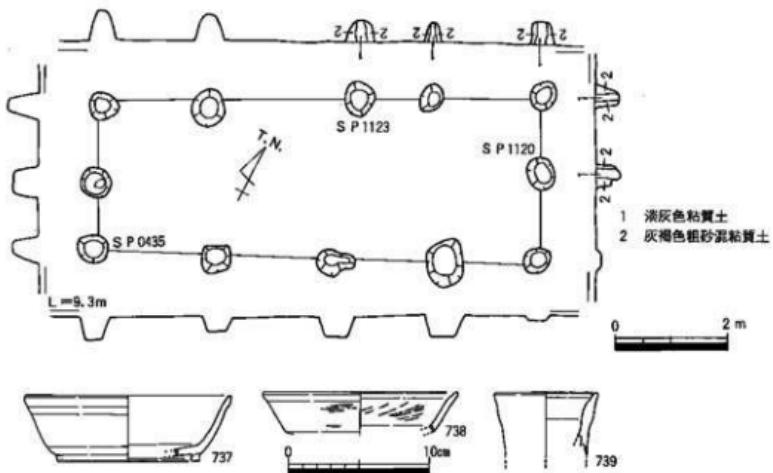
はSP0359からそれぞれ出土した。726～729は須恵器で、730～733は土師器である。727は短頸壺の蓋である。730は椀ともいえるが、口縁内面に窪みが巡ることから杯とした。731は内面に連弧状と放射状の暗文を描く。732は外面に赤色顔料を塗っている。他に少量の土器片が出土している。728・729等から9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### S B069 (第168図)

E24に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN14°Wを向く。S B068より古い。とはいいうものの北柱列が揃うことから、時期が近いことに間違いない。734はSP0380, 735はSP0382, 736はSP0386からそれぞれ出土した。734・735は須恵器、736



第168図 S B069平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第169図 S B070平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

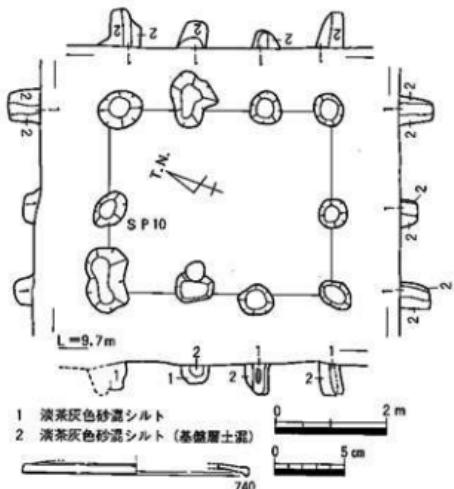
は土師器である。734は杯身の可能性もある。他に少量の土器片が出土している。

#### S B070 (第169図)

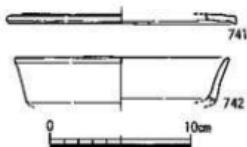
B/C24に位置する。2間×4間の掘立柱建物跡である。主軸はN63° Eを向く。一部の柱穴に楕石を据えている。南側へ梁間とほぼ等しい距離の位置にS A26があり、方位が等しいことから同時期の可能性が高い。737はS P1123、738はS P1120、739はS P0435からそれぞれ出土した。737・739は須恵器、738は土師器である。739は須恵器平瓶の口の部分であろう。他に少量の土器片が出土している。出土土器から8世紀前半以降に建てられたものであり、付近のS B001F・061等と主軸方位が似ることから、9世紀前半の建物跡と考える。

#### S B071 (第170図、図版29)

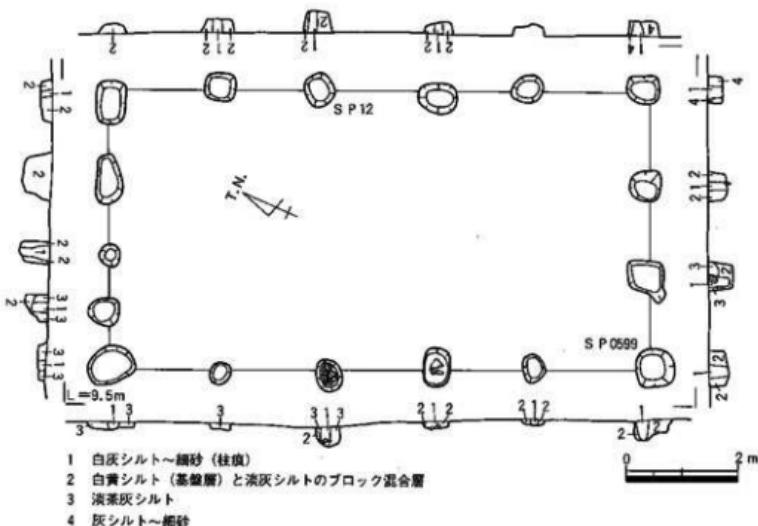
D24に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN20° Wを向く。S B076との前後関係は、3つの柱穴で重複関係がわからぬままに握りあげてしまったため、はつきりしたことは言えない。しかし、S B076南西隅の柱穴での関係を見れば、S B076が新しいことになる。いずれにせよ、方位が等しく柱穴も重なることが多いことから、両者は近接した時期のものであろう。出土遺物を比較しても、これに矛盾しない。740はS P10



第170図 S B071平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第171図 S B073出土遺物実測図 (1/4)



第172図 SB 073平・断面図 (1/100)

から出土した須恵器蓋である。他に少量の土器片が出土している。出土土器から8世紀中葉以降に建てられたものであり、付近のSB 077と主軸方位が似ることから、9世紀後半以降の建物跡と考える。

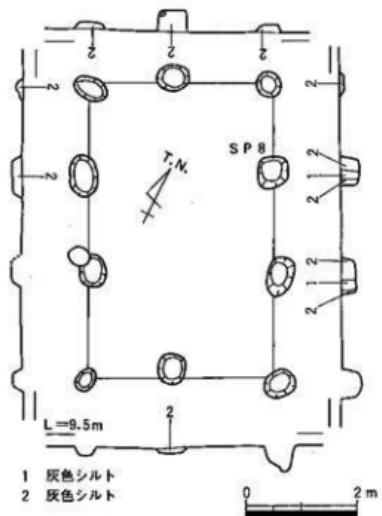
#### SB 072 (第173図、図版29)

D24/25に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN27°Wを向く。SB 132より古い。743・744はSP 8から出土した。743は須恵器、744は土師器である。744は内外面に赤色顔料を塗っている。他に少量の土器片が出土した。出土土器から8世紀中葉以降に建てられたものであり、SB 101と南柱列が揃い、更にその西延長がSB 047の中心を通り、これがこの建物群の中心でもあることから、建物群と同じ9世紀前半の建物跡と考える。

#### SB 073 (第171・172図、図版29)

D25に位置する。3間×5間の掘立柱建物跡である。主軸はN24°Wを向く。一部の柱穴には根石や詰め石を用いる。741はSP 0599、742はSP 12から出土した。ともに須恵器である。他にも比較的多くの土器片が出土している。出土土器から8世紀中葉以降に建てられたものであり、南北軸の中間に揃えるようにしてSB 046と対置されていることから、建物群と同じ9世紀前半の建物跡と考える。

### S B 074 (第174図)



第173図 S B 072平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

ら出土した。752はS P 0618かS P 0629もしくはS P 0630から出土しており、S P 0629ならS B 075に属する。751・752は土師器、753は須恵器である。他に少量の土器片が出土した。S B 123と組であるとして、桁長が似、南北柱列が揃うS B 074か、南北の中間がS B 073同様つながるS B 046等の建物群か、どちらかと関係があると考え、距離が近いことからS B 073と同じ9世紀前半の建物と判断した。

### S B 076 (第176図、図版29)

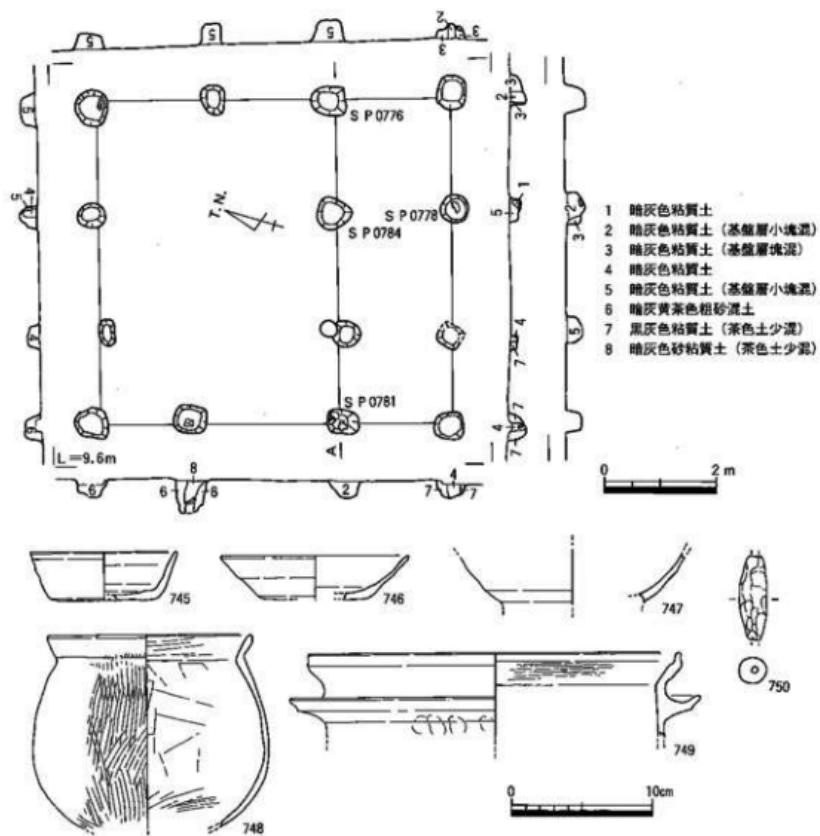
D24に位置する。3間×4間の総柱建物跡である。主軸はN21°Wを向く。一部の柱穴には柱の根固めの石を詰めている。754はS P 0819、755はS P 8から出土した。754は須恵器皿である。755は刀子で、切っ先は丸みを持つ。また全面鏽のため刃と柄の境は不明である。他に少量の土器片が出土している。出土土器及び主軸方位の似るS B 077から、

E 24/25に位置する。南に庇がつく2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN74°Eを向く。一部の柱穴には根石や詰め石を用いる。S B 064とは北柱列が揃い、同時期の可能性がある。745はS P 0778、746・747・749はS P 0784、748はS P 0781、750はS P 0776からそれぞれ出土した。745は須恵器、746～750は土師器である。747は黒色土器A類である。749は銅より下に煤が付着する。他にも比較的多くの土器片が出土した。出土土器から9世紀中葉以降の建物跡と考える。

### S B 075 (第175図)

D25に位置する。2間×4間の掘立柱建物跡である。主軸はN20°Wを向く。一部の柱穴には柱の根固めの石を詰めている。

S B 123とは主軸方位、梁間・桁行が揃い、時期が近接する可能性がある。しかし棟間距離は狭い。751はS P 9、753はS P 11か

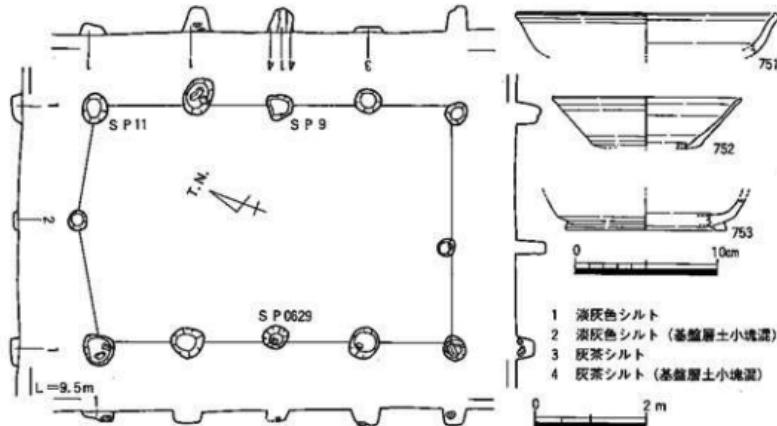


第174図 SB 074平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### S B 077 (第177図)

E 24に位置する。2間×2間の総柱建物跡あるいは掘立柱建物跡である。主軸はN72°Eを向く。SB 141とは柱穴が重複し、どの柱穴がどの建物に属し、あるいは復元した建物でよいのか決定的とはいえないが、柱間距離が等しいという条件で検討を加えた結果、2棟に分離した。またSB 077の東に接するSA 27は、どちらに属するのか厳密には明ら



第175図 SB 075平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4)

かには出来ないものの、距離が近すぎる点と総柱建物のみに伴う柵は考えにくいことから、SB 141に伴うものと考えておく。いずれにせよSB 077とSB 141は近接した時期のものであり、他の例同様建て替えと面積の拡張が表裏をなすものであれば、SB 141からSB 077への建て替えになる。756はSP 0823から出土した須恵器壺である。他に少量の土器片が出土している。SB 141との関係から、SB 077は9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### SB 078 (第178図)

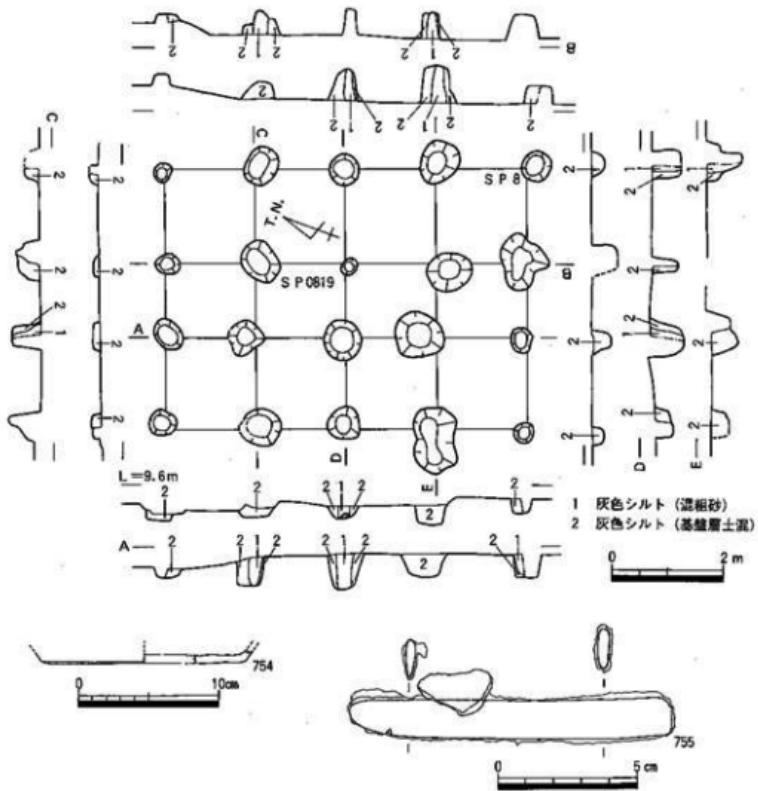
D24に位置する。2間×4間の掘立柱建物跡である。主軸はN09°Wを向く。SD016より古い。757はSP 0911から出土した須恵器杯である。出土土器は比較的多いが、図化しうるものはない。出土土器から7世紀後半以降に建てられたものであり、付近のSB 097と東柱列が揃うことから、9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### SB 079 (第179図)

C/D24/25の境に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN29°Wを向く。758はSP 453から出土した土師器皿である。内外面に赤色顔料を塗っている。他に少量の土器片が出土している。出土土器から8世紀以降に建てられたものであり、SB 048・061と柱列が揃うことから、同じ9世紀前半の建物跡と考える。

#### SB 080 (第180図)

E23に位置する。検出できたピットが少ないが、2間×3間の小さな掘立柱建物跡と考

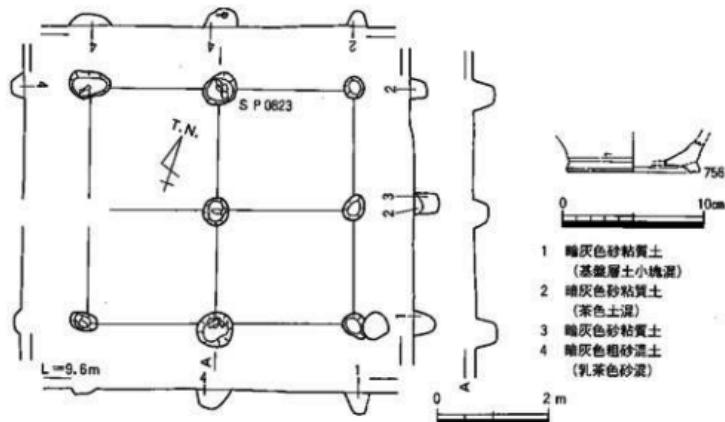


第176図 SB076平・断面図(1/100)、出土遺物実測図(1/4、1/2)

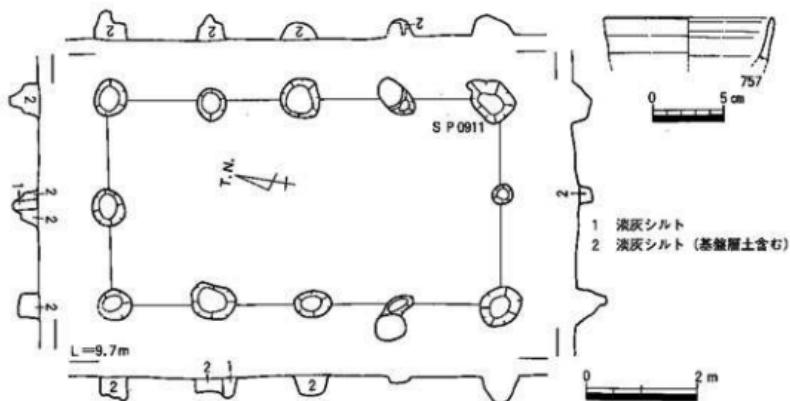
える。柱穴も小さく、根石を据えているものもある。主軸はN35°Eを向く。出土遺物もなく、建物の時期を確定することはできない。付近にあるSB081と主軸方位が近似することから、それと同じ時期である可能性を考えておく。

#### SB081 (第181図)

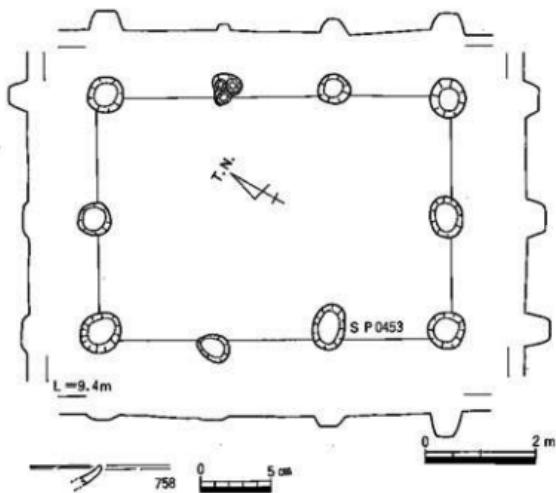
E23に位置する。2間×4間の掘立柱建物跡である。主軸はN32°Eを向く。SB019・020、SD015・016より古い。ごく少量の土器片が出土したのみで、時期決定は難しい。主軸方位が近似するSB006・007の時期から、7世紀中葉の建物跡と考える。



第177図 SB 077平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第178図 SB 078平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



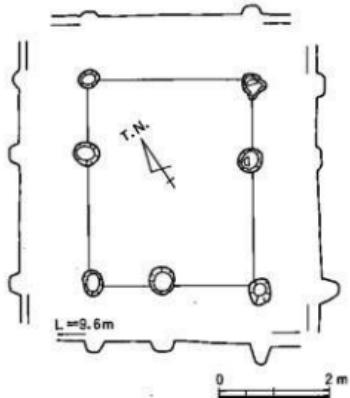
第179図 SB 079平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

#### S B 082 (第182図)

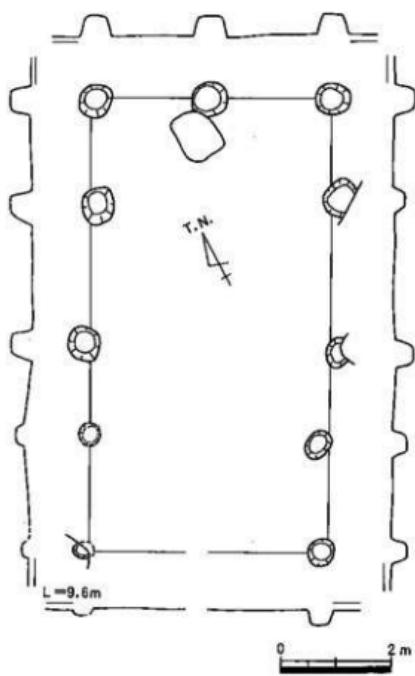
E 23に位置する。1間×2間の細長い掘立柱建物跡である。主軸はN87° Eを向く。759はS P 0616, 760はS P 0553から出土した。ともに土師器である。759は内面底部にも放射状暗文を描く。760は壺の口縁である。他にごく少量の土器片が出土している。出土土器から7世紀後葉の建物跡と考える。

#### S B 083 (第183図)

E 23に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN33° Eを向く。S H 04より新しく、S B 019より古い。761はS P 0411, 762はS P 0897から出土した。761は須恵器、762は土師器である。他に土器片がごく少量出土している。S H 03と主軸方位が似ることから、8世



第180図 SB 080平・断面図 (1/100)



第181図 S B 081平・断面図 (1/100)  
建物跡と考える。

#### S B 086 (第186図)

D23に位置する。1間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN83° Eを向く。一部の柱穴には柱の根固めの石を詰めている。S B 028より古く、S B 027・054とは西柱列が、S B 033とは南柱列が揃う。柱穴からは弥生土器片が1点出土しているのみである。S B 028より古くかつ主軸方位が同じということから、7世紀後葉内の建て替えと考えておく。

#### S B 087 (第187図)

D22/23に位置する。2間×3間の総柱建物跡である。主軸はN18° Wを向く。一部の柱穴には柱の根固めの石を詰めている。S B 026より古い。少量の土器片が出土している。7・8世紀と思われる須恵器・土師器片が存在し、S B 026との関係から、S B 087を7世紀後葉の建物跡と考えておく。

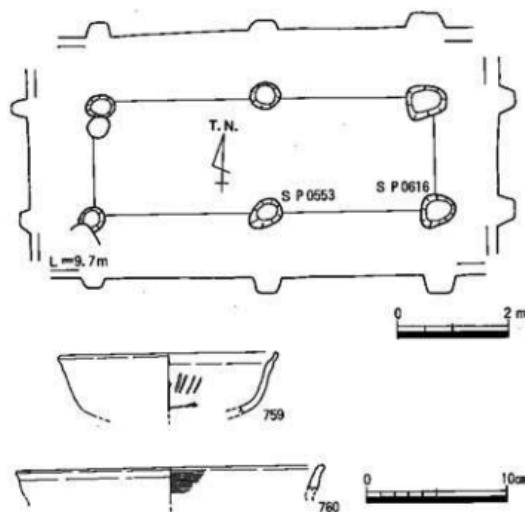
紀初頭の建物跡と考える。

#### S B 084 (第184図)

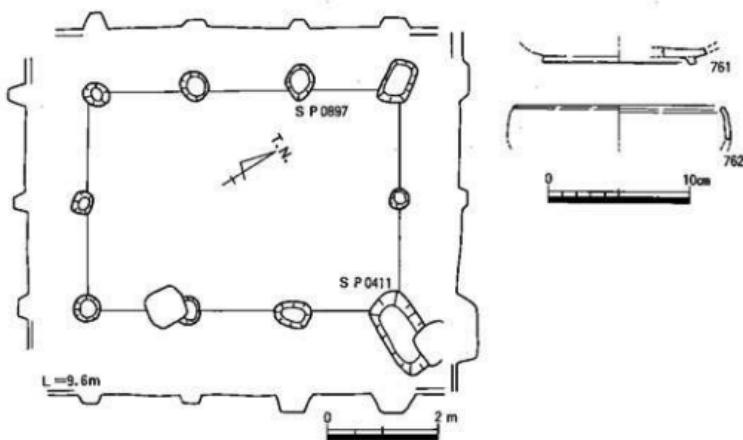
E 23に位置する。2間×3間の総柱建物跡である。柱間距離や位置に多少ぶれがある。主軸はN81° Eを向く。S B 055・082と南柱列が揃うことから、同時存在の可能性が考えられる。763・764はS P 0651から出土した須恵器である。他に土器片がごく少量出土している。出土土器から9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### S B 085 (第185図)

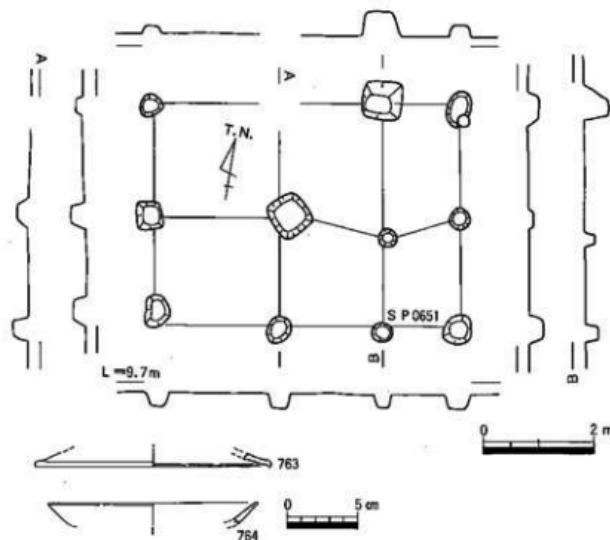
E 25に位置する。2間×4間の掘立柱建物跡である。南柱列は柱間距離や位置に多少ぶれがある。主軸はN73° Eを向く。S B 141と東柱列が揃う。765は土師器杯である。S P 0925から出土した。他に土器片がごく少量出土している。出土土器から9世紀後半以降の



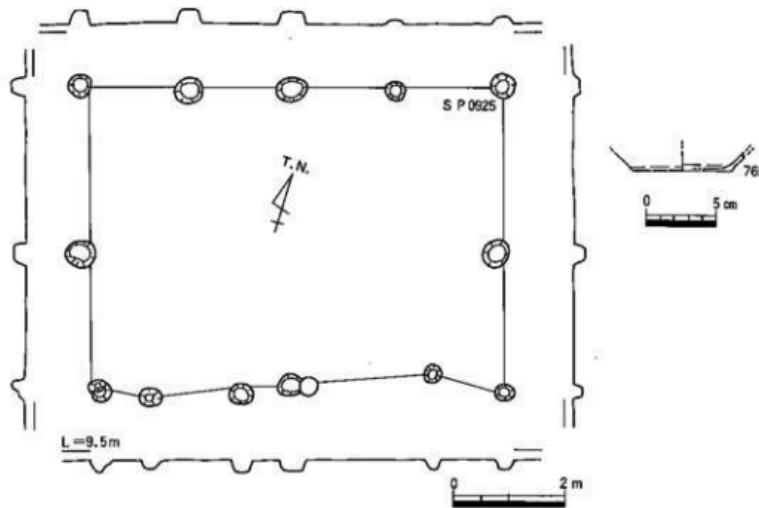
第182図 SB 082平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



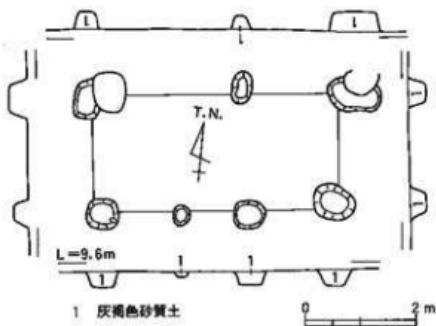
第183図 SB 083平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



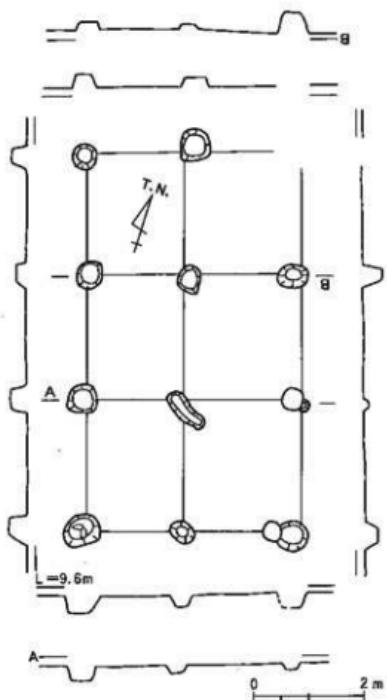
第184図 SB 084平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第185図 SB 085平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第186図 SB 086平・断面図 (1/100)



第187図 SB 087平・断面図 (1/100)

#### SB 088 (第188図)

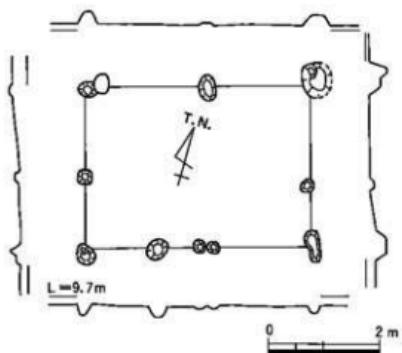
D 22に位置する。2間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN74° Eを向く。柱穴は小さい。S D012より古い。須恵器・土師器片がごく少量出土しているのみである。西柱列がS B024の東柱列と揃うことから、9世紀後半以降の建物跡と考えておく。

#### SB 089 (第189図)

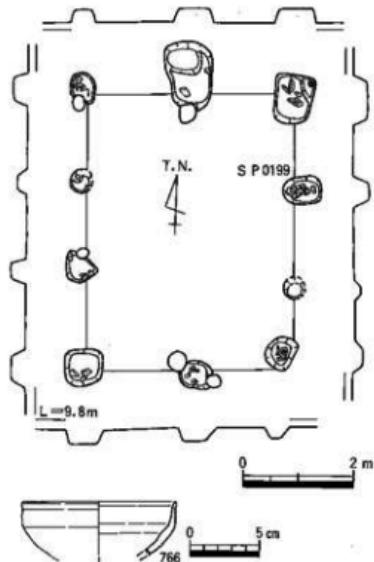
D/E 22に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN02° Wを向く。柱穴には柱の根固めの石を詰めている。S B025より新しく、S D012より古い。766は須恵器で杯身としたが、蓋の可能性もある。S P0199から出土した。他に7世紀中後葉の須恵器高杯や台付碗などごく少量の土器片が出土している。S B025と主軸方位・規模が一致することから、7世紀後葉内での建て替えを考えておく。

#### SB 090 (第190図)

D 22に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN31° Wを向く。S D012より古い。出土土器は少量で、中にヘラ切りの土師器杯底部が含まれている。S B008・015と主軸方位が似ることもあり、9世紀後半以降の建物跡と考える。



第188図 SB 088平・断面図 (1/100)



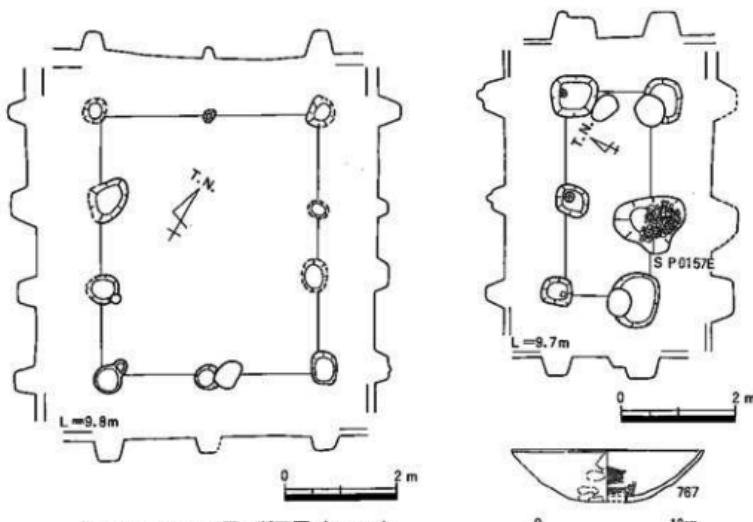
第189図 SB 089平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

### S B 091 (第191・192図)

D22に位置する。1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN62° Eを向く。北柱列中央の柱穴は、小碟が多量に集められていた中世の大型の集石土坑 (S P 0157E) が存在するため明らかでない。また柱穴の大きさや並びが不揃いである点が、建物である可能性を若干弱めている。柱穴の重複関係から、S B 092・093より古い。767・768とも集石土坑である S P 0157Eから出土した。767は土師器碗で、小さな高台が付いていた痕跡が残っている。768は楔形石器と判断した。左面に碟面が残る。小碟の他、サヌカイト碟や土器片も比較的多く出土した。S P 0157Eについては中世の遺構でも扱っている。S B 091に伴う柱穴からはごく少量土器片が出土したのみである。S B 093より古く、S H11と主軸方位が似ることから、7世紀前葉の建物跡と考える。

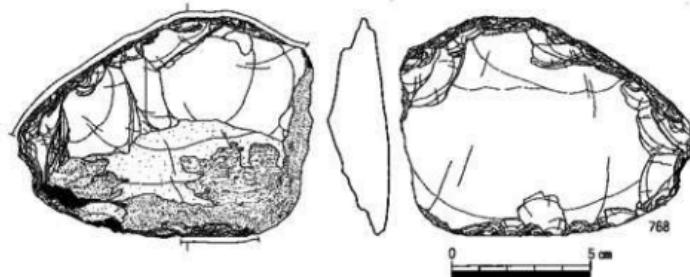
### S B 092 (第193図)

D22に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN72° Wを向く。S B 091より新しく、S D024より古い。北東隅の柱穴はS B 040と重複する。柱穴は小さく、中からはごく少量の土器片が出土したのみである。中にはヘラ切りの須恵器杯身(蓋)片が含まれる。S B 005等と主軸方位が似ることから、7世紀中葉の建物跡で、同じ中葉内で一部柱



第190図 S B 090平・断面図 (1/100)

第191図 S B 091平・断面図 (1/100),  
出土遺物実測図(1) (1/4)

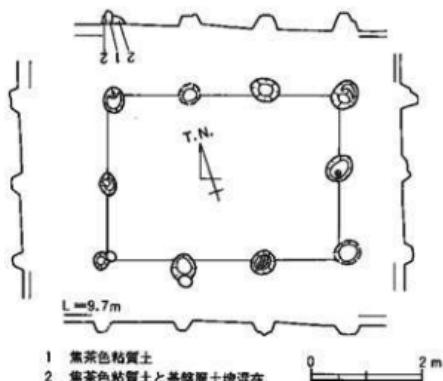


第192図 S B 091出土遺物実測図(2) (1/2)

穴を再利用して S B 040に建て替えたと考えておく。

#### S B 093 (第194図)

D22に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN72° Eを向く。柱穴の大きさの差が著しい。S B 091より新しく、S B 024・092、S D 024より古い。769はS P 0818,

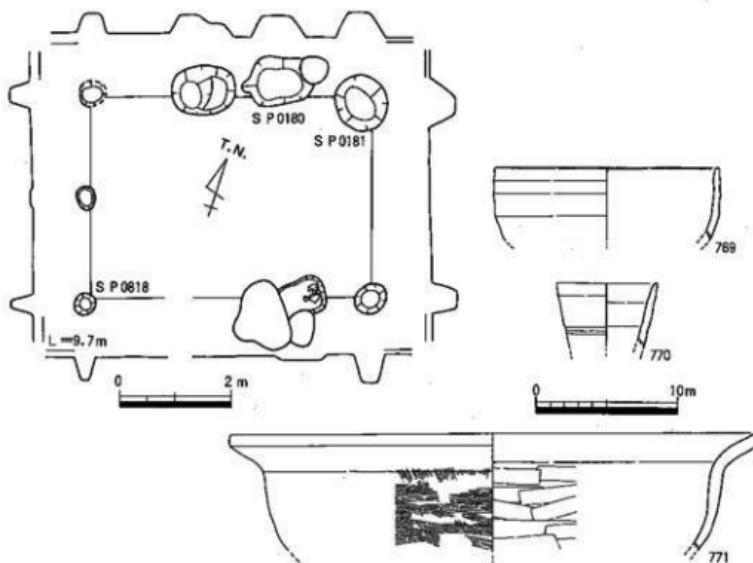


第193図 S B 092平・断面図 (1/100)

770はS P 0180, 771はS P 0181から出土した。769・770は須恵器, 771は土師器である。他に少量の土器片が出土した。出土土器から7世紀後葉の建物跡と考える。同じ時期と考えたS B 087の主軸方位とも一致する。

#### S B 096 (第195図)

D/E 22に位置する。2間×2間の方形の掘立柱建物跡である。主軸はN 70° Eを向く。根石を据えている柱穴もある。S B 125とは主軸方位・規模がほぼ等しく、建て替えの可能性が考えられる。柱穴内からは土師器片が数点出土したのみで、時期決定は難しい。



第194図 S B 093平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

S B 004と主軸方位が似ることから、9世紀前半の建物跡と考えておく。

#### S B 097 (第196図)

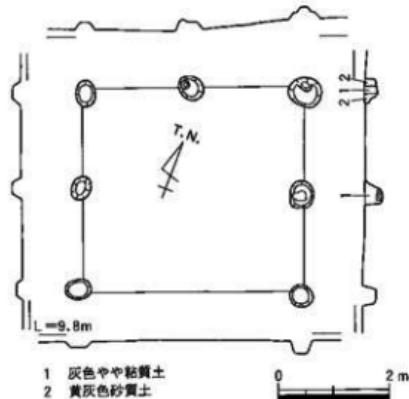
D 23/24に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN $85^{\circ}$  Eを向く。一部の柱穴は根石を据えている。S B 078・134と東柱列が並ぶ。772はS P 0807から出土した土師器杯底部である。他にS H 18に伴う弥生土器が比較的多く出土している。出土土器から9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### S B 098 (第197図)

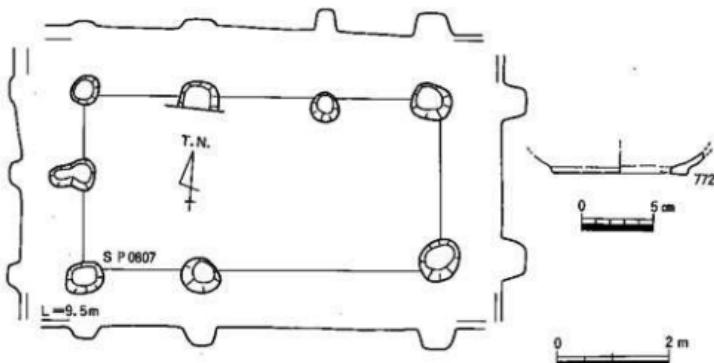
C/D 24に位置する。2間×2間の方形の掘立柱建物跡である。主軸はN $69^{\circ}$  Eを向く。柱穴は小さい。S B 122とは東柱列が並び、桁行柱間さらにそれと棟間距離が等しいことから、同時存在である可能性が高い。このことから、10世紀以降の建物跡と考えておく。土師器・須恵器小片が数点出土したのみである。

#### S B 099 (第198図)

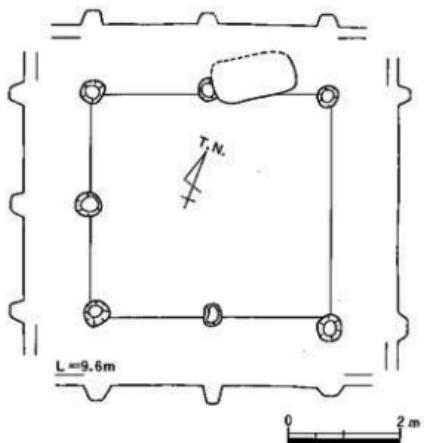
D 24/25に位置する。2間×2間の方形の掘立柱建物跡である。主軸はN $21^{\circ}$  Wを向く。柱穴は小さい。S D 040/060



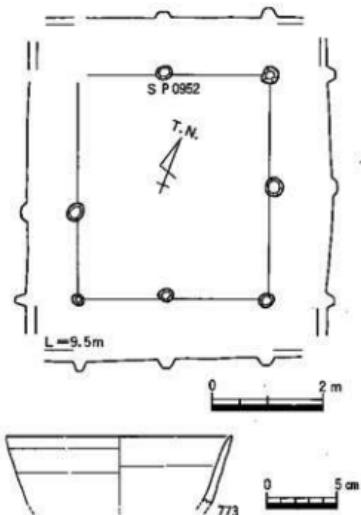
第195図 S B 096平・断面図 (1/100)



第196図 S B 097平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第197図 S B 098平・断面図 (1/100)



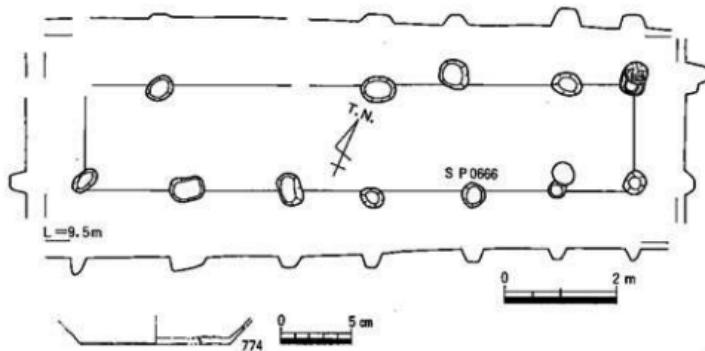
第198図 S B 099平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

・080/110より新しい。S B 132と西柱列が揃う。773はS P 0952から出土した須恵器杯である。他にごく少量の土器片が出土している。出土土器から8世紀以降に建てられたものであり、周辺のS B 100・122と主軸方位が似ることから、10世紀以降の建物跡と考える。  
S B 100 (第199図)

D 25に位置する。1間×6間の細長い掘立柱建物跡である。主軸はN67°Eを向く。S D 040/060・074・075より新しい。特殊な平面形をなすことから、住居とは考えにくく、周囲に同時存在の母屋があると想定できる。774はS P 0666から出土した須恵器杯底部である。他に少量の土器片が出土している。出土土器から10世紀以降の建物跡と考える。

#### S B 101 (第200図)

D 25に位置する。2間×2間のはば正方形の総柱建物跡である。主軸はN66°Eを向く。S B 057より古く、S D 074より新しい。S B 072とは南辺が揃う。775はS P 1024, 776・777はS P 0404から出土した。775・776は須恵器で、776は焼き上がりがやや悪い。777は土師器で口縁内面に沈線状の窪みを巡らし、放射状暗文を描く。内外面に赤色顔料を塗っている。他に少量の土器片が出土している。出土須恵器から



第199図 SB 100平・断面図 (1/100)、出土遺物実測図 (1/4)

9世紀前半の建物跡と考える。

#### S B 102 (第201図)

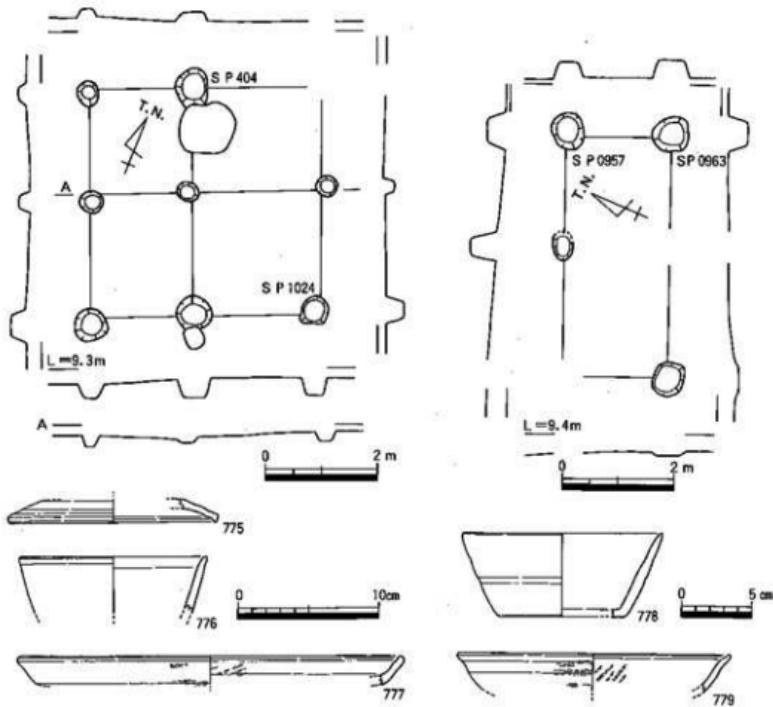
D24/25に位置する。1間×2間の小型の掘立柱建物跡である。主軸はN67° Eを向く。S D080/110より新しい。778はS P 0963, 779はS P 0957から出土した。778は須恵器杯で、体部外面中央に沈線が巡る。779は土師器皿で、口縁内面に沈線状の窪みを巡らし、放射状暗文を描く。傾きは確かにない。他に少量の土器片が出土している。出土須恵器から9世紀中葉以降に建てられたものであり、周辺のSB 100・122と主軸方位が似ることから、10世紀以降の建物跡と考える。

#### S B 103 (第202図)

D24に位置する。1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN23° Wを向く。S D040/060より新しい。SB 099とは建て替えの可能性がある。ごく少量の須恵器・土師器等が出土しているのみで、時期決定は難しい。周辺のSB 100・122と主軸方位が似ることから、10世紀以降の建物跡と考える。

#### S B 104 (第203図)

D24に位置する。1間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN70° Eを向く。S D040/060・075・080/110より新しい。780はS P 0954, 781はS P 0956から出土した。780は須恵器で、781は土師器である。他に少量の土器片が出土している。出土土器から8世紀後半以降に建てられたものであり、周辺のSB 100・122と主軸方位が似ることから、10世紀以降の建物跡と考える。



第200図 S B101平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

第201図 S B102平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

#### S B105 (第204図, 図版25)

C22に位置する。2間×2間の方形の掘立柱建物跡である。主軸はN 83° Eを向く。782はS P 0757から、783はS P 0758から出土した。782は土師器甕、783は黒色土器A類甕である。他にごく少量の須恵器・土師器等が出土している。出土土器から、S B105を9世紀後半～10世紀前半の建物跡と考える。

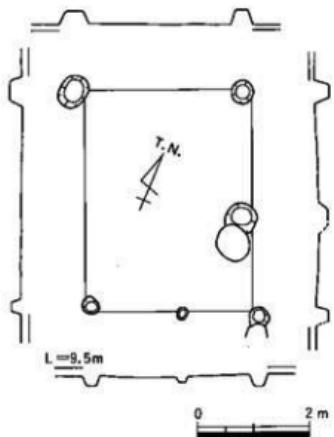
#### S B106 (第205図)

C23に位置する。3間×3間の総柱建物跡である。主軸はN 08° Wを向く。S B034より古い。一部の柱穴には柱の根固めの石を詰めている。S B035と東西の柱列を揃えて南北に並ぶことから、両者は同時期の建物と判断される。784はS P 0715, 785はS P 0739からそれぞれ出土した。784は須恵器蓋である。口径が小さいが返りを持たない。ごくまれ

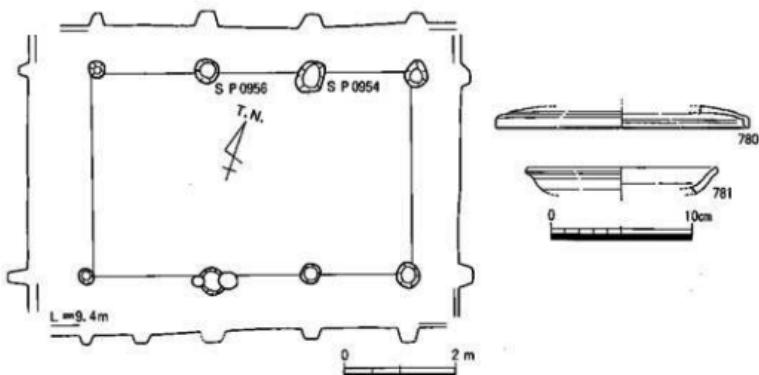
にしか出土しないもので、壺の蓋の可能性も考えられる。785は付近の弥生時代包含層からの混入であろう。他に弥生土器を比較的多くとごく少量の須恵器等が出土している。出土土器から7世紀後葉以降に建てられたものであり、SB035との関係から、8世紀前葉の建物跡と考える。

#### SB107(第206図)

C24/25に位置する。2間×2間の方形の掘立柱建物跡である。主軸はN17°Wを向く。SB048より古く、SB140より新しいという柱穴の重複関係にあるが、2棟の時期観、主軸方位の違いからいって、調査ミスである可能性を考えている。786はSP0491から出土した須恵器杯である。傾き・口径は確実ではない。他に弥生土器を比較的多くとごく少量の土師器等が出土しており、中には内外面に赤色顔料を塗った土師器杯も混じっている。出土土器から8世紀以降に建てられたものであり、南のSB108・109と主軸方位が似ることから、9世紀後半以前の建物跡と考える。



第202図 SB103平・断面図 (1/100)

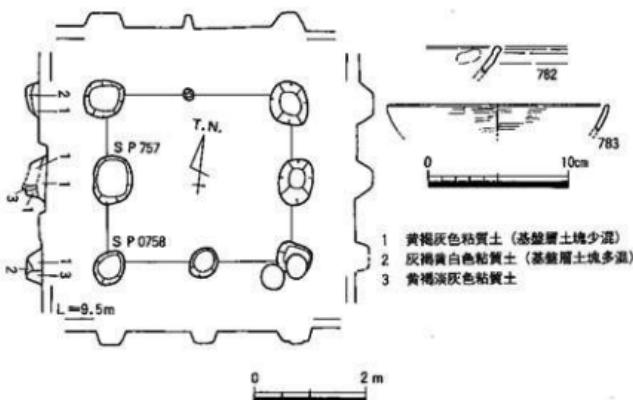


第203図 SB104平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

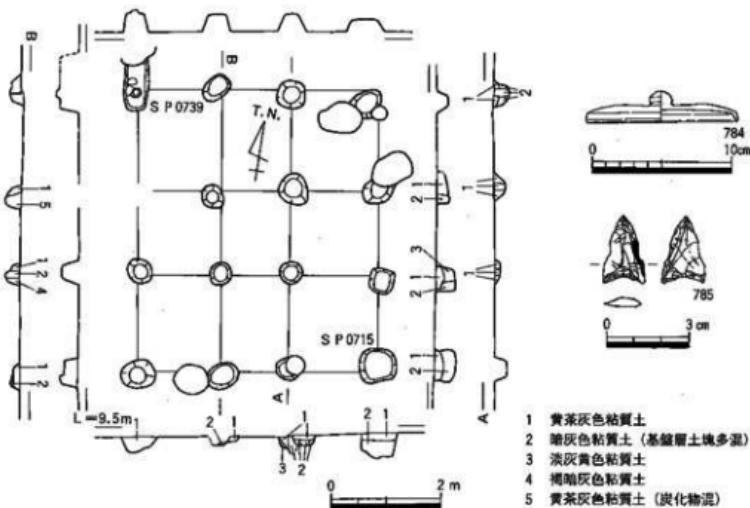
S B 108 (第207図)

C25に位置する。2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN70° Eを向く。ほとんどの柱穴の底に根石を敷く。S B 109とは重複関係にある柱穴が3ヶ所あるが、新旧に食い

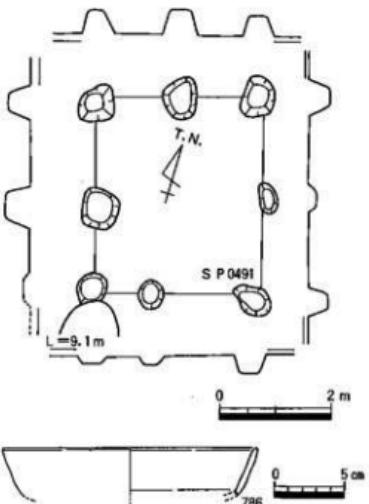
違いがあり、2つの建物の新旧関係はここからは明らかにできない。しかし桁梁の柱間、主軸方位もほぼ等しいことから、S B 108からS B 109への建て替え・拡張が想定できる。出土土器も大きな時期差を示すもの



第204図 S B 105平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第205図 S B 106平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)



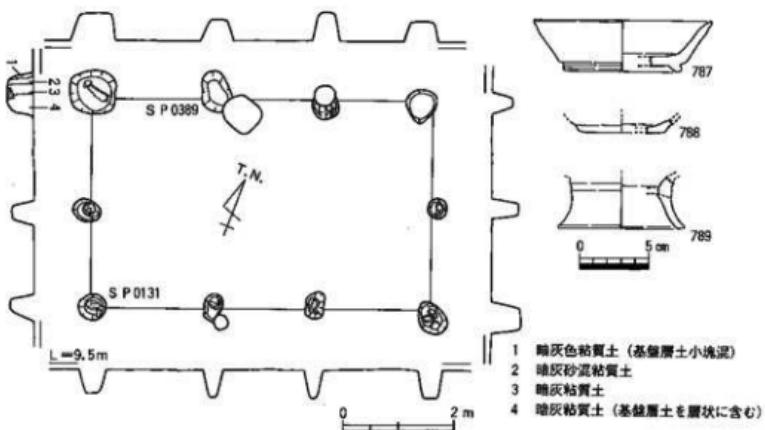
第206図 SB107平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

ではなく、この想定と矛盾を来さない。787

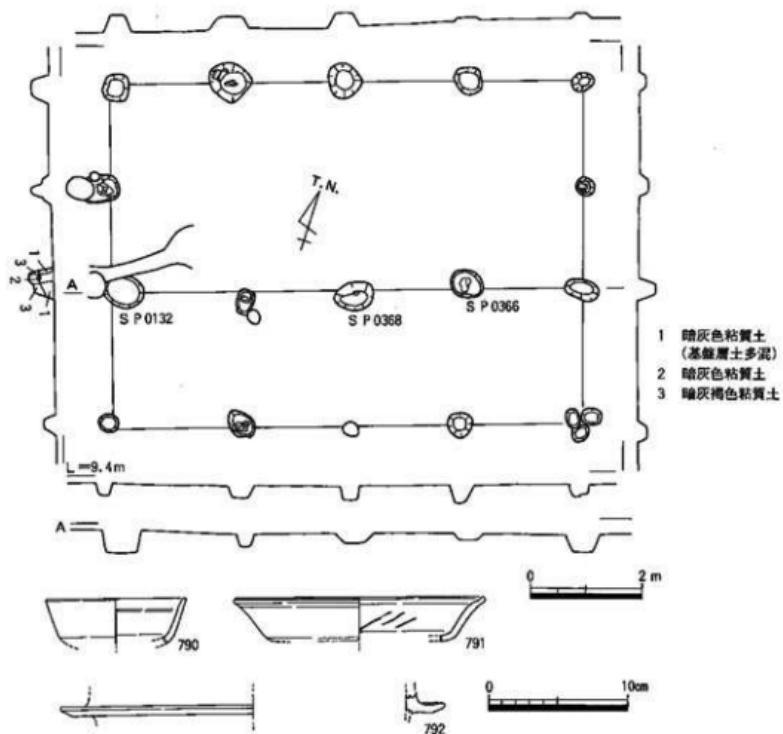
・788はSP0389, 789はSP0131から出土した。787は須恵器, 788・789は土師器である。他に少量の土器片が出土している。出土土師器から10世紀代の建物跡と考える。

#### S B109 (第208図)

C25/26に位置する。2間×4間の掘立柱建物の南に庇がつくものとして復元したが、庇部分の梁間が広すぎることから、単に庇だけではない複雑な構造の建物を想定すべきかもしれない。主軸はN72°Eを向く。根石や詰め石を一部の柱穴で用いている。SD051より新しい。SB108との関係については、SB108の項で既に述べた。790はSP0368, 791はSP0132, 792はS



第207図 SB108平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

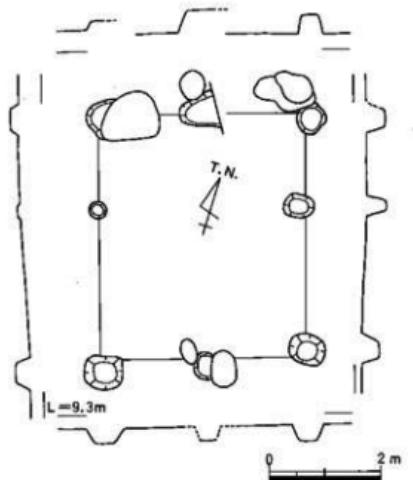


第208図 SB 109平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

P 0366から出土した。790は須恵器、791・792は土師器である。792は土釜の鋸の部分である。他に比較的多くの土器片が出土しており、792と同時期の土師器も含まれている。792から9世紀後半以降の建物と考える。

#### S B 110 (第209図)

C 25に位置する。2間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN18° Wを向く。S B 048より古い。須恵器・土師器等がごく少量出土しているのみで、時期決定は難しい。S B 048と北柱列が揃うことから、同じ9世紀前半の建物と考えておく。



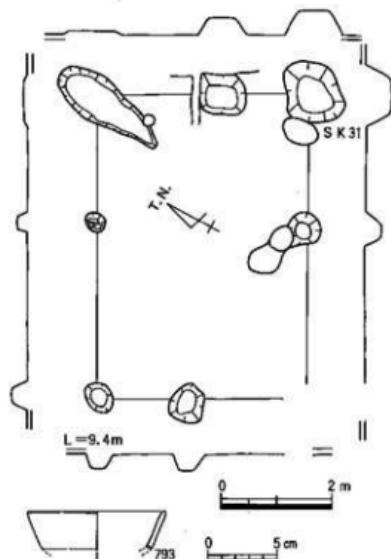
第209図 SB110平・断面図 (1/100)

### S B112 (第210図)

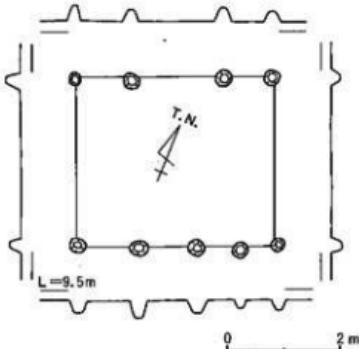
D25に位置する。2間×2間の掘立柱建物跡である。ビットの大小に差があり、検出できていないものもあるため、復元に疑問は残される。詰め石を行う柱穴がある。主軸はN78° Eを向く。S B059・S D075より新しい。793はS K31とした柱穴? 遺構から出土した須恵器杯である。他にごく少量の須恵器・土師器等が出土しており、中には内外面赤色顔料を塗った土師器高台付杯片も含まれている。S B059との関係から、9世紀後半以降の建物跡と考える。

### S B113 (第211図)

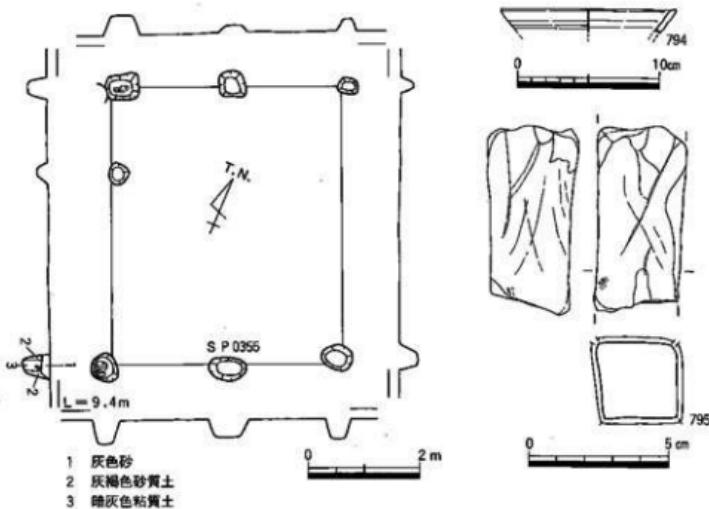
D25に位置する。1間×4間の掘立柱建物跡である。柱穴は小さく、桁行の柱間隔は必ずしも一定ではない。主軸はN68° Eを向く。S B060と北柱列が揃う。弥生土器片が2点出土したのみで、時期決定は難



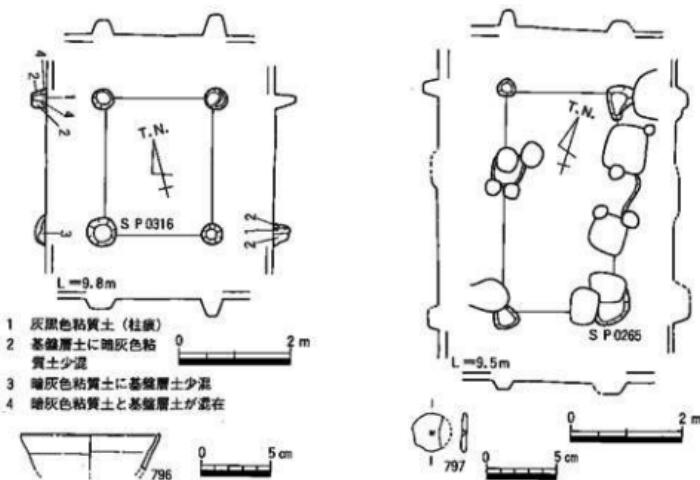
第210図 SB112平・断面図 (1/100), 出土  
遺物実測図 (1/4)



第211図 SB113平・断面図 (1/100)

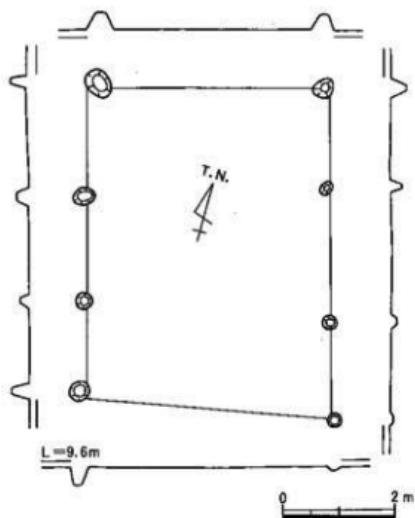


第212図 SB114平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

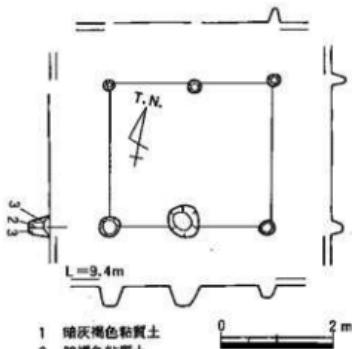


第213図 SB115平・断面図 (1/100),  
出土遺物実測図 (1/4)

第214図 SB116平・断面図 (1/100),  
出土遺物実測図 (1/4)



第215図 S B 117平・断面図 (1/100)

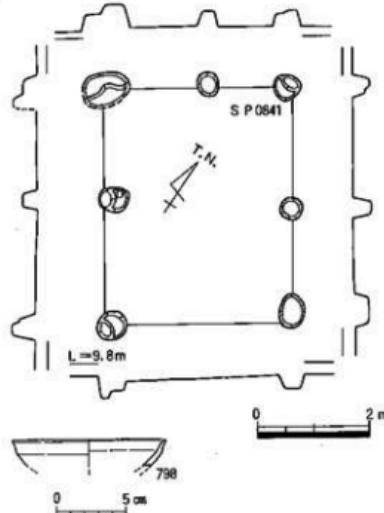


第216図 S B 118平・断面図 (1/100)

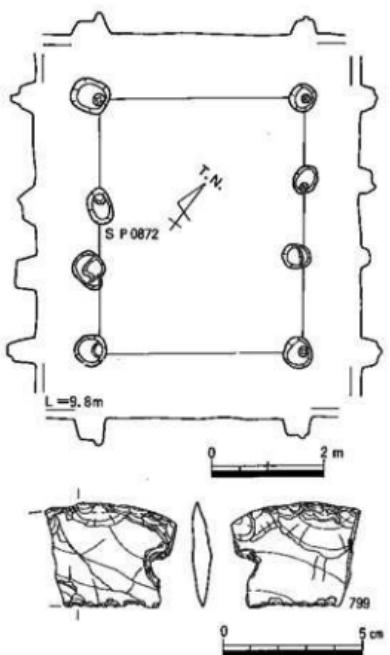
しい。S B 060と同じ9世紀後半以降の建物跡と考えておく。

#### S B 114 (第212図)

C25に位置する。2間×2間の掘立柱建物跡に復元したが、桁行の柱穴が不確かであり、建物にならない可能性も残る。主軸はN23°Wを向く。根石を据えた柱穴もある。794・795ともSP 0355から出土した。794は須恵器杯である。795は砥石で4面とも研ぎ面に用い、よく磨滅している。擦痕も残る。他にごく少量の土器片が出土している。出土土器から9世紀後半以降の建物跡と考える。



第217図 S B 119平・断面図 (1/100), 出土  
遺物実測図 (1/4)



第218図 S B120平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図  
(1/2)

い。主軸はN16° Wを向く。S B068とは北柱列が揃う。S B069とは建て替えの可能性がある。土器等の出土はなかったため、所属時期は不明である。S B068との関係から、9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### S B118 (第216図)

C25に位置する。1間×2間の小型の掘立柱建物跡である。主軸はN78° Eを向く。S B046・047より新しい。弥生土器が数片出土したのみで、時期決定は難しい。主軸方位はやや異なるが、S B109と西柱列が揃うことから、その付属建物の可能性を考えておく。

#### S B119 (第217図)

F22に位置する。2間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN34° Wを向く。S B006と柱穴を共有しており、それと近い時期の建物であることが想定される。一部の柱穴には根石や詰め石を用いている。798はS P0841から出土した須恵器杯である。他にごく少量

#### S B115 (第213図)

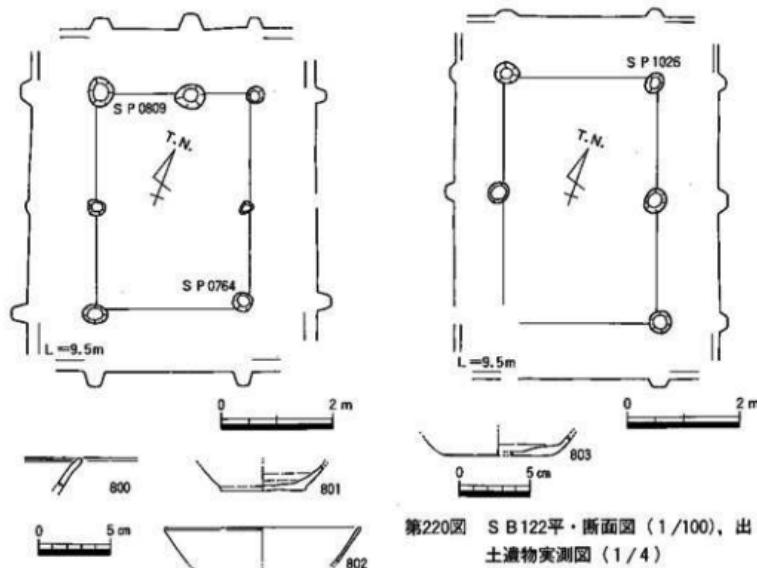
E22に位置する。1間×1間の小さな掘立柱建物跡である。主軸はN14° Eを向く。796はS P0316から出土した須恵器杯である。他にごく少量の土器片が出土している。出土土器から9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### S B116 (第214図、図版25)

C22/23に位置する。1間×2間の小さな掘立柱建物跡である。主軸はN15° Wを向く。S B034より古い。797はS P0265出土で、土器片を転用した紡錘車である。他にサヌカイト片が1つ出土したのみで、時期決定は難しい。

#### S B117 (第215図)

E24に位置する。1間×3間の掘立柱建物跡である。柱穴は小さ



第220図 S B122平・断面図(1/100)、出土遺物実測図(1/4)

第219図 S B121平・断面図(1/100)、出土遺物実測図(1/4)

の土器片が出土している。出土土器及びやや遠いがS H11と主軸方位が似ていることから、7世紀前葉の建物跡と考える。

#### S B120(第218図)

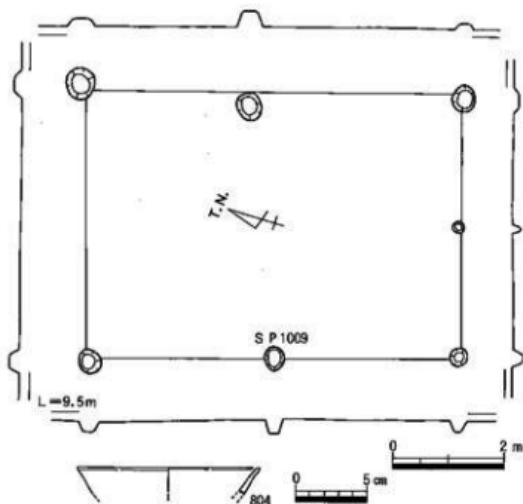
E 22に位置する。1間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN37°Wを向く。S B006より新しい。799はS P0872から出土した。付近の弥生包含層からの混入であろう。他に土師器等がごく少量出土しているのみで、時期決定は難しい。S H002・011と主軸方位が似ることから、7世紀後葉の建物跡と考える。

#### S B121(第219図)

E 24/25に位置する。2間×2間の小型の掘立柱建物跡である。主軸はN21°Wを向く。S B077と東柱列が揃う。800はS P0809、801・802はS P0764から出土した。800は須恵器杯で口縁直下内面に沈線が巡る。801・802は土師器杯で同一個体の可能性がある。他に少量の土器片が出土している。出土土器から9世紀後半以降の建物跡と考える。

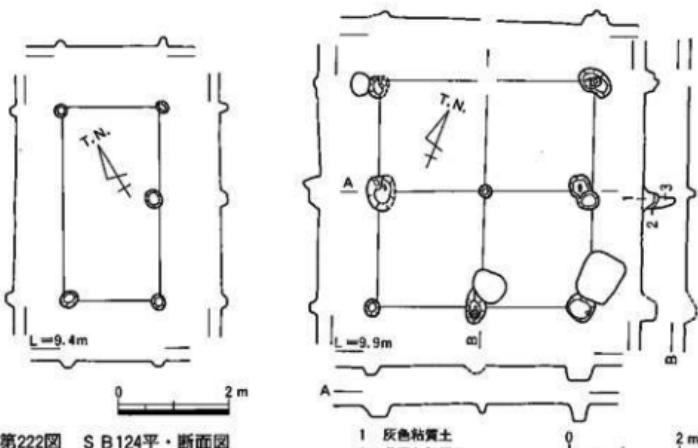
S B122 (第220図)

D24に位置する。1間×2間の小型の掘立柱建物跡である。柱穴も小さい。主軸はN19°Wを向く。S B098と東柱列が揃い、桁行柱間さらにそれと棟間距離が等しいことから、同時存在である可能性が高い。803はS P1026から出土した土師器杯あるいは小皿である。他にごく少量の土器片が出土している。出土土器から10世紀以降の建物跡



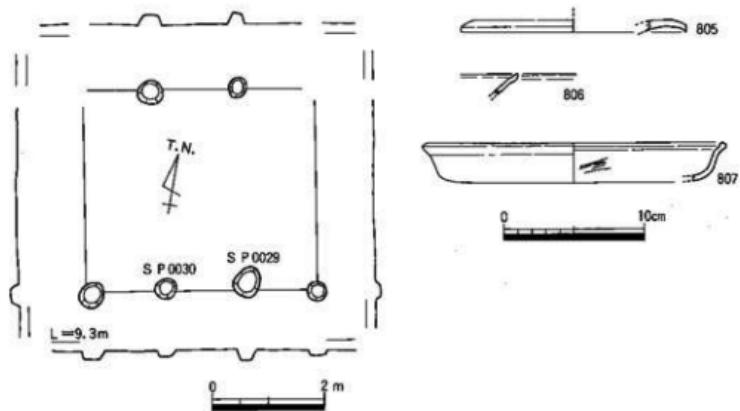
第221図 S B123平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

と考える。



第222図 S B124平・断面図 (1/100)

第223図 S B125平・断面図 (1/100)



第224図 S B127平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

#### S B123 (第221図)

D/E 24/25の境に位置する。1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN16°Wを向く。S B075とは時期が近接する可能性があることはS B075の項で既に述べた。804はS P1009から出土した須恵器杯である。他に少量の土器片が出土している。出土土器から9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### S B124 (第222図)

D26に位置する。1間×2間の小型の掘立柱建物跡である。柱穴も小さい。主軸はN32°Eを向く。柱穴内からの遺物の出土はなく、建物の所属時期も不明である。

#### S B125 (第223図)

D22に位置する。2間×2間の方形の総柱建物跡である。主軸はN20°Wを向く。一部の柱穴で柱の根固めの石を詰めている。柱穴内からは数点の土師器片等が出土しているのみで、時期決定は難しい。S B096の項で述べたように、それと建て替えの関係を考えることから、同じ9世紀前半の建物跡と考えておく。

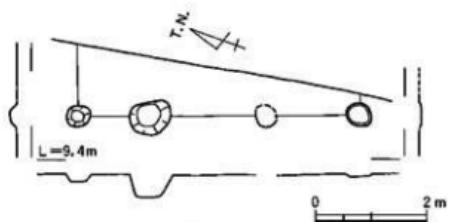
#### S B127 (第224図)

F24に位置する。1間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN79°Eを向く。S Z01より新しい。805・807はS P0029, 806はS P0030から出土した。805は須恵器蓋でつまみ部分が凹む。806・807は土師器で、806は内外面に赤色顔料を塗っている。他に少量の土器

片が出土した。出土土器から8世紀中葉以降の建物跡と考える。

#### S B128 (第225図)

F24に位置する。桁行3間の掘立柱建物跡で、調査域外に建物の東半分が存在する。主軸はN19°Wを向く。S B062・S Z01より新しいことから、8世紀中葉以降の建物跡である。



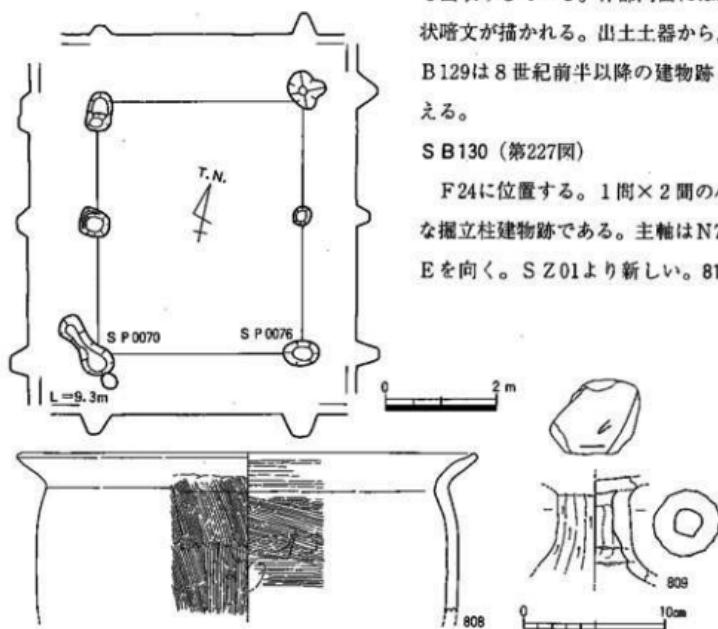
第225図 S B128平・断面図 (1/100)

#### S B129 (第226図)

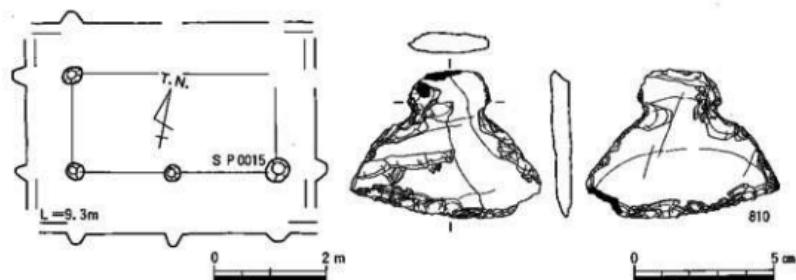
F25に位置する。1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN13°Wを向く。S Z01より新しい。808はS P0070から、809はS P0076からそれぞれ出土した。とともに土師器である。808は長胴甕と思われる。809は脚部を17面も面取りしている。杯部内面には螺旋状暗文が描かれる。出土土器から、S B129は8世紀前半以降の建物跡と考える。

#### S B130 (第227図)

F24に位置する。1間×2間の小さな掘立柱建物跡である。主軸はN78°Eを向く。S Z01より新しい。810は

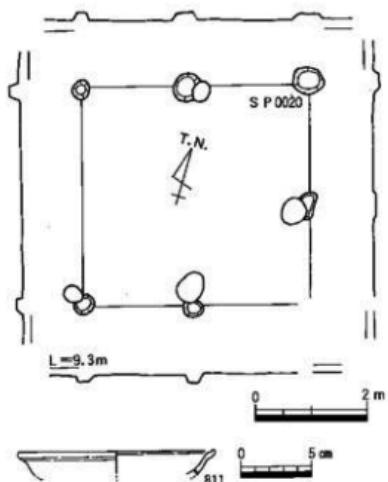


第226図 S B129平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第227図 SB130平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

S P 0015から出土した。



第228図 SB131平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

S B 131 (第228図)  
F 24に位置する。2間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN74° Eを向く。S Z 01より新しい。S B 127とは南北柱列がほぼ重なることから、2つの建物は建て替えの関係にあると考えられる。811はS P 0020から出土した土師器杯である。他に少量の土器片が出土している。出土土器から8世紀後半以降の建物跡と考える。

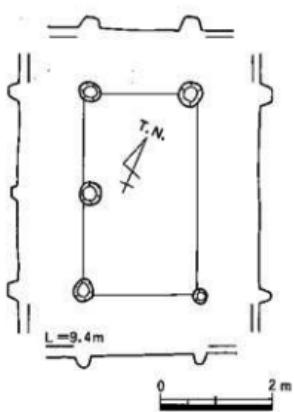
S B 132 (第229図)

D 25に位置する。1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN24° Wを向く。S D 074・075より新しい。ごく少

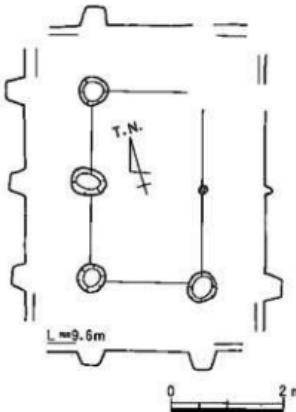
量の須恵器・土師器片等が出土したのみで、時期決定は難しい。S B 099と西柱列が揃うことから、10世紀以降の建物跡と考える。

S B 133 (第230図)

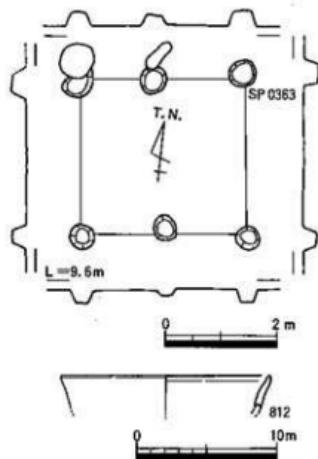
D/E 23に位置する。1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN17° Eを向く。S H 03より新しいが、主軸方位が等しく、S H 03の北西柱穴を利用しているようであることから、竪穴住居から掘立柱建物に建て替えたことになる。そうであるなら、居住面積としては小



第229図 S B132平・断面図 (1/100)



第230図 S B133平・断面図 (1/100)



第231図 S B134平・断面図 (1/100),  
出土遺物実測図 (1/4)

さくなるという不都合が生じ、付近に同時期の新しい母屋を想定する必要がある。S B133の柱穴からの遺物の出土はない。S H03との関係から、8世紀前葉の建物跡と考えておく。

#### S B134 (第231図)

D23に位置する。1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸はN83° Eを向く。S B031とはピットの重複関係が矛盾するが、S B033とも絡めてそれより新しいと思われる。812はS P0363から出土した土師器杯である。他に出土遺物はない。812から8世紀後半以降に建てられたものであり、S B078・097と東柱列が崩うことから、9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### S B136 (第232図)

E23に位置する。1間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN05° Eを向く。S D015より古い。柱穴からの遺物の出土はなかった。建物の所属時

期は不明である。

#### S B137 (第233図)

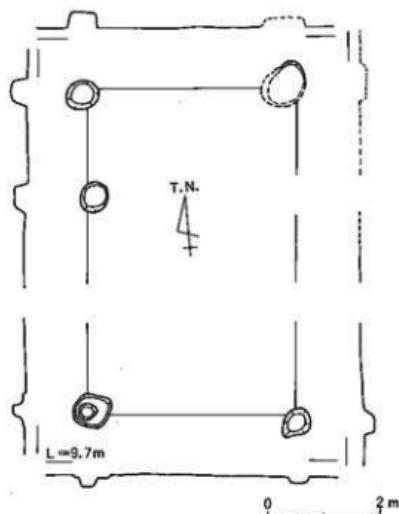
C24/25に位置する。1間×3間の掘立柱建物跡である。主軸はN27°Wを向く。S D075より新しい。S B061・140とは東柱列が揃い、S B137西柱列の北延長上にS B061・140の桁行の柱穴があることから、S B061・140いずれかと同時期に建てられていた可能性が高い。柱穴からの遺物の出土はなかった。9世紀前半の遺構と考える。

#### S B138 (第234図)

E23に位置する。2間×5間の掘立柱建物跡である。主軸はN17°Eを向く。根石や詰め石を用いている柱穴がある。S B020・S D015・016より古い。柱穴からの遺物の出土はなかった。S B018と南柱列が揃うことから、7世紀後葉の建物跡と考える。

#### S B139 (第235図)

E22に位置する。主軸はN70°Eを向く。柱穴3個を検出したのみで、全容は不明である。柱穴からは須恵器・土師器片がごく少量出土した。時期決定は難しいが、S D010よりは新しい時期のものようである。他の柱穴は検出できずにS D010埋土とともに掘ってしまったと思われる。S B096と南北方向の柱列が揃うことから、9世紀前半の建物跡と考えておく。



第232図 S B136平・断面図 (1/100)

#### S B140 (第236図)

C24に位置する。1間×5間の掘立柱建物跡である。主軸はN66°Wを向く。一部の柱穴には根石や詰め石を用いる。S D040/060・075より新しい。S B049の項で述べた大型建物群の北側の一角を構成する。S B061とは方位・梁行が揃うことから近接した時期の建て替えが考えられ、S B045・050, S B049・051で見た2時期の建て替えに対応する。とすれば面積の広いS B061がS B140より新しいと判断される。図化していないが、少量の須恵器・土

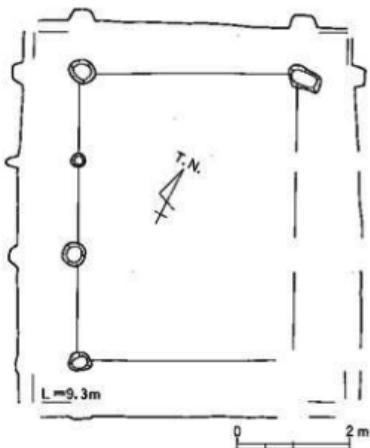
師器が出土している。出土土器から8世紀後半以降に建てられたものであり、S B 061との関係から、9世紀前半の建物跡と考える。

#### S B141 (第237図)

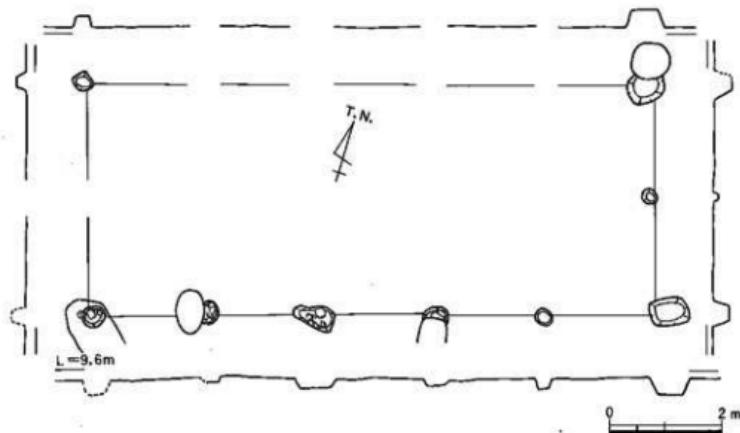
E 24に位置する。2間×2間の方形の掘立柱建物跡である。主軸はN 18° Wを向く。S B 077・S A 27との関係についてはS B 077の項で述べた。813はS P 0822, 814はS P 0828から出土した。813は須恵器、814は黒色土器A類である。他に少量の土器片が出土している。出土土器からS B 141は9世紀後半以降の建物跡と考える。

#### S B142 (第238図)

F 25に位置する。2間×3間の掘立柱



第233図 S B137平・断面図 (1/100)



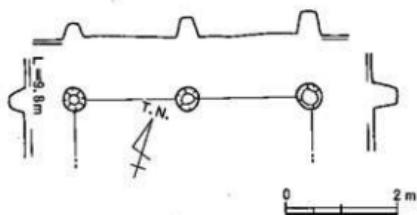
第234図 S B138平・断面図 (1/100)

建物跡である。主軸はN16° Wを向く。S Z01より新しい。

## 柵列

### S A 08 (第239図)

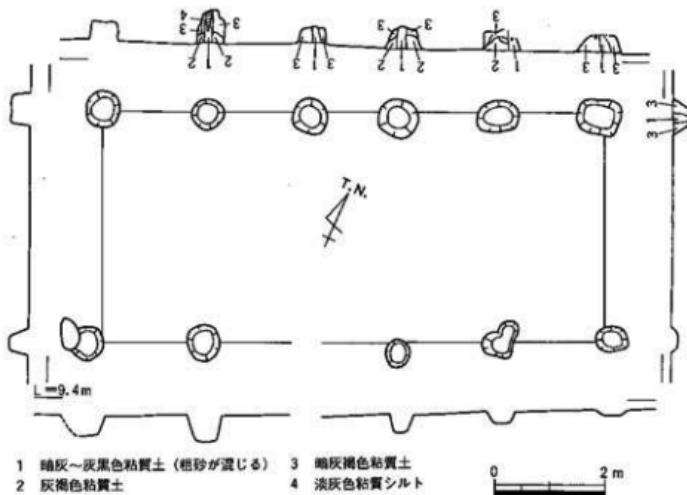
E/F 23に位置する。主軸はN87° Wを向く。S D047より新しい。815・816はS P 0959から出土した。弥生時代Ⅲ期の壺片である。柱穴下面の弥生時代中期包含層あるいはS D 059に本来伴うものであろう。他にも弥生土器片と数片の土師器が出土しているが、時期決定は難しい。



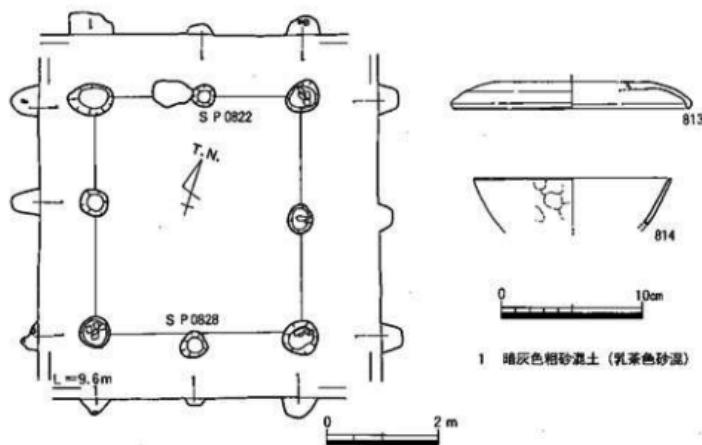
第235図 S B 139平・断面図 (1/100)

### S A 22 (第240図)

D 23に位置する。小さいが根石を据えた柱穴が6個並んでいる。主軸はN34° Eを向く。すべての柱穴で詰め石や根石を用いている。付近に主軸方位が等しいものを探すとS B 081がこれに該当する。817はS P 0431から出土した。弥生時代後期の



第236図 S B 140平・断面図 (1/100)

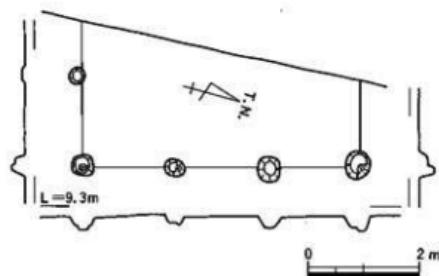


第237図 S B141平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

鉢である。混入と判断した。他には出土遺物はない。7世紀中葉の柵列と考えておく。

#### S A23 (第241図)

D24に位置する。小さい柱穴が6個並んでいる。主軸はN67° Eを向く。柱穴内からは土器細片がごく少量出土している。



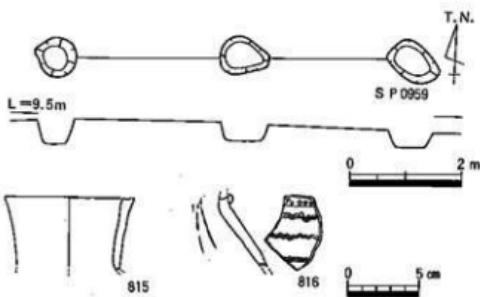
第238図 S B142平・断面図 (1/100)

#### S A24 (第242図)

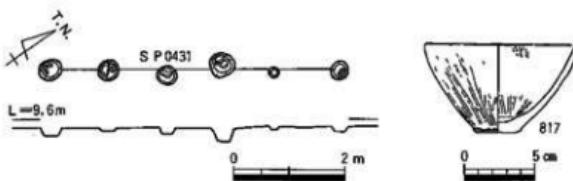
C25に位置する。主軸はN27° Wを向く。S B046・047と重なり合うが、主軸方位・柱穴の間隔がほぼ等しく、相前後する時期のものと考えられる。柱穴内からの土器の出土は見られなかった。

#### S A26 (第243図)

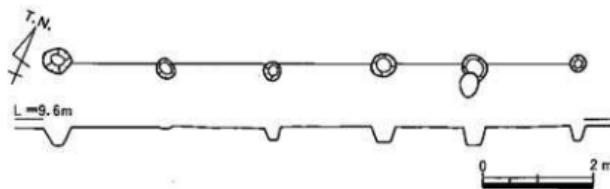
C24に位置する。主軸はN62° Eを向く。北側へ梁間とほぼ等しい距離の位置にS B070があり、方位が等しいことから同時期の可能性が高い。柱穴内からは弥生土器・須恵器片が出土しているが、時期決定は難しい。



第239図 SA08平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



第240図 SA22平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



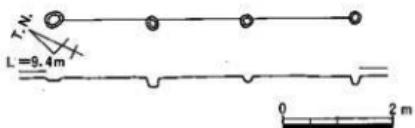
第241図 SA23平・断面図 (1/100)

#### SA27 (第244図)

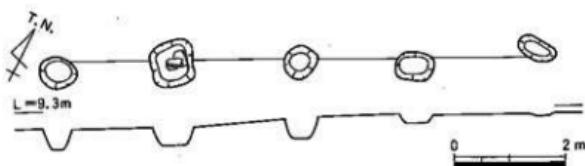
E24に位置する。主軸はN18°Wを向く。SB077の項で述べたようにSB141に伴うと判断している。818はSP0825から出土した土師器甕である。頸部内面に稜と段を持つ。

#### SA28 (第245図)

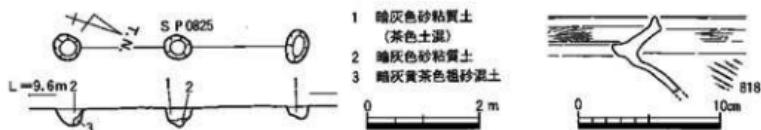
F24に位置する。主軸はN14°Wを向く。SZ01より新しい。



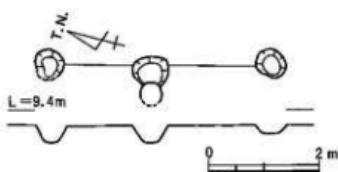
第242図 S A24平・断面図 (1/100)



第243図 S A26平・断面図 (1/100)



第244図 S A27平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)



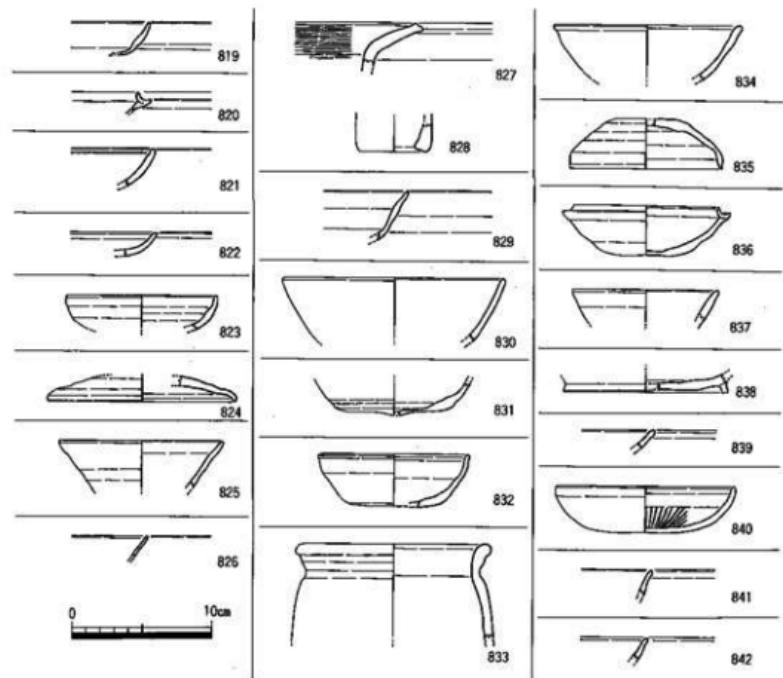
第245図 S A28平・断面図 (1/100)

### 柱穴

その他のS P (第246・247図)

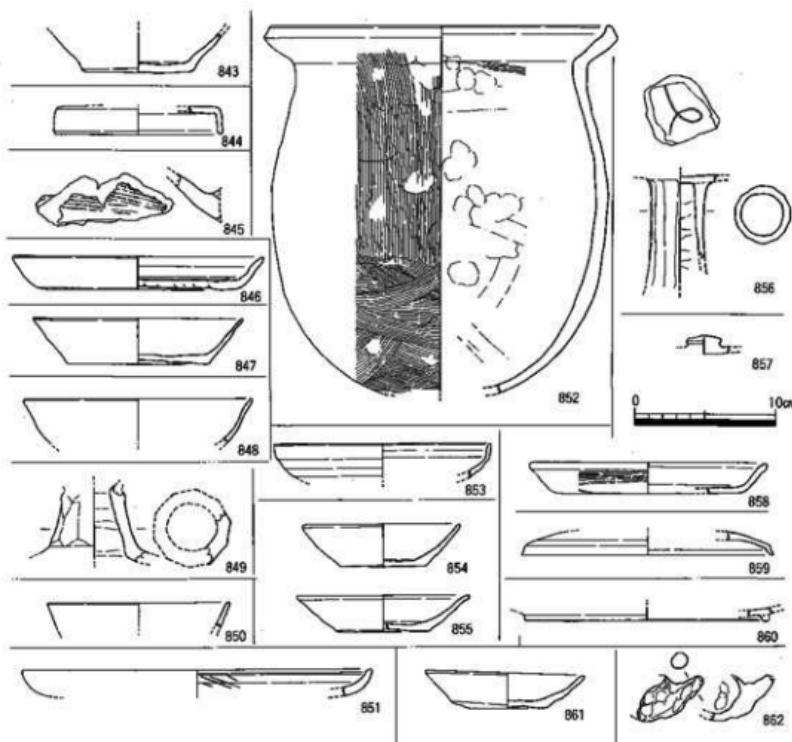
この時期のピットは非常に多く、ピットのほぼすべてが古代に属するといってよいかもしない。遺物もまた多く出土しており、その中でも特徴的なものを選んで掲載した。

819はS P 0065A (E 21) から出土した須恵器皿である。820はS P 0138A (E 21) から出土した須恵器杯である。821はS P 0148A (E 21) から出土した土師器皿で、内面に暗文が描かれていた痕跡がわずかに残されている。822はS P 0181A (E 22) から出土した土師器



第246図 柱穴出土遺物実測図(2) (1/4)

皿である。823はS P 0270A (E 22) から出土した須恵器杯である。824はS P 0277A (E 22) から出土した須恵器蓋である。825はS P 0279A (E 22) から出土した須恵器杯である。826はS P 0285A (E 22) から出土した須恵器杯である。827はS P 0335A (E 22) から出土した土師器鍋である。828も同ピット出土の土師器鉢壺である。829はS P 0357A (E 22) 出土の須恵器杯である。830はS P 0391A (E 22) 出土の土師器椀である。831はS P 0432A (E 23) 出土の須恵器杯である。832はS P 0458A (E 23) 出土の須恵器杯である。833はS P 0505A (E 21) 出土の土師器壺である。口縁があまり見かけない形態をしている。834はS P 0539A (F 23) 出土の土師器椀である。835はS P 0638A (E 23) 出土の須恵器蓋である。836はS P 0739A (E 23) 出土の須恵器杯である。837はS P 0801A (E 22) 出土の須恵器杯である。838はS P 0819A (F 22) 出土の須恵器高台付杯である。839はS P 0820A (F 22) 出土の土師器皿である。840はS P 0903A (E 23) 出土の土師器杯である。841はS P 1017A



第247図 柱穴出土遺物実測図(3) (1/4)

(E23) 出土の須恵器杯である。842はS P1023A (F23) 出土の須恵器杯である。843はS P0840B (E25) 出土の土師器杯である。844はS P0851B (E24) 出土の蓋用の須恵器蓋である。845はS P0883B (E25) 出土の竈の底の部分である。846はS P0079E (D22) 出土の須恵器皿で、底部外側に粘土紐を巻いた痕跡が残っている。847はS P0082E (D22) 出土の須恵器杯である。848はS P0135E (D22) 出土の土師器碗である。849はS P0453E (D23) 出土の土師器高杯である。850はS P0657E (D23) 出土の須恵器杯である。851はS P0678E (D23) 出土の土師器皿である。852はS P0937B (E25) 出土の土師器蓋である。853はS P1024E (D22) 出土の須恵器杯である。854・855はS P0135F (C25) 出土の土師器杯である。856はS P0440F (C24) 出土の土師器高杯である。857はS P0867F

(D24) 出土の土師器蓋である。858はS P 0874F (D24) 出土の土師器皿である。859はS P 0929F (D24) 出土の須恵器蓋である。860はS P 1004F (D24) 出土の土師器皿である。861はS P 0247F (C25) 出土の土師器杯である。862はS P 1125F (C24) 出土で、小さな粘土塊から摘みのついた深匙状のものを作り出している。時期は不明である。

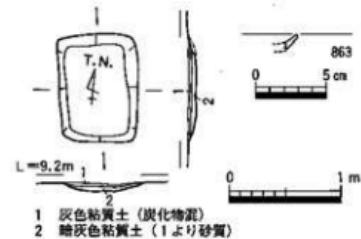
### 土坑

#### S K 02C (第248図)

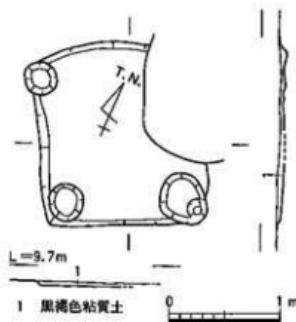
F 27に位置する。長方形の浅い土坑で、1層と2層の間に一面に炭化物が堆積していた。同様の土坑はⅢ区北端部でも検出されている(1①S K 02)。特に熱を受けた形跡もなく、性格は不明である。小皿と思われる土師器片863など少量の土器片が出土している。

#### S K 04A (第249図)

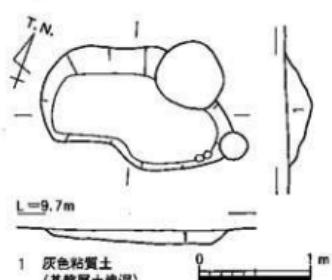
E 22に位置する。不整形の深い土坑で、S B 004に伴う可能性も考えられる。遺物の出土は見られなかった。



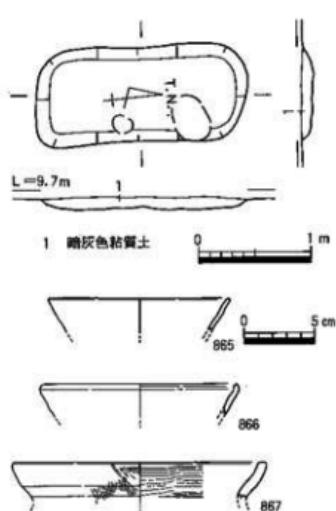
第248図 S K 02C平・断面図(1/50), 出土遺物実測図(1/4)



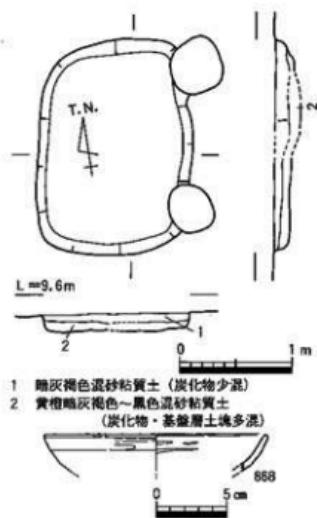
第250図 S K 05平・断面図(1/50), 出土遺物実測図(1/4)



第249図 S K 04A平・断面図(1/50)



第251図 S K06平・断面図 (1/50),  
出土遺物実測図 (1/4)



第252図 S K12平・断面図 (1/50), 出土遺  
物実測図 (1/4)

#### S K 05 (第250図)

E 22に位置する。正方形の浅い土坑で、隅に5~20cmのピットが付属する。864は土坑底から出土した土師器甕である。他に須恵器・土師器等の破片が少量出土している。出土土器から7世紀代に属すると考える。堅穴住居の中央部が残っている可能性も考えたが、当該期の堅穴住居に周囲にベッド状遺構を巡らす例が乏しいことから、成り立ちにくい。

#### S K 06 (第251図)

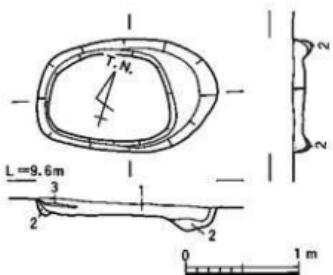
D 22に位置する。長楕円形の浅い土坑で、少量の土器片が出土した。865は須恵器杯で、866は土師器杯である。867は土師器甕である。出土土器から9世紀後半~10世紀の遺構とを考える。

#### S K 12 (第252図)

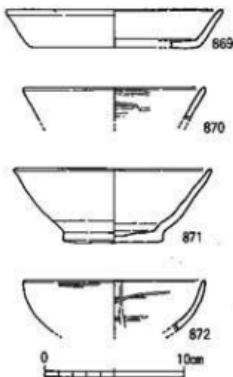
D 23に位置する。方形の浅い土坑で、埋土には基盤層土が多く混じり、意図的な埋め戻しが考えられる。少量の土器片が出土した。868は黒色土器でA類かB類か判断つかない。11~12世紀のものと思われる。

#### S K 13 (第253図)

C 22に位置する。楕円形の土坑で、底は中央が台地状に高く、その周囲を壁溝状に溝が



1 暗褐色灰色粘質土(炭化物少)  
2 深灰色粘質土  
3 黒褐色粘質土(炭化物が薄く層になる)



巡る。埋土には炭化物が含まれ、一部層状の堆積も見られる。少量の土器片が出土した。869は須恵器で、870~872は土師器である。出土土器から10世紀代の遺構と考える。

#### S K 15

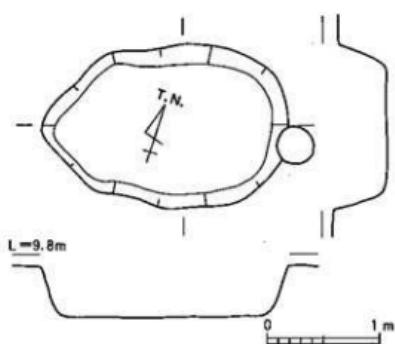
第253図 S K 13平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)

(第254図)

E 22に位置する。椭円形の土坑でやや深い。少量の土器片等が出土しているのみで、時期決定は難しい。

#### S K 24 (第255図)

E 26に位置する。円形の土坑で浅い。付近は集落はずれで、どこまでが溝か判断が付かないような浅い凹凸が繰り返されている地点であり、そのような地形の微妙な窪みの一部と考える。少量の土器片が出土している。873・874は須恵器で、875は土師器である。875は須恵器の模倣形態であろ



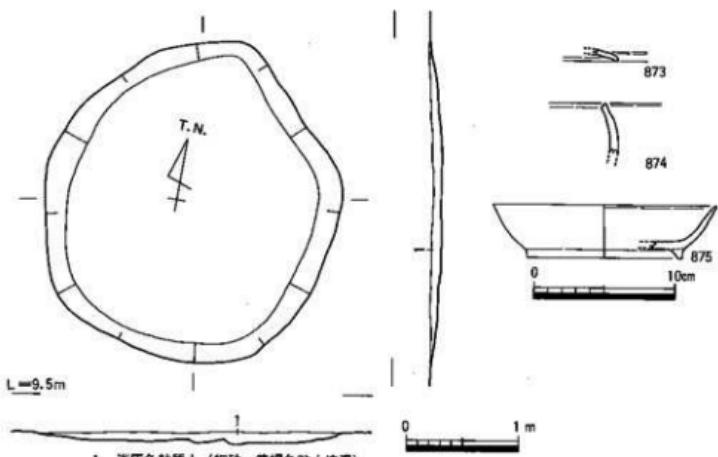
第254図 S K 15平・断面図 (1/50)  
うか。出土土器は8世紀~9世紀前半のものである。

#### S K 25 (第256図)

E 26に位置する。不整形で浅く、S K 24同様地形の微妙な窪みの一部と考える。876は須恵器杯蓋で、7世紀後半~8世紀前半のものである。他に少量の須恵器・土師器片等が出土している。

#### S K 26 (第257図)

E 26に位置する。不整形で浅く、S K 24同様地形の微妙な窪みの一部と考える。少量の



第255図 SK 24平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)

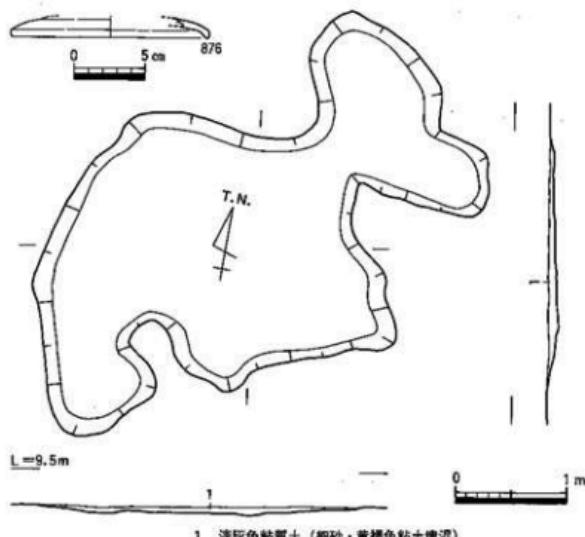
須恵器・土師器片等  
が出土しているのみ  
で、時期は不明であ  
る。

#### S K 28 (第258図)

D25に位置する。  
不整形で浅い。埋土  
堆積状況は人為的な  
ものを窺わせる。少  
量の須恵器・土師器  
片等が出土している  
のみで、それらの時  
期は不明である。

#### S K 29 (第259図)

D25に位置する。  
不整形で浅い。埋土



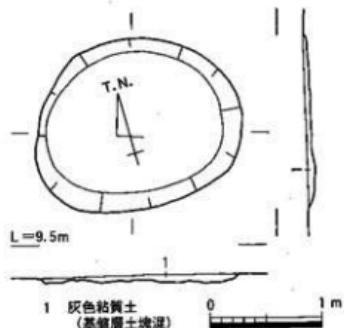
1 淡灰色粘質土 (細砂・黄褐色粘土塊混)

第256図 SK 25平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)

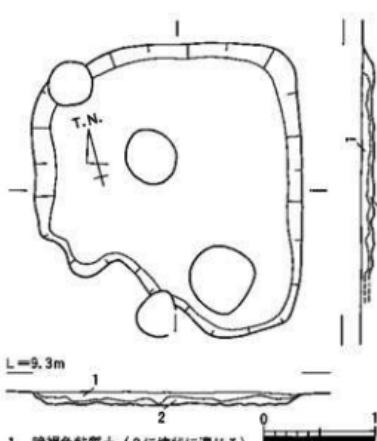
堆積状況は隣接する S K28と同じであり、同時期の可能性がある。少量の土器片が出土している。877・878は弥生土器で混入と考える。879・880は須恵器である。879は10世紀代の可能性がある。

#### S K 33 (第260図)

D24に位置する。長方形の深い土坑である。南西部に深さ20cmのピットが1つある。少量の須恵器・土師器片等が出土しているのみで、それらの時期は不明である。



第257図 S K 26平・断面図 (1/50)



第258図 S K 28平・断面図 (1/50)

#### S X 02C (第261図)

C27に位置する。小さく浅い土坑であるが、下半分に炭化物が堆積する。不整形とはいっても堆積状況は近くのS K02Cに似ており、同時期の可能性もある。数片の弥生土器やサヌカイト片が出土している。

#### S X 09 (第262図)

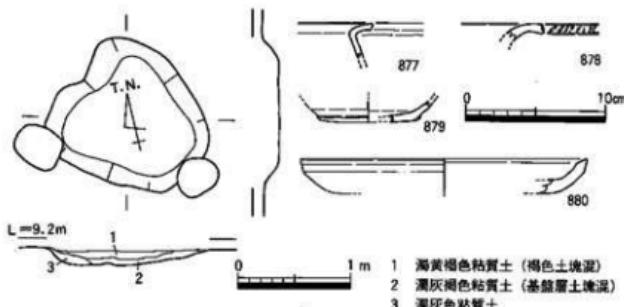
C25に位置する。小さく浅いピットで東南部にピットが1つある。ごく少量の土師器片等が出土しているのみで、時期は不明である。

#### S X 10 (第263図)

C25に位置する。浅い不整形の土坑である。8世紀代の須恵器・土師器片が少量出土している。881は混入であろう。

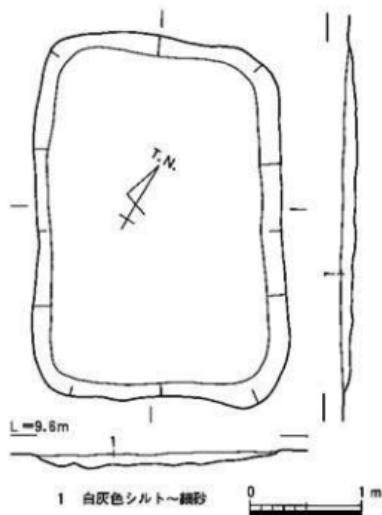
#### S X 13/14 (第264図)

D25に位置する。南北に長い土坑と梢円形の土坑及びそれから延びて長い土坑の中央を貫き直線で西に走る細い溝から構成される。いずれも浅い。須恵器片等が数点出土したのみで、時期決定は難しい。しかし2つの土坑の上にちょうどS



第259図 SK 29平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)

B 059の柱穴が重なり、細い溝の方位がS B 059の主軸方位に近似することは、S B 059との関係を窺わせる。細い溝は重なり合う S B 060でもみられるものである。

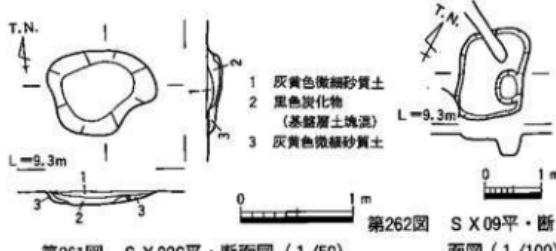


第260図 SK 33平・断面図 (1/50)

多くの弥生土器に混じって出土した。7世紀中葉のものである。

#### S D 005C (第266図)

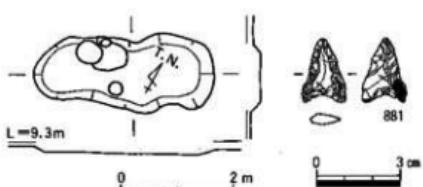
D/F 27に位置する。「大畦畔」の南に沿う。平面位置から、S D 001C同様「大畦畔」形成のために掘削された溝らしい。「大畦畔」からの深さは20cm前後である。884は土師器鍋



である。885は土師質土釜で11世紀頃のものと考える。

#### S D 006C (第266図)

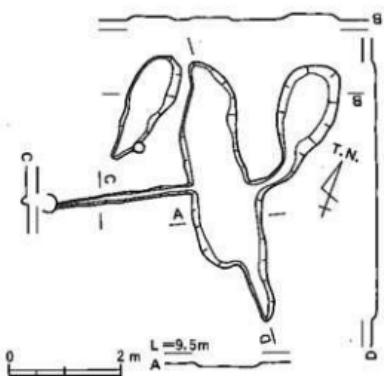
D/F 27に位置する。断



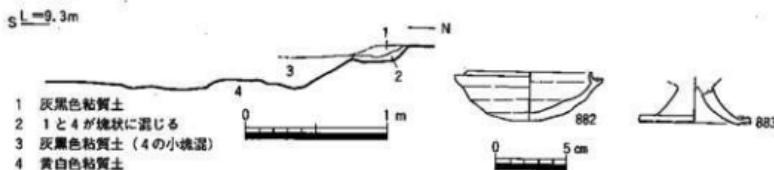
面図からS D 005Cより新しい。平面位置はS D 005Cの面図 (1/100) 南に沿うため、S D 005C埋没後に新たにその代わりに掘削された可能性がある。887は土師器、886・888は須恵器で、新しい様相を示す887は9世紀に下る可能性がある。また圓化していないが10世紀代の土師器片もある。いずれにしても885より古く、これらはS D 006Cの形成時期を示すものではない。

#### S D 007C/054 (第267図)

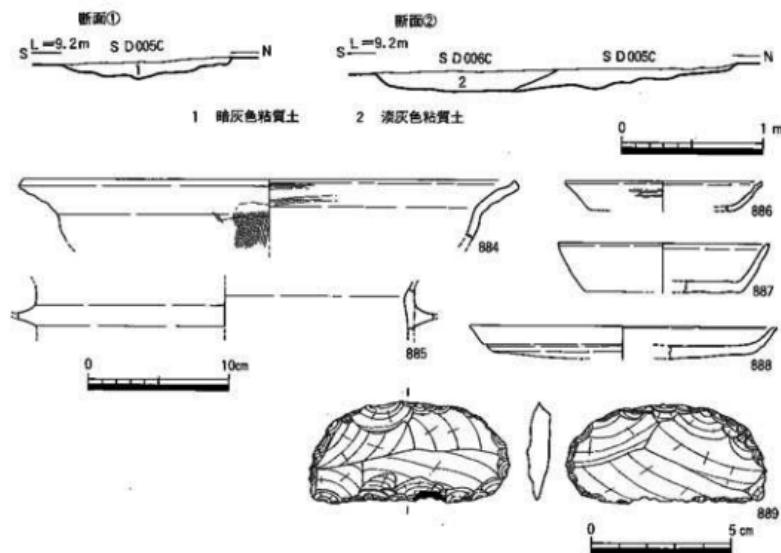
D 26・27/E 26に位置する。平面位置から、S D 005C同様「大畦畔」形成のために掘削された溝らしい。「大畦畔」からの深さは20cm前後である。東はS D 070と合流するように見え、北はS D 053より新しいように見えるが、いずれも周囲からの深さ5~10cmと浅く、実際には一つの溝でしかないのか、時期差があるのかはっきりとは掘めなかった。「大畦畔」南の状況からいえば、



S D 007C/054埋没後にS D 053/070がその外に新たに掘削されたとも考えられるが、その場合にはS D 053とS D 054の平面図の新旧関係が間違っていることになる。土器片が少量出土している。890~894は須恵器、895は土師器である。891~895は10~11世紀のものと考える。



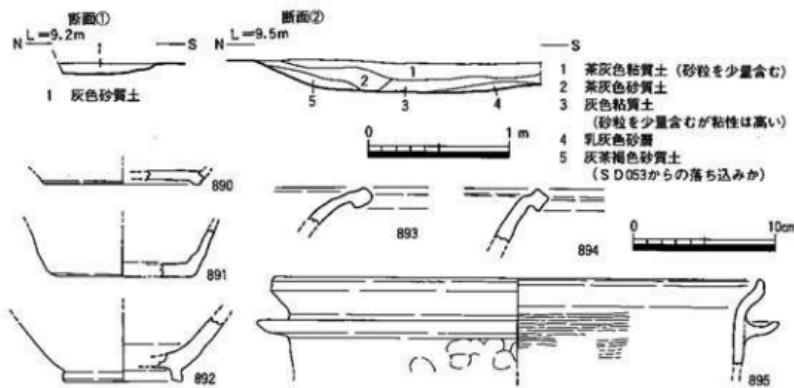
第265図 SD 001C断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)



第266図 SD 005C, SD 006C断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

#### S D 006A/007A (第268・269図)

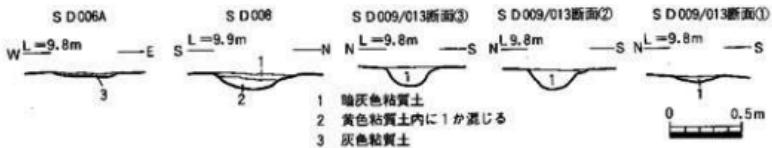
E 21/22に位置する。中間が途切れ、北をSD 006A、南をSD 007Aとして調査したが、同一のものと判断して扱うことにする。SB 003より新しい。N26°Wを向いてまっすぐに掘られ、北延長上にはⅢ区2④SD 18が存在することから、これとも同一の溝であると考える。ごく少量の土器片が出土しているのみで、詳しい時期はわからない。896・897は須恵器で、8～9世紀のものである。



第267図 S D 007C/054断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)



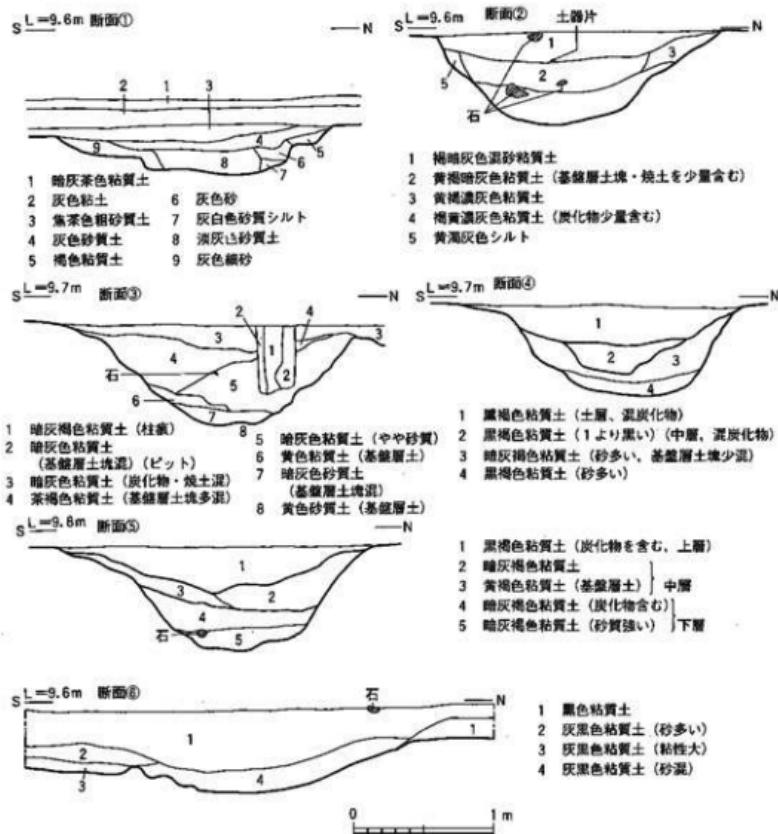
第268図 S D 007A断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)



第269図 S D 006A, S D 008, S D 009/013断面図 (1/40)

#### S D 010 (第270~296図, 図版30・31)

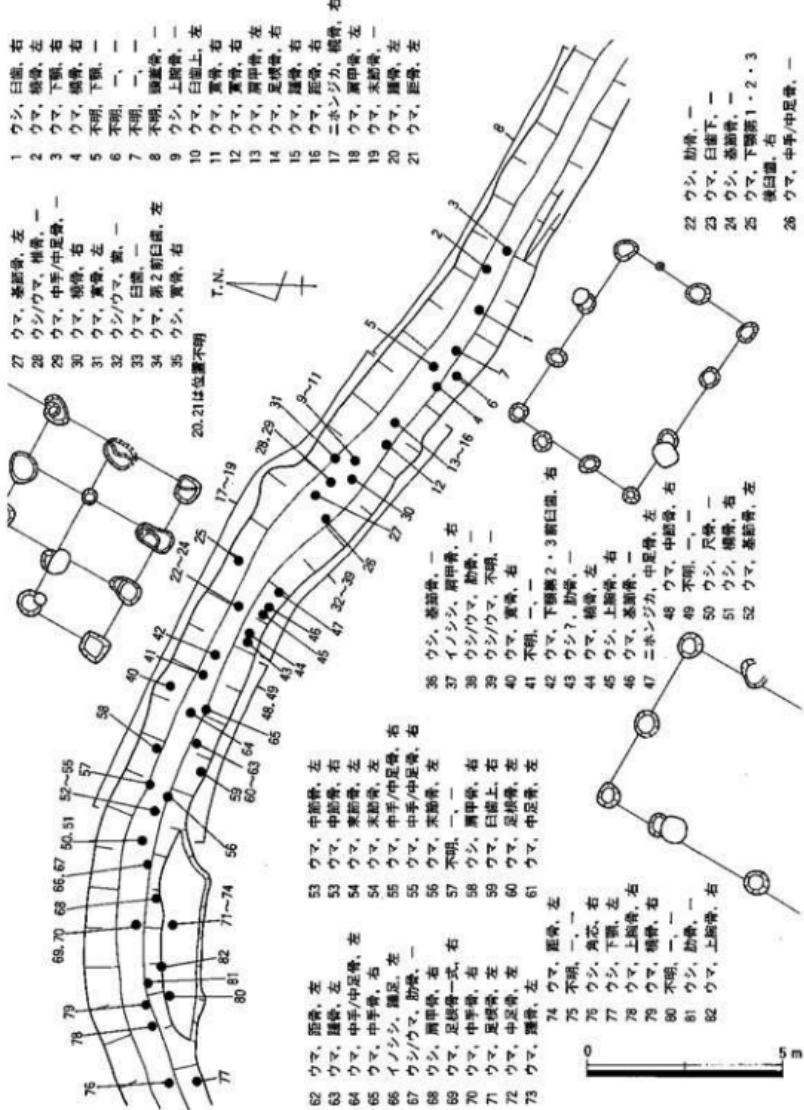
グリッド23列をほぼ東西に横切り、東1/3付近で南東に向きを変えている大きな溝である。幅は2~2.5m、深さは1m弱である。溝底の標高も8.7mではほぼ一定しているが、西端は8.4m、東端は8.9mであり、全体としては東から西へ水が流れるようになっている。東西端は掘り込みが浅く、それぞれ低地部分に至って溝が消滅するようにも考えられるが、改修区で方向が違うとはいえS D 010の続きと思われる溝(S D 15)が検出されており、大きく述べる溝であった可能性が強い。埋土は大きく3層に分かれ、下層は炭化物を含み砂の多い黒褐~暗灰褐色粘質土、中層は暗灰色粘質土で黄色い基盤層土塊を多く含む。上層は黒褐~暗灰褐色粘質土が目安となる。中層は意図的に埋めたことが基盤層土の存在か

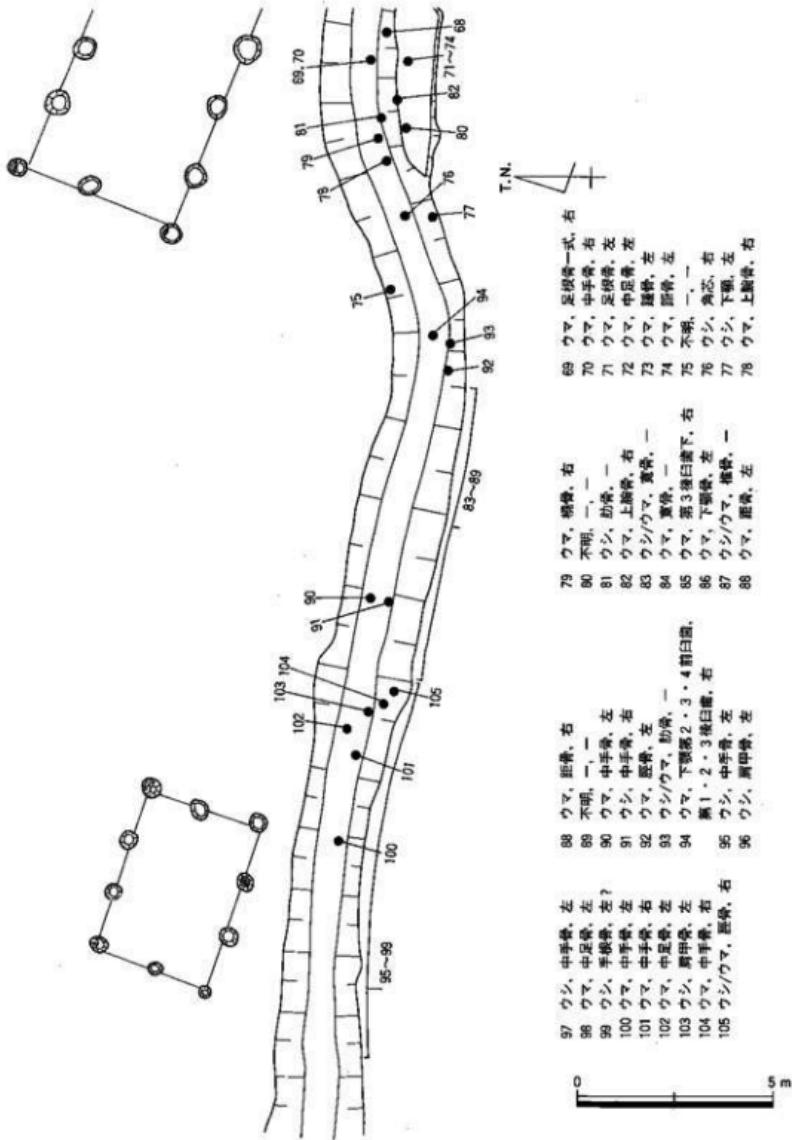


第270図 S D010断面図 (1/40)

らわかり、後述するように上層も出土土器が中層と時期差がないことから、埋め立てたかもしくは短期間に自然埋没したと思われる。中層と下層の境では径20cm程の丸石を多量に検出しておらず、埋め立てに際して投げ込んだかと思われるが、どのような理由でこれらの石が溝付近に存在していたのか、何かの目的に使われていたのかはわからない。

S D010からは、大量の須恵器・土師器とウシ・ウマ等の獣骨、輪羽口片・鐵滓等の鐵冶関連遺物等が出土している。特に中層と下層の境で完形かそれに近い土器が多量に出土し、それに石や獣骨が混じっている。埋め立てに際してこれらをまとめて捨てたのであろう。





面位置	層位	大分類	小分類	部位	左右	部分	備考	計測値	図版
1 *		哺乳類	ウシ	臼歯	右	*	*	*	
2 *		哺乳類	ウマ	橈骨	左	近位	*	*	
3 *		哺乳類	ウマ	下頸	右	*	*	臼歯列長170mm	
4 *		哺乳類	ウマ	橈骨	右	近位	*	*	
5 *		哺乳類	不明	下頸	*	*	*	*	
6 *		哺乳類	不明	*	*	*	*	*	
7 *		哺乳類	不明	*	*	*	*	*	
8 中下層		哺乳類	不明	頭蓋骨	*	*	縫合線。同じ袋の別個体の骨に斧様の純器で叩いた痕跡の残るものがある	*	
9 下層		哺乳類	ウシ	上腕骨	*	近位	*	*	
10 *		哺乳類	ウマ	臼歯上	左	*	*	最大長68mm	
11 *		哺乳類	ウマ	寛骨	右	*	斧痕	L25.0/W25.2/H61.6	67
12 下層		哺乳類	ウマ	寛骨	右	*	斧痕	*	
13 *		哺乳類	ウマ	肩甲骨	左	遠位	*	*	
14 *		哺乳類	ウマ	足根骨	右	*	*	*	
15 *		哺乳類	ウマ	踵骨	右	*	*	*	
16 *		哺乳類	ウマ	距骨	右	*	*	*	
17 中下層		哺乳類	ニホンジカ	橈骨	右	遠位端	未産着	*	
18 中下層		哺乳類	ウマ	肩甲骨	左	遠位	斧痕上腕骨と切り離すため	*	67
19 中下層		哺乳類	ウマ	末節骨	*	*	イヌの噛み痕	*	
20 中下層		哺乳類	ウマ	踵骨	左	*	*	*	
21 中下層		哺乳類	ウマ	距骨	左	*	焦げ痕	*	
22 中層		哺乳類	ウシ	肋骨	*	*	切り傷有り	*	67
23 中層		哺乳類	ウマ	臼歯下	*	*	*	L26.0/W15.0/H70.0	
24 中層		哺乳類	ウシ	基節骨	*	*	斧痕	*	68
25 上層		哺乳類	ウマ	下顎第1・2・3後臼歯	右	*	*	*	
26 下層		哺乳類	ウマ	中手/中足骨	*	*	斧痕/刀子痕?	*	
27 中層		哺乳類	ウマ	基節骨	左	*	*	*	
28 中層		哺乳類	ウシ/ウマ	椎骨	*	*	*	*	
29 中層		哺乳類	ウマ	中手/中足骨	*	近位	焦げ目?	*	
30 上層		哺乳類	ウマ	橈骨	右	遠位	斧痕?	Bd70.0/BFd60.4	70
31 *		哺乳類	ウマ	寛骨	左	*	*	*	
32 中下層		哺乳類	ウシ/ウマ	歯	*	*	*	*	
33 最下層		哺乳類	ウマ	臼歯	*	*	*	*	
34 中下層		哺乳類	ウマ	第2前臼歯	左	*	*	L33.0/B24.0/H44.0	
35 中下層		哺乳類	ウシ	寛骨	右	*	斧痕。イヌの噛みあと	*	67
36 中下層		哺乳類	ウシ	基節骨	*	近位	イヌの噛み痕	Bd39.8	68
37 上層		哺乳類	イノシシ	肩甲骨	右	遠位	*	*	
38 中下層		哺乳類	ウシ/ウマ	肋骨	*	*	*	*	
39 中下層		哺乳類	ウシ/ウマ	不明	*	*	斧痕	*	

第3表 SD010出土動物遺体一覧(1)

箇面位置	層位	大分類	小分類	部位	左右	部分	備考	計測値	図版
40	下唇	哺乳類	ウマ	寛骨	右	*	斧痕3カ所?	*	69
41	中唇	哺乳類	不明	*	*	*	*	*	
42	上唇	哺乳類	ウマ	下顎第2-3前臼歯	右	*	刃物痕あり	*	72
43	中唇	哺乳類	ウシ?	肋骨	*	*	*	*	
44	下唇	哺乳類	ウマ	橈骨	左	遠位	斧痕。スパイラル痕となる	遠位端最大幅70.0/BFd60.2	
45	中唇	哺乳類	ウシ	上腕骨	右	遠位	斧痕2カ所。刀子痕/イヌの噛み痕?	BT80.0	71
46	下唇	哺乳類	ウマ	基節骨	*	*	刀子痕	*	72
47	下唇	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	左	近位	*	*	
48	中下唇	哺乳類	ウマ	中節骨	右	*	*	GL44.0/Bd43.8/Bp47.4/SD39.2/BFp41.3	
49	中唇	哺乳類	不明	*	*	*	*	*	
50	中唇	哺乳類	ウシ	尺骨	*	*	*	*	
51	中唇	哺乳類	ウシ	橈骨	右	近位	*	*	
52	中唇	哺乳類	ウマ	基節骨	左	*	片側に斧痕?	GL91.0/SD33.4/Dp33.0/Bp49.4/BFp47.0/Bd43.0/BFp40.2	
52	中唇	哺乳類	ウマ	基節骨	右	*	左右一对。片側に斧痕?	*	
53	中唇	哺乳類	ウマ	中節骨	左	*	左右一对	*	
53	中唇	哺乳類	ウマ	中節骨	右	*	左右一对	*	
54	中唇	哺乳類	ウマ	末節骨	左	*	左右一对	*	
54	中唇	哺乳類	ウマ	末節骨	左	*	左右一对	*	
55	中唇	哺乳類	ウマ	中手/中足骨	右	*	左右一对	*	
55	中唇	哺乳類	ウマ	中手/中足骨	右	*	左右一对	*	73
56	中唇	哺乳類	ウマ	末節骨	左	*	イヌの噛みあと	*	
57	中唇	哺乳類	不明	*	*	*	刃物痕	*	
58	中唇	哺乳類	ウシ	肩甲骨	右	体部	*	*	
59	中唇	哺乳類	ウマ	臼歯上	右	*	*	最大長77mm	
60	中唇	哺乳類	ウマ	足根骨	左	*	*	*	75
61	中唇	哺乳類	ウマ	中足骨	左	*	*	最大長265.0	75
62	中唇	哺乳類	ウマ	距骨	左	*	*	*	75
63	中唇	哺乳類	ウマ	踵骨	左	*	*	*	75
64	中唇	哺乳類	ウマ	中手/中足骨	左	遠位	斧痕	Bd44.0	74
65	中唇	哺乳類	ウマ	中手骨	右	*	*	最大長195.0	74
66*	哺乳類	イノシシ	踵骨	左	*	*	*	*	
67*	哺乳類	ウシ/ウマ	肋骨	*	*	*	*	*	
68*	哺乳類	ウシ	肩甲骨	右	遠位	斧痕上腕骨を切り離す。刀子痕?	SLC58.0/GLP71.2/LG58.0/BG51.0		
69	中唇	哺乳類	ウマ	足根骨	右	*	*	*	
70	中唇	哺乳類	ウマ	中手骨	右	遠位	*	GL205/Bd44	
71*	哺乳類	ウマ	足根骨	左	*	刀子痕	*		75

第4表 SD010出土動物遺体一覧(2)

箇面位置	場位	大分類	小分類	部位	左右	部分	備考	計測値	図版
72 *		哺乳類	ウマ	中足骨	左	近位	70と対	最大長250/BP47.0/ BD44.8	75
73 *		哺乳類	ウマ	蹠骨	左	*	刀子痕	*	75
74 *		哺乳類	ウマ	距骨	左	*	*	*	75
75 中下唇		哺乳類	不明	*	*	*	*	*	
76 *		哺乳類	ウシ	角芯	右	*	頭蓋より離すための斧 痕、角鞘を剥がすため の削あと	L188.0/W69.0	76
77 *		哺乳類	ウシ	下顎	左	*	成獣	臼歯列長138mm 前臼歯 50mm 後臼歯85mm	77
78 *		哺乳類	ウマ	上腕骨	右	体部～遠位端	*	遠位端最大幅63mm	79
79 *		哺乳類	ウマ	橈骨	右	近位	刃物痕2、刀子、手斧 様2種/成獣	Bp71.0/BFp63.8	78
80 中層		哺乳類	不明	*	*	*	*	*	
81 中層		哺乳類	ウシ	肋骨	*	*	*	*	
82 中層		哺乳類	ウマ	上腕骨	右	遠位	*	*	
83 上中層		哺乳類	ウシ/ ウマ	寛骨	*	*	*	*	
84 上中層		哺乳類	ウマ	寛骨	*	*	*	*	
85 上中層		哺乳類	ウマ	第3後臼歯下	右	*	*	*	
86 上中層		哺乳類	ウマ	下顎骨	左	*	*	*	
87 上中層		哺乳類	ウシ/ ウマ	椎骨	*	*	*	*	
88 中下層		哺乳類	ウマ	距骨	左	*	*	*	
88 中下層		哺乳類	ウマ	距骨	右	*	*	*	
89 下層		哺乳類	不明	*	*	*	*	*	
90 *		哺乳類	ウマ	中手骨	左	近位～ 体部	*	*	
91 *		哺乳類	ウシ	中手骨	右	近位～ 遠位	イヌの噛み痕？	*	80
92 下層		哺乳類	ウマ	脛骨	左	遠位	*	*	
93 下層		哺乳類	ウシ/ ウマ	肋骨	*	*	*	*	
94 下層		哺乳類	ウマ	下顎第2-3-4 前臼歯 第1-2-3 後臼歯	右	*	解体痕/老獣/歯の上面 が鱗状にすり減ってい る	*	
95 上中層		哺乳類	ウシ	中手骨	左	近位	*	*	
96 上中層		哺乳類	ウシ	肩甲骨	左	遠位	*	*	
97 上中層		哺乳類	ウシ	中手骨	左	*	*	最大長230mm土	
98 上中層		哺乳類	ウマ	中足骨	左	体部	*		
99 上中層		哺乳類	ウシ	手根骨	左	*	*	*	
100 *		哺乳類	ウマ	中手骨	左	遠位	刀子痕？	*	
101 *		哺乳類	ウマ	中手骨	右	体部～ 遠位	*	*	
102 *		哺乳類	ウマ	中足骨	左	*	*	*	80
103 *		哺乳類	ウシ	肩甲骨	左	*	*	*	
104 *		哺乳類	ウマ	中手骨	右	近位	*	*	
105 *		哺乳類	ウシ/ ウマ	脛骨	右	*	*	*	

第5表 SD010出土動物遺体一覧(3)

図面位置	遺跡名	遺構	層位	大分類	小分類	部位	左右	部分	備考	計測値
106	IV区	S D 040 /060	中層	哺乳類	ウマ	橈骨	左	近位外側	*	*
107	IV区	S D 040 /060	中層	哺乳類	ウマ	上腕骨	左	*	2点同一個体	*
108	III区	S R 01	7層	哺乳類	ウシ/ウマ	上下顎骨	左	*	*	*
109	III区	S R 01	7層	哺乳類	ウシ/ウマ	上下顎骨	右	*	*	*
110	III区	S R 01	7層	哺乳類	ニホンジカ	角	*	*	腰飾りとして研磨・切断などの加工を行う	*
111	III区	S R 01	7層	哺乳類	イノシシ	下顎骨第1・2・3後臼歯	*	*	*	*
112	III区	S R 01	7層	哺乳類	ネズミ類	切歯	*	*	*	*
113	III区	S R 01	7層	哺乳類	ネズミ類	手骨	*	*	*	*
114	III区	S R 01	7層	哺乳類	小動物食肉類	犬歯	*	*	*	*
115	III区	S R 01	7層	爬虫類	ヘビ類	椎骨	*	*	*	*
116	III区	S R 01	7層	魚類	タイ類	遊離歯	*	*	稚魚	*
117	III区	S R 01	7層	魚類	フグ類	鰓板	*	*	*	*
118	III区	S R 02	15層	哺乳類	ウシ/ウマ	膝蓋骨	*	*	*	*
119	III区	S R 02	7層	哺乳類	ウマ	脛骨	右	*	*	*
120	III区	S R 02	7層	哺乳類	ウマ	橈骨	左	体部	*	*
121	III区	S R 02	7層	哺乳類	ウマ	下顎骨	左	*	*	*
122	III区	S R 02	7層	哺乳類	ウマ	上顎臼歯	*	*	*	*
123	III区	S R 02	7層	貝類	ハマグリ	*	*	*	*	*
124	改修区	S D 11	①上層	哺乳類	ウシ	歯	*	*	*	*
125	改修区	S D 11	上層	哺乳類	ウシ?	踵骨	右	*	*	*
126	改修区	S D 11	搅乱	哺乳類	ウシ/ウマ	四肢骨	破片	*	黒色炭化	*
127	改修区	S D 11	①上層	哺乳類	ウマ	距骨	右	*	イヌによる噛み跡	*
128	改修区	S D 11	①上層	哺乳類	ウマ	上顎骨	右	*	*	*
129	改修区	S D 11	第1層	哺乳類	ウマ	中手骨 or 中足骨	*	近位	*	*
130	改修区	S D 11	第1層	哺乳類	ウマ	寛骨	左	*	*	*
131	改修区	S D 11	①上層	哺乳類	ニホンジカ	角	*	破片	根元を折り更に枝2本とも小刀等で切り取る?	*
132	改修区	S D 11	上層	哺乳類	ニホンジカ	下顎骨	右	*	*	*
133	改修区	S D 11	上層	哺乳類	不明	*	*	*	*	*

第6表 川津一ノ又遺跡出土動物遺体一覧(1) (IV区 S D 010を除く)

箇面位置	遺跡名	遺構	層位	大分類	小分類	部位	左右	部分	備考	計測値
134 改修区	S D11	①上層	哺乳類	不明	*	*	*	*		*
135 改修区	S D11	①上層	哺乳類	不明	*	*	*	*		*
136 改修区	S D11	①上層	哺乳類	不明	*	*	*	*		*
137 改修区	S D11	第1層	哺乳類	不明	*	*	*	*		*
138 改修区	S D15	*	哺乳類	ウマ	中手骨	左	遠位	手斧痕数カ所/火熱による黒変	Gpd43.0 Gd47.0	
139 改修区	S D15	②第2層	哺乳類	ウシ	下顎骨	左	*	*	臼歯列長基部 153mm前臼歯列 長65mm後臼歯列 長90mm	
140 改修区	S D15	②第2層下	哺乳類	ウシ	中手骨	左	遠位	斧による打撃痕 多数。スパイラル痕有り? イヌの噛み痕	*	
141 改修区	S D15	②第2層下	哺乳類	ウシ/ウマ	破片	*	*	斧による割れ?	*	
142 改修区	S D15	②第3層	哺乳類	ウマ	脛骨	右	*	やや大形。膝2 カ所に斧で2~ 3度の加害	*	
143 改修区	S D15	③第1層	哺乳類						*	
144 改修区	S D15	③第1層	哺乳類					斧による割れ面 1ヶ所?	*	
145 改修区	S D15	③第1層	哺乳類	ウシ/ウマ	四肢骨	*	*	斧による数段の 打撃痕	*	
146 改修区	S D15	③第1層	哺乳類	ウマ	末節骨	左	破片	イヌによる噛み 跡?	*	
147 改修区	S D15	③第1層	哺乳類	ウマ	末節骨	右	破片	イヌによる噛み 跡?	*	
148 改修区	S D15	③第2層	哺乳類					刀子による小さな加工痕多数?	*	
149 改修区	S D15	③第2層上	哺乳類	ウシ	下顎骨 M2・M3	右	*	*		*
150 改修区	S D15	③第2層上	哺乳類	ウシ	脛骨	左	遠位	刀子痕2	最大幅66mm	
151 改修区	S D15	③第2層上	哺乳類	ウマ	下顎骨P 2-P3-P4	左	*	内側に加害痕	最大長345.0 Bd63.0 SD37.0	
152 改修区	S D15	③第2層上	哺乳類					骨製品?	*	
153 改修区	S D15	③第2層中	哺乳類	ウシ	肩甲骨	左	破片	刀子痕1ヶ所?	*	
154 改修区	S D15	③第2層中	哺乳類	ニキンジカ	前頭骨	左	角座	周囲を刀子等で 削って折りとつ た跡?	*	
155 改修区	S D15	③第2層中	魚類	クロダイ イ	前上顎骨	右	*	*		*
156 改修区	S D15	③第2層中	魚類	ウナギ	鰓蓋骨	右	*	*		*
157 改修区	S D15	③第2層下	魚類	タイ類	椎骨	中	*	*		*
158 改修区	S D15	③第2層下	魚類	クロダイ イ	前上顎骨	右	*	*		*
159 改修区	S D15	③第3層	哺乳類	ウシ	下顎骨第 1・2後臼歯	左	*	*		*
160 改修区	S D15	③第3層	哺乳類	ウシ	上顎骨第 1・2後臼歯	右	*	*		*
161 改修区	S D15	③第3層	哺乳類	ウマ	対骨	右	*	斧による割れ面 2ヶ所	*	
162 改修区	S D15	③第3層	哺乳類	ウマ	中手骨	右	*	小形。斧痕	最大長212mm	

第7表 川津一ノ又遺跡出土動物遺体一覧(2) (IV区 S D010を除く)

岡面位置	遺跡名	遺構	層位	大分類	小分類	部位	左右	部分	備考	計測値
163	改修区	SD15	③第3層	哺乳類	ウマ	肩甲骨	左	*	割れ面付近両側に斧痕。肩甲骨以下を切り離し更に裏面から叩く	GLP84.1 SLC 59.0 LG53.0 BG45.0
164	改修区	SD15	③第3層	魚類	カンダイ	下咽頭骨	*	*	*	*
165	改修区	SD15	第2層	哺乳類	ウマ	肩甲骨	右	*	割れ面付近とその上に2ヵ所斧による加撃痕。このために割れ面が生じる。また上腕骨を切り離すための刀子痕	*
166	改修区	SD15	第2層下	哺乳類	ウマ	肩甲骨	左	*	斧による割れ面1ヶ所?	*
167	改修区	SD15	第3層	哺乳類	ウマ	中足骨	右	*	*	最大長259mm
168	改修区	SD15	第3層	哺乳類	ウマ	距骨	右	*	*	Bd47.0

第8表 川津一ノ又遺跡出土動物遺存体一覧(3) (IV区 SD010を除く)

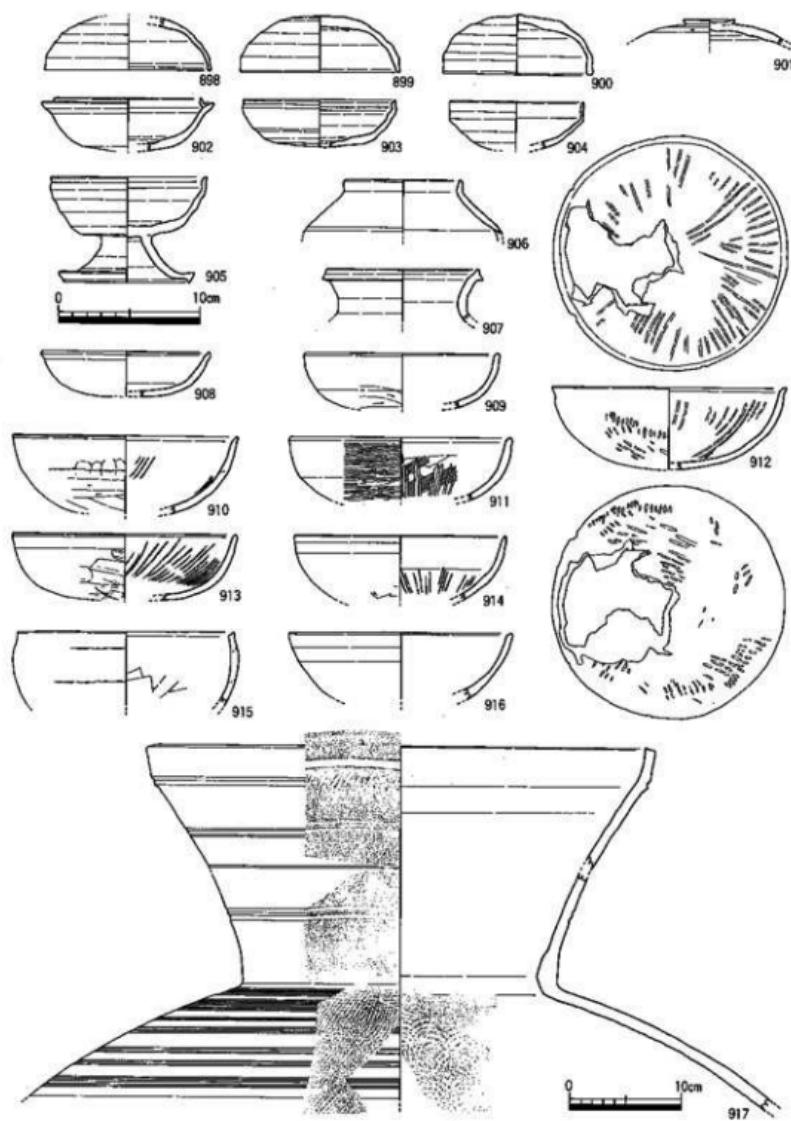
ウシ・ウマ等の獣骨については玉稿（第4章第1節）を頂いているので、ここでは出土位置図（第270・271図）及び一覧表の掲載だけに留める。鍛冶関連遺物については、小さく図化出来なかったため、一覧表にして観察表の後ろに掲載している。中～下層から多く出土し、内容は小片が20点程度で、鏨羽口片・鉄滓・ガラス質・小鉄片があった。

土器は層位で取り上げたが、厳密には難しく、平均の深さで取り上げたところも多い。よって上中下の土層とは対応しないものも存在する。また最初に入れた数本のトレンチから出土した土器は上～下層として扱っている。

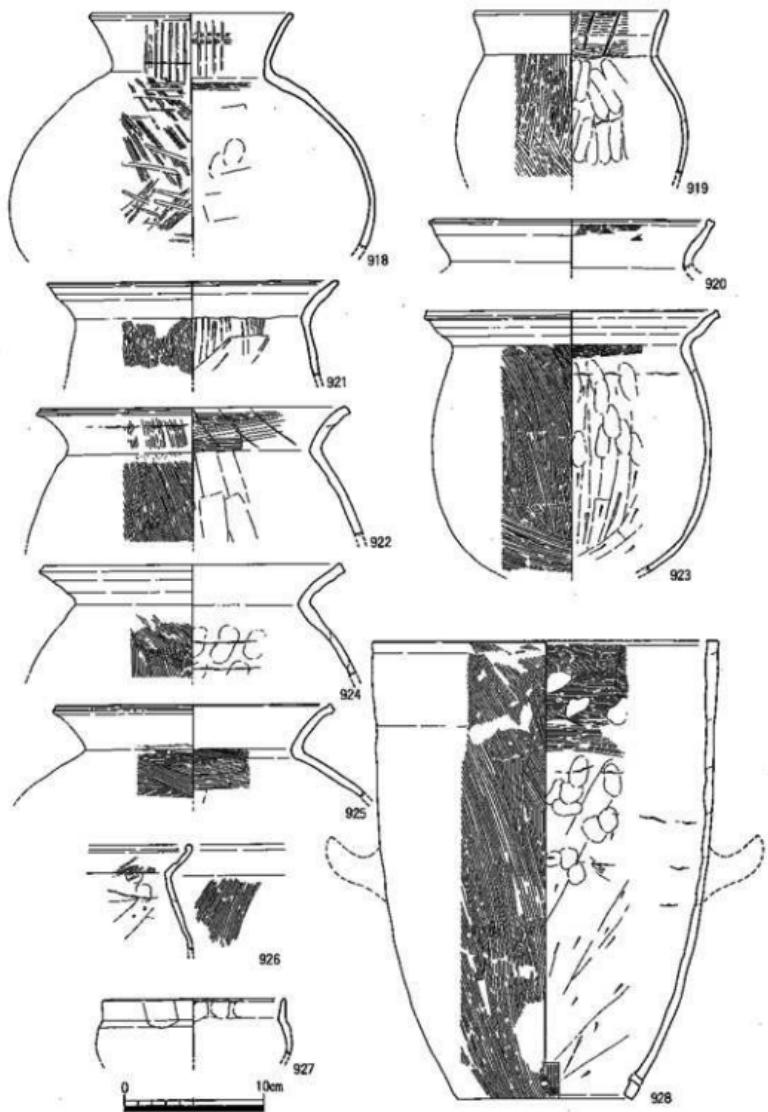
898～931は溝底で出土した。898～907・917は須恵器である。蓋杯（898～900・902～904）は口径10～12cmの範囲に含まれる。901は摘みの形状から返りを持たないものであろう。906は蓋（口径10cm）をかぶせて焼いたようであり、その部分には自然釉がかかっていない。908～916・918～931は土師器である。杯（908～915）は口径12cmと15～16cmに分かれる。内面に放射状暗文を持つものと持たないものがあり、外面は軽いナデか下半ヘラ削りを行う。911は外面も丁寧に磨いている。912は外面に深くて短い筋がたくさん付いている。意図的につけたのか、文様なのか不明である。残存状況から、幅2mmの先の尖った工具を7本前後櫛歯のように並べて用いたものと考えている。915は粘土紐の境が残っている。916は他に貼り付け高台の付く破片があり、混入の可能性がある。918は口の内外面を暗文のように磨き、胴外面も磨いている。壺と比べて胎土も精良である。この時期の土師器壺は類例が少ない。919～926は壺である。920～925は口径20cm前後にまとまる。919・922・926は口の内面に斜めにヘラ痕を入れている。全周に及ぶものではなく、間隔を整えきれいに刻んでいることから、ヘラ記号かと思われる。近江や大和北部や山城で多く認められるようであるが、他地域ではほとんどなく、関係も明らかにできない。927は製塙土器である。928は壺で、底部直上に小さな円形の穴を4ヶ所開けている。929・930は鍋で、931は壺である。

932～944は下層から出土した。932～935は須恵器で、936～944は土師器である。932・933は口径10cm弱である。937・938は口径13cm強である。938は胴内面上半にヘラ痕が残る。痕跡としては919・922・926に似ている。944は壺で内面最下部の指押さえ痕内に布痕が残る。602にも同様のものが見られ、小型杯の製作技法から類推すれば、手に布を巻いて指押さえを行ったと考えられる。

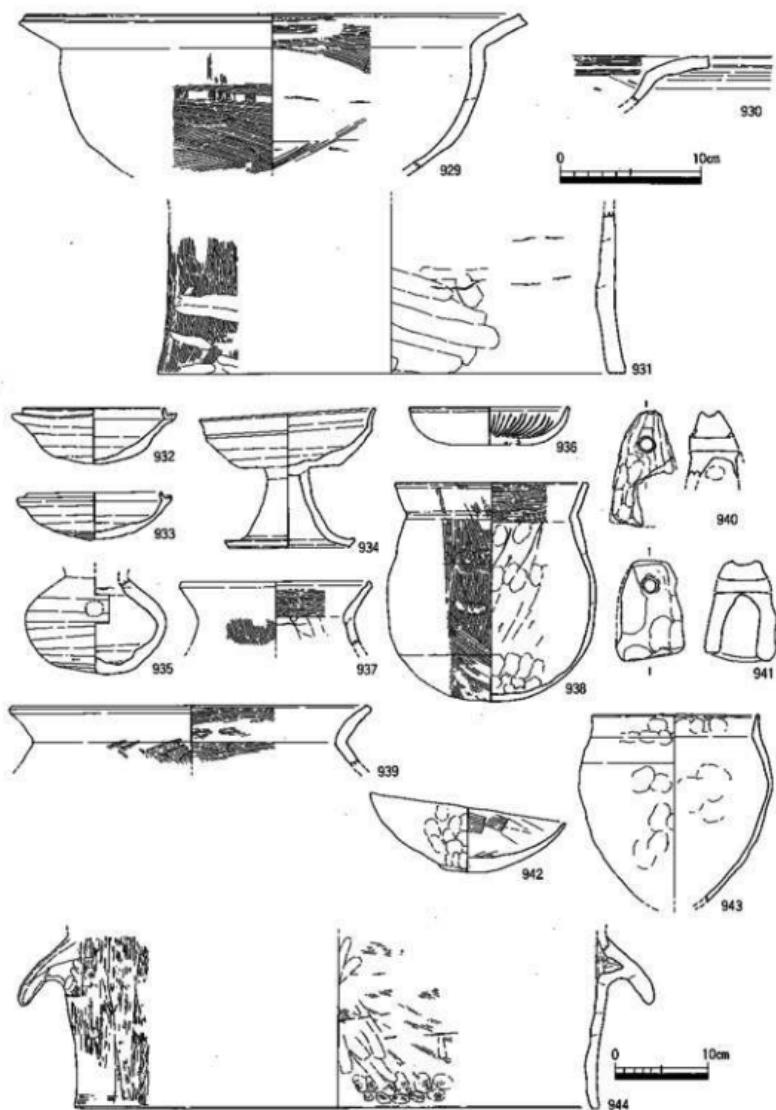
945～1075は下～中層から出土した。945～1003は須恵器である。蓋杯は蓋口径11cm前後、身口径10cm前後で、958～962は口径10～11cmである。946は外面に蓋をもう1枚重ねて焼



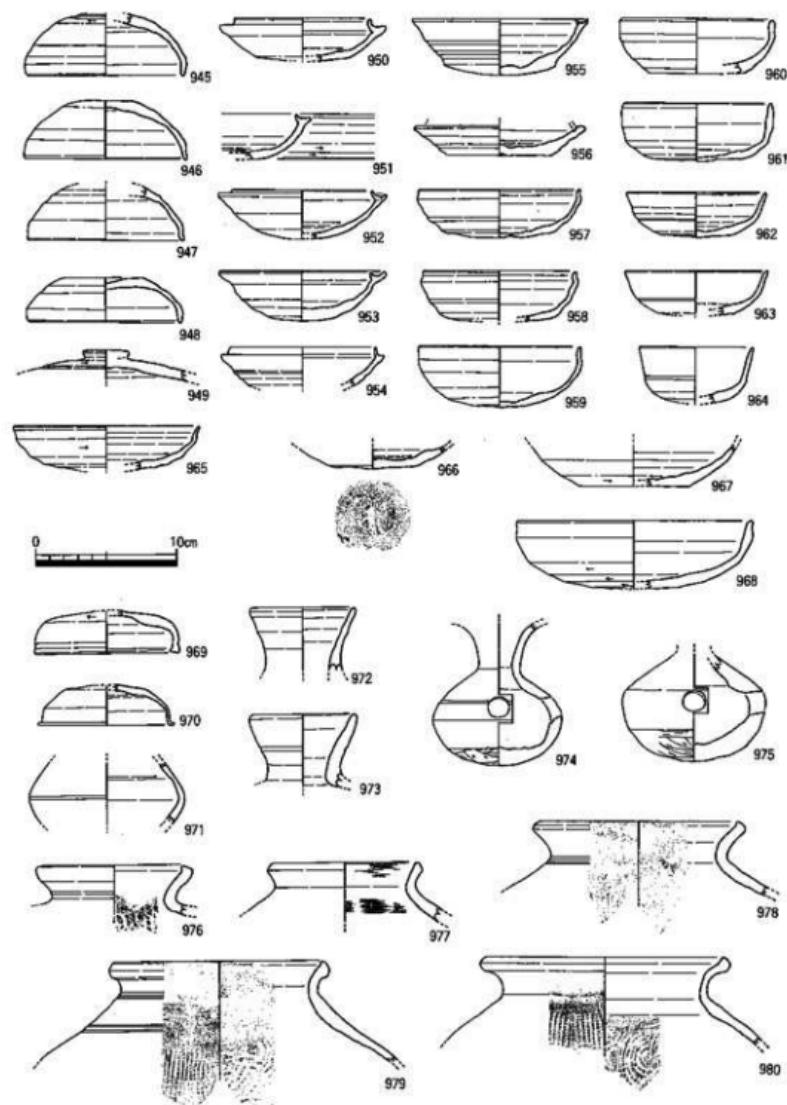
第273図 SD010出土遺物実測図(1) (1/4, 1/5)



第274図 S D010出土遺物実測図(2) (1/4)

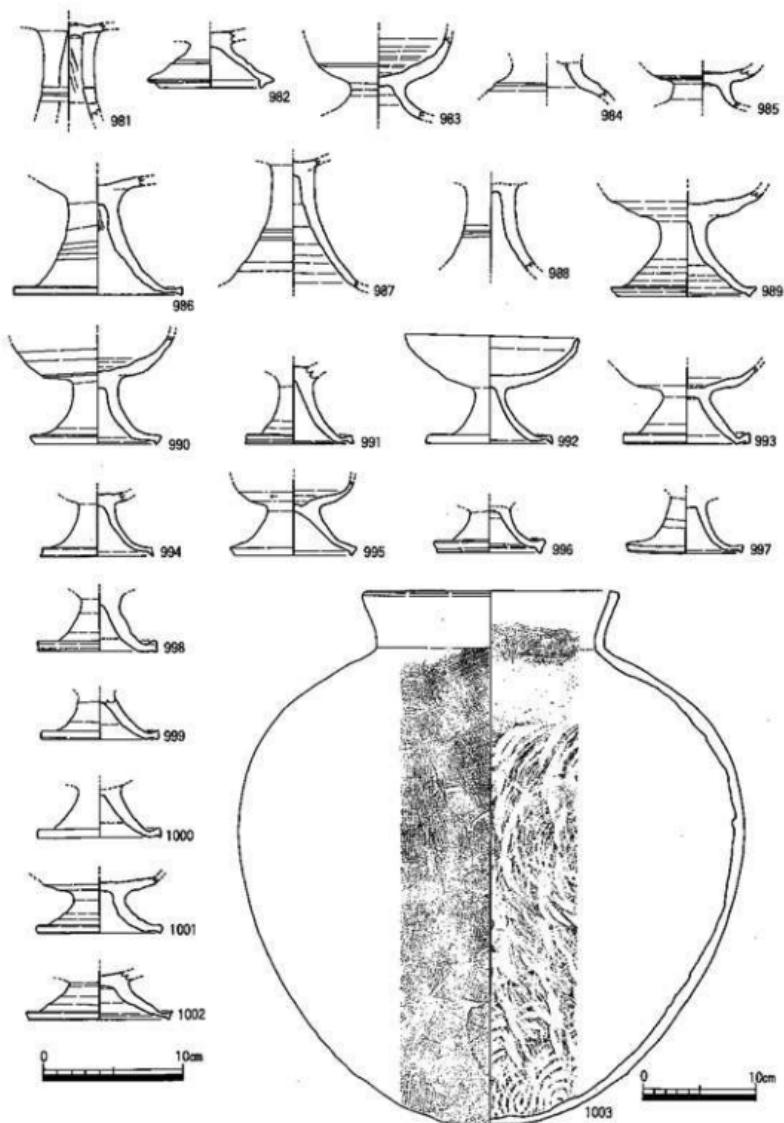


第275図 S D010出土遺物実測図(3) (1/4, 1/6)

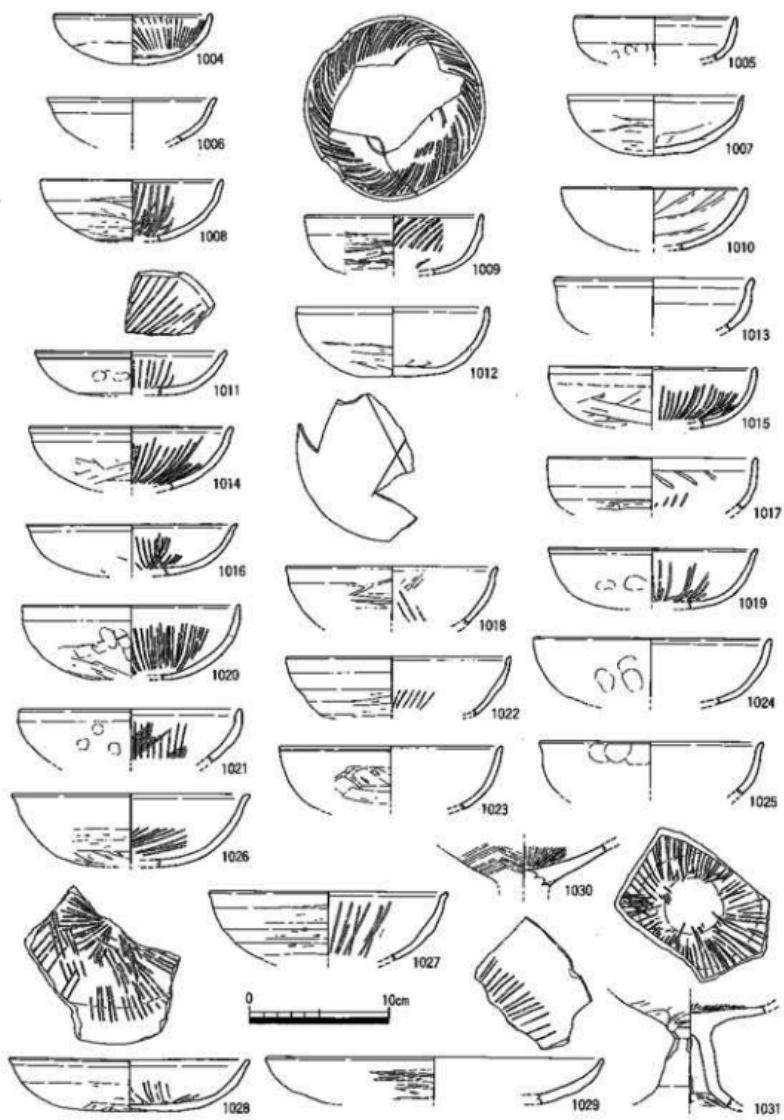


第276図 S D010出土遺物実測図(4) (1 / 4)

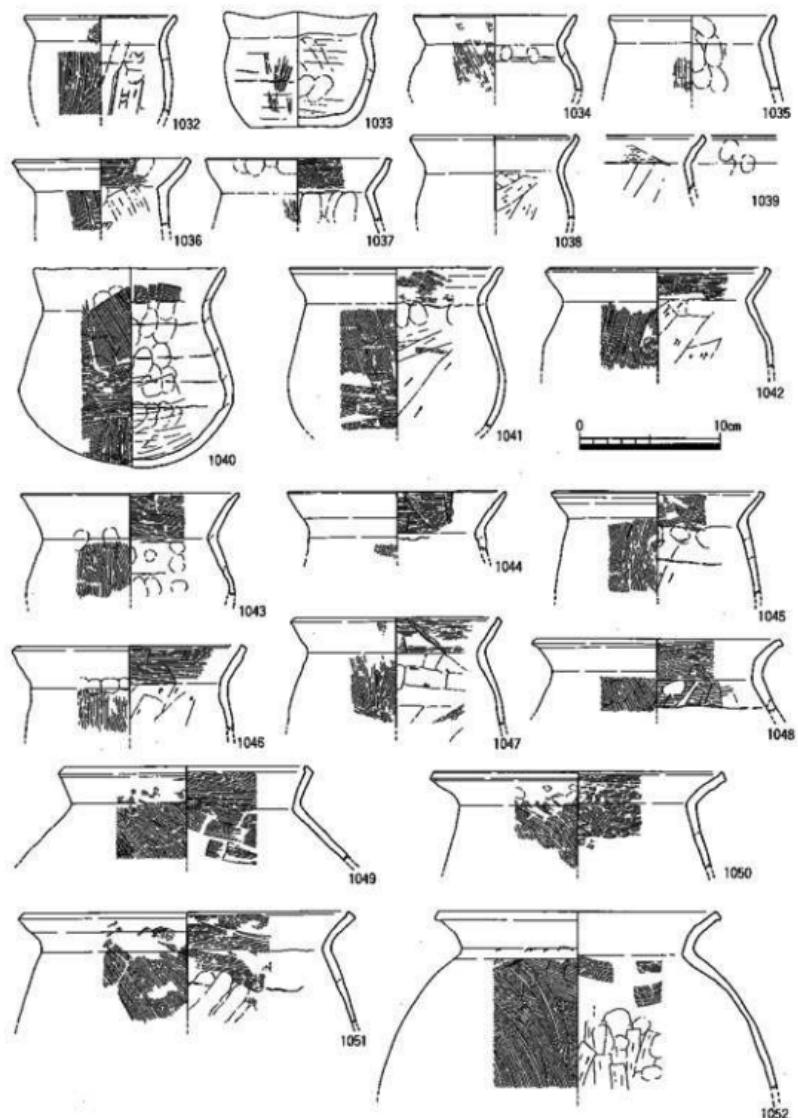
いた痕が残っている。949は901同様返りを持たない蓋である。964は体部と底の境を1周のみヘラ削りしている。966は外底に「×」字のヘラ記号を刻んでいる。965・967・968は蓋を持たない大型の杯で、外底は小型のものと異なりヘラ削りを行っている。969・970は壺の蓋である。972・973は平瓶の口である。壺（976～980・1003）は口径10・14・17cmに分かれる。981は2段の透かしが2～3方向に入る。他の土器群より古く、6世紀末～7世紀前葉頃のものである。982～985は台付椀である。高杯は脚の長いものは沈線が入り、短いものには台付椀と見分けのつきにくいものが含まれる。1004～1075は土師器である。杯は半数以上に内面1段放射状の暗文が施される。内底に螺旋状暗文が施されるのは稀である。暗文は口縁部にまで達するものから下半のみで止まるものまで様々で、1018では向きの違う2段の放射状暗文が採用されている。この土器の時期としては非常に珍しいものである。外面はナデまたはヘラ削りで、1009のみヘラ削り後に磨いている。1004・1007は粘土紐を巻いた境目が残り、その方向から右上がりに巻き上げたことがわかる。1012は外底に大きく「×」字のヘラ記号を刻んでいる。また外面中位に布圧痕が残っている。1028は浅い。内面は中心から体部中位へ2段の放射状暗文を施し、さらに角度を変えて段の中間に放射状暗文を施している。1030は外面を4分割して磨いている。壺は口径11～12・15～16・20～21cmでややまとまりを見せる。内面には粘土紐の境目の痕跡が水平に多く残されており、中小型壺で幅2cm、大型壺で幅3cmの粘土紐を輪積みにして成形していることがわかる。中小型壺の外面調整は、1040・1041から、最初に頸部から胴中位までの縱方向のハケ目、次に胴の残り半分の横方向のハケ目、最後に底付近は真上から工具で左右に折り返しながらベンキを塗る時の刷毛捌きの要領で仕上げるという工程をとると想定される。大型壺はハケ目がやや斜めに入り、1063から類推すれば、底のみ中小型壺同様の方法で仕上げる。1059では口縁外面に波状の押圧痕が連続して残る。文様的な要素を持ちながら、他に類例を見ない。施工工具には叩きの当て具が考えつく。叩きは上師器壺の表面にはその痕跡を残さないが、特に大型のものには必要であったろうと思われる。1033は4分割の波状口縁を呈する。1044・1047・1051は口内面にヘラ痕が残る。付け方は919などと通ずるものがあり、こちらもヘラ記号的な要素を持つものであろう。1062でも外面胴中位にヘラ痕が認められる。1063は長胴壺でハケ目は疎密2種用いられる。胴中位にハケ日の先端が揃うことから、小型壺同様3段階でハケ目を施したと想定する。また煤が付着している。1064は甌上半である。1066は漁具の網用の管状土錐である。1070は古墳時代初頭頃の二重口縁壺で、混入品である。1071～1075は甌である。



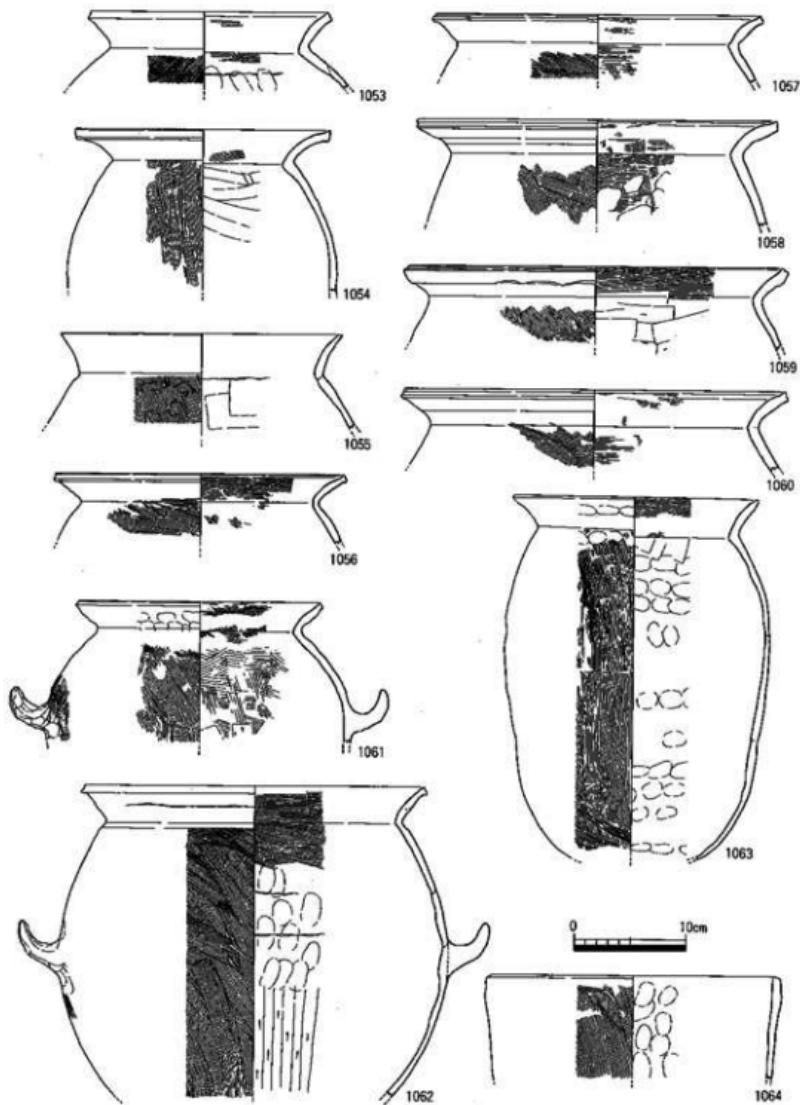
第277図 SD 010出土遺物実測図(5) (1/4, 1/5)



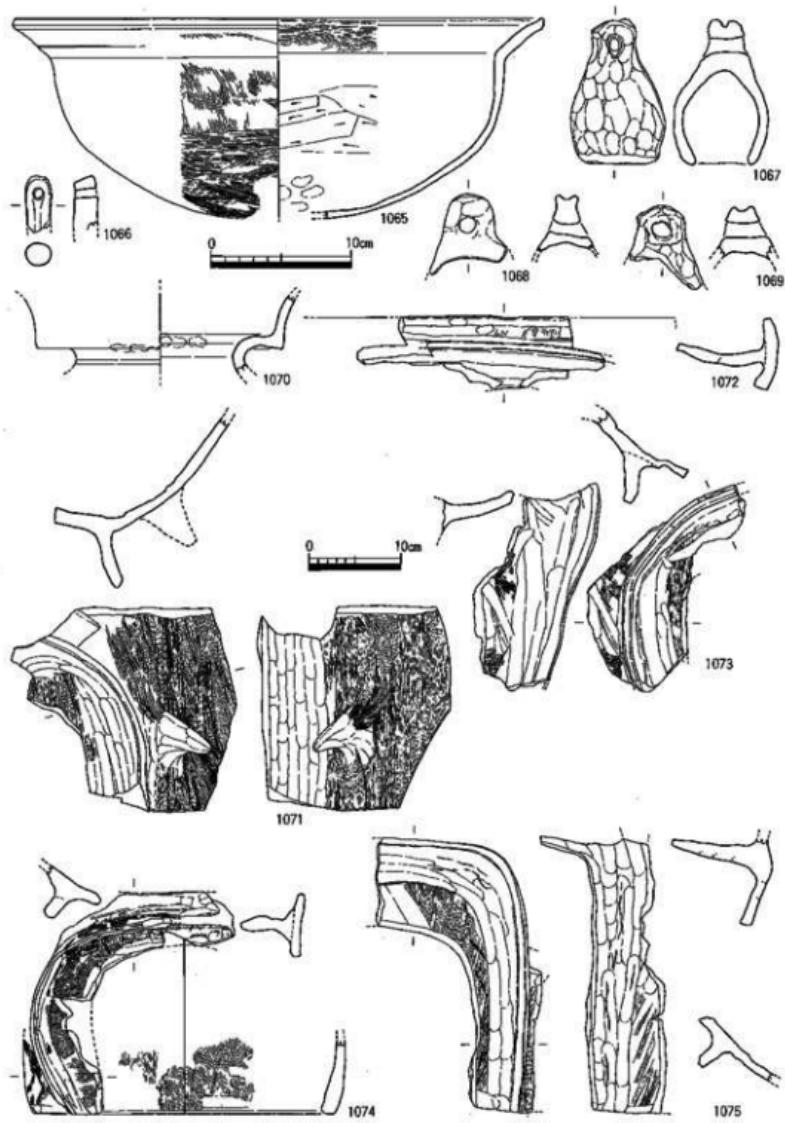
第278図 S D010出土遺物実測図(6) (1/4)



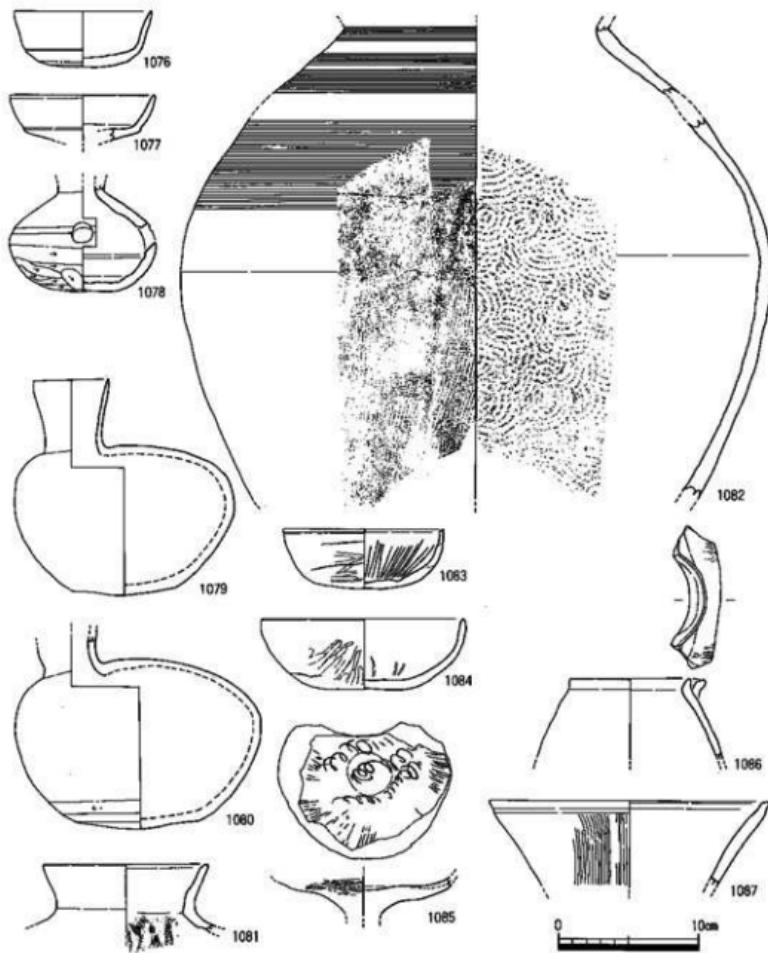
第279図 S D 010出土遺物実測図(7) (1 / 4)



第280図 S D010出土遺物実測図(8) (1/5)

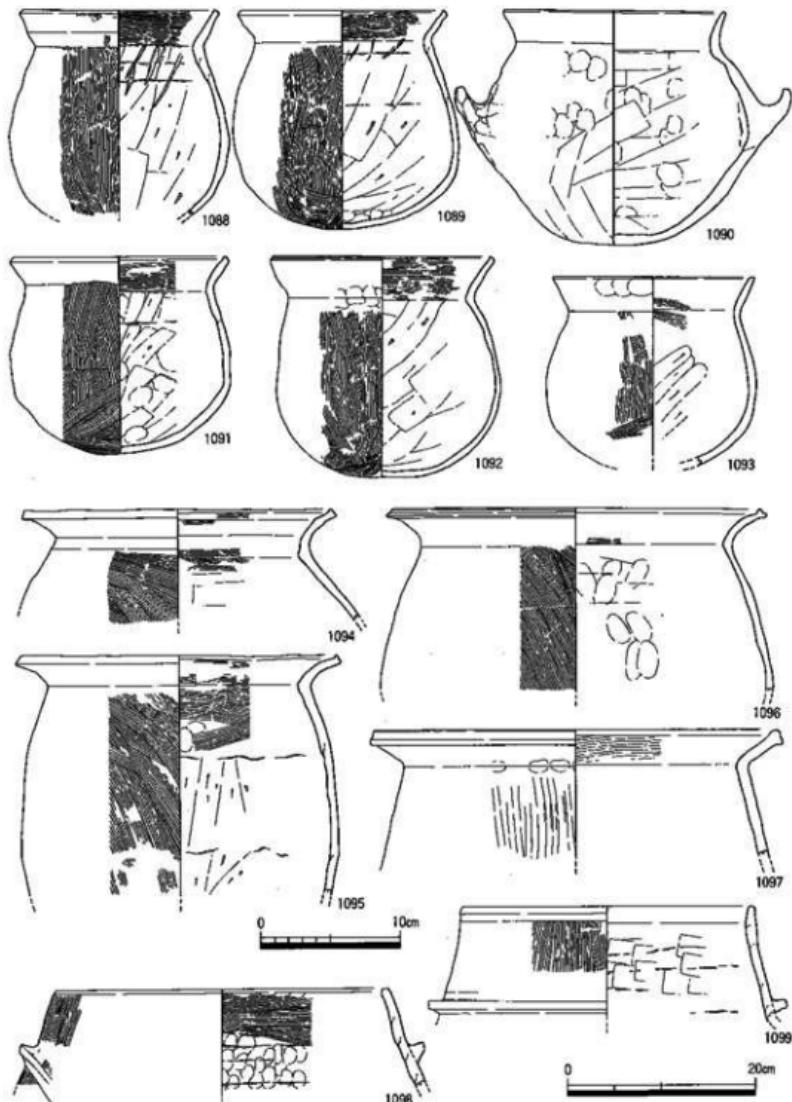


第281図 SD 010出土遺物実測図(9) (1/4, 1/6)

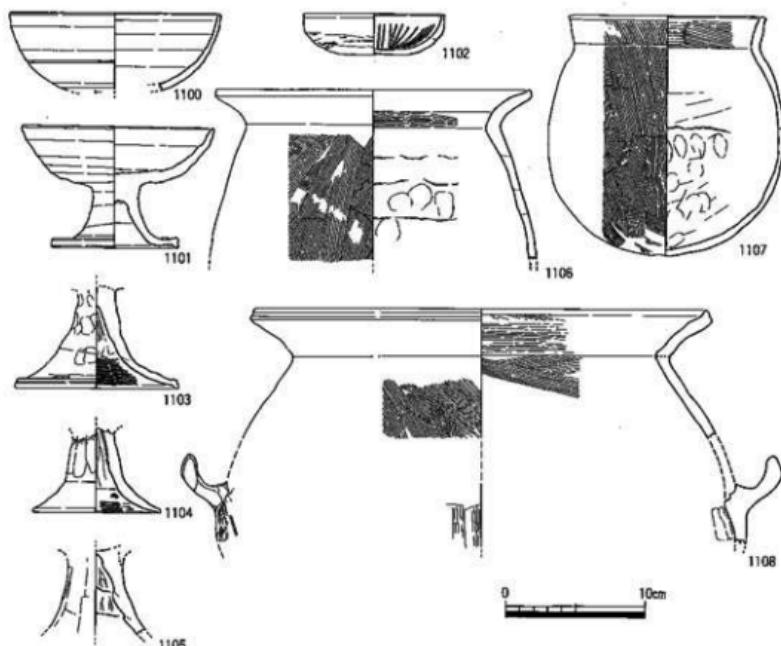


第282図 S D010出土遺物実測図10 (1/4)

1076～1099は中層から出土した。1076～1082は須恵器である。1077は底の形状から高杯であろう。1080は口径9.8cmの杯か蓋3個を並べた上に乗せて焼いた痕跡が底に残る。1083～1099は土師器である。1083・1084も粘土紐を巻いた境目から右上がりに巻き上げたことがわかる。1085は杯部との剥離面にハケ目が残ることから、脚から杯部底までを成形した



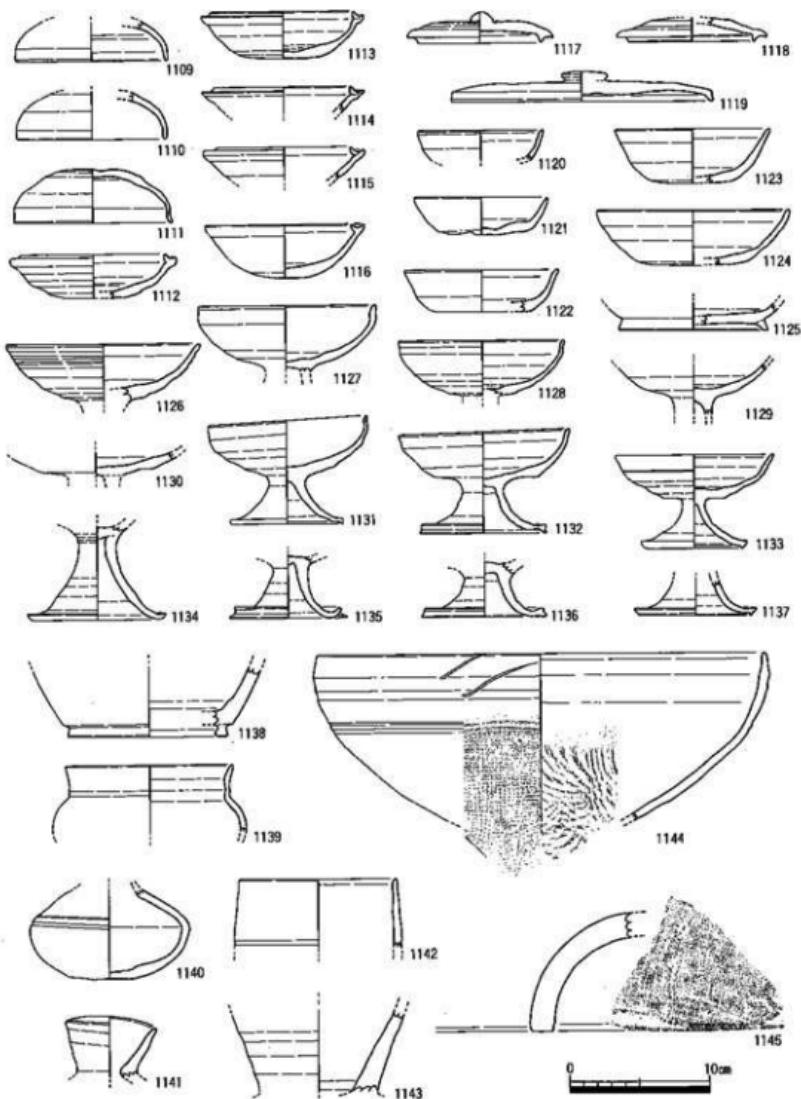
第283図 SD 010出土遺物実測図(1)(1/4, 1/6)



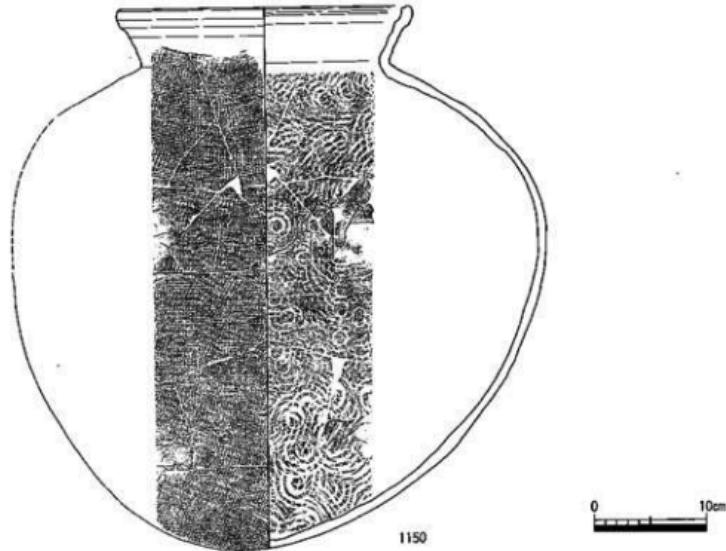
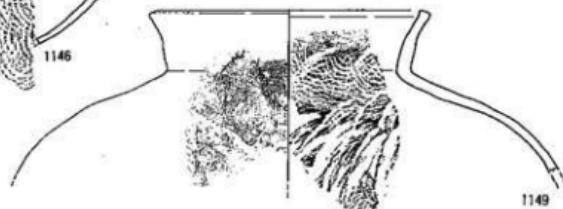
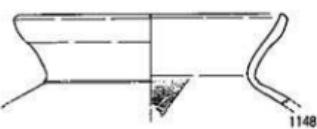
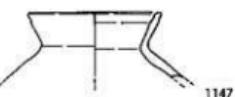
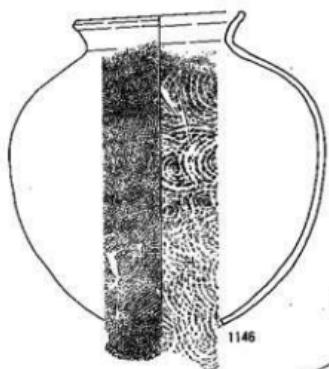
第284図 SD010出土遺物実測図12 (1/4)

後に、杯底になる上面をハケ目施文工具で平らに均し、体部となる粘土紐を継ぎ足し成形し、その後内外面の仕上げ調整を行うという工程が読みとれる。1086は臺で注ぎ口がつく。類例を見ない器種であり、他の土器群と同じ時期に含めて良いのかわからぬ。1087は壺で、古墳時代初頭のものであろう。口縁に粗粒痕がつく。壺1088～1093は口径15cm前後にまとまりを持つ。1088・1089は胴内面上部に縦方向のヘラ痕が多く付く。ヘラ削り時にヘラの端が触れ、付いたものとも考えられる。1089は口の内面にも緩い曲線を描くヘラ記号が残る。1089・1090は外面に、1093は内面に煤が付着する。1097はハケ目が粗い。1098・1099は壺で、1098は突帯のつく位置が側面から正面にまわるにつれて下がる。

1100～1108は中～上層で出土した。1100・1101は須恵器で、1100は底部をヘラ削りしている。1102～1108は土師器である。1105は内面に残る痕跡から、粘土紐を巻き上げて成形したことがわかる。この場合上開きに巻いたとするとき、杯と同じ左回りに巻きあげたこと



第285図 S D010出土遺物実測図版 (1/4)

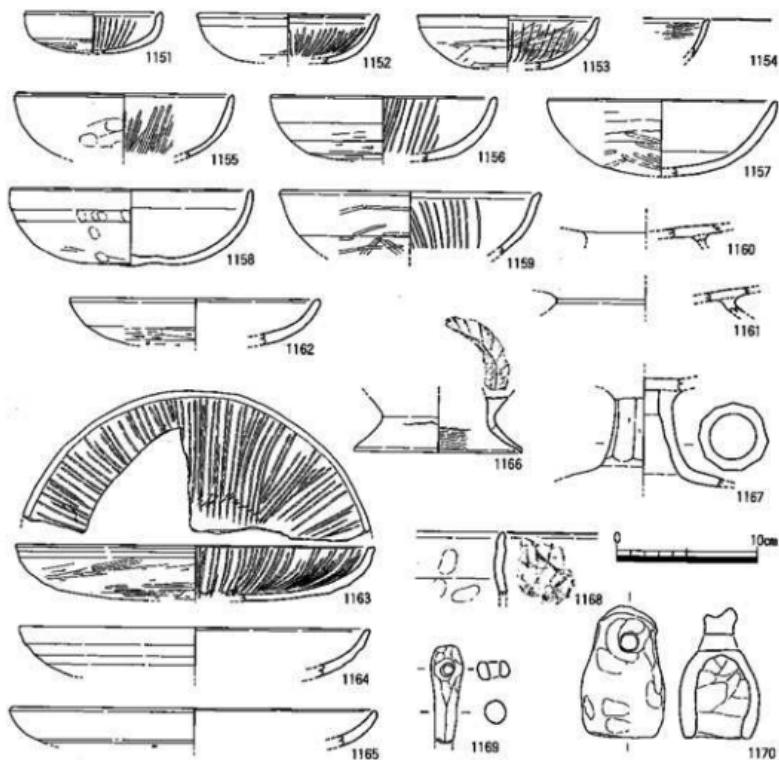


第286図 S D010出土遺物実測図04 (1/5)

になる。

1109～1199は上層から出土した。1109～1150は須恵器である。1109～1116は蓋の口径10～11cm、身の口径10cm前後にまとまる。1117・1118は口径9cm弱である。返りは退化した様相を呈している。1119は溝上面の包含層に含まれる土器も混じった状態で取り上げた群のもので、混入品の可能性もある。1125も包含層出土として取り上げている。高杯の杯口径は12cm前後が多い。脚は短く、沈線が入らない。1140は疊で、胴の穿孔部分を欠く。1142は身の深い台付椀である。1143はすり鉢の体部下半である。1144は口縁に2筋のヘラ痕が残る。これもヘラ記号であろうか。1145は須恵質の丸瓦で内面には布目が残る。1146内面の当て具は径6cmである。1150も口内面にヘラ記号らしきものが残る。1151～1199は土師器である。1151～1159は口径10cm弱・13cm弱・16cm前後に分かれる。調整は内面放射状暗文主体で、外面下半にはヘラ削りの後稀にヘラ磨きを行う。1154は特に胎土が精良で、内面は横方向のヘラ磨きを行う。1160～1162は溝上面の包含層に含まれる土器も混じった状態で取り上げた群のもので、混入品の可能性が高い。1163内面は放射状暗文の後、底に912と共に通する小さなヘラ圧痕が刻まれる。1166は大皿の脚で、皿との剥離面には脚と皿の接着面を大きくし、両者が剥離するのを防ぐための刻みが残っている。陽痕であることから、皿側に刻まれていたことがわかる。須恵器では2～3重の同心円を刻むだけなのが多いようであるが、ここでは刻みを縱横方向に施すことにより、接合をより堅固にしようとしたようである。1167は脚上半の面取りが他の土器に比べて新しい様相であり、混入品と考える。1168は外面に格子の叩き痕が残る。1169は棒の一端を指で押さえ平らにし、そこを工具で穿孔している。1179は内外面で2種のハケ日施文工具を用いている。1184は頸部に沈線が巡る。1185は口内面にヘラ記号が残る。外面には粘土のつなぎ目を指で押された痕が1列に並んでいる。1187は弥生時代後期の壺で、混入品である。1191は長胴甕で、内外面で2種のハケ日施文工具を用いている。下半には煤が付着している。1192は底部直上に小さな円形の穴が開く。その数は928同様4ヶ所であろう。1196は口内面にヘラ記号が残る。1198は内面に炭化物が付着している。

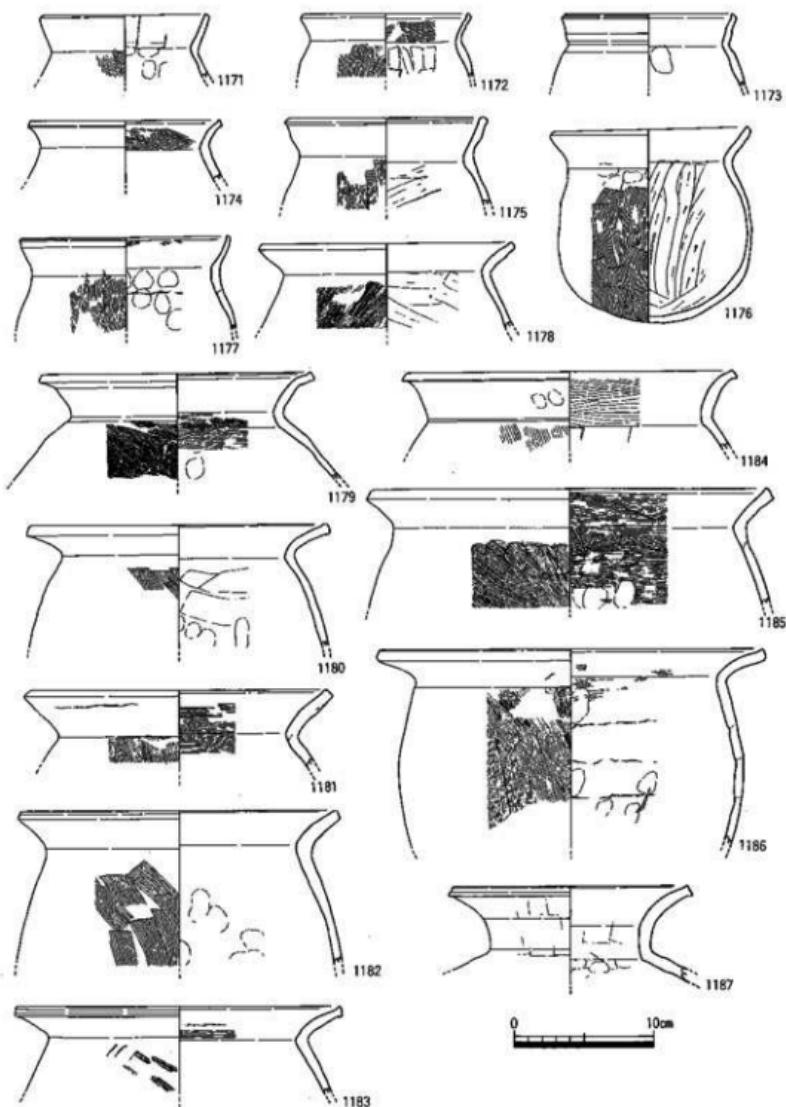
1200～1263は取り上げ土層不明分である。1200～1230は須恵器である。1204は溝上面の包含層に含まれる土器も混じった状態で取り上げた群のもので、混入品の可能性が高い。1208は身が厚い。1213・1217・1218は外面底と体部の境を1周のみヘラ削りする。1224は楕円形の穿孔を外面より6ヶ所に行い、中央の1ヶ所のみ貫通している。1225は壺と思うがあまり見ない形態である。1230は内面も丁寧になでている。1231～1263は土師器である。



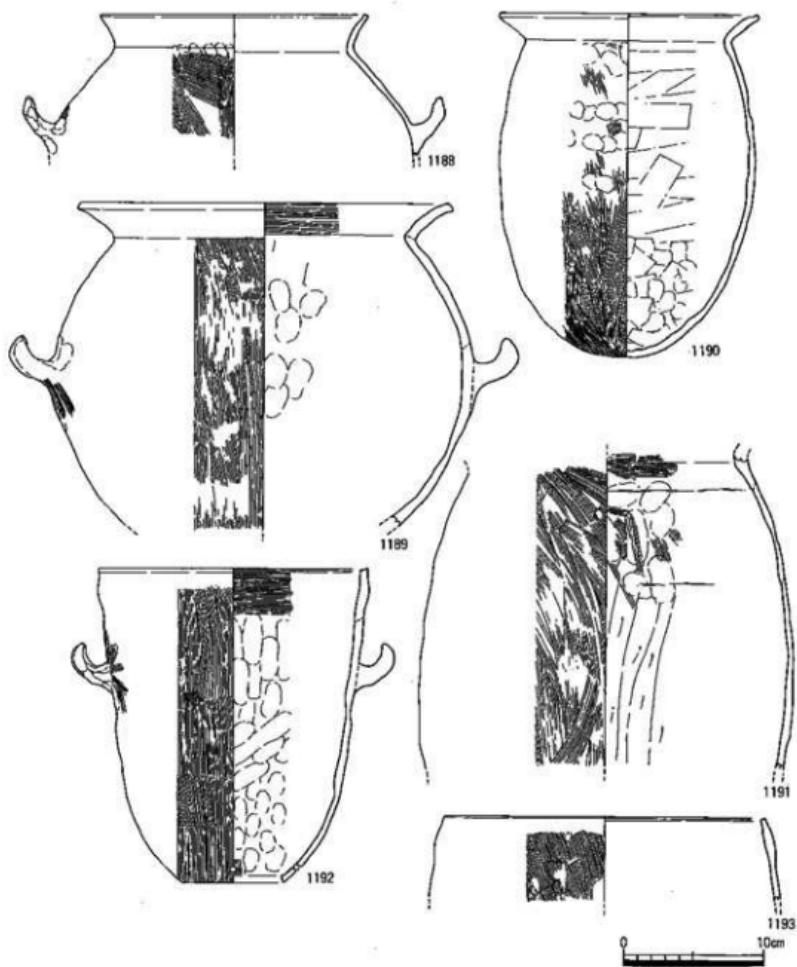
第287図 SD010出土遺物実測図(1/4)

1233は内外面とも丁寧に磨いている。1240内底には螺旋状暗文とは異なるがそれとよく似た細切れの暗文が施されている。持ち重りがし、全体に丁寧に仕上げた感を強く与える。1241は高杯である。1242はあまり類例がない。口がすぼまるため壺とした。1246は内面も底までハケ目を施している。1248は口内面にヘラ記号が残る。1253は内面頸部にヘラ削りの名残と思われるヘラ痕が連続して留められている。1255は外面に平行の目の叩き痕が残る。1261は器壁が厚い。1264は弥生時代前期の壺であろうか。

1265～1287は石器である。サヌカイト製品は周辺の弥生時代の包含層から紛れ込んだ可能性が特に高いと考えられることから、層位毎の掲載を行わなかった。それ以外の溝と同時期と思われる1285～1287は1285・1286が層位不明、1287が下～中層出土である。1268は

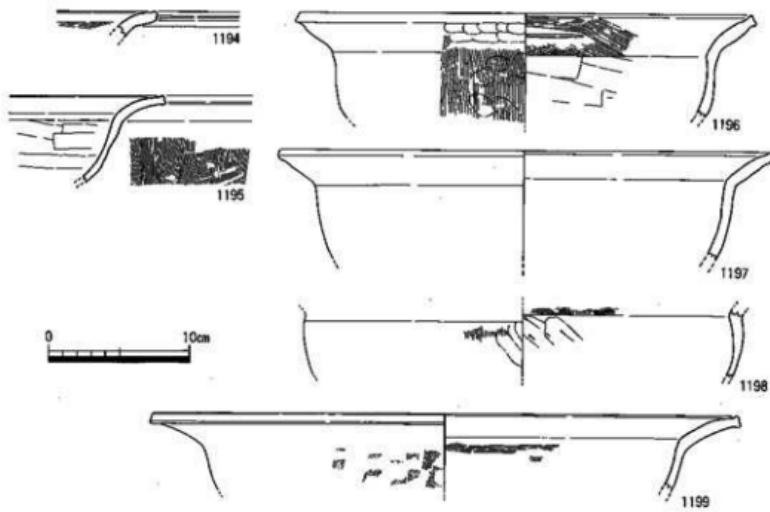


第288図 SD010出土遺物実測図譜 (1/4)



第289図 SD010出土遺物実測図17 (1/4)

スクレイバーで、左面の稜線が磨滅している。1269・1270は石鏸と判断した。1271は左面の稜線が少し磨滅している。1272は右面に穂面が小さく残る。1274は斧先端が打撃により欠けている。1281は右面も平坦面がやや磨滅し白くなっている。1282は団上面に平坦面が



第290図 S D 010出土遺物実測図譜 (1/4)

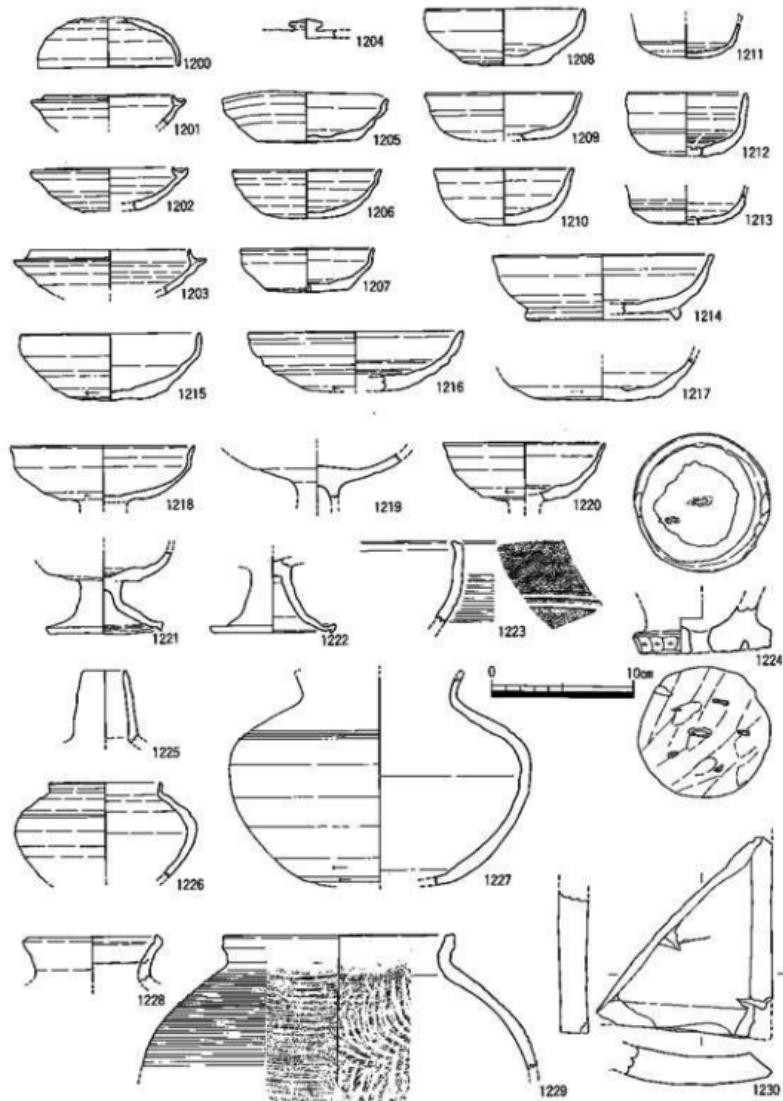
あり、この面を叩いたと考える。1283は左右両端とも折れている。1284は旧石器であろうか。風化が著しい。1285は研ぎ面は2面で、片面には細い傷が多数付いている。1286はわずかな抉りを入れる程度にしか加工していない。1287は4面を研ぎ面としている。

以上層毎に遺物を分け、説明を行った。下～中層が最も多く、上層もありと多い出土が見られた。出土遺物は埋土の堆積状況から、下～中層は一括遺物と考えてもよい。それと溝底出土の遺物は、土器の様相から時期差はないと考える。また下～中層遺物と上層遺物は、須恵器では上層遺物の中に摘みと返りをもつ杯蓋が見られ、逆に下～中層遺物には高杯の脚が長く沈線をもつものが見られるなどの時期差を示す様相が若干存在するものの、全体に占める割合は低く、土師器からは同時期としてよいと考える。従って、掘削から埋め立てまでが短期間であったと考えられることになる。

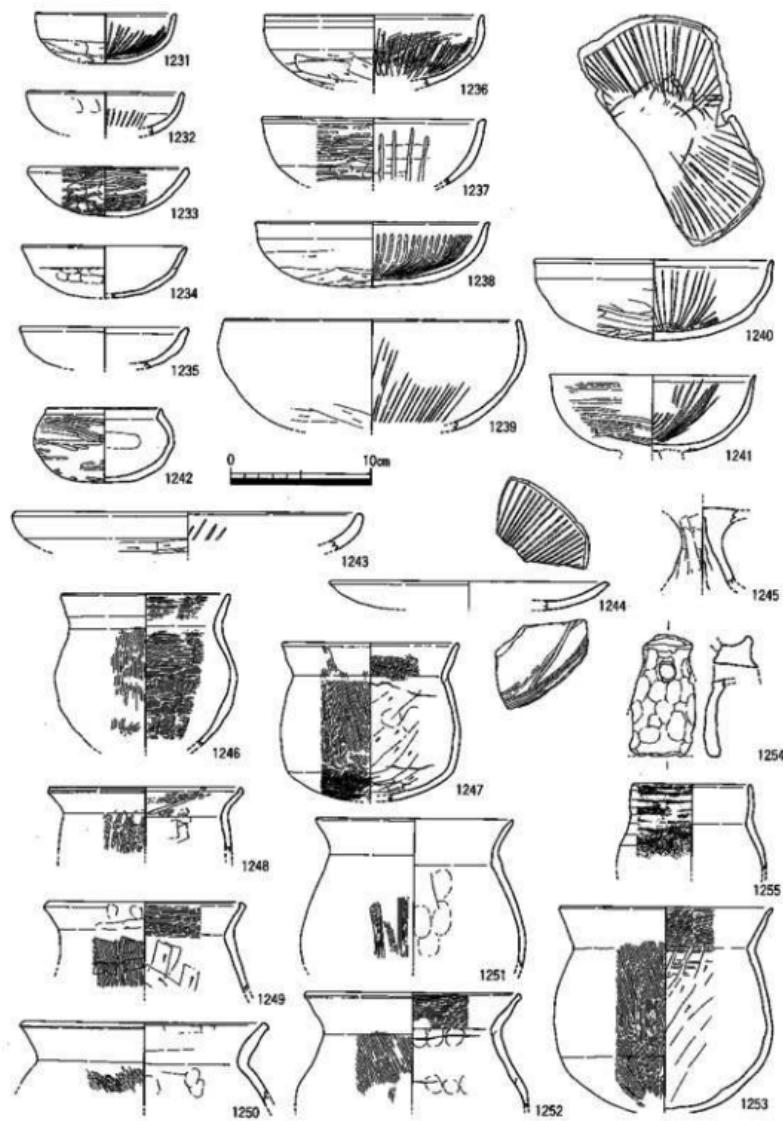
遺物の時期は、これらの土器群が畿内の土器と非常に似ていることから、それとの平行関係により7世紀第2四半期頃と考える<sup>(1)</sup>。

#### S D 011 (第297図)

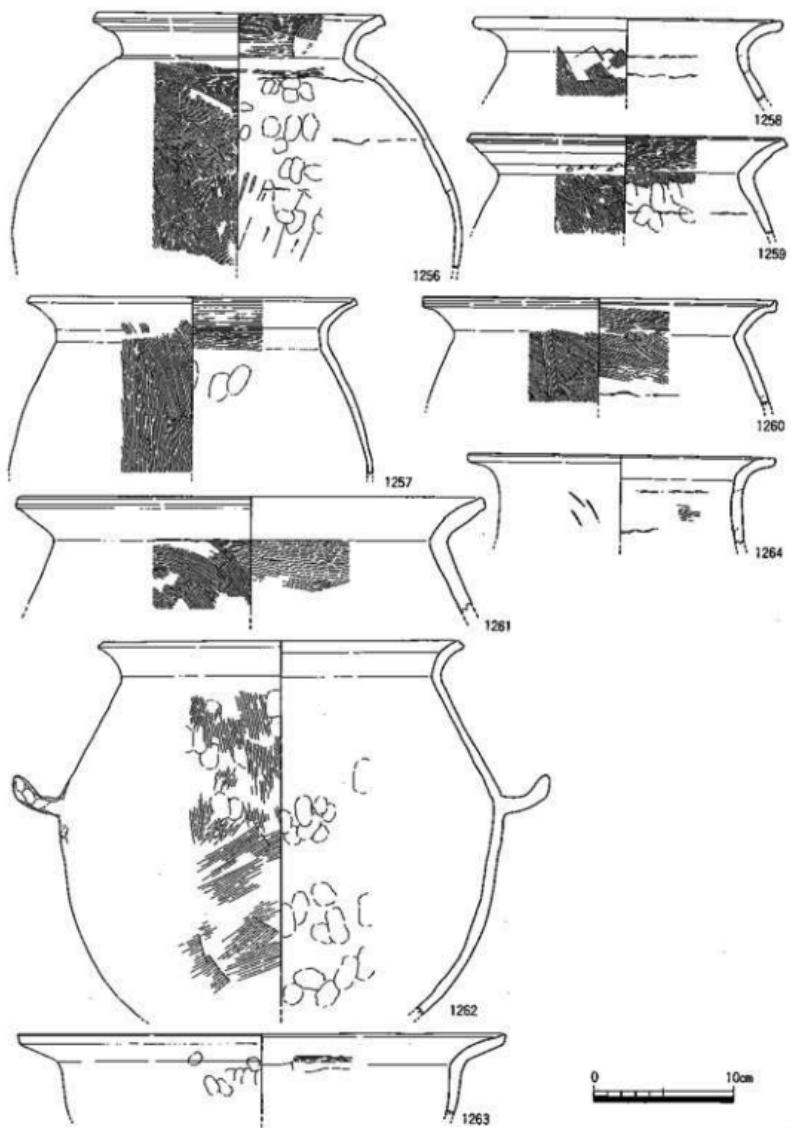
E/F 22に位置する。ほぼ東西を向き、東は調査区外に延びる。平面形や地形から、窪みに溜まった水を、細い溝を掘って東の低地に排水したように見える。弥生中期の土器に



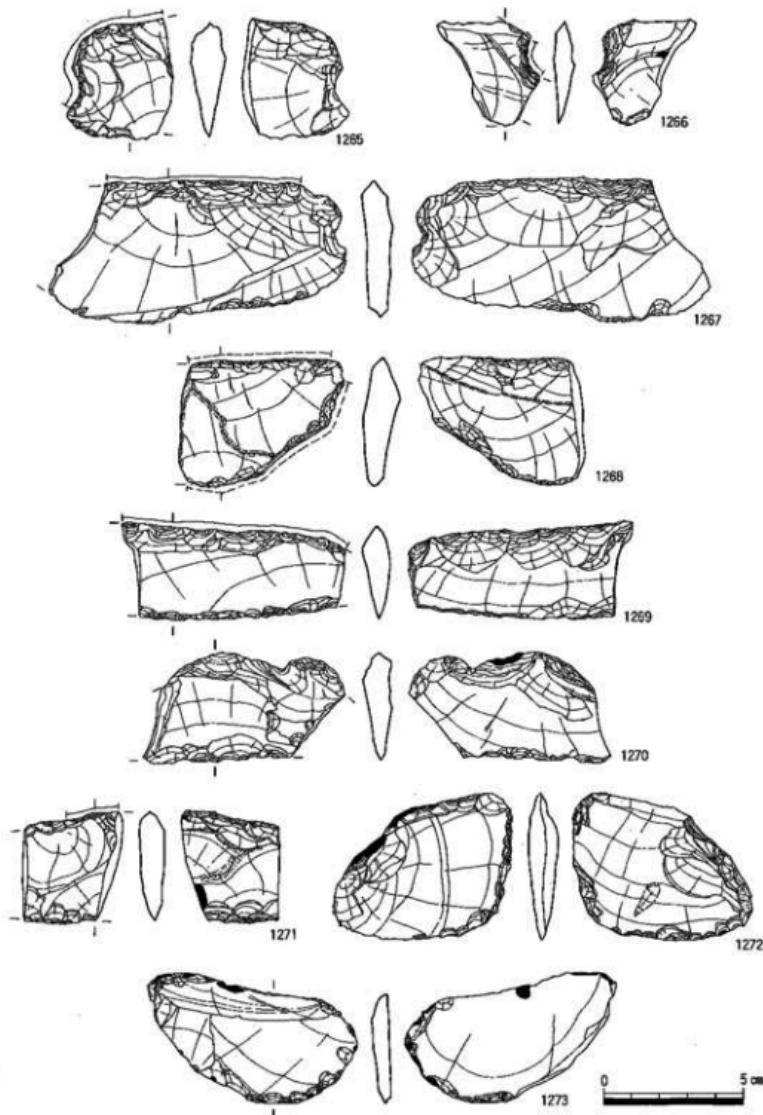
第291図 S D010出土遺物実測図録 (1/4)



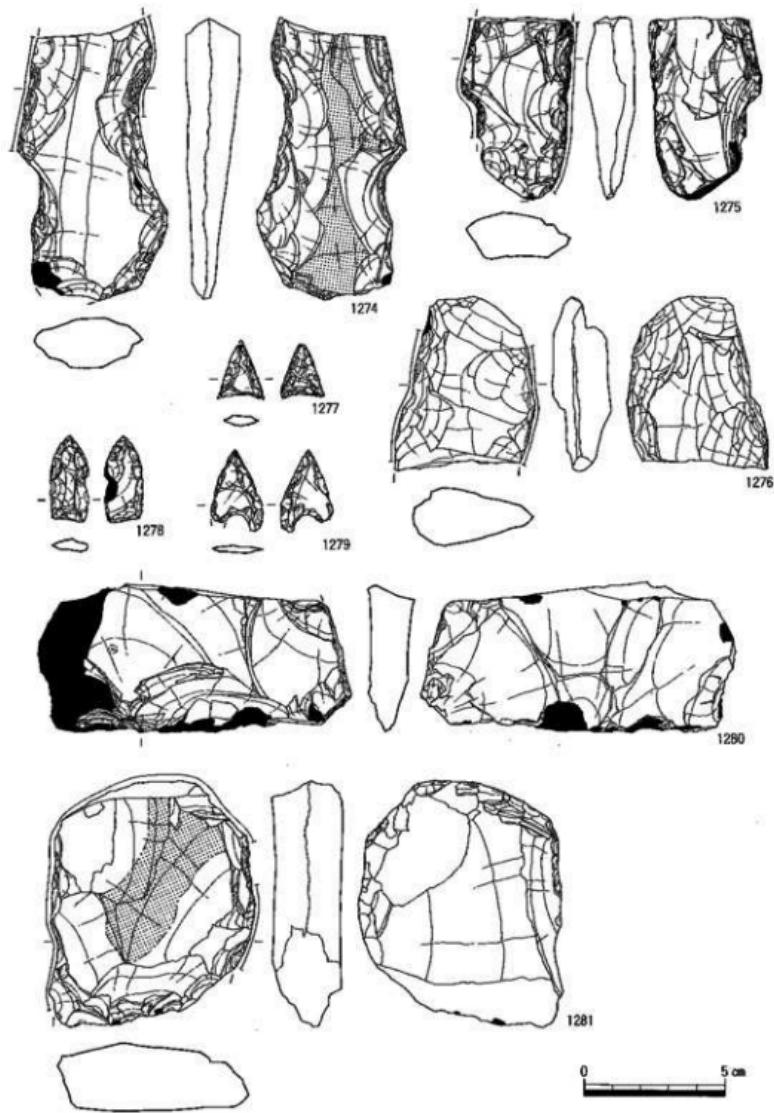
第292図 S D 010出土遺物実測図20 (1/4)



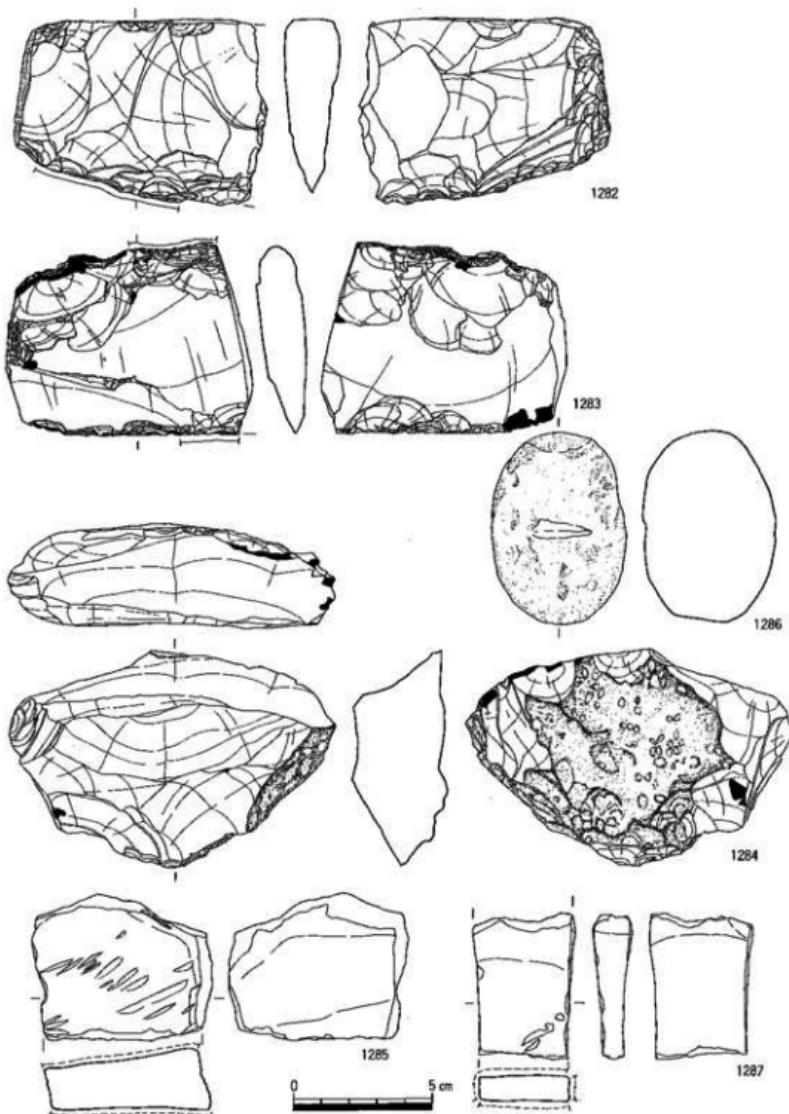
第293図 S D010出土遺物実測図(1 / 4)



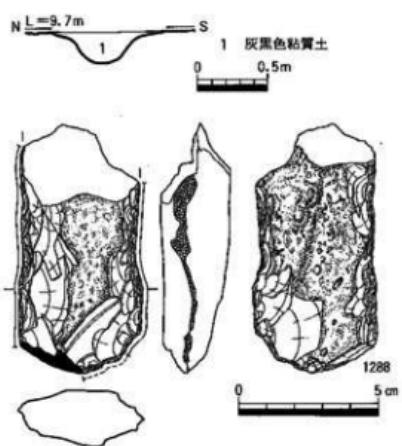
第294図 S D010出土遺物実測図版 (1/2)



第295図 S D010出土遺物実測図23 (1/2)



第296図 S D 010出土遺物実測図24 (1/2)



第297図 SD 011断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/2)

の弥生土器の他に土師器碗の小片が出土している。ちなみに同じ向きのSD 006A/007Aとの距離 (22.6m) は1町の2/10 (109m×0.2) に極めて近い値を示す。

#### SD 026 (第298図)

D21に位置する。N35°Eを向く浅い溝である。SD 012との新旧関係は溝が浅いため把握できなかった。遺物の出土はなく、溝の時期も不明である。

#### SD 027/028/050E (第298図)

D21に位置する。N72°Eを向く浅い溝である。SD 008・012より古い。西延長上にはSD 044/045が存在し、これとも同一の溝の可能性がある。少量の弥生土器に混じって須恵器・土師器片が出土している。須恵器・土師器は細片のため時期は明らかに出来ないが、7~8世紀頃と思われる。

229頁(1) これらの土器群については同じ溝と考えられる改修区SD 15出土土器を元に後述が加えられている。  
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997『中小河川大東川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』

片桐孝浩 1997『讃岐の土師器』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

片桐孝浩・佐藤竜馬 1997『四国地方における7世紀の土器』『古代の土器研究会第5回シンポジウム 7世紀の土器』古代の土器研究会

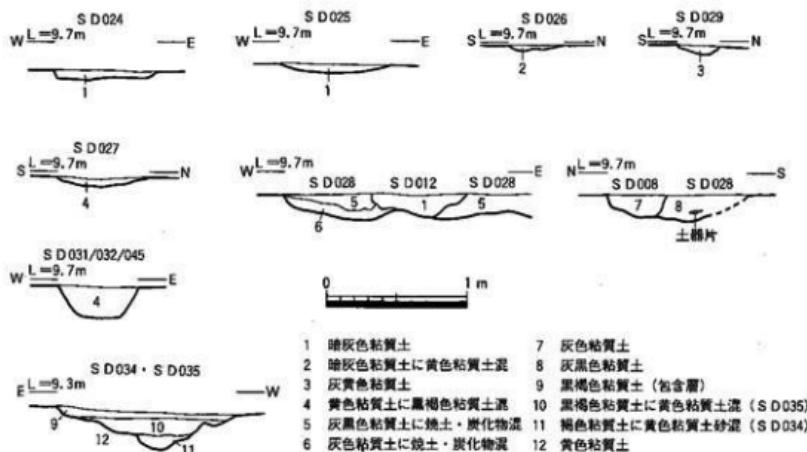
混じって、須恵器の小片が少量出土している。1288は打製石斧で、両面に礫面、左右側面に敲打痕があり、左面は少し磨滅する。

#### SD 023

E 23に位置する。北にやや湾曲する深さ10cm弱の溝である。弥生土器の可能性がある磨滅した土器片1が出土した。

#### SD 025 (第298図)

D21/22に位置する。N27°Wを向く浅い溝である。途中途切れるが、北はSD 008・028との新旧関係は溝が浅いため把握できなかった。SD 090より新しい。少量



第298図 SD008, SD012, SD024, SD025, SD026, SD027/028/050E, SD029, SD031/032/045, SD034, SD035断面図 (1/40)

#### SD029 (第298図)

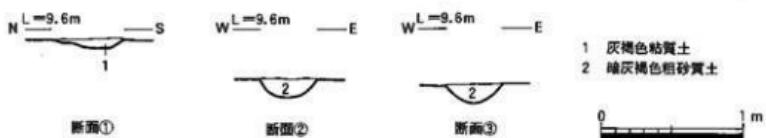
D21に位置する。N30° Eを向く浅い溝である。弥生土器・須恵器が少量出土している。細片のためはっきりした時期は不明である。

#### SD031/032/045 (第298図)

C22/D22/23に位置する。南北に2.4m離れて2本がN29° Eの向きで平行に並び、東端はこれに直角の溝ですべてつながる。SH11より新しい。SD031/032からは弥生土器・土師器・須恵器が比較的多く出土しているが、固化に耐えうるものはなく、時期も不明である。他の同じ向きの溝・掘立柱建物跡から判断すれば、8世紀以降であろう。北延長上には同規模のⅢ区2④⑤SD07が存在する。この溝は7世紀中葉と判断されているが、両者が同一の溝なら、Ⅲ区2④⑤SD07も時期が下る可能性がある。平面形が直線的でない原因は地形の影響と考えることもできる。

#### SD033/041

C/D22に位置する。SD010の北に沿うような形で東西にのびる。深さ10cm弱で一定し、溝底は西の標高が低い。東はSD030の堰状に石を積み上げた地点に合流するようにみえるため、それとの関係も考えたが、SD033/041からは須恵器・土師器が少量出土していることから、あり得ないと判断した。SH12より新しい。土器による時期決定は細片であ



第299図 SD 036/039断面図 (1/40)



第300図 SD 038/S X 04平・断面図 (1/80)

ることから難しい。

#### S D 034 (第298図)

C 22に位置する。途切れるものの、恐らく S D 010に合流する。少量の弥生土器・須恵器・土師器片が出土している。土器からの時期決定は難しい。

#### S D 035 (第298図)

C 22に位置する。S D 034より新しい。恐らく S D 010に合流する。埋土は意図的な埋め戻しを示している。少量の弥生土器・須恵器・土師器片が出土している。土器からの時期決定は難しい。

#### S D 036/039 (第299図)

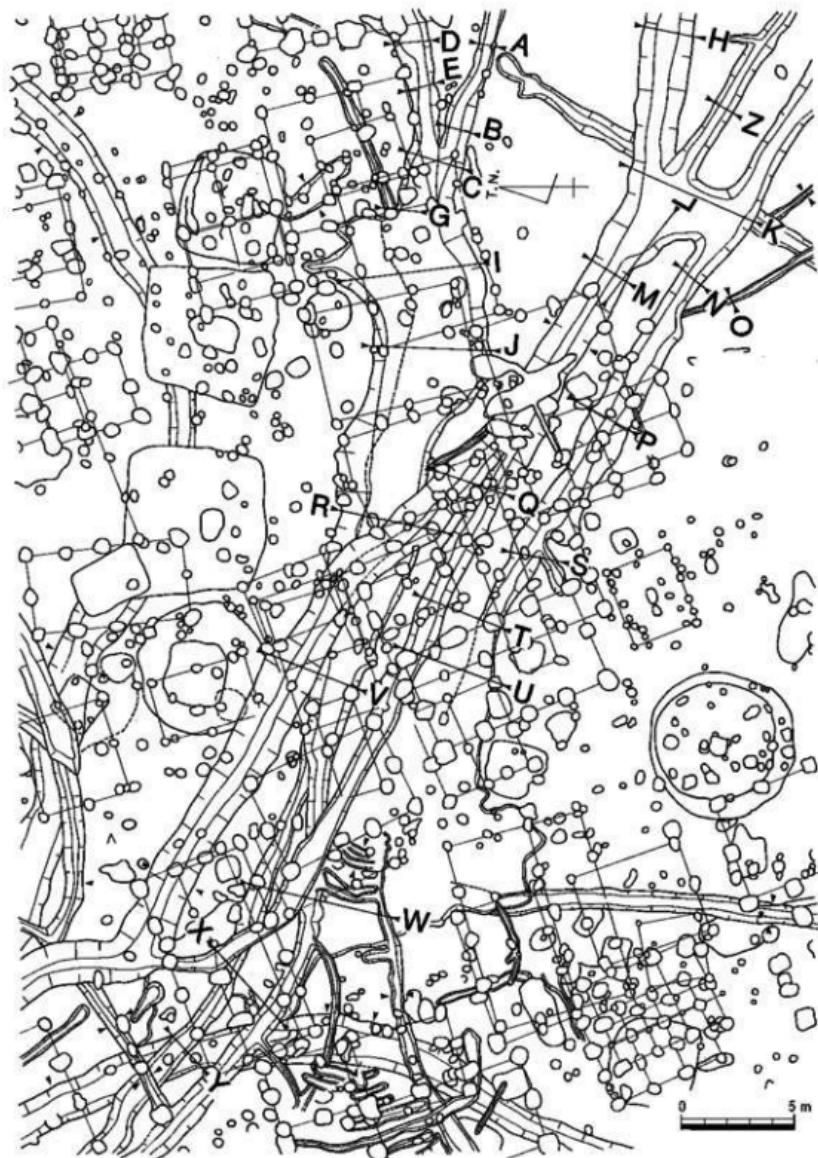
C 22/23に位置する。北東で S D 010とつながる。溝底の標高から、南へ水は流れる。少量の弥生土器・須恵器・土師器片が出土している。

#### S D 038/S X 04 (第300図)

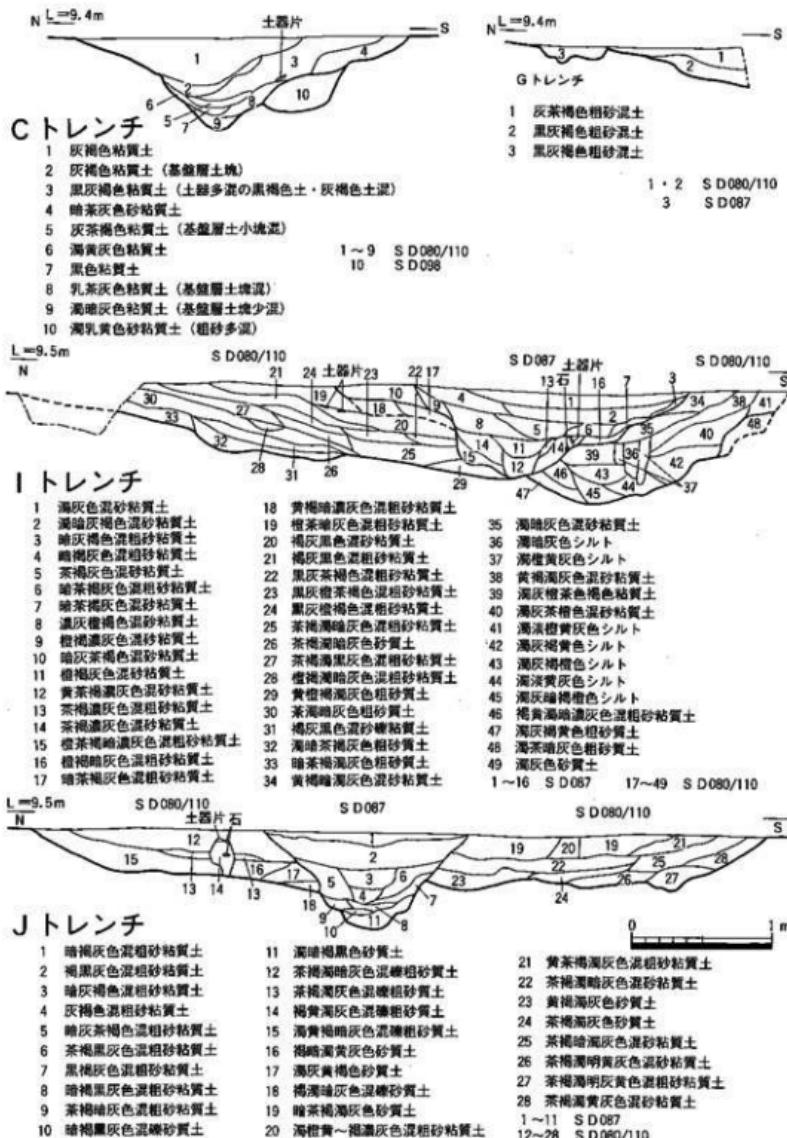
E 23に位置する。N 36° E の向きに直線的に掘削される。溝は細く浅く石が詰められていた。単なる排水以外の特殊な用途が考えられ、仮に掘立柱建物跡と関係があるとすれば、付近では S B 083が方位が等しく、これに該当する。ごく少量の弥生土器・土師器が出土している。

#### S D 群トレンチ (第301~305図、図版32)

調査域中央を北西から南東に抜けて、多くの溝跡が残されている。これらは弥生時代中・後期、古代前半のものであることが判明した。中でも古代前半の溝は複数の溝が交錯し



第301図 SD群トレンチ配置図 (1/250)



第302図 S D群 トレンチ断面図(1) (1/40)

あっている。溝を掘削するのに弥生時代・古代前半とも同じこの付近を選んだのは、もともと周囲より低く水が溜まりやすかったのであろう。ここに集中し、同じ向きをとるこれらの溝をここではSD群としてまとめることにする。

さてこのSD群は新旧関係の把握が上面からでは難しく、幾本ものトレンチを流れと直行する方向に入れた。これによってもある溝がどの流れをとるのかを完全に理解できたとは言い難いが、トレンチ毎に結果を述べていきたい。

Cトレンチでは2つの溝を確認した。1～9層はSD080で、埋土は灰褐色系で基盤層土を多く含むことから意図的な埋め戻しが行われたものと判断する。土築器が出土している。10層はSD098で、新しい溝により消えていたのが、この付近からまた痕跡が見えるようになる。埋土には砂が多く混じる。

Gトレンチでも2つの溝を確認した。埋土はよく似ており、どちらも砂が多く混じる。北の溝が南の溝より新しい。Iトレンチとの関係から、北をSD087、南をSD080と考える。

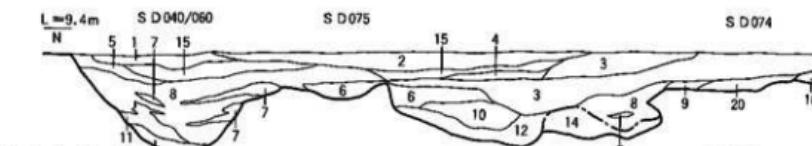
Iトレンチでは1～16層の新しい溝とその両側に広がる幅広の溝を確認した。ともに砂の多く混じる埋土であるが、新しい溝は灰褐色系で、幅広の溝のうち北側はより黒が強く、南側は土層の方向により分けた。幅広の溝は新しい溝によりきれいに分けられているため、同一の溝であるかは断定できない。Cトレンチで確認したSD098はここではわからなくなっている。

JトレンチはIトレンチに似た状況であった。新しい溝は北に振れる。黒味を増すものの、砂の混じりが多く、Iトレンチ中央と同一の溝と見てよい。両側の溝はそれより明るい色である。

KトレンチはSD040/060(075)とSD074が一時的につながる部分に入れた。その結果SD076のみ古く、SD040/060・074・075の間には明瞭な新旧関係は確認できなかった。SD040/060(075)とSD074がつながる通路状部は深く、両者が確実に同時併存したことを見ている。この場合、平面形から北西のSD040/060(075)と南東のSD074がつながる。

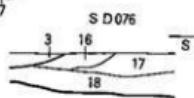
QトレンチではSD040/060とSD075との関係が明らかになった。両者はこの地点で既に2つの溝に分かれしており、しかも同時存在である。ただしSD040/060の方が下層に砂が多く、流れが速い本流であったことがわかる。これは2つの溝の深さや幅からも裏付けられる。

Rトレンチでは全部で4～5の流れを確認した。右端はQトレンチと土層が似ているこ



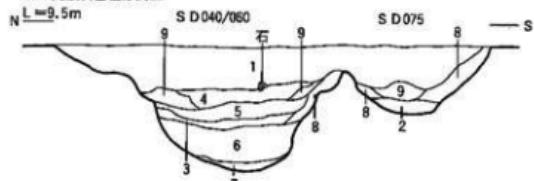
K トレンチ

- |                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| 1 灰褐色粗砂質土 (やや粘性有) | 12 澄灰色粘質砂             |
| 2 暗褐色濃灰色混沙粘質土     | 13 橙褐色暗色混沙粘質土         |
| 3 暗褐色灰砂質土         | 14 澄灰色粗砂礫 (基盤層の可能性あり) |
| 4 淡黃灰色砂           | 15 暗褐色濃灰色~淡黃灰色粗砂質土    |
| 5 濃灰色粗砂質土         | 16 褐黃褐色黃色砂質土          |
| 6 淡褐色~淡黃色粘質砂      | 17 黃褐色濃灰色混沙粘質土        |
| 7 反~赤褐色粗砂         | 18 黃褐色暗色混沙粘質土         |
| 8 濃褐色~深褐色黃褐色粗砂    | 19 橙褐色濃灰色粗砂質土         |
| 9 棕褐色砂質土          | 20 橙褐色黃色砂質土           |
| 10 反~淡黃色粗砂        |                       |
| 11 深褐色灰粗砂質土       |                       |



Q トレンチ

- 1 漢茶灰色シルト
  - 2 茶灰色シルト
  - 3 漢灰色シルト（基盤層土混）
  - 4 漢茶灰色シルト
  - 5 漢茶灰色シルト
  - 6 漢茶灰色粘土と淡灰色砂の互層
  - 7 漢茶灰色粘土
  - 8 漢茶灰色シルト（基盤層土混）
  - 9 漢茶灰色シルト

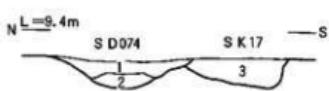


R トレンチ

- |                     |               |                |
|---------------------|---------------|----------------|
| 1 潤煙灰色混砂粘質土         | 16 潤煙淡灰色粘質細砂  | 31 明鴻煙褐灰色混砂粘質土 |
| 2 潤煙灰色混砂粘質土（1より珍多し） | 17 黃潤灰色砂      | 32 黑屬灰色混砂粘質土   |
| 3 潤煙灰色混砂粘質土         | 18 嗅潤灰色粗砂     | 33 暗鴻灰色混砂粘質土   |
| 4 暗潤灰色砂質土           | 19 條涼灰色粘黃細砂   | 34 條涼灰色混砂粘質土   |
| 5 橙灰色混砂粘質土          | 20 灰色粘質土      | 35 檉潤灰色混砂粘質土   |
| 6 潤煙褐灰色粗砂粘質土        | 21 褐潤青灰色混砂粘質土 | 36 褐潤灰色混砂粘質土   |
| 7 橙黃色混砂粘質土          | 22 桃潤灰色混砂粘質土  | 37 黃褐色粗砂粘質土    |
| 8 褐潤灰色混砂粘質土         | 23 桃潤灰色混砂粘質土  | 38 潤黃青灰色混砂粘質土  |
| 9 桃潤灰色混砂粘質土         | 24 桃潤暗紅色混砂粘質土 | 39 潤黃褐灰色混砂粘質土  |
| 10 櫻潤灰色粗砂粘質土        | 25 潤灰色粗砂      | 40 濁潤桃灰色混砂粘質土  |
| 11 啓潤潤灰色混砂粘質土       | 26 桃潤暗紅色粗砂粘質土 | 41 濁黃漸黃色混砂粘質土  |
| 12 增潤潤灰色混砂粘質土       | 27 黃褐潤增潤灰色粗砂  | 42 濁黃灰色混砂粘質土   |
| 13 增潤暗紅色粗砂粘質土       | 28 桃潤暗紅色粗砂粘質土 | 43 濁青黃灰色粗砂     |
| 14 櫻潤潤灰色混砂粘質土       | 29 增潤暗紅色混砂粘質土 | 44 漢綠灰暗色粘質土    |
| 15 茶潤潤灰色粗砂          | 30 增灰黃褐色混砂粘質土 | 45 漢綠灰青色砂質土    |

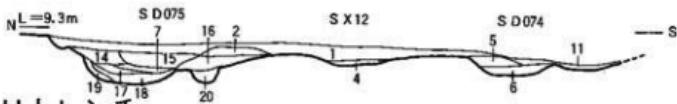
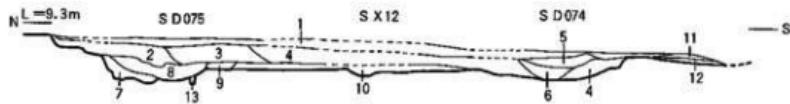
1~20 S D 040/60 21~23 S D 087 24~28 S D 080/110  
29~30 31~45

第303図 SD群トレンチ断面図(2) (1/40)



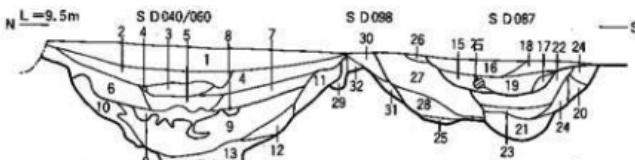
### Sトレンチ

- 1 淡茶灰色シルト（粗砂多量に混じる）
- 2 茶褐色シルト
- 3 灰茶色シルト



### T・Uトレンチ

1 椴褐色灰色混砂粘質土	8 椴茶灰色混砂粘質土	15 椴褐色灰色混砂粘質土
2 灰褐色粗砂	9 椴茶灰色粗砂	16 椴茶灰色混砂粘質土
3 椴茶灰色混砂粘質土	10 淡黃褐色粗砂	17 椴茶灰色混砂粘質土
4 淡黃褐色灰色混砂粘質土	11 淡黃褐色混砂粘質土	18 椴褐色灰色混砂粘質土
5 淡灰色混砂粘質土	12 明灰色シルト	19 淡茶褐色混砂粘質土
6 灰褐色混砂粘質土	13 淡灰色粗砂（杭跡？）	20 灰褐色混砂粘質土（溝内に打ちこんだ杭跡？）
7 淡灰～黃褐色粗砂	14 淡黃茶灰色混砂粘質土	



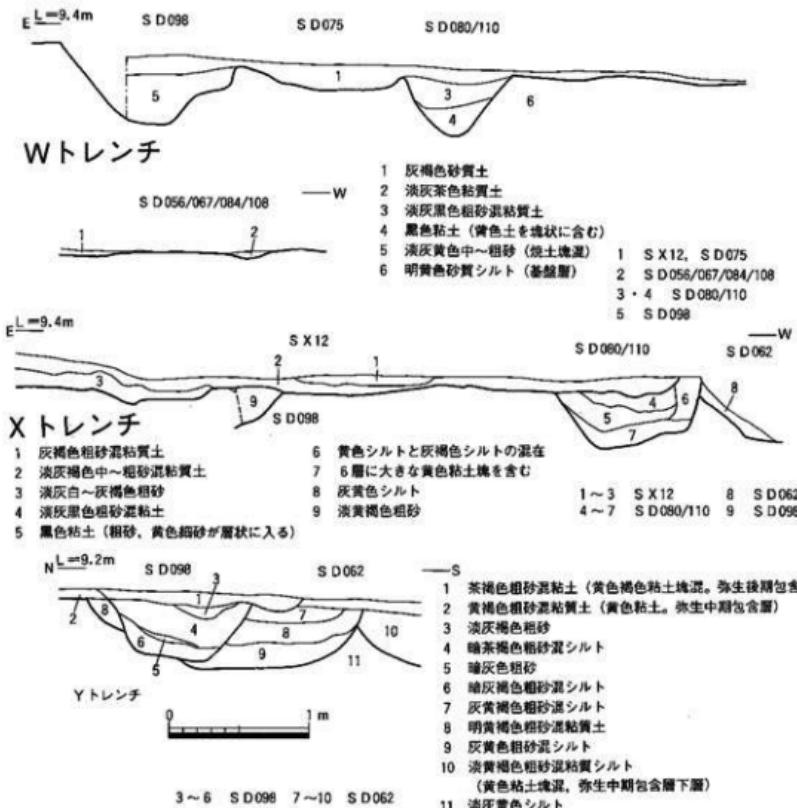
### Vトレンチ

1 淡褐色灰色混砂粘質土（基盤層土堆泥）	12 黄褐色灰色混砂粘質土	23 椴褐色灰色混砂粘質土
2 海茶灰色混砂粘質土（炭化物含む）	13 黄褐色明灰色混砂粘質土	24 黄褐色明灰色混砂粘質土
3 淡黄褐色粗砂	14 淡黄褐色灰色粘質土	25 楠褐色灰色粗砂粘質土
4 椴褐色灰色混砂粘質土	15 椴褐色黑色混砂粘質土	26 淡褐色砂質土（S D097/113）
5 楠褐色粗砂粘質土	16 楠褐色混粗砂粘質土	27 淡褐色黑色混粗砂粘質土（基盤層土堆泥）
6 楠褐色黑色混粗砂粘質土	17 楠褐色黑色混砂粘質土	28 黄褐色黑色粗砂質土（基盤層土堆泥）
7 楠褐色黑色混砂粘質土	18 楠褐色黑色混粗砂粘質土	29 淡褐色黑色混砂粘質土（pit？）
8 楠褐色粗砂	19 楠褐色混砂粘質土	30 黄褐色明灰色混砂粘質土
9 楠褐色黑色粗砂質土	20 淡明褐色黑色混砂粘質土	31 淡明褐色粗砂質土
10 淡灰褐色黄色混砂粘質土	21 淡灰色混砂粘質土	32 淡褐色明灰色混砂粘質土
11 淡灰褐色黄色混砂粘質土	22 淡褐色混砂粘質土	1~14 S D040/060 20~28 S D080/110 15~19 S D067 29~32 S D098

第304図 SD群トレンチ断面図(3) (1/40)

とから、SD 040/060であり、その左は灰褐色系で上下に大きく分かれる可能性がある。その左は32層が黒色系であることから、I・Jトレンチで確認した北側の溝と同じと考える。左端の流れは大きく分けたものの右と土色・土質が似ており、同じ溝の可能性もある。

SトレンチはS X17よりSD 074が新しいことを示している。

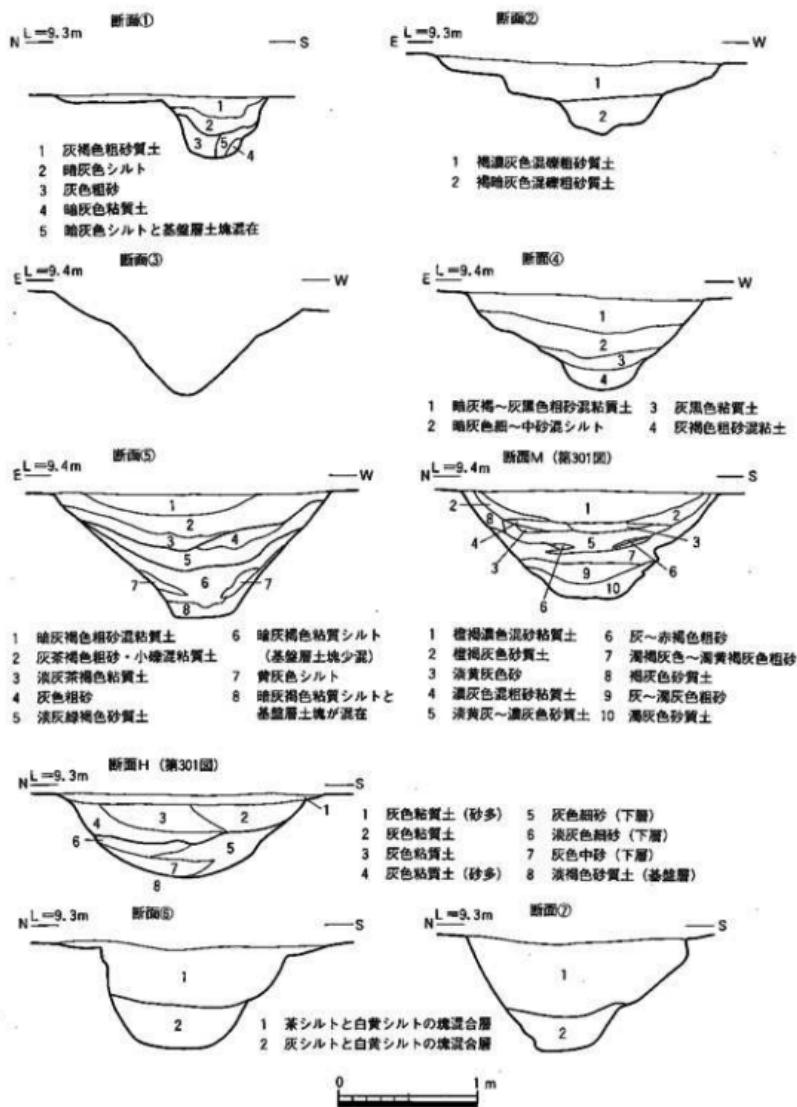


第305図 SD群トレーンチ断面図(4) (1/40)

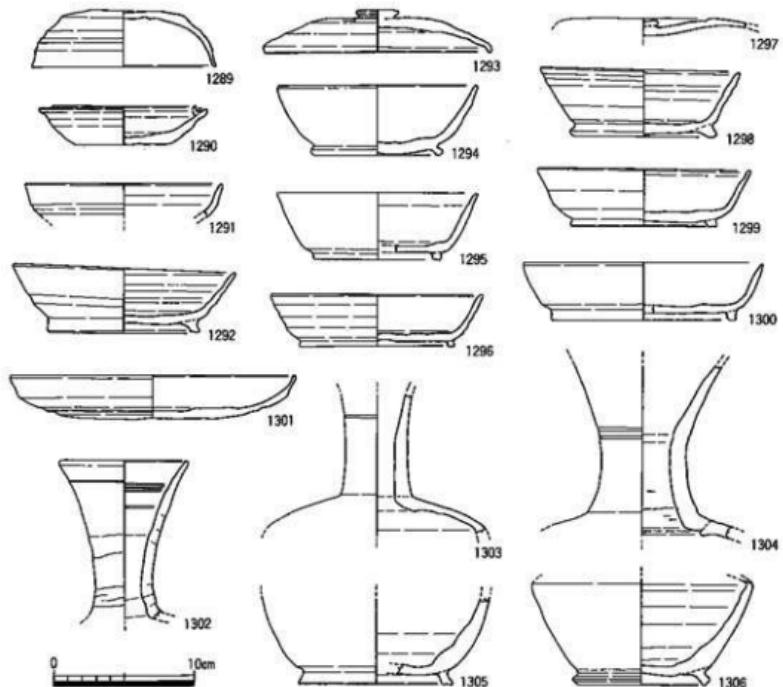
TトレーンチはSトレーンチとUトレーンチの中間に設定した。この付近から西ではS D075の南肩及びS D074の北肩は明瞭でなくなり、2つの溝の間にはSX12と名付けた土が堆積する。これは2つの溝を覆うように水が広がったことがあることを示し、粗砂の堆積(10層)もあることから、多量の水が一気に覆ったことによるものと思われる。SX12は西はWトレーンチから2m付近、北はS D040/060とS D075の分岐点まで広がる。

UトレーンチもTトレーンチと似た状況を示す。

VトレーンチはRトレーンチの西延長上に設定した。北端の大きな溝がS D040/060で、その南に接してSD098がこの地点ではまだ残っている。27・28層は基盤層上を多く含むこ



第306図 S D 040/060断面図 (1/40)

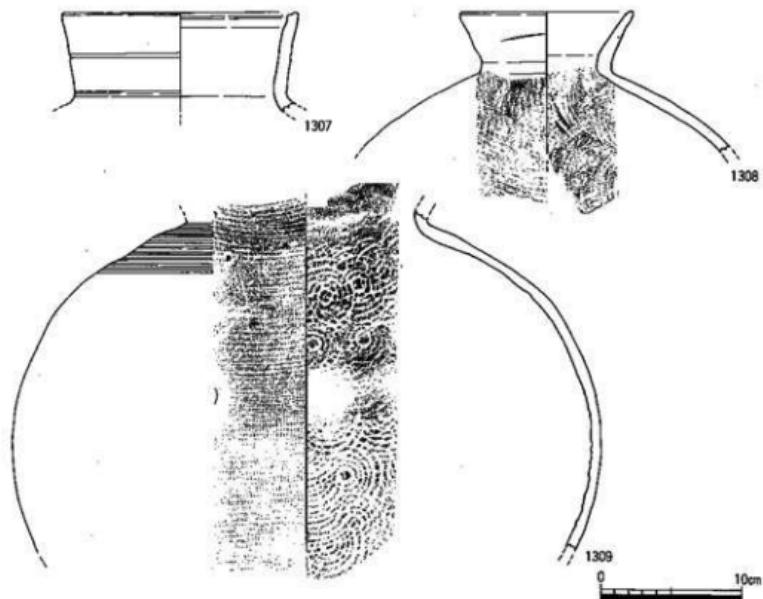


第307図 SD 040/060出土遺物実測図(1) (1 / 4)

とからCトレレンチの新しい溝と同一と判断する。また22層がRトレレンチ32層と同一と判断し、これを境に上をSD 087、下をSD 080と考える。ただし、調査時に溝を色分けした平面図によると、この付近より東SD 040/060までの間の南側の溝の南端で、SD 097/113として弥生時代終末期-1の土器を一括して取り上げている。これをトレレンチ断面図に当てはめると、SD 080と判断したものがSD 097/113であったり、SD 080が2つの溝に分かれる可能性がある。この点はこれ以上明らかにできなかった。

WトレレンチではSD 098とSD 110とSD 075の関係を明らかにした。SD 098には焼土塊が含まれていた。SD 110は土色・土質・基盤層土の混じり方から、SD 080と同じ溝と判断した。1層は浅いSD 075とそこから広がるSX12である。

Xトレレンチは基本的にはWトレレンチと同じで、西端ではSD 062がSD 080/110より古い



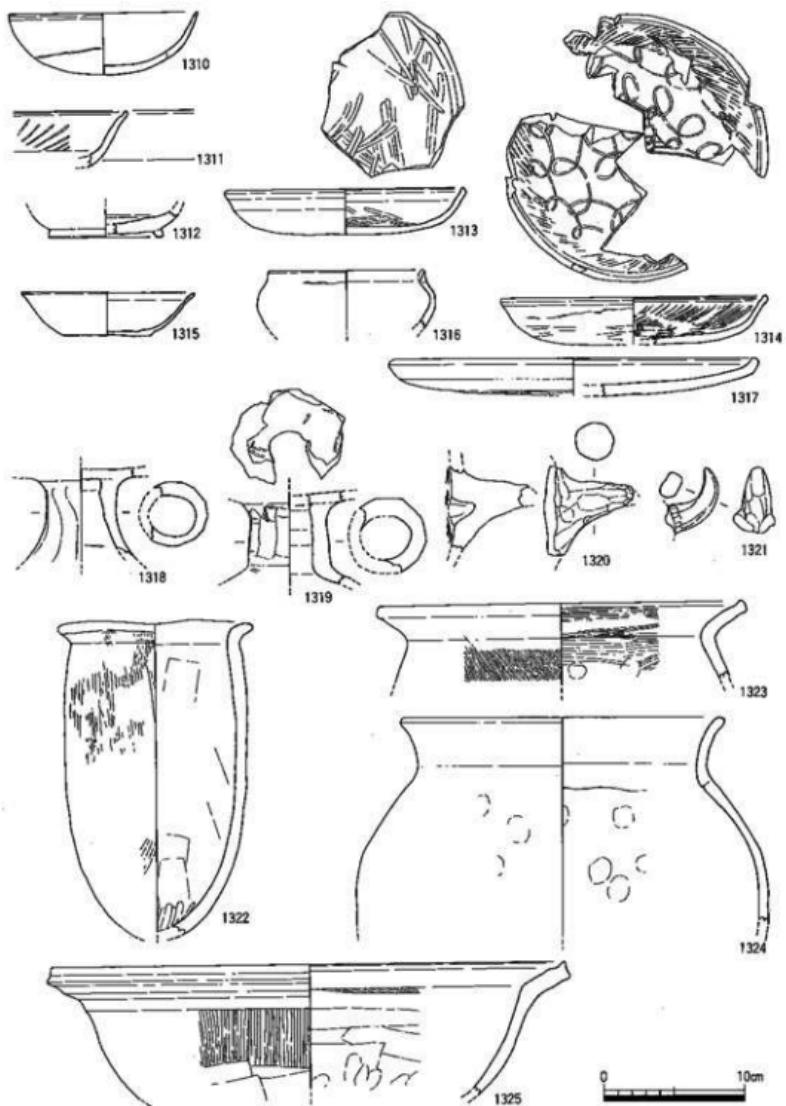
第308図 SD 040/060出土遺物実測図(2) (1 / 4)

ことを示している。

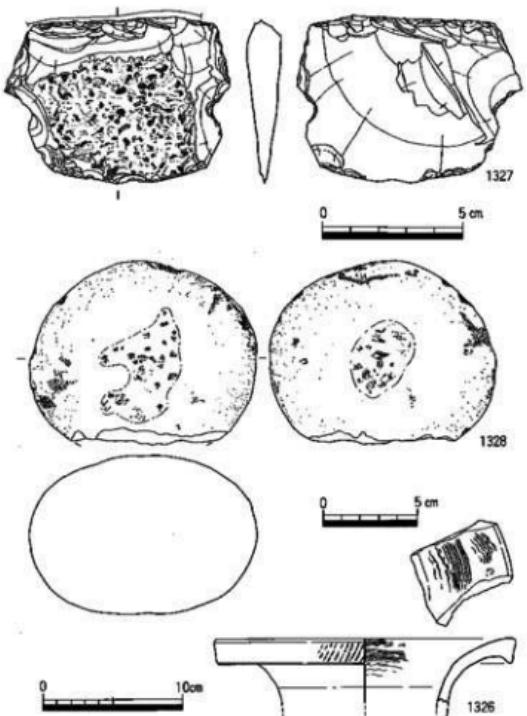
Yトレンチでは、SD 062が弥生時代中期包含層の堆積後に掘削され、その後にまた中期包含層が薄く堆積し、SD 098がその上から掘削されたことが明らかになった。

#### SD 040/060 (第306~310図)

調査域北西端から調査域中央を通り東に抜ける大溝である。幅は1.5~2 mで、北西端のみ狭い。深さは70~80cmで、標高で見ると北西端から徐々に高まり、B区に入りそこから後は東へと低くなる。東と西では東が若干低い。単純に見れば、西から東に水が流れる事になる。仮に逆の東から西に流れるとすれば、東端の溝断面積一杯の水を西端の溝断面積で受け入れるのは、溝が完全な直線でない限り不可能であろうし、これにSD 075が加わるとすれば、西端付近で水があふれた痕跡があって当然である。しかしこのような状況が認められないことは、やはり西から東への流れを裏付けるものであろう。遺跡が立地する付近は北ほど標高が低くなる地形であることから、SD 040/060は単に高きから低きに水を流すだけのものではなく、微高地を横断して水を移動させるある程度の計画性と力と



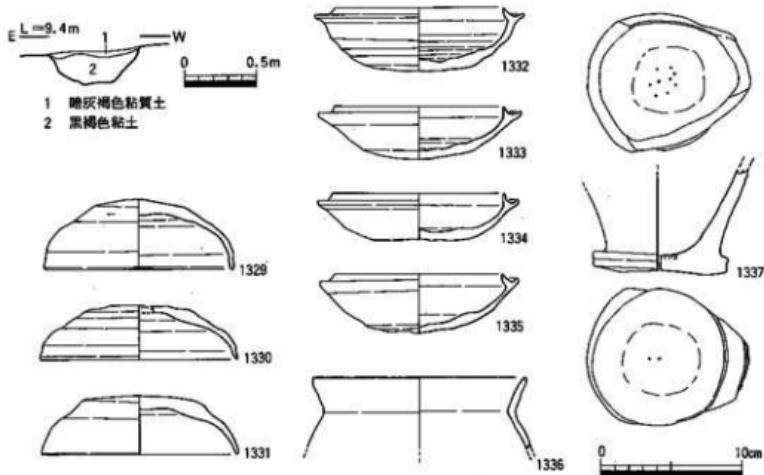
第309図 SD 040/060出土遺物実測図(3) (1 / 4)



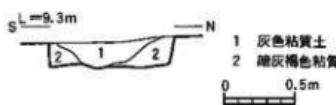
第310図 S D 040/060出土遺物実測図(4) (1/2, 1/3, 1/4)  
 ~1296・1298~1300の高台付杯は口径14~16cmで、ロクロの回転方向は上から見て右である。1302は粘土紐を左下から右上に巻き上げて成形している。1309は内面の當て具径が6cmである。1310~1325は土師器である。1310は粘土紐を左下から右上に巻き上げて成形している。1313は内面体部と底に単なる磨きのような暗文を描いている。1318・1319は側面を面取りしている。1320は内面が空洞であることから甕の取っ手と判断した。1321はあまり類例を見ない小型品の取っ手である。1322もあまり類例を見ない小型の長胴甕である。1323は内面頸部から胴にかけて炭化物が付着している。1326は混入品の弥生土器であり、口縁内面に櫛描文を多く描いている。1327・1328も弥生時代のものと思われる石器である。1328は側面も凹凸が目立つことから、少し重い叩き石にも使った可能性がある。S D 040/060出土の土器は主体は7世紀後半~8世紀前葉であり、これに7世紀中葉のものが含まれる。

を必要とする幹線水路のようなものと考えておきたい。さらにSD群トレントの項でも見たように、SD 040/060とSD 075は同時期に分岐・合流を繰り返す。また、SD 074ともつながって流れている。このような複雑な溝の配置は、1本の溝から多方向へ水の流れを分ける過程で、水量やその方向を調整する必要があつて生じたものと思われる。

SD 040/060からはコンテナ8箱の遺物が出土しており、土器・石器の他、鉄滓が1点出土している。1289~1309は須恵



第311図 S D 047断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)



第312図 S D 050F断面図 (1/40)

れることから、この間に溝が機能していたと考える。1315のみ9世紀代のものであるが、時期が開きすぎることと、この時期には既に掘立柱建物跡が南に展開していることから、ピットの掘り残しか窪地に溜まった包含層による混入品と考えたい。

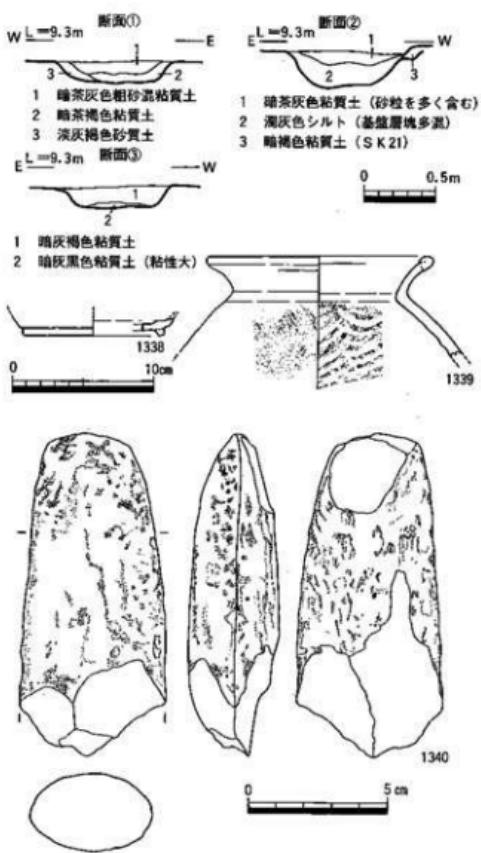
S D 040/060の上限を7世紀中葉とすると、S D 010との関係が問題となる。一時的な共存でも問題はないが、S D 010が埋め立てられていることを重視して、埋め立てとS D 040/060の掘削が対応すると考えたい。2つの溝の西端はほぼ同じ地点に位置し、恐らく調査域外で合流するのであろう。即ち、7世紀中葉にこの大溝はより南の地域に水を流せるよう付け替えが行われたのである。

#### S D 042

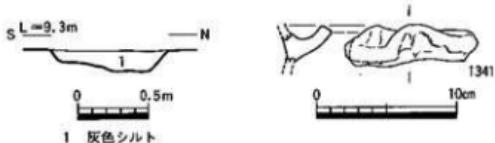
C 22に位置する。ほぼ南北を向く深さ5cm弱の溝である。S D 010との関係はわからぬ。土師器や須恵器の細片が少量出土した。

#### S D 043

C 22に位置する。N24°Eの向きに掘削されている。深さ10cm弱の溝である。遺物の出



第313図 SD 051断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)



第314図 SD 052断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

土は見られなかった。

#### SD 044

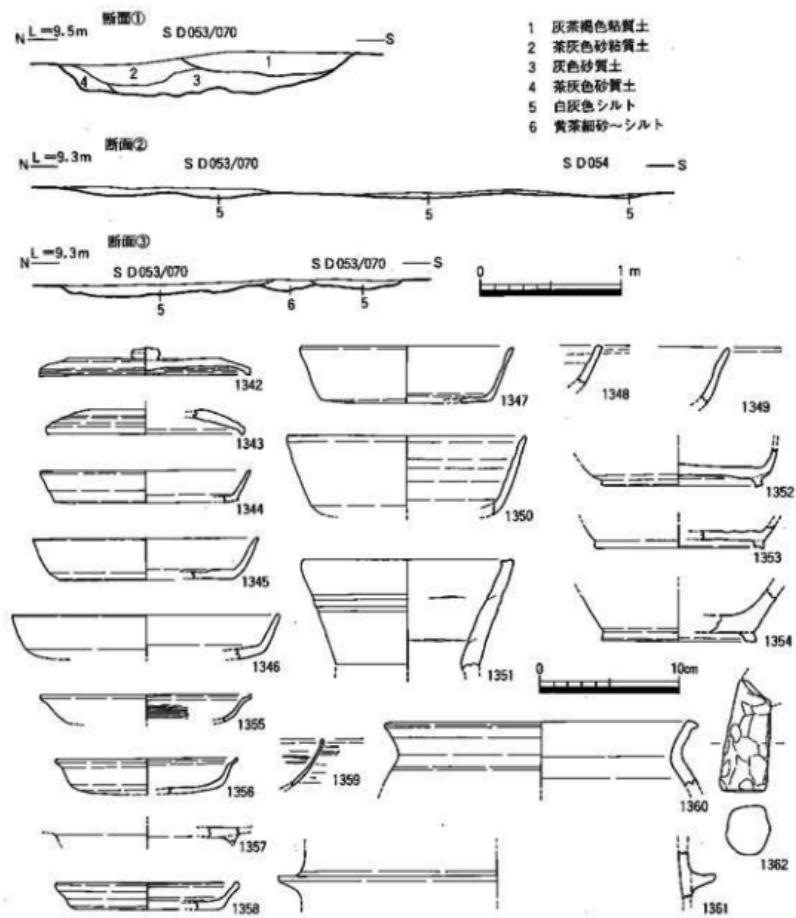
C 22に位置する。N29° Eを向く。東延長上にあるSD 045と同一の溝である可能性が高い。弥生土器・土師器・須恵器の細片が少量出土した。

#### SD 046

C 22に位置する。SD 031から北に突き出た形をしている。同時期の溝であろう。深さ10cm弱の溝である。遺物の出土は見られなかった。

#### SD 047 (第311図)

F 23に位置する。深さ30cmであるが、南側のB区では続きを検出していない。中からは須恵器・土師器が出土している。1329~1335・1337は須恵器で、杯蓋は口径13~14cm、杯身は立ち上がり径12cm前後で擴う。1329・1332・1334は外面部と天井(底)の境を1周のみ回転ヘラ削りしている。SD 047出土蓋杯はSD 010出土蓋杯より口径が大きいことから、より古く、つまり付き蓋の出現直前の時期に当たると思われる。1329~1335は完形或いはそれに近い



第315図 S D 053/070断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/4)

形で出土しており、良好な資料といえる。1337は刺突9のうち2つのみ貫通している。1336は土師器である。他に弥生土器片等が出土している。出土土器から、S D 047は7世紀第1四半期頃と考える。同様の蓋杯を出土したS H11との関係については、S H11の項で述べている。

#### S D 050F (第312図)

C 26に位置する。S D 051より新しく、S B 045より古い。溝内からは須恵器・弥生土器片が少量出土している。

#### S D 051 (第313図)

C 25/26に位置する。N 03° Eを向く。北はS X 12の下に潜り込んで消える。S B 045・050・053・109、S A 25、S D 050F・052より古い。中からはコンテナ半箱程度の須恵器・弥生土器片が出土したが、図化に耐えるものは少ない。1338・1339は須恵器である。出土土器から、8世紀の溝と考える。S D 051は溝底の標高からは水がどちらに流れていたのかわからない。仮にS D 040/060の項で述べたように北から南へ水が流れてくるのなら、S D 075が分岐する地点はS D 040/060が角をなして曲がる地点でもあることから、そこで水が曲がりきれずに溢れることもあったであろう。これはTトレーナー断面観察の結果と一致する。このような水を再び集めて、違った地点へ流すのがS D 051の役割であったとすれば、北から南への流れを想定することになる。出土土器も、S D 040/060・075とS D 051が同時期であることに矛盾しない。

#### S D 052 (第314図)

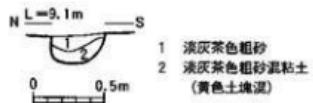
C 26に位置する。S D 051より新しい。1341は土師器である。他に須恵器・土師器片が少量出土している。

#### S D 053/070 (第315図)

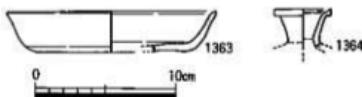
D/E/F 26に位置する。S D 068・072/076より新しい。「大畦畔」やS D 007C/054との関係についてはS D 007C/054の項で述べた。東側はS X 01BCを境に不明瞭になる。或いはS X 01BCより東の「大畦畔」が盛り土により形成されていることと関係があるのかもしれない。コンテナ半分の須恵器・土師器片が出土した。1342～1354・1360は須恵器である。1345は口縁外周に重ね焼きによる色調の変化が認められる。1349・1350は高台が付く可能性がある。1352は底部外面に規則的なヘラ圧痕が残る。1361・1362は土師器である。1361は内面に煤が付着している。1362は土馬の足である。出土土器には時期幅があり、8世紀後半～10世紀前半までのものが含まれている。S D 053/070が機能していたのもこの時期にわたると考える。

#### S D 056/067/084/108 (第316図、図版33)

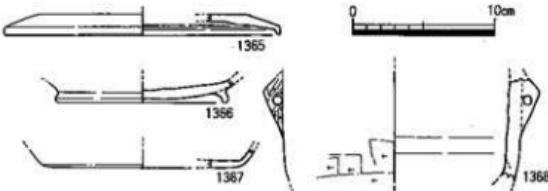
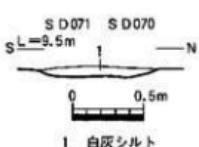
C 25に位置する。S B 048より古い。弥生土器や少量の須恵器・土師器片が出土しているが、時期決定は難しい。S D 061・064・085・086・104～107との関係から、畠状遺構に



第316図 S D 056/067/084/108断面図 (1/40)



第317図 S D 058出土遺物実測図 (1/4)



第318図 S D 071断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

伴う溝と考えている。

#### S D 058 (第317図)

C 25に位置する。土器片がごく少量出土した。1363・1364は須恵器である。8世紀後半頃のものである。

#### S D 068

D 26に位置する。S D 053/070より古い。少量の磨滅した弥生土器が出土している。

#### S D 071 (第318図)

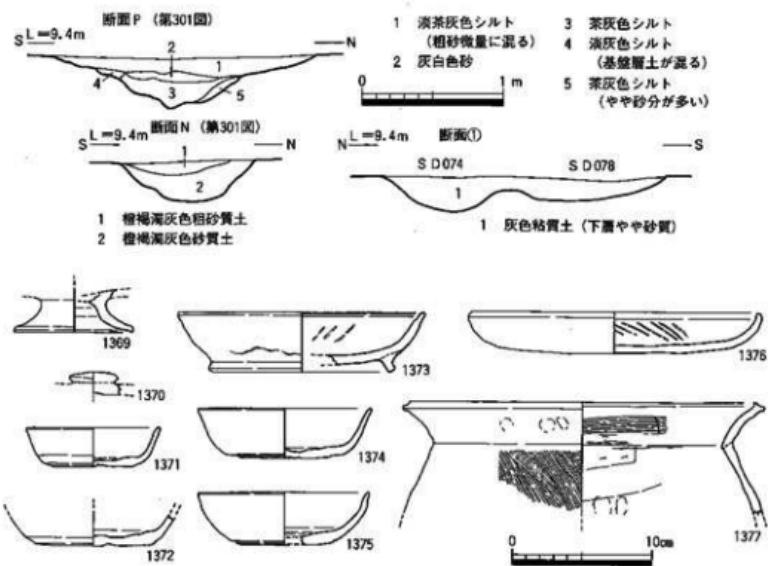
E/F 26に位置する。S D 007C/054やS D 053/070同様「大畦畔」と関係する溝である。南肩が北肩より高いことから、「大畦畔」を形成するための溝とは考えにくい。溝底の標高からみて東のS D 007C/054に水が流れ込むようになっており、このことから「大畦畔」上に溜まった水を排水する用途で掘削されたと考えておく。溝からは少量の土器片が出土している。1365～1368はすべて須恵器である。これらは8世紀～9世紀前半の時期幅を示している。

#### S D 073 (第320図)

F 26に位置する。S D 053/070・075との新旧関係はどの溝も浅いため、明らかにできなかった。溝底の標高は南が低い。ごく少量の弥生土器が出土している。

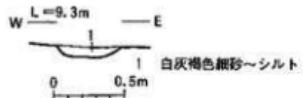
#### S D 074 (第319図)

調査域中央を北西～南東に貫く溝群の最も南よりに位置する。東部で南へと支流が分岐



第319図 SD074断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

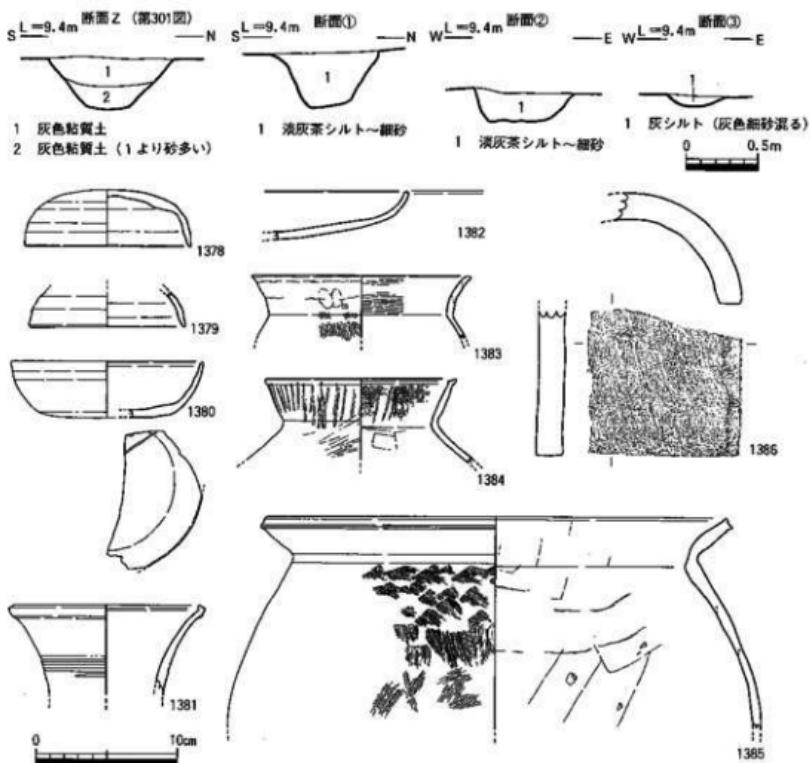
する。SD074の東端はSD075より古いように平面図を作成しているが、この部分は溝としての深さがほとんどなく、新旧関係は言えない。溝底の標高は一定している。掘立柱建物跡群より古く、SD076より新し



第320図 SD073断面図(1/40) い。コンテナ2箱分の土器が出土している。1369・1373・1376・1377は土師器で、他は須恵器である。出土土器は7世紀後半～8世紀前葉のものである。SD051の項で述べたようにSX12が溢れた水の層で、Tトレンチ断面で見たようにSD074を覆っているのであれば、SD074もこの水を集め、そこから南東に流すのが役割であったと考えられる。

#### SD075(第321図)

SD074の1.5m北に並んで掘削されている溝である。溝底の標高もSD074とほぼ同じである。このことからも両者が強い関係にあると判断できる。上述したように、SD074がSX12の水を流すのが目的であったとすると、SD075の後でSD074が作られたことになる。更に溝幅・深さから、SD040/060の後にSD075が作られたと判断できる。一旦分

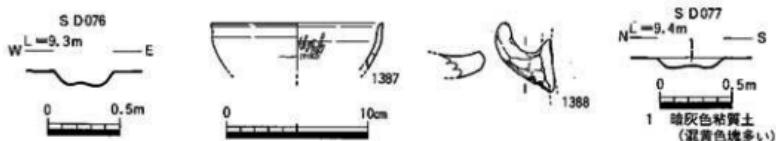


第321図 SD 075断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

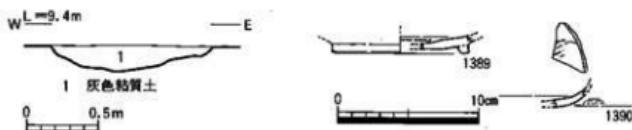
岐しました合流するのは、S X 12とSD 074の関係同様、溢れた水を再び元の流れに戻すことが考えられる。SD 040/060・075とSD 074がつながるのも、溝が曲がる地点で南肩を浸食した結果と考える。SD 075は再度SD 040/060から分岐し、その水をSX 01BCへと導く。SD 075とSD 040/060は50cm前後の深さの差があり、水量が一定の高さに達した場合にのみ南に流れようになっているという結論に至る。

以上、SD 040/060・074・075が同時存在でありながら、このように複雑な形で流れるのは、予定外の水の流れを制御しようとし、またそれが度重なった結果であると考えておきたい。

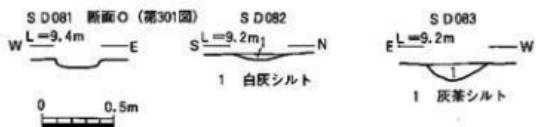
SD 075からはコンテナ2箱分の土器が出土している。1378～1381は須恵器である。1380



第322図 SD 072/076断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4), SD 077断面図 (1/40)



第323図 SD 078断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)



第324図 SD 081, SD 082, SD 083断面図 (1/40)

は外面底部に「-」形のヘラ記号の一部が残る。1382は磨滅のため調整不明である。1384は形態は甕に似るが、口縁外面を磨くことから壺とした。1385は須恵質の丸瓦である。出土土器はおよそ7世紀代のものである。

#### SD 072/076 (第322図)

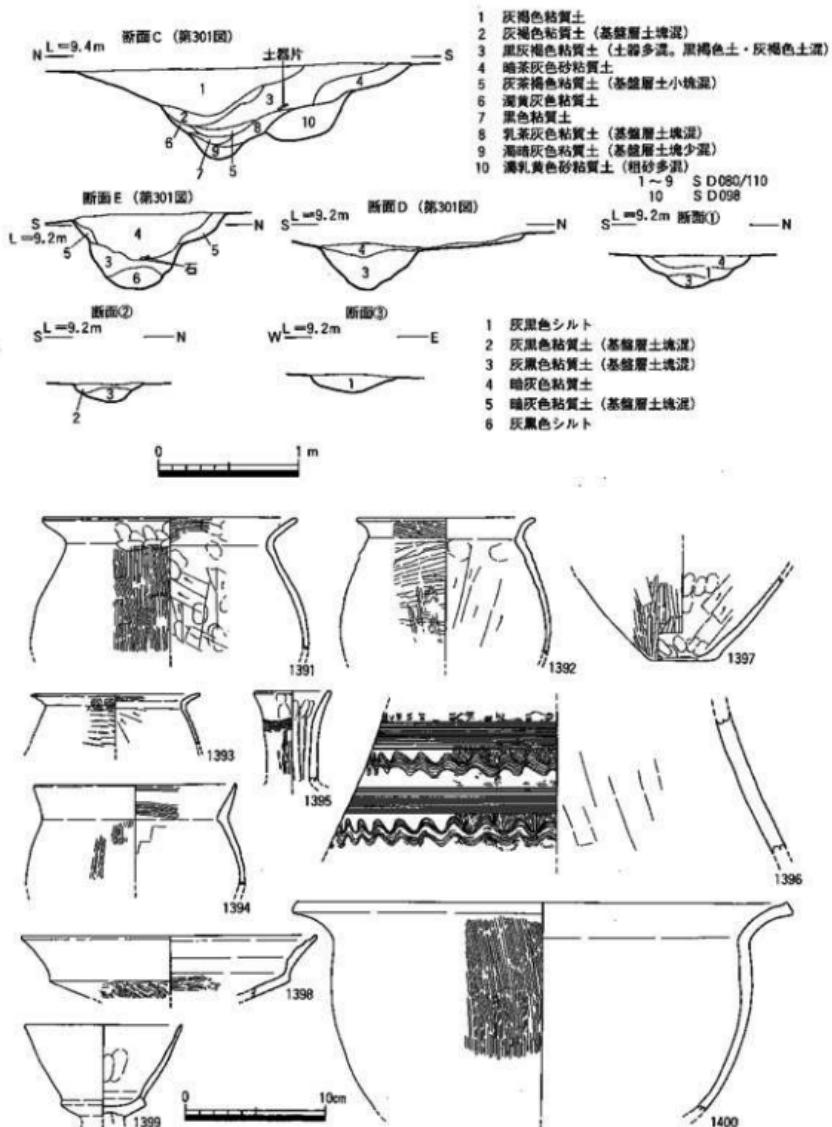
SD 040/060・074・075合流部で、これらと直交する溝である。南端はSD 053/070によって消え、北は途中削平等により途絶えながら、SB 065付近まで続いていくと考えた。溝底の標高は数cm南が低い。溝内からコンテナ1箱分の土器片が出土している。1387・1388とも土師器である。これらから7世紀前半の溝と考える。

#### SD 077 (第322図)

E 26に位置する。SD 078より古い。埋土によると意図的に埋め戻した可能性がある。溝内から須恵器片等がごく少量出土した。時期決定は難しい。

#### SD 078 (第323図)

E 26に位置する。SD 074東部で南に分岐する支流である。溝内から少量の土器片が出土した。1389は須恵器高台付杯である。1390は土師器杯で放射状暗文を施している。8世紀代のものである。



#### S D 080/110（第325・326図）

調査域中央を北西—南東に横切る S D 群の一つである。S D 097/113や S D 群トレンチの項で述べたように、西は明瞭な細い 1 本の溝であるが、東は S D 097/113・112と絡み合ひ、完全にはそれらとの関係を明らかにできなかった。それと関連して、この部分で幅 5 m にまで広がったり、或いは余計に深くなってしまったりすることが、大量の水が流れるような溝でないだけに理解できない。S D 080/110自体は、東端と西端で溝底の標高に 20 cm の差があることから、東から西に水が流れたと思われる。幅広になった中央部では確認できなかつたが、東西両端では埋土に基盤層土塊が含まれ、S D 080/110が埋め戻された可能性を示している。

S D 097/113からはコンテナ 11 箱もの土器が出土した。1391～1400 は弥生土器である。1395・1396 はⅢ期の土器である。1395 は細頸壺で、1396 は大型の壺である。櫛描き文を施している。1397 は焼成後穿孔の瓶である。1401～1407 は須恵器である。1402 は焼成時に重ねた他の須恵器が軸着している。1406 は胴中位に 2 条の沈線と綫の刻みによる文様を描いている。1409 底部付近のハケ目は終点が起点となる折り返しの手法で付けられている。

出土土器のうち、Ⅲ期のものは破壊された S D 098からの混入であろう。他の弥生土器は終末期—1 に属し、S D 097/113・112との関係がつかめなかつたために一緒に取り上げたものが多く含まれていると考える。須恵器・土師器は 7 世紀前半葉の様相を呈しており、これが S D 080/110 の時期を示している。

#### S D 081（第324図）

E 25/26 に位置する。S D 074 から分岐し、南端は浅い梢円形の S K 27 に至つて終わる。遺物の出土はない。

#### S D 082（第324図）

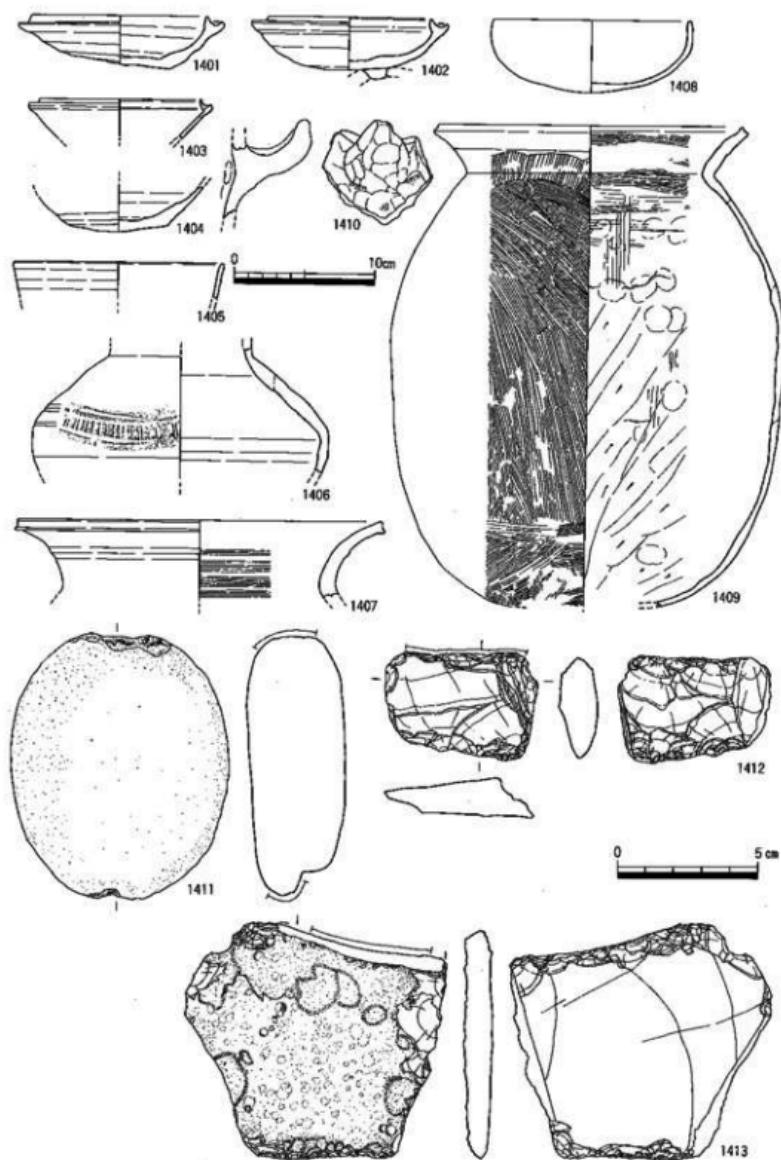
F 25 に位置する。S D 040/060 の北 2 m 付近で、これに平行する形で検出した。中からは須恵器などの細片がごく少量出土した。時期決定は難しい。

#### S D 083（第324図）

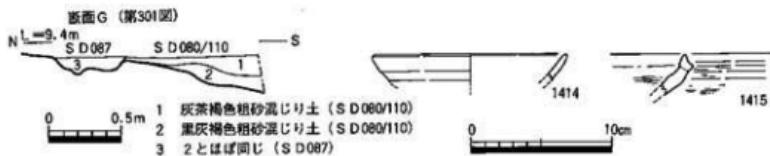
F 25 南東隅で検出した。中から弥生土器の細片が数点出土した。

#### S D 087（第327図）

調査域中央の古代 S D 群中の一つである。東端では 1 本の細くて浅い溝として明瞭であるが、I・J トレンチでは幅 1.5 m 以上、深さ 70 cm の溝として認められ、R トレンチでは深さ 30 cm と再び浅くなる。これより西では確認してなく、ちょうど S D 080/110 と重なる



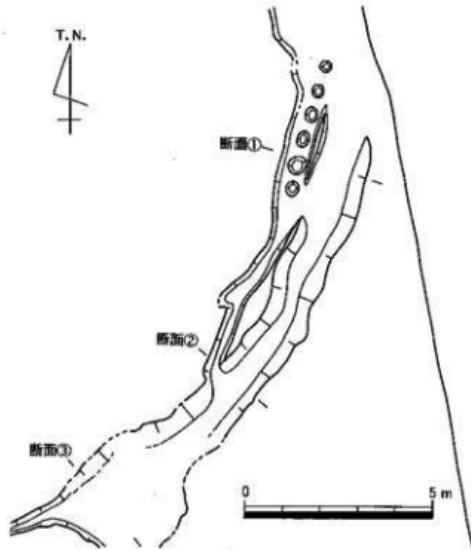
第326図 S D 080/110出土遺物実測図(2) (1/4, 1/2)



第327図 SD 087断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/4)

ことから、SD 080/110が埋没していくSD 087の最終段階の形態で、東で向きが少し変わったものと見ることもできる。

調査段階では、SD 080/110土器と一緒に取り上げたため、SD 087として取り上げた土器はわずかである。國化した土器も上面掘り込みのピットからの紛れ込みの可能性がある。時期は明らかとは言えないが、仮にSD 080/110掲載土器中にSD 087土器が含まれているとしても、それらに時期幅を認めがたいことから、SD 080/110と同様の時期と考える。1414・1415



第328図 SD 095/096/S X 08平面図 (1/150)

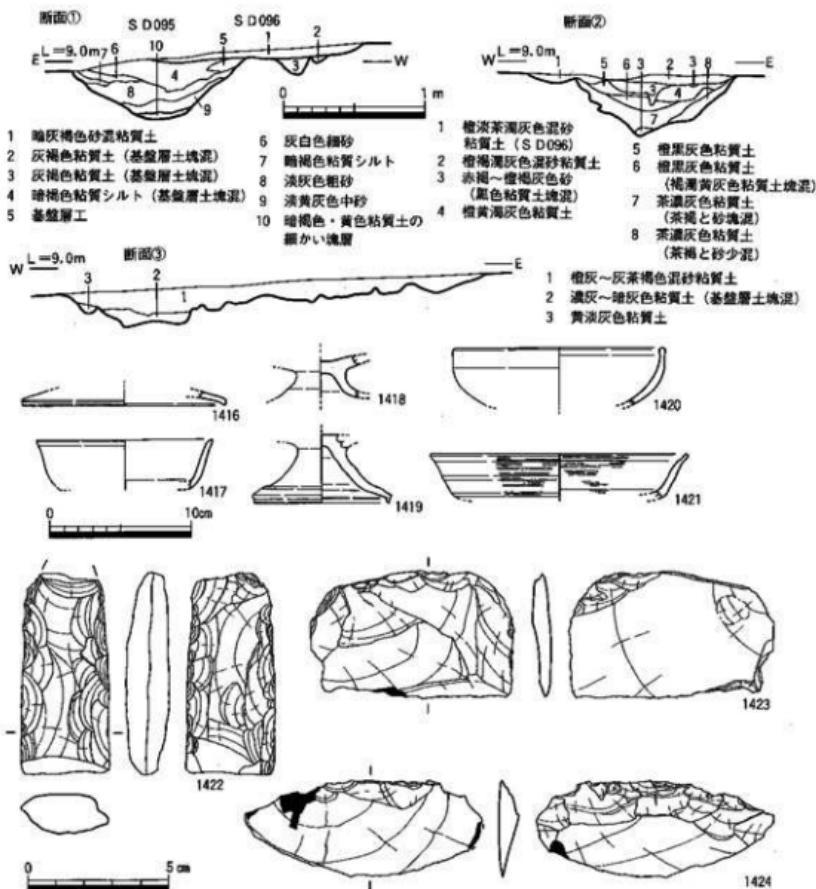
とともに須恵器である。

#### SD 088

C 25に位置する。SD 084より古い。向きからいえば、SD 061・064・085・086・104～107と同じ構造を構成する可能性もある。須恵器壺・土師器壺片が少量出土した。

#### SD 095/096/S X 08 (第328・329図、図版32)

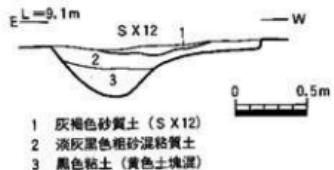
F 23/24に位置する。南部はSZ 01のために不明瞭であるが、その北で2つの溝に分かれ(東をSD 095、西をSD 096とした)、調査域外に出る手前で合流する。SD 095が本流で深い。溝底の標高はほぼ一定している。SD 096側では溝底に一定間隔で並ぶピット列



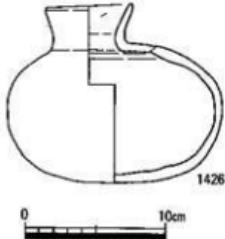
第329図 S D 095/096/S X 08断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

を検出した。深さ10cm強で、6個しか並んでいないため、用途は不明である。ピット・溝上層には基盤層土塊を含むことから、自然埋没が進んだ後に埋め立てられたと判断される。

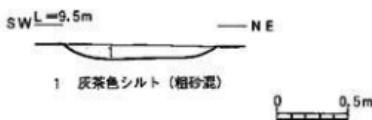
コンテナ1箱分の土器片が出土している。1416～1419は須恵器である。1420・1421は土師器で、1421は内外面とも磨いている。1422は石槍状石器の切っ先近くと考える。1423は刃部寄りの片側に抉りがつくと考え、石包丁と判断した。刃部には細部調整を施していない。1424も刃部の細部調整がないが、スクレイパーと判断した。石器を除くと、遺物の時



第330図 SD 101断面図（1/40）、出土  
土遺物実測図（1/4）



第331図 SD 103出土遺物実測  
図（1/4）



第332図 SD 114断面図（1/40）

期は7世紀中葉～8世紀中葉であり、SD 095/096/S X08もまたこの間に機能していたと考える。

#### SD 101（第330図）

C24に位置する。SD 080/110から南西に分岐し、湾曲しながら西に向かう。溝底の標高も西が低い。溝内からごく少量の土器片が出土した。1425は須恵器蓋である。これからもSD 080/110と同時期であると判断できる。

#### SD 102

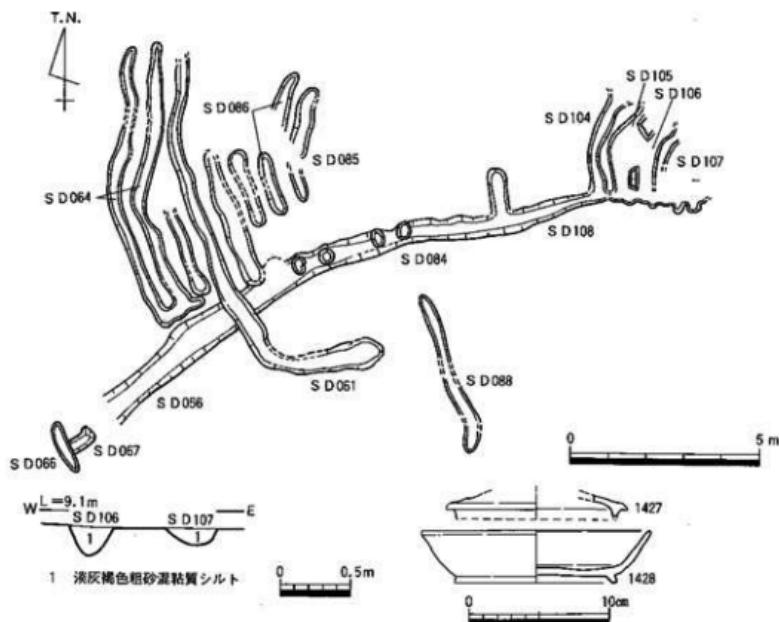
C24に位置する。SD 080/110とSD 101を結ぶ位置にあることから、これらと同時期と判断した。溝内からは弥生土器片が数点出土した。深さ25cm程度である。

#### SD 103（第331図）

C24に位置する。SD 040/060の西に平行しており、関連があると思われる。図化した1点のみ出土した。1426は須恵器平瓶である。出土遺物も上記の推測に特に矛盾しない。深さ10cm弱で、溝底の標高は北が低い。

#### SD 114（第332図）

E24に位置する浅い溝である。遺物の出土ではなく、埋土から古代の造構と判断する。SH 264・085・121より古い。SH 26とは関係ない。

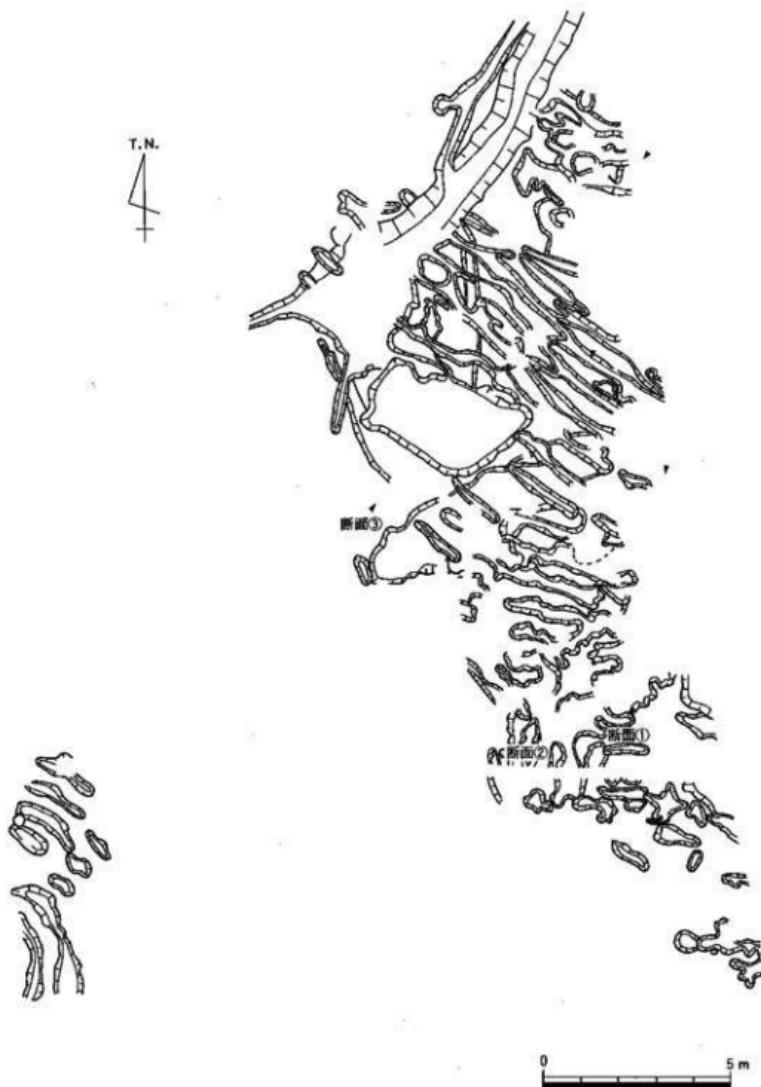


第333図 SD 061・064・085・086・104～107平 (1/150)・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

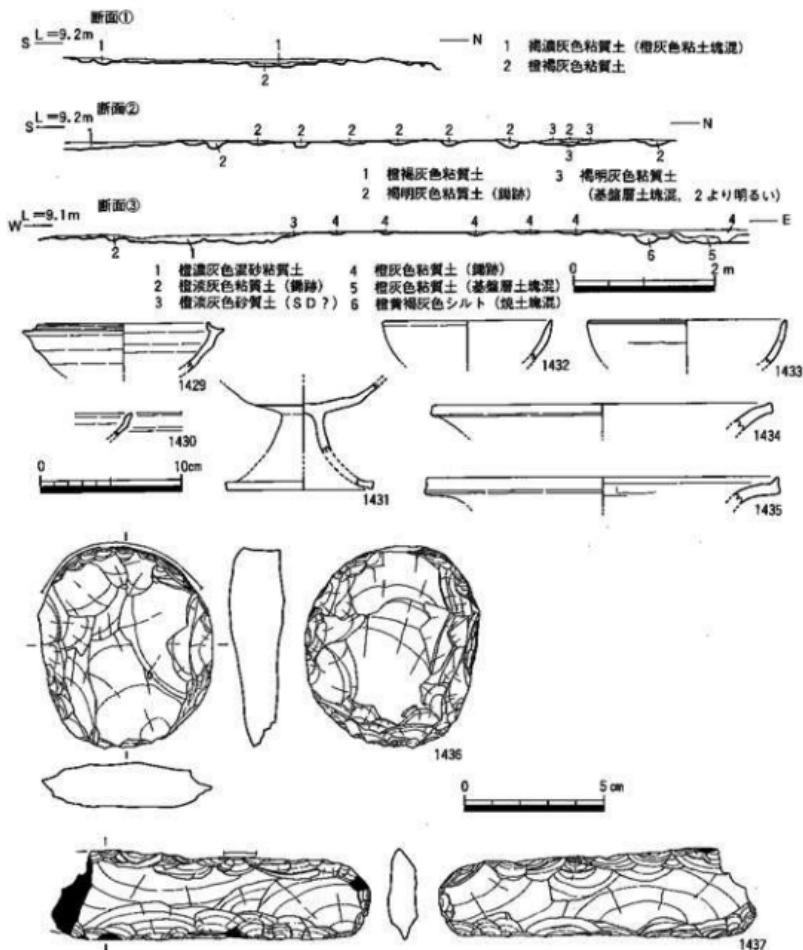
#### その他の遺構

SD 061・064・085・086・104～107 (第333図, 図版33)

C25に位置する。いずれも縦い「く」の字を描く幅30～50cm・深さ10cm以内の溝である。30cm程の間隔を置いて東西に並ぶことから、これらすべてで一つの遺構を形成すると考えられる。中央の存在しない部分は溝が浅かったため検出できなかつたか削平されていたと思われる。それぞれの長さは西側の溝ほど長く一定しないが、南北ともある一定の線で描う。南はSD 056/067/084/108を境に見られなくなることから、この溝も関連があるものと思われる。ただし、SD 064は2本が南でつながつたものであり、SD 061はSD 056/067/084/108を越え東に折れる。SD 104～107はSD 056/067/084/108より若干南に延びるなどの違いは認められる。SD 056/067/084/108内に並んで残る樁凹形のピット状のものがこの東西に並ぶ溝群の名残とすれば、基本的にはSD 056/067/084/108と重なると見ることもできる。溝群からは7世紀代の土器片が少量出土し、掘立柱建物跡群よりは古いことから、



第334図 S Z 01平面図 (1/150)



第335図 SZ01断面図 (1/80), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

この間の時期のものと判断できる。この溝群の性格は明らかでないが、他調査例を見ると、群馬県有馬遺跡・有馬条里遺跡の畑に平面形が似ている。この時期、集落は北に寄っており、この地点は幹線水路が東西に走り、かつ低地でもない地形であることから、畑の可能

性は高いと考えている。1427・1428とも須恵器である。

#### S Z01 (第334・335図、図版33)

E/F 24/25に位置する。東西20m・南北25mの範囲に、幅30~50cm・深さ10cm弱の溝が北西→南東の方向に並んでいる。溝はほとんどが直線だが、南西部分は湾曲したものが並んでいる。これらの溝は、低地に堆積した薄い弥生時代中期の包含層の上で検出したため、南東部のように不明瞭な部分もある。また同様の理由で中央部では検出できなかったものと思われる。

溝内からはコンテナ1箱分の土器片等が出土した。1429~1431は須恵器である。1432~1435は土師器である。1436は上面の打撃痕が著しいが、刃部側には摩滅痕がない。1437は直線形の石鎌と判断した。出土土器は7世紀前半のものである。S Z01の上には20cmほどの厚さで包含層が堆積し、この上の面で掘立柱建物跡が建てられていた。この付近の掘立柱建物跡は上限が8世紀であることから、S Z01は出土土器の年代で時期を決定できると考える。

S Z01の性格については、遺構の形・大きさ・時期・立地が似ていることから、S D061・064・085・086・104~107と同じく、畑の可能性を考えておきたい。

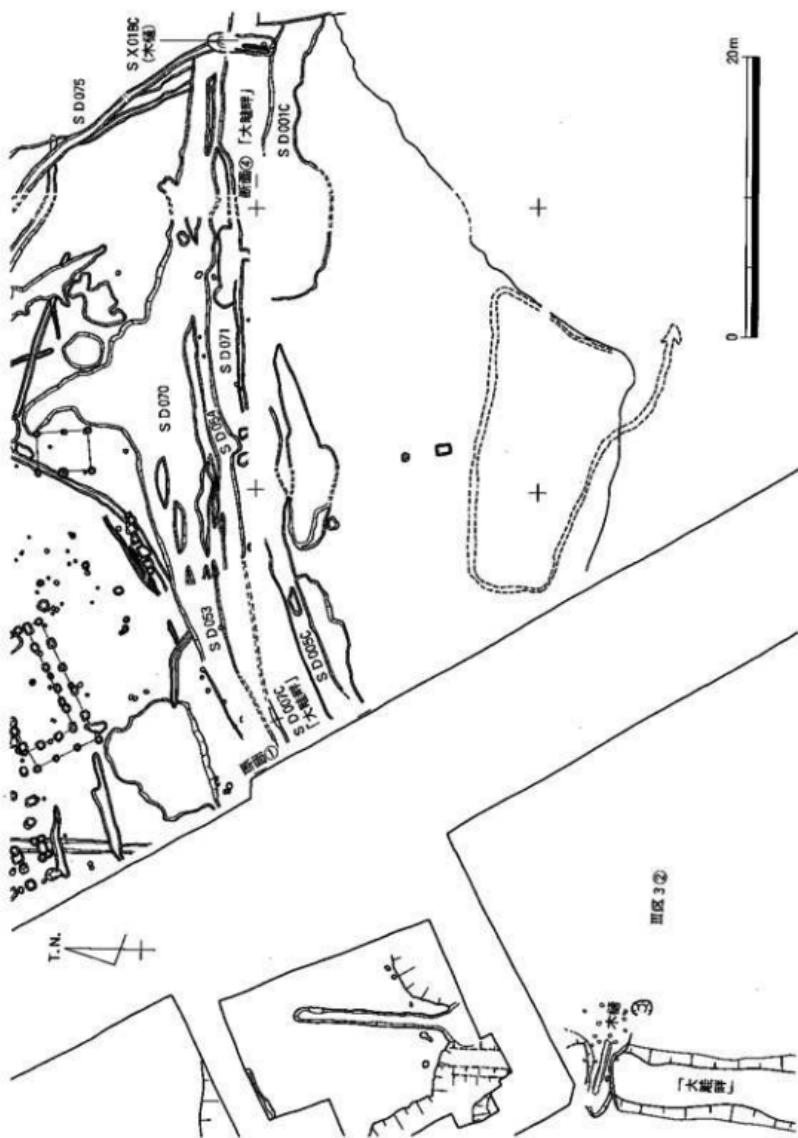
#### S X01BC及び「大畦畔」(第336~338図、図版34・35)

これまでたびたび「大畦畔」について言及してきた。「大畦畔」は、そもそも調査時についた名称であり、水田の畦の大きなものを想像させることから呼ばれるようになった。よって、「大畦畔」は必ずしも水田を伴うものではないことをまず断っておく。

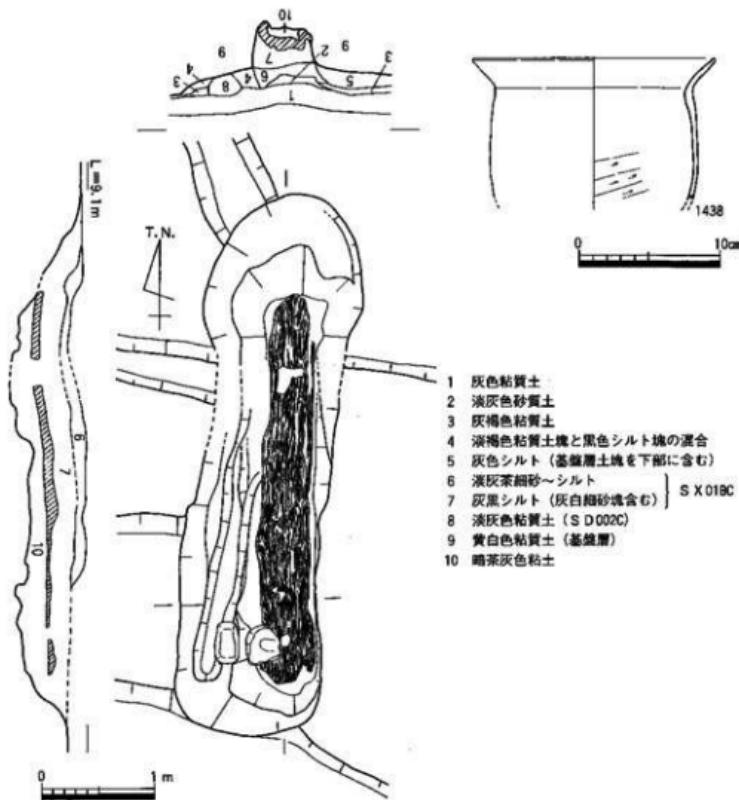
さて、「大畦畔」はIV区以外の改修区・III区でも検出されている。改修区では「畦畔状遺構」とされているもので、上面幅6.10m、高さ20cm、基盤層土を掘り込んで形成している。これを壠す溝との関係から、7世紀前半より古いと判断されている。III区では底幅4.8m、高さ30cm、包含層の上に盛り土により形成し、この上層の包含層出土土器が8世紀代のものである。形態、木機、位置関係等から、東西170m以上にわたる一つながりのものと判断された。

IV区では調査域南部で長さ60mほどを検出した。上面幅は東端では1.6mと狭く、西端で3.6mである。高さは10~30cmである。東西両端では平面的にも明瞭であるが、中央部はちょうど調査区の分かれ目にあたり、上に調査区境の壁を残していたためもあって、南北幅を断定できていない。東端のように幅狭になっている可能性もある。

「大畦畔」は地形的には北の微高地から南の低地に傾斜し始める変換点につくられてい

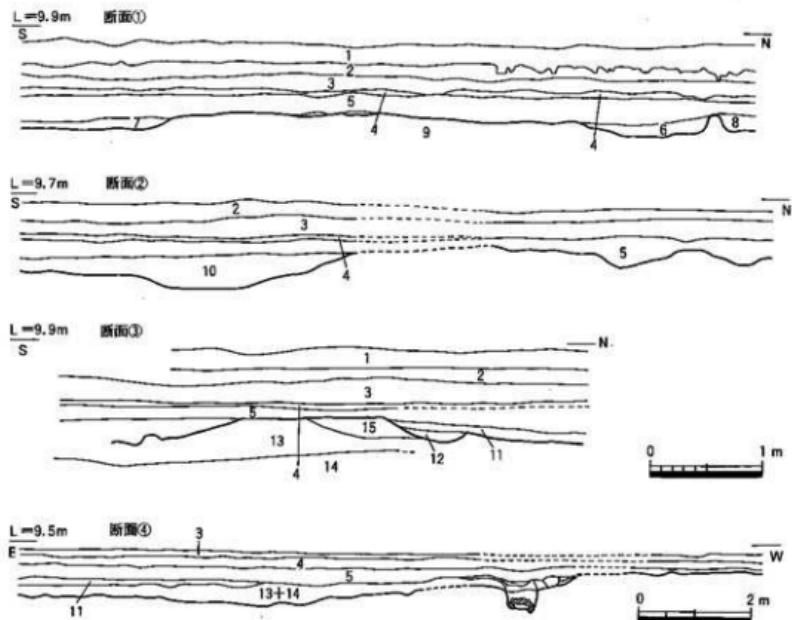


第336図 S X01BC及び「大畦畔」平面図（1/400）



第337図 S X01BC平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)

る。これはそのことを意識していたことを示している。造構分布もこれを境に極端に異なっており、集落の境の意味も与えられていた。形成は基本的には両側の地面を掘り下げることによっている。このためにできた溝については各溝の項でたびたび説明してきた。溝は浅く、結果的に「大畦畔」とはいっても、そう目立つようなものとはなっていない。微高地が一旦下がるB区東部では全部或いは部分的に土を盛って形成している（断面図④）。ちょうどS X01BCを境に土盛りの有無が認められることが偶然でないとすれば、水を南北に通すためのS X01BCがこの洼地を選んで作られ、それと同時に「大畦畔」が作られたことを示しているのであろう。



1 灰色粘質土	6 灰色砂質土 (SD 007C)	11 白灰色シルト (SD 070)
2 淡褐色粘質土	7 暗灰色粘質土 (SD 005C)	12 白灰色シルト
3 黄白色粘質土	8 灰色砂質土	13 灰色シルト (基盤層土塊混を下部に含む)
4 淡灰褐色粘質土	9 黄白色粘土 (基盤層)	14 黄色シルト (基盤層土塊含む)
5 暗灰色粘質土	10 暗灰色粘質土	15 灰黑色シルト

第338図 「大畦畔」断面図 (1/50)

このS X01BCでは木樋を検出した。両側の地面より更に40cm掘り下げた土坑の中に、長さ3.5mの木樋を削り抜き部を下にして据えていた。この部分で「大畦畔」は途切れ、開渠になっている。木樋は径50cmの一木を半裁して、中を削り抜き、更に外側もきれいに削り整えていた。1438はS X01BCから出土した土師器甕で、7世紀以降のものである。

S X01BCの機能は、勿論水を流すことにある。これと北でつながるS D075は北から水を運んでくると考えている。S X01BCの位置からみて、北へ水を流すのは「大畦畔」南が湛水状態になっていないと難しく、調査城十層図(5)・(6)ではそのような状況は読みとれない。では北から運んできた水をどうしたか。S D075がそれほど大きくなく、運ばれた水

量も大したものではないとはいえるが、目的もなく溝や木樋を作ることはないと想定する。この項の結論としては、S D001Cから先に明瞭な造構がなく、不明といわざるを得ない。或いは単に「大畦畔」で雨水が堰き止められることを防ぐのを第1の機能としているかとも考えられる。第5章第1節で再度検討してみたい。

最後にS X01BC及び「大畦畔」の時期であるが、S X01BCにつながるS D075或いはS D074・040/060から7世紀代中葉或いは後葉に作られたと考える。これらの溝は8世紀前葉には埋まることから、S X01BCも同時期にその役割を終えたと思われるが、「大畦畔」自体は南北の溝から、11世紀、少なくとも9世紀前半まで使われていた可能性が残る。改修区の「大畦畔」が7世紀中葉の溝に壊されていることは、若干矛盾するようであるが、形成直後に何らかの理由によりこの部分が不必要になったのか、S X01BC同様、両者が同時形成であることを示すのか、或いは「大畦畔」に先行する別の「大畦畔」なのかもしれない。

#### 4 中世以降

この時期の造構は、主に調査域北部に分布し、密度は低い。掘立柱建物跡や溝などを検出している。

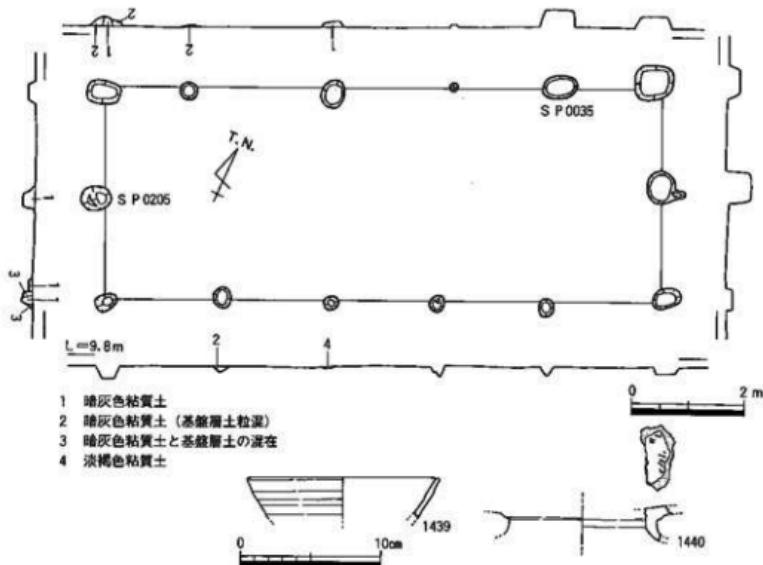
##### 掘立柱建物跡

###### S B022（第339図）

D22/23に位置する。2間×5間の細長い掘立柱建物跡である。主軸はN66°Eを向く。柱穴はやや小さい。1439はS P0035、1440はS P0205から、それぞれ出土した。他にも細片が少量出土している。柱穴が小さいことや主軸方位が似ているS B095と前後する時期のものと判断し、13世紀の建物跡と考える。

###### S B094（第340図）

D22に位置する。1間×4間の掘立柱建物跡である。主軸はN25°Wを向く。柱穴は小さい。S B095とは主軸方位・南北柱列が揃い、2棟並んで建っていたとも考えられるが、復元に用いた柱穴では、2棟が完全に接してしまう。近接した時期の建て替えの可能性を考えた方がよいかもしれない。1441はS P0074から出土した。外面に赤色顔料を塗ってい



第339図 SB 022平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4)

る。他に少量の土器片が出土している。SB 095との関係から13世紀の建物跡と考える。

#### SB 095 (第341図)

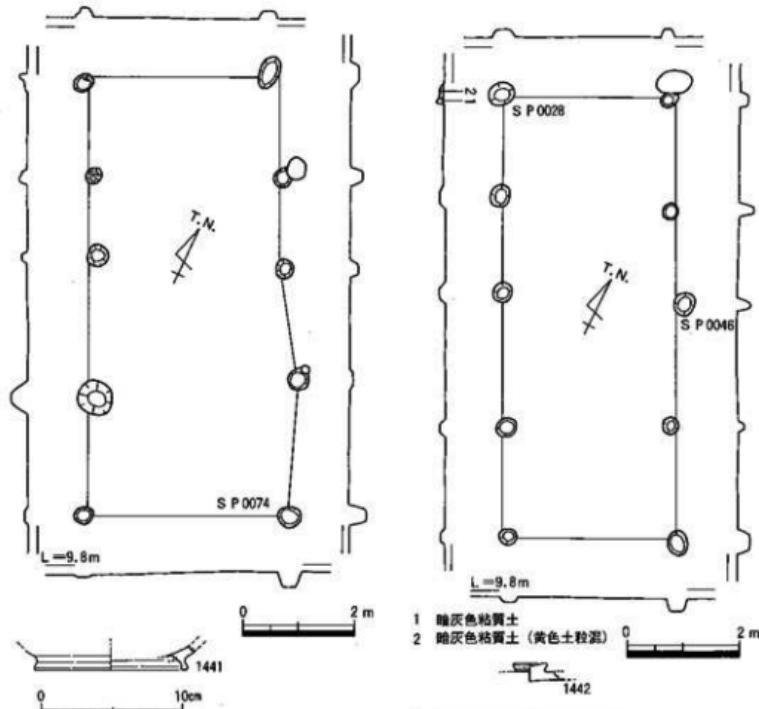
D22に位置する。1間×4間の掘立柱建物跡である。主軸はN26°Wを向く。柱穴は小さい。SB 094とは主軸方位・南北柱列が揃う。1442・1443はSP 0046, 1444はSP 0028から出土した。1442は土師器の蓋で、内外面に赤色顔料を塗っている。1443は土師器で、口径は不確かながら、口縁形態から平底の杯と思われる。1444の内面調整は磨滅のため不明である。出土土器から13世紀の建物跡と考える。

#### SB 126 (第342図)

D22に位置する。1間×2間の小型の掘立柱建物跡である。主軸はN64°Eを向く。根石を据えている柱穴がある。SD 012より古く、重なり合うSB 094とは東柱列が揃うことから時期が近接すると思われる。柱穴からは数片の須恵器・土師器が出土したのみである。

#### SB 135 (第343図)

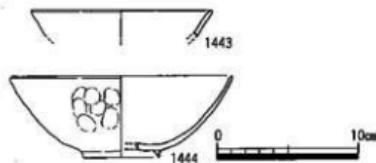
E21に位置する。1間×6間の掘立柱建物跡である。主軸はN69°Eを向く。柱穴は小



第340図 S B094平・断面図 (1/100), 出土  
遺物実測図 (1/4)

さい。少量の土器片が出土している。体部の斜めに直立する8世紀代の須恵器杯が含まれる。柱穴の形態から、S B095等と同時期の建物跡と考えた。

1 雜灰色粘質土  
2 暗灰色粘質土 (黄色土粒混) 0 2 m  
1442



第341図 S B095平・断面図 (1/100), 出土  
遺物実測図 (1/4)

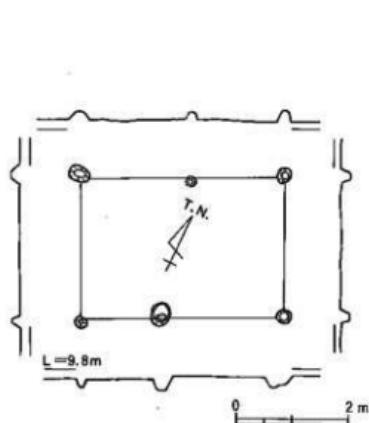
## 柱穴

### その他のSP

Ⅲ区と異なり、明らかに中世とわかるようなピットは少ない。

1445・1448はS P0164A (E22) から出土した。1445は温石 (ぬるいし) である。凸面に煤が付着しており、もともと石鍋に使用されていたものの転用とわかる。各面には転用時に研

磨したための傷が多数付く。又角は斜めに面取りしている。1448は土鍋である。1446・1447はS P0157E (D 22) から出土した土鍋・土釜である。S P0157Eは中から多量の土器片や丸石が出土した大きな穴で、ゴミ穴であった可能性がある。1449はS P0808E (D 22) から出土した瓦質の皿である。



第342図 S B126平・断面図 (1/100)

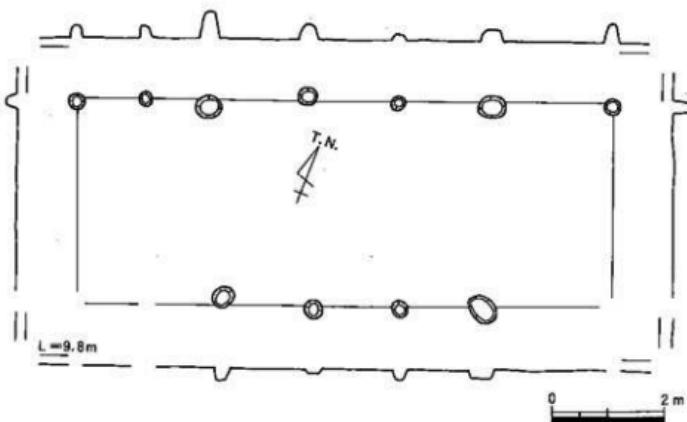
### 土坑

#### S K01A (第345図)

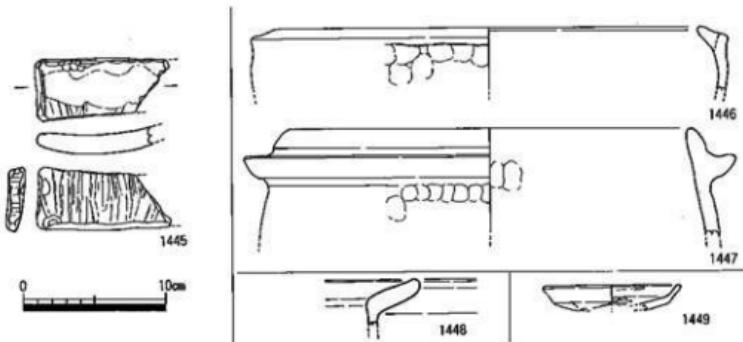
F 22に位置する方形に近い土坑である。中から須恵器・土師器片が少量出土した。埋土色から、中世以降の遺構と判断した。

#### S K16 (第13・346図)

D 21に位置する。北側は調査域外に出る。土層断面は調査域土層図(9)でも示している。方形に近い土坑である。1450は注ぎ口のついた土師質のすり鉢である。1451は土師質焙烙である。他に少量の土器片やサヌカイト片が出土している。1451から、SK16を18世紀の遺構と考える。



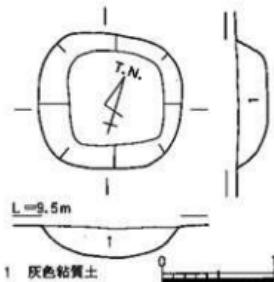
第343図 S B135平・断面図 (1/100)



第344図 柱穴出土遺物実測図(4) (1 / 4)

S X 06 (第13・347図)

S K16の東に接する。不定形の浅い土坑である。S K16より古い。1452は和泉型の瓦器碗である。1453は土師器小皿である。他に少量の土器片が出土している。出土土器から、13世紀の遺構と考える。



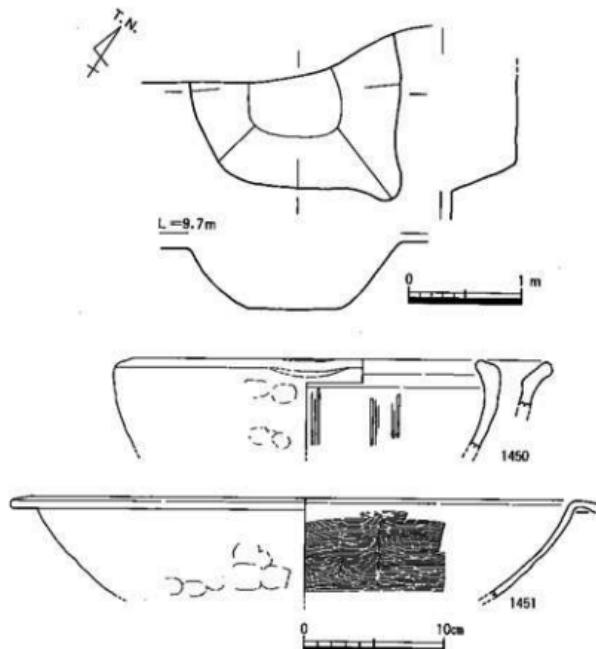
溝状遺構

1 灰色粘質土 0 1 m S D 001A・002A (第348図)

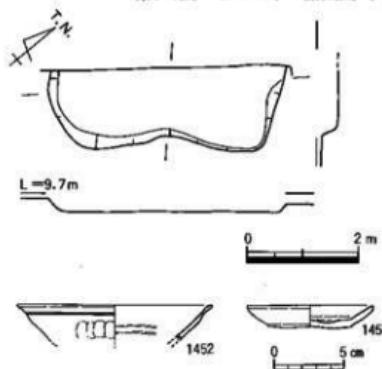
第345図 S K01A平・断面図 (1 / 50) 調査域北東隅に位置する。S D 001AがS D 002Aよりも新しいが、方向を同じくすることから、同一の溝の時期による位置・幅のずれと見ることもできる。溝方位はN 26° Wを向き、調査時の市道とほぼ重なる。北側のⅢ区にはこの延長は見られない。1454・1457はS D 001A、1456はS D 002A、1455はS D 002Cから出土した。1454は竈の鉢である。1455は土鍋である。1456は亀山焼甕である。1457は土釜足である。他にも土器片が出土している。出土土器から、S D 002Aを14世紀以降、S D 001Aを更にそれより新しいと考える。

S D 003A (第349図)

調査域北東部に位置する。調査域に沿って東西に延び、中央付近で北に曲がるのか消えている。Ⅲ区とⅣ区の境には調査前には主要水路が存在し、これとほぼ重なることから、この水路の前身と思われる。Ⅲ区でS D 003Aの続きを探すと、同時期の2④⑤S D 01があ



第346図 SK 16平・断面図(1/50)、出土遺物実測図(1/4)

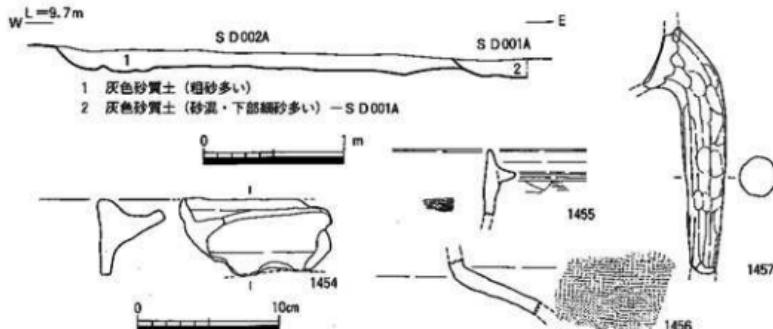


第347図 SX 06平・断面図(1/100)、出土遺物実測図(1/4)

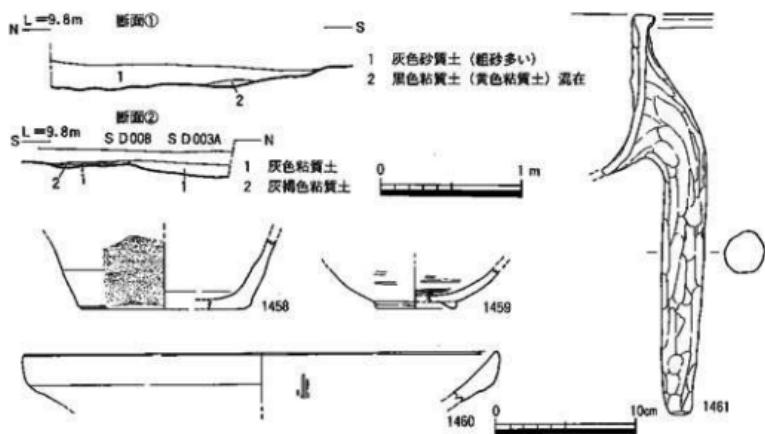
る。埋土に差のなかった S D 001A・002Aも同一の溝とすれば、クランク状に続く大溝が出来上がる。溝の幅が明らかでないが、S D 001A・002AとⅢ区 2④⑤ S D 01は約62m離れている。

コンテナ半箱の土器片が出土した。1458は須恵器壺である。1459は西村遺跡産と思われる瓦質土器碗である。内外面回転ヘラ磨きを行う。1460は瓦質すり鉢である。1461は土釜で外面に煤が付着している。

出土土器から、S D 003Aを15世紀頃の遺



第348図 S D001A・S D002A断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4), S D002C出土遺物実測図(1/4)



第349図 S D003A断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

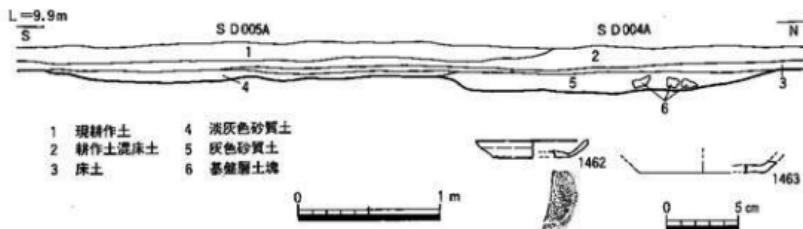
構と考える。

#### S D004A (第350図)

E/F21に位置する。幅広で短い溝である。S D005Aより古い。少量の土器片が出土している。1462は土器小皿で底部は静止糸切りである。1463は須恵器杯である。S D004Aは、1462から13世紀以降の溝と考える。

#### S D005A (第350図)

S D004Aの南に接する。S D004A同様幅広で短く浅い溝である。S D004Aとの関係から、



第350図 SD004A, SD005A断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

13世紀以降の溝である。

#### S D 008 (第269図)

調査域北端伝いにN63°Eの向きに直線で掘削され、西はSD012に合流する。東はSD003Aに接続される。多くの弥生土器片に混じて須恵器・土師器片が出土しているが、図化出来るものではなく、時期もわからない。

#### S D 009/013 (第269図)

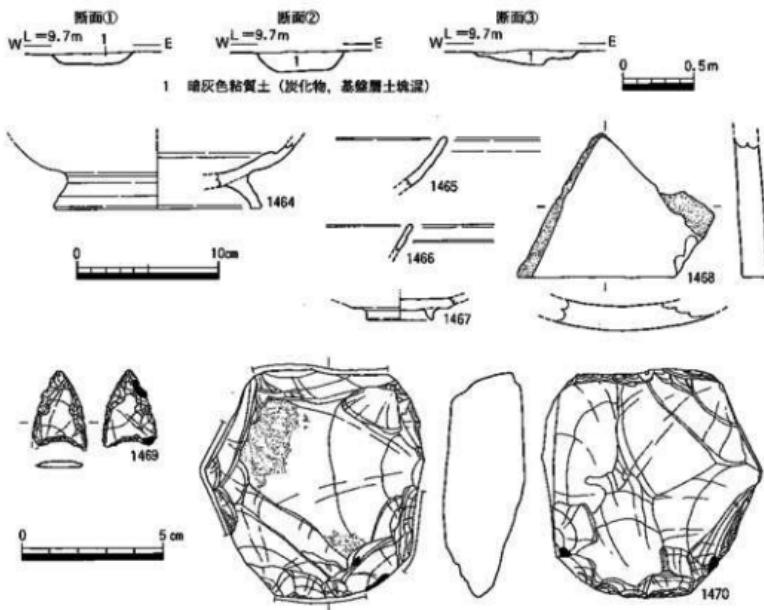
E22に位置する。SD009はN63°Eの向きに直線で掘削され、西で南に直角に折れSD013となる。SD010より新しく、SD014とは共に浅いため新旧関係はわからなかった。出土土器は比較的多いが、図化出来るほどのものではなく、高台の低い土師器碗が少量含まれていた。向き・溝の形状が似ていることからSD008と同時期であるとすれば、両者の距離(32.8m)は1町の3/10(109m×0.3)に極めて近い値を示す。

#### S D 012 (第351図)

D21/22・E22/23に位置する。N24°Wの向きで、一直線に伸びる。北はSD003Aの下に潜り、これより古い。SD027との新旧関係は明らかでない。南はSD015に合流する。1464は須恵器壺である。1465は瓦器碗である。1466・1467は土師器碗である。1468は須恵質の瓦である。1469は石錐である。1470は楔形石器である。左面に自然面が残る。上には打撃による潰れ、下には繰り返しての使用による潰れが認められる。1465から、SD012は13世紀以降の溝と考える。

#### S D 014

E22/23に位置する浅い溝である。N64°Eの方向を向いている。中からは土師器や須恵器片が出土している。溝の形状や方向、SD015との距離(10.8m)が1町の1/10(109m×0.1)に近い値を示すこと等から、中世の造構であろうと判断した。



第351図 SD012断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

#### SD015 (第352図)

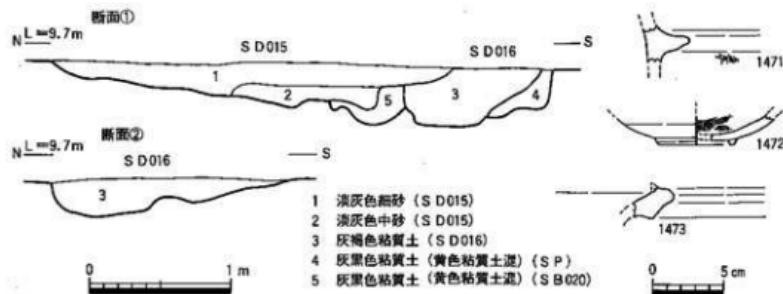
D/E23に位置する。SD016より新しく、SD012と直角に合流する。N60°Eの方向を向いている。1471は土釜の鉢である。他に土器片等が少量出土している。

#### SD016 (第352図)

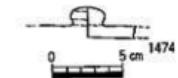
SD015の南に接し、それより古い。N61°Eの方向を向いている。比較的多くの土器片が出土した。1472は土師器碗である。1473は備前焼のすり鉢である。傾きはわからない。他に瓦器碗や磁器小片も出土している。15世紀頃の遺構と考える。

#### SD017 (第353図)

E23に位置する。幅1m前後・深さ10cmの広くて浅い溝である。SD059より新しく、SD022より古い。1474は須恵器蓋である。他に弥生時代中期の土器や須恵器片が少量出土している。図化していないが瓦器の小片が1つ含まれることから、13世紀以降の溝と考える。

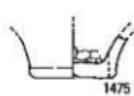


第352図 S D015, S D016断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)



第353図 S D017

出土遺物実測図 (1/4)



第354図 S D043出土遺物実測図 (1/4)



### S D018

E 23に位置する。深さ10cm弱の溝である。平面形はS D010に合流するように見える。また南延長上にはS D019があり、形状からも両者が同一の溝である可能性が残る。出土遺物はなく、時期不明である。

### S D019

E 23に位置する。深さ10cm弱の溝である。S B018より新しい。遺物の出土はない。S D018と同一の溝の可能性がある。

### S D020

E 23のS D019南端から直角に西に折れるような位置にある。深さ10cm弱で、弥生土器や土師器の小片が数点出土したのみである。

### S D022

E 23に位置する。深さ10cm弱で、土師器が数片出土した。溝の向きがS D016の向きに近い。S D017より新しいことから中世以降の溝と考える。

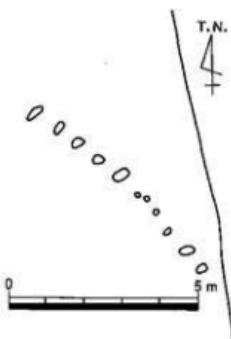
### S D024 (第298図)

D 22に位置する。N 24° Wを向く浅い溝である。S B092・093より新しい。須恵器や土

師器片が少量出土している。埋土の色から中世の溝と考える。

#### S D 043 (第354図)

C22に位置する。細くて浅い溝である。土器片が少量出土した。1475は弥生土器壺である。底部外面より穿孔途中で、未貫通のまま焼成している。1476は和泉型の瓦器碗である。出土土器から13世紀頃の溝と考える。



第355図 S X05平面図 (1/150)

#### その他の遺構

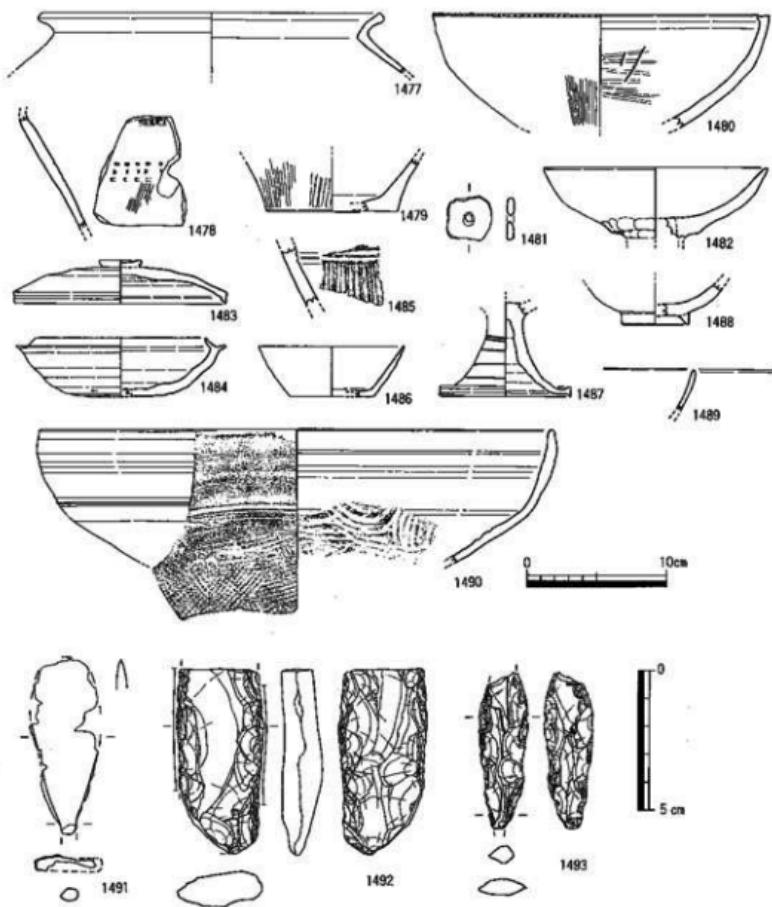
#### S X05 (第355図)

F23に位置する。小さく浅い穴が10個ほど並んでいる。灰色の埋土色から、中世以降のものと判断した。Ⅲ区でも同様の遺構が大規模に検出されており、作物の抜き取り痕かと考える。

#### 5 包含層出土の遺物 (第356図～第393図)

IV区では基本的に現耕作土の下で遺構を検出しているため、微高地部分にあたるA・E区での包含層出土遺物は少ない。それに対し、C・D区では低地部に弥生後期から中世にかけて層状に堆積した包含層内から、遺物が出土している。またB・F区では微高地の落ち部分から大量の弥生時代の土器・石器が出土しており、両者だけでもコンテナ300箱に達する。の中には完形もしくはそれに近い土器が多く存在し、単に包含層内に偶然含まれていたというよりは、捨てられたと見た方がよい。その意味で、それらは一括性が高く、遺構出土土器に準ずる扱いをすることができるであろう。

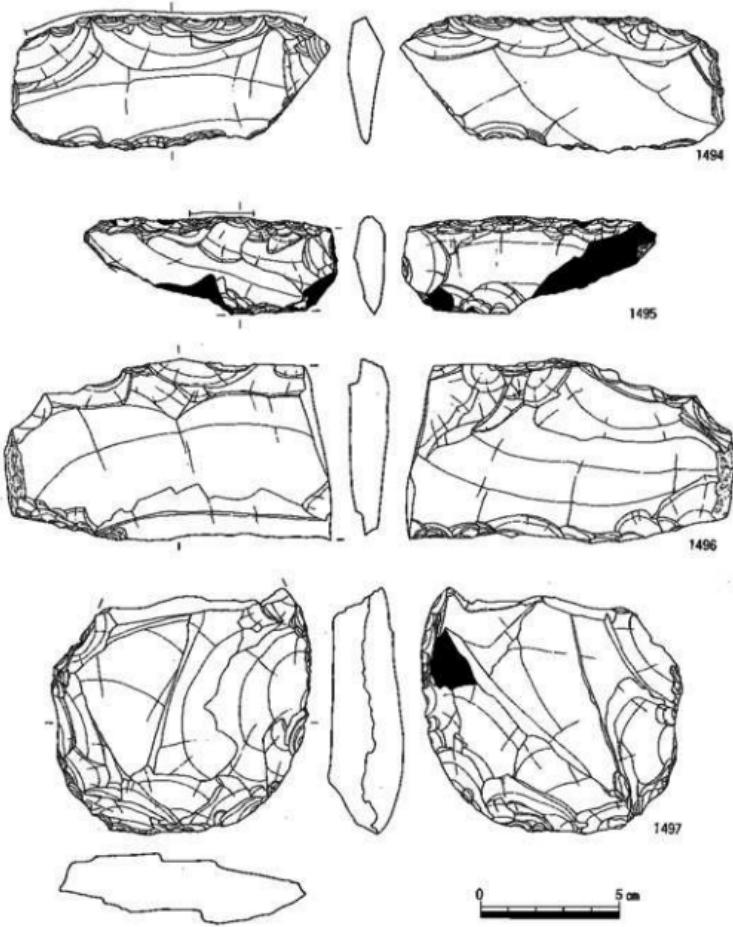
1477～1497はA区出土である。1477～1480は弥生時代Ⅲ期の土器である。1478は竹管刺突文を三段並べている。1482は6世紀頃の土師器高杯と思われる。1483～1488・1490は古代の土器である。1484は底部を回転ヘラ削りしている。1485は横方向の太い2本の沈線の下に、縦に太い沈線を連続させるものである。1489は瓦質土器碗である。外面から内面口縁にかけて炭素を吸着させている。1491は鉄鎌である。1492は打製石斧と判断した。1493



第356図 A区包含層出土遺物実測図(1) (1/4, 1/2)

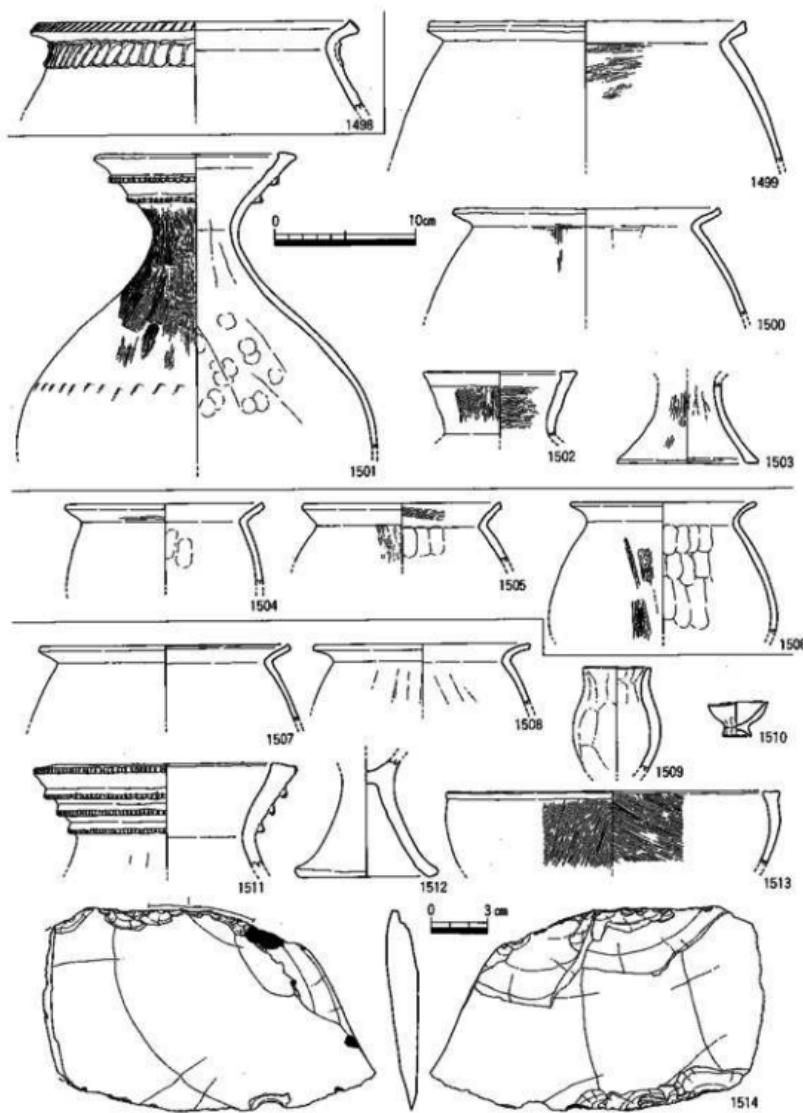
は石錐である。1494・1496は石包丁で、1494は両側の抉りがほとんどない。1496は未製品であろう。1495は石錐と判断した。1497は打製石斧で、刃部が少し磨滅している。

1498～1629はB区出土である。F24～26西側を最深部として浅い低地が南北に抜けている。この上に堆積した土から遺物が多く出土している。1498～1503はこの低地直上に堆積した薄い層内から出土した。弥生時代Ⅲ期前半に属する。1498は口縁に刻み目、頸部に刻

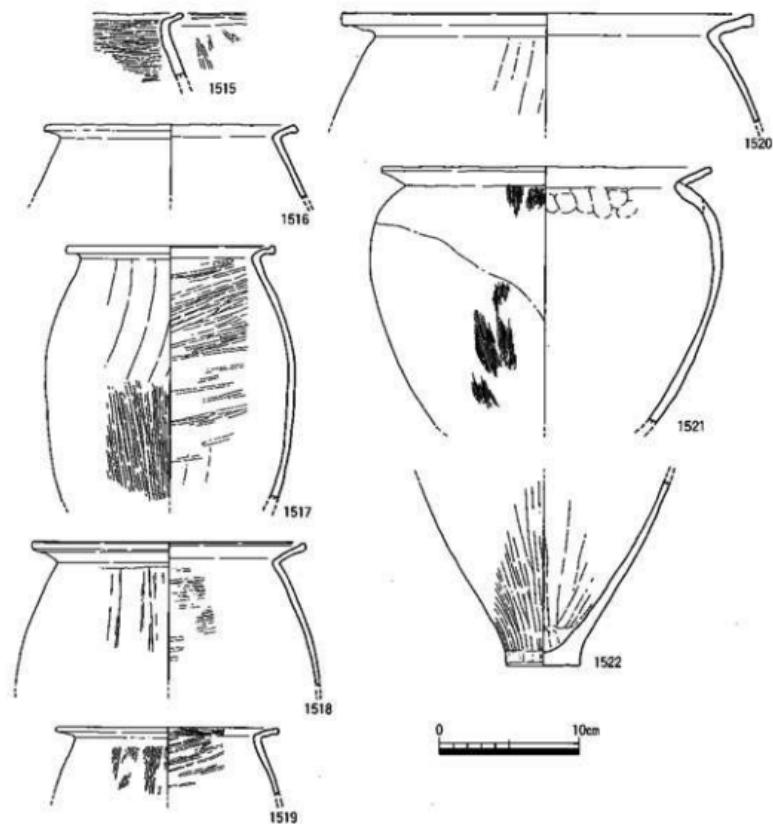


第357図 A区包含層出土遺物実測図(2) (1/2)

み目突帯を付けている。1504～1514はその上の薄い層から出土した。弥生時代Ⅲ期の土器が混じるものの中の主体は弥生時代終末期である。1515～1552はE24付近を中心として、弥生時代中期包含層という層位名で取り上げた遺物群である。これらもⅢ期前半に属する。1515はⅡ期に遡る可能性がある。1521は肩部の張りが強い。1523は口縁に刻み目と竹管刺突文

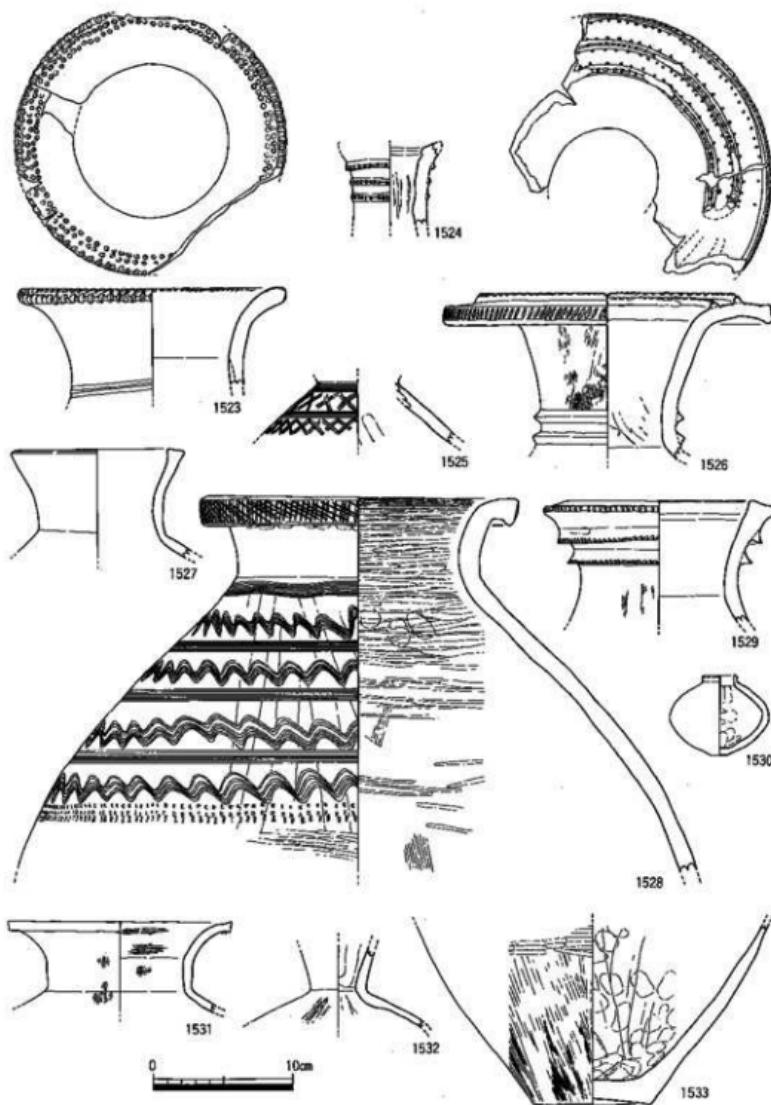


第358図 B区包含層出土遺物実測図(1) (1/4, 1/3)

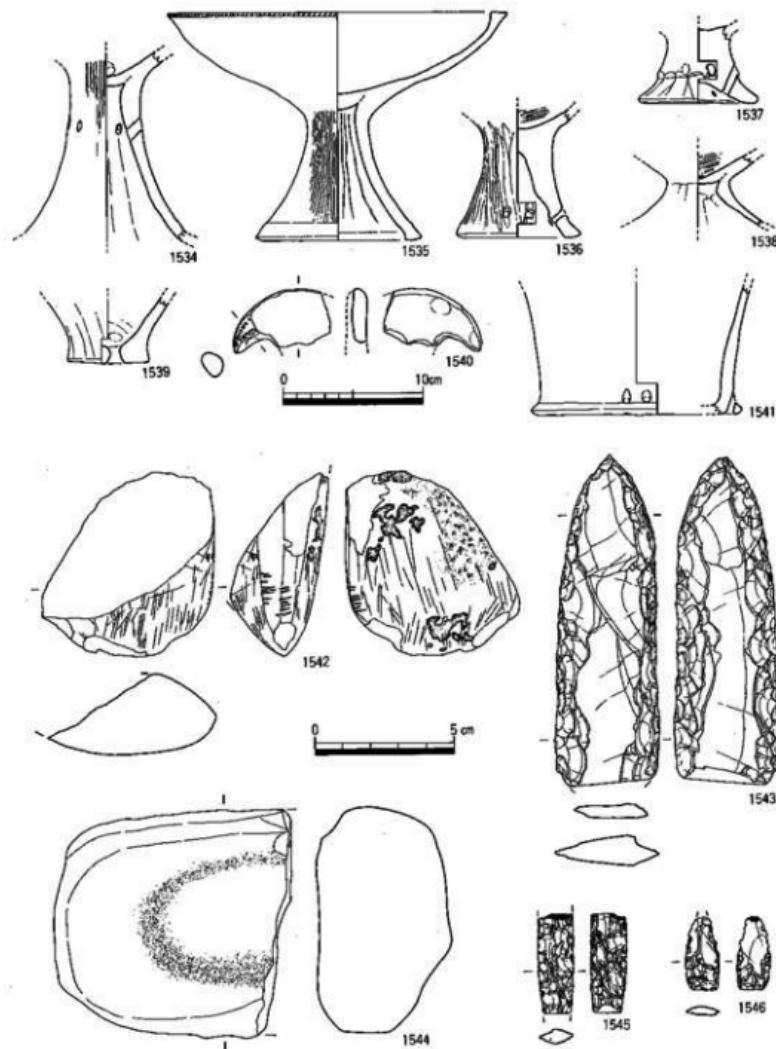


第359図 B区包含層出土遺物実測図(2) (1/4)

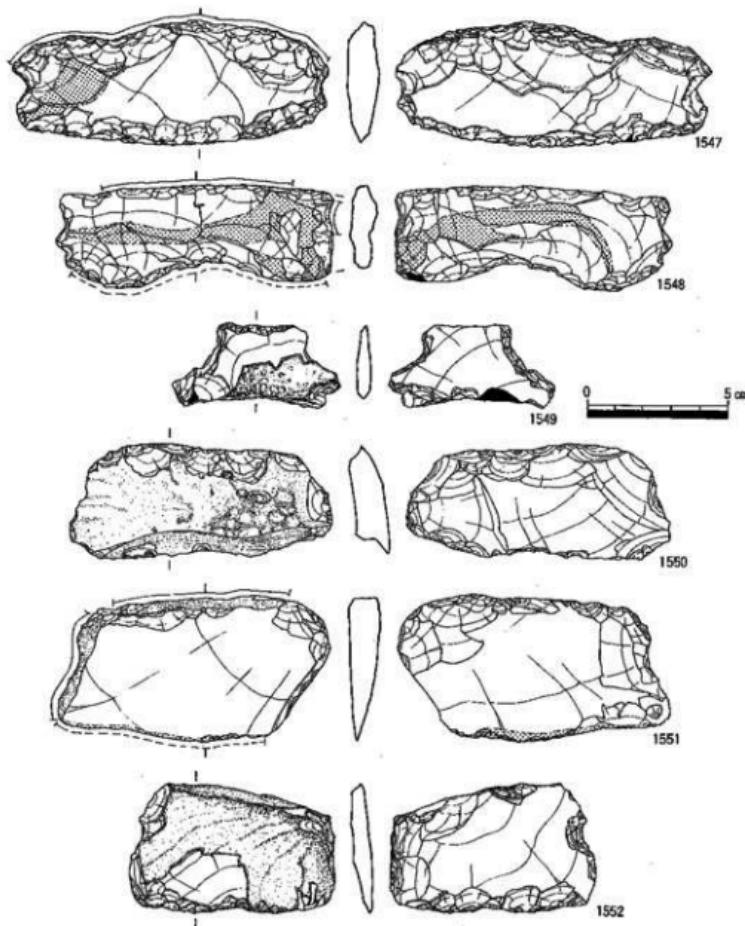
を施す。1524は細い直口壺である。1526口縁内面に貼り付けた凸帯は水をうまく注げるよう途中に切れ目がある。1528体部文様の最下部は半切竹管刺突文である。1531・1532は弥生時代後期土器の紛れ込みであろうか。1537は脚内が中空にならず、裾は指で押さえて広げている。1540は分銅型土製品である。明瞭な刺突文の内側に直線文があるようにも見える。1541はバケツ状の鉢で裾を穿孔している。1542は磨製大型蛤刀石斧で両平面に擦痕が多数残る。他に側縁部には太い平行の傷が擦痕と直角方向に残る。1543は石槍状石器である。1544は石皿で片面がわずかに窪む程度である。1547～1552は石包丁である。1548は刃



第360図 B区包含層出土遺物実測図(3) (1 / 4)

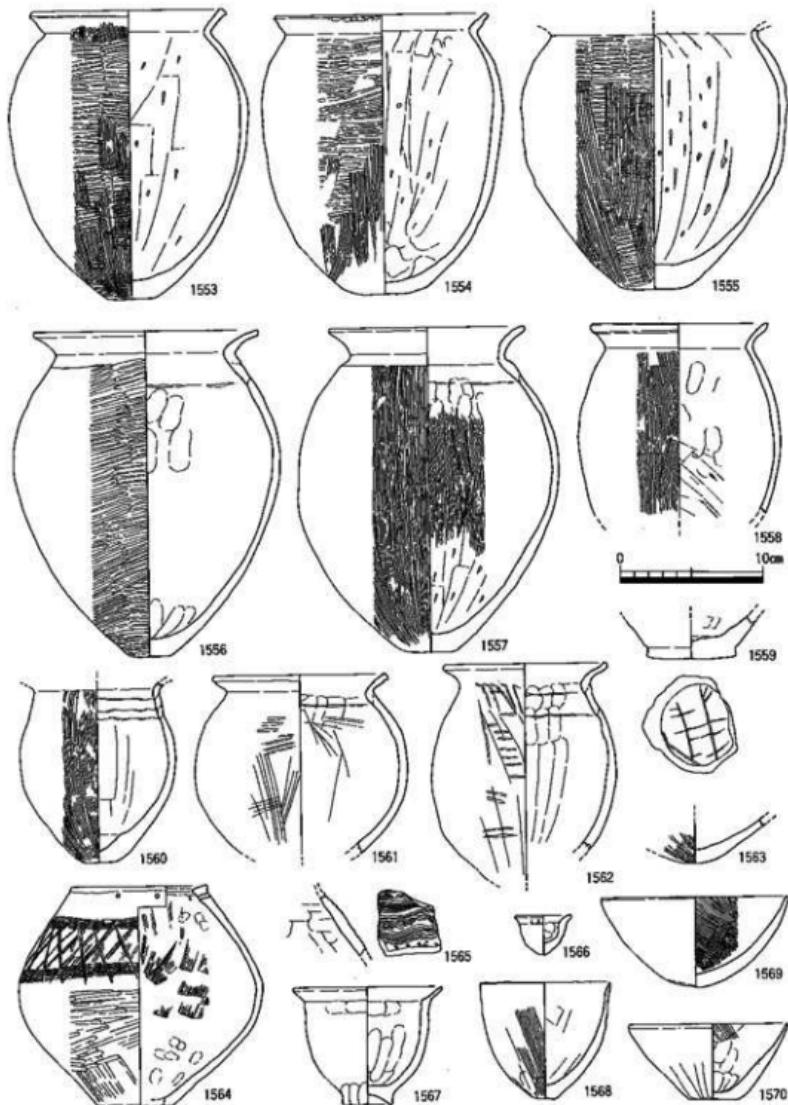


第361図 B区包含層出土遺物実測図(4) (1/4, 1/2)

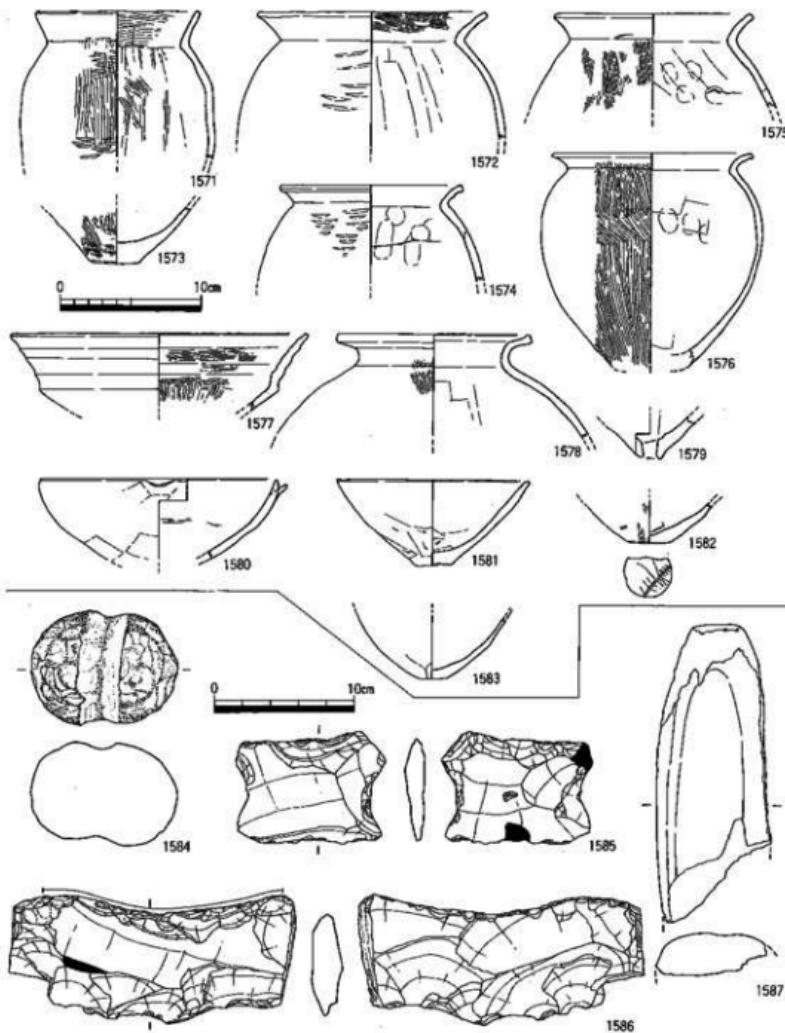


第362図 B区包含層出土遺物実測図(5) (1/2)

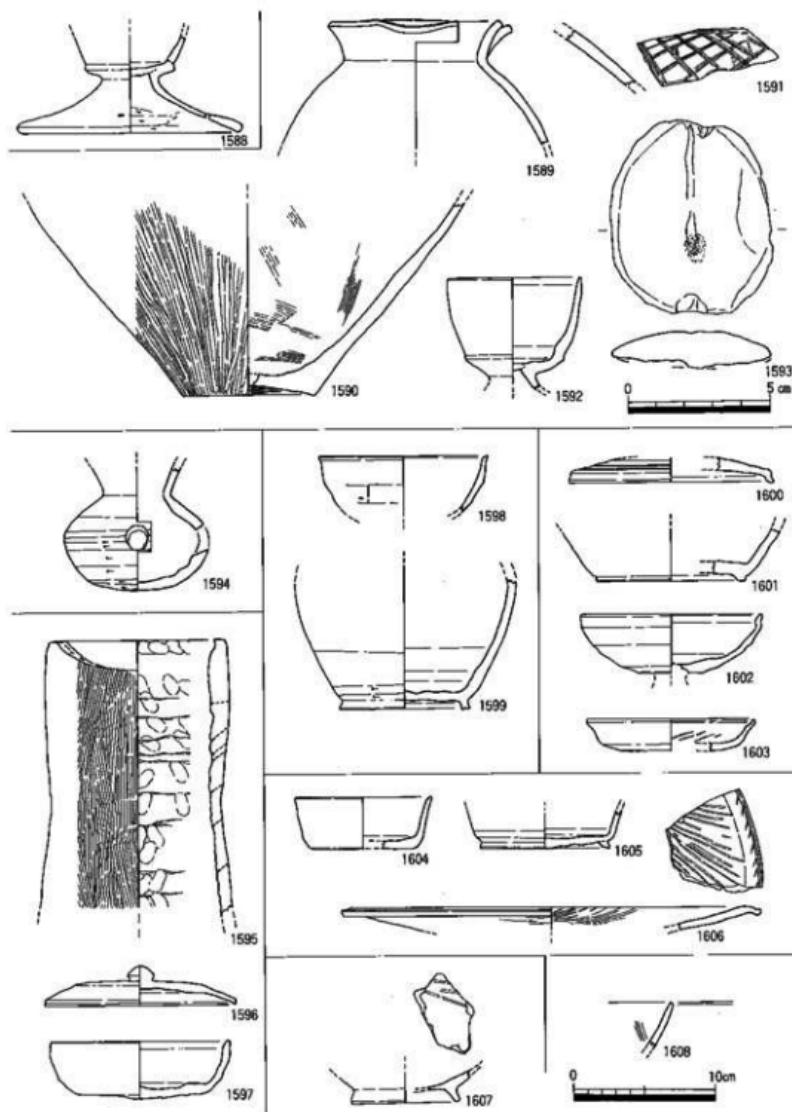
部が大きく抉れる。1549は小型品である。1550は未製品であろうか。1553～1570・1584～1588は1515～1552と同じ地点の上層から、弥生後期包含層という層位名で取り上げた。一部中期のものが混じるが、完形のものが多く、終末期－1頃の投棄一括品と見てよい。1557は頸部を強く横ナデしている。1559は底に植物の葉の圧痕が残る。1562は叩き後に胴



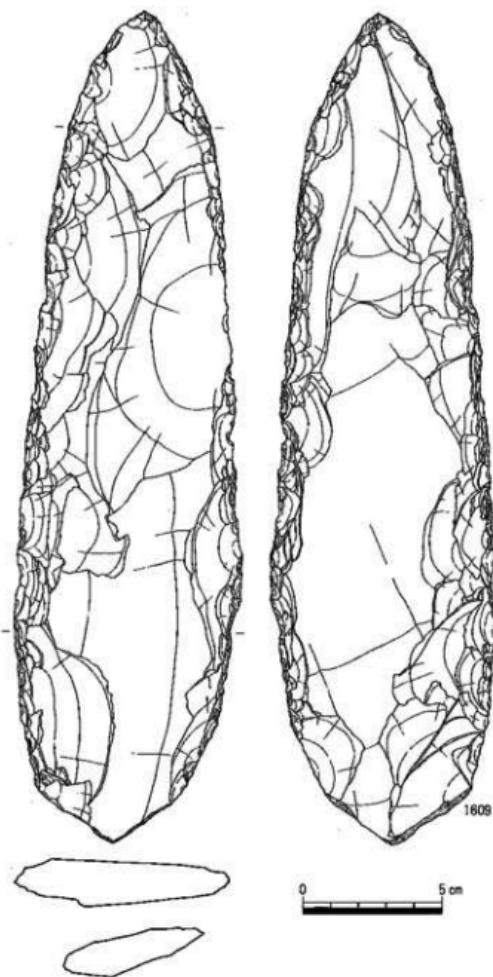
第363図 B区包含層出土遺物実測図(6) (1 / 4)



第364図 B区包含層出土遺物実測図(7) (1/4, 1/2)

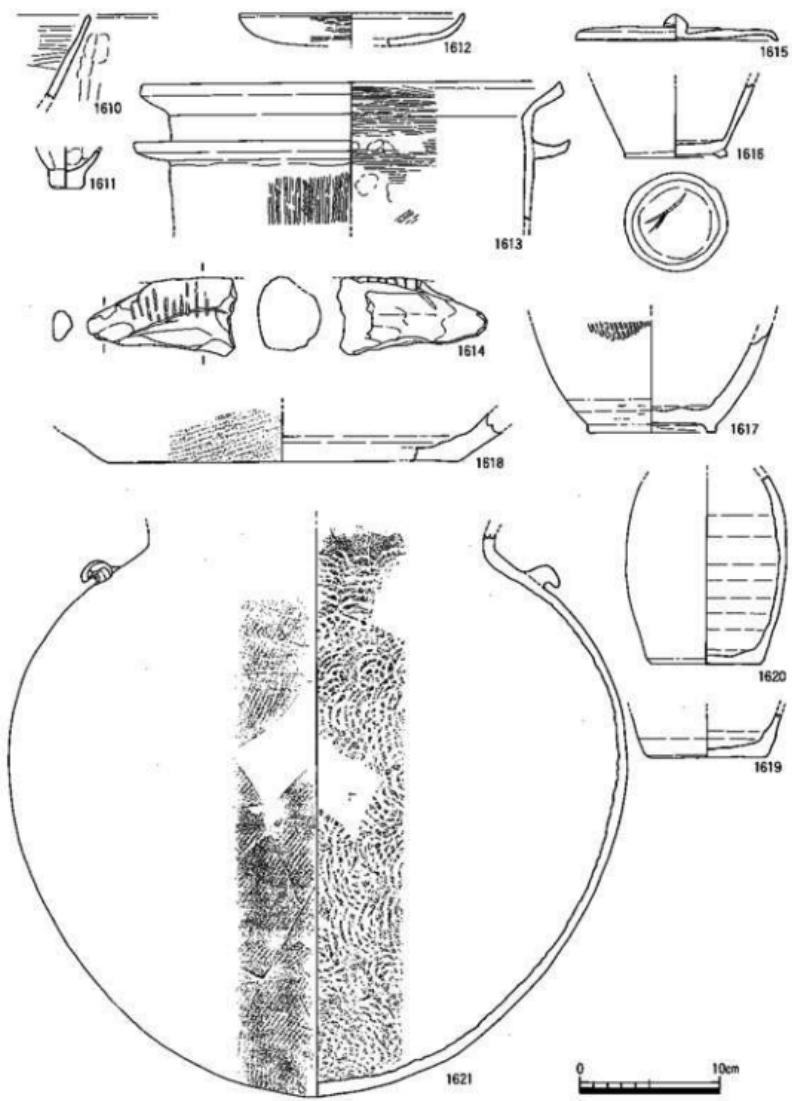


第365図 B区包含層出土遺物実測図(8) (1/4, 1/2)

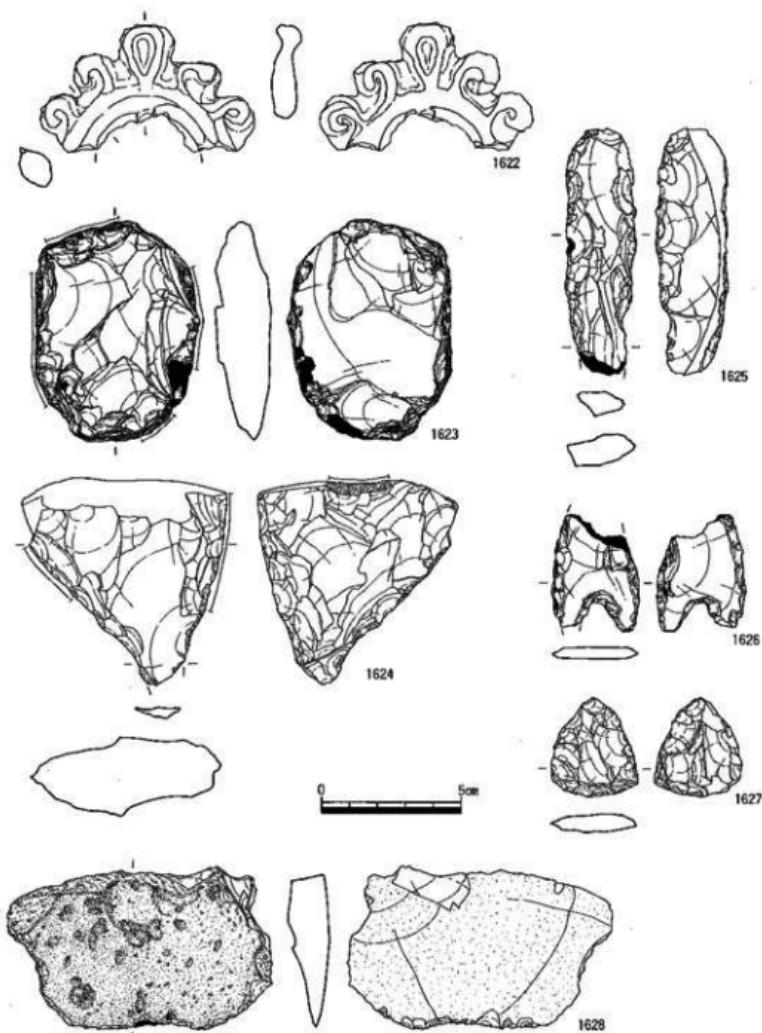


第366図 B区包含層出土遺物実測図(9) (1/2)

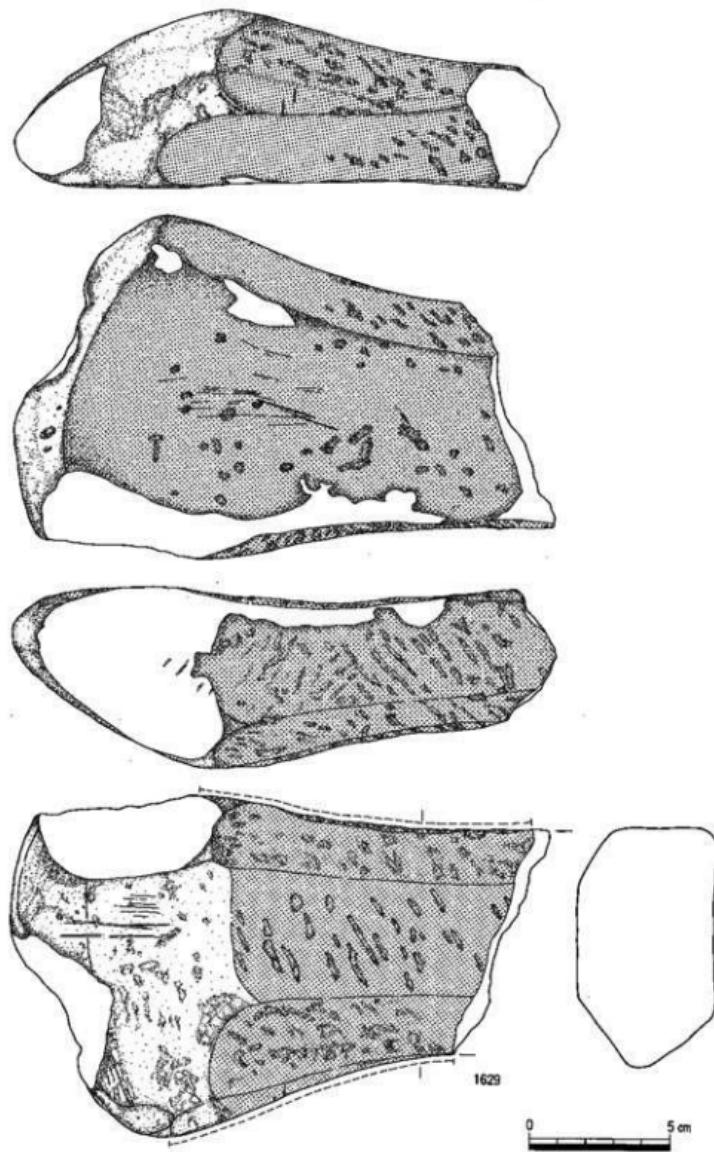
下半は板の平たい面でなで、上半は板木口の狭い面でなでる。1563は内面に朱が付着している。1570は外面底をヘラ削りしている。1584は石錐である。1585は小型の石包丁、1586は石包丁の未製品であろう。1587は磨製柱状片刃石斧の側縁部の破片である。1571～1583は1504～1514出土層の上層から取り上げた。これらも弥生時代終末期～1頃のものである。1580は注ぎ口が付き、内面に朱が付着している。1583は底に植物の葉の圧痕が残る。1589～1593は弥生包含層名で取り上げた。1589は注ぎ口のつく甕である。1591は頸部付近に4条以上の平行沈線を引き、その下に2本1組の沈線による斜格子文を描く。1593はわずかに加工しただけの石錐である。1594は1571～1583の上層で出土した。1598・1599・1609はその上の層出土である。1609は混入の弥生時代の石槍状石器である。あまり類例を見ない極めて大きいものである。1595～1597・1600～1606はさらにその上の



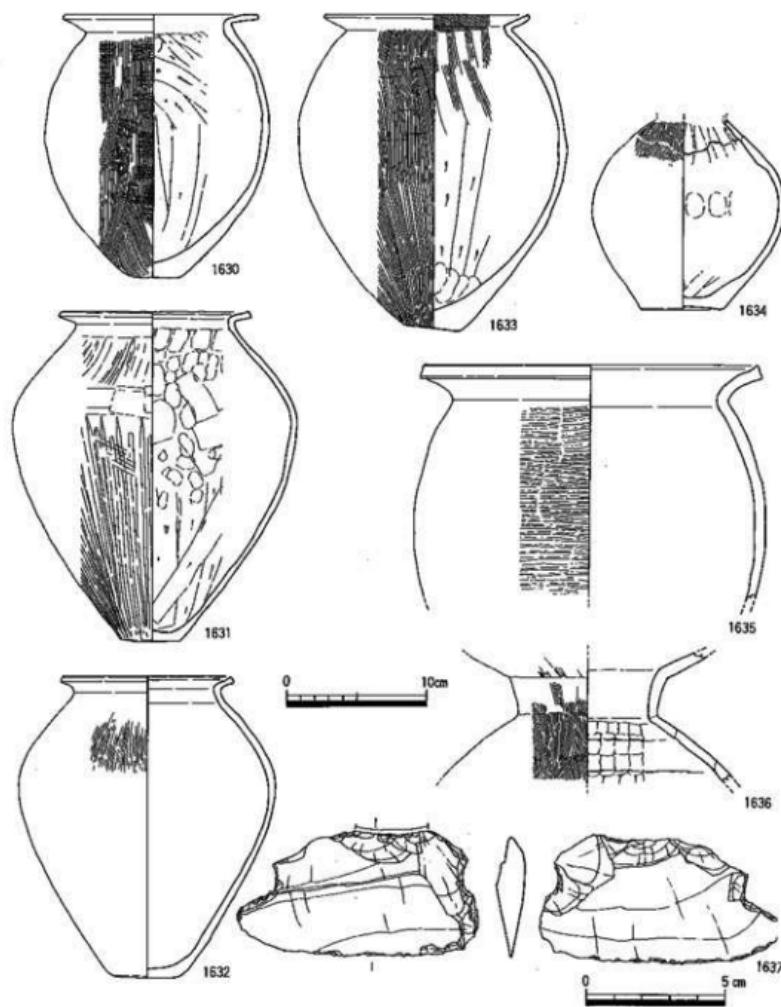
第367図 B区包含層出土遺物実測図(1) (1 / 4)



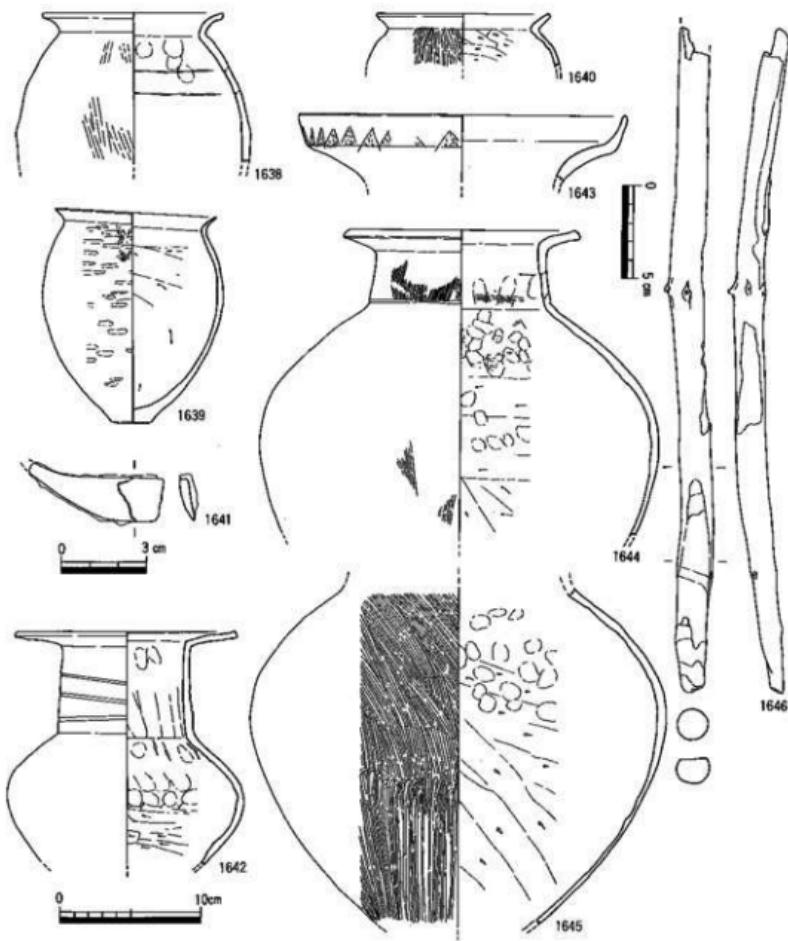
第368図 B区包含層出土遺物実測図(1/2)



第369図 B区包含層出土遺物実測図(1/2)

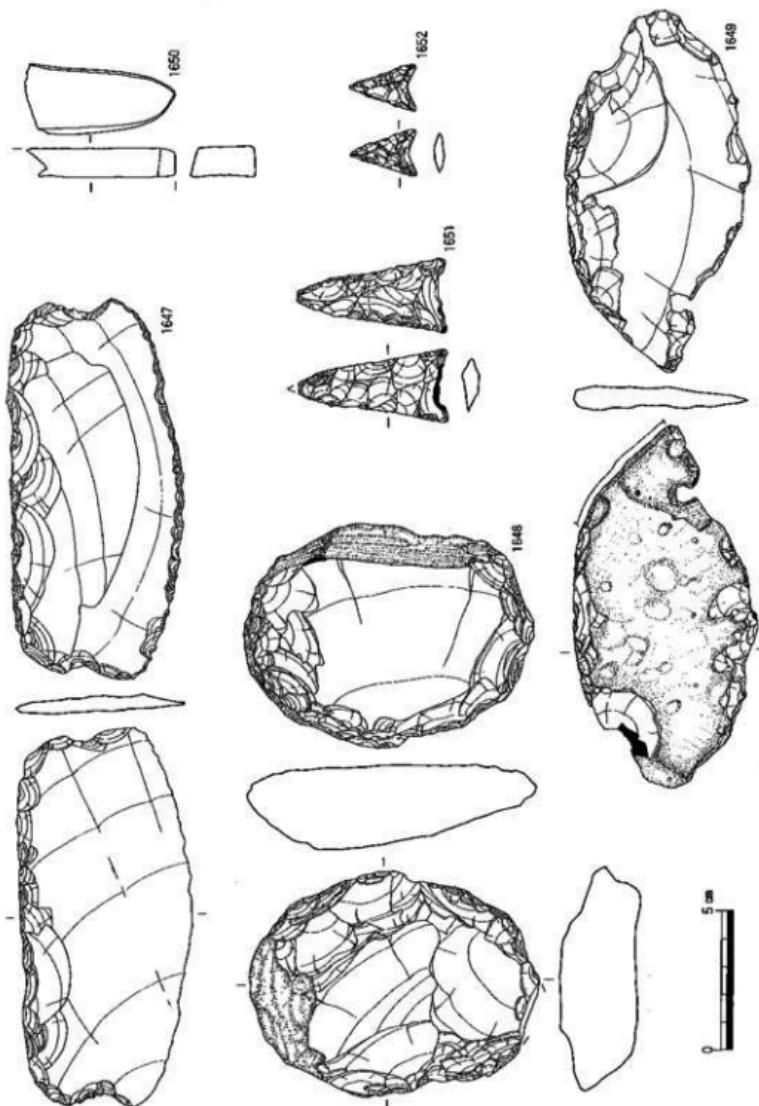


第370図 C・D区包含層出土遺物実測図(1) (1/4, 1/2)

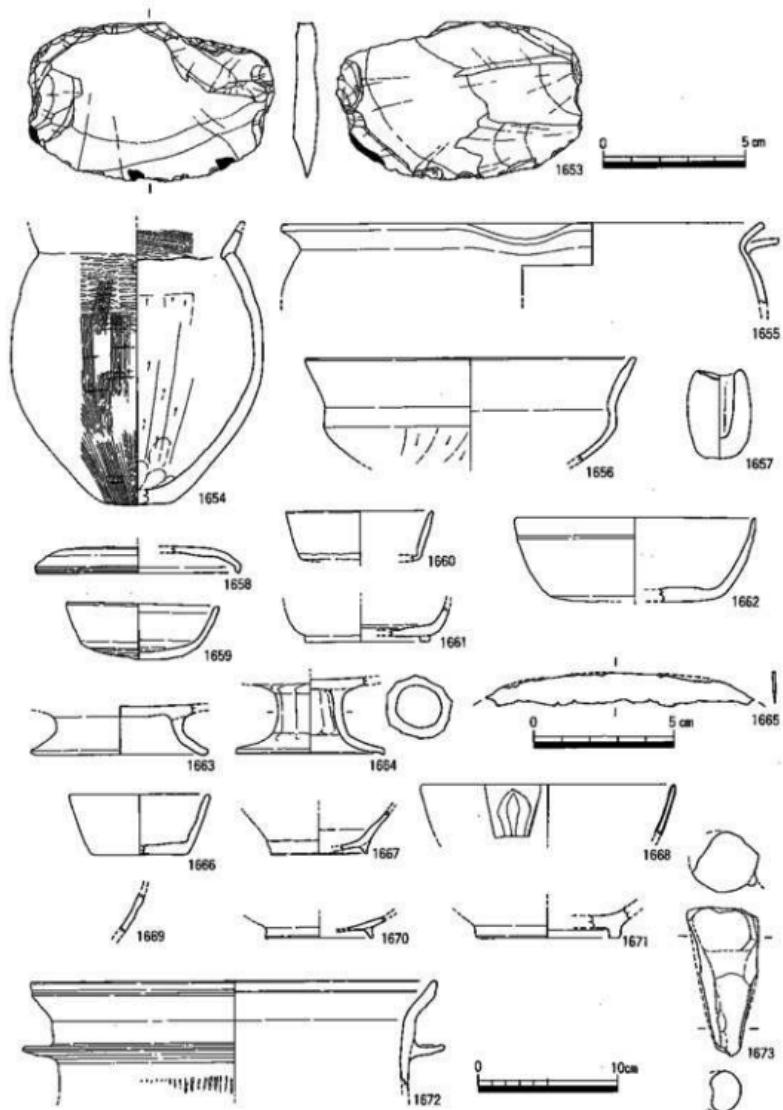


第371図 C・D区包含層出土遺物実測図(2)(1/4, 1/2, 1/3)

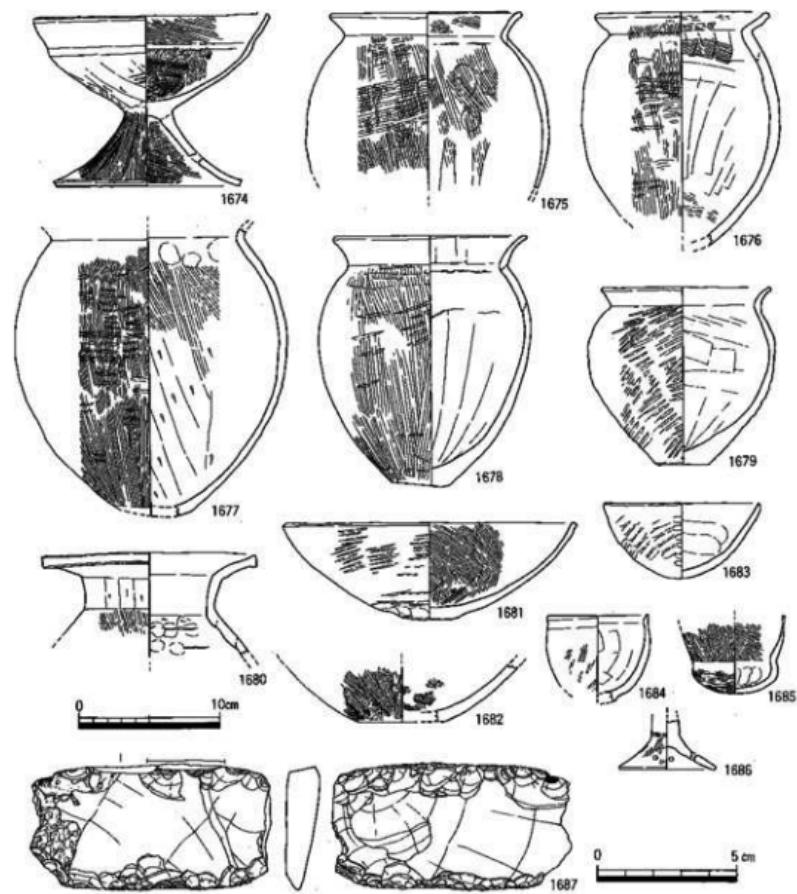
層出土である。1595は土管状で、口縁の半分近くを半円状に削っている。内面に粘土の継ぎ目が多数残る。用途不明である。1597は粘土紐を巻いて底部を形成した痕跡が外間に残る。1603は内外面に赤色顔料を塗っている。1606は高杯で、外面に赤色顔料を塗っている。ここまでが、7～8世紀に対応する層であろう。1607は1600～1606等の上層で出土した黒



第372図 C·D区包含層出土遺物実測図(3) (1/2)



第373図 C・D区包含層出土遺物実測図(4) (1/2, 1/4)



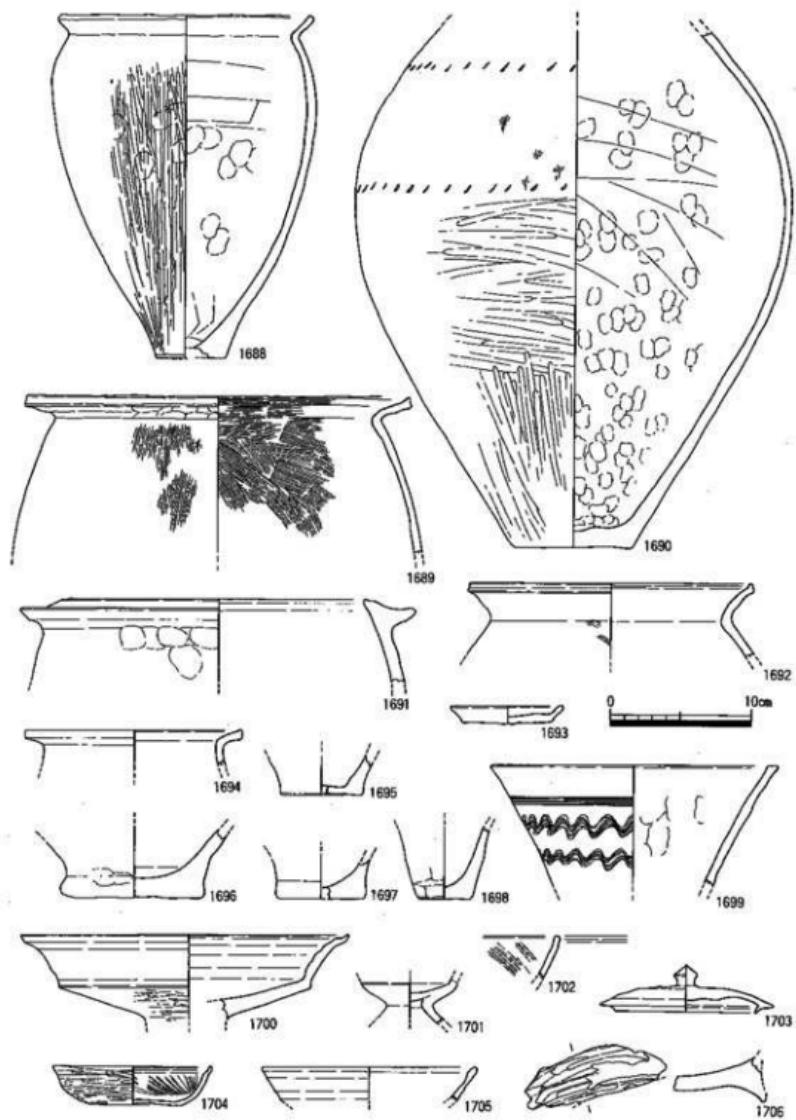
第374図 E区包含層出土遺物実測図(1) (1/4, 1/2)

色土器碗である。1608は最上層混入の弥生土器で内面に赤色顔料が付着している。1610～1621は対応する層を特定できない土器である。1610・1611は弥生土器で、1611は蓋の可能性もある。1612～1614は土師器である。1614は土馬の頭～首の部分で、両側にたてがみと手綱を沈線で表現していると思われる。頭部は尖るのみで表現されていない。1615～1621は須恵器である。1616は外面底にヘラ記号を書いている。1617は焼きの悪い須恵器か備前

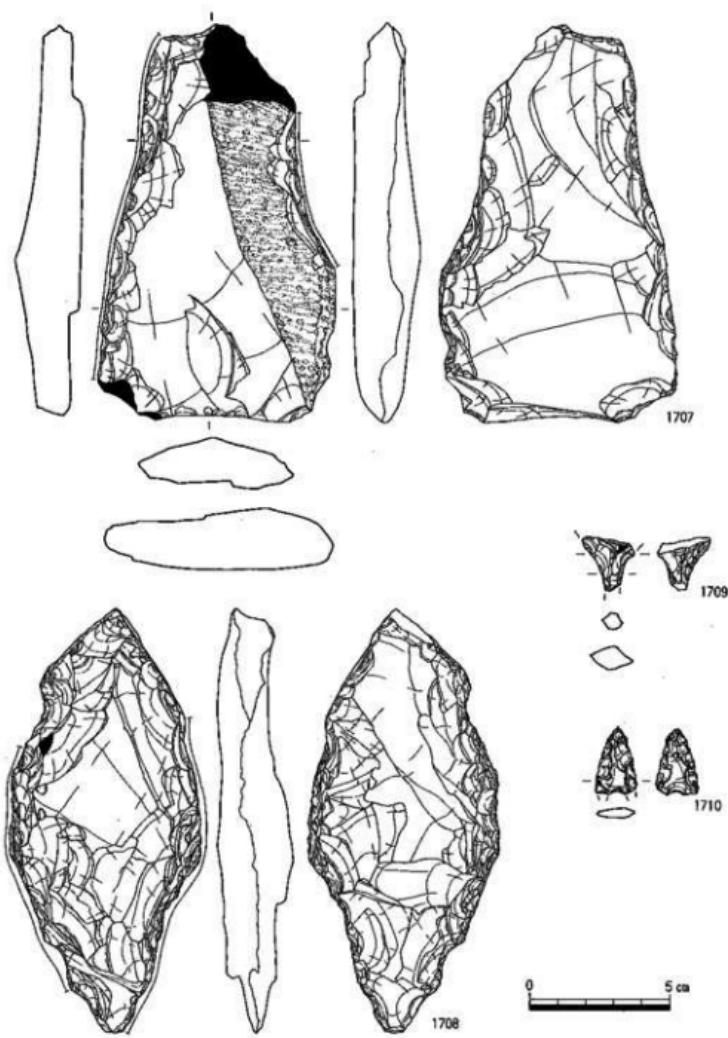
焼かと思われる。1621は肩に小さな取手がつく。傾きや径は確實でない。1622は1607と同じ層から出土した。銅製で、円環に逆三角形や蘇手状の突起が付き、円環内側にも棒が伸びていた形跡がある。鋳型を用いて作り、出来はよくない。仏具の錫杖の上部かと考える。1623～1628は紛れ込みで出土した弥生時代の石器である。1623は楔形石器と判断した。1624・1625は石錐であろう。1624は上面に著しい打撃痕が残る。1628は未製品か、或いは自然面を極度に利用した石包丁である。1629はピット出土品であるが、番号がわからない。恐らく古代のものであろう。研ぎ面は6面で、磨滅が著しい。また2面には彫りの深い細い研磨痕が残り、その他自然の窪みなのか、同方向を向く筋状の窪みが多数残る。

1630～1673はC・D区出土である。1630・1631・1633はF28の基盤層からの土坑状の窪みに完形で存在した。土坑としても集落から離れて位置する理由は不明である。1631は外側に、1633は内外側に煤が付着している。1632～1673はC・D区全体に広がる低地に層状に堆積した包含層内から出土した。1632・1634～1647は1571～1583に対応する層から出土した。1636は内側に粘土縁を重ねた痕跡が顯著に残る。1641は鉄製刀子で、切っ先が上に曲がる。1642頸部の沈線は1本の線を螺旋状に引いている。1643は緩やかに開く複合口縁で、簡略な三角連続文を描く。1645外側下半の磨きは1本の磨きの単位が上下で折り返す。1646は先端の片側のみ簡単に削った小さな杭状の木製品である。1647～1653は様々な層から出土した弥生時代或いはそれ以前の石器である。1648は楔形石器と判断した。1649は石包丁で、左面右下の抉りは元々疊面の凹みである。1650は磨製小型方柱状石斧である。1652は著しく風化する。1654～1673は様々な層から出土した弥生時代～古代の遺物である。1657は小さな湯飲み型の弥生時代終末期の鉢である。1658～1662・1666は須恵器である。1662は外側を粗く板ナデしている。1663・1664・1667・1670・1672・1673は土師器である。1665は極めて薄い鉄板で、地の上に銅をませた銀を鍍金しているように見える。何かの節り金具であろうか。1667・1668・1670と一緒に出土した。1668・1671は青磁である。1668は外側に蓮弁を意識したと思われる文様がある。1669は縁釉陶器である。1673は土馬の脚部で、外側上部に何かを貼り付けていたような剥離痕が残る。

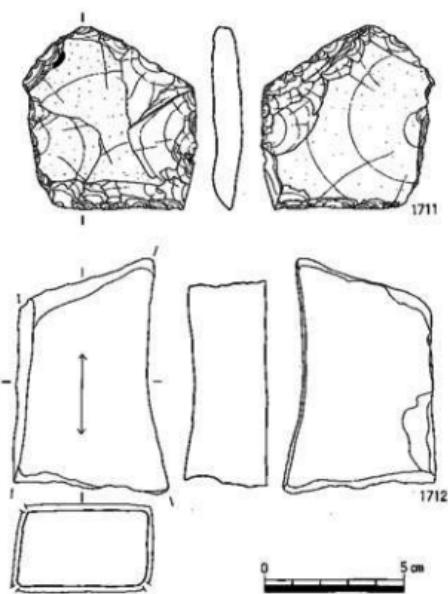
1674～1712はE区出土である。南西部にF区から続くS R01由来の急激な落ち込みが存在し、弥生時代終末期の土器がまとまって出土した。1674～1687がそれに該当し、1741～1781と同じ層から出土した。完形のものが多く、廃棄処分されたものであろう。1682は内側に朱が付着している。1686は柄部と鉢部の間に筒状部が存在する。1688～1690は1674～1687の下の層から出土した弥生時代Ⅲ期前半の土器である。1691～1693は現耕作土下に



第375図 E区包含層出土遺物実測図(2) (1 / 4)



第376図 E区包含層出土遺物実測図(3) (1/2)



第377図 E区包含層出土遺物実測図(4) (1/2)

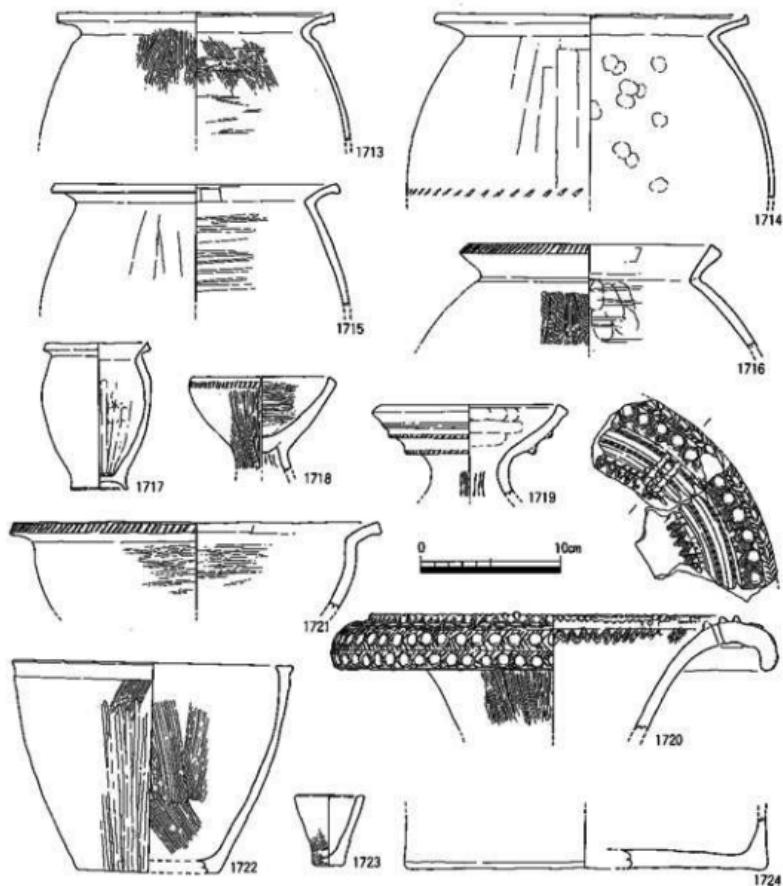
る。1712は4面を砥ぎ面に利用している。磨滅が著しい。

1713～1908はF区出土である。北西部でS R01由来の急激な落ち込みが存在し、弥生時代の土器が大量に出土している。以下見ていくが、ここでも完形近い土器の多数の存在から、B区低地同様廃棄処分されたもので、包含層としては比較的一括性が高いと判断している。B区に比べ、終末期頃の土器の占める比率が極端に高い。これはこの時期の集落がE区側に中心を持つことを反映している。またその中には赤色顔料が付着する土器片も多く、日常用の土器と一緒に捨てられていたことがわかる。

1713～1731はこの落ち込みの最深部に堆積した包含層中から出土したⅢ期前半の土器である。1717は小型の壺である。1718は脚付きの鉢ともいえる。1720は垂れ下がる口縁内面に櫛描波状文・刻み目突帯・穿孔・棒状貼り付け文・円形浮文・「く」字のヘラ圧痕文を過剰に装飾した壺である。施文順序は突帯を貼り付けた後、波状文・ヘラ圧痕文を施し、その後棒や円を貼り付けている。1722はバケツ型の鉢である。1724はその大型品であろう。1728は背部に碟面をそのまま利用している。1729は石槍状石器である。1731は上側のみ加

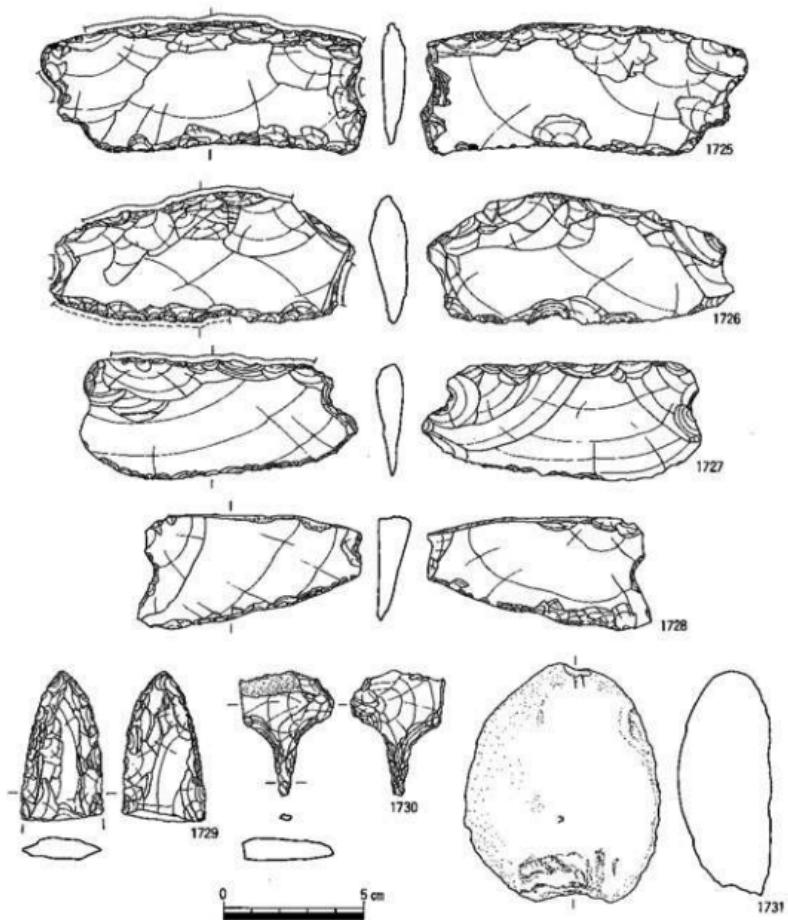
薄く残存した中世包含層出土の土器である。1694～1712も現耕作土下に残存した様々な地点の包含層出土である。1694～1702は弥生土器である。1698は蓋の可能性もある。1702は内面に朱が付着している。1703は須恵器である。1704～1706は土師器である。1704内面の放射状暗文は左上がりに引かれている。1706は竈焚き口左上部と考えた。1707は打製石斧で、全体に磨滅が著しく、刃部先端は横に大きく折れる。折れ面も磨滅していることから、その後も捨てずに使用したと思われる。1708は先端が尖るが両側面の抉りの存在から

石鉤としておく。1709は石錐である。



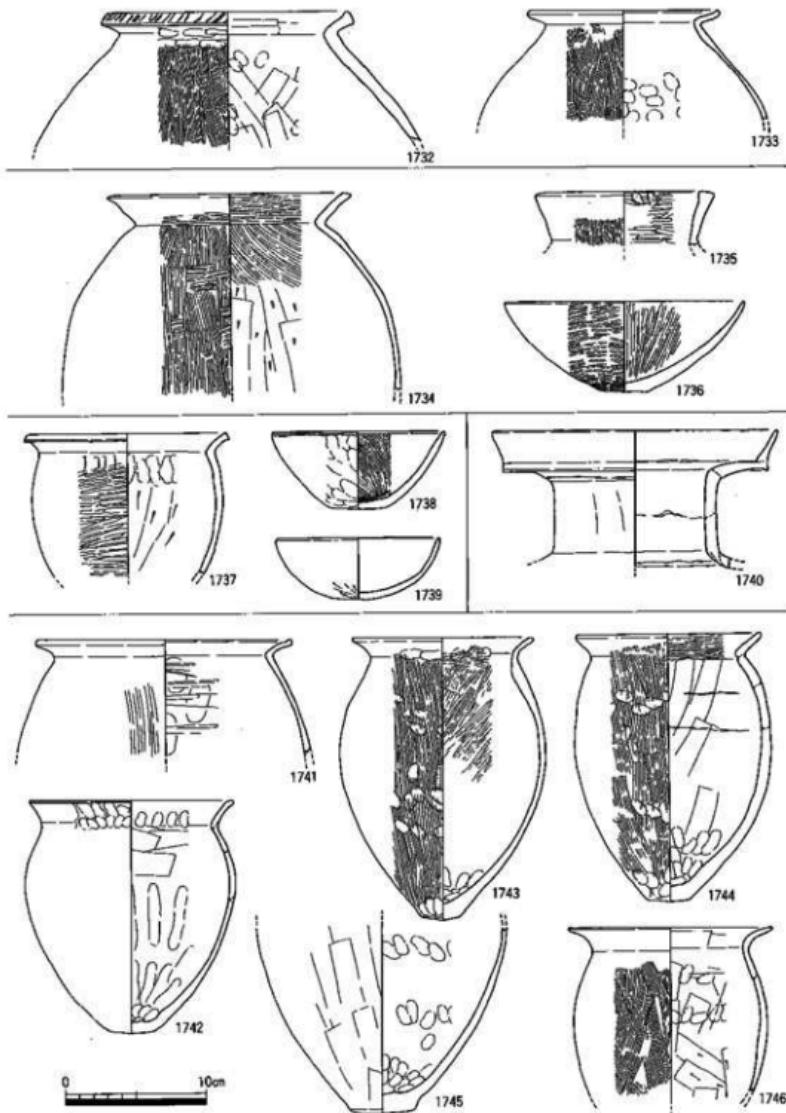
第378図 F区包含層出土遺物実測図(1) (1/4)

工してわずかに凹みを作り、下側は自然の欠損を利用した石鏃である。1732～1736は1713～1731の上の薄い層から出土した。Ⅲ期と終末期の土器が混在している。1737～1740はその上の層出土である。1740は高く上がる口縁拡張部に施文はない。1741～1781は1737～1740の上の層出土で、この層と次の層からの遺物の出土が特に多かった。1741はⅢ期の混入である。壺は外面の叩き目を基本的にハケ目で消す。内面はヘラ削りを行わないもの

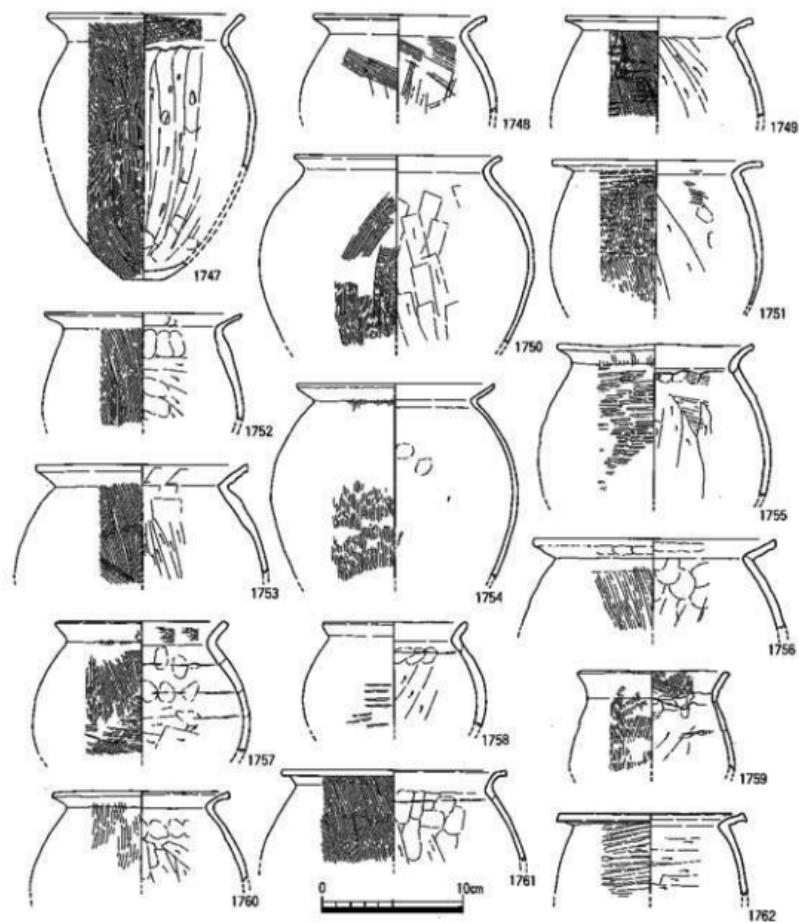


第379図 F区包含層出土遺物実測図(2) (1/2)

から、頸部まで全面行うものもあり、多様である。ヘラ削りは縦以外に横方向も存在する。1768・1769は下川津B類の壺である。1778は外面底に粘土紐を巻いたような成形の痕跡が残る。1781は風化が著しい。白斑が入るサヌカイトである。1782～1854は上述の土器を最も多く含んでいた2つの層から、分層せずに取り上げた。1782はⅢ期の混入である。胸中位の刺突文は左方向より刺して付けられている。1783は外面に煤らしきものが付着してい

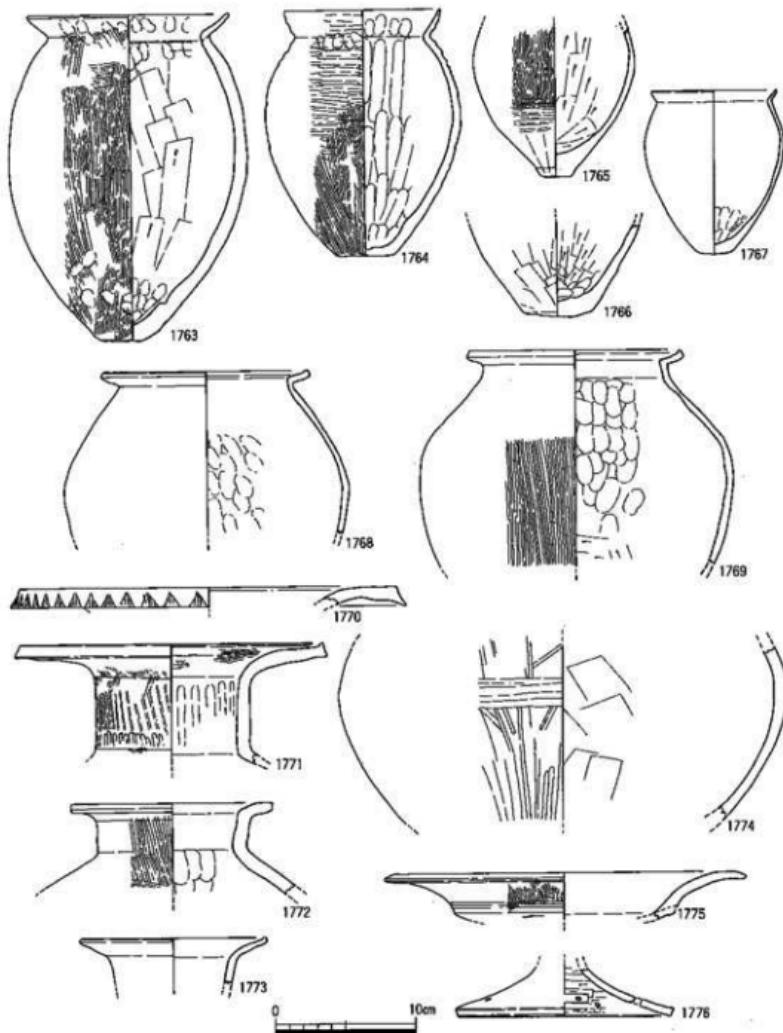


第380図 F区包含層出土遺物実測図(3) (1 / 4)



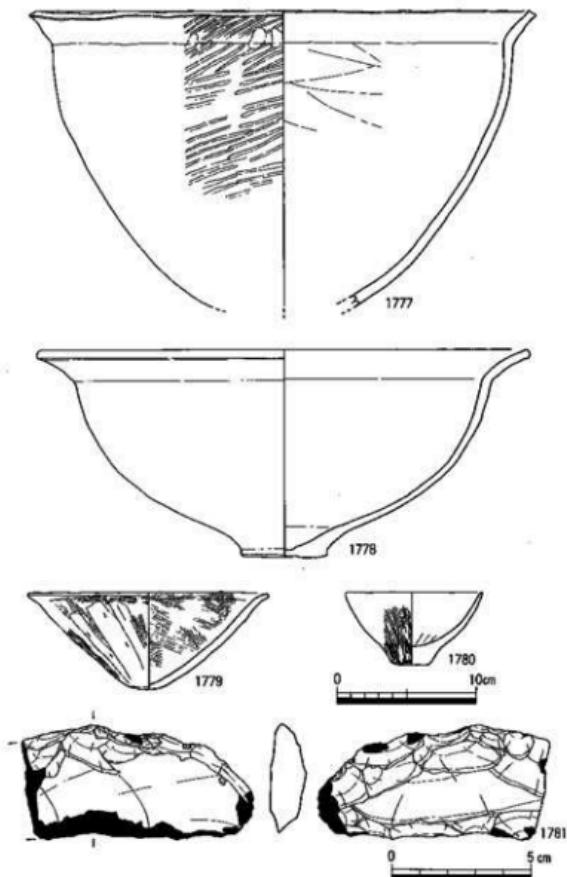
第381図 F区包含層出土遺物実測図(4) (1/4)

る。1784は内面2種・外面1種の計3種の筋の疎密の異なるハケ目を使い分けている。1796・1797はⅢ期の混入である。1796は沈線2本を組とする斜格子文を描き、その下にはヘラ圧痕文を連続させる。1806口縁端部の半截竹管文は3段で印され、上段は一周するが、下2段は三角区画文と $2/9$ と $1/9$ ずつで交替する。1807～1809は複合口縁壺である。1810～1812は壺の胴部で、1812は内面に朱が付着していた。1813～1816は長頸壺である。1817

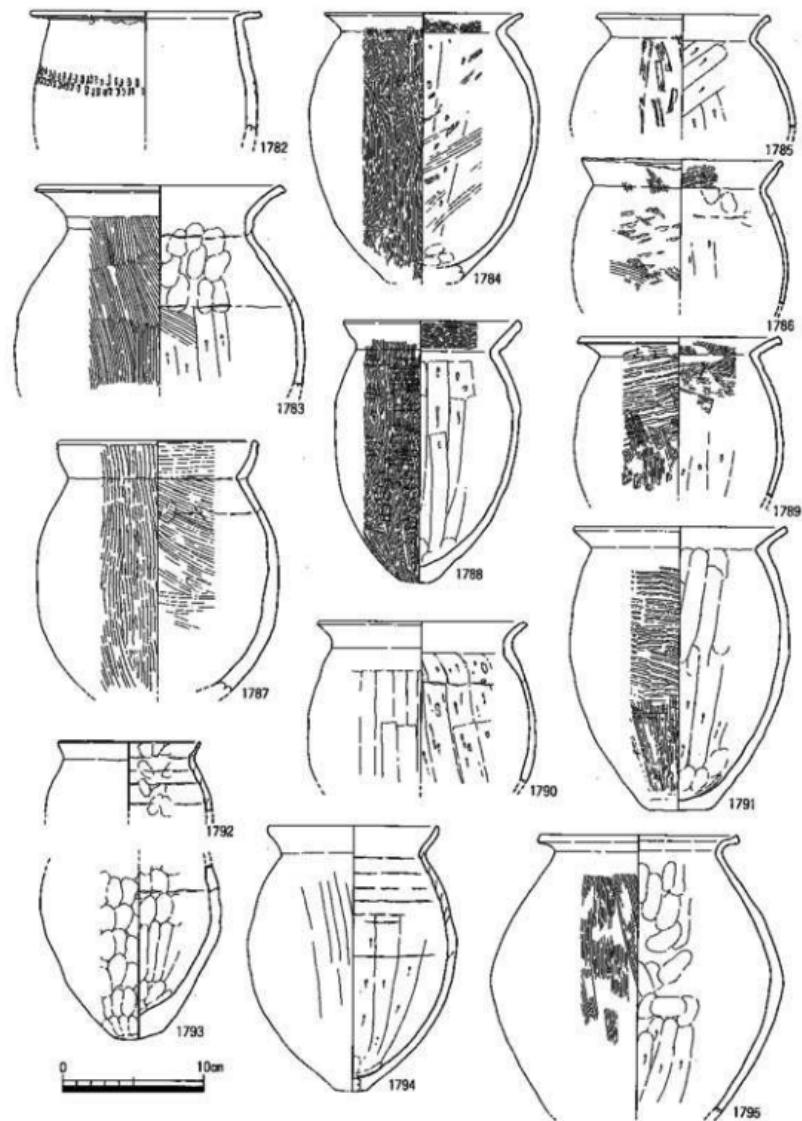


第382図 F区包含層出土遺物実測図(5) (1/4)

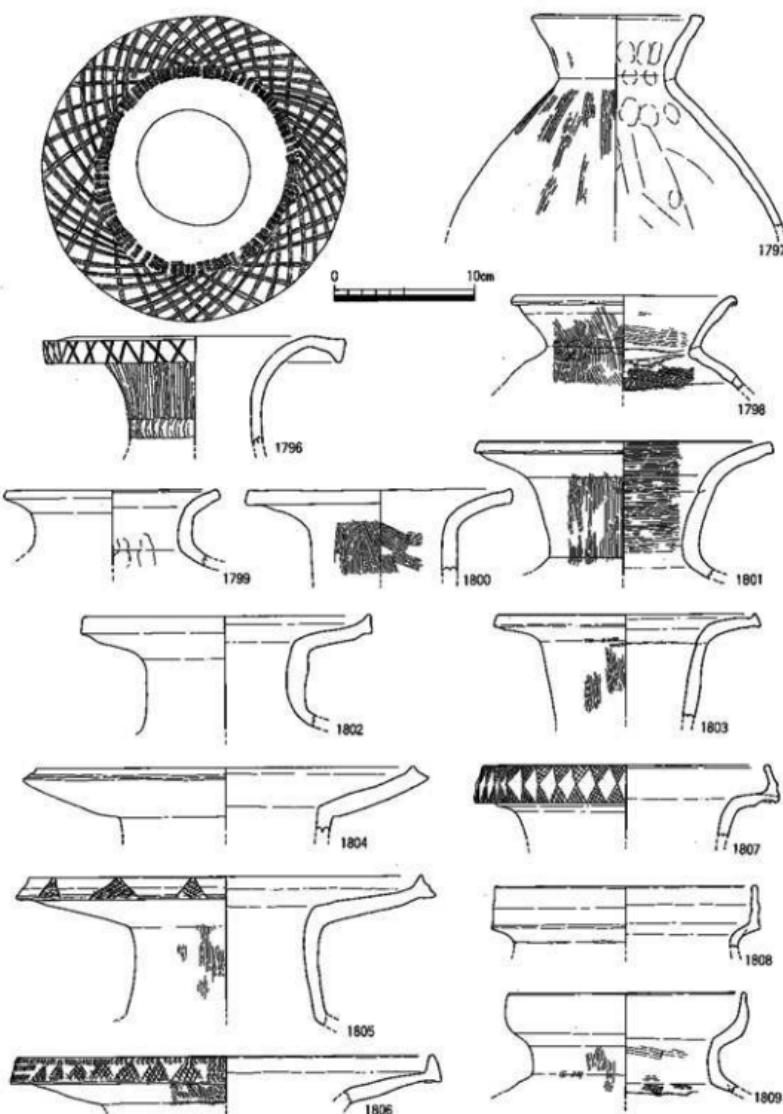
～1821は高杯で、1818は内面に朱が付着していた。1822～1834は鉢である。1825・1827は内面に朱が付着していた。1829はヘラ圧痕が、1830は楔圧痕がそれぞれ底部に残る。1835は小型の壺である。1836は瓶、1837は蓋、1838は紡錘車である。1839は楔形石器と判断した。1840は軟らかい安山岩を用いて、鐵器等で全面削って丁寧に成形しており、その痕跡の線が残る。紐を結ぶ切れ込みも深さを整えている。1842は刃部の潰れが著しい。1843・1844はスクレイパーである。1845は右面右下に擦痕が残ることから、流紋岩の自然石を利用した石斧と考えた。刃部欠



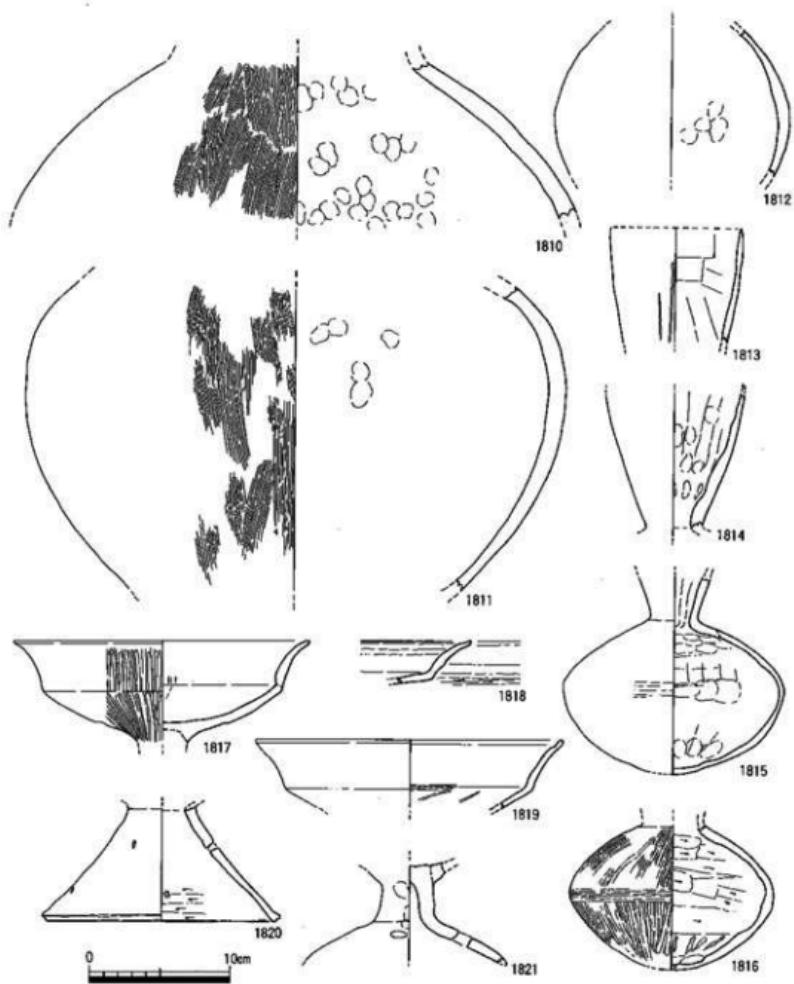
第383図 F区包含層出土遺物実測図(6) (1/4, 1/2)  
 指。擦痕の角度から柄と刃部を直角に接着して振り下ろしたかと思われる。1846は石鍤で、自然の凹みを紐を巻く部分とする。上部中央に打ち欠きか紐ずれの痕がわずかに残る。1847・1848は広口壺である。1849は丸底鉢の大きなものである。1851～1854は鉢である。1855は須恵器壺で、混入品であろう。1856は石鍤である。1857～1874は弥生後期包含層という層位名で取り上げた。B区の同名の層に対応させたものではない。1857は上下明らかに同



第384図 F区包含層出土遺物実測図(7) (1 / 4)

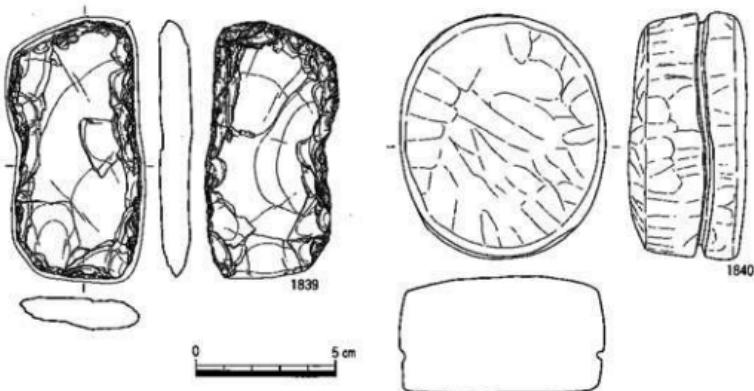
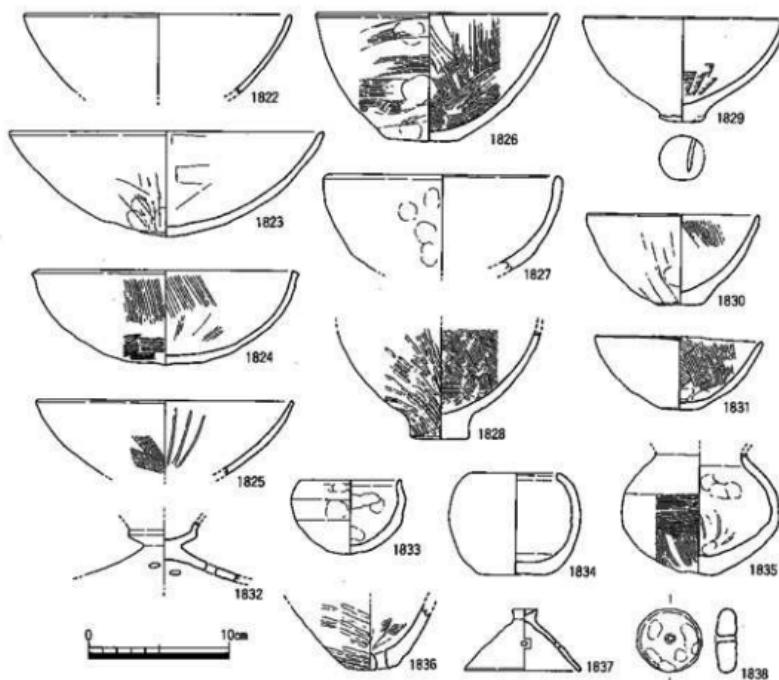


第385図 F区包含層出土遺物実測図(8) (1 / 4)

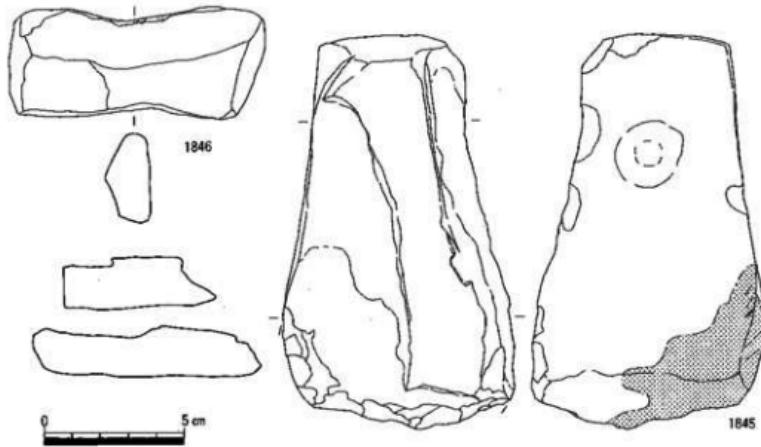
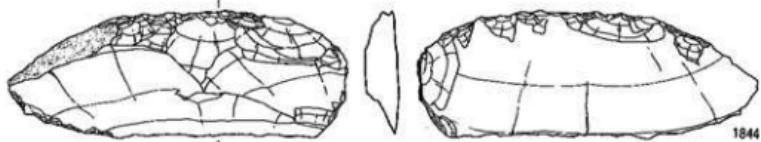
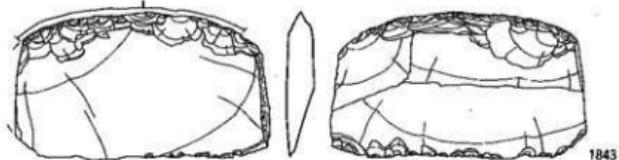
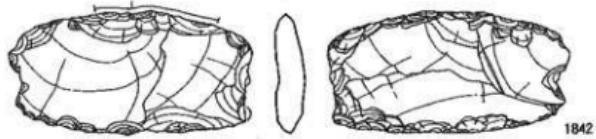
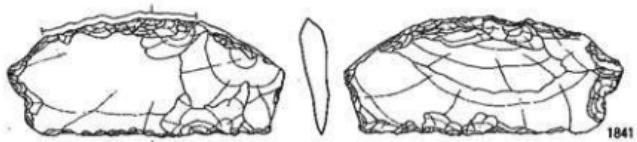


第386図 F区包含層出土遺物実測図(9) (1/4)

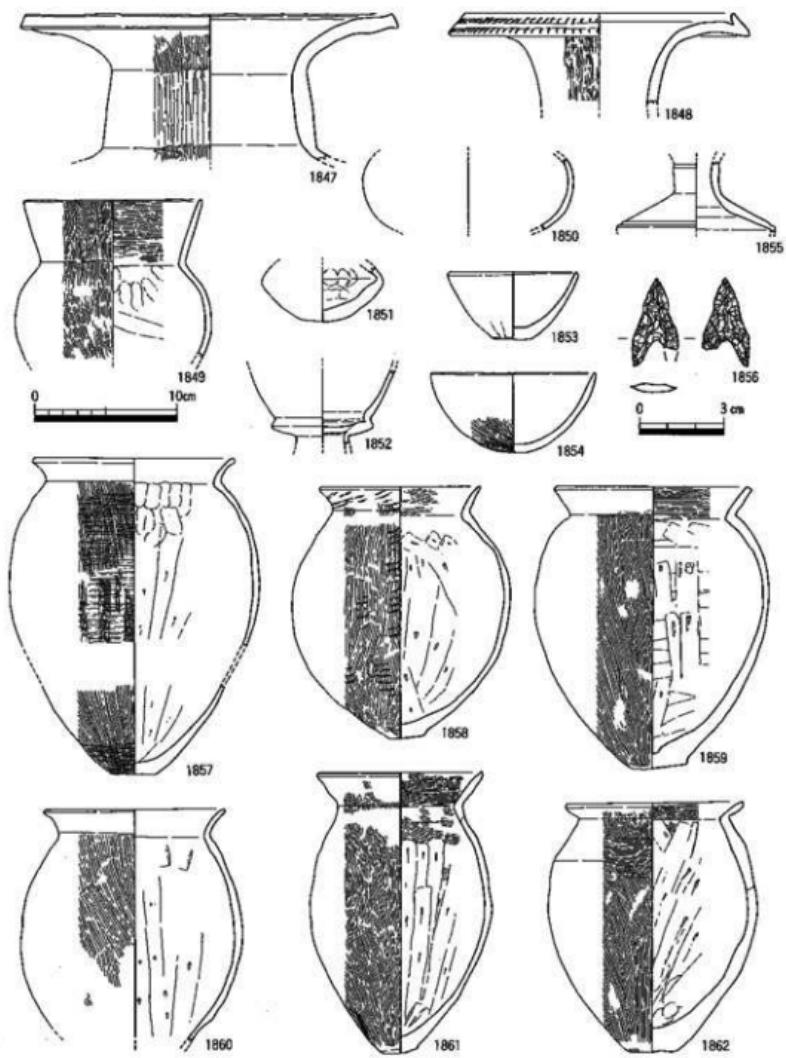
一個体であるが、歪みのためうまく復元できなかった。1867外面のハケ目は上下折り返しながら引いている。1869は下川津B類である。1875～1889は弥生土器の包含層上に堆積した古代の包含層内から出土した須恵器である。1878は焼きがやや甘い。1880は底と体部の



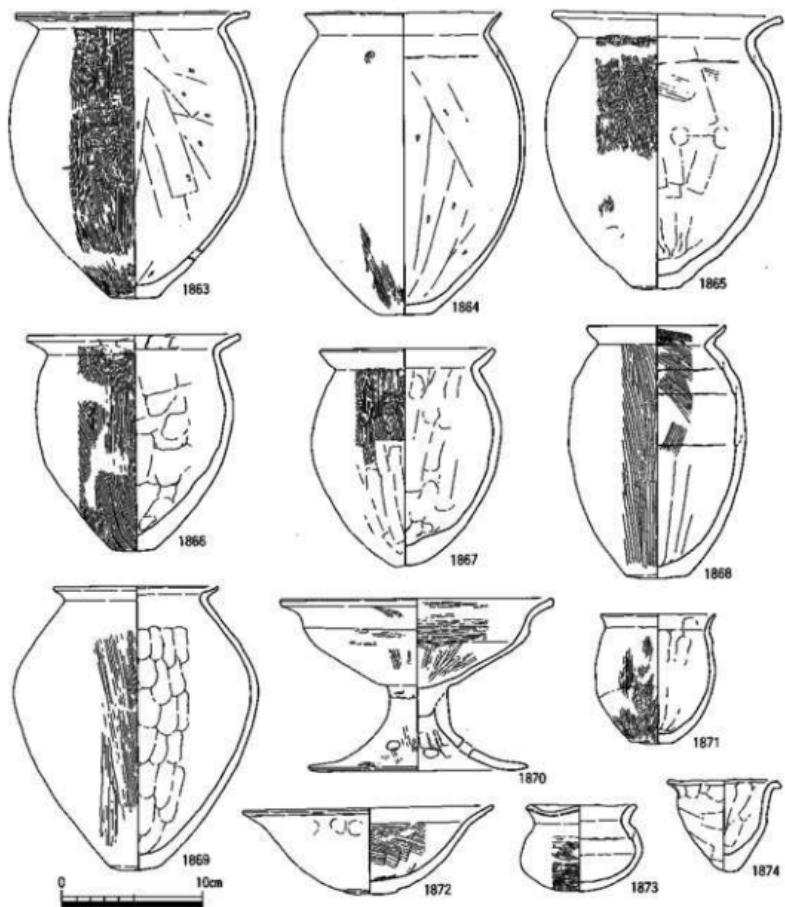
第387図 F区包含層出土遺物実測図(10) (1/4, 1/2)



第388圖 F區包含層出土遺物實測圖(1) (1 / 2)

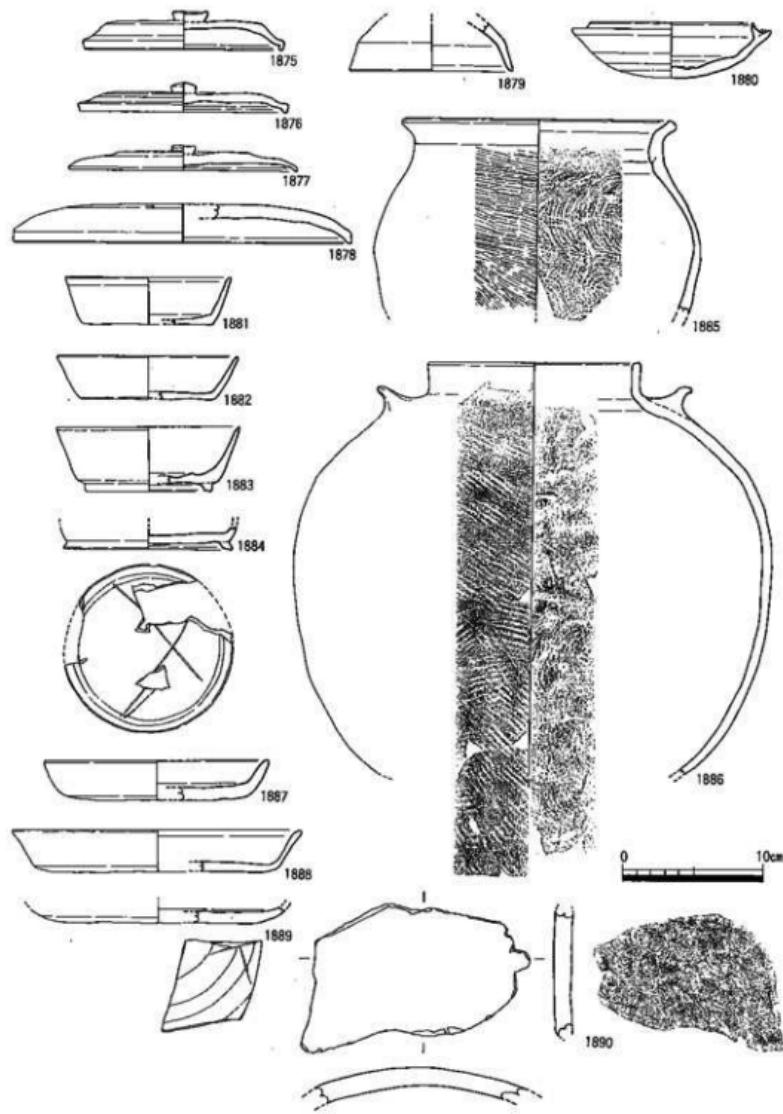


第389図 F区包含層出土遺物実測図(2) (1/4, 1/2)

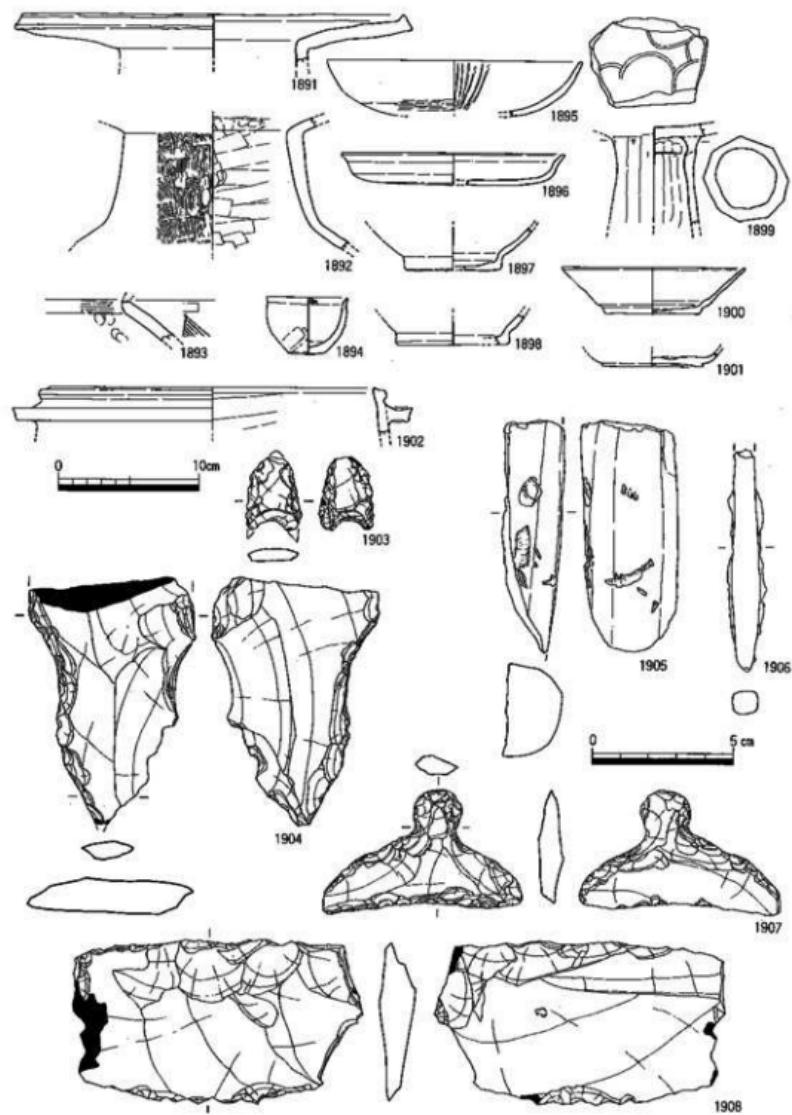


第390図 F区包含層出土遺物実測図(1/4)

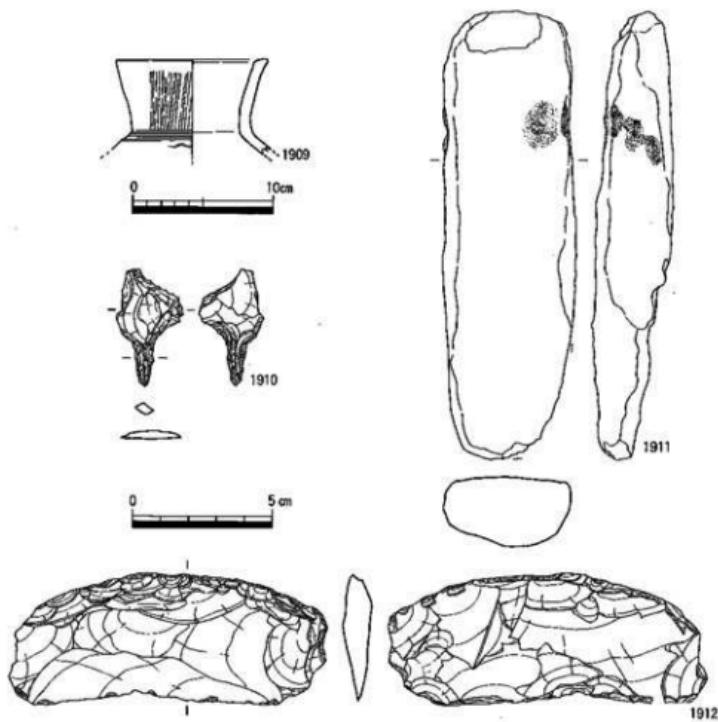
境を1周だけヘラ削りしている。1884・1887は底に「×」のヘラ記号を書く。1888は11世紀以降の壺である。1890～1902はその他現耕作土下に残存した様々な地点の包含層出土遺物である。1890は當て具の存在から甕としたが、歪んだのか大型のものなのか屈曲が弱い。1893は肩部に三角区画文を描く。1895～1902は土器である。1899は杯内面に螺旋状暗文を描く。1901はヘラ切りにより低い高台状を呈す。1904は石錐である。1905は磨製大型蛤



第391図 F区包含層出土遺物実測図14 (1/4)



第392図 F区包含層出土遺物実測図(1/4, 1/2)



第393図 出土地不明遺物実測図（1/4, 1/2）

刃石斧の側縁部の破片である。1908は刃部が不描いで背部の敲打も殆ど認められないことから未製品であろう。

1909～1912は出土地区不明品である。1911の石斧は柄との摩擦により欠けたと思われる凹みがある。

# 第4章 自然科学調査の成果

## 第1節 川津一ノ又遺跡IV区におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

### 1. はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、川津一ノ又遺跡IV区における稻作跡の探査を試みたものである。

### 2. 試料

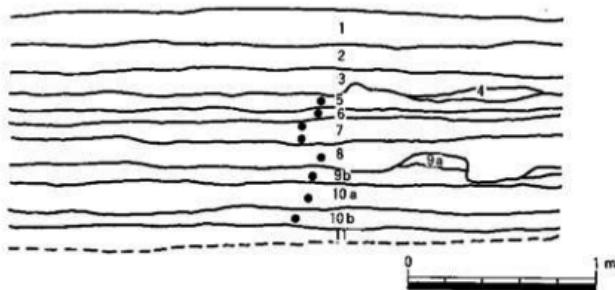
試料は、9トレンチのa地点において、各層ごとに5~10cm間隔で採取された。第394図に七層断面図と分析試料の採取箇所を示す。試料数は計8点である。なお、試料は遺跡の調査担当者によって、フィルムケースを用いて採取されたものである。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾(105°C・24時間)、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスピーブ添加(直径約40μm、約0.02g)  
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- (6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール(以下プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたり



第394図 9トレンチa地点土層断面図と分析試料の採取箇所

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(穀粒量) t/10a	ヨシ層 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
5	46	8	1.55	19,200	24.47	0	54,900	2,800	0
6	54	6	1.34	15,900	13.16	900	44,900	1,900	0
7-1	60	7	1.29	13,200	12.18	0	29,300	3,700	0
7-2	67	7	1.26	7,600	6.85	900	39,300	1,900	0
8	74	12	1.26	1,000	1.48	0	76,700	5,100	0
9b	86	8	1.38	900	0.99	0	53,700	900	0
10a	94	14	1.40	1,900	3.75	900	25,900	1,900	0
10b	108	8	1.35	1,000	1.07	1,000	35,400	2,000	0

第9表 プラント・オパール分析結果

りのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1 g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算計数（機動細胞硅酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}$  g）をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値はそれぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

#### 4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を第8表および第395、396図に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定及び定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（スキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。第397、398図に各分類群の顕微鏡写真を示す。

## 5. 考察

### (1) 稲作の可能性

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稲作の可能性について検討を行った。

9トレンチのa地点では、5～10b層について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。このうち、上位の5～7層では密度が13,200～19,200個/gと非常に高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。下位の8～10b層では、密度が900～1,900個/gと微量であることから、稲作の可能性はあるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

以上のことから、同遺跡で本格的に稲作が開始されたのは7層の時期以降と考えられる。また、その後も5層の時期まで継続して稲作が行われたものと推定される。

### (2) 稲穀生産量の推定

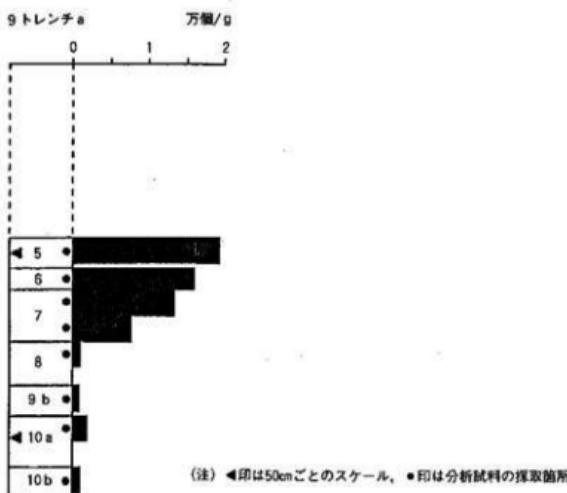
稲作の可能性が高いと判断された5～7層について、そこで生産された稲穀の総量を算出した（表2参照）。その結果、5層では面積10aあたり24t、6層では13t、7層では12tと推定された。

当時の稲穀の年間生産量を面積10aあたり100kgとし、稻わらがすべて水田内に還元されたと仮定すると、5層で稲作が営まれた期間はおよそ240年間、6層ではおよそ130年間、7層ではおよそ120年間と比較的長期間であったものと推定される。

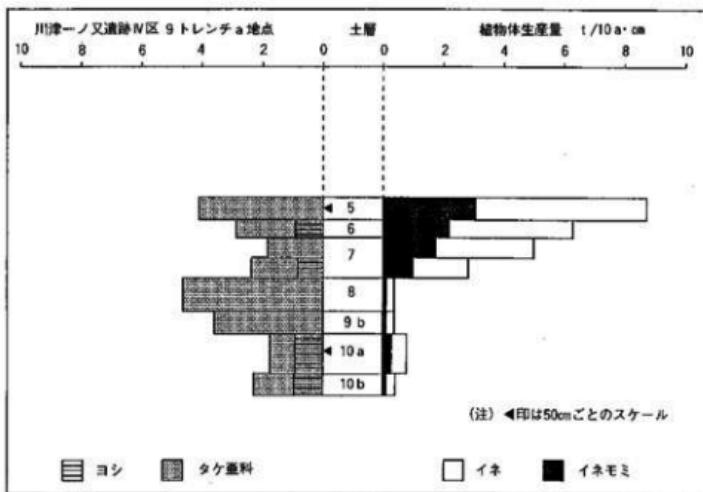
### (3) 古環境について

ネザサなどのタケア科植物は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。

9トレンチのa地点では、全体的にタケア科（おもにネザサ節）が卓越しており、ヨシ属は少量である（図4）。このことから、当時の同地点付近は比較的乾いた土壌条件で推移し、周辺にはネザサ節などが繁茂していたものと推定される。



第395図 イネのプラント・オバールの検出状況



第396図 おもな植物の推定生産量と変遷

なお、5～7層ではイネの増加に伴ってタケア科も増加する傾向が認められた。このことから、竹籠類の落ち葉などが堆肥などとして利用されていた可能性も考えられる。

#### ＜参考文献＞

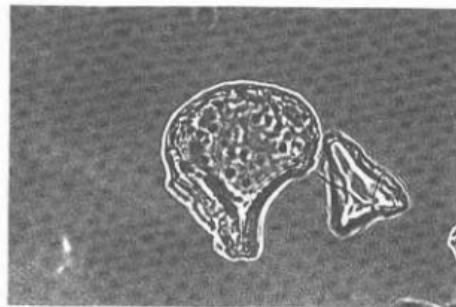
- 杉山真二・藤原宏志、1987、川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山古墳境柵一、川口市遺跡調査会報告、第10集、281-298。
- 藤原宏志、1976、プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9：15-29。
- 藤原宏志、1979、プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜白式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産量の推定－、考古学と自然科学、12：29-41。
- 藤原宏志・杉山真二、1984、プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田跡の探査－、考古学と自然科学、17：73-85。

#### プラント・オパールの顕微鏡写真(1)・(2)

No	分類群	地点	試料名	倍率
1	イネ	a	8	500
2	イネ	a	6	500
3	ヨシ属	a	10 a	500
4	タケア科（ネザサ節）	a	8	500
5	樹木起源（ブナ科）	a	10 a	500
6	樹木起源（ブナ科）	a	6	500

備注：この分析は予備調査終了段階で実施したものである。9トレンチa地点は本調査のB区グリッドF25のは中央地点にあたる。第6回調査域土層図(2)中央のSD090付近がほぼ対応する上層である。a地点5・6・7・8層が第6回4・5・6・14層に対応する。よってa地点5層がSD040/060埋没後の8世紀中葉以降、同6層がSD090埋没後8世紀前葉までにあたる。またa地点にはB区中央を南北に走る低地帯が存在する。a地点9b・10a・10b層はその堆積土で、第13回調査域土層図(9)の16・10・18層に対応すると思われる。

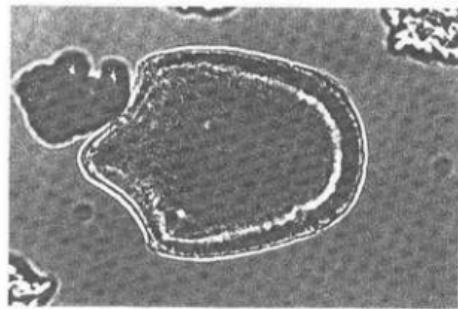
以上から判断すれば、a地点周辺は8世紀前後以降水田として利用されていたことになる。B区東部に存在する掘立柱建物跡は8世紀中葉以降としか判断できなくて、年間生産量による耕作期間を信頼すれば掘立柱建物跡の時期を平安時代後半あたりまで下させる必要が出てくる。しかし一部掘立柱建物跡は、柱穴が大きいことからこの時期まで下させ難い。一方、畑状遺構と判断したSZ01とこの分析を関連づければ、畑状遺構で栽培されていたものは駒橋という結果を導き出しきともできるかもしれない。しかし今回の分析は本調査に入る前に水田の有無の可能性を把握しておくための、それに必要な植物種の同定しか行っていない。よって、畑状遺構の発現後に新たに耕作が行われた可能性も否定できない。調査結果とうまくむすびつく結論は出なかつたが、高いプラント・オパール密度が認められたことは注意しておく必要があろう。



NO. 1

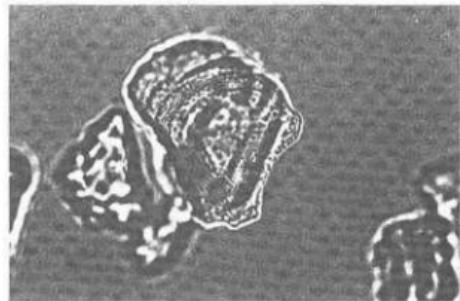


NO. 2

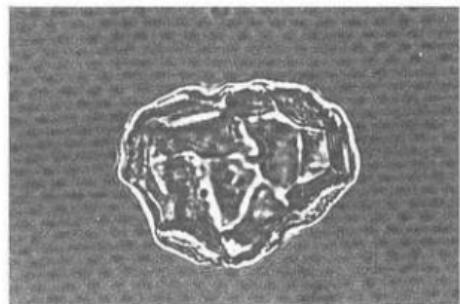


NO. 3

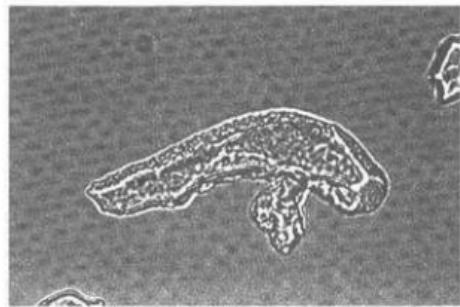
第397図 プラント・オパールの顕微鏡写真(1)



NO. 4



NO. 5



NO. 6

第398図 プラント・オパールの顕微鏡写真(2)

## 第2節 川津一ノ又遺跡IV区出土の木材の樹種同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

川津一ノ又遺跡IV区では、発掘調査により奈良・平安時代の「大畦畔」とそれに伴う木樋が検出された。本遺跡では、III区の調査でも同時期の木樋が検出されている。III区の木樋については、他の木製品とともに樹種同定が行われ、針葉樹材であることが判明しているが、保存状態が悪かったために樹種の同定には至っていない（パリノ・サーヴェイ株式会社、1997）。

本報告では、IV区の木樋について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

### 1. 試料

試料は、奈良平安時代の「大畦畔」（S X01BC）に伴って出土した木樋1点である。

### 2. 方法

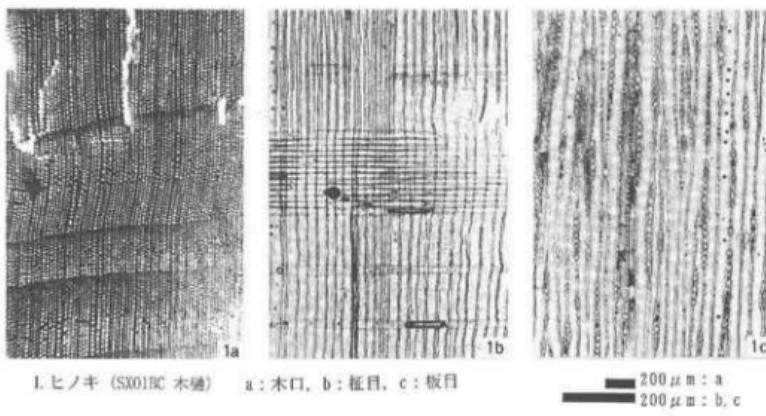
剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

### 3. 結果

木樋はヒノキに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。



第399図 木材の顕微鏡写真

#### 4. 考察

木柵はヒノキであった。ヒノキは、本地域でこれまで行われてきた調査でも比較的多く確認されている針葉樹材の一つであり、古い時代には比較的入手が容易であった可能性も指摘されている（能城・鈴木、1990, 1995）。また、ヒノキは、針葉樹材の中でも耐水性に優れた材質を有しており、時代は異なるが、近世の遺跡から出土する木柵の用材として同属のサワラと共に大量に使用されていたことが明らかとなっている（高橋・橋本、1995；パリノ・サーヴェイ株式会社、1996；能城・高橋、1996）。今回の結果から、本地域で入手が比較的容易で、かつ木柵材として適材のヒノキを選択的に利用した可能性が指摘できる。Ⅲ区から出土した木柵は保存状態が悪く、針葉樹であることは確認したものの樹種の同定には至らなかった（パリノ・サーヴェイ株式会社、1997）。しかし、今回の結果を考慮すれば、同じくヒノキが利用されていた可能性がある。

#### <引用文献>

能城修一・鈴木三男（1990）昭和63年度調査の分析委託結果、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下川津遺跡（第2分冊）」, p.533-567, 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文

化財調査センター・本州四国連絡橋公团。

能城修・・鈴木三男（1995）井出東I遺跡出土の木製品の樹種、「一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4冊 井出東I遺跡（自然化学分析・考察編）」, p.1-28, 高松市教育委員会・建設省四国地方建設局。

能城修・・高橋敦（1996）中・近世における木材利用、第11回植生史学会大会シンポジウム「中世・近世の植生史」発表要旨, p.7-11.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1996）自然化学分析、「沙留遺跡（第3分冊）一沙留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.103-253, 沙留地区遺跡調査会。

パリノ・サーヴェイ株式会社（1997）川津一ノ又遺跡から出土した木材の樹種、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊 川津一ノ又遺跡I」, p.263-267, 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団。

高橋敦・橋本真紀夫（1995）遺構構築材料の同定、「飯田町遺跡」, p.467-480, 飯田町遺跡調査会

### 第3節 坂出市川津一ノ又遺跡IV区出土土器に付着している赤色顔料

本田光子（別府大学）

#### 1. はじめに

坂出市川津町所在川津一ノ又遺跡IV区出土の土器に認められる赤彩色に用いられた赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察、蛍光X線分析を行った。

出土赤色物に関する現在までの知見に寄ればそれらは鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄  $Fe_2O_3$  を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀  $HgS$  を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。

出土土器に赤色顔料が付着残存する例は時代を問わず多数あるが、土器の器種や付着残存状態の違いからその由来は大きく三通りに分かれる。第1は赤色顔料による装飾を目的としたもので、これには焼成後塗彩と焼成前塗彩がある。第2は赤色顔料の貯蔵や塗彩作業の容器を目的としたものである。第3は赤色顔料のうち特に朱を液状にして加熱等特別な所作を行うことを目的としたもので、器種は様々であるが「内面朱付着土器」と総称しているものである。

川津一ノ又遺跡IV区ではこの内面朱付着土器の特徴を持つ土器が多く出土している。土器に付着している赤色顔料について、その材質と状態を知るために顕微鏡による観察およびX線分析を行った。試料の一覧・分析結果とそれに基づく赤色顔料の種類を第10・11表に示した。

#### 2. 試料

赤色物が付着した土器の提供を受けた。土器片のままで赤色の認められる部分について蛍光X線分析の測定を行った。赤色物の残存状態や土器の形状等により測定の際に制約があるものは、顕微鏡観察だけを行った。

#### 3. 顕微鏡観察

実態顕微鏡、生物顕微鏡により透過光・落射光10~400倍で検鏡した。

検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、二種以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、夾雜物の有無等を観察するものである。三種類の赤色顔料は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる外観の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。

朱粒子は、やや角張った塊状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等に特徴が認められる。ベンガラ粒子は、塊状、棒状、板（扁平）状、球状、不定形等様々な外観を持ち、透明な管状（パイプ）粒子を含む例もある。

試料No.7とNo.16にベンガラ粒子を認めた。このベンガラにはいわゆるパイプ状粒子は認められなかった。No.5には赤色顔料の特徴をもつ粒子を確認できなかった。その他の試料にはすべて朱粒子を認めた。

#### 4. 蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として、実施した。別府大学設置の（株）堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MESA500を使用し、15kV-440μA；50秒、50kV-20μA；50秒、真空、の条件により測定を行った。

赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄である、2種の元素の有無のみ表中に記した。他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として土器胎土部分に由来すると考えられるので、表中では省略した。但し、鉄は胎土部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。なお、鉛丹の主成分元素である鉛および、上天神遺跡出土内面朱付着土器から検出された顕著な量の砒素は、今回の分析では検出されなかった。

#### 5. 結果

川津一ノ又遺跡IV区出土土器に付着した赤色物は顕微鏡観察と蛍光X線分析の結果から、赤色顔料であることがわかった。表には分析結果とそれに基づいて推定した赤色顔料の種類を示した。

検鏡結果で朱だけが認められ、蛍光X線分析で水銀が検出されたものについては、朱であると判断した。検鏡結果でベンガラだけが認められ、蛍光X線分析で水銀が検出されず、鉄の蛍光X線強度が土器胎土のそれより大きいものについては、ベンガラと判断した。検

鏡結果で赤色顔料が認められず、蛍光X線分析で水銀が認められず、鉄の蛍光X線強度が土器胎土のそれと変わらないものについては、赤色顔料が認められないものと判断した。

## 6. 考察

川津--ノ又遺跡IV区出土の赤色顔料付着あるいは赤色顔料関連土器50点の内、48点はいわゆる内面朱付着土器であった。

朱が認められずに、ベンガラだけが認められた2点については、二通りの可能性がある。つまり、ベンガラの貯蔵容器あるいは塗彩作業容器である場合と目的は内面朱付着土器の所作であったが、何らかの事情でベンガラを用いた場合とである。No.7はいわゆる内面朱付着土器の特徴である、器面のヒビの中に染み込んだような付着状況から、後者の使われ方を想定できるかと思われる。No.16はやや厚く膜状に付着していることから、ベンガラは液状であった可能性もあるが、埋蔵環境などを考慮すると今回の結果だけからでは判断できない。

No.5はその特異な器形から、内面朱付着土器の専用品である把手付広片口皿であることは間違いないのだが、赤色顔料は認められなかった。おそらく、部位の問題であり、把手の部分には必ずしも赤色顔料が付着しないと考えられる。

今回、調査の機会を戴きました（財）香川県埋蔵文化財調査センターおよび同古野徳久氏に感謝致します。

試料番号	遺物番号	器種	顕微鏡観察		蛍光X線観察		赤色顔料の種類
			朱	ベンガラ	鉄	水銀	
1	191	鉢	+	-	+	+	朱
2		火鉢	+	-	+	+	朱
3		小鉢	+	-			朱
4		鉢	+	-			朱
5	256	把手付片口皿	-	-	+	-	なし
6	620	鉢	+	-	+	+	朱
7	287	壺	-	+	+	-	ベンガラ
8		鉢	+	-	+	+	朱
9		鉢?	+	-	+	+	朱
10		鉢?	+	-			朱
11		小鉢	+	-			朱
12		鉢	+	-			朱
13	1608	鉢	+	-	+	+	朱
14		鉢	+	-			朱
15		鉢	+	-	+	+	朱
16		鉢	-	+	+	-	ベンガラ
17	453	鉢	+	-	+	+	朱
18	530	鉢	+	-	+	+	朱
19		鉢?	+	-			朱
20		大鉢?	+	-	+	+	朱
21	511	高杯	+	-	+	+	朱
22	522	鉢	+	-	+	+	朱
23	528	鉢	+	-	+	+	朱
24		?	+	-			朱
25		大鉢?	+	-			朱

第10表 赤色物の分析結果と赤色顔料の種類(1)

試料番号	遺物番号	器種	顕微鏡観察		蛍光X線観察		赤色顔料の種類
			朱	ベンガラ	鉄	水銀	
26		甕か鉢	+	-			朱
27		甕か鉢	+	-			朱
28		鉢?	+	-			朱
29		鉢?	+	-	+	+	朱
30		?	+	-	+	+	朱
31		大鉢?	+	-	+	+	朱
32	1563	鉢	+	-	+	+	朱
33	1580	鉢	+	-	+	+	朱
34		鉢	+	-	+	+	朱
35		鉢	+	-			朱
36		鉢	+	-			朱
37		鉢?	+	-			朱
38		鉢	+	-			朱
39	1682	壺か鉢	+	-	+	+	朱
40		鉢	+	-	+	+	朱
41	1812	壺	+	-	+	+	朱
42	1818	高杯	+	-	+	+	朱
43	1825	鉢	+	-	+	+	朱
44	1827	鉢	+	-	+	+	朱
45		鉢?	+	-	+	+	朱
46		鉢?	+	-			朱
47		鉢	+	-			朱
48		大鉢	+	-	+	+	朱
49		?	+	-			朱
50		鉢	+	-			朱

第11表 赤色物の分析結果と赤色顔料の種類(2)

器種	遺構名	付着状況	挿図番号	遺物番号
弥生土器・鉢	S H06	内面口縁直下まで朱付着	49	191
弥生土器・大鉢	S H06	内面に朱微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・小鉢	S H06	内面に微量に付着。外面もか?		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	S H06	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・把手付広片口皿	S H13	なし	58	256
弥生土器・鉢	S H17	内面に朱付着	108	620
弥生土器・甕	S H22	腹内面にベンガラ付着	64	287
弥生土器・鉢	S H24	内面に朱微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢?	S H25	内面全体付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢?	S H25	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・小鉢	S H26	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	S H26	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	S H26	内面に朱付着	365	1608
弥生土器・鉢	S H26	内面・割れ口に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	S H26	内面に朱微量付着。内面更に小塊付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	S K21	内面にベンガラ付着		小片のため実測不可
弥生土器・甕	S E01	腹部位に朱微量付着	85	453
弥生土器・鉢	S D010 (S D030?)	内底に朱付着	92	530
弥生土器・鉢?	S D030	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・大鉢?	S D030	内面に朱微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・高杯	S D030	内底に朱微量付着	91	511
弥生土器・鉢	S D030	内外面に朱付着	92	522
弥生土器・鉢	S D030	内外面に朱付着	92	528
弥生土器・?	S D080/110	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・大?鉢	S D080/110	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢か甕	S D112	内面に朱付着		小片のため実測不可

第12表 赤色顔料関係土器一覧(1)

器種	遺構名	付着状況	挿図番号	遺物番号
弥生土器・鉢か甕	S D112	内面に付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢?	S D112	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢?	S D?	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・?	S P0928E	内面に付着		小片のため実測不可
弥生土器・大鉢?	S P1242E	内面に朱付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	B包含層	内面に朱付着	363	1563
弥生土器・鉢	B包含層	内面に朱付着	364	1580
弥生土器・鉢	B包含層	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	B包含層	内面に付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	B包含層	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢?	B包含層	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	B包含層	割れ口に付着		小片のため実測不可
弥生土器・壺 or 鉢	E包含層	内面に朱付着	374	1682
弥生土器・鉢	E包含層	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・壺	F包含層	内面に朱付着	386	1812
弥生土器・高杯	F包含層	内面に朱付着	386	1818
弥生土器・鉢	F包含層	内面に朱付着	387	1825
弥生土器・鉢	F包含層	内面に朱付着	387	1827
弥生土器・鉢?	F包含層	内面に朱微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢?	F包含層	内面付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	F包含層	内面に微量付着		小片のため実測不可
弥生土器・大鉢	F包含層	内面に朱付着		小片のため実測不可
弥生土器・?	F包含層	内面に付着		小片のため実測不可
弥生土器・鉢	F包含層	内面に微量付着		小片のため実測不可

第13表 赤色顔料関係土器一覧(2)

## 第4節 川津一ノ又遺跡出土の動物遺存体

松井 章

### 1. 出土した動物遺存体の概要

川津一ノ又遺跡からは、軟体類、魚類、爬虫類、哺乳類などの骨が、完形、破片を含めて170点あまり出土した。その大部分は哺乳類のもので、わずかに爬虫類、魚類の骨と貝類の殻が存在する。出土した時期は7世紀を主体とし、一部、8世紀を含む遺構および自然河川からで、この時期の動物遺存体の出土例は、従来全国的にも報告例が少ない。この時期は、特に牛馬の伝播と普及や、古代仏教の伝来に伴う動物観の変化などの情報がうかがえることが予測され、非常に重要な時期のものである。

### 2. 種類ごとの出土

#### 軟体類

ハマグリが1点出土したのみである。7世紀前半の溝Ⅲ区S R02の第7層からの出土である。貝類は一個だけで消費されることを考えにくく、特に日常生活の残滓には多くの貝類が存在したものと思われるが、土中で腐朽して残らず、残存したのはこれ1例のみであったのであろう。

#### 魚類

タイ類の遊離した歯、クロダイ属（瀬戸内海ではクロダイの可能性が高いがキジヌなどと判別が困難ということで属として括する）、カンダイの咽頭骨は大きく強固であるので遺跡から出土する例が多い。岩礁性の海岸付近で捕獲出来る。

#### 爬虫類

ヘビの椎骨が3点出土している。比較的大型の個体であるが、椎骨からは種類を判定することは出来ない。

#### 哺乳類

ウマが同定できた破片数で89点ともっとも多く、ウシが30点と続く。ニホンジカ6点、イノシシ3点と縄文時代、弥生時代を通じて日本列島の大部分の地域（北海道、沖縄列島をのぞく）での代表的な狩猟獣が、このように少数になることは、日本人の動物利用が大きく変化したことを示している。古墳時代の前期では、一般的な集落でも弥生時代以来の二

軟体動物門 PHYLUM MOLLUSCA

二枚貝綱 CLASS BIVALVIA

ハマグリ Meretrix lusoria

脊椎動物門 PHYLUM VERTEBRATA

硬骨魚綱 CLASS OSTEICHTHYES

タイ科 Family Sparidae

タイ科の一種 Family Sparidae gen. et. sp. indent

クロダイ属の一種 Gen. *Acanthopagrus schlegeli* sp. indent

カンダイ *Semicossyphus reticulatus*

ウナギ科 Family Anguillidae

ウナギ *Anguilla japonica*

フグ科の一種 Family Tetraodontidae gen. et. sp. indent

爬虫綱 CLASS REPTILIA

ヘビ科の一種 Family Colubridae gen. et. sp. indent

哺乳綱 CLASS MAMMALIA

イノシシ科 Family Suidae

イノシシ *Sus scrofa leucomystax*

シカ科 Family Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

ウシ科 Family Bovidae

ウシ *Bos taurus*

ウマ科 Family Equidae

ウマ *Equus caballus*

ネズミ科の一種 Family Muridae gen. et. sp. indent

第14表 動物遺存体種名表

ホンジカやイノシシ、またはブタを主として利用して廃棄していたのに対して、7世紀ではウマ、ウシが大部分を占めるという傾向でうかがえる。

### 3. 造構ごとの出土状態（第271・272・400図参照）

#### Ⅲ区 S R01

7世紀前半の自然河川で、小型動物が多く含まれる。これは、土壤をふるいでふるった結果によるもので、発掘中に肉眼による取り上げだけでは採集できないものである。タイ類はクロダイの前上顎骨が出土しており、クロダイよりも骨が強固なマダイの骨が出土していないことから、遊離した歯も大部分がクロダイのものであろう。

#### Ⅲ区 S R02

ハマグリとウマの下顎骨、四肢骨が出土している。

#### IV区 S D010及び改修区 S D15

7世紀の第二四半期を主体とする堆積層から総数145点ともっと多くの骨が出土している。なかでもウマが50点、ウシが26点と多く、イノシシは2点、ニホンジカも2点と非常に少ない。

また、発掘時にS D15の堆積土少量を水洗したところ、魚骨が出土している。一般に発掘中に肉眼のみで採集した資料には、細かなものがサンプリングエラーで見逃される傾向が、繩文貝塚の発掘をもとに指摘してきた。本遺跡でもこうした水洗選別によってカンダイ、クロダイなどが採集されている。魚骨の保存状態は良好で、他にも魚骨が存在していたとしたなら、水洗選別を行うことによってさらに出土量は多くなつたと考えられる。ただし、マダイ、クロダイなどは肉眼でも目に付きやすく、魚骨が多く存在したなら発掘時にもっと多くの魚骨が採集されていたであろう。やはり、元来、この溝では魚類を投棄することは少なかったと思われる。

#### 改修区 S D11

8世紀の溝、S D11からは、ウマ、ウシ、ニホンジカが出土している。ニホンジカの枝角は、分岐部を刃物で切り取った骨角器製作の際に生じた廃材である。

#### IV区 S D040/060

7、8世紀の溝S D040/060からはウマの上腕骨と桡骨が出土している。成長度や特徴から見て同一個体の可能性が高い。

本遺跡全体を通じての特徴であるが、左右が対になる四肢骨や同一個体の手根骨と中手

骨、中足骨と踵骨・距骨などが隣接して出土する場合が多い。これは、この遺跡に投棄された動物遺存体が、そのまま、水流による移動、イヌの歯型は残されても食肉類の摂食活動、微生物による分解を受けていないことを示す。したがってここで扱う動物遺存体は、7世紀を中心とする時期の人間の動物利用の痕跡をかなり忠実に反映していると考えることが出来るだろう。

#### 4. 観察および考察

##### 概略

本遺跡から出土した動物遺存体は、河川や溝から出土したもので、家畜と野生動物が含まれる。数量的に見るとウマ、ウシが主体を占め、イノシシ、ニホンジカが少量ずつ含まれるという特徴が挙げられる。また、骨の割れ口にはイヌの噛みあとが多数残されているので、イヌもまた多く飼われていたと考えられる。それに対して、3世紀後半から4世紀はじめにかけての愛媛県松山市の宮前川北斎院遺跡の岸田Ⅱ地区では、イノシシが主体で、ニホンジカ、イヌがそれに続き、ウシ、ウマは皆無である（松井章1998「古照・岩子山西麓・宮前川北斎院・斎院烏山各遺跡出土の動物遺存体」「斎院・古照」愛媛県埋蔵文化財センター pp. 539～581）。このような現象は、岡山平野や紀ノ川の下流の和歌山平野など西日本各地で認められる。他の瀬戸内、畿内の遺跡でも、筆者がみてきた限り、4世紀にはウマ、ウシがほとんどみられず、ウマ、ウシが出土するのは5世紀になってからで、須恵器を伴うことが多く、8世紀になると集落の周辺の河川ではウマ、ウシの出土量が90%以上を占めることが珍しくなくなる。

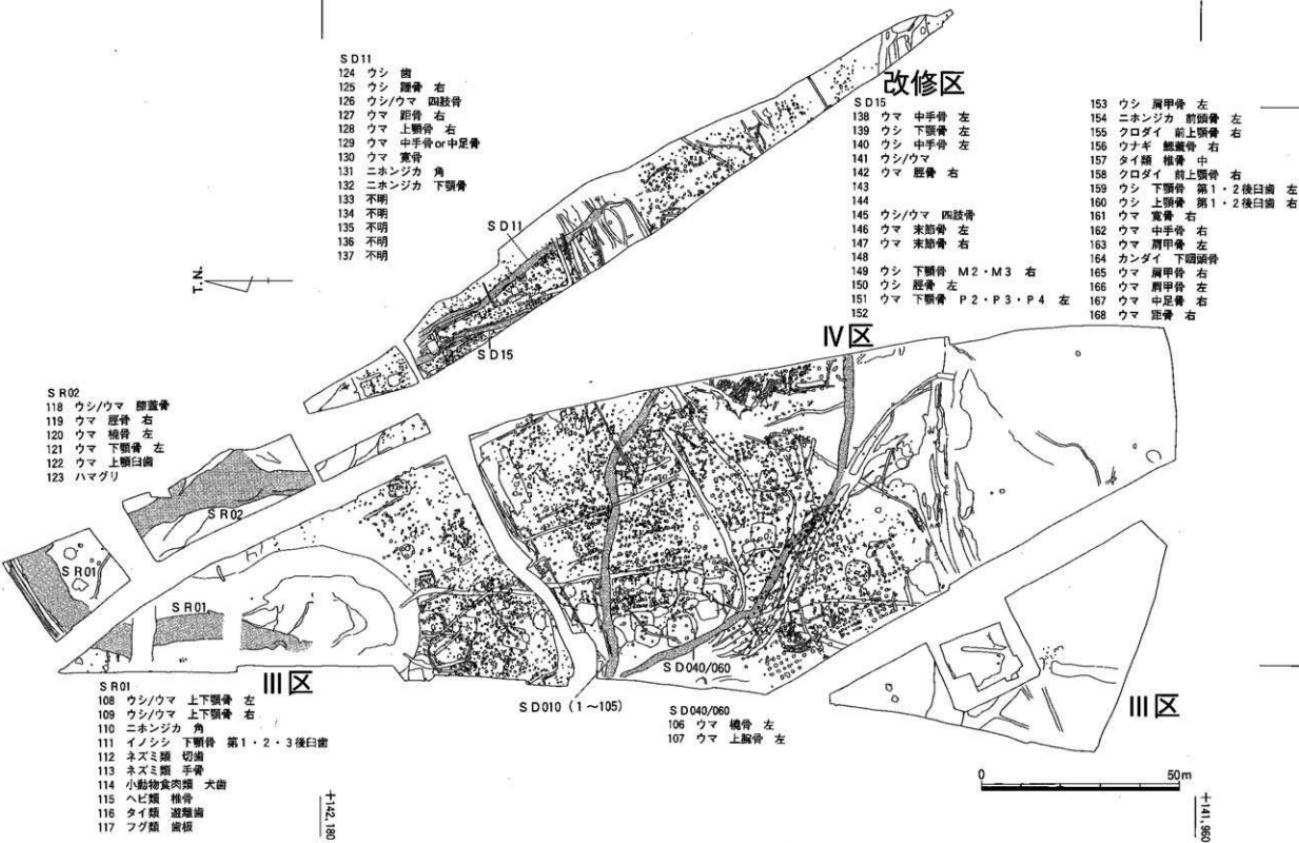
##### ウマ、ウシの形質について

出土したウマの下顎骨の臼歯列長は、エナメル質の部分で161.0mm、歯槽間で165.0mm、前臼歯列長がエナメル間で82.0mm、歯槽間で84.0mm、また後臼歯列長がエナメル間で79.6mm、歯槽間で81.0mmを計る。この値は、現生のトカラウマのオス6例の平均148.0mm、メスの8個体の平均151.2mmよりかなり大きく、木曾ウマのオスの1例161.3mm、メスの10例の平均168.9mmと同大である。

中手骨の最大長が得られた3例では、それぞれ195、205、212mmとなるが、この値は体高120～130cmの小型馬から中型馬に属するものである（比較に用いた数値は次の文献による。林田重幸1956「日本古代馬の研究」「人類学雑誌」64-4 pp. 197～211）。また、改修区SD15より出土した脛骨の最大長345.0mmは、中型馬の木曾馬に相当する大きさである。

+32.720

+



第400図 川津一ノ又遺跡動物遺存体出土位置平面図 (1/1000)

第15表 痊別骨部位一覽

林田重幸は縄文時代後期に体高110~120cmくらいの小型馬が大陸より移入され、古墳時代になって体高120~140cmくらいの木曾馬相当の中型馬が移入され、小型馬を駆逐した結果、現代まで与那国島、宮古島、トカラ列島などの島嶼部に矮小馬に属する小型馬が残ったと考えた。しかしながら、近年の研究により縄文時代とされていたウマの多くは、中世のものという年代測定の結果が出て、近年の大規模で精度の高い発掘では、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡でもウシ、ウマの出土例はほとんど見られない（近藤恵・松浦秀治・中井信之・中村像夫・松井章1992「出水目塚縄文後期墓出土ウマ遺存体の年代学研究」）。

ウマ	最大長	近位端 最大幅	遠位端 最大幅	体 部 最小幅	下部幅	颈 部 最小幅	関節窩 幅	関節窩 幅	近位端 関節面幅	遠位端 関節面幅	滑車幅	最大長	基 部 最大幅
	GL	Bp	Bd	SD	GLP	SLC	LG	BG	BFp	BFd	BT	L	W
肩甲骨					84.1	59.0	53.0	45.0		60.4			
肩甲骨					84.0		47.0	39.8					
上腕骨											80.0		
上腕骨		67.0									64.0		
橈 骨		70.0											
桡 骨		70.0								60.2			
橈 骨	71.0								63.8				
橈 骨													
尺 骨													
中手骨	195.0	42.0	42.0										
中手骨	205.0		46.0										
中手骨	212.0												
寛 骨													
大腸骨													
脛 骨	345.0		63.0	37.0									
脛 骨			62.0										
中足骨	264.0	48.0	46.2	28.4									
中足骨	212.0	45.2	46.3	30.7									
中足骨	259.0												
蒸節骨	91.0	49.4	43.0	33.4					47.0	40.2			
蒸節骨	91.0		46.7										
中節骨	44.0	47.4	43.8	39.2					45.2				
末節骨													

ウシ	最大長	近位端 最大幅	遠位端 最大幅	体 部 最小幅	下部幅	颈 部 最小幅	関節窩 幅	関節窩 幅	近位端 関節面幅	遠位端 関節面幅	滑車幅	最大長	基 部 最大幅
	GL	Bp	Bd	SD	GLP	SLC	LG	BG	BFp	BFd	BT	L	W
角 芯												188.0	69.0
肩甲骨					71.2	58.0	58.0	51.0					
上腕骨													
橈 骨													
尺 骨													
中手骨	136.0	57.0	59.6	34.0									
寛 骨													
大腸骨													
脛 骨		66.0											
蒸節骨		39.8											
中節骨													
末節骨													

ニキシジキ	GL	Bp	Bd	
中足骨		27.4		

第16表 ウシ・ウマ各部位計測値(1)

ウマ	臼歯列長 (エナメル間)	臼歯列長 (歯槽)	前臼歯列長 (エナメル間)	前臼歯列長 (歯槽)	後臼歯列長 (エナメル間)	後臼歯列長 (歯槽)
下顎骨	161.0	165.4	82.0	84.0	79.6	81.0

ウシ	臼歯列長 (エナメル間)	臼歯列長 (歯槽)	前臼歯列長 (エナメル間)	前臼歯列長 (歯槽)	後臼歯列長 (エナメル間)	後臼歯列長 (歯槽)
下顎骨	136.0	139.5	52.8	51.0	83.8	87.2
下顎骨		153.0	65.0		90.0	

第17表 ウシ・ウマ各部位計測値(2)

「考古学と自然科学」第26号日本文化財科学会pp.61-71)。したがって、林田の言う小型馬は、島嶼に隔離されることによって形質が小型化する島嶼化現象による可能性が高い。本遺跡では、計測値からすると、矮小馬に属する体高110~120cmのトカラウマ相当の大きさの小型馬と、体高130cm内外の木曾ウマ相当の中型馬がいたことを示す。ウシについては、下顎骨の臼歯列長が歯槽間で139.5mmを計り、口之島ウシのオス3個体の平均、142.5±1.29mm、メス15例の平均、132.4±0.55mm、見島ウシのオス2例の平均、147.3mm、メス2例の平均、138.5mmよりも小さいか同大である。中手骨を例に取ると、最大長では186.0mmの例がある。この数値は、中手骨では在来和牛の口之島ウシのオス4個体の平均、189.5±0.33mm、メス16個体の平均、190.5±0.48mm、見島ウシのオス2個体の平均、199.1mm、メス2個体の平均192.2mmよりもやや小さい(現在在牛の計測値は、次の文献によった。西中川駿・松本光春1991「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告pp.164-188)。古墳時代の例としては一般的ではないだろうか。

出土したウシ、ウマは成獣のものが多く、この遺跡に居住した人々が牧の経営に関わっていたとすると幼獣の比率が大きくなるはずなので、この付近で牧を持っていたとは考えにくい。

#### 骨に見られる加工痕

出土したウマ、ウシの骨には、斧などによる四肢骨、中軸骨を解体するための荒削りの痕跡と、肉を除去するために腱を切断した際に刀子様の刃物による細かな傷が見られる。

##### a. 斧様の傷

椎骨、四肢骨などに見られる。胸部から前肢、後肢を切断する際には、上腕骨と肩甲骨、寛骨と大腿骨とをたたき割る。しかし本遺跡から出土したウシ、ウマの四肢骨は、解体のためだけでなく、骨髓を摘出するために何度も加熱されて割れている。(写真参照)

#### b. 刀子様の傷

四肢骨の表面には鋭い刀子様の刃物傷も見られる。これは明らかに骨から肉を取り外すためのものである。(写真参照)

ウシ、ウマが死んだ場合、次のような工程が想定できる。

1. 皮を剥いで鞣作業に備える。この工程は、骨に残る痕跡としては確認出来ないが、牛馬の皮革は重要な資源で、古代でも武器・武具、履き物、ベルトなどに多用されていることが『延喜式』などの記述からわかる。
2. 頸部、前肢、後肢を切断して大まかな解体を終える。頸椎、上腕骨の近位部、大腿骨の近位部の出土例が少ないことが、この箇所で折り取られたと考える根拠となるが、この部分は海綿質が厚く、骨髓も多く含まれているために、粉碎されたり、イヌの餌となつたために遺跡に残らなかつた可能性もある。
3. 刀子様の刃物で腱の部分を切断して肉を取る。骨の表面、特に腱の付着する関節に近い部分には刀子様の鋭い刃物傷が、長軸に直交するようにつけられる例が少なくない。
4. 上腕骨、橈骨、大腿骨、脛骨などの長管骨を斧で叩き割って髓を取り出す。長管骨の中は、髓が詰まっており生前は血液を作る機能を持つ。
5. イヌの餌にする。四肢骨の割れ口、関節付近にはイヌの噛みあとが多く見られる。また椎骨の出土量が少ないことは、イヌの餌になってイヌが別の場所に運んでいつて噛った可能性がある。

出土した骨が同じような割れ口、刃物傷を持つことから、この遺跡では上に示した斃牛馬処理法がすでに確立していたことを示すだろう。7世紀の前半に、すでにこの遺跡では、ウシ、ウマを剝い、以前調査された下川津遺跡で出土した犁(かけ)の例も含めて農耕にも用いていたことが明かである。筆者がこれまで見てきた古墳時代から奈良時代の集落から出土するウシ、ウマの中でも占い例といえるだろう。

頭蓋骨が少ないことは、水田祭祀や井戸を埋める際の祭祀(松井章1995「古代・中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第61集 国立歴史民俗博物館 pp.

55-71)に備えて別の場所に保管した可能性がある。しかし、椎骨の出土例の少ないことは祭祀説では説明できない。

ウマの形質は、在来馬のなかでもトカラウマ相当の小型馬と木曾ウマに匹敵する中型馬がともに出土し、ウシは、口之島ウシや見島ウシとほぼ同等か、やや小さい個体が存在したことがわかった。

7世紀を中心とする全国で数少ない動物遺存体を出土する遺跡としての特徴は、大部分がウシ、ウマで、イノシシ、ニホンジカが少ないと、ウシ、ウマの骨には解体痕が多く見られ、死んだ場合、皮、肉を無駄にせず、確立した解体方法によって有効に利用していたことがわかった。

## 第4節 III区2④⑤SK17出土人骨の鑑定について<sup>(1)</sup>

### 鑑 定 書

香川医科大学法医学教室

鑑定人 木下博之 提出

事 例	川津一ノ又遺跡出土の人骨
受託年月日	平成8年4月18日
鑑定事項	1. 人骨の性別及び年齢
鑑定場所	香川医科大学法医学教室
備 考	本鑑定に際し、香川医科大学法医学教室 井尻巖教授、 鈴野清助教授、大井敏彦技官および神奈川歯科大学法医学 教室 山田良広講師の指導、助言および協力を得た。

## 検査所見

### 1 部位の判定

人骨の出土状況を第400図および写真1～18に示す。人骨は慎重に発掘され、周間に付着する土砂を可及的に除去したのち、解剖学的特徴に基いて部位を判定した。得られた人骨はいずれも長期間の風化、崩壊のためかなりの部分が欠損し、また脆弱になっているが、可及的に部位の特定及び推定を行った。

- 1) 頭蓋骨：発掘時の外形（写真1）としては頭蓋骨の形状を有する。鑑定試料は頭蓋骨を構成する板状骨のうちの一部である（写真7）。
- 2) 下顎骨：下顎体の前部が残存するが、左右の下顎枝は欠損する（写真8、9）。
- 3) 上腕骨（推定）：骨幹部が一部残存する（写真10）。
- 4) 桡骨（推定）：骨幹部が一部残存する（写真11、13）。左右の別は明らかでない。
- 5) 尺骨（推定）：骨幹部が一部残存する（写真12、14）。左右の別は明らかでない。
- 6) 大腿骨（推定）：骨幹部が一部残存する（写真15）。
- 7) 歯牙：残存する歯牙は計13本である（写真8、16）。右上顎中切歯、右上顎側切歯、左下顎中切歯、左下顎側切歯、左下顎犬歯、左下顎第二小白歯、左下顎第一大臼歯、左下顎第二大臼歯、右下顎犬歯、右下顎第一小白歯、右下顎第二小白歯、右下顎第一大臼歯、右下顎第二大臼歯。
- 8) 他の試料については部位の特定はできなかった（写真17、18）。

### 2 性別判定

一般に白骨の性別推定は骨の形態学的特徴および人類学的計測値に基づいて行われる。性差は部位によって異なり、頭蓋および骨盤は比較的性差をよく現している。しかし、本例では残存している骨は頭蓋骨の一部、下顎骨の一部、四肢の長骨の一部分であり、人類学的計測はごく一部でしか不可能である。

#### 1) 頭蓋骨

発掘時の写真（写真1）では頭蓋骨の外形は比較的保たれており、性差をよく反映する部位である前頭骨の輪郭は鉛直に近い。崩壊前の状態を比較的保っていると考えると、前頭結節の発達は比較的良好であると思われる。これらの所見からは女性の特徴を示してい

ると考えられる。

### 2) 下顎骨

下顎体の前下縁の輪郭は一点のみ突出して比較的曲線状を呈する（写真9）。すなわち、下顎体の角度は鋭角を呈する。これらの所見も女性の特徴を有していると考えられる。

### 3) 四肢骨

四肢の長骨については形態学的性差が明瞭でないため、人類学的計測が有用である。しかし、本例では風化による崩壊のため、骨表面の凹凸などの形態的性差、および正確な人類学的計測は困難であり、四肢骨から性別を判定することはできない。

### 4) 人類学的計測

残存する下顎骨から測定可能であった人類学的計測項目はオトガイ高のみであり、その距離は31.0mmであった。性別判定には判別式が用いられるが、本例のようにオトガイ高のみの値ではこれを用いることはできない。これまで報告されている日本人頭蓋の人類学的計測値を参考にする（瀬山季茂、吉野峰生：白骨死体の鑑定、令文社）と、女性のものである可能性が高い。

以上の点から女性のものである可能性が高い。

## 3 年齢推定

年齢推定を行う場合、歯牙の萌出状態および咬耗度、長管骨の骨幹と骨端の癒合状態、頭蓋骨の縫合の状態等がその指標となる。本例では長管骨骨端部および頭蓋骨の縫合は残存していないので、歯牙の咬耗度を参考に年齢推定を行った。

### 1) 歯牙

本例において残存する歯牙は13本で（写真8、16）、そのうち歯冠部が残存し、咬耗状態を観察できたのは8本ある。柄原の咬耗度分類で各歯牙の状態を評価すると、右上顎中切歯：2° b、右上顎側切歯：1° b、左下顎第二小白歯：2° a、左下顎第一大臼歯：2° a、左下顎第二大臼歯：1° a、右下顎第一小白歯：3°、右下顎第二小白歯：2° b、右下顎第一大臼歯：2° bである。柄原によれば、咬耗度と年齢の相関性は中切歯、犬歯、第一大臼歯においてよくみられるという。また、これらの平均咬耗度は20歳代で1° c以上に進み、30歳代で2° aに近づき、40歳代で2° a以上に進み、50歳代で2° aから2° bの方に近づき、60歳代以上で2° bを示すという。又、咬耗度3° が下顎小

臼歯で現れるのは40歳代からであるといわれている（瀬田季茂、吉野峰生：白骨死体の鑑定、令文社）。本例では、残存する中切歯および第一大臼歯の咬耗度はそれぞれ $2^{\circ}$  b,  $2^{\circ}$  a,  $2^{\circ}$  bであり、また右下顎第一小臼歯には咬耗度 $3^{\circ}$ がみられる。これらの点から、本事例の推定年齢は現代人では40歳以上と考えられる。ただし、咬耗の程度は咬合状態、咀嚼運動、食生活などの相違により個人差が見られる。また、当時の人々は現代人に比べて硬いものを食べていたりしたために歯牙の咬耗が進行していたことが指摘されることは考慮すると、年齢は30歳代以上と推定される。

#### 4 身体的特徴

明らかな骨折痕の部位などは確認できなかった。

## 鑑 定

以上の検査所見に基づき次の通り鑑定する。

1. 性別は女性であろうと思われる。推定年齢は30歳代以上である。

### 以 上

本鑑定は平成8年4月18日から平成9年3月10日までの間に行った。

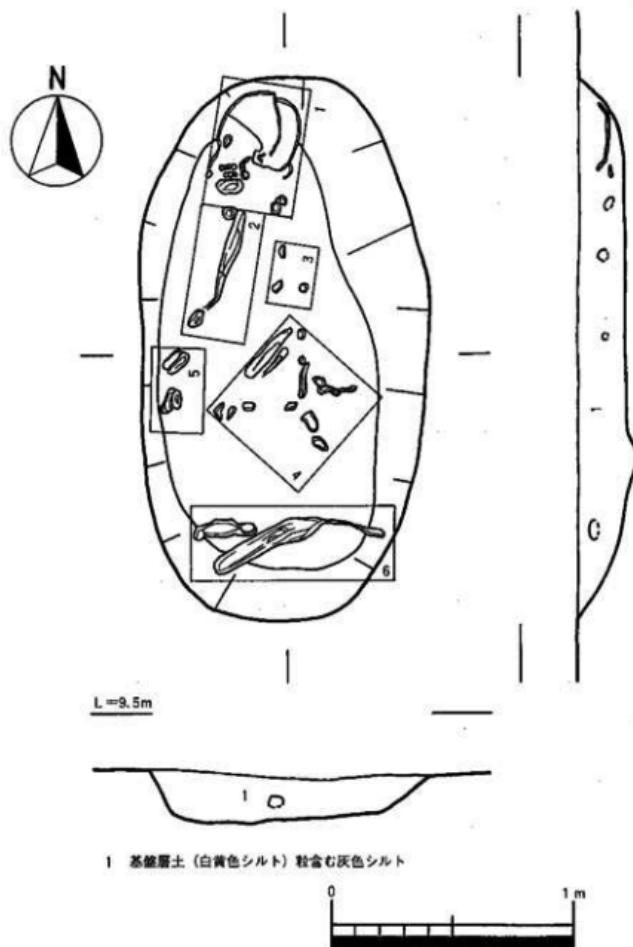
平成9年3月10日

香川県木田郡三木町池戸 1239-2  
香川医科大学法医学教室 助手

鑑定人医師

医学博士

木下博之



第401図 人骨の出土状況 (1 / 50)



写真1 人骨の出土状況（頭部：第401図の番号1の部分）



写真2 人骨の出土状況（第401図の番号2の部分）



写真3 人骨の出土状況（頭部：第401図の番号3の部分）

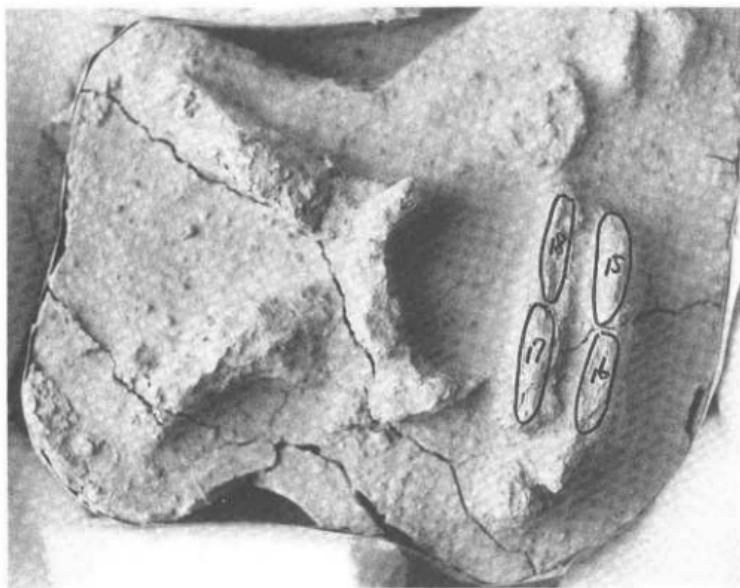


写真4 人骨の出土状況（第401図の番号4の部分）



写真5 人骨の出土状況（頭部：第401図の番号5の部分）

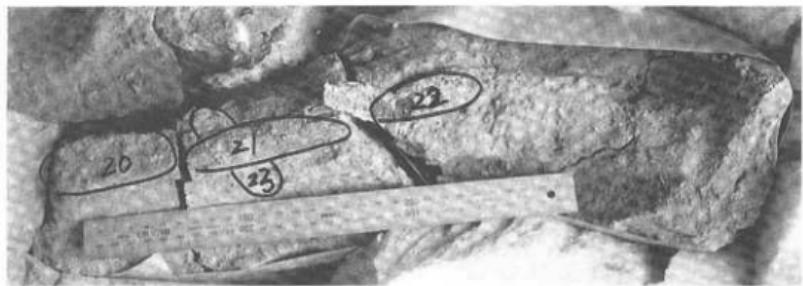


写真6 人骨の出土状況（第401図の番号6の部分）

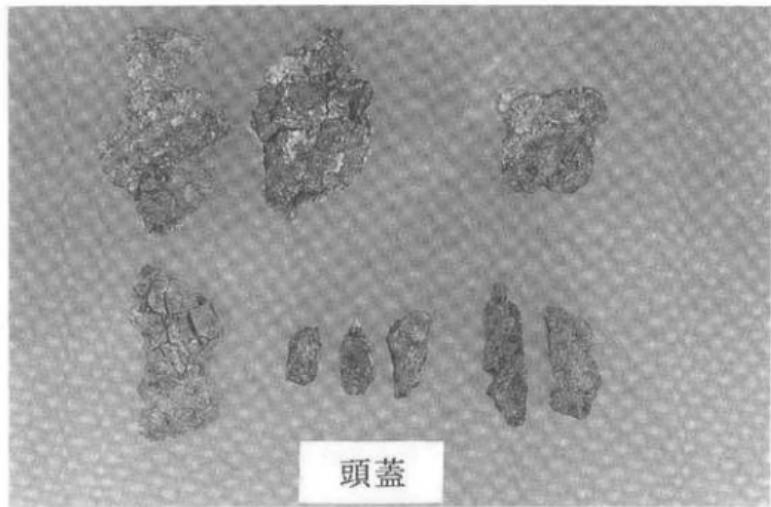


写真7 頭蓋骨を形成する板状骨の一部（写真1の番号1, 2, 3, 4, 5, 6, 7）

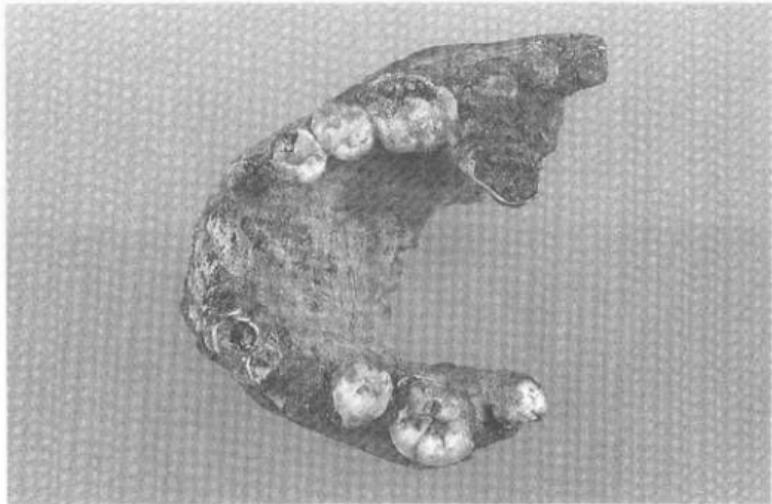


写真8 下頸骨および下頸の歯牙の状態



写真9 下頸骨下面の状態

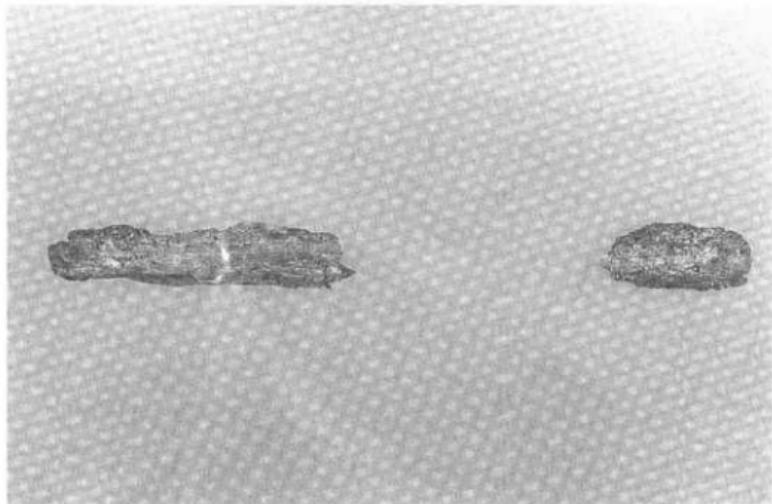


写真10 上腕骨（推定）の状態（写真1の番号4、写真2の番号19）

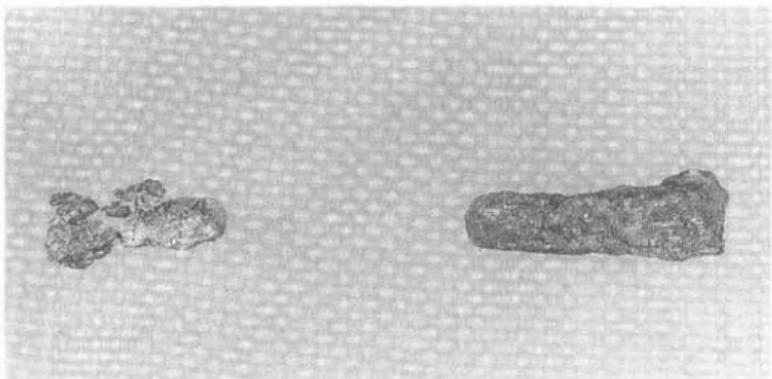


写真11 横骨（推定）の状態（写真5の番号11、12）

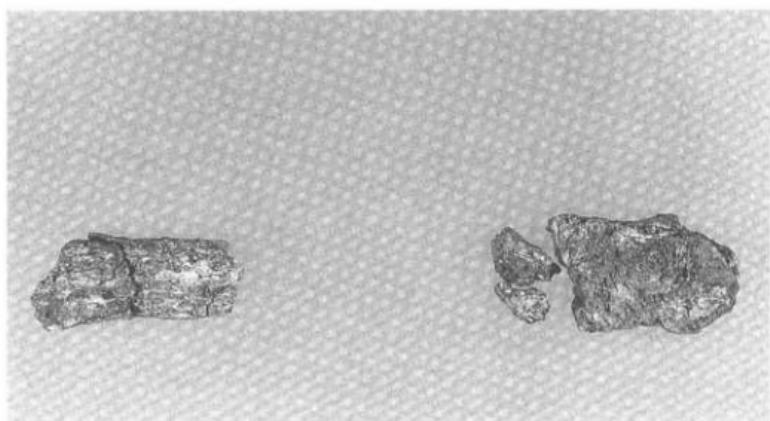


写真12 尺骨（推定）の状態（写真5の番号13、14）

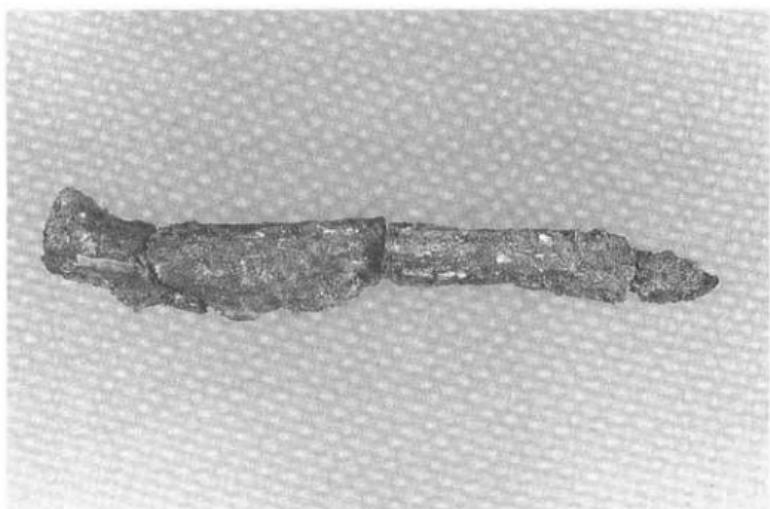


写真13 桡骨（推定）の状態（写真4の番号17、18）